



AC  
145  
G855  
1939  
v.18

Gunsho ruiju

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

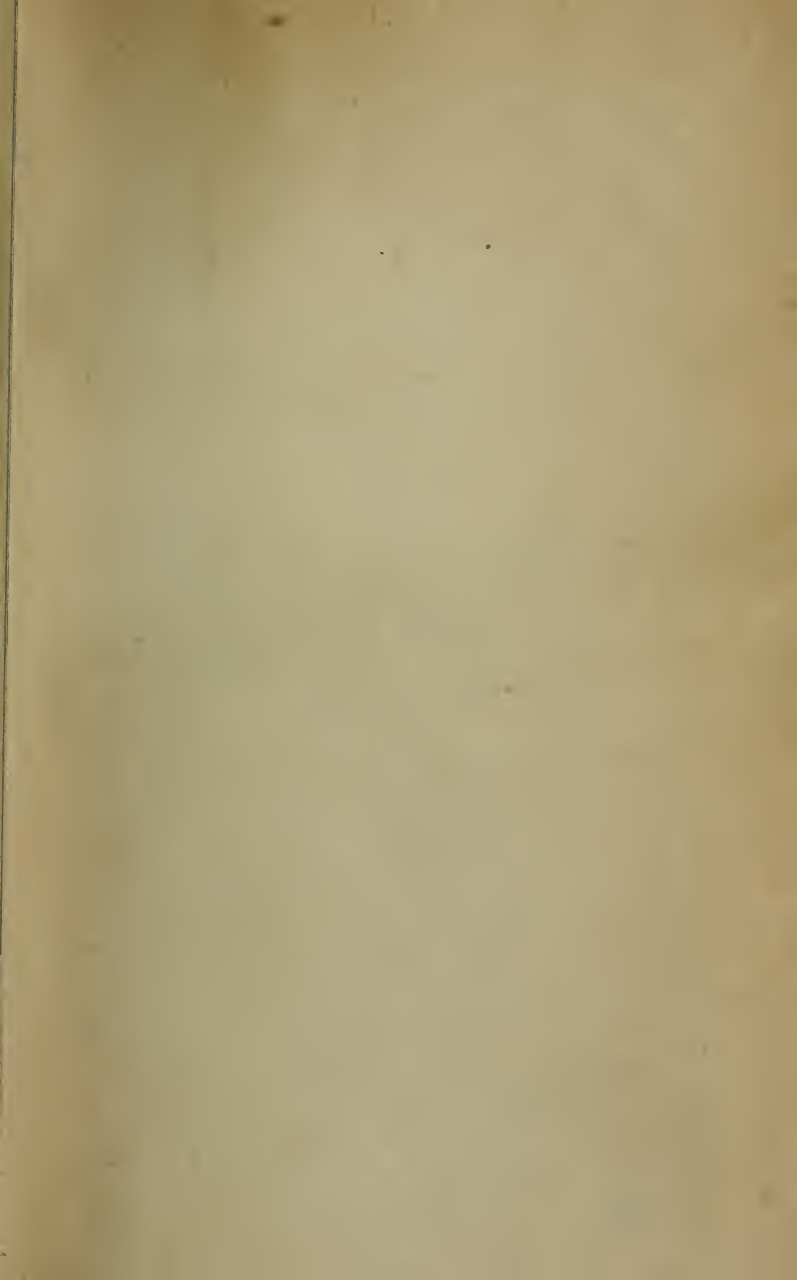
---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---







# 羣書類從

第拾八輯

東京  
續群書類從完成會



AC  
145  
G855  
1939  
v. 18



# 群書類從第拾八輯目次

## 日記部

卷第三百二十	和泉式部日記	一
卷第三百二十一	紫式部日記上	三二
同	下	五八
卷第三百二十二	讃岐典侍日記上	八四
同	下	一〇二
卷第三百二十三	辨内侍日記上	一二七
同	下	一六一
卷第三百二十四	中務内侍日記	一八九

卷第三百二十五

堯孝法印日記……………一二二

玄與日記……………二四五

卷第三百三十六

宗長手記上……………二五六

同 下……………二九三

## 紀行部

卷第三百二十七

土左日記……………貫之三二八

いほぬし……………増基三四八

卷第三百二十八

さらしな日記……………孝標女三六一

卷第三百二十九

高倉院嚴嶋御幸記……………通親四〇四

後鳥羽院熊野御幸記……………定家四一九

卷第三百三十

海道記……………光行 四三一

南海流浪記……………道範 四六八

卷第三百三十一

東關紀行……………親行 四七七

うたゝねの記……………阿佛 四九四

卷第三百三十二

いさよひの日記……………阿佛 五一〇

都のつと……………宗久 五二九

卷第三百三十三

小島のくちすさみ……………良基 五四一

住吉詣……………義詮 五五四

道ゆきふり……………貞世 五五六

鹿苑 殿嚴嶋詣記……………同 五七三

卷第三百三十四卷

なくさめ草……………正徹 五八三

伊勢紀行……………堯孝 五九五

第三百三十五

富士紀行……………雅世 六〇一

覽富士記……………堯孝 六〇八

富士御覽日記…………… 六一八

富士歴覽記……………雅康 六二一

卷第三百三十六

善光寺記行……………堯惠 六二七

ふち河の記……………兼良 六三一

正廣日記…………… 六四二

平安紀行……………持實 六四七

筑紫道記……………宗祇 六五一

北國紀行……………堯惠 六六九

卷第三百三十七

廻國雜記……………道興 六七八

卷第三百三十八

高野參詣日記……………實隆 七一六

吉野詣記……………公條 七二三

九州道の記……………玄旨 七三八

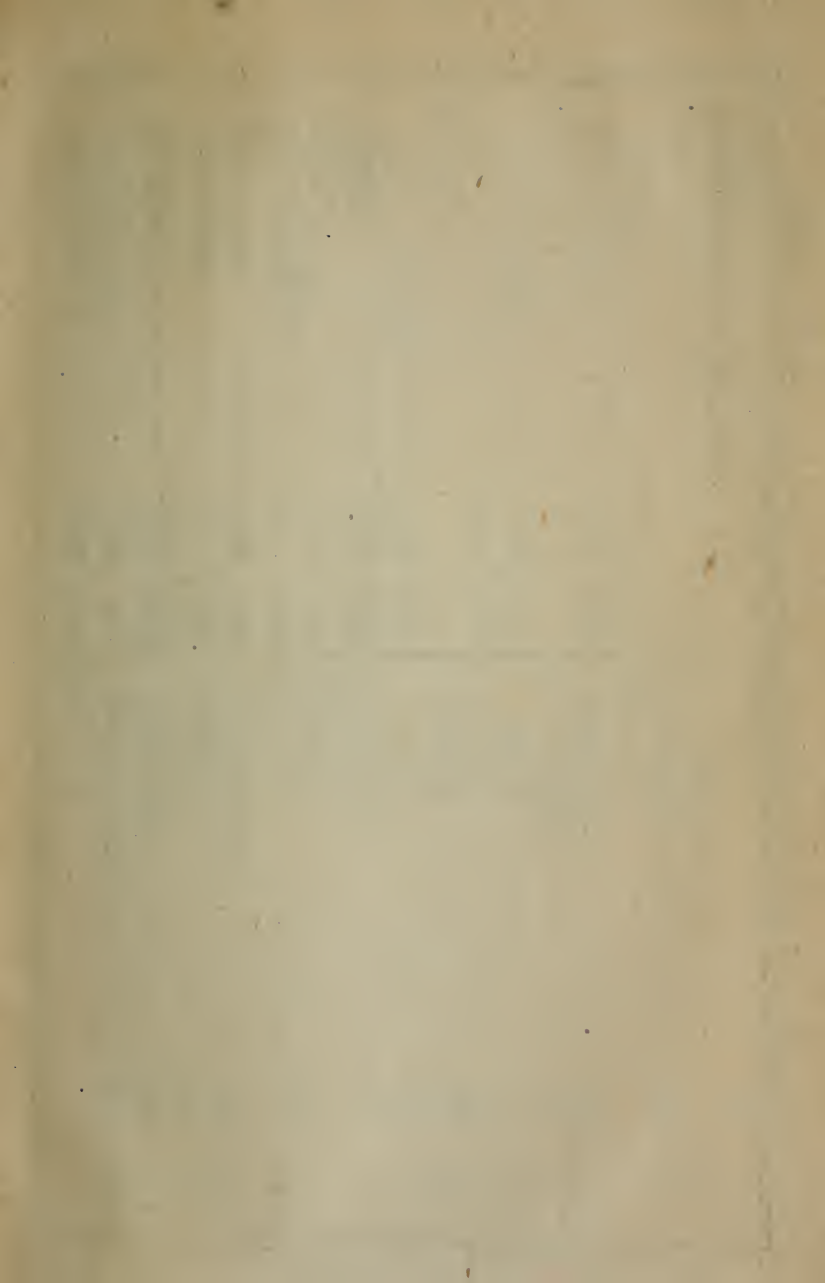
九州のみちの記……………勝俊 七五〇

卷第三百三十九

群書類從第拾八輯目次終

あつまの道の記	尊海	七五八
むさし野の記行	氏康	七六三
東國陣道記	玄旨	七六五
蒲生氏郷紀行		七六一
東路の津登	宗長	七七〇
紹巴富士見道記		七八三
東國紀行	宗牧	八〇二

卷第四百四十





群書類從卷第三百二十

檢校保己一集

日記部一

和泉式部日記

夢よりもはかなき世中を歎きつゝ。明し暮す程に。はかなくて四月十日あまりにもなりぬ長保れは。このしたくらかりもていく。はしのかたを眺むれは。ついひちのうへの草のあをやかなるも。ことに人はめとゝめぬを。あはれに眺むる程に。ちかきすいかいのもとに。人のけはひのすれは。誰にかと思ふほとに。さし出たるをみれは。故宮後にさふらひしことねりわらはなりけり。あはれに物を思ふほとにきたれは。なとかいと久しう見えさりつる。とをさかる昔のなこりにはと思ふをなといはすれは。そ

のゝさふらはては。なれ／＼しきやうにやとつゝましようさふらふうちに。日比山寺にまかりありき侍るになむ。いとたよりなくつれつれに候へしかは。御かはりに見まいらせむとて。帥敦道の宮になむ参りて侍しと語れは。いとよき事にこそあなれ。其宮はいとあてにけちかうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらしなといへは。しかおはしませと。いとけちかうおはしましてまいるやとゝはせ給ふ。参りはへりと申侍つれは。これまいらせよ。いかゝ見給ふとて橘橘をとりいてたれは。昔の人のといはれて見るまいりなむ。いかゝきこえ

させんといへは。こと葉にきこえさせんもか  
たはらいたうて。なにかは。あたしくも聞  
えさせ給はさるを。はかなきこともと思ひて。  
かほる香によそふるよりは郭公きかはや同じ聲やまさると  
さしいてたり。またはしにおはしましけるほ  
とに。かのわらは。かくれのかたにけしきはみ  
ありけは。かくれのかたにて御覽しつけて。い  
かにそとゝはせたまふに。御文をさし出たれ  
は。御覽して。

同じえになきつゝをりし郭公聲はかはらぬものとしらなん  
とかゝせ給て。わらはに給はすとて。かゝる事  
人にいふな。すきかましきことのやうなりと  
て。いらせ給ひぬ。持てゆきたれは。おかしと  
見れと。つねにはとて御ふみはきこえす。たま  
はせそめて。またの日。

うちいてゝもありにし物を中々に苦しきまでも歎けふ哉  
との給はせたり。もとの心ふかゝらぬ人のな

らはぬつれゝのわりなくおもほゆるに。は  
かなきとなれと。めとまるとなれは。御かへし  
きこゆ。

けふのまの心にかへて思ひやれ詠めつゝのみすくす月日な  
かくしはゝのたまはするに。御返もときと  
ききこゆ。又つれゝもすこしなくさむ心ち  
してあるほとに。又御ふみあり。とはなとこま  
やかにて。

語らばは慰む方もありやせんいふかひなくは思はさらなむ  
あはれなる御ものかたりも聞えはや。しのひ  
てくれにはいかゝとのたまはせたれは。

慰むときは語らまほしけれとみの憂事にいふかひそなき  
おひたる足にては。かひなくやと聞えつくれ  
は。思ひかけぬに。忍ひていかんとおほして。  
晝よりさる御こゝちして。日比も御文とりつ  
きてたてまつる。右近のさうなる人しつめて  
忍ひてめして。ものへいかんとのたまはすれ

は。さなめりとおもひてさふらふ。あやしき車にて。かくなんといはせ給へれば。女いとびなき心ちすれと。なしと聞ゆへきにもあらず。ひ

るも御返きこえさせつれば。ありなからは。さなからかへし奉らんもなさけなし。物はかり

はきこえさせむとおもひて。にしのつまとにわらうたさし出座て入たてまつるに。世の人

のいへはおほゆるにやあらむ。まことになへての御さまにはあらず。いとなまめかし。これ

も心つかひせられて。ものなと聞ゆるほとに。月さし出ぬ。いとあかし。ふるめかしうおくま

りたるみなれば。かゝるところなとには居ならはぬを。いとはしたなきこゝちもするかな。

そのおはする所にすへ給へ。よもさきく見給ふらん人のやうにはあらしとのたまへは。

あやし。こよひのみこそきこえさすなとおもひ侍れ。さきくはいかてかはとはかなきと

きこゆるほとに。夜もやうくふけぬ。かくてあかしつへきにやとて。

はかもなき夢をたにみて明しては何をか夏の夜語りにせむとのたまへは。かくなむ。

よと共にぬるとは袖を思ふふものとかに夢を見る宵そなきまいてときこゆ。かろくしきありきなとす

へきにもあらず。なさけなきやうにおほすとも。まことにものおそろしきまでこそおほゆ

なとのたまひて。やをらすへりいり給ひぬ。いとわりなきこゝちすれと。いふかひなきに。事

ともをいひちきりて。あけぬればかへり給ぬ。いまのまはいかゝとあやしくこそとて。

戀といへはよの常のとや思ふ覽今朝の心はたくひたになし御返し。

よの常の事ともさらにおもほえず初て物をおもふみなればときこえても。なをあやしかりける身かな。こ

はいかなる事そとあはれに。古宮のさはかり

のたまひしものをとかなしう思ひみたるゝほ  
とに。れいのわらはきたり。御文あらむとおも  
ふほとに。さもあらねは。心うしとおもふほと  
も。すぎくしや。かへりまいるに聞ゆ。

またましもかはかり社は有まし〔か〕思もかけぬけふの夕暮  
宮御らんして。けにいとおしうもあるかなと  
おほせと。かゝる御ありきさらにせさせ給は  
す。北の方と。れいの人の中のやうにこそおほ  
しまさねと。よことにいてんはあやしとおほ  
しぬへし。故宮の御はてまてはいたうそしら  
れしとつゝむも。いとねんころにおほさぬに  
そ。くらき程にそ御返しありける。

ひたすらにまつ共いは、休らはて行へきものを妹が家路に  
をろかにやおほしめすらんとおもふこそくる  
しけれとあれは。たゝなにかこゝにはとて。

かゝれとも覺束なくも思はへて是も昔のえにこそあるらめ  
とおもひ給ふれは。なくさめすはたへんやは。

つゆをときこえたり。おはしまさんとおほし  
めせと。ひころに成ぬ。つこもりの日。女。

郭公よに隠れたる忍ひれをいつかはきかんけふしすぎなは  
ときこえさせたれと。人々あまたさふらふほ  
となれは。御らんせさせてつとめてもてまい  
りたるを見たまひて。

忍ひれはくるしきものを郭公こたき聲をけふよりはきけ  
とて。二三日ありてしのひてわたらせ給たり。

女はものへまいらむとて。さうしなとしたる

精進

うちに。いとまとをなる御心さしのなきなめ  
りかしと。なさけなからしとはかりにこそと  
見れは。とに物なともきこえて。佛にとつけ奉  
りてあかしつ。つとめていとめつらかにあか  
しつるなどの給はせて。

いさやまたかゝる思を知ぬ哉あひてもあはて明るものとは  
あさましとあり。さそあさましきさまにおほ  
しつらんといとおしくて。



よと共に物思ふ人は夜とてもうちとけてめのあふ時もなし  
めつらかにも覺え侍らすときこえつ。又の日  
けふやものに出給ふ。いつか歸り給へからん。  
いかにましておほつかなからんとあれは。

おりすきはさても社やめ五月雨の今宵菖蒲のれなやかけまし  
ところ思給へ。かへりぬへけれと聞えて。まう  
て。二三日はかりありてかへりたれは。宮よ  
りいとおほつかなく成にければ。まいりてと  
おもふを。いとこゝろうかりしにこそ。ものう  
くはつかしう覺えて。いとおろかにこそはお  
ほされぬへけれ。日ころは。

つられ忘れやはする程ふれはいと戀しきにけふはまり南  
淺からぬ心のほとをさりとともとあれは。

まくるともみえぬ物から玉葛とふ人すらもたえまかちにて  
と聞えたり。宮れいの忍ひておはしましたり。  
をんなさしもやはとおもふうちに。日ころの  
をとまひにくるしうて。うちまとろみたるほ

とに。かたたくをきゝとかむる人もなし。き  
こしめす事もあれは。人などのあるにやとお  
ほしめして。やをらかへらせ給ぬ。つとめて。  
あけざりし櫛の戸口に立なからつちき心のためしとを見し  
うきはこれにやと思にも。哀になんとあり。よ  
へおはしましたりけるなめりかし。心もなく  
ね入にける哉と思ひて。

いかてかは櫛の板戸もさし乍らつちき心のありなしをみん  
をしはからせ給ふへかめるこそ。みせたらは  
とあり。こよひもおはしまさまほしけれと。か  
かる御ありきを。人々もせいし聞ゆるを。公季内の  
大臣東宮三條などのきこしめさんことも。かろか  
ろしきやうなりなとおほしつゝむほとに。い  
とはるかなり。雨うちふりていとつれ／＼な  
るころ。女はいと雲間なきなかめに。世中は  
いかに成ぬるならんとつきせすのみなかめ  
て。すき事する人々はあまたあめれと。たゞい

まもともかくも思はぬを。よの人は様々いふへかめれと。身のあらはこそとのみ思ひてすくす。宮より。雨のつれくはいかゝとて。

おほかたにさみたるゝとや思ふらん君戀渡るけふの詠めたとあれは。おりすくい給はぬをおかしと見る。あはれなるおりしもとおもひて。

忍ふらん物ともしちてをのかたゝみをしる雨と思ひける哉とかきて。かみのひとへをひき返して。

ふれはよのいとゝ憂身のしちるゝを今日の詠めに水増ら南待遠にやと書すさひたるを御覽して。立返り。

何せんにみをさへ捨てんと思はん天か下には君のみやふるたれもうきよをとあり。五月六日になりぬ。雨猶やます。ひとひの御返の。つねよりも物おもひたりしさまなりしをあはれとおほし出て。いたくふりあかしゝつとめて。こよひの雨のをとは。いとおとろくしかりつるをなと。まめやかにの給はせたるを。

よもすから何事なかはおもひつる窓うつ雨の音をきゝつ、かけも居(に)なからあやしきまてなむときこえさせたれは。なをいふかひなくはあらずかしとおほして。御かへし。

我もさそ思やりつる雨の音をさせるつまなき宿はいかにとひるつかた。水まさりたりときゝて。人々見るに。宮も御覽して。いまのほといかゝ。水みになんいてはへりつる。

大水のきしつきたるにくらふれと深き心はなをそまされるさはしり給へりやとある。御返し。

今はよもきしもせしかし大水の深きこゝろは川と見せつ、かひなしやと聞えさせたり。おはしまさむと思して。御火取なとめすほとに。侍従のめのとまうのほりて。出させおはしますはいつちぞ。このこといみしう人々申すなるは。なにのやむことなき人にもあらず。めしつかはせおはしまさんとおほしめさは(おイ)かきりは。めしてこ

そ使はせおはしませめ。輕々しき御みありきは猶いとみくるしき事。そか中にも。人々あまたいみしく通ふ所也。びなき事もいてまうてきなん。すへてくよからぬとは。この右近のそうなにかしか初むるなり。故宮もこれこそはゐてありき奉りしか。よる夜中とありかせ給ふては。よき事やはある。かゝる御ありきの御供にありかん人々は。大殿に申さむ。世中はけふあすともしらすかはりぬへかめり。殿のおほしをきてし事ともある物を。よのありさま御覽しはつるまでは。かゝる御ありきなくてこそおはしませめなと聞え給へは。いつちかいかわ。つれくなれは。はかなきすすひ事なむとするにこそあれ。ことくしう人のいふへきにもあらずとはかりの給はせむには。あやしくすけなき物にこそあれ。さるはいと口おしからぬ物にこそあめれ。よひてやをき

たらましと思せと。さてもまして聞にくき事そあらんなと思し亂るゝほとに。おほつかなく成ぬ。辛うしておはして。あさましう心より外に覺束なくなるを。をろかになおほしそ。御あやまりとなん思ふ。かく参りくるをびなしと思ふ人々數多あるやうにきけは。いとおしくなん。おほかたもつゝましきうちにいと程へぬると。まめやかに御物語し給ひて。いさ給へ。今宵はかり人もみぬ所あり。心のとかに物も聞えんとて。車をさしよせ給ひて。たゝのせにのせ給へは。われにもあらずのりても。人もこそきけと思ふくいは。いたう夜ふけにければ。しる人もなし。やをら人もなきらうのあるにさしよせて。おりさせ給ひぬ。月もいと明ければ。おりねと忍ひての給へは。さまあしきやうなれはおりぬ。さりや人もみぬ所所かし。今よりもかやうに聞えさせむ。人なとも

(イニナシ)

あるおりにやと思へは。つゝましうてなむな  
と。物語あはれにし給ひ。明ぬれはくるまよせ  
給てのせ給て。御をくりにもまいるへけれと。  
あかう成ぬへければ。ほかに有けると人のみ  
むもあひなしとて。とまらせ給ぬ。女かへる道  
すから。あやしのありきや。いかに人思ふらん  
とおもへと。明ほのゝ御すかたの。なへてには  
あらさりつる御さまもおもひいてられて。

よひことに返しはすれといかて猶曉おきは君になさせし  
くるしかりけりとあれば。

朝露におくる思ひにくらふればたゞに歸らん宵はまされり  
さら／＼にかゝる事きかし。夜さは方ふた  
かりなり。御迎へに參らむとあれば。あなくる  
し。常にはなと思へと。れいの車にておはし  
たり。さしよせて。はやはやとあれば。さも見  
くるしき事かなとおもふ／＼。ゐさり出ての  
りぬれは。よへのところにて物かたりなとし

給うへは。院の御方にわたらせ給ふとおほす。  
あけぬれは鳥のねつらきとの給はせて。やを  
らうちのせておはしましぬれは。道すから。か  
やうならんおりはかならず／＼との給はすれ  
は。常にはいかてかときこゆ。おはしまして歸  
らせ給ぬ。しはしありて御ふみあり。けさはう  
かりつる鳥の音におとろかされてつらかりつ  
れはころしつ。み給へとて鳥のはねにかきて。  
ころしても猶あかね哉ぬ鳥の折ふししらぬ今朝の初聲  
御返し。

いかゝとは我こそ思へ朝な／＼なきゝかせつる鳥を殺せば  
とおもひたまふるを。とりのとかならぬにや  
とあり。二三日ほとありて月いみしうあかき  
夜。はしに出ゐて見るほとに。いかにそや。月  
は見たまふやとて。

我ことくおもひはいつや山のはの月にかけつゝなけく心を  
れいのおりよりはおかしきうちにも。宮にて



月のあかゝりしに。ひとやみるらむとしのひ  
たりし。おもひいた<sup>てい</sup>らるゝほとに。ふと。

一夜見し月そと思へと詠れば心もゆかすめはそらにして  
と聞えても。なを獨なかめゐたるほとに。はか  
なくてあけぬ。又の夜おはしましたりける。こ  
なたにはきかす。かた／＼に人のすむ所なり  
ければ。そなたに人の來りたる車を御覽して。  
人の侍にこそ。車侍りと聞ゆれば。よし歸りな  
んとておはしましたぬ。人のいふはまことにこ  
そとおほすもむつかしけれど。さすかにたえ  
はてん物とはおほさゝりければ文遣<sup>てい</sup>せ。よへ  
参りたりとはかりは聞給けんや。それもえし  
り給はさりしにやとおもふこそいみしけれ。  
松山に波高しとは見てしかと今日の詠めはたゝならぬかな  
とあり。雨うちふる程也。あやしかりける事か  
な。人のそらとを聞えたりけるにやと思ひて。  
君をこそ末の松とは思ひつれひとしなみには誰かこゆへき

ときこえつ。宮は一夜のをなま心うくおほ  
して。久しうの給はせて。かく。

つらしとも又戀しとも様々に思ふ事こそたえさせりけり  
御返はきこゆへき事なきにしもあらねと。わ  
さとおほされんもはつかしくて。かくそ。

あふ事はとまれかくまれ歎かしを恨絶えせぬ中となりせば  
と聞えさする。さてのちもまとをになん。月の  
あかき夜。うちふして。うら山しくもなとなか  
めらるれば。宮にかうそきこえける。

月をみてあれたる宿に詠むとは見にこぬ迄も誰につけよと  
ひすまし童して。右近のそうにさしとらせて。  
きねとてやる。宮はお前に人々して物語して  
おはしますほとなりけり。人まかてなとして  
いらせ給に。右近のそうさし出たれば。例の車  
にさうそくせさせよとて。おはします。女はし  
になかめて居たるほとに。人のいりくれば。す  
たれうちおろしてゐたれば。まことにめなれ

たる御様にはあらて。御なをしなとのいたうなれたるしもそおかしうみゆ。物もの給はて。たゞ御扇に文をさしいれさせ給て。御つかひのとくまかりにければとて。さしいれさせ給て。物聞えんにほと遠くてびなければ。女あふきをさしいたしてとりつ。宮ものほりなんとおほしたり。せんさいのおかしきなかをありかせ給て。人は草葉の露なれやなとの給はす。いとなまめかし。ちかうよらせ給て。によひはまかり出なんとよ。誰に忍ひつるも見あらはしになん。あすは物忌といふなりつるに。なくはあやしとおもひなんとて。かへらせ給へは。こゝろみに雨もふらなん宿過て浦行月の影やとまると人のいふほとよりもこめきてあはれにおほさる。あかきみやとて。しはしのほらせたまひて。出給ふとて。

あちきなく雲井の月にさそはれて影こそいつれ心やはゆく

とておはしましぬる後すたれをあけて。有つる御文見れば。

我ゆへに月を詠むとつけつればまゝかと見に出てきにけり  
とそあるを。うれしくおはしますかな。いかにいとあやしき物に。きこしめしたるへかめるに。きこしめしなをされにしかなと思ふ。宮もいふかひなからす。つれ／＼の慰にはとおほさるゝ程に。ある人々の聞ゆるやう。この比は源少將なといますなり。晝ものし給なりといへは。或人ありて。兵部卿もおはすなるはなと口々に聞ゆるに。いとあは／＼しうおほされて久しう御文もなし。ことねりわらはきたり。ひすましわらは例に語へは。物なといひて。御文やあるといへは。さもあらず。一日おはしましたりしかと。みかとに車のありしを御覽して。御せうそこもなきにこそあめれ。人おはしましかよふやうにそきこしめしたりけれなと

いひていぬ。かくなんいふときゝて。いと／＼おしく。なにやかやとわさと聞えさせ。わさとしたのみきこえさする事こそなけれと。時々もかうおほしいてんほとはきこえさせかよはしてあらんとこそおもひつれ。事しもこそあれ。けしからぬとにつけても。かうおほされぬるとおもふも。いと心うくて。なそもかくとなけくほとに。御文あり。日比はあやしう亂り心地のなやましきになん。いつそやも参りて侍りしかと。折ふしあしうてのみかへれは。いと人けなきこゝちしてなむとて。

よしやよし今はうちみし磯に出てこそ離れ行海人の小舟とあれと。あさましき事をきこしめしたなれは。はつかしければ。きこえせんもつれなけれと。此たひはかりはとて。

袖の浦にたゝわかくとしはたれて船流したる蟹と社なれと聞えさせつ。さいふほとに七月にもなりぬ。

七日に。すぎ事ともする人々のもとより。たなはたひこほしなといふとゝもあまたみゆれとめもたゝす。かゝるおりなと。宮のすぐさすの給はせし物を。むけにわすれさせ給にけるかなとおもふほとにそ御文ある。みれはたゝ。

思ひきや七夕つめにみをなして天の河原をながむへしとはとあれは。さはいへと。なをえすくし給はさめりとおもふもおかしうて。

詠むらん空をたにみす欄機にいまるはかりの我みと思へはとあるを御覽しても。猶えおほしすつましとおほすへし。つこもりかたになりて。いとおほつかなく成にけるを。なとか時々は人数に思しめされぬなめりかしとの給はせたれは。女。れ覺れはきかぬ成らん萩風はふかさらめやは秋のよなくと聞えたれは。たちかへり。あかきみやねさめねはな。(と歌添)物思ふときはこそ。をろかにもとて。萩風はふかはいもれて今よりそ驚すかときくへかりける

かくて二三日有て。夕まくれに。思もかけぬに。にはかに御車をひきいれておりさせ給。ひるはまた見えまいらせねは。いとほつかしうおもへと。せむかたなうなるとなとの給はせて歸らせ給ぬ。そののち日比に成ぬるに。いとおほつかなきまでをともし給はねは。をんな。徒然と秋の日比のふるまゝに思ひしらせぬあやしかりしもむへ人はと聞えたりければ。このほとにおほつかなく成にけれど。されと。

人はいさわれはわすれす日をふれと秋の夕暮ありしあふとの給はせたり。あはれにはかなく。頼む人もあらず。かやうのはかなしことにて。世中を慰めてあるも。うちおもへはあさましう。かゝる程に八月にも成ぬれは。つれ／＼慰めんとて。いし山に詣て。七日計あらんと思ひてまうてぬ。宮久しうも成ぬるかなとおほして。御文つかはすに。童一日まかりてさふらひしかと。

石山になむ。此比はおはしますなると申さずれば。さはけふは暮ぬ。つとめてまかれとて。御文かゝせ給たまはりて石山にきたり。佛の御前にはあらて。故郷のみ戀しくて。かゝるありきもひきかへたるみの有様と思ふにいともの悲しうてまめやかに佛を念し奉りてある程に。かうらのしもの方に人のけはひのすれは。あやしうて見おろしたれば。この重なりけり。あはれに思ひかけぬ所にきたれば。なそとはすれは。御文をさし出たるも。例よりもふとひきあけられて見れはいと心深く入給ふにけるをなん。なとかかくともの給はさらん。絆まてこそ思されさらめ。をくらし給に心うきとて。關越てけふそとふとや人はしる思ひたえせぬこゝろ遣ひないつか出給はんとするとあり。ちかうてたにおほつかなくものし給ふに。かくわさとたつね給つらんよとおかしうおほへて。



あふみちはわすれぬめりとみし程に關打越てとふ人はたれ  
いつかはとの給はせたるは。おほろけに思た  
まへていりしかはとて。

山なからうみはこくとも都へはなにか打出の濱をみるへき  
と聞えたる。御覽して。くるしうともまたいけ  
とて給はせたり。とふ人とかあれば。あさまし  
の御ものいひやとて。

尋ゆく逢坂山のかひもなくおほめくはかりわするへしやは  
まことや。

うきによりひたやこもりと思ふとも近江の海は打出て見よ  
うきたひことにとこそいふなれとの給はせた  
れは。たゝかく。

關山のせきとあらねなみたこそ近江の海と流いつらめ  
とて。はしに。

心みにをのか心もこゝろみむいさ都へときてさそひ見ん  
とあり。思ひもかけぬに。いくものにもかなと  
おほせといかゝは。かゝるほとに出にけり。さ

そひ見よとありしかと。いそぎ 出給にければ  
なんとて。

あさましやのりの山ちに入そめて都へいさと誰さそひけん  
御返にはたゝ。

山をいてくらき道にそたとりにし今一度のあふとにより  
つこもりかたに。風いたう吹て野分たちて。雨  
なとふるに。つねよりも物こゝろほそうなか  
むるに。れいの御文あり。折しりかほにの給は  
せたるに。日ころのつみもゆるし聞えつへし。

なけきつゝ秋のみ空を詠れば雲うちさはき風をはけしき  
かへり事。

秋風はけしきふくたに戀しきにかき曇る日はいふ方をなき  
けにさそあらんかしと思せと。れいのほとへ  
ぬ。九月十よ日はかりの有明の月に御目さま  
して。いみしくひさしうも成にけるかな。あは  
れこの月はみるらんかしと思せは。例のわら  
は計を御ともにておはしまして。かとをたゝ

かせ給ふに目をさましてよろつをおもひつゝ  
けふしたるほと也けり。すへて此比は折から  
にや。物心ほそう哀れに常よりもおほえてそ  
なめける。あやし。たれならむとおもひて。  
まへなる人を引おこしてことゝはせんとすれ  
ともとみにもおきす。からうしておきても。爰  
かしこ物にあたりさはく程に。たゞきやみぬ。  
歸りぬるにやあらん。いきたなしと思しぬら  
んこそ。物思はぬさまなれは。同じ心にまたね  
さりけるかな。誰ならんと思ふ。からうしてい  
て。人はなかりければ。そらみゝきゝおはさ  
うして。夜のほとたになにかまとはさるゝ。  
さはかしのとのゝおもとたちやと腹たちてま  
たねぬ。女はやかておきて。いみしうきりたる  
空を詠つゝ。あかく成ぬれは。此曉おきのほ  
との心におほゆる事ともを。はかなきものに  
かきつくるほとにそ。れいの御文ある。たゞ。

秋の夜の有明の月の入までにやすらひかれて歸りにし哉

いてやけに。いかに口おしきものに思されつ  
らんと思ふよりも。なをおりふしすくし給は  
すかしと。誠に哀なる空のけしきを見たまひ  
けると思ふに。いとおかしうて。この手習のや  
うにかきたるものをぞ。御返のやうに曳結ひ  
てたてまつる。風の音木のはの残りあるまし  
けに吹亂る。常よりも物あはれに覺ゆる。こと  
ことうかきくもる物から。たゞけしきはか  
り雨うちふるは。せむかたなく哀におほへて。  
秋のうちに朽はてぬへくとはりの時雨に誰か袖をからまし  
となけかしう思へと。しる人もなし。草木のい  
ろさへ見しまゝにもあらず成もてゆく。しく  
れん程の久しさも。またきに覺ゆるに。風に心  
苦しけにうちなひきたるには。たゞ今もきえ  
ぬへきつゆの我みそあやしう。草葉につけて  
かなしきまゝに。奥にもいらて。やかてはしに

ふしたれは。つゆ年ふるへくもあらず。人のみなうちとけてねたるに。その事と思ひわくへくもあらねは。つくつくと目をのみさまして。なに心なう恨めしうのみ思ひふしたるほとに。鴈のはつかにうち啼たる。人はかうしも思はずやあらん。いみしうたへかたき心ちして。まゝとてあはれ幾夜に成ぬらん只鴈金を聞わざにしてかくてのみあかさむよりはとて。つま戸をしあけたれは。おほそらににしかたふきたる月の影。とをくすみ渡りてみゆるに。きりわたる空のけしき。かねのをと鳥の聲。ひとつにひゝきあひて。さらに過にしかたいまゆくするものことも。かゝるおりはあらしと袖のいろさへあはれにめつらかなり。

我ならぬ人もさそみん長月の晨明の月にしかあはれた。今このことをうちたゝかする人のあらんに。いかにおほえん。いてやたれかかくてあか

す人はあらむ。

よそにても同じ心に在明の月をみるやと誰にとはまは宮わたりにやきこえさせましとおもふに。おはしましたりけるよと思ふまゝにたてまつりたれは。うち見給ひて。かひなくはおほされねと。詠めぬたらんに。ふとやらむと思してつかはすに。女やかて眺め出してゐたるに。もてきたれはあへなき心ちして。ひきあけてみれば。秋のうちはくちける物を人もさは我袖とのみ思ひける哉消ぬへき露の命とおもはずは久しききくにかゝりやはせむまゝとて雲井の鴈の音を聞は心つからの業にそありける我ならぬ人も有明の空をのみおなし心になかめけるかなよそにても君計こそ月はみめと思てゆきしけさくるしきいとあけかたかりつるかとをこそとあるも。物きこえさせたるかひもあるこゝちすかし。かくてつこもりかたにそ御文ある。日比のおほつかなさなといひて。あやしき事なれと。忍ひて物いひつる人なむとをくいくなるを。哀

れといひつへからん事ひとついはむとなん思ふ。それよりの給事のみなん。さはおほ〔ゆ〕るを。ひとつとの給へり。あなしたりかほと思へ。さはえきこえしと申さむも。いとさかしければ。のたまはせむ事はいかてかと計にて。

おしまるゝ涙にかけはとまらん心もしらす秋はゆくとも  
まめやかには。かたはらいたきとになむ侍るとてはしに。さても。

君ををきていつち行らん我たにも浮世中にしゐてこそふれ  
とあれは。いとおもふやうなりと聞えさせむも。見しりかほなり。あまりそをしはかり給へるよのと侍めるは。

打すて、旅行人はさもあらはあれ又なきものに君し思は  
ありぬへくなんとの給はせたり。かくいふほとに。十月にも成ぬ。十よ日のほとにおはしましたり。おくはくらうておそろしければ。はしちかううちふさせたまひて。あはれなる。事の

かきりをの給はするに。かひなくはあらず。見れは月のくもりてしくるゝほとなり。わさとあはれなるさまをつくり出たるやうなり。思みたるゝ程の心ちは。いとそゝろさむきや。宮御覽して。人のびなきにのみいふめる。あやしきわさかな。こゝにかくてあるよとあはれにおほされて。女のねたるやうにて。おもひみたれふしたるを。やゝおとろかし給ひて。

時雨にも露にもあらてぬたる夜はあやくぬるゝ手枕の袖との給はすれと。よろつに物のみわりなく覺ゆるに。御いらへ聞ゆへき心ちもせねは。物も聞えさせて。たゝ月の影に涙のおつるを哀と御覽して。なといらへはし給はぬ。はかなき事申侍るも。心つきなしと思しけるにこそとあれは。いかに侍るにか。心地のかき亂るやうにし侍る。耳にはとまらぬにも侍らすとて。よし心みさせ給へ。手枕の袖と云事忘るゝ折や侍



けると。たはふれとにいひなして。哀なりつるよのけしきもかくのみいふ程に。ことにたのもしき人なともなきなめりかしと心くるしうおほえて。今のまいかゝとの給はせたる返事。今朝のまは今はひねらんゆめ計ぬると見えつる手枕の袖と聞えたり。わすれしといひつるに。事をもいひたれは。おかしうおほして。

夢計なみたにぬると見つらめとほしそかれつる手枕のそてよへの空のけしきのあはれにみえしは。所からにや。それより後心苦しうおほされて。しはしはおはしまして。有さまなと御覽しもていくに。よになれたる人にもあらず。只いと物はかなげにみゆるも。いと心苦しうおほされて。あはれに語らはせ給ふに。いとかくつれ／＼になかめさせ給ふらんを思をこたる事なければ。只おはせかし。世中の人もいとひなけにいふ也。時々参りくればにや。見ぬる事もなければ。

と。それも人のいときゝにくゝいふに。又たひたひ歸る程の心ちのわりなかりしも。人けなう覺えなとせしかは。いかにせましなと思ひなるおり／＼もあれと。ふるめかしき心なれはにや。聞えたらん事のいと哀に覺えてなむ。さりとてかくのみえ参りくましきを。誠にきく事有て。せいする事なとあらは。そらゆく月にもあらん。もしの給やうなるつれ／＼ならは。かしこにもおはしなんや。人はあれとひなかるへきにもあらず。もとよりかゝる筋につきたよりなき身なれはにや。人けなき所につゐゐなとせす。行ひなとする事たに。只獨りあれは。同じ心に物語りなとも聞えてあらは。慰む事もや有と思ふ也との給へ思ふにも。けに今更にさやうにひなき有さまは。いかゝはせむと思ひて。一の宮の事も聞えきかてあるを。さりとて山のあなたにしるへする人も

なき程に。かくてすくすは明ぬよの心ちのみ  
すれは。はかなきたはふれともいふ人あまた  
有しかは。あやしきさまにのみそいふかめる。  
さりとてことさまのたのもしきかたもなし。  
なにかはさても心見ん。よし清時卿女北方はおはすれ  
と。たゝと御かたにて。御めのところは萬の事  
すなれ。またけさうに色めかはこそあらめ。さ  
るへきかくれなとにあらんには。なてう事か  
はあらんなと思て。此ぬれきぬは。さりともし  
やみなんをと思て。なに事も只我より外のと  
のみを思給へつゝ。すくし侍る程のまきらは  
しには。かやうなるおり。たまさかにも。まち  
つけ聞えさするより外のともなければ。たゝ  
いかにも侍れ。の給はせんまゝにと思給へれ  
は。よそにても見苦しきものに聞えさすらむ。  
ましてまことなりと見侍らむぞ。かたはらい  
たう侍らんと聞ゆれとそれは。こゝにこそ。と

てもかくてもいはれめ。見くるしうはたれか  
みん。いとようかくれたる所つくりいてゝ。い  
まきこえんなとたのもしうの給はせて。夜ふ  
かう出給ぬ。かうしもあけなからあり。よのつ  
ねはたゝひとりふしにていかゝせまし。さて  
も人わらはれなる事やあらんと。さき／＼に  
おもひみたれて。ふしたる程に。御ふみあり。  
露むすふ道のまに／＼朝ほらけぬれてそきつる手枕のそて  
このそての事をはかなき事なれと。おほしわ  
すれてのたまはせたる。おかしうおほゆ。

道芝の露とおきぬる人よりも我手枕のそてはかはかす

其夜の月も。いみしうあかうすみで見ゆるを。  
爰よりもかしこにてもななめ明して。またつ  
とめて御ふみたまはせむとて。れいのわらは  
参りたりやととはせ給ふほとに。女もしもの  
いと白きにおとろかされてにや。

手枕の袖にも霜は置けるをけさうちみれば白妙にして。

と聞えさせたり。ねたうせんせられぬるかなとおほして。

つまこふとおきあかしつる霜なれば

とそうちの給はせたる。たゞ今そ人まいりたれば。うたてあへきものかな。とくと思ひつるにとて。御けしきあしうて給はせたれば。もていきて。またこれよりきこえさせ給はさりける時よりめし侍けるを。今まで参らすとてさいなむなりとて。御文をとり出たり。よへの月はいみしうあかゝりしものかなとて。

れぬるよの月はみるやとけさはしも起ゐてまでと問人もなじけにかれよりの給はせけるとみゆるも。同じ心におかしうて。

まゐるまで一夜詠し月みれとおきながらしも明し顔なる

ときこえさせ。このわらはのいかにさいなむらむとおくれは。おかしうて。はしに。

霜の上に朝日さすめり今は早打とけにけるけしき見せなん

いたうわひはへめりとあり。見給ひて。けさしたりかほにおほしたりつるもいとにくし。此わらはころしてはやとまでなんとて。

朝日さし今はきゆへき霜なれと打とけかたき空のけしきとあれば。ころさせ給へるなるこそとて。

君はこす偶々みゆる童をはいけとも今はいはしとおもふかと聞えさせ給へれば。うちわらはせ給ひて。

ことはりや今はころさしこの童忍ひのつまのいふによりまことか。手まぐらの袖はわすれ給にけるとあれば。

人しれぬ心にかけてしのふをはわするとと思ふ手枕のそてと聞えたれば。

物もいはてやみなましかは懸てたに思ひ出ましや手枕の袖猶かくはおほしつとぞある。かくて二三日をともせさせたまはす。たのもしけにの給はせしことゝも。いかになりぬるにかと思ひつづくるに。いもねられす。めをさましてふした

るに。やう／＼あけぬらんかしとおもふに。門をうちたゞく。あなおほえなと思へと。とはすれは。宮の御文なりけり。おもひかけぬ程なるを。こゝろやゆきてとあはれにおほえて。妻戸をおしあけて見れは。

見るや君さようちふけて山端にくまなくすめる秋夜の月かけはしうちなかめられて。常よりもあはれにおほゆ。かとをあけねはおほつかなう。つかひまちとをに覺ゆらんとて。

更ぬらんと思ふ物かられられと中々なれば月はしも見すとおるを。をしたかへたるくちつきをかくにしもあらずかしとおほす。いかてか近うて。かかるはかなしこともいはせてきかむと思したつ。二日はかりありて。女車のやうにて。やをらおはしましぬ。晝なとはまた御覽せられねは。耻かしけれと。様あしうはひかくるへきにもあらず。又の給はするやうもあらず。はち聞

えさせてやあらんするとて。ゐさり出たり。日比のおほつかなさなとかたらはせ給て。しはしうちふさせ給て。このきこえさせしやうにはやおほしたて。かゝるありきのつねにうゐうゐしくおほゆるを。さりとてまいりこぬはいとおほつかなければ。はかなき世中にくるしうとの給はすれは。ともかくもの給はせむにと思ひ給ふるに。見てもなけくといふことにこそ思給へ。わつらひぬれと聞ゆれは。よし心み給へ。しほやき衣にそあらんと給ひて。出させ給ふ。まへちかきすいかいのもとに。おかしけなるまゆみのあるか。すこしもみちたるを御覽して。かうらにをしかゝらせ給ひて。

ことのはふかくなりけるかな

との給はすれは。

しら露のはかなくくと見し程に

と聞えさするほと。なをなさけなからすとお



かしうおほさる。宮の御さまなといとめてたし。御なをしにて。えならすめてたき御ぞ。いたしうちきもし給へる。いとあらまほしけにみゆる。目さへあた／＼しきにやとまで覺ゆ。又の日のふの御氣しきのいとあさましとおほいたりしこそ。いと心うき物のあはれなりしかとのたまはせたれは。

葛城の神もそこそは思ひけめくめちにわたすはしたなき迄わりなくこそはおもひたまへしかときこえさせたれは。たちかへり。

行のしるしもあらは葛城のはしたなしとてさてややみなんなといひて。ありしよりはとき／＼おはしましなとすれは。こよなくつれ／＼もなくさむこちす。かくてある程に。よからぬ人々の文なとをこする。又身つからもちさまよふにつけても。よしなきとのいてくるに。とく参りやしなましと思へと。猶つゝましくて。すかす

かしうも思ひたゝす。霜のいと白きつとめて。我うへは千鳥もつけしおほ鳥の羽にも霜はさやはなきけるときこえさせたれは。

月も見てねにきといひし人の上になきしもせしを大鳥のとのたまはせて。やかてくれにおはしましたり。この比の山の紅葉いかにおかしからん。いさゝせ給へ。見むとのたまはすれは。いとよく侍なりときこえて。その日になりて。けふは物忌にとちこめられてあれはなむ。いとくちおしう。これすくしてはかならすとの給はせたるに。その夜しくれ常よりも木々のこのは残ありけもなくきこゆるに。めをさまして。風のまへなるとひとりこちて。みなちりぬらんかし。昨日みてとくちおしうおもひあかしたるつとめて。かれより。

神無月よにふりにたる時雨とやけふの詠めをあかす見る覽扱はくちおしうこそとのたまはせたれは。

しくれかもなにぬれたる袂そと定めかれてそ我も詠むるとて。まことや。

紅葉は、夜はの時雨にあらしかし昨日山へをみたらましかは、と有けるを御覽して。

そやそよなとて山へをみさり劍けさは悔れと何のかひなしとて。はしに。

あらしと思ふ物から紅葉はのちりや残れるいさ尋れ見んと、のたまはせたれば。

移はぬ常盤の山も紅葉せはいさかしゆきてのとくみむをこならんかたにそ侍らむとて。ひとひおはしましたりしに。さはることありて。聞えさせぬそと申しをおほしいて。

高瀬舟はや漕出よさはることさし歸りにしあしまわけたりと聞えさせたるを。おほしわすれたるにや。

山へには車にのりて行へきをたかせの舟はいかゝよるへきとあれば。

紅葉はのみにくる迄もちさらは高瀬の舟のいかゝ焦れんとて。その日も暮ぬ。おはしましたるに。こな

たのふたかりたれば。れいのいとしのひてゐておはします。此ころは四十五日の御方たかへさせ給とて。御いとこの三位中將（後院）の家におはします。れいならぬ所にさへあれば。みくろしと聞ゆれと。しゐておはしまして。御車ながら人もみぬくるまやとりに曳たてゝ入せ給ぬれば。おそろしう思ふに。人しつめてそおはしまして。御くるまにたてまつりて。よろつの事をのたまはせける。心えぬとのゐ人のおのこともそめくりありく。れいの右近のせうこのわらはなとそちかくさふらふ。あはれに物のおほさるゝまゝに。をろかなるさまは。過にし方さへくやしうおほしめさるゝもあなかななり。あけぬれば。やかてゐておはしまして。人のおきぬさきにと急きかへらせ給。つとめて。れぬるよのれ覺の夢にならひてそ伏見の里をけさは起つる御返し。

其夜より我身の上は知れぬはすゝるにあらぬ旅寝をそする  
なと聞ゆる。なにかはかくねんころにかたし  
けなき御心さしを見しらす。心こはきさまに  
もてなすへき事はさしもあらてなと思へは参  
りなんと思たつ。まめやかなる事とて。いふ人  
あれと耳にもたゝす。心うき身なれは。すくせ  
にまかせてあらんと思にも。その宮仕よ。今更  
にほいにもあらず。いはほの中こそすまゝほ  
しけれ。又うき事もあらはいかゝせむ。いと心  
なきさまにこそ思ひいはめ。なをかくてやす  
きなまし。ちかくてたに親はらからの御あり  
さまもみ聞えん。又ほたしのやう成人々の上  
もみ定めむと思ひたちたれは。あいなし。参  
らん程までたに。ひなひにいらへ聞しめされ  
し。ちかくてはさりととも御覽してんと思ひて。  
すき事せし人々の文もなしとのみいはせて。  
更に返事もせずのみあるほとに。御文あり。見

れは。さりとともと頼みけるかをこなり。なと多  
くの事の給はせて。よしとゝいはみかたとは  
かりあるに。むねうちつふれてあさましう覺  
ゆ。めつらかなるそら事とも。なといと多く出  
てくれと。さはれなからん事はいかゝせむな  
と覺えて。過しきぬるを。これはまめやかにの  
給はせたれは。思ひたちける事ほの聞ける人  
もあへかめるに。をこなるめをも見るへかめ  
るかなと思ふに。かなしくて。御返聞ゆへきと  
も覺えず。又いか成事をきこしめしたるにか  
と思ふに。はつかしうて御返事も聞えぬは。有  
つる事をはつかしと思ふなめりとおほして。  
なとか御返も侍らぬ。されはよとこそおもほ  
ゆれ。いとゝしくもかはる御心かな。人のいふ  
事ありしかは。よもとと思ひながら。思はましか  
はとはかり聞えしそとあるに。むねすこしあ  
きて。御氣色もゆかしくて。何事にかときかま



ほしくて。まことにかくもおほされはとて。  
今の間に君きまさなん戀し連なもあるものを我ゆかんやは  
と聞えたれは。

君いまは名のためをおもひける人からかゝる心とそみる  
これにさへはらさへたちぬれとそある。かく  
わふるけしきを御覽して。たはふれさせ給  
ふとはみれと。なをくるしうて。なをいとあや  
しうこそ侍れ。いかにもありて。御覽せさせま  
ほしうこそと聞えさせたれは。

うたかは、又うらみしと思えとも心に心かなばさりけり  
御返し。

うらむらん心はたゆるかきりなくたのむ君をそ我も疑ふ  
なと聞えてあるほとに。暮ぬれはおはしまし  
たり。なを人のいふ事あれば。よもとは思ひな  
から。聞えしに。かゝる事いはれしとおもひ給  
は。いさときこゆるに。いさ給へかしなとの  
たまはせて。明ぬれは出させ給ぬ。かくのみた

えすの給はすれと。おはします事はかたし。雨  
風なといたうふりふく日しも。をとつれさせ  
給はねは。人すくなゝる所の風の音おほしや  
らぬなめりかしと思ひて。くれつかたきこゆ。  
霜かれはわひしかりけり秋風のふくには萩の實つれもしき  
と聞えたれは。かれよりのたまはせたりける  
御文をみれば。いとおそろしけなる風をいか  
かとなんあはれに。

かれはて、我よりほかにとふ人も嵐の風をいかゝきくらん  
とおもひやりきこへるこそいみしけれとそあ  
る。のたまはせけるを見るもおかしうて。所た  
かへたる御物いみにて。しのひたる所におは  
しますとて。れいの御車あれば。いまはたゝと  
もかくものたまはんにしたかひてとおもへは  
参りぬ。心のとかに御ものかたりおきふしき  
こえて。つれ／＼もまざるればそ。ましてまい  
りなまほしきに。御物忌すきぬれは。れいの所

に歸りて。けふはつねよりもなこり戀しうおもひ出られ。わりなう覺ゆれは。きこゆ。

つれ／＼とけふかそふれは年月に昨日を物は思はさりける御覽して。あはれとおほして。こゝにも。

思ふ事なくて過し／＼おと／＼ひを昨日とけふになすよしも哉とおもへと。かひなくなん。なをおほしたてとあれと。いとつ／＼ましくて。する／＼ともおもひた／＼ぬほとは。た／＼うちなかめてのみあかしくらす。いろ／＼見えし木のはものこりなく。空もあかうはれたるに。やう／＼いりはつる日の影こゝろほそうみゆれは。れいのきこえ侍り。

なくさむる君もありとはおもへとも猶夕くれは物を悲しきとあれは。

夕暮は誰もさのみそおもほゆるまちわふ君そ人にまされるとおもふこそあはれなれ。た／＼今まいりこはやとあり。又の日のまたつとめて。霜のいとし

ろきに。さていまのまはいかゝとあれは。

おきながら明せる霜の朝こそまされる物はよになかりけなときこえかはす。例のあはれなることなとか／＼せ給ひて。

われひとりおもふは思かひもなしおなし心に君もあらなん御返。

君は君我は我ともへたてればこゝろこゝろにあらん物かはかくて女。かせにや。おとろ／＼しうはあらねと。なやましうすれは。いかに／＼とはせ給ふ。よろしう成であるほとに。いかにそと／＼はせ給たれは。すこしよろしうなりにて侍は。しはしいきて侍らはやと思給へつるにそ。つみふかう。さるは。

たえし比たえれと思ひし玉の緒を君により又おしまるゝ哉とあれは。いと／＼うれしき事かなとて。

玉の緒はたえんものかは契りてしななき心に結びこめてきかくいふほとに。としも残りなれは。春たつ

かたとおもふ十一月ついたち比。雪のうちふ  
るつとめて。

神代よりふりはてにける雪なれとけふはことにも珍しき哉  
御返し。

初雪といつれの冬もみしまゝに珍しけなきみのみふりつゝ  
なと。かゝるよしなしことにあかしくらす。  
御文あり。おほつかなく成にければ。まいりて  
とおもひつるを。人々ふみつくるめれはとな  
んの給はせたれは。

暇なみ君きまさすは我ゆかんふみつくるらん道をしらはや  
おかしうおほして。

我宿に尋れてきませふみつくる道も教へんあひもみるへく  
又常よりも霜のいとしろきに。いかゝ見ると  
の給はせたれは。

さゆるよの數かく鳴は我なれやいく朝霜を置いてみつらん  
その比雨なとのほけしければ。

雪もふり雨も降ぬるこの比を朝しもとのみおきぬてはみる

その夜おはしまいて。れいの物はかなき御物  
かたりせさせ給て。もしかしこにゐてたてま  
つりて後。まろかほかにもゆき。法師にもなり  
なとして見えたてまつらすは。本意なきやう  
にやおほされすると心ほそうの給はするに又  
いかにおほし成ぬるにかあらん。またさやう  
なる事のいてきぬへきにやあらむと思ふに。  
いと哀にてうちなかれぬ。みそれたちたる雨  
の（ともし）のやかにふるほとなり。いさゝかまとろ  
まで哀なる事ともを。此よのみならすの給は  
せける。思ひかけぬすちのましらひなりとあ  
はれになに事もきこしめしうとまぬ御心さま  
なれは。心のほとも御覽せられんとておもひ  
たつ。たゝかくてはほいのさまにも成ぬはか  
りそかしとおもふ。いとかなしうて。物もきこ  
えてつくつくとなけくけしきを御覽して。  
なをさりのあらましことに夜もすから

との給はせたれば。

おつるなみたは雨とこそふれ

御氣しきのれいよりもうかひたる事ともをの給はせて。明ぬれはおはしましぬ。なにのたのもしけなき事なれと。つれくもなくさめにおもひたちつることを。さらはいかにせましなとおもひみたれて聞ゆ。

現にて思へはいはんかたもなし今宵のことを夢になきはやと思たまふれと。いかてかはとて。はしに。

しかばかり契りし物を定なきさはよの常におもひなせとやくちおしくもやとあれば。御覽して。これよりこそまつとおもひつれと。

現とは思はさらなんぬるよの夢に見えつるうき事ともを思ひなさなん。あな心みしかや。

ほとしらぬ命計そさためなき契しことは佳の江のまつあかきみや。さらにあらまし事にきこえし。人やりならぬ物わひしとぞある。女はそのうち

もあはれにおほえて。なけきのみせらる。とくとしていそきたちたゝましかはとおもふひるつかた。ある御文をみれば。

古今

あな戀しいまも見てしか山賤の垣ほにおふるやまと撫子とぞある。あな物くるしとうちいはれて御返。  
伊勢物語戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくに

と申たれば。うちほゝゑませ給て御らんす。この比は御經ならはせ給ければ。

あふみちは神の諫にあられとも法の蓮にをればたゝぬそ御返し。

われさらは進みてゆかん君はたゝ法の薤をひろむばかりそ  
（九條）なと聞にさせつゝすす。雪いたうふる日。ものゝ枝にふりかゝりたるにつけて。

雪ふれば木々の木のはも春ならてをしなへ梅の花を咲けるなとの給はせたるに。おとろきながら。

梅は早咲にけりとおれはちる花とそ雪のふるは見えける又の日。またつとめて。



冬のよはこひしきに目もあはて衣かたしき明そしにける  
御返事いてや。

冬のよはめさへ氷にとちられて明しかたきを明しけるかな  
なといふほとにれいのつれ／＼なくさめてく  
らすそはかなきや。いかにおほしめさるゝに  
かあらん。心細き事ともぞの給はせて。なを世  
中にありはつましきにやとの給はせたれは。

くれ竹のよゝのふる事おもほゆる昔かたりは我のみそせん  
と聞えたれは。

奥竹のうきふししけき世中にあらしと思ふ暫しばかりも  
などの給はせて。人しれすすへさせ給ふへき  
所なども。をきてならはぬ人なれは。はしたな  
く思ふなめり。こゝにもたゞきゝにくゝそい  
はむ。たゞ我いきてゐてこむと思して。十二月  
十八日の月のよきほとに成にたるほとに。お  
はしましたり。例のいてさせたまへとの給は  
すれは。今宵はかりにこそあめとて。ひとりの

れは。人ゐておはせかし。さりぬへくは。あす  
あさてもものとかに物語りきこえんとあれ  
は。れいはかくもの給はせぬを。もしやかくと  
おほすへきにやとて。さりぬへき人一人ゐて  
いく。例の所にはあらて。いとよくして。忍ひ  
て。人とも具してゐよとせられたり。されはよ  
と思ひて。なに事かはわさとしたてん。いか  
てかはまいらまし。いつ参りしそと中々人も  
思へかしと思ひて。明ぬれは。櫛の宮なとり  
にやる。宮参らせ給ふとて。しはしこなたのか  
うしなとあけす。おそろしき事にはあらねと  
むつかし。今かの北の方に渡しまいらせむ。こ  
こにはちかけれは。ゆるしけなしなどの給は  
すれは。おろしこめてみそかにきけは。ひるは  
人々院冷泉の殿上人なと参りあつまりて。いかに  
そかくては有ぬへしや。ちかおとりいかにせ  
むと思ふこそ苦しけれとの給はすれは。それ

をなん思給へるときこゆる。笑はせ給て。まめ  
やかにはよなと。あなたにあらん折は用意し  
給へ。けしからぬ者とはのそきもそする。今  
しはしに成なは。晝なとはあのせしのあるか  
たにおはしておはせ。丸かひるある方は。人も  
よらすそなとの給はせて。二三日ありて。北の  
方のたいに渡らせ給へりければ。人々驚きて。  
うへに申まいらすれは。かゝる事なくてたに  
あやしかりつるを。なにの高き人にもあらず。  
かくなとの給はせて。わさとおほせはこそ。忍  
ひてゐておはしたらめとおほすに。いと心つ  
きなうておはすれは。例よりも物むつかしけ  
に思ひておはすれは。いとおしうおほして。し  
はしは内にいらせ給ひて。人のいふ事もきゝ  
にくし。人の御けしきもいとおしうて。こなた  
におはします。しか／＼の事あなるは。なとか  
の給はせぬ。せいし聞ゆへきにもあらず。いと

かう身の人けなく。人笑はれに耻かしかるへ  
き事となく／＼聞え給ふれは。人使はむから  
に御覺えのなかるへき事かは。御氣色に従ひ  
て中將なともにくけに思ひたるかむつかしき  
に。かしらなともけつらせんとてよひたるな  
り。こなたなともめし使はせ給へかしとあ  
れは。いと心つきなくあれと物もの給はせず。  
かくて日比ふれは。やう／＼さふらひつきて。  
晝も上に侍らひ御くしなと参り萬につかはせ  
給ふ。更に御まへもさけさせ給はぬ程に。うへ  
なとも御方に渡らせ給ふ事も。たまさかに成  
もていく。おほし歎く事限りなし。としかへり  
て。正月一日に。院のはいらいに。おのこはら  
敷をつくしてまいり給へるに。宮もおはしま  
すを見れは。いと若ううつくしけにて。多くの  
人に勝れ給へり。これにつけても。我身はつか  
しう覺ゆるに。うへの御まへにも。女房たち出



ゐてものみるに。まつそれを見えて。此人をみ  
むむと穴をあけてみさほくそいとさまあし  
きや。暮ぬれは事はてゝ。宮も入せ給ぬ。御送  
りにかんたちへかすをつくして御遊ひなど  
あり。いとおかしきにも。つれ／＼なりしふる  
さとまつ思ひ出らる。かくて侍ふほとに。け  
すなとの中にもむつかしき事をいふへかめる  
をきこしめして。かく人のおほしの給ふへき  
にも侍らす。うたてもあるかなと心つきなけ  
れは。内にいらせ給ふ事いとゝまとをなり。か  
かるもいとかたはらいたう覺ゆれと。いかゝ  
はせん。たゝともかくもしらて。もてなさせお  
はしまさんまゝに從ひてとてさふらふ。御北  
の方の御姉は。三條東宮の女御姫子にてさふらひ給か。  
更に物し給ふほとにて。御文あり。いかにそ此  
比人のいふとあり。まことか我さへなん人け  
なう覺ゆる。夜のまにも渡り給へかすとある

に。かゝらぬ事をたに人はいふをましてとお  
ほすに。いと心うくて。御返うけ給はりぬ。い  
つも思ふさまならぬ世中の。此比は見苦しき  
とさへ侍りてなん。あからさまに参り侍て。宮  
たちをも見参らせて。心も慰め侍らんとなん  
思ひ給ふるを。迎へに給はせよ。これよりはよ  
も耳にもきゝいれ侍らしと思給へてなんと聞  
え給て。さるへき物なととりしたゝめ給て。む  
つかしき所なととり拂はせ給ふ。しはかし  
こにあらん。かくてあれば。あちきなく此方に  
もえさし出給はぬも。苦しう覺え給ふらんに  
との給に。人々いてあさましき世中の人のあ  
さみ聞えさする事よ。参りけるも。おはしまし  
てこそは迎へさせおはしましけれ。すへてい  
と目もあやにこそ侍るなる。かのつほねに侍  
るなるへし。ひるも三度四度おはします也。い  
とよし。しはしこらしきこえ給へ。餘り物聞え

させおはしますすなとにくみあへるに。御心にもいとむつかしう思召す。さはれ。苦しうもなし。ちかうたにもみきこえしとて。御迎へに聞え給へれは。御せうとの君たち。女御殿の御迎へにまいらせたれは。さおほしたり。御めのとのさうしなるものとも。むつかしき物ともなと拂はするはときつて。せんしかう／＼して渡らせおはしますなり。春宮のきかせおはしますん事も侍り。おはしまい。申慰めまいらせおはしますとさはくを見るも。いといとおしうくるしけれとも。ともかくもいふへ

き事にしあらねは。たゞきゝゐたり。かくきゝにくき所はしまかてはやと思へと。それもうたてあるへければ。たゞさふらふも。猶物思ひたゆましき身かなと思ふ。宮おはしませは。さりけなくておはす。まことにや。女御殿に渡り給ふときくは。なと車の事もの給はせぬとの給へは。なにかあれよりとあれはとて。もの給はす。宮のうへ御文かき。女御殿の御言葉さしも。あら／＼かきなしなめり。

右和泉式部日記以扶桑拾葉集按合了

群書類從卷第三百二十一

日記部二

紫式部日記上

秋のけはひの立まゝに。土御門殿の有さまいはんかたなくおかし。池のわたりの梢とも。遣水の邊の草村。をのかし、色つき渡つゝ。大方の空もえんなるにもてはやされて。不斷の御讀經の聲々。哀まさりけり。やうく涼しき風のけしきにも。例の絶せぬ水の音なん。夜もすから聞まか、かはさる。御前にも近ふさふらふ人。はかなき物語するをきこしめしつゝ。なやましうおはしますへかめるを。さりけなくもてかくさせ給へり。御有さまなどのいとさるなるとなれと。浮世のなくさめには。かゝる

おまへをこそ。たつねまいるへかりけれと。うつし心をは引たかへ。たとしへなくよろつわするゝにも。かつはあやしき。また夜深きほと月さし曇木の下をくらきに御かうしまいりなはや。女官はいまたさふらはし。くら人まれなといひしらふほとに。後夜の鐘うちおとろかし。五たんの御すほう時はしめつ。我も我もとうちあけたる伴僧の聲々。遠くちかくきき渡されたるほと。おとろくしくたうとし。觀音院の僧正へん。ひんかしのたいより。廿人の伴僧をひきゐて御かち參り給ふ。あし音。渡殿のはしのとゝろくゝとふみならさるゝさへそ

ことことのけはひにはにぬ。法住寺の座主は。

元明

馬場のおとゝ。へんちしの僧都は。ふどのなとに。うちつれたる淨衣姿ま。ゆへ／＼しきか

らはしともを渡りつゝ。木のまをわけてかへりいるほとも。はるかにみやらるゝ心地してあはれ也。清和イ茶さいさあさりも。大いとかをうやま

ひてこしをかゝめたり。人々参りつれば。夜もあけぬ。わた殿の戸くちのつほぬにみいたせは。ほのうちきりたるあしたの露もまたおちぬに。道長殿ありかせ給てみすいしんめして。やり

水はらはせ給ふ。はしのみなみなるをみなへしの。いみしうさかりなるを。一技おらせ給ひて。木丁のかみよりさしのそかせ給へり。御さまのいとはつかしけなるに。我朝かほの思ひしらるれば。これをそくてはわろからんとの給はするに。とつけてすゝりのもとによりぬ。女郎花盛の色をみるからに露のわきけるみこそしらるれ

あなとゝほゝゑみて。すゝりめしいつ。

白露はわきてもをかしをみなへし心さらにや色のそむらしめやかなる夕暮に。宰相のきみとふたり。ものかたりしてゐたるに。とのゝ三位の君。頼通すたれのつま引あけてゐ給ふ。としのほとよりは。いとおとなしく。心にくきさまして。人は猶心はへこそかたきものなめれなと世の物かたりしめ／＼としておはするけはひ。おさなしと人のあなつり聞ゆるこそあしけれと。はつかしけにみゆ。うちとけぬほとにて。おほかるのへにと。うちすんしてたち給にしさまこそ。物かたりにはめたるおとこの心ちし侍りしか。かはかりのとの。うちおもひ出らるゝもあり。そのおりはおかしきとの。すきぬ。行成れはわするも有はいかなるそ。はりまのかみ。基このまけわさしける日。あからさまにまかてゝ後<sub>華足</sub>にそ。ごばんのさまなとみ給へしかは。けそくなと



ゆへ／＼しくして。すはまのほとりの水に。かきませたり。

紀の國のしらゝの溜に拾ふてふこの石こそは巖ともなれあふきとものおかしきを。その比は人々もた

り。  
八月廿日あまりのほとよりは。上達部。殿上人とも。さるべきはみなとのゐかちにて。はしうへ。たいのすのこなとに。みなうたゝねをしつゝ。はかなうあそひあかす。とふえの音などには。たと／＼しきわか人たちの。とねあらしひ。いまやう歌ともゝ。所につけてはおかしかりけり。宮大夫なり齋信のふ。左宰相中將經房。兵衛督。みのゝ少將なり源政まさなとして。あそひ給ふ夜もあり。わさとの御遊ひは。殿おほすやうやあらん。せさせ給はす。とし比さとゐしたる人々の。なかたえをおもひおこしつゝ。まいりつとふけはひさはかしうて。其ころは。しめ

やかなるとなし。廿六日。御たきものあはせてゝ。人々にもくはらせ給ふ。まろかしゐたる人々。あまたつとひゐたり。うへよりおるゝみちに。辨宰相のきみの戸くちを。さしのそきたれは。ひるねし給へるほとなりけり。はき。しをん。いろ／＼のきぬに。こきかうちめ心となるをうへにきて。かほはひきいれて。すゝりのはこにまくらしてふし給へるひたいつき。いとらうたけになまめかし。繪にかきたる物の姫君の心ちすれは。くちおほひを引やりて。ものかたりの女のこゝちもし給へるかなといふに。見あけて。物くるをしの御さまや。ねたる人を。こゝろなくおとろかすものかとて。すこしおきあかり給へるかほの。うちあかみ給へるなど。こまかにおかしうこそ侍しか。おほかたもよき人の折からに。またこよなくまさるわさなりけり。九日。きくの綿を。兵部（衛）のおも

とのもてきて。これとのうへへ。とりわきて  
いとようおいのこひすて給へとの給はせつ  
る。とあれは。

新幼  
「ひくろい」

菊の露わかゆばかりに袖ぬれて花のあるしにちよは譲らん  
とてかへし奉らんとするほとに。あなたにか  
へりわたらせ給ひぬとあれは。ようなさにと  
とめつ。そのよさ。御まへにまいりたれは。  
月おかしきほとにて。はしにみすのしたより。  
裳のすそなと。ほころひ出るほと／＼に。こ少  
將の君。大納言のきみなとさふらひ給ふ。御ひ  
とりに。ひとひのたきものとうて。こころみ  
させ給ふ。御まへの有さまのおかしさ。つたの  
いろの心もとなきなと。くち／＼きこえさす  
るに。れいよりもなやましき御けしきにおは  
しませは。御かちともまいるかたなり。さは  
かしきこちしていりぬ。人のよへは。つほね  
におりて。しはしとおもひしかとねにけり。夜

中はかりより。さはきたちてのゝしる。十日の  
またほの／＼とするに。御しつらひかはる。  
白き御丁にうつらせ給。殿よりはしめ奉りて。  
きんたち。四位。五位ともおほくさはきて。御  
丁のかたひらかけ。御ましともてちかふほ  
と。いとさはかし。ひひとひ。いとこころもと  
なけに。おきふしくらさせ給ひつ。御ものゝけ  
ともかりうつし。かきりなくさはきのゝしる。  
月ころそこらさふらひつるとのゝうちのそ  
うをは。さらにもいはす。山々寺々を尋て。け  
んさといふかきりは。のこるなくまいりつと  
ひ。三よの佛も。いかにかき給ふらんとおも  
ひやらる。おんやうしとて。世にあるかきりめ  
しあつめて。やをよろつの神も。みふりたて  
ぬはあらしとみえきこゆ。みすきやうのつか  
ひたちさはきくらし。その夜もあけぬ。御丁の  
ひんかしおもては。うちの女房まいりつとひ



てさふらふ。にしには御ものゝけうつりたる人々。御ひやうふ一よろひをひき。つほねくちには。木丁をたてつ。けんさあつかりあつかりのゝしりゐたり。みなみには。やんことなき僧正僧都かさなりゐて。ふとうそのいき給へるかたちをも。よひいてあらはしつへうたのみゝうらみゝ。聲みなかれわたりにたる。いといみしうきこゆ。北の御さうしと御丁とのほさま。いとせはきほとに四十よ人そ。後にかそふれはゐたりける。いさゝかみしろきもせられます。氣あかりて物そおほえぬや。いまとよりまいる人々は。中々ゐこめられます。裳のすそ。きぬの袖。ゆくら<sup>うい</sup>んかたもしらす。さるへきおとなゝとは。しのひてなきまとふ。十一日の曉に。北の御さうし二まはなちて。ひさしにうつらせ給ふ。みすなともえかけあへねは。御木丁ををしかさねておはします。僧正き

やうてふ。そうつ。ほうむそうつなとさふらひて加持まいり。院源そうつきのふかゝせ給し御願書に。いみしきこともかき加へて。よみあけつゝけたることの葉の。あはれにたうとく。たのもしけなると限りなきに。とのゝうちそへて。佛ねんし聞え給ふほとのとたのもしく。さりとともとは思ひなから。いみしうかなしきに。人々なみたをえほしあへす。ゆゝしうかうなと。かたみにいひなからそ。えせきあへさりける。人氣おほくこみては。いとゝ御心ちもくるしうおはしますらんとて。南東おもてにいたさせ給ふて。さるへきかきり。この二まのもとにはさふらふ。とのゝうへ。さぬきと。宰相君。くらのみやうふ。御木丁のうちに。仁和寺のそ<sup>信</sup>うつの君。三井寺の内供のきみも。めしいれたり。とのゝよろつにのゝしらせ給ふ御こゑに。そうもけたれて音せぬやうなり。いま一さに

ゐたる人々。大納言の君。こ少將の君。宮のな  
いし。辨の内侍。中務の君。たいふの命婦。大式  
部のおもと。殿のせんじよ。いと年へたる人々  
の。かきりにて。心をまとはしたるけしきとも  
の。いとことはりなるに。また見奉りなるゝほ  
となれと。たくひなくいみしと。心ひとつに  
覺ゆ。またこのうしろのきはにたてたるきち  
やうのとに内侍のかみ研子中務のイのめのと。姫君威子の少納  
言のめのと。いとひめ君姫子のこしきふのめのと  
なと。をしりきて。みちやうふたつかうしろ  
のほそみちを。え人もとをらす。行ちかひみし  
ろく人々は。そのかほなとも見わかれす。殿の  
公達。宰相中將。かれたか。四位の少將。まさ道。な  
とをはさらにもいはす。左宰相中將。經房。宮の  
大夫齊信など。れいはけとをき人々さへ。御木丁の  
かみより。ともすれはのそきつゝ。はれたるめ  
ともを見ゆるも。よろつはちわすれたり。いた

たきには。うちまきの雪のやうにふりかゝり。  
をししほみたるきぬの。いかに見くるしかり  
けんと。のちにそおかしき。御いたゞきの御く  
しおろし奉り。御いむ裁とうけさせ奉り給ふほ  
と。くれまとひたるこゝちに。こは如何なるこ  
と。あさまじうかなしきに。たいらかにせさせ  
給て。のちのことまたしきほと。さはかり廣き  
もや・南（のイ）のひさしかうらんのとまで。たちこ  
みたる僧も俗も。今一よりとよみてぬかをつ  
く。ひんかしおもてなる人々は。殿上人にまし  
りたるやうにて。こ中將の君の。左頭中將額定に見  
あはせて。あきれたりしさまを。後にそ人々い  
ひ出てわらふ。けさう化なとのたゆみなく。なま  
めかしき人にて。曉にかほつくりしたりける  
を。なきはれ。涙に所々ぬれそこなはれて。あ  
さまじうその人となんみえさりし。宰相の君  
のかほかはりし給へるさまなところ。いとめ

つらかに侍しか。ましていかなりけん。されと  
そのきはにみし人の有さまの。かたみにおほ  
えさりしなん。かしこかりし。いとせさせ給  
ふほと。御ものゝけのねたみのゝしるこゑな  
とのむくつけさよ。けんの藏人<sup>心</sup>には。しん<sup>聖</sup>よあ  
さり。兵衛藏人<sup>心</sup>には。そうそといふ人。右近藏  
人には。ほうちうしのりし。宮の内侍のつほね  
には。ちてうあさをあつけたれは。ものゝけ  
にひきたをされて。いとゝをしかりければ。  
ねんかくあさを。めしくはへてそのゝしる。  
あさりのけんのうすきにあらす。御ものゝけ  
のいみしうこはきなりけり。宰相のきみ。をき  
人にゑいかうをそへたるに。夜一よのゝしり  
あかして聲もかれにたり。御ものゝけうつれ  
と。めしいてたる人々もみなうつらてさは  
かれけり。午の時に。空はれてあさ日さし出  
たる心地す。たいらかにおはします。うれしさ

のたくひもなきに。おとこにさへおはしまし  
けるよろこひいかゝはなのめならん。昨日し  
ほれくらし。けさのほと。朝霧におほれつる  
女房など。みなたちあかれつゝやすむ。御まへ  
にはうちねひたる人々の。かゝるおりふしつ  
きつきしきさふらふ。殿もうへも。あなたにわ  
たらせ給ふて。月ころみすほう讀經にさふら  
ひ。昨日けふ。めしにてまいりつとひつる僧の  
ふせ給ひ。くすしおんやうしなど。みちゝの  
しるしあらはれたるろく給はせ。うちには御  
ゆ殿のきしきなど。かねてまうけさせ給へし。  
人のつほねゝには。おほきやかなるふくろ  
つゝみとももてちかひ。からきぬのぬひもの  
もひきむすひ。らてむ。ぬひ物。けしからぬま  
てしてひきかくし。あふきもてこぬかなゝと  
いひかはしつゝ。けさうしつくるふ。れいのわ  
た殿よりみやれは。つまとのまへに。宮の大

夫。春宮の大夫<sup>尊</sup>なと。さらぬ上達部もさふらひ  
たまふ。殿出させ給て。日比うつもれつるやり  
水つくるはせ給ひ。人々の御けしきとも心ち  
よけなり。心のうちに思ふことあらん人も。  
たゝ今はまきれぬへき世のけはひなるうちに  
も。宮大夫ことさらにもゑみほこり給はねと。  
人よりまさるうれしさの。をのつからいろに  
いつるそことはりなる。右宰相<sup>兼</sup>中將<sup>兼</sup>は。權中納  
言とたはふれして。たいのすのこに給へり。  
内より御はかしもてまいれり。頭中將よりさ  
た。けふいせのみてくらつかひかへるほと。の  
ほるましければ。たちなからそ。たいらかにお  
はします御ありさまそうせさせ給ふ。ろくな  
とも給ひける。そのことはみす。御ほそのをは  
とのゝうへ。御ちつけは橋三位。つな子。御め  
のともとよりさふらひ。むつましう心よいか  
たとて。大さるもんのおもと。つかうまつる。

備中守<sup>宗</sup>むねときの朝臣のむすめ。くら人の辨  
のめのと。御ゆとのはとりの時とか。火ともし  
て。宮のしもへみとりのきぬのうへに。しろき  
たう<sup>當</sup>しき<sup>色</sup>きて。御ゆまいる。其おけすへたるた  
いなと。みなしろきおほひしたり。おはりのか  
みち<sup>近</sup>か<sup>光</sup>みつ。宮のさふらひのおきなるなかの  
ふきて。みすのもとにまいる。みつし二。きよ  
いこの命婦。はりま。とりつきてうめつ。女  
房二人。大もく。むま。くみわたして。御ほとき  
十六にあまればいる。<sup>（りい）</sup>うすものゝうはき。かと  
りのも。からきぬ。さい<sup>誤</sup>しさ<sup>子</sup>して。しろきもと  
ゆひしたり。かしらつきはへておかく見ゆ。  
御ゆとのは宰相の君。御むかへゆ大納言君。源  
遍子。ゆまきすかたともの。れいならすさまこ  
とにおかしけなり。宮は殿いたき奉り給て。御  
はかしこ少將の君。虎のかしら宮の内侍とり  
て御さきにまいる。からきぬは。まつのみのも



ん。もはかいふをゝりて。おほうみのすりめにかたとれり。こしはうすものから草をぬひたり。少將の君は秋の草村。てふ。とりなをしるかねしてつくりかゝやかしたり。をりものは。かきりありて。人の心にしくへいやうなけれは。こしはかりをれいにたかへるなめり。殿の公達二所。頼通教通源少將。雅道。など。うちまきをなけのゝしり。われたかううちならさんと。あらそひさはく。へんち寺の僧都。こしん護身にさふらひ給ふ。かしらにも。めにもあたるへけれは。扇をさゝけて。わかき人にわらはる。文よむはかせ藏人辨廣業ひろなり。高欄のもとにたちて。史記のいくわんをよむ。弦うち廿人。五位十人。六位十人。ふたなみにたちわたれり。よさりの御ゆとのとても。さまはかりしきりてまいる。きしきおなし。御ふみのはかせはかりやかはりけん。伊勢守むね辨時ときのはかせとか。れいの

孝經なるへし。又たかちかは。史記文帝のまきをそよむなるへし。七日のほと。かはるゝよろつものゝくもりなくしろきおまへに。人のやうたい。色あひなとさへ。掲焉けちえんにあらはれたるをみわたすに。よきすみゑに。かみともをおほいたるやうにみゆ。いとゝ物はしたなくて。かゝやかしきこゝちすれは。ひるはおさゝさしいてす。のとやかにて。ひんかしのたいのつほねより。まうのはる人々をみれは。色ゆるされたるは。をり物のから衣。おなしうちきともなれは。中々うるはしくて心々もみえす。ゆるされぬ人も。すこしおとなひたるは。かたはらいたかるへきことはせて。たゝえならぬ三重。五重のうちきに。うはきはをりもの。むもんのからきぬすくよかにして。かさねには。あやうすものをしたる人もあり。扇なとみめには。おとろゝしくかゝやかさて。



よしなからぬさまにしたり。心はへある本文  
うちかきなとして。いひあはせたるやうなる  
も。心々とおもひしかとも。よはひのほと。お  
なしまちのは。おかしと見かはしたり。人の心  
のおもひをくれぬけしきそ。あらはに見えけ  
る。裳からきぬのぬひものをは。さること  
に。袖くちにをきくちをし。裳のぬひめにしろ  
かねのいとをふせて。くみのやうにし。はく<sup>溜</sup>を  
かさりて。あやのもんにすへ。あふきとものさ  
まなとは。たゝ雪ふかき山を。月のあかきにみ  
わたしたるこゝちしつゝ。きら／＼と。そこは  
かと思わたされず。かゝみをかけたるやうな  
り。三日にならせ給ふよは。宮つかさ大夫より  
はしめて。御うふやしなひつかうまつる。右衛  
門のかみは。おまへの事。ちんのかけはん。し  
ろかねの御さらなと。くはしくはみす。源中納<sup>俊</sup>賢  
言。藤宰相は御そ。御むつき。衣はこのおりた

て。いれかたひら。つゝみおほひ。したつくえ  
なと。おなしとのおなししろさなれとも。しさ  
ま人の心々みえつゝ。しつくしたり。あふみの  
かみ。たかまきは。おほかたのことゝもやつかう  
まつらん。東の對の西のひさは上達部の座。  
北をかみにて二行に。南のひさしに。殿上人の  
座は。にしを上なり。白きあやの御ひやうふと  
もを。もやのみすにそへて。とさまにたてわた  
したり。五日夜は。殿の御うふやしなひ。十五  
日の月。くもりなくおもしろきに。池のみきは  
ちかう。かゝり火ともを木のしたにともしつ  
つ。年木ともたてわたす。あやしきしつのおの  
さえつりありく氣しきともまで。色ふしにた  
ちかはなり。とのもりかたちわたれるけはひ  
も。をこたらすひるのやうなるに。こゝかしこ  
のいはかくれ木のもとことに。うちむれてを  
る上達部のすいしんなとやうのものともさ

へ。をのかしゝかたらふへかめることは。かゝる世中の光の。いておはしましたるを。かけにいつしかと思ひしも。およひかほにこそ。そろにうちゑみ。こゝちよけなるや。ましてとのゝうちの人は。なにはかりのかすにしもあらぬ五位ともなとも。そこはかとなくこしもうちかゝめて行ちかひ。いそかしけなるさまして時にあひかほなり。おもものまいるとて。女房八人ひとつ色にさうそきて。かみあけしろきもとゆひして。しろき御はんもてつゝきまいる。こよひの御まかなひは宮の内侍。いともものゝしく。あさやかなるやうたいに。もとゆひばへしたるかみのさかりは。常よりもあらまほしきさまして。扇にはつれたるかたはらめなど。いときよらに侍しかな。かみあけたる女房は。源式部。好かむすめ。小左衛門。この守道と。小兵衛。左京のかみあ。大輔。すけちか。女。大

むま。左衛門大夫よ。小むま。左衛門のすけ。小木工。もくのせう平のふよしと。かたちなとおかしきわか人のかきりにて。さしむかひつゝゐわたりたりしは。いとみるかひこそ侍しか。れいはおものまいるとて。かみあくるをそするを。かゝるおりとて。さりぬへき人々を。えらせ給へりしを。心うしいみしとうれへなきなど。ゆゝしきまでそ見侍し。御丁の東面二まはかりに。卅よ人居並たりし人々のけはひこそ。みものなりしか。いきのおものは采女とも参る。戸口のかたに。御ゆとのゝへたての御ひやうふにかさねて。又みなみむきにたてて。しろきみつし一よろひにまいりすへたり。夜ふくるまゝに。月のくまなきに。うねめ。もひとり。みくしあけとも。とのもり。かむもりの女官。かほもしらぬをり。みかとかさなとやうのものにやあらん。をろそかにさうそき

けさうしつゝ。をとろのかんさし。おほやけおほやけしきさまして。しんてんの東のわたとのゝ戸くちまで。ひまもなくをしこみてゐたれは。人もえとをりかよはず。おもものまいりはてゝ。女房みすのもとにいてゐたり。ほかけにきら／＼と見えわたる中にも。おほしきふのおもとの裳からきぬ。をしほ山のご松原をぬひたるさまいとおかし。おほしきふは。みちのくのかみのめ。とのゝせんじよ。たいふの命婦は。からきぬはてもふれず。もをしろかねのていして。いとあさやかにおほうみにすりたるこそ。けちえんならぬものからめやすけれ。辨の内侍の裳に。しろかねのすはま。鶴をたてたるしさまめつらし。ぬひものも。松かえの齡をあらそはせたる心はへかと／＼し。少將のおもとのこれらにはをとるなる。しろかねのはくを人々つきしろふ。少將のおもとゝいふは。

しなのゝかみすけみつかいもうと。殿のふる人なり。その夜の御前の有さまの。いと人にみせまほしければ。よゐの僧のさふらふ御ひやうふをゝしあけて。此世にはかうめてたきと。またえみ給はしといひ侍しかは。あなかしこあなかしこと。本尊をはをきて。手をゝしすりてそよろこひ侍し。上達部座をたちて。御はしのうへにまいり給ふ。殿をはしめ奉りて。攤うち給ふ紙のあらそひいとまきなし。うたともあり。女房。さか月なとあるおり。いかゝはいふへきなと。くち／＼思ひこゝろみる。

珍らしき光さしそふさか月は持ながらこそちよめくらめ  
中職 公任  
四條大納言にさしいてんほと。歌をはさる物

にて。こはつかひよふいひのへしなとさゝめきあらそふほとに。ことおほくて。夜いたうふけぬれはにや。とりわきてもさゝてまかて給ふ。ろくとも上達部には。女のさうそくに御

そ。御むつきやそひたらん。殿上の四位はあは  
せ一かさね。六位ははかま一具そみえし。また  
の夜月いとおもしろく。ころさへおかしきに。  
わかき人は舟にのりてあそぶ。色いろなるお  
りよりも。おなしさまにさうそきたるやうた  
い。かみのほとくもりなくみゆ。小大夫。源式  
部。宮木の侍従。五せち辨。右近。小兵衛。小衛  
門。むま。やすらひ。いせ人など。はしちかくゐ  
たるを。左宰相中將。殿中將<sup>敬通</sup>の君。いさなひい  
て給ひて。右宰相中將かねたかにさほさゝせ  
て舟にのせ給ふ。かたへはすへりとゝまりて。  
さすかにうらやましくやあらんと。見出しつ  
つゐたり。いと白き庭に。月のひかりあひたる  
やうたい。かたちもおかしきやうなる。北のち  
むに。車あまたありといふは。うへ人ともなり  
ける。藤三位をはしめにて侍従命婦。藤少將命  
婦。むまの命婦。左近命婦。ちくせんの命婦。近

江命婦なとを聞え侍し。くはしく見しらぬ人  
人なれは。ひかことも侍らんかし。ふねの人々  
もまとひ入ぬ。との出ゐ給て。おほすとなき御  
けしきに。もてはやしたはふれ給ふ。をくりも  
のもしな／＼に給ふ。七日のよは。おほやけ  
の御うふやしなひ。藏人少將。道雅。を御つかひ  
にて。物のかす／＼かきたるふみ。やないはこ  
に入てまいれり。やかて返し給ふ。勸學院衆と  
もあゆみしてまいれる<sup>凡</sup>けさん<sup>卷</sup>のふみとも。又  
けいす。かへし給ふ。ろくとも給ふへし。こよ  
ひのきしきは。とにまさりておとろ／＼しく  
のゝしる。御丁のうちをのそきまゐりたれは。  
かく國のおやともてさはかれ給ひ。うるはし  
き御けしきにもみえさせ給はす。すこしうち  
なやみ。おもやせて。おほとこのこまれる御あり  
さま。常よりもあへかにわかくうつくしけな  
り。ちいさきとうろを御丁のうちにかけたれ



は。くまもなきに。いとゞしき御いろあひの。  
そこひもしらすきよなるに。こちたき御く  
しは。ゆひてまさらせ給ふわさなりけりとお  
もふ。かけまくもいとさらなれは。えそかきつ  
つけ侍らぬ。大かたの事ともは。一日のおなし  
こと。かんたちめのろくはみすのうちより。女  
さうそく。宮の御そなとそへていたす。殿上  
人。頭額定 道方ふたりをはしめて。よりつゝとる。おほ  
やけの祿は。大うちき。ふすま。こしさしなと。  
れいのおほやけさまなるへし。御ちつけつか  
うまつりし橘三位のをくり物。れいの女のそ  
うそくに。をりものゝほそなかそへて。しろか  
ねの衣はこ。つゝみなともやかてしろきにや。  
又つゝみたるものそへてなとそ聞侍りし。く  
はしくはみ侍らす。八日。人々色々さうそきか  
へたり。九日。夜は春宮權大夫通つかうまつり給  
ふ。しろさみつしひとよろひにまいりすへた

り。きしきいとさまことにいまめかし。しろか  
ねの御衣はこ。かいふをうちいてゞ。ほうらい  
なと。れいのとなれと。いまめかしうこまかに  
おかしきを。とりはなちては。まねひつくすへ  
きにもあらぬこそわろけれ。こよひはおもて  
くちきかたの木丁。例のさまにて。人々はこき  
うちものをうへにきたり。めつらしく心にく  
くなまめいてみゆ。すきたるからきぬともに。  
つや／＼と。をしわたしてみえたるを。また人  
のすかたもさやかにそみえなされける。こま  
のおもとゞいふ人の。はちみ侍し夜なり。十月  
十よ日まで。御丁出させ給はす。西のそはな  
るおましに。よるもひるもさふらふ。とのゝ  
夜中にもあかつきにもまいり給つゝ。御めの  
とのふところをひきさかさせ給に。うちとけ  
てねたるときなどは。なに心もなくおほゝれ  
ておとろくも。いと／＼おかしくみゆ。心もと



なき御ほとを。わか心をやりてさうけうつく  
しみ給ふも。ことはりにめてたし。あるとき  
は。わりなきわさしかけ奉り給へるを。御ひも  
ひきときて。御木ちやうのうしろにてあふら  
せ給ふ。あはれこの宮の御しとにぬるゝは。嬉  
しきわさかな。このぬれたるあふるこそ。おも  
ふやうなるこちすれと。よるこはせ給ふ。中  
つかさの宮わたりの御ことを御心にいれて。  
そなたの心よせある人とおほして。かたらは  
せ給ふも。まことに心のうちはおもひゐたると  
おほかり。行幸ちかくなりぬとて。とのうち  
をいよくつくりみかゝせ給ふ。世におもし  
ろき菊のねをたつねつゝほりてまいる。いろ  
いろうつろひたるも。黄なるか見ところある  
も。さま／＼にうへたてたるも。あさきりのた  
えまに見わたしたるは。けにおいもしそきぬ  
へきこちするに。なそやまして。おもふとの

すこしもなのめなる身ならましかは。すきす  
きしくももてなしわかやきて。常なき世をも  
すくしてまし。めてたきこと。おもしろきこ  
とを。みきくにつけても。たゝおもひかけたり  
し心のひくかたのみつよくて。ものうくおも  
はすに。なけかしきことのまさるそいとくる  
しき。いかて今は猶ものわすれしなん。思ひか  
ひもなし。つみもふか／＼りなと。あけたてはう  
ちなかめて。水鳥ともの。思ふことなけにあそ  
ひあへるをみる。

水鳥を水の上とやよそにみん我も浮たる世を過しつゝ  
かれもさこそ心をやりてあそふとみゆれと。  
身はいとくるしかんなりと。思ひよそへらる。  
小少將の君のふみをこせたる返ことかくに。  
時雨のさとかきくらせは。つかひもいそく。又  
空のけしきもうちはきてなんとて。こしお  
れたることやかきませたりけん。くらうなり

にたるにたちかへり。いたうかすめたるこせ  
んしに。

雲間なくなむる空もかきくらしいかに忍ふる時雨なる暨  
かきつらむこともおほえす。

ことはりの時雨の空は雲まあれと詠むる袖を乾くまもなき  
その日あたらしくつくられたる舟とも。さし  
よせさせて御覽す。れう頭こしらへけきしゆのいける  
かたちおもひやられて。あさやかにうるはし。  
行幸はたつの時と。またあかつきより人々け  
さう心つかひす。上達部の御座は。にしのた  
いなれは。こなたはれいのやうにさはかしう  
もあらず。内侍のかんのとの、御かたに。中々  
人々のさうそくなとも。いみしうとゝのへ給  
ふときこゆ。曉に少將の君まいり給へり。もろ  
ともにかしらけつりなとす。れいのさいふと  
も日たけなんと。たゆき心ともはたゆたひ  
て。あふきのいとなをくしきを。また人にい

ひたる。もてこなんとまちゐたるに。つゝみの  
音を聞つけて。いそきまいるさまあしき。御こ  
しむかへ奉る。ふなかくいとおもしろし。よす  
るを見れば。かよちやうのさる身のほとなか  
ら。はしよりのほりて。いとくるしけにうつふ  
しふせる。なにのことゝなるたかきましら  
ひも。身のほとかきりあるに。いとやすけなし  
かしとみる。御帳のにしおもてに。おまゝをし  
つらひて。みなみの庇のひんかしのまに。御い  
しをたてたる。それより一間へたてゝ。ひんか  
しにあれたるきはに。北みなみのつまにみす  
をかけへたてゝ。女房のゐたる南のはしらも  
とより。すたれをすこし引あけて。内侍二人い  
つ。その日のかみあけ。うるはしきすかた。か  
らゑをおかしけにかきたるやうなり。左衛門  
のななし。御はかしとる。青いろのむもんのか  
らきぬ。すそこのも。ひれ。くんたいはふせむ

れうをはしたんにそめたり。うはきはきくの  
五へ。かいねりはくれなる。すかたつきもてな  
し。いさゝかはつれてみゆるかたはらめ。はな  
やかにきよけなり。辨の内侍しるしの御はこ。  
くれなるにえひそめのをりものゝうちき。裳  
からきぬは。さきのおなしと。いとさゝやかに  
おかしけなる人の。つゝましけにすこしつゝ  
みたるそ。心くるしうみえける。あふきよりは  
しめて。このみましたりとみゆ。ひれはあふち<sup>横</sup>  
たん。ゆめのやうにも今宵のたつほとよそほ  
ひ。むかしあまくたりけんをとめこのすかた  
も。かくやありけんとまておほゆ。近衛つか  
さ。いとつき／＼しきすかたして。御こしのこ  
とゝもをこなふ。いときら／＼し。頭中將御は  
かしなとゝりて内侍につたふ。みすの中を見  
わたせは。色ゆるされたる人々は。れいの青い  
ろあかいろのからきぬに地すりの裳。うはき

はをしわたしてすはうのをり物なり。たゝむ  
まの中將そえひそめをきて侍し。うちものと  
もは。こき薄き紅葉をこきませたるやうにて。  
中なるきぬとも。れいのくちなしのこきうす  
き紫苑色。うらあをき菊を。もしは三重なと心  
心なり。綾ゆるされぬは。れいのおとな／＼し  
きは。むもんのあをいろ。もしはすはうなとみ  
な五へにて。かさねともはみなあやなり。おほ  
海のすりもの。水の色はなやかにあさ／＼と  
して。こしともは。かたもんをそおほくはした  
る。うちきはきくの三へ五へにて。をり物はせ  
す。わかき人は。菊の五へのからきぬを心々に  
したり。うへはしろく。あをきかうへをはすは  
う。ひとへはあをきもあり。うへうすすはう。  
つき／＼こきすはう。中に白きませたるも。す  
へてしさまおかしきのみそ。かと／＼しくみ  
ゆる。いひしらすめつらしくおとろ／＼しき

あふきともみゆ。うちとけたるおりこそ。まほ  
ならぬかたちもうちましりてみえわかれけ  
れ。心をつくしてつくろひけさうし。をとらし  
としたてたる。女系のおかしきにいとようと  
て。としのほとのおとなひ。いとわかきけち  
め。かみのすこしをとろへたるけしき。またさ  
かりのこちたきか。わかまへはかり見渡さる。  
さてはあふきよりかみのひたいつきそあやし  
ぐ。人のかたちをしな／＼しくも。くたりても  
もてなすところなんめる。かゝる中にすくれ  
たるとみゆるこそ。かきりなきならぬ。かねて  
より。うへの女房。宮にかけてさふらふ五人  
は。まいりつとひてさふらふ。ないし二人。  
命婦二人。御まかなひの人ひとり。おもいま  
いるとて。ちくせん左京のおもとの。かみあ  
けて。内侍のいてゐるすみのはしらもとより  
いつ。これはよろしき天女なり。左京は青い

ろに柳のむもんのから衣。ちくせんは菊の五  
へのから衣。裳はれいのすり裳なり。御まか  
なひ橘三位。あをいろのから衣は。からあやの  
黄なるきくのうちきそ。うはきなんめる。ひと  
もとあけたり。はしらかくれにて。まほにもみ  
えす。殿。わか宮いたき奉り給て。おまへにい  
て奉り給。うへ。いたちうつし奉らせ給ふ程。  
いさゝかなかせ給ふ御こゑいとわかし。辨宰  
相のきみ。御はかしとりてまいり給へり。もや  
の中(のイ)とよりにしに。とのうへおはするかた  
にそ。わか宮はおはしまさせ給ふ。うへ。とに  
いてさせ給てそ。宰相の君はこなたにかへり  
て。いとけそうにはしたなき心地しつると。け  
におもてうちあかみてゐ給へるかほ。こまか  
におかしけなり。衣の色も人よりけにきはや  
し給へり。くれゆくまゝに。かくともいとおも  
しろし。上達部おまへにさふらひ給ふ。萬さい



らく。太平樂。賀てんなどいふまひと。ちや<sup>長</sup>  
 うけいし<sup>子</sup>をまかで音聲にあそひて。山のさき  
 のみちをまふほと。とをくなりゆくまゝに。ふ  
 えの音も。つゝみのをとも。松風も。こふかく  
 吹あはせて。いとおもしろし。いとよくはらは  
 れたるやり水の。こゝちゆきたるけしきして。  
 池のみつなみたちきはき。そゝろさむきに。  
 うへの御あこめたゝふたつ奉り給へりけり。  
 左京の命婦の。をのかさむかめるまゝに。いと  
 をしかりきこえさするを。人々はしのひてわ  
 らふ。ちくせんの命婦は。こ院<sup>同</sup>のおはしましゝ  
 時。この殿の行幸はいとたひ／＼ありしとな  
 り。そのおりかのおりなと。おもひいてゝいふ  
 を。ゆゝしきこともありぬへかめれば。わつら  
 はしと。ことにあへしらはす。木丁へたてゝ  
 あるなめり。あはれいかなりけんたとたにい  
 ふ人あらは。うちこほしつへかめり。御前の御

あそひはしまりて。いとおもしろきに。わか宮  
 のみ聲うつくしう聞え給ふ。右のおとゝ。萬歳<sup>顯光</sup>  
 樂みこゑにあひてなんきこゆると。もてはや  
 しきこゑ給ふ。左衛門のかみ<sup>公任</sup>など。萬さいらく  
 千秋樂と。もろこゑにすして。あるしのおほい  
 との。あはれさき／＼の行幸を。なとてめい<sup>面日</sup>ほ  
 くありとおもひ給へけん。かゝりけるとも侍  
 りける物をと。ゑひなきし給。さらなるとなれ  
 と。御みつからもおほししるこそ。いとめてた  
 けれ。殿はあなたにいてさせ給ふ。うへはい  
 らせ給て。右のおとゝを御前にめして。筆とり  
 てかき玉ふ。宮つかさ殿の家司のさるへきか  
 きり加階す。頭<sup>道方</sup>辨してあないは奏せさせ給め  
 り。あたらしき宮の御よろこひに。うちの上達  
 部引つれて拜したてまつり給ふ。藤原なから  
 かどわかれたるは。列にもたち給はさりけり。  
 次に別當になりたる右衛門督<sup>齊信</sup>大宮<sup>同</sup>の大夫よ。



宮のすけ。かゝいしたる侍從宰相。同つき／＼の

人舞踏す。宮の御かたにいらせ給て程もなきに。夜いたうふけぬ。御こしよすとのゝしれは出させ給ぬ。又のあしたに内の御つかひ。朝霧もはれぬにまいれり。うちやすみすくして。みすなりにけり。けふそはしめてそひ奉らせ給。殊さらに行幸の後とて。又の日宮の家司。別當。おもと人なと。しき<sup>1元</sup>しさたまりけり。かねてもきかて。ねたきことおほかり。日比の御しつらひ。れいならず。やつれたりしをあらたまりて。御前のありさまいとあらまほし。とし比心もとなく見奉り給ける御ことの。うちあひてあけたては。との。うへも参り給つゝ。もてかしつき聞え給ふ。にほひいとこゝろとなり。くれて月いとおもしろきに。宮のすけ。女房にあひて。とりわきたるよろこひもけい<sup>音</sup>せさせんとにやあらむ。妻戸のわたりも。御ゆとのゝ

けはひにぬれ。人のをとせさりければ。このわたとのゝひかしのつまなる。宮のないしのつほねにたちよりて。こゝにやとあないし給。宰相は中のまによりて。またさゝぬかうしのかみをしあけて。おはすやなとあれと。いてぬに。大夫のこゝにやとの給にさへ。きゝ忍はんもことゝしきやうなれば。はかなきいらへなとす。いとおもふことなけなる御けしきともなり。我御いらへはせず。大夫を心にもてなしきこゆ。ことはりなからわろし。かゝる所に上臈のけちめ。いたうはわくものかとあはめ給。けふのたうとさなと聲おかしううたふ。よふくるまゝに月いとあかし。かうしのもととりさけよとせめ給へと。いとくたりてかむたちめのゐ給はんも所といひなからかたはらいたし。わかやかなる人こそ。ものゝほとしらぬやうにあさへたるも。つみゆるさるれ。なに

かあされかましとおもへははなたす。御いかは。霜月のついたちの日。れいの人々の。したてゝのほりつとひたる。御前の有さま。繪にかきたる物あはせの所にそ。いとようにて侍し。御丁の東のおましのきはに。みさちやうを。おくのみさうしよりひさしのはしらまで。ひまもあらせすたてきりて。南おもてにおまへの物はまいりすへたり。にしによりておほみやのおもの。れいのちんのおしき。なにくれのたいなりけんかし。そなたのことはみす。御まかなひ宰相の君。さぬきとりつく。女房もさいしもとゆひなとしたり。わか宮の御まかなひは大納言のきみ。ひんかしによりてまいりすへたり。ちいさき御たい。御さらとも。御箸のたい。すはまなとも。ひいなあそひの具とみゆ。それよりひんかしのまのひさしのみすすこしあけて。辨の内侍。中つかさの命婦。小中將の

君など。さへいかきりそとりつきつゝまいる。おくにゐて。くはしうは見侍らす。こよひ小輔のめのと色ゆるさる。こゝしきさまうちしたり。宮いたき奉れり。御丁のうちにて。とのゝうへ。いたきうつし奉り給て。ゐさりいてさせ給へり。ほかけの御さまけはひとにめてたし。あかいろのからの御そ。ちすりの御裳。うるはしくさうそき給へるも。かたしけなくもあはれにみゆ。大みやはえひそめの五への御そ。すはうの。御こうちきたてまつれり。殿。もちゐはまいり給ふ。上達部の座は。れいの東のたいのにしおもてなり。いまふた所<sup>願先</sup>の大臣もまいり給へり。はしのうへにまいりて。またゑひみたれてのゝしり給ふ。おりひつ物。こものともなと。殿の御かたより。まうちきみたちとりつゝきてまいれる。かうらんにつゝけてすへわたしたり。たちあかしの光の心もとなければ。四

位少將などをよひよせて。しそくさゝせて人  
人はみる。うちのたいはん所にもてまいるへ  
き。あすよりは御ものいみとて。こよひみない  
そきてとりはらひつゝ宮の大夫みすのもとに  
参りて。上達部おまへにめさんとけいし給。き  
こしめしつとあれは。殿よりはしめ奉りて。み  
なまいり給。はしのひんかしのつまとのまへ  
までゐたまへり。女房ふたへみへつゝゐわた  
されたり。みすともを。そのまにあたりて居給  
へる人々。よりつゝ巻あけ給ふ。大納言の君。  
宰相のきみ。こ少將の君。宮の内侍とゐ玉へ  
り。右のおとゝよりて。御木丁のほころひゝき  
たちみたれ給ふ。さたすきたりとつきじろふ  
もしらす。あふきをとり。たはふれことのはし  
たなきもおほかり。大夫かはらけとりて。そな  
たにいて給へり。みの山うたひで。御あそひさ  
まはかりなれと。いとおもしろし。そのつきの

まのひんかしのはしらもとに。右大將よりて。  
衣のつま袖くちかそへ給へるけしき人よりと  
なり。ゑひのまきれをあなつりきこえ。又たれ  
かとはなとおもひ侍て。はかなきともいふに。  
いみゝくされ。いまめく人よりも。けにこそお  
はすへかめれ。しかさかつきのすんのくるを。  
大將はおち給へと。れいのことならひの千と  
せ萬代にてすぎぬ。左衛門督。あなかしこ。こ  
のわたりに若むらさきやさふらふと。うかゝ  
ひ給ふ。源氏にかゝるへき人見え給はぬに。か  
のうへは。まいていかてものし給はんと聞ゐ  
たり。三位のすけ。かはらけとれなとあるに。  
侍従の宰相たちて。内のおとゝのおはすれは。  
しもよりいてたるをみて。おとゝゑひなきし  
たまふ。權中納言すみのまのはしらもとによ  
りて。兵部のおもとひこしろひ。きゝにくきた  
はふれこゑも。殿のたまはす。おそろしかるへ

き夜の御ゑひなめりと見て。ことはつるまゝに。宰相のきみにいひあはせて。かくれなんとするに。東おもてに。とのゝきんたち宰相中將など入て。さはかしければ。ふたりみちやうのうしろにゐかくれたるを。とりはらはせ給て。ふたりなからとらへすへさせ給へり。わかひとつつゝつかうまつれ。さらはゆるさむとの給はす。いとはしくおそろしければ。きこゆ。いかにいかゝ數へやるへき八千歳の餘り久き君かみよをはあはれつかうまつれるかなと。二たひはかりすせさせ給て。いとゝうのたまはせたる。

蘆たつの齡しあれば君かよの千歳の數もかそへとりてんさはかりゑひ給へる御こゝちにも。おほしけるこのさまなれは。いとあはれにとほりなり。けにかくもてはやし聞え給にこそは。よろつかさりもまさらせ給ふめれ。千代もあへましく。御行するゑのかすならぬこゝちにたに。お

もひつゝけらる。宮のおまへきこしめすや。つかうまつれりと。我ほめし給て。宮の御てゝにて。まろわろからす。まろかむすめにて。宮わろくおはします。はゝもまたさいはい有とおもひて。わらひ給ふめり。よいおとこはもたしかしとおもひたんめりと。たはふれきこえ給も。こよなき御ゑひのまきれなりとみゆ。さるともなければ。さはかしき心ちはしなから。めてたくのみきゝゐさせ給。とのゝうへ。きゝにくしとおほすにや。わたらせ給ひぬるけしきなれは。をくりせすとて。はゝうらみ給はん物そとて。いそきて御丁のうちをとをらせ給。無禮宮なめしとおほすらん。おやのあれはこそ。子もかしこけれと。うちつふやき給ふを。人々わらひきこゆ。いらせ給ふへきともちかうなりぬれと。人々はうちつきつゝ心のとかならぬに。おまへには。御冊子さうしつくりいとなませ給



とて。あけたては。まつむかひさふらひて。色  
色のかみえりとゝのへて。物語のほんともそ  
へつゝ。ところ／＼にふみかきくはる。かつ  
は。とちあつめしたゝむるをやくにて。あか  
しくらす。なにのこもち子持かつめたきに。かゝる  
わさはせさせ給ふと。きこえ給ふものから。よ  
きうすやうとも。ふてすみなど。もてまいり給  
ひつゝ。御すゝりをさへもてまいりたまへれ  
は。とらせ給へるを。おしみのゝしりて。もの  
のくまにむかひさふらひて。かゝるわさしい  
つとさいなむなれと。かくへきすみふてなと  
給はせたり。つほねに物かたりの本ともとり  
にやりて。かくしらをきたるを。御前にあるほと  
に。やをらおはしまいて。あさらせ給て。みな  
ないしのかん子の殿に奉り給てけり。よろしう  
かきかへたりしは。みなひきうしなひて。心も  
となき名をそとり侍りけんかし。わか宮は御

物かたりなとせさせ給ふうちに心もとなくお  
ほしめす。とはりなりかし。御前の池に水鳥と  
もの。ひ／＼におほくなりゆくをみつゝ。い  
らせ給はぬさきに。雪リイふらなん。このおまへの  
有さま。いかにおかしからんとおもふに。あか  
らさまにまかてたるほと。二日はかりありて  
しも雪はふる物か。見ところもなき故郷の木  
立をみるにも。ものむつかしう思ひみたれて。  
年比つれ／＼になかめあかしくらしつゝ。は  
なとりのいろをもねをも。春秋に往かふ空の  
けしき。月のかけ霜雪をみて。その時きにけり  
とはかりおもひわきつゝ。いかにやいかにと  
はかり。行末の心ほそさはやるかたなき物か  
ら。はかなきものかたりなとにつけて。うちか  
たらふ人。おなし心なるは。あはれにかきかは  
し。すこしけとをきたよりともを。たつねても  
いひけるを。たゝこれをさま／＼にあへしら



ひ。そゝろことにつれ／＼をはなくさめつゝ。  
世にあるへき人かすとはおもはずなから。さ  
しあたりてはつかしいみしと思しるかたはか  
りのかれたりしを。さものこせるとなくおも  
ひしる身のうさかな。こゝろみに物かたりを  
とりてみれとも。見しやうにもおほえす。あさ  
ましくあはれなりし人の。かたらひしあたり  
も我をいかにおもなく心あさきものと思おと  
すらんとをしはかるに。それさへいとはつか  
しくて。えをとつれやらす。心にくからんとお  
もひたる人は。おほそらにては。文やちらすら  
んなとうたかはるへかめれは。いかてかは我  
心のうちあるさまをも。ふかうをしはからん  
とことばりにて。いとあいなければ。中たゆと  
なけれと。をのつから。かきたゆるもあまたす  
みさたまらずなりにたりとも思ひやりつゝ。  
をとなひくる人も。かたうなとしつゝ。すへて

はかなきとにふれても。あらぬ世にきたる心  
ちそ。こゝにてしもうちまさり物あはれなり  
けり。たゝえさらすうちかたらひ。すこしもこ  
ろとめておもふ。こまやかに物をいひかよ  
ふ。さしあたりて。をのつからむつひかたらふ  
人はかり。すこしなつかしくおもふそのものは  
かなきや。大納言の君のよ／＼は。御まへに  
いとちかうふしたまひつゝ物かたりし給しけ  
はひの戀しきも。猶よにしたかひぬる心か。  
浮寝せし水の上のみ戀しくて鴨のうは毛にさえそをとらぬ  
かへし。

打はらふ友なき比のねさめにはつかひし鶯をよはに戀しき  
かきさまなとさへいとおかしきを。まほにも  
おはする人かなとみる。雪を御覽して。折しも  
まかてたるをなん。いみしくにくませ給ふ  
と。人々もの給へり。とのゝうへの御せうそこ  
には。まろかとゝめしたひなれは。ことさらに

いそぎまかてゝ。とくまいらんとありしもそ  
らことにて。程ふるなめりと。のたまはせたれ  
は。たはふれにても。さきこえさせ給はせしこ  
となれは。かたしけなくてまいりぬ。いらせ給  
ふは十七日なり。いぬのときなと聞つれと。や  
うやう夜ふけぬ。みなかみあけつゝゐたる人  
卅よ人。そのほかにもみえわかす。もやのひん  
かしおもてひかしのひさしに。うちの女房も  
十よ人。みなみのひさしのつまとへたてゝゐ  
たり。御こしには宮のせんしのる。いとけの御  
車に。とのゝうへ少輔のめのと。わか宮いた  
き奉りてのる。大納言宰相の君こかねつくり  
に。つきのくるまに。こ少將。宮の内侍。つきに  
むまの中將とのりたるを。わろき人とのりた  
りとおもひたりしこそ。あなとくしと。いと  
とかゝる有さまむつかしう思ひ侍しか。との  
もりの侍従の君。辨の内侍。つきに左衛門の内

侍。とのゝせんし。しきふとまではしたいしり  
て。次々はれいの心々にてのりけり。月のくま  
なきに。いみしのわさやと思ひつゝ。あしをそ  
らなり。むまの中將の君をさきにたてたれは。  
ゆくゑもしらすたとくしきさまこそ。我う  
しろをみる人はつかしくもおもひしらるれ。  
ほそとのゝ三のくちに入てふしたれは。こ少  
將のきみもおはして。なをかゝる有さまのう  
きとをかたらひつゝ。すくみたる衣ともをし  
やり。あつこえたるきかさねて。ひとり火  
をかき入て。身もひえにける。ものゝはした  
なさをいふに。侍従の宰相。左の宰相中將。き  
んのふの中將など。つきくによりきつゝと  
ふらふもいと中々なり。こよひは。なきものと  
おもはれて。やみなはやと思ふを。人にとひ聞  
給へるなるへし。いとあしたにまいり侍らん。  
こよひはたへかたく。身もすくみて侍など。

ことなしひつゝ。こなたのちんのかたよりい  
 つ。をのかしゝいへちといそくも。なにはかり  
 のさと人そはと。おもひをくらる。わか身によ  
 せては侍らす。大かたの世のありさま。こ少將  
 のきみのいとあてにおかしけにて。世をうし  
 とおもひしみてゐたまへるを見侍るなり。ち  
 ちきみよりことはしまりて。人のほとよりは。  
 さいはひのこよなくをくれたまへるなんめ  
 りかし。よへの御をくり物。けさそこまかに御  
 覽する。御くしのはこのうちの具とも。いひつ  
 くしみやらんかたもなし。手匣一よろひ。かた  
 つかたには。白さしきしつくりたる御さうし  
 とも。古今。後撰集。拾遺抄。そのぶとものは。  
 五てうにつくりつゝ。侍從行成の中納言と延幹と。  
 をのくさうしひとつに。四くわんをあてつ  
 つかせ給へり。へうしは羅。ひもおなしから  
 のくみ。かけこのうへにいたり。したには。

よしのふもとすけやうの。いにしへ今のうた  
 よみとものいへく集かきたり。えんかむ  
 とち近かすみのきみとかきたるは。さるものに  
 て。これはたゞ。けちかうもてつかはせ給へ  
 き。みしらぬものともにしなさせたまへる。い  
 まめかしうさまことなり。

### 紫式部日記下

五節は廿日に參る。侍從行成宰相に。まひ姫のさう  
 そくなとつかはす。右宰相兼中將の。五節にか  
 つら申されたるつかはすついでに。はこ一よ  
 ろひにたきものいれて。心葉梅の枝をして。い  
 とみ聞えたり。にはかにいとなむ。常のとし  
 よりも。いとみましたるきこえあれば。東のお  
 まへのむかひなるたてしとみに。ひまもなく  
 うちわたしつゝ。ともしたる火の光。ひるより

もはしたなけなるに。あゆみいるさまとも。あ  
さましよう。つれなのわさやとのみ思へと。人の  
うへとのみおほえす。たゝかう。殿上人のひた  
おもてにさしむかひ。しそくさゝぬはかりそ  
かし。へい<sup>原</sup>まん<sup>暢</sup>ひきを<sup>「おほひ」</sup>いやるとすれと。おほか  
たのけしきは。おなしことを見るらんとおも  
ひいつるも。先むねふたかる。なりとをの朝臣  
のかしつき。錦のからきぬ。やみのよにももの  
にまきれす。めつらしうみゆ。きぬかちにみし  
ろきも<sup>セシイ</sup>たをやかならずに見ゆる。殿上人心と  
にかしつく。こなたにうへもわたらせ給て御  
らむす。殿も忍ひて。やりとより北<sup>外</sup>に<sup>任</sup>おはしま  
せは。心にまかせたらするさし。なかきよの  
は。たけともひとしくとのひ。いとみやひか  
に心にくきけはひ。人にをとらすときためら  
る。右宰相中將の。有へきかきりはみなした  
り。ひす<sup>編</sup>まし<sup>流</sup>のふとりとゝのひたるさまとて

さとひたりと。人ほゝ忍むなりし。はてに藤宰  
相のおもひなしに。いまめかしく心となり。か  
しつき十人あり。又ひさしのみすおろして。こ  
ほれいてたる衣のつまとも。したりかほにお  
もへるさまともよりは。見ところまさりて。ほ  
かけにみえわたさる。とらの日のあした。殿上  
人まいる。常のとくなれと。月比にさとひにけ  
るにや。わか人たちの。めつらしとおもへるけ  
しきなり。さるはすれる衣もみえすかし。その  
夜さり。春宮のすけ<sup>後</sup>め<sup>二</sup>して<sup>任</sup>薰物賜ふ。大きやか  
なるはこ一つに。たかう入させたまへり。おほ  
りへは。とのゝうへそつかはしける。そのよは  
お前の心みとか。うへにわたらせ給て御覽す。  
わか宮おはしませは。うちまさしのゝしる。常  
にことなるこさちす。物うければしはしやす  
らひ。ありさまにしたかひて。まいらむとおも  
ひてゐたるに。こひやうゑ。こ兵部なともすひ



つにゐて。いとせはければ。はか／＼しう物も  
みえ侍らすなといふほとに。殿おはしまして。  
なとて。かうてすくしてはゐたる。いさもろと  
もにと。せめたてさせ給て。心にもあらずまう  
のほりたり。舞姫とものいかに苦しからんと  
見ゆるに。おはりのかみのそ。心ちあしかりて  
ゐぬ。夢のやうに見ゆる物かな。ことはてゝ  
おりさせ給ぬ。この比のきんたちは。たゝ五節船頭  
所のおかしきをかたる。すたれのはしもか  
うさへ。心々にかはりてゐてゐたる。かしらつ  
きもてなしけはひなとさへ。さらにかよはす。  
さま／＼になんあると。きゝにくゝかたる。か  
からぬ年たに。御らむの日のわらはのこゝち  
ともは。をろかならざる物を。ましていかなら  
むなと。心もとなくゆかしきに。あゆみならひ  
つゝいてきたるは。あいなくむねつふれて。い  
とをしくこそあれ。さるは。とりわきてふかう

心よすへきあたりもなしかし。我も／＼と。さ  
はかり人のおもひて。さしいてたるとなれは  
にや。めうつりつゝ。をとりまさりけさやかに  
もみえわかす。いまめかしき人のめにこそ。ふ  
とものゝけちめも見とるへかめれ。たゝかく  
こもりなきひる中イに。扇もはか／＼しくもた  
せず。そこらの公達の立ましりたるに。さても  
ありぬへき身のほと。心もちひといいなから。  
人にをとらしとあらそふ心ちも。いかにおく  
すらんと。あいに／＼かたはらいたきそ。かたく  
なしきや。たはのかみ舟渡のわらはの。あをいしら  
つるはみのかさみ。おかしと思ひたるに。藤宰  
相のわらはゝ。赤色をきせて。しもつかへのか  
らきぬに。青色ををしかへしきたる。ねたけな  
り。わらはのかたちも。ひとりはいとまほには  
みえず。宰相の中將はわらはいとそひやかに。  
かみともおかし。みなこきあこめに。うはきは



心々なり。かきみは五へなる中に。おはりはた  
たえひそめをさせたり。中々ゆへくしく心  
あるさまして。物の色あひ。つやなど。いとす  
くれたる。あふきとるとて。六位のくら人とも  
よるに心となけやるこそ。やさしきものから。  
女にはあらぬかとみゆれ。われらをかれかや  
うにて出居よとあらは。又さてもさまよひあ  
りくはかりにそかし。かうまでたちいてんと  
はおもひかけきやは。されと。めにみすあさま  
しきものは。人の心なり。されは今より後のお  
もなさは。たつたれになれすぎ。ひたおもてに  
ならむもやすしかしと。身のありさまの。夢の  
やうにおもひつづけられて有ましきことにさ  
へ思ひかゝりて。ゆくしくおほゆれは。めとま  
ることも。れいのなかりけり。侍従宰相の五せち  
つほね。宮のおまへのたつ見わたすはかりな  
り。たてしとみのかみより。をとにきくすたれ

のはしもみゆ。人の物いふこそもほのきこゆ。  
かの女御の御かたに。左京むまといふ人なむ。  
いとなれてましりたると。宰相中將むかしみ  
しりてかたり給を一夜かのかひつくろひにて  
ゐたりし。ひんかしなりしなん。左京と源少將  
も見しりたりしを。ものゝよすかありて。つた  
へ聞たる人々おかしうもありけるかなといひ  
つ。いさしらすかほにはあらし。むかし心に  
くたちてみならしけんうちわたりを。かゝる  
さまにてやは出たつへき。忍ふとおもふらん  
を。あらはさんのこゝろにて。おまへにあふき  
ともあまたさふらふ中に蓬萊つくりたるをし  
もえりたる心はへ有へし。みしりけんやは。は  
このふたにひろけてひかけをまろめて。そら  
いたるくしとも。しろきものいみしく。つまつ  
まをゆひそへたり。すこしさたすきたまひに  
たるわたりにて。くしのそりさまなんなをな

をしきと。君たちの給へは。いまやうのさまあ  
しきまで。つまもあはせたるそらしさまして。  
くろほうをしまろかして。ふつゝかにしり  
さきゝりて。しろきかみ一かさねにたてふみ  
にしたり。たいふのおもとしてかきつけさす。  
後拾遺  
おぼかりし豊の宮人さしわきてしるき日かけを哀とそみし  
おまへには。おなしくはおかしきさまにしな  
して。扇なともあまたこそとの給はすれと。お  
とろおとろしからむも。このさまにあはさる  
へし。わさとかはすにては。忍ひやかに氣色  
はませ給へきにも侍らす。これはかゝるわた  
くしとにこそと聞えさせて。かほしるかるま  
しきつほねの人して。これ中納言の御使。又。女御といふ御と  
のより左京の君に奉らんと。たかやかにさし  
をきつ。引とゝめられたらんこそ。見くるしけ  
れとおもふに。はしりきたり。女のころにて。  
いつこより入きつるとゝふなりつるは。女御

とのゝとうたかひなく思ふなるへし。なには  
かりのみゝとゝむるともなかりつるひころな  
れと。五せちすきぬとおもふ内わたりのけは  
ひ。うちつけにさうゝしき。小忌をみの日の夜の  
調業てうかくは。けにおかしかりけり。わかやかな  
る殿上人など。いかになこりつれゝならん。  
明子たか松のこきんたちさへ。こたみいらせ給し  
夜よりは。女房ゆるされてまもなくとをりあ  
りき給へは。いとはしたなけなりや。さたすき  
ぬるを。かうにてそかくろふる。五せちこひし  
なとも。ことにおもひたらず。やすらひ。こ兵  
衛なとや。その裳のすそかきみにまつはれて  
そ。こ鳥のやうにさへつり。されおはさうすめ  
る。臨時の祭の使は。とのゝ權中將教通の君なり。  
その日は御物いみなれは。殿御とのゝせさせ  
給へり。上達部も。まひ人の公達もこもりて。  
夜ひとよ。ほそ殿わたり。いとものさはかしき

公季  
けはひしたり。つとめて。うちのおほいとの、御隨身。このとの、みすいしんにさしとらせにける。ありしはこのふたに。しろかねのさうしはこをすへたり。かゝみをしいれて。ちんのくし。白かねのかうかいなど。使のきみのひんかゝせ給へきけしきをしたり。はこのふたに。あしてにうちいでたるは。日かけの返事なめり。文字二つ落てあやうし。この心たかひても有かなと見えしは。かのおとの。宮よりと心え給て。かうことくしくしなし給へるなりけりとそきゝ侍りし。はかなかりしたはふれわさを。いとをしうことくしうこそ。殿のうへも。まうのほりて物御らんす。使のきみの藤かさして。いとものくしくおとなひたまへるぞ。くらの命婦は舞人にはめも見やらず。打まもりくそなきける。御物いみなれは。御社より。丑の時にそかへりまいれは。御

かくらなともさまはかりなり。かねときか。こぞまてはいとつきくしけなりしを。こよなくをとろへたるふるまひぞ。みするまじき人の上なれと。あはれにおもひよそへらるゝとおほく侍る。しはすの廿九日にまいる。はしめて参りしも。こよひのことぞかし。いみしくも夢路にまとはれしかなと思ひ出れは。こよなく立なれにけるも。うとましの身のほとやおほゆ。夜いたうふけにけり。御物いみにおはしましけれは。おまへにもまいらす。心ほそくて打ふしたるに。まへなる人々の。うちわたりは。猶いとけはひことなりけり。さとにては。今はねなましものを。さもいさときくつしけさかなと。色めかしくいひゐたるをきゝて。  
三十一  
年暮て我世更行風の音に心のうちの冷しき哉  
とぞ獨こたれし。つこもりのよ。ついなはいととくはてぬれは。はくろめつけなと。はかなき

つくろひともすとて。うちとけるたるに。辨の内侍きて。物かたりして臥給へり。たくみのくらは人は。なけしのしもにゐて。あてきか。ぬふものゝかさね。ひねりをしへなと。つく／＼としゐたるに。おまへのかたに。いみしくのゝしる。内侍をこせと。とみにもおきす。人のなきさはくをとのきこゆるに。いとゆゝしく。物も覺えす。ひかとおもへとさにはあらず。たくみのきみ。いさ／＼とさきにをしたてゝ。ともかうも宮しもおはします。先まいりて見奉らんと。内侍をあらゝかにつきおとろかして。三人ふるふ／＼。あしもそらにてまいりたれば。はたかなる人そふたりゐたる。ゆけひ。こ兵部なりけり。かくなりけりとみるに。いよ／＼むくつけし。みつし所の人も。みないて。宮のさふらひも。たきくちも。なやらひはてけるまゝに。みなまかてゝけり。てをたゝきのゝしれ

と。いらへする人もなし。おもものやとりのとしをよひいてたるに。殿上に兵部丞とくら人よへよへと。はちも忘れてくちつからいひたれは。たつねけれとまかてにけり。つらきとかきりなし。式部丞すけなりを参りて。ところ／＼のさしあふらとも。たゝひとりさしいれられてありく。人々ものおほえすむかひゐたるもあり。うへより御つかひなとあり。いみしうおそろしうこそ侍しか。おさめとのにある御そとりいてさせて。この人々にたまふ。ついたちのさうそくはとらさりければ。さりけもなくてあれと。はたかすかたはわすられすおそろしきものから。おかしうともいはず。こといもしあへす。正月一日。かん日なりければ。わか宮の御いたゝきもちゐることゝまりぬ。三日そまうのほらせ給ふ。としの御まかなひは大納言の君。さうそくついたちの日は。くねな



る。えひそめ。からきぬは赤色。地すりの裳。  
二日。かうはいのをりもの。かいねりはこきあ  
を色のから衣。いろすりの裳。三日は唐綾の櫻  
かさね。から衣はすはうのをりもの。かいねり  
は。こきをきるひは。くれなゐはなかに。紅を  
きる日は。こきをなかなにと。れいのとなり。  
もえきすはう。山吹のこきうすき。こうはいう  
す色など。常の色々をひとたひにむつはかり  
とうはきとぞ。いとさまよきほとに侍。さいし  
やうのきみの御はかしとりて。とのゝいたき  
奉らせ給へるに。つゝきてまうのほり給ふ。く  
れなゐのみへいつへ〜とませつゝ。おなし  
色のうちたる七へにひとへをぬひ。かさねか  
さねませつゝ。うへにおなし色のかたもんの  
五へうちき。えひそめのうきもむの。かたきの  
もんををりたる。ぬひさまさへかと〜し。み  
へかさねの裳。赤色のから衣ひとへのもんを

をりてしまも。いとからめいたり。いとおか  
しけに。かみなともつねよりつくろひまして。  
やうたいもてなしらう〜しくおかし。たけ  
たちよきほとに。ふくらかなる人のかほ。いと  
こまかににほひおかしけなり。大納言の君は。  
いとさゝやかにちいさしといふへきかたなる  
人の。しろうつくしけに。つふ〜とこえた  
るか。うはへはいとそひやかに。かみたけに三  
すんはかりあまりたる。すそつきかんさしな  
とぞ。すへてにるものなく。こまやかにうつく  
しきかほも。いとらう〜しく。もてなしな  
と。らうたけになよひか也。せんしのきみは。  
さゝやけ人の。いとほそやかにそひへて。かみ  
のすちこまやかにきよらにて。おひさかりの  
すゑより一尺はかりあまり給へり。いと心は  
つかしけに。きはもなくあてなるさまし給へ  
り。物よりさしあゆみていておはしたるも。わ



つらはしう心つかひせらるゝこゝちす。あてなる人はかうこそあらめと。心さまものうちなたまへるもおほゆ。この次に。人のかたちをかたりきこえさせは。物いひさかなくや侍るへき。たゞいまおや。さしあたりたる人のとはわつらはし。いかにそやなと。すこしもかたほなるはいひ侍らし。宰相の君は。北野三位輔正のよ。ふくらかに。いとやうたいこまめかしう。かとくしきかたちしたる人の。うちゐたるよりも。みもてゆくに。こよなくうちまさりらうらうしくて。くちつきにはつかしけさも。にほひやかなることこそひたり。もてなしなと。いとひしくはなやかにそみえ玉へる。心さまもいとめやすく。心うつくしき物から。又いとはつかしき所そひたり。こ少將の君は。そこはかとなくあてになまめかしう。二月はかりのしたり柳のさましたり。やうたいいとうつ

くしけに。もてなし心にくゝ。心はへなとも。わか心とはおもひとるかたもなきやうにものつゝみをし。いとよをはちらひ。あまり見くるしきまでこめい給へり。はらきたなき人。あしさまにもてなし。いひつくる人あらは。やかてそれにおもひいりて。身をもうしなひつへく。あへかにわりなきところつい給へるぞ。あまりうしろめたけなる。宮の内侍そ。又いときよけなる人。たけたちいとよきほとなるか。ゐたるさますかたつき。いとものくしく。いまめいたるやうたいにて。こまかにとりたてゝ。おかしけともみえぬ物から。いとものきよけにうゐくしく。なかたかきかほして。色のあはひ白きなと人にすぐれたり。かしらつき。かんさし。ひたひつきなとそ。あな物きよけと見え。はなやかにあいきやうつきたる。たゞありにもてなし。心さまなともめやすく。露はか

り何方さまにも。うしろめたいかたなく。すへてさこそあらめと。人のためしにしつへき人からなり。えんぬかりよしめくかたはなし。式部のおもとは。をとうとなり。いとふくらけさすきて。こえたる人の。色いとしろくにほひて。かほそいとこまかによしはめる。かみもいみしくうるはしくて。なかくはあらさるへし。つくろひたるわさして。宮にはまいる。ふとりたるやうたいの。いとおかしけにも侍しかな。まみひたひつきなと。まことにきよけなり。うちゑみたる。あいきやうもおほかり。わかうとの中に。かたちよしと思へるは。小たいふ。源式部。小たいふはさゝやかなる人の。やうたいといと今めかしきさまして。かみうるはしく。もとはいとこちたくて。たけに一尺よあまりたりけるを。おちほそりて侍り。かほもかと／＼しう。あなおかしの人やとそみえて侍。かたち

はなをすへき所なし。源式部は。たけよきほとにそひやかなるほとにて。かほこまやかに。見るまゝに。いとおかしく。らうたけなるけはひ。ものきよくかはらかに。人のむすめとおほゆるさましたり。こ兵衛丞なども。いと清けに侍り。それらは。殿上人のみのこすすくなか。たり。たれもとりはつしてはかくれなれと。人くまをもよういするに。かくれてそ侍るかし。宮木の侍従こそ。いとこまかにおかしけなりし人。いとちいさくほそく。猶わらはにてあらせまほしきさまを。心とおひつきやつしてやみ侍にし。かみのうちきにすこしあまりて。すゑをいとはなやかにそきて參侍しそ。はてのたひなりける。かほもいとよかりき。五節の辨能仲といふ人侍り。平中納言のむすめにして。かしくと聞えしか。ゑにかいたるかほして。ひたひいたうはれたる人の。ましりいたうひき

く。かほもこゝはと見ゆる所なく。いとしろ  
う。手つき。かいなつき。いとおかしけに。かみ  
は。みはしめ侍し春は。たけに一尺はかりあま  
りて。こちたくおほかりけなりしか。あさまし  
うわけたるやうにおちて。すそもさすかにほ  
そらす。なかさはすこしあまりて侍めり。こ  
まといふ人。かみいとなく侍りし。むかしは  
よきわかうと。いまは琴柱に膠さすやうにて  
こそ。さとゐして侍なれ。かういひくゝて。心  
はせそかたう侍るか。それもとくゝに。い  
とわろきもなし。又すぐれておかしう心おも  
く。かとゆへもよしも。うしろやすさも。みな  
くするとはかたし。さま／＼いつれをかとる  
へきとおほゆるそ多く侍る。さもけしからず  
も侍るゝもかな。齋院遣子に。中將の君といふ人  
侍るなり。聞侍るたよりありて。人のもとにか  
きかはしたる文を。みそかに人とりてみせ侍

し。いとこそえんに。われのみ世にはものゝ  
ゆへしり。心ふかきたくひはあらし。すへてよ  
の人は。こゝろもきもゝなきやうに思て侍る  
へかめる。見侍しにすゝろに心やましう。おほ  
やけはらとか。よからぬ人のいふやうに。に  
くゝこそおもふ給へられしか。文かきにもあ  
れ。歌などのおかしからんは。わか院より外に  
誰かみしり給ふ人のあらん。よにおかしき人  
のおひいては。わか院こそ御らむしるへけ  
れなとそ侍る。けにことはりなれと。わか方さ  
まのことをさしもいはゝ。さい院よりいてき  
たる歌の。すぐれてよしと見ゆるも。ことに侍  
らす。たゝいとおかしう。よし／＼しうはおほ  
すへかめる所のやうなり。さふらふ人をくら  
へていとまんには。このみ給ふるわたりの人  
に。かならずしもかれはまさらしを。つねに  
いりたちてみる人もなし。おかしきゆふ月よ。

ゆへある有明。花のたより。郭公のたつね所に  
まいりたれば。院はいと御心のゆへおはして。  
所のさまは。いと世はなれかむさひたり。又  
まざるゝこともなし。うへにまうのほらせ給  
ふ。もしは殿なむまいり給。御とのゐなるな  
と。ものさはかしきおりもましらす。もてつ  
け。をのつからしりこのむ所となりぬれば。  
えんなることゝもをつくさん中に。なにのあ  
ふなきいひすくしをかはし侍らん。かういと  
むもれ木を折いたる心はせにて。かの院に  
ましらひ侍らは。そこに。しらぬ男に出あ  
ひ。ものいふとも。人のあふなき名を。いひお  
ほすへきならすなど。心ゆるかして。をのつか  
ら。なまめきならひ侍りなんをや。ましてわか  
き人のかたちにつけて。としのよはひにつゝ  
ましきことなきか。をのか心に入てけさうた  
ち。ものをいはんと。このみたちたらんは。

こよなう人にをとるも侍るまし。されとうち  
わたりにて。明くれ見ならしきしろひ給ふ  
女御きさいおはせす。その御かたかのほそ殿  
と。いひならふる御あたりもなくおとこも  
女も。いとましきこともなきにうちとけ。宮の  
やうとして色めかしきをは。いとあはしくし  
とおほしめいたれば。すこしよろしからんと  
思ふ人は。おほろけにていてゐ侍らす。ゝろ  
やすくものはちせず。とあらんかゝらむのな  
をもおしまぬ人。はたことなる心はせのふる  
もなくやは。たゝさやうの人の。やすきまゝに  
たちよりてうちかたらへは。中宮の人。うもれ  
たり。もしはよういなしなとも。いひ侍るな  
るへし。上らう中らうのほとそ。あまりひき  
いり。<sup>上手殿</sup>さうすめきてのみ侍るめる。さのみして  
宮の御ためものゝかきりにはあらず。見くる  
しとも見侍り。これらをかくえりて侍るや



うなれと。人は皆とりくにて。こよなうをと  
りまさるとも侍らす。そのととければ。かのと  
をくれなとそ侍るめるかし。されとわかうと  
たに。おもりかならんと。まめたち侍るめる。  
世にみくるしうされ侍らむも。いとかたはな  
らん。たゝ大かたを。いとかなさけなからす  
もかなとみ侍る。されは宮の御心あかぬ所な  
く。らうくしく心にくおはします物を。

あまりものつゝみせさせ給へる御心に。なに  
ともいひいてし。いひ出たらんも。うしろやす  
く。はちなき人は。世にかたわものとおほしな  
らひたり。けに物のおりなと。なかくなるこ  
としいてたる。をくれたるにはをとりたるわ  
さなりかし。ことにふかきよいなき人の。所  
につけて。われはかほなるか。なまひかくし  
きとも。物のおりにいひいたしたりけるを。ま  
たいとおさなきほとにおはしまして。よにな

うかたわなりと。聞しめしおほしゝみにけれ  
は。たゝとなるとかなくてすくすを。たゝめや  
すきことにおほしたる御けしきに。うちこめ  
いたる人のむすめともは。みないとようかな  
ひきこえさせたるほとに。かくならひにける  
とそ心えて侍る。今はやう／＼おとなひさせ  
給まゝに。世のあへきさま。人の心のよきも。  
あしきも。過たるも。をくれたるも。みな御ら  
んししりて。この宮わたりのことを。殿上人も  
なにもめなれて。とにおかしきことなしと。お  
もひいふへかめりと。みなしろしめいたり。さ  
りとて。心にくゝもありはてす。とりはつせは。  
いとあはつけいともいてくる物から。なさけ  
なくひきいれたる。かうしてもあらなんとお  
ほしの給はすれと。そのならひなをりかたく。  
又いまやうのきんたちといふもの。たふるゝ  
かたにて。あるかきりみなまめ人なり。齋院な



とやうの所にて月をも見花をもめつる。ひたふるのえんなること也。をのつからもとめ思ひてもいふらむ。朝夕たちましり。ゆかしけなきわたりに。たゝことをもきゝよせ。うちいひ。もしはおかしきとをいひかけられて。いらへはちなからすすへき人なむ。よにかたくなりたるそ。人々はいひ侍るめる。みつかからえ見侍らぬことなれば。えしらすかし。かならす人のたちより。はかなきいらへをせんからに。にくいことをひきいてんをあやしき。いとよう。さてもありぬへきことなり。これを人の心有かたしとはいふに侍めり。なとかかならすしも。おもにくゝひき入たらんかかしこからむ。又なとて。ひたゝけてさまよひさしいつへきそ。よきほとに。おり／＼の有さまにしたかひてもちひんことの。いとかたきなるへし。まつは宮の大夫まいり給て。けいせさせ給へ

きとありけるおりに。いとあへかにこめい給ふ。上らうたちはたいめんし給ふことかたし。又あひても。なにをかはか／＼しくの給ふへくも見えず。ことはのたるましきにもあらず。心のをよふましきにも侍らねと。つゝましかつかしとおもふに。ひかともせらるゝを。あいなし。すへてきかれしと。ほのかなるけはひをも見えし。ほかの人は。さそ侍らさなる。かかるましらひなりぬれば。こよなきあて人も。みなよにしたかふなるを。たゝひめきみなからのもてなしにそ。みなものし給ふ。下らうのいてあふを。大納言こゝろよからすとおもひ給たなれば。さるへき人々さとにまかて。つはねなるも。わりなきいとまにさはるおり／＼は。たいめんする人なくて。まかて給時も侍なり。其ほかのかんたちめ。宮の御かたにまいりなれ。物をもけいせさせ給は。をの／＼の心よ

せの人。をのつからとりとりにほのしりつゝ。その人ないおりは。すさまじけにおもひて立つる人々の。とにふれつゝ。この宮わたりのこと。うもれたりなといふへかめるもとはりに侍る。齋院わたりの人も。これをおとしめ思ふなるへし。さりとてわか方のみところあり。ほかの人はめも見しらし。物をもきゝとゝめしとおもひあなつらんそ。又わりなき。すへて人をもとくかたはやすく。我こゝろをもちひんことはかたくい<sup>かたかへいわさ</sup>わさを。さはおもはて。まつわれさかしに。人をなきになし。よをそしるほとに。心のきはのみこそ。見えあらはるめれ。いと御らんせさせまほしう侍し文かきかな。人のかくしをきたりけるを。ぬすみてみそかに見せて。とりかへし侍にしかは。ねたうこそ。いつみしきふといふ人こそ。おもしろうかきかはしける。されといつみはけしからぬか

たこそあれ。うちとけてふみはしりかきたるに。そのかたのさえある人。はかないと葉のにほひも見え侍めり。うたはいとおかしきこと。ものおほえ。かたの<sup>うた</sup>とはり。まことの歌よみさまにこそ侍らさめれ。くちにまかせたることも。かならすおかしき一ふしの。めにとまるよみそへ侍り。それたに人のよみたらん歌。なむしことはりゐたらんは。いてや。さまで心はえし。口にいうたのよまるゝなめりとそ見えたるすちに侍かし。はつかしけのうたよみやとは覺え侍らす。たんはのかみの北のかたを。は。宮殿などのわたりには。まさひら衛門とそいひ侍る。ことにやんとなきほとならねと。まとにゆへゝしく。歌よみとて。よろつのとにつけてよみちらさねと。聞えたるかきりは。はかなき折ふしのとも。それこそはつかしきくちつきに侍れ。やゝもせは。こしはなれぬは

かりおれかゝりたるうたをよみいて。えもいはぬよしはみことしても。われかしこにおもひたる人。にくゝも。いとをしくも。おほえ侍るわさなり。清少納言こそ。したりかほにいみしう侍りける人。さはかりさかしたち。まなかきちらして侍るほとも。よく見れば。またいたへぬことおほかり。かく人にとならんとおもひこのめる人は。かならず見をとりし。行すゑうたてのみ侍れば。えんになりぬる人は。いとすこうすゝろなるおりも。物のあはれにすすみ。おかしきことも見すくさぬほとに。をのつから。さるましくあたなるさまにもなるに侍へし。そのあたになりぬる人のはて。いかてかはよく侍らん。かくかたゝにつけて。一ふしのおもひいてとるへきことなくて。すくし侍ぬる人の。とに行すゑのたのみもなきこそ。なくさめおもふかたゝに侍らねと。心すこう

もてなす身そとたに思ひ侍らし。その心なをうせぬにや。物おもひまさる秋の夜も。はしに出ゐてなかめは。いとゝ月やいにしへをめてけんとみえたる有さまを。もよほすやうに侍るへし。世の人のいむといひ侍とかをも。かならずわたり侍なんと。はゝかられて。すこしおくにひき入てぞ。さすかに心のうちには。つきせすおもひつゝけられ侍。風の涼しき夕くれ。きゝよからぬひとりことををかきならしては。なけきくはゝると聞しる人やあらんと。ゆゝしくなとおほえ侍るこそ。をこにもあはれにも侍けれ。さるは。あやしうくろみすゝけたるさうしに。さうのと和音こんしらへなから心に入て。雨ふる日ことちたうせなともいひ侍らぬまゝに。ちりつもりて。よせたてたりしつしとはしらのさまに。くひさし入つゝ。ひはも左右にたて侍り。おほきなるつしひとよる

ひに。ひまもなくつみて侍もの。ひとつにはふる歌ものかたりの。えもいはすむしのすににたる。むつかしくはいちは。あけてみる人も侍らす。かたつかたに。ふみともわさとをきかさねし。人も侍らすなりにしのち。てふる人もとになし。それらを。つれ／＼せめてあまりぬる時。ひとつふたつひき出て見侍るを。女房あつまりて。おまへはかくおはすれと。御さいはひはすくなきなり。なてう女かまんなふみはよむ。むかしは經よむをたに。人はせいしきと。しりうこちいふをきく侍るにも。物いみける人の。ゆく末いのちなかゝるめる。よしともみえぬためしなりと。いはまほしく侍れと思ひくまなきやうなり。とはたさもあり。よろつのと。人によりてこと／＼なり。ほこりかにきらくしく。心地よけにみゆる人有。よろつれ／＼なる人の。まさるゝことなきまゝ

に。古きほんこひきさかし。をこなひかちにくちひ／＼らかし。ずゞのをとたかきなど。いと心つきなく見ゆるわさなりと思給へて。心にまかせつへきことをさへ。わかつかふ人のめには、かり心につゝむ。まして人の中にましりては。いはまほしきとも侍れと。いてやともほえ。心うましき人には。いひてやくなかるへし。物もときうちし。我はと思へる人の前にては。うるさければ。ものいふこともものうく侍。ことにいとしも物のかた／＼えたる人がたし。たゝわか心のたてつるすちをとらへて。人をはなきになすめり。それこゝろより外の我おもかけをはつとみれと。えさらすさしむかひ。ましりゐたることたにあり。しかかさへもとかれしと。はつかしきにはあらねとむつかしくおもひて。はけられたる人に。いとゝなりはてゝ侍れは。かうはをしはから



さりき。いとえんにはつかしく。人に見えにく  
けに。そはくしきさまして物かたりこのみ。  
よしめき歌かちに。人を人ともおもはず。ねた  
けに見おとさんものとなん。みな人々いひお  
もひつゝにくみしを。みるにはあやしきまで  
おいらかに。こと人かとなんおほゆるとそ。み  
ないひ侍るにはつかしく。人にかうおひらけ  
物と。見おとされにけるとは思ひ侍れと。た  
たこれぞ。わか心とならひもてなし侍ありさ  
ま。宮のおまへも。いとうちとけてはみえし  
となんおもひしかと。人よりけにむつまじう  
なりにたるこそと。の給はするおりく侍り。  
くせくしくやさしたち。はちられ奉る人に  
も。そはめたてられて侍らまし。さまよう。す  
へて人は。おいらかにすこし心をきて。のとや  
かにおちるぬるをもととしてこそ。ゆへもよ  
しも。おかしくうしろやすけれ。もしは。いろ

めかしくあたくしけれと。本性の人からく  
せなく。かたはらのため見えにくきませす  
たになりぬれは。にくうは侍るまし。我はとく  
すしく。くちもちけしきことくしくなりぬ  
る人は。たちゐにつけて。われよういせらるゝ  
ほとに。その人にはめとゝまる。めをしとゝめ  
つれは。かならずものをいふこと葉の中にも。  
きてゐるふるまひ。たちていくうしろてにも。  
かならずくせは見つけらるゝわさに侍り。物  
いひすこしうちあはすなりぬる人と。人のう  
へうちおとしめつる人とは。まして。みゝも  
めも。たてらるゝわさにこそ侍へけれ。人のく  
せなきかきりは。いかてはかなきことのはを  
もきこえしとつゝみ。なけのなさけつくらま  
ほしう侍り。人すゝみて。にくいことしいてつ  
るは。わろきとをあやまちたらむも。いひわら  
はんに。はゝかりなうおほえ侍り。いと心よか

らん人は。我をにくむとも。われは猶人を思ひ  
うしろむへけれと。いとさしもえあらず。しひ  
ふかうおはする佛たに。三ほうをそしる罪は。  
淺しとやはとき給ふなる。まいてかはかりに  
にこりふかき世の人は。猶つらき人はつらか  
りぬへし。それを<sup>我イ</sup>まさりていはんと。いみし  
きことのはをいひつけ。むかひぬてけしきあ  
しうまもりかはすとも。さはあらずもてかく  
し。うはへはなたらかなるとのけちめそ。心の  
ほとはみえ侍るか。し。さるものないしといふ  
人はへり。あやしうすゝろに。<sup>ライナシ</sup>よからす思ひ  
けるも。えしり侍らぬ。心うきしりうとのおほ  
うきこえ侍し。うちのうへの。源氏の物語人に  
よませ給ひつゝ。聞しめしけるに。この人は日  
本紀をこそよみ給へけれ。まことにさえ有へし  
とのたまはせけるを。ふとをしはかりに。いみ  
しくなむさえあると。殿上人なとにいひちら

して。日本紀の御つほねとそつれたりける。い  
とおかしくそ侍る。このふるさとの女のまへ  
にてたに。つゝみ侍るものを。さる所にてさえ  
さかしいて侍らむよ。この式部丞<sup>堀</sup>といふ人の  
わらはにて。ふみよみ侍しとき聞ならひつゝ。  
かの人はをそうよみ。とりわするゝ所をも。  
あやしきまでそさとく侍しかは。ふみに心い  
れたるおや<sup>葛</sup>は。くちおしう。おのこゝにてもた  
らぬこそさいはひなかりけれとそ。つねにな  
けかれ侍し。それを男たにさえかりぬる人は。  
いかにそや。はなやかならすのみ侍めるよと。  
やうく人のいふも聞とめてのち。いちとい  
ふもじをたにかきわたし侍す。いとてつゝに  
あさましく侍り。よみしふみなといひけん物。  
めにもとゝめすなりて侍しに。いよくかゝ  
ると聞侍りしかは。いかに人もつたへきゝて  
にくむらんと。はつかしきに。御屏風のかみに

かきたるをたに。よまぬかほをし侍しを。宮  
のおまへにて。文集の所々よませ給なとして。  
さるさまのと。しろしめさせまほしけにおほ  
いたりしかは。いとしのひて。人のさふらはぬ  
ものゝひまゝに。をとゝしの夏ころより。樂  
府といふゝみ二くわんをぞ。しとけなく。かう  
をしへたて聞えさせてはへるも。かくし侍り。  
宮もしのひさせ給しかと。殿もうちも。けしき  
をしらせ給て。御ふみともをめてたうかゝせ  
給てぞ。殿は奉らせ給ふ。まにかうよませ給  
なとする。はた。かのものいひの内侍はえさ  
かさるへし。しりたらいかにそしり侍らむ  
ものと。すへて世中ことわさしけく。うきも  
のに侍りけり。いかにいまは。こといみし侍ら  
し。人。といふともかくいふとも。たゝあみた  
佛にたゆみなくきやうをならひ侍らむ。世の  
いとはしきとは。すへて露はかりこゝろもと

まらすなりにて侍れは。ひしりにならん。け  
たいすへうも侍らす。たゝひたみちにそむき  
ても。雲にのほらぬほと。たゆたふへきやう  
なん侍へかなる。それにやすらひ侍なり。年  
もはたよきほとになりもてまかる。いたうこ  
れよりおいほれて。はためつらにそきやうよ  
ます。心もいとゝたゆさまさり侍らん物ぞ。  
心ふかき人まねのやうにはへれと。今はたゝ。  
かゝるかたのとをぞおもひ給ふる。それつみ  
ふかき人はまたかならずしもかなひ侍らし。  
さきの世しらるゝこのみおほく侍れは。よろ  
つにつけてそかなしく侍る。御ふみにえかき  
つゝけ侍らぬとを。よきもあしきも。世にある  
と。身のうへのうれへにても。のこらす聞えさ  
せをかまほしう侍ぞかし。けしからぬ人を思  
ひきこえさすとても。かゝるへきことやは侍。  
されと。つれ／＼におはしますらん。またつれ

つれの心を御らんせよ。又おほさむことの。い  
とかうやくなしことおほからすとも。かゝせ  
給へ。みたまへん。ゆめにてもちり侍らはいと  
いみしからん。またくもおほくそ侍る。この  
比。ほんこともみなやりやきうしなひ。ひいな  
などの屋つくり。この春し侍にしのち。人の  
ふみも侍らす。かみにわさとかゝしとおもひ  
侍ぞ。いとやつれたる。ことわろきかたには侍  
らす。と更に御らんしては。とう給はらん。え  
よみ侍らぬ所ところ。もしおとしそ侍らん。そ  
れはなにかは。御らんしももらさせ給へかし。  
かく世の人とのうへをおもひて。はてにとち  
め侍れは。身を思ひすてぬ心の。さもふかう侍  
るへきかな。なにせんとにか侍らむ。十一日の  
あかつき。御堂へわたらせ給ふ。御車にはと  
のうへ。人々は舟に乗てさしわたりけり。そ  
れにはをくれて。ようさりまいる。教化をこな

ふところ。山寺のさはうゝつして。大さん悔  
す。しらいたうなど。おほうゑにかいて。けう  
しあそひ給ふ。上達部おほくはまかて給て。  
すこしそとまり給へる。後夜の御たうしけう  
化とも。説相みな心々。廿人なから。宮のかく  
ておはしますよしを。こちかひきしなことは  
たえて。わらはるゝこともあまたあり。とはて  
て。殿上人舟にのりて。みなこきつゝきてあ  
そふ。みたうのひんかしのつま。北むきにを  
しあけたるとのまへ。池につくり。おろしたる  
はしのかうらんをゝさへて。宮の大夫はる給  
へり。殿あからさまにまいらせ給へるほと。  
宰相の君など物かたりして。おまへなれは。う  
ちとけぬようい。内も外もおかしきほとなり。  
月おほろにさし出て。若やかなる君達。今様う  
たうたふも。ふねにのりおほせたるを。わか  
うおかしく聞ゆるに。大くら卿のおふなく、



道長  
たゞく人ありときけと。おそろしさに音もせ  
てあかしたるつとめて。

新勅  
よもすからくぬたよりけに泣々を櫛のとくちに叩侘つる

かへし。

同  
只ならしとはかり叩く水鷄故あけてはいかに悔しからまし  
ことし正月三日まで。宮たちの御いたゞきも

寛弘七  
ちるに。日々さまうのほらせ給ふ。御ともに。

みな上臈もまいる。左衛門のかみいたい奉り

給て。殿もちるはとりつきて。うへに奉らせ

給。ふたまの東のとにむかひて。上のいたゞか

せたてまつらせ給ふなり。おりのほらせ給き

しき。見ものなり。大宮はのほらせ給はす。こ

としのついたり。御まかなひ宰相の君。れいの

ものゝ色あひなど。ことにいとおかし。藏人は

たくみひやうこつかうまつる。かみあけたる

かたちなところ。御まかなひはいとことにみ

え給へ。わりなしや。くすりの女官にてふやの

ましりて。さすかに聲うちそへんもつゝまし

きにや。忍ひやかにてゐたる。うしろてのおか

しうみゆれは。みすのうちの人も。みそかにわ

らふ。舟のうちにや。おいをはかこつらむとい

ひたるを聞つけ給へるにや。大夫。徐福文成誑

誕おほしと。うちすしたまふ。こゑもさまも。

こよなういまめかしくみゆ。池のうき草とう

たひて。ふえなと吹あはせたる。曉かたの風の

けはひさへそ心ことなる。はかないことも。所

から折からなりけり。源氏の物語おまへにあ

るを。とのゝ御らんして。れいのすゝろこと

ともいてきたるづいてに。むめのえたにしか

れたるかみにかゝせ給へる。

すき者と名にし立れば見人のおらて過るはあらしと思ふ

たまはせたれは。

人にまたおられぬ者を誰か此すきものそとは口ならしけん

めさましうときこゆ。わた殿にねたる夜。とを

はかせさかしたち。さひらきゐたり。たうやく  
 くはれる。れいのとゝもなり。二日。宮の大饗  
 はとまりて。臨時客。ひんかしおもてとりはら  
 ひて。れいのことしたり。上達部は。傳大納言。  
 右大將。中宮大夫。四條大納言。權中納言。侍從  
 の中納言。左衛門督。ありくにの宰相。大藏卿。  
 左兵衛督。けん宰相。むかひつゝゐ給へり。源  
 中納言。左兵衛督。左右宰相中將は。なけしの  
 しもに。殿上人の座のかみにつき給へり。わか  
 宮いたきいて奉り給て。れいのことゝもいは  
 せ奉り。うつくしみ。きこえさせ給ふ。うへに。  
 いと宮いたき奉らんと。殿のたまふを。いとね  
 たきことにし給て。あゝとさいなむを。うつく  
 しかりきこえ給て申たまへは。右大將など。け  
 うし聞え給ふ。うへにまいり給て。うへ殿上に  
 出させ給て。御あそひありけり。とのれいの  
 ゑはせ給へり。わつらはしとおもひて。かくろ

へゐたるに。なと。御てゝの。御まへの御あそ  
 ひにめしつるに。さふらはて。いそきまかに  
 ける。ひかみたりなと。むつからせ給へる。さ  
 るは。歌一つつかうまつれ。おやのかはりに。  
 はつねの日なり。よめ／＼とせめさせ給ふ。う  
 ちいてんに。いとかたわならん。こよなからぬ  
 御ゑいなめれは。いとゝ御いろあひきよけに。  
 ほかけはなやかにあらまほしくて。年比。宮の  
 すさましけにて。ひとゝころおはしますを。さ  
 うさうしく見奉りしに。かくむつかしきまで。  
 ひたりみきに見たてまつるこそうれしけれ  
 と。おほとこのもりたる宮たちを。ひきあけ  
 つゝ。み奉りたまふ。野へに小松のなかりせは  
 と。うちすしたまふ。あたらしからんことより  
 も。おりふしの人の有さま。めてたくおほえさ  
 せ給ふ。又の日夕つかた。いつしかとかすみ  
 たる空を。つくりつゝけたる軒のひまなさに

て。たゝわた殿のうへのほとをほのかに見て。  
中つかさのめのと。よへの御くちすさみを  
めてきこゆ。この命婦そ。ものゝ心えて。かと  
かとしくは侍人なれ。あからさまにまかて。二  
の宮の御いかは。正月十五日。その曉まいる  
に。こ少將のきみ。あけはて。はしたなくな  
りたるにまいり給へり。わいのおなし所にゐ  
たり。ふたりのつほねをひとつにあはせて。か  
たみに。さとなるほともすむ。ひとたひにまい  
りては。木丁はかりをへたてにてあり。殿そわ  
たらせ給。かたみにしらぬ人も。かたらはるゝ  
なと聞にく。されとたれもさるうと。し  
きことなれば。心やすくてなん。日たけてま  
うのほる。かの君は。さくらのをりものゝう  
ちき。あかいのから衣。れいのすり裳き給へ  
り。紅梅に。もえき。柳のからきぬ。ものすりめ  
なといまめかしければ。とりもかへつへくそ。

わかやかなるうへ人とも十七人そ。宮の御か  
たにまいりたる。いと宮の御まかなひは橘三  
位。とりつく人。はしには。こ大夫。式部。うち  
には。こ少將。御かと。きさい。みちやうの中  
に。二ところなからおはします。朝日の光あひ  
てまはゆきまてはつかしけなる御まへなり。  
うへは御なをし。こくち奉り。宮はれいのく  
れなるの御そ。こうはい。もえき。柳。山吹の御  
そ。うへにはえひそめのをりものゝ御そ。柳の  
うへしろの御こうちき。もんも色もめつらし  
くいまめかしき奉れり。あなたは。いとけそう  
なれば。このおくに。やをらすへりと。まりて  
ゐたり。中つかさのめのと。宮いたき奉りて。  
御丁のはさまよりみなみさまにゐて奉る。こ  
まかにそは。しくなとはあらぬかたち。  
たゝゆるらかに。ものゝしきさまうちして。  
さるかたに人をしつへく。かと。しきけは

ひそしたる。えひそめのをりものゝこうちき。むもんの青いろにさくらのからきぬきたり。その日の人のさうそく。いつれとなくつくしたるを。袖くちのあはひ。わろうかさねたる人しも。御まへのものとりいるとて。そこらの上達部。殿上人にさしいてゝ。まほられつることとそ。のちに宰相の君なとくちおしかり給めりし。さるはあしくも侍らさりき。たゝあはひのさためたるなり。こたいふはくれなる一かさね。うへにこうはいのこきうすきいつゝをかさねたり。からきぬさくら。源式部はこきに又紅梅のあやそきてはんへるめりし。をり物ならぬをわろしとにや。それあなちのこと。けさうなるにしもこそ。とりあやまちのほのみえたらん。そはめをもえらせ給へけれ。きぬのをとりまさは。いふへきことならず。もちゐまいらせ給ふことゝもはてゝ。御たいなと

まかてゝ。ひさしのみすあくるきはに。うへの女房は。御帳のにしおもてのひのおましに。をしかさねたるやうにて。なみゐたる。三位をはしめて。内侍のすけたちも。あまたまいれり。宮の人々は。わかうとは。なけしのしも。東のひさしの南のさうしはなちて。みすかけたるに上らうはゐたり。み丁のひんかしのはさま。たゝすこしあるに。大納言の君。こ少將のきみゐ給へる所に。たつねゆきて見る。うへは平敷の御座に御物まいりすへたり。おまへの物したるさま。いひつくさんかたなし。すのこに北むきに。にしをかみにて。上達部。左。右。うちのおほいと。春宮大夫。中宮大夫。四條大納言。それよりしもはえみはへらさりき。御あそひあり。殿上人は。このたいのたつみにあたりたるらうにさふらふ。地下はさたまれり。かけまきの朝臣。これかせの朝臣。ゆきよし。と



もまさなとやうの人々。うへに。四條大納言<sup>拍子</sup>はうしとり。頭辨ひは。ことは經孝朝臣。左の宰相中將さうのふえとそ。さうてうのこゑにてあなたうと。つきに。むしろ田。この殿なと<sup>曲</sup>うたふ。こくの物はとりのはきうをあそふ。<sup>外</sup>とのさにも。てうしなとをふく。歌にはうしうちたかへてとかめらる。いせのうみにそありし。右のおとつ。わこんいとおもしろしなと。きつはやし給。されたまふめりし。はてにはいみし

きあやまちの。いとをしきをこそ。見る人の身さへ。ひえ侍しか。御をくりものふえ二。はこにいてとそみえ侍し。

邦高親王

御在判

右以三伏見殿邦高親王御筆之本一書寫一校畢。

右紫式部日記以屋代弘賢藏本書寫以流布印本及扶桑拾葉集校正畢

群書類従卷第三百二十二

日記部三

讃岐典侍日記上

嘉永二

五月の空もくもらはしく田子のもすそもほし  
わふらむと。ことほりも見えさらぬたに。物む  
つかしきころしも。心長閑なる里居に。常より  
もむかし今の事おもひつゝけられて。物あは  
れなれは。はしを見出してみれは。雲のたゝす  
まひそらのけしき。思ひしりかほに。村雲かち  
なるを見るにも。雲井の空といひけんひともの。  
ことほりと見えて。かきくらさるゝ心地をす  
る。のきのあやめの雪にことならず。山ほとゝ  
きすも諸ともに音をうちかたらひて。はかな  
く明る夏之夜なくすきもて。いそのかみふ

りにしむかしの事を思ひいてられて。泪とま  
まらす。思ひ出れは我君堀河につかうまつる事。春  
の花秋の紅葉を見ても。月の曇らぬ空をなか  
め。雪のあした御ともに侍らひて。もろともに  
八年のはる秋つかうまつりし程。常は目出た  
き御事おほく。あしたの御をこなひ。夕の御笛  
の音わすれかたさに。なくさむやと。しいつる  
事ともかきつゝくれは。筆のたちともみえす  
きりふたかりて。硯の水に涙落そひて。水くき  
の跡もなかれあふこゝちして。泪そいとま  
さるやうに。かきなとせんに。まきれなとやす  
るとて書たる事なれは。姨すて山になくさめ

かねられてたへかたくそ。六月廿日の事をかし。堀河内は例さまにもおほしめされさりし御けしき。ともすれはうちふしかちにて。是を人はなやむとはいふなと人々はめもみたてぬと仰られて。世をうらめしけにおほしたりしものを。ことおもらせさせ給はさりしおり。御祈をし。つるに有ける御事をも。ゆつりまいらせらるゝと。我さたにもをよはぬ事さへそおほゆる。かくて七月六日より。御心地大事におもらせ玉ひぬれは。たれも月ころとても。例さまにおほしめしたりつる事は。かたきやうなりつれとも。これかやうにくるしけに見参らする事はなくて過させ給つる。かくおはしませは。いかならんするにかと。むねつふれて思ひあひたり。その比しも上臈たちさはりありてさふらはれず。あるは子うみ。あるは母のいとま。今ひとりとはとうよりもこもりゐて。此二三

年まいられす。御めのとたち。藤三位ぬるみ心ちわつらひて参らす。辨三位は東宮皇太子のはゝもおはしまさて。おひたゝせ給へは。心のまゝにさふらはるへくもなきに。あはせてそれも此ころ。おこり心地にわつらひて。たゝ大貳三位われくして三人そさふらふ。されはたゝあやしの人のわつらふたに。人のいとまいりしたしくあつかふ人おほくほしきに。是はまして。ほし同イ日のくるゝまゝに。たへかたけにおほしめしたれは。院白河にかくと案内申さする。おとろかせ給ひて。ちかくて御ありさまきかんとて。俄に北の陣に御幸ありてと奏す。かくくるしうおほしめしたれは。おほとなふら例よりもちかく参らせなとする程にたゝ消にきえ入せ給ひぬ。あないみしとなきあひて。内大臣雅實忠實關白殿まいりて。つと侍らはせ給ふ。大かたのゝしりあひたり。そう増よ僧正雲らい頼朝き基律師増そうけん

律師なと召にやりつゝ。らいき律師すなはち  
参りて。經よみ佛くときまいらせらるゝほと  
に。しはしはかりありて。打身しろきさせ給  
ふに。今少しのゝしりあひぬ。經よまるゝをき  
かせ給ひて。今はやく<sup>益</sup>あらし。たゝかりうつせ  
よと仰られ出たれは。物つくものなとめして。  
ゐて参りうつさるゝ。おひたゝしさはをしは  
かるへし。うつりて其事とはいはて。かはめき  
のゝしるさまいとおそろし。すこし御かゆな  
とまいらすれは。めしなとすれは。嬉しさは何  
にかはにたる。大臣はあるかとゝはせ給へは。  
大とのいらせたまひて。さふらふよし申給へ  
は。御幸は成ぬるかとはせ玉へは。しか成候  
ひぬと申させ給へは。まいりて申せ。今は何事  
もやくさふらはし。たてさせ給ふ尊勝寺にて。  
九壇の護摩と懺法とさふらふへきなり。又侍ら  
はむすらん事は。なに事もこよひ侍らふへき

そ。あすあきてさふらへき心地し侍らすとお  
ほせらるれは。あまり護摩こそおひたゝしく  
侍らへと申給へは。こはいかにいふそ。かはか  
りに成たる事をはと仰らるれは。御なをし<sup>直衣</sup>の  
袖を顔にをしあてゝ立たまひぬ。それをきか  
む御めのとたちも。いかはかりおほえむ。大殿  
かへり参らせたまひて。されは去年をとゝし  
の御事にも。さるさはさふらひしかと。宮<sup>鳥羽</sup>の  
御年のおさ<sup>五歳</sup>なくおはしますによりて。けふまで  
侍らふにこそとなむはへると奏せらるゝにそ。  
何事もたゝこよひきためさふらふへきそと仰  
らるれは。さは此御事にこそ有けれと。今を心  
うる。誰もいもねすまもりまいらせたれは。御  
けしきいとくるしけにて御あしをうちかけて  
仰らるゝやう。我はかりの人の。けふあすしな  
むとするを。かくめも見たてぬやうあらんや。  
いかゝみるととはせ給ふ。きくこゝちたゝむ



せかへりて。御いらへもせられます。たへかたけにまもりあるけはひのしるきにや。とひやませ給ひて。大貳三位<sup>長押</sup>なけしのもとに侍らひ給ふを見つけおはして。をのれはゆゝしくたゆみたる物かな。我はけふあすしなんするはしらぬかとおほせらるれは。いかてたゆみ侍らはむするそ。たゆみ侍らねと。ちからのをよひ侍らふ事に侍らはこそと申さるれは。何か今たゆみたるそ。今心みんとおほせられて。いみしくるしけにおはしたりければ。かた時御かたはらはなれ参らせす。たゞ我めのとなとのやうに。そひふしまいらせてなく。あないみし。かくてはかなくならせ給なむゆゝしさこそありかたくつかふまつりよかりつる御心のめてたさなと。思ひつゝけられて。めも心になふ物なりければ露もねられすまもりまいらせて。ほとさへたへかたく暑き頃にて。御さう<sup>障子</sup>

しとふさせ給へるにつめられて。よりそひ参らせて。ねいらせ給へる御かほをまもらへ参らせて。泣より外の事をなき。いとかう何しになれ仕ふまつりけん。くやしく覺ゆ。参りし夜よりけふ迄の事。おもひつゝくる心ち。たをしはかるへし。こはいかにしつる事とかなし。おとろかせ給へる御まみなと。日ころのふるまゝに。よはけに見えさせ給ふ。御とのこもりぬる御けしきなれと我はたゞまもりまいらせて。おとろかせ給ふらんに。みな寢入てとおほしめさは。物おそろしくそおほしめす。ありつる同じさまにて有けるとも御らんせられむと思ひて見参らすれは。御目よはけにて。御らんし合せて。いかにかくは寢ぬそと仰るれは。御覽しするなめりと思ふも。たへかたくあはれにて。三位の御もとより。さき／＼の御心地のおりも御かたはらに常にさふらふ人

の。見まいらするかよきに。よく見まいらせよ。おりあしき心地をやみて。まいらぬかわひしきなりと申せと。えそつゝけやらぬ。せめてくるしくおほゆるに。かくして心見ん。やすまりやすると仰られて。枕かみなるしるしの箱を。御むねの上にかせ給ひたれば。まことにいかにたえさせ給ふらんとみゆるまで。御むねのゆるくさまそ。ことのほかに見えさせ給ふ。御いきもたえ／＼なるさまにて聞ゆ。かほもみくるしからむと思へとかくおとろかせ給へるおりにたに。物まいらせ心見んとて。顔に手をまきはしなから。御枕かみにをきたる御かゆやひるなとを。もしやとくゝめまいらすれば少しめし。又おほとのもりぬ。あけかたに成ぬるに。鐘の音聞ゆ。あけなんとするにやとおもふに。いとうれしく。やう／＼からすの聲なと聞ゆ。朝きよめの音なときくに。明は

てぬと聞ゆれば。よし例の人たちおとろさあはれなは。かはりてすこしねいらむと思ふに。御格子参り。おほとなふらまかてなとすれば。やすまんと思ひてひとへを引かつくを御覽して。引のけさせたまへは。猶なぬそとおもはせ給ふなめりとおもへはおきあかりぬ。おほい殿の三位。ひるは御まへをはたはからむ。休ませ給へとあれはおりぬ。待つて。我もつよくてこそあつかひまいらせ給はめといふ。中々かくいふからにたへかたき心地をする。目のふるまゝに。いとよはけにのみならせ給へは。此度はさなめりと見まいらするかなしさ。たたおもひやるへし。長治二をとゝしの御心地のやうに。あつかひやめまいらせたらん。何心地しなんとを覺ゆる。又人のほらせ給へとよひにきたれば参りぬ。物まいらせ心見んとて成けり。大貳三位。御うしろにいたき参らせて。もの

まいらせよとあれは。ちいさき御はんに。たゝ露はかりをきあからせ給へるを。みまいられは。今日などはいみしうくるしけに。よにならせ給ひたるとみゆ。殿のうしろのかたより参らせ給ひけるも。例のやうになとして参らせ給ふこそしるけれ。此頃はたれもおりあしければ。うちしめりならひておはしませは。いかてかはしるからむ。おとくと。いみしうくるしけにおほしめしなから。つけさせたまふ御心の有難さは。いかてか思ひしられさらん。かくくるしけなる御心地に。たゆますつけさせ給ふ御心の。哀に思ひしられて涙うくを。あやしけに御覽して。はかしくもめさて。ふさせ給ひぬれは。又そひふし参らせぬ。かくおはしませは。殿もよるひるたゆますまいらせ給へは。いとゝはれにはしたなき心地すれは。三位殿も。おりにこそしたかへ。かはかりに成

にたる事に。なんてう物はゝかりはするとあれは。いかゝはせんとてすくす。大とのちかく参らせ給へは。御ひさたかくなして。かけにかくさせ給へは。我もひとへをひきかつきてふしてきけは。御うらにはとそ申たる。かくそ申たる御祈はそれゝなん始りぬる。又十九日より。よき日なれは。御佛御修法のへさせ給ふと申させ給へは。それまての御命やはあらんと仰らる。かなしさきかねておほゆ。大殿たゝせたまひぬれは。引かつきたるひとへひきのけて。うちあふきまいらせなとするほとに。宮の御かたより宣旨仰かきにて。三位なとのさふらはるゝおりこそ。こまかに御ありさまもきゝ参らすれ。大かたの御かへりのみきくなんおほつかなき。むかしの御ゆかりには。そこをなんおなしう身におほしめす。今の御ありさまこまかに申させたまへとあり。た

かふみそとはせ給へは。何の御かたよりと申せは。ひるつかたのほらせ給へと仰事あれは。さかきて參らせ給へは。ひるつかたに成程に。道具なとりのけて。みな人々うちやすめとておりぬ。されともし。めす事もやとおもへは。御障子のもとに侍らふ。いかなる事ともをか申させ給ふらむ。いかてかはしらん。しはしはかり有て。御扇うちならしてめす。それとりと仰らるへき事ありければ。めして。猶障子たてゝよと仰らる。よくそおりてさふらひけると思ふ。なを仰らるゝ事有とみえたり。立のく。みさうしたてゝ。御扇ならさせ給へと申させ給ひければ。御さうしあく事むこになりぬ。夕つかたかへらせ給ひぬれは。誰もく參りあひぬ。御けしきうちつけにや。かはりてそみえさせ給ふ。けふしかすこし夜のあけたる心地しておほゆれとおほせらるゝ。きく心地の

うれしさ何にかはにたる。御まへにかなまりにひのおほらかに入たるを御らんして。あれみれは<sup>提子</sup>心ちのさはやかに覺ゆる。ひのおほきならんひさけ<sup>提子</sup>に入て。人とも集めてくはせてみむと仰らるれは。女房たちみな立のきぬ。大殿はかりそさふらはせ給ふ。大貳三位大殿の三位殿くして。夜のおとゝに入て。戸口に御き帳たてゝ。ほころひよりみれは。大殿なけしのもとに侍らせ給ひて。みすきはのもとしなかなかと。<sup>左衛門督源中納言大臣殿の權中納言</sup>宰相中將<sup>左衛門督源中納言大臣殿の權中納言</sup>左大辨<sup>左衛門督源中納言大臣殿の權中納言</sup>なとめし入て。大臣殿ひとりて各にたふ。我もせんと覺したる。もてはやさんとなめりとみえて。ひとつとり給ひぬ。みさちやうのうちなる人。かやうにて一とせのやうにやませ給へかし。いかばかり嬉しからんと思ふ。くれはてぬれは。人々おほとなふらなと參らす程に。いみしう苦しけに覺しめさ



れたれは。殿たちいそぎ参らせ給ふて。そうよ  
僧正なとめしさはく。参り給へれば。御几帳た  
て。われらはすへりのきてきけは。加持参り  
給ふ。經よみなとするけにや。しつまらせ給  
ひて。おほとこのもらせ給ふけしきなり。かく  
いふは十五日の事とぞ覺ゆる。かやうにてこ  
よひもあけぬれと。なをよはけに見えさせ給  
ふ。けふもくれぬ。十七日の曉に大貳三位あか  
らさまにまかて。此むねのたへかたくおほ  
ゆれは。湯すこし心見て立かへり参らむとて。  
出給ひぬ。くるゝとひとしく参りたまひて。う  
ち見まいらせて。あないみし。ひる見参らせさ  
りつるほとに。はれさせ給ひにけりなど。いひ  
あはせらるゝをきかせ給ふて。何事いふそと  
仰らるれば。ひるの程にはれさせおはしまし  
にけることを。申さふらふやと申さるれば。今  
は耳もはかしく聞えずと仰られて。いと

とよはけに見えさせ給ふ。しはしはかりあり  
て。此度はさるへきたひと覺ゆるそとおほせ  
らるれば。つゝましけれと。なとさはおほしめ  
すそと申せは。僧正の。さしもかしらよりくろ  
けふりを立ていのれと。そのしるしと覺て。心  
ちのやすます。まさる心地のすれはと仰らる  
るをきくは。何にかは似たる。明ぬれば。おほ  
いとのまいり給ひて。院の御使にて。事ともあ  
りけなるけしきなれば。心なきこゝちしぬへ  
ければねたり。何事にかこまやかに申させ給  
ふ。御位ゆつりの事にやとぞ心えらるゝ。申は  
て。ふしたる所にさしよりて。御かたはらに  
参らせ給へといひかけて立たまひぬ。きのふ  
より山のくちう久住者さとも召たれは。十二人の供  
従者まいりて。加持まいりのゝしるさまいと、  
おひたゝし。せめておほしめしたるかたのな  
きにや。大臣殿をめし。院に申せ。一年の心地

にも。さもと仰られし。行尊めしてたへと申させ給へれば。やかてすなはち参りたれば。やかて枕かみちかくめしていのらせ給ふ。三井寺の人々は千手經をもちたれば。それをいとたふとくよまる。御惱消除して壽命長からむと。ゆるゝかにすせらる。きくそたのもしき心地する。かやうにしみしき人たちあまたさふらひて。我もとらしと祈り参らせらる。けにや。御物のけあらはれて。りう僧正頼ら家いかうなと名のりのしる人あらはれさせ給ふて。一とせの行幸の後。又見まいらせはやと。ゆかしくおもひ参らするに。そのとくなければ。驚かしまいらするといふをきかせ給ひて。いかにも此二三年。例さまに覺ゆる事のあらはこそ。行幸もあらめ。ちかきほとたになし。此こゝちやみたらはこそは。年の内にもあらめと仰らる。ほとより。くるしけにならせ

給ひにたり。例の御かたより人つかはしたり。さる心なとなき人ときけと。せめて思ひやる方のなければいふなり。こなたへたゝ今のほりまいりなんや。道なとそふたかりて。かたはらいたくおほしめせとおほせられたれば。いかてかは参らしと申さん。承りぬと申たれば。さらは今の程にと仰られたれば参ぬ。はなれぬ人なれば。宣旨をそあそはさせ給ひて。御心地のありさまとはせ給ふ。文まいらするまゝに。申さんと。おひたゝしく申ちらしけりなともれ聞えて。あしき事もやなと覺ゆれば。さもえ申さす。又わさと召てとはせ給ふに。申さらんもあしかりぬへければ。たゝのほりて見参らせ給へ。さはいみしうくるしけにみえさせ給ふと申せは。さはもしやとほりよからんひまにと申て。とくかへしつかはしつ。参りてみれば。殿や大臣殿院より戒うけさせ給ふへ

きなりと奏せさせ玉ふけりとて。せんせい法  
印めすへきさたせられ。その御もうけともせ  
らるゝ程なりけり。かやうの後ならば。夜も明  
ぬへければ。宮の御かたよりめしつれは。参り  
たりつれは。かうくこそ仰られつれと申。道  
の所せはきそと。よはけに仰らるゝ。くるしけ  
に覺しめしたり。殿にも。のほりてみせまいら  
せは。やと申させ給ひければ。今の程。宮のほら  
せ参らせん。物さはかしからぬさきにと思ふ  
に。のほらせ給ひぬれは。御かたはらに人のな  
きかあしきそとさたせられて。そのよしを申  
されけるなめり。かへり参らせ給ひて。たゝす  
けは。かりは侍らへと仰らるゝ。さて三位殿お  
はして。殿たち皆障子の外に出させたまひぬ。  
なけしのきはに。四尺の御几帳立られたり。御  
枕かみにおほとなふらちかく参らせて。あか  
あかとありけるに。そひふし参らせたり。はし

たなき心地すれと。えのかす。宮のほらせたま  
ひたると。あない申せは。いつらいつくなと仰  
らるゝは。無下に御耳もきかせ給はぬにやと  
おもふに。心うく覺ゆ。その御几帳のもとにと  
申せは。いつらと。御几帳のつまを引あけさせ  
給へは。こゝにと申させ給ふ。物なと申させた  
まはんとそおほしめすらんと思へは。御跡の  
方にすへりおりぬ。ちかひて。なけしの上に宮  
のほらせ給ひ。しはしはかり何事にか申させ  
給ふ。殿の御聲にて。久しうこそ成ぬれ。御か  
ゆなとはや参らせんやと仰らるゝに。宮きか  
せ給ひて。今はさは歸りなん。あすの夜もと仰  
られて。かへらせ給ひぬ。例のかたはらに参り  
て。氷なと参らす。殿たちまいらせ給ふて。今  
は法印めし入よとて。ふたまなるけいなと参  
らせて。戒のさたせさせたまふ。法印まいらせ  
給ひぬれは。みき丁はかりへたてゝ。御なをし

とりてまいれと仰らるれば。取て参りたり。御手水まいらすへけれど。おきあからせ給ふへきやうなければ。紙をぬらして御手などのこはせ参らせなとする程そかなしき。御かうふりなと持てまいりたれば。するかせぬかのほとにをし入て。御なをし引かけて参らせたる。御ひもさゝむとおほしめしたるなめり。さゝんとせさせ給へと。御手もはれにたれば。えさせ給はぬ。みる心ちそ目もくれて。はか／＼しう見えぬ。かね打ならして。事のおもむき申あきらめ給ふ。十戒を先の世にうけさせ給ひて。やふらせ給はさりければこそ。此世にて十善の位長くたもち。佛法をあかめ一切衆生をあはれみさせ給ふ心。いまたむかしより今に至るまで。かはかりの帝王おはします。いとこよひの御戒のしるしに。すみやかに御惱消除せうさんして。百年の御命なかくたもた

しめ給へと申さるゝ。きくにたゝ。今やませたまひぬるときこえてめてたき。さて御戒うけさせまいらすれば。いとよくたもつゝと仰らるゝ。殿たち。たもつと仰らるゝやと申させ給へは。うなつかせ給ふ。うけさせまいらせはてゝ。法印出させたまへは。故右大臣顯房の子にちやうかいあさりといふ人のもとよりさふらはるゝ。御枕かみに近くめしよせ仰らるゝやう。經すしてきかせよ。ちやうかいが聲きかむも。こよひはかりこそきかめと仰られて。いみしうくるしけにおほしめされたれと御涙もえ出す。それを聞ん心地。たれかはなのめなる心ちせん。たれもたへかたき心ちとする。あさりややもいらへなし。經の聲も聞えぬは。あれもためらはるゝなめりと聞ゆ。しはしはかりありて。すこし出されたるをきけは。方便品の比丘偈に。かゝるほとん長行をそよまるゝ。つくつ



くときかせ給ふて。衆中之糟糠佛威徳故去といふ所より。御聲うちつけさせたまひて。露はかりかほととこほる所なく。ゆふくとよませたまふ。御聲たふときあさりの御聲をしけたれてきこゆ。あさりもととりわきて。そこをしもよみきかせ参らせらる。明暮一二の巻をうかめさせ給ふと。きとをき給へる事なれはなめり。かゝる程に。三位のもとより。むけにおもくおはしますよし聞て。女房おこせてこまかの事きくに。威にけり。いませ給ふとも。まいりてつほねなからもきとまいらせん。よそにてしからせ給ふ。のほらせ給へといへは。やかてくしてまいりぬ。みれは。大貳三位うしろのかたいたきまいらせて。大殿の三位。有つるまゝに。そひふし参らせられたり。御跡のかたにツイ居たれは。大貳三位。くるしうせさせ給へは申つるぞ。そのあしとらへまいらさ

せ給へとあれは。とらへまいらせ給たり。御おせのこひなとせさせたまふ。大殿の三位。かくしつもらせ給へる程に。せまほしき事のありしてまいらんとて。まいらせ給へとあれは。そひふしまいらせぬ。しはじはかり有て。例のちやうかいあさり。御几帳のそはにめし入て。観音品讀てきかせよと仰らるれば。いとたふとくよみ給ふ。いかに覺しめすにか。偈をよめと仰らるゝ。おほしめすやうあるなめりと。心えかたし。大臣殿の三位歸り参られたれは。御足うちかけて。御手をくひに打かけさせたまへは。えはたらかねは。三位殿。我ゐたるやうに。御跡のかたにさふらはる。例の氷なと参らせ。御あせなとのこへとおほせらるれば。御枕かみなるみちのくに紙して。御ひんのわたりなどのこひ参らする程に。いみしくくるしくこそなかるれ。我は死なんする成けりと仰ら

れて。南無阿彌陀佛とぞ仰らるゝをきくに。た  
たにおはしますおりに。かやうの事は□□く  
の下人まで。いま／＼しき事にこそいふを。御  
口よりさは／＼おほせられ出すときくは。夢  
かなとまであさましかれば。涙もせきあへず。  
殿御かほにあてゝ。佛を念せさせ給へ。かゝせ  
給ふときゝまいらせし御筆の大般若は。いつ  
こにかおはしますそ。それをよく念しまいら  
させ給へと申給へは。ふたまにこそあらめと  
仰らるれば。殿聞てとりてまいらせ給ふ。是に  
やなとみせまいらせ給へは。これなりと仰ら  
るゝ。なをくるしうこそ成増るなれとて。たゝ  
せきあけにせきあけさせ給御けしきにて。た  
た今しなんするなりけり。太神宮たすけさせ  
給へ。南無平等大會講明法華など。誠にたふと  
き事とも仰られつゝ。くるしうたへかたく覺  
ゆる。いたきおこせと仰らるれば。おきあかり

ていたきおこし參らするに口ころはかやうに  
おこしまいらするに。いと所せくいたきにく  
くおほえさせ給へるなりけり。いとやすらか  
におこされさせ給ひぬ。大貳三位。御うしろに  
居給ひたり。御せなかをよせかけまいらせて。  
御手をとらへまいらせなとする。御かひなひ  
やゝかにさくられさせたまふ。かはかりあつ  
きころかくさくられ給ふはと。あやし。あさま  
し。譬へんかたなし。僧正めし十二人の供從者  
めしよせて。大かた物も聞えす成にたり。大臣  
殿の三位。御口に手をぬらして。ぬりなとし參  
らせ給ふ。念佛いみしく申させ給ふさまこそ  
殊外なれ。ともすれば。太神宮たすけさせ給へ  
と申させ玉ふも。其しるしなく。無下に御目な  
とかはり行。僧正とみに參らせ給はす。やゝひ  
さしく有て參らせ給へれば。口ころへたつれ  
と何の物覺えんにか。物のほかしとも覺え

む。たゞひとつにまとはれて。僧正三位殿二人。御前我身五人のひとつ。ひとつにまとはれあひたり。聲をおします。かしらより誠くろけふり立はかり。めも見あけす念し入て。佛をうらみくとき申さるゝさまいとたのもし。例ならぬおりは。あやしの僧たにも物いのるはたのもしくこそなるこゝちすれ。かはかりの人の。一心に心に入て。年ころ佛につかうまつりて。六十餘年になりぬるに。またされとも佛法つきす。すみやかに此御目直させ給へと。人なとをいふやうに。をそし／＼とあれと。何のしるしもなくて。御口のかきりなん念佛申させ給へるも。はたらかせ給はすならせ給ひぬ。殿御覽ししりて。今はさは院に案内申さむと申させたまへは。民部卿俊明こなたにめして。殿みすをしあげ。物忍ひやかに。いかに仰らるゝにか仰らるれはたゞれぬ。大臣殿よりて。今

は何のかひなしとて。御枕なをしていたきふさせ參らせつ。殿たちみなたゞせ給ひぬ。僧正なを御かたはらにそひる給ひて。何の事にかしのひやかにつふ／＼と申きかせ給ふ。かゝるほとに日はな／＼とさし出たり。日のたくるまゝに。御色の月ころよりもしろくはれさせ給へる御かほの清らかにて。御ひんのあたりなど。御けつりくししたらむやうにみえて。たゞおほとのもりたるやうにたかふ事なし。僧正今とは見はて奉りて。やをら立て。御かたはらの御障子を忍ひやかに引あけて出給ふに。大貳三位。あなかなしや。いかにしなし出させ給ひぬると。たすけさせ玉へと。聲もおしますなき給ふを聞て。さなからなきとよみあひたり。左衛門督。源中納言。大臣殿の權中納言。中將の御めのと子の君たち十餘人。女房のさふらふかきり。聲をとゝのへて。せめてお

ほゆるまゝに。御障子（障子）をなゐなとのやうに。かはかとひきならして。なきあひたるおひたしき。物おちせん人はきくへくもなし。今一度見まいらせんとて。したしき上達部殿上人。我も／＼參れと。うときはよひもいれず。大貳三位。おほとのもりたるやうなる人を。我君や。いかにして方々をはすておはしましぬるぞ。むまれさせたまひしより。かた時はなれまいらせず。あやしのきぬの中よりおほし（音）まいらせて。いつれの行幸にもはなれず。しりにたちさきにたち。病の心ならぬさとる十日はかりするにも。戀しく床しくおもひまいらせつるに。かた時見まいらせて。いかてかさふらはん。たゞ具しておはしましね。今一度おとろかせたまひて見えさせ給へ。あなかなしや。こひしさをいかにしてか侍らはん。たゞめしてそと。御手をとらへて。をめきさけひ玉ふ。きく

そたへかたき。此聲を聞てそこのゝしりつるくしうさともひしとやみぬ。山の座主今そまいりて。僧正（仁源）の出たまひぬる障子引あけ給へは三位山の座主（仁源）をも今は何にせんするそといひつゝけてなき給ふ。御さうしよりなけ入らるゝ物を何そとみれば。我局に置たる二あゐのからきぬかつきたるものなけ入て。人のゐるをみれば。藤三位殿のかくときゝて參り給へるなりけり。あな心うや。例さまにうち見あけ給ひつらんを。今一度見まいらせす成ぬるこゝろうきを。何のものいみをしてよひ給はさりつるそ。年ころの御病をたに。はつるゝ事なくあつかひ參らせて。限の度しもかくこちをやみてける身の。すぐせの心うき事といひつゝけてなき給ふ。我は御あせをのこひまいらせつるみちのくにかみを。貌にをしあてゝそへゐられたる。あの人たちおもひ參ら



せらるらむにもをとらすおもひまいらすと。  
年ころは思ひつれと。猶をとりけるにや。あれ  
らのやうに聲たてられぬはとおもひしらる  
る。大臣殿参らせ給ひて。うち見まいらせて  
いかにおほしとくにか。持たまへる扇の骨を  
たゝみなから。はら／＼とうちすりて。なきて  
出給ひぬと思ふ程に。今は御かうし参れとあ  
りけるにやとみえて。すなはちしたしき殿上  
人なめり。源中納言の四位少將あきくに。右大  
臣殿の加賀介家さた。あか／＼と日のさし入  
てあかきに。はら／＼とおろしていぬ。あなあ  
さまし。こはいかにしつるよと。えさらぬ心  
まかせぬ日のくるゝたにおほとなふらをとく  
さし出よかしと。またおろさぬ先に心もとな  
くおほえしものを。はな／＼とさし出たる日  
におろしこめて。わさとくらうなすよと覺ゆ  
るに物ぞおほえぬ。藤三位あないみし。かくは

いかにおろしつるそや。かひなき御かほな  
かも。あかくて守り参らせてあらんとこそお  
もひつれと。聲もおしますなき給ふ。大臣殿ま  
たまいりて。御そ今はぬきかへさせ参らせて。  
御たゝみ今はうすくなさんと。えもいひやり  
給はすの玉ふて。御ひとへ取よせ給ふて。ひき  
かつけまいらせなとせられぬ。なけしの下に  
まかりいてさせ給ひぬと見まいらするまゝに  
大臣殿の三位まろひおりて。やかてそこにお  
なしさまにて。いきも絶たるさましてふし給  
ひたる。大臣殿見給て子の中納言めして。あれ  
ゐてのけよとあれば。其方の女房。中納言とし  
ていとたのもしくめてたけにて。かきいたき  
ていぬ。さるほとに大貳三位も。御子播磨守出  
雲守などいふ人々かきすくひてゐていぬ。藤  
三位殿は。例ならぬよはけにみえつる人の。な  
け入られつるよりとゝてこゑたにもせすいひ

つゝけてなき給ふさま。ことはりとみゆれと  
すきいられぬるにやと見ゆれは。子の加賀守  
を見おこせて。それいたきのけ奉らせ給へと。  
いとよはけにみえさせ給ふさまをは。物の覺  
え侍らぬそ。たすけたまへとあれと。いふかひ  
なし。しもにおりさせ給へとひきのくれと。何  
事の給ふそ。うるはしくておはしましつる御  
顔を。今一度見せさせ玉はすなりぬるか。うら  
めしさはいふかたなしとあちきなく人のつみ  
のやうにうらみなきたまふも。ことはりにそ  
聞ゆる。御かひなをさくれは。いまたひえなか  
ら。例の人のやうにたをやかにさくらるれは。  
心みかてら。しはしもさらはたかへ參らせて。  
物の給へかしとおもへは。いたくもすゝめて。  
もろともに御かひなをとらへて居たれは。い  
つの程にかはるにか。たゝすくみにすくみは  
てさせ給ひぬ。今はかひなしとおもひて。いさ

させ給へ。さふらはせ給ふとも今はかひなし。  
一言もこそもしやとおもひつるほとこそ有つ  
れと。引のくれと。大かた取つき參らせて。い  
かて一所をきまいらせていかむするそとの給  
ふ。加賀守のさはかりあるは。いたきのくへき  
心ちもせねは加賀守に我はえいたき給ふまし  
くは。局の人をよひ給へといへは。さはかりの  
物もおほえすけなる人のとりあへす。いかて  
我君のおはします所にけす下飛をはよせんとして。  
いみしうなかる。參りさまにいたかれたりつ  
れは。せりて物のおほえてかとそおほゆる。さ  
れは我方の女房ともよひよせて。ひたうに引  
のするやうに。人のせなかにおほせてやりつ。  
御めのとたちたゝれぬれは。因幡内侍とて。明  
暮あまたの内侍の中に。とりわきつかうまつ  
りつきたりし人とふたり。御かたはらにむこ  
にちかくさふらふ。あはれおほく侍らひつれ

と。契ふかくもつかふまつりはてさせ給へる  
なといひつゝけて。いみしうなかるゝさまそ。  
いとゝもよほさるゝ心地してたへかたき。つ  
ほねよりいそきたるけしきにできとおはしま  
せ。三位殿たえ入せ給ひぬといひて。引さけて  
ゐていぬ。誠になき人のやうにて。大かたいき  
もせず。暮かゝる程にあつまりてかきのせて  
ゐていぬ。御まへのかたかいすみて。いつの間  
にかはるにか。日ころおひたゝしく物も聞え  
すのゝしりつるけしきとも。しめゝと火を  
うちけちたるとは是をいふへきにやとおほえ  
て音もせず。大貳三位の局。かへをひとへた  
てたる。なくけはひともして。晝の聲どものや  
うに泣あひたる中に。三位の御聲にて。哀かや  
うに日のくるゝに御<sup>格</sup>かうしとくまいれかしと  
心もとなくおほえしに。いふへき事もなくし  
なしまいらせつるは。いかにしつる事ぞや。是

たすけよや。たゝおはしますらん所へ我をめ  
せや。をひゝとくどきたてゝなかるゝをと  
す。きくそいとゝたへかたき。日の御座のかた  
に。こほゝと物とりはなす音して。人々のこ  
ゑあまたすなり。何事にかときく程に。おまへ  
より。おなし局に我かたさまにてさふらひつ  
る人。うちきて。いみしう物もいはすなく。見  
るに。いとゝ其事ときかぬに。なきふさるゝ心  
地とする。しはしためらひていふやう。あなこ  
ころうや。たゝ今神璽寶劔のわたらせ給ふと  
てのゝしりさふらふぞ。日の御座の御物具の  
わたり。御帳のひき御かゝみなと取いてさふ  
らふ。御帳こほつをとなりけりといふに。かな  
しさそたへかたき。ひるより美濃内侍を。やか  
て殿のはかしにつけさせ給ひつれば。つき参  
らせて。おはしつるやうなとかたる。我は朝か  
れるのおましのことはしらさりつれば。此人

のかたをきゝて何にかはせん。

右拜借 仙洞御本。使安中書泰廣端 太神景  
明興書寫之。與清閑寺亞相具房卿一按了。落  
字魚魯等不可勝計。重可加按正者也。

寛永十六稔念二

秘書郎

讃岐典侍日記下

嘉永二

かくいふ程に。十月に成ぬ。辨三位殿より御ふ  
みといへは。取入てみれば。年ころ宮つかへせ  
させ給ふさま。御心のありかたさなと。よくき  
きをかせ給ひたりしかはにや。院白河より社勅。この  
うち鳥羽にさやうなる人のたいせちなり。たうし  
参るへきよし仰ことあれは。さる心地せさせ  
給へとある。みるにそ淺ましく。ひかめかと思  
ふまであきれられける。おはしましゝおりよ  
り。かくは聞えしかと。いかにも御いらへのな  
かりしにぞ。さらてもとおほしめすにや。それ

をいつしかといひかほにまいらむ事あさまし  
き。周防内侍。後土冷泉院にをくれ参らせて。後土  
三條院より七月七日まいるへきよし仰られた  
りけるに。

後拾  
天河おなしなかれと聞ながら渡らん事はなを悲しき

海河

とよみけんこそけにとおほゆれ。故院の御か  
たみには。ゆかしくおもひ参らすれと。さし出  
ん事なを有へき事ならず。そのかみたち出し  
たに。はれ／＼しさは思ひあつかひしかと。お  
やたち三位殿なとしてせめられん事となん  
思ひて。いふへき事ならさりしかは。心のうち  
はかりにこそ。あまのかるもにおもひみたれ  
しかと。けに是も我心にはまかせすともいひ  
つへきことなれと。又世をおもひすてつとき  
かせ給はゝ。さまで大せちにもおほしめさし  
と思ひみたれて。今すこし月ころよりも。物お  
もひそひぬる心地していかなるついでをとり



出ん。さすがにわれとそきすてんも。むかし物語にもかやうにしたる人をは。人もうとましの心やなとこそいふめれ。我心にもけにとおほゆる事なれは。さすがにまめやかにもおもひたす。かやうにて心づからよはりゆけかし。さらはことつけてもと思ひつゝけられて。

日ころふるに。御めのとたち。また六位にて五位にならぬかきりは物まいらせぬ事なり。此廿三日六日八日そよき日。とくくとあるふみたひく見ゆれと。おもひ立へき心地もせず。過にし年月たに。わたくしの物思ひの後。人なとに立まするへき有さまにもなく。見ぐるしくやせおとろへにしかは。いかにせましとのみおもひあつかはれしかと。御心のなつかしさに。人たちなどの御心も。三位のさて物し給へは。その御心にたかはしかや。はかなき事につけても。ようるせられてのみ過し

に。今さら立出で。見し世のやうにあらん事もかたし。君きみはいはけなくおはします。さてならひにし物そとおほしめす事もあらし。さらんまゝには。むかしのみ戀しくて。うらみむ人はよしとやはあらんなど。おもひつゝくるに。袖のひまなくぬるれは。

かはく間もなき墨染の袂かな哀むかしのかたみと思ふにかやうにてのみ明くるゝに。かく里に心のとかなる事かたし。五六日なれは。内侍のもとより。人なし参れといふふみのこしなど。おもひつゝけられて過す程に。御即位なと世にのゝしりあひたり。大納言のめのと雲はりあけし給ふへしとて。安藝の前司の三位殿こそ。故院の御ときとはりあけはせさせ給ひければ。その例をまねはんなどたつねらるゝときくほとに。大納言。日ころ例ならて。俄におもりてうせ給ひてときこゆ。いとこゝろほそき世かな

と思ひかこちぬ。夕暮に。三位殿のもとより。とほりあけすへきよしあれは。いとあさましくて。日ころはきゝすくしてのみ過つるを。まいらしとおもふなめりと心得させ給ふて。をしあてさせ給ふなめりとおもふに。すへきかたなし。たのみたるまゝに。例の人よひて。かうかなん院より仰られたるを。いかゝはせむするといへは。いかゝせさせ給はむ。世中わつらはしく侍らふめり。たゝとく思しめしたつへきなめり。まいらしとさふらは。我爲にこそよしなき事出まうてこめ。我君さるへきとおほしめさせ給ふへきになと。さたしあひたる程に。くらのかうの殿より人參らせたり。院宣は攝政殿の承りにて侍ふ。堀河院の御そ忠實ふく賜りたらは。とくぬくへきなりと宣旨く忠實たりぬ。とくぬかせ給へといひにをこせたり。かはかりの事たに心にまかせす。道理たうりにぬ

くへきおりもまたすぬきてん事心うきに。せりつみしといひけんふることを。身に思ひよそへらるゝ。かくさたするを聞て。せうとなる人。あはれ男の身にてかくいはれ參らせはや。うら山しくもおほえさせ給ふかな。女の御身にてさらても有なん。故院の御時に。年ころの人たち御めのとこたちなとの。たまはりあはれしそ素服ふくを。何はかりの年ころさふらはせ給はさりしかと給はらせ給ふ。今の御時に。又なを大せちにいるへき人にて。月もまたすぬけと。宣旨くたるもあやしなといひつゝくるを聞程に。あちきなくはつかし。花山院のおりに。これしけの辨を。惟成入道殿一條院にわたりて。もとのことくろくさにてつかはんと仰られけるをたに。我君につかうまつりし事の。それにつけても。思ひ出られぬへければ。つかさ位をすてゝ法師に成にけん我身の。何の思ひ

出にて。いにしへのはつかしきにおもひこり  
すさしいつへき。あまたの女房の中に。なと我  
しも二代までかくはあるましきめをみるへか  
らんとおもふに。先の世の契も心うけれと。さ  
るへきにこそはと思ひなして。流の水をむす  
ひさやかになり。したしくなれつかうまつる  
しうとならせ給へは。おほろけならぬ契にこ  
そとおもひなくさむれと。藻に住むしのわれ  
からとのみ。世にありてかゝるめも見ること  
かなしけれと。さてあるへき事ならねは。いそ  
き立ぬ。しもの人なとは。年ころもゝしきの中  
にあそひならひたる心ちにつくゝとおもひ  
たえたり。里るは口おしう思ひけるに。かゝる  
事出きたるを。嬉しうおもひたるけしきにて。  
心ちよけにおもひけるを見るは。つれなくう  
らめしきに。霜月にも成ぬ。十九日に例の参ら  
んと思ふに。雪よるよりたかくつもりて。ち

たくふる。いそかしき。今いく程なく残りすく  
なく成にたれは。大かたの人も夜をひるにな  
して。物もきこえぬまでいそくめれは。我はこ  
の日ならんからに。いそかしとてまいらざら  
むか口おしきに出たつを。ひとりうけ引人な  
し。さはかりいそかしくしちらさせ給ふてよ  
かし。けふまいらせ給ひたらんに。院ニ大臣殿ヲ  
も。よにいみしともあらし。参らせ給はすとも  
あしき事もあらし。かはかり雪は道もみえす  
降めり。我御身こそ車のうちなれは。扱もおは  
しまさめ。御供の人はいかてかたえむするそ  
なとわひあひて。とゝめつれと。人たちによし  
と思はれむとて。まいる事ならはこそあらめ。  
此月ならむからにいそかしとてかくへき事か  
は。いさましく嬉しきいそきにてあらんたに。  
それにさはるへき事かは。我をすこしも哀と  
おもはん人は。けふ参らせよといふまゝに。

けしきもかはるかしるきにや。いはれぬる人とも。さはかり思しめしたらむ事。さまたけ参らすへき事ならず。車よせよ。供の人よはせなとする程に。例はしまるほとゝおもふほと。やう／＼口たくるに。まいらてやみなんするなめりとおもふ。口おしくわりなき人ともきぬれは。とく／＼といへは。嬉しくてのりぬ。道のほとまことにたへかたけに雪ふる。車のうちにふりいりて。雑色うしかひみなかしらしろく成にたり。うしのせなかしろきうしに成にたり。二條の大路には大宮のみちもなきまでふる。参りたれば人々。あないみし。例よりも口たけつれは。けふはえまいらせ給はぬなめり。ことわりそかし。いそかし／＼おはしつらんと申あひたりけるに。おほろけならぬ御心さしかな。けふはとあはれかりあひたり。十一月もはかなく過ぬ。十二月朔日。また夜を

こめて大極殿にまいりぬ。酉の陣に車よせて。えんたうしきて入へき所としてしつらひたるに参りぬ。ほの／＼と明はなるゝほとに。かはらやとものむねかすみわたりてあるを見るに。むかしうちへまいりしに。過さまに見えし程なと思ひ出られて。つく／＼と詠るに。北の門より長楯ひつに。ちはやかたるものとも。すはうのこきうたるくはうこゝの出しきぬ入てもてつゝきたる。へちにもおもしろく見ゆへき事ならねと。所からにやめてたし。人とも見ささき。いみしく心こころに思ひあひたるけしきともにて見さはけとも。我たは何事にも目もたゝすのみおほえて。南のかたをみれば。れいのやた八咫からす見もしらぬものとも。大かしらなとたてわたしたる。見るも夢のこゝちとする。かやうの事は世繼なとみるにも。その事かゝれたる所はいかにそやおほえて。ひきこそかへさ



れしか。うつゝにけさ／＼と見る心地。たゝをしはかるへし。日たかくなる程に。行幸なりぬとて。のゝしりあひたり。殿原里人など玉のかうふりし。あるは錦のうちかけ。近衛つかさなと。よろひとかやいふ物着たりしこそ。みもならはす。もろこしのかたかきたるさうしの晝の御座にたちたるみる心地よとあはれに。かくて事成ぬ。おそし／＼とて。衛門の佐いとおひたゝしけにひさもん門なとをみる心ちして。我にもあらぬ心地しなからのほりしこそ我ながら目くれて覺えしか。手をかけさするまねして。かみあけよりとはりさしつ。我身いてすともありぬへかりける事のさまかななど。かくしをきたる事にかとおほゆ。御前のいとうつくしけにしたてられて御もやのうちにゐさせ給ひたりけるを。見参らするもむねつふれてそおほゆる。大かた目もみえず。はちかまし

さのみ世に心うくおほゆれは。はか／＼しくみえさせ給はす。事はてぬれはもとの所にすへり入ぬ。夜に入てそかへりぬる。あるかなきかにて歸りたれは。かほをあやしけにおもひてまもりあひて。御顔の色のたかひておはしますはいかになといひあへるは。またなをらぬにこそと。しほ／＼となかれぬる。しはすも漸つこもりに成て。辨のすけ殿の文といへは。とり入てみれは。院より三位殿大納言のすけなとさふらはぬ朔日也。さやうのおりは。さるへき人あまた侍らふこそよけれ。参るへきよし仰られたるとそある。いか／＼せん。とく参らんとそいそきたつ。朔日の日の夕さりそ参りつきて。陣いるゝより。むかし思ひ出られて。かきそくらさるゝ。つほねにいきつきてみれば。こと所に渡らせ給ひたるこゝちして。其夜は何となくてあけぬ。つとめておきてみれ

は雪いみしく降たり。今もうちゝる。御まへを見れば。へちにたかひたる事なき心地して。おはしますらん有さま。こと／＼<sup>粉</sup>に思ひなされていたる程に。ふれ／＼こゆきと。いはけなき御けはひにて仰らるゝ聞ゆる。こはたそ。たか子にかと思ふほとに。誠にさそかしおもふに淺ましく。是をしようちたのみ參らせてさふらはんするかと。たのもしけなきを哀なる。ひるははしたなき心地して。くれてそのほる。こよひよきに物まいらせそめよといひにきたれは。おまへのおほとなふらくらゝかにしながら。こちとあれば。すへり出てまいらする。むかしにたかはす。御たいのいとくろらかなるこきなくて。かはらけにてあるを見ならはぬ心ちす。はしりおはしまして。かほのもとにさしよりて。たれそこはと仰らるれば人々。堀河院の御めのところかしと申せは。まことゝ

覺したり。ことの外に見まいらせし程よりはおとなしくならせ給ひにけりとみゆ。をとしの事をかし。參らせたまひてこきてんにおはしまいに。此御方にわたらせ給ひしかは。しはしはかり有て。今はさは歸らせ給ひね。日のくれぬさきにかしらけつらんとそゝのかし參らせ給ひしかは。今しはしさふらはゝやと仰られたりしそ。しみしうおかしけに思ひ參らせ玉へりしなと。只今の心地して。かきくらすこゝちす。そのよも御かたはらにさふらひたれは。いといはけなけに。御そかちにふさせ給へる見るそあはれなる。明ぬれは。みなひとひとおきなとしてみれば。御まへのみす。いとおひたゝしけなるあしとかいふ物かけられたり。へりはにひ色なり。御さうしの御きちやう。おなし色の御几帳の手しろきなり。御けつりくしの大床子もなし。かゝるおりにはなき

にや。おさなくおはしませはかとそ物なと參  
らすれ。うけくにしてめすそ哀なる。ひるつけ  
て殿<sup>中</sup>參らせ給ひて。人々ゐなをりなとすれは。  
物をまいらせさしてたゝんも。おとなにおは  
しまいしにぞ。さやうのおりもわかす立し  
か。又おとなしくなともつけさせ給ひしか。是  
はうちすてゝたゝはよき事やいはれんすると  
思へは。なをゐたるも。かくこそありかたかり  
ける事を。心にまかせてすくしけん年月を。い  
かて思ひしらさらん。はしたなく思へはうち  
うつふしてゐたれは。御さうしの外にゐたる  
人たちに。あれはたそゝはせ給ふ御聲聞ゆ。  
それといらふるなめり。御さうしの内にちか  
やかについゐて。いつよりさふらはせ給ふぞ。  
今よりはかよふにてこそは。そもむかしの思  
ひ出られ給ひてこひしきに。そのかみの物語  
りしてなくさめんなとある。いとかなし。我も

人もおなしやうにてこそ物せさせ給ふめれ。  
はかなりし世にはいせんは誰そととひて。そ  
れかしときかせ給ふては。御したさし出させ  
玉ひて。さしぬきたかく引あけてにけさせた  
まふとて。人々わらひ興しまいらせしは。ひと  
所の御けむはいにて。有けると思ふに。何の御  
かへりかは申さん。物申されねは思ひかけさ  
りし事哉。かやうにちかやかにまいりて。物な  
と申しことゝはおもはさりしかな。例ならて  
おはしまいしおりなと。御かたはらにそひふ  
させ給へりしおりにまいりたりしかは。御ひ  
さ高くなさせ給ひて。陰にかくさせ給ひしお  
り。かやうならん事とともこそおもはさりし  
か。けにかけにもかくれさせ給ひしかな。世は  
かくもありけるかなといひかけて立せ給ひぬ  
る。聞そけにと心うき。かやうにて。はえなき  
朔にて過ぬ。人たちのきぬの色とも。思ひく

にうすらきたり。正月になりぬれは。此月ならんからにかくして参りて。堀河院に参りたれは人々。いかで参り給へるぞ。内にと聞まいらせつるは。この月はよもとおもひ参らせしにと。いひあはれたり。いかてかまいらさむ。つかうまつりはてんと思へは。いみしういそかしかりしにたにも参りしをといへは。誠にかくかゝす参らせ給ふ事のありかたさなといひあひつゝ。つれ／＼のなくさめに法花經に花たてまつり給ふにとて。いとなみあはれたるそいと哀にみゆる。二月になりて。わたくしのきにちにわたりあひたり。講修きくさうしのもとにてみれは。ひとゝせの正月に。すしやう正をこなふとて内にさふらひしを。むかひにをこせられたりしかは。おもしろき所なるに。我とくしておはしませとて。大夫のすけや内侍なとくしておはしたりしに。此さうしのもと

にあるおとなひをきゝて。おはしましにけりな。たれ／＼くしてといへは。内侍殿にあひ参らせん。いとうれしき事かなといひて。あはれたり。此御まへおほしあつかふるさまのことの外にくなけに悦もえ申させす。今はこもりゐたる身にて。まかりありきなとも。かしらつきの見くるしう成たるみれは。さと殿なとへもえ参らす。さらてのけさうはえなければ。此月にとけてやまかせかくれんすらむと。しうに成ぬへき心ちのしつるに。こよひは佛の御しるしとおほえて。いみしうなん嬉しきは。今に心やすくよしあきらめつれは。後の世もやすくとありし聞しか。さまておほすらんと有しか。まつおもひ出らる。かくて二月も過ぬ。三月に成ぬれは。例の月に参りければ。堀河院の花いとおもしろく。かねかた後イ三條院にをくれまいらせて。



後拾金部巻二(阿利)に「色も替らず咲にけり花こそ物は思はさりけれ  
いにしへに色も替らず咲にけり花こそ物は思はさりけれ

とよみけん。けにとおほえて。花はまことに色  
もかはらぬけしきなり。むかしの清涼殿<sup>時</sup>をは  
御堂になさせ給ひて。七月迄は宵曉のれいし  
たえず。共人のくらうとまち左近の陣<sup>時</sup>なと僧  
坊になりたり。内裏にて。ありし所ともさひし  
けなるみるにも。うせさせ給へりけん院の中  
のひきかへかいすみ。さひしけなる御覽して。  
かけたにもとまらさりける草の上を玉の臺と誰かいひけん  
とよませ給ひけん。けにとそおほゆる。宮の御  
方に三十講を行はせ給ふ見て。法華經を日に  
一品つゝ講せさせ給ふ。それきくに。三位殿の  
まいらせ給ふにくして参りて。講なとはてゝ。  
御まへちかく三位殿をめせはさふらはる。宰  
相とてさふらはる人。三位殿は今すこしちか  
くまいらせ給へ。すけ殿は今にはつかしとい  
ふをきかせ給ひて。それしもこそ心さしみゆ

る。見たてなくおもひ出もなけに。見ゆる所を  
わすれすみゆると仰られもはてす。むせ歸ら  
せ給べる音のきこゆるに。我もたへかたし。暮  
ぬれはまかてぬ。つこもりに内へ参りぬ。四月  
の衣かへにも。女官とも例の事なれば。我も  
我もと身のならんやうもしらす。几丁ともと  
りあへる人見あへれと。我はみまほしからず。  
これをおかしとおほしめしたりしか。おもひ  
出られて。灌佛の日になりぬれは。我も／＼と  
とり出されたり。事はしまりぬれは。日の御座  
の御まへのみすおろして。人々出てみる。殿を  
はしめまいらせて。ひろひさしの高欄に。例の  
さほうたかはす。下かさねのしりうちかけつ  
つ。上達部たちゐなはたり。御導師事の見さま  
申て。みつから山の座主こしきのわたるむか  
しにたかはて。御たうし水かけて。殿参らせ給  
ひて。かけさせ玉へれば。次第によりてつき

つきの上達部。かく何事かはたかひてみゆる。左衛門督源中納言よりてかくとて。いとたへ

かたけに物思ひ出たるけしきなり。かほもたかふさまにみゆる。あちきなし。我もせきかねられて。大かた例はとのかたも見しとおもひて。御几丁ひきよせてみれば。みきちやうのかみより御覽せんとおほしめす。御たけのたかねは。いたかれて御覽する哀なり。おとなにはしますすには。ひき<sup>書</sup>な<sup>衣</sup>をしにて。ねんすしてこそ。御帳のまへにおはしましゝか。先めたちて。中納言にもをとらすおほゆれば。人めも見くるしうて。おまへことはてぬにおりぬ。五月四日夕つかたに成ぬれば。さう<sup>言</sup>ふいと<sup>誦</sup>なみあひたるをみれば。こそ<sup>言</sup>のけふ何事思ひけん。さうふのこし。朝かれぬのつほにかきたてゝ。殿ことに人々のほりて。ひまなくふきしこそ。みつ野のあやめも今はつきぬらむとみえしか。

又の日も空はさみたれたるに。軒のあやめ半もひまなくみえけるに。

五月雨の軒のあやめつくくと袂にぬのみかゝる空かなとのみおほゆ。やう／＼十日あまりに成ぬれば。さい<sup>最</sup>そう<sup>勝</sup>講いと<sup>最</sup>なみあひ<sup>勝</sup>参らせてと聞しかは。はてゝの十餘日はかりのつれ／＼物語には。その日のろんきといひ出し。いみしさなとさたせさせ給ひしおもひ出らる。六月になりぬ。あつさ所せきにも。まつこそ此頃は事となく御心地よけにあそはせ給ひて。堀河のいつみ。人々みむと有しを。何とおほしめしゝにか。あな<sup>言</sup>かちにすゝめつかはしゝかは。思し召事なれば。先あすとて。我は出て人たち待しに。二車はかりのりつれて。日くらしあそひて歸りしに。みれば。こよひとまりて心やすき所にて。うちやすまんとおもひてとゝまりしを。ひたち殿といふ女房。あなゆかしたゝ参らせ

給へ。あふきひきなと人々にせさせんなどありし。御扇子ともまうけて待参らさせ給ふとあれば。此人たちにくして参りぬ。待つて泉のありさまうちくにとひなとして。あふきひき。こよひはさはおほせられしかは。あけんか心遣なさよ。こよひと思ふに。人たちのけしきのくるしくて。見えさむこそ口おしく候へと申しゝかは。つとめてあくるやをそきとはしめさせ給ひて。人たちめしすへて。大貳三位殿をはしつめて。あはれたりしに。先ひけと仰られしかはひきしに。うつくしとみしをえひきあてゝ。中にわろかりしをひきあてたりしを。うへになけ置しかは。かゝる心うやあるとてわらはせ給ひたりし事を。但馬殿といふ人の家の子の心なるや。こと人はえせしなと興しあはれしに。そのおりは何ともおほえさりし事さへ。いかてさはしまいらせける

にかと。なめけにけふは有かたく覺せる。七月にもなりぬ。御はてとてのゝしりあふ。その日に成ぬれは。こそ御法事おなしと百僧なり。ありさまおなしことなれはとゝめつ。こそより後。女房六人をとゝめつ。宮の御方にあつかはせ給へるか。今はまかてなんする。哀に出なしき事。かやうにさふらひつれはこそ。月なとに参らせ給ひしを。日たちてはとく其日になれかしと。かそへくらされて待参らすれは。今はさはみ参らするか心うきと。たれもくいはひあひて泣ことかきりなし。なきあふことはてぬれは。三位殿立て出ぬ。□の出雲といふ女房の讀て。北面のつほに薄にむすひつく。

今はとてわかるゝ秋の夕暮は尾花か末も露けかりけりとよみたりつれと聞も哀なり。萬はてぬれは。廿五日。よの中の諒闇ぬきあはる。御まへのしつらひ。日ころおひたゝしけなりつるみす木

丁のかたひら御さうしなとりはらはれて。  
日ころは夜のおとゝの御帳もなかりつれと。  
有しやうに立られなとして。たゝいにしへの  
御しつらひにて。たかふ事なくめてたく成に  
たり。殿をはしめて。殿上人藏人さうそく<sup>東</sup>かへ  
ゑい<sup>東</sup>おろし。女房たちのすかた。我もくゝと色  
色とつくしあはれたるさまそ。たゝおりけん  
心地してそなえ居られたる。水無月ころに引  
かへてめつらしき心地する。さいし<sup>叙子</sup>もとゆひ  
はしろかりつる。例のやうにむらこになされ  
んとて。いとなみあはれたり。殿うるはしくさ  
うそきて参らせ給ふて。とくまいらせ給へと  
めせは参りたれは。御前もろともにさうそく  
せさせまいらせ玉ふ。うつくしけにしたてら  
れ。ひきなをしにておはします。御しりつくり  
参らするにも。むかしまつ思ひ出たる。かやう  
にみ<sup>衣</sup>そせさせ参らせて。日<sup>石</sup>ことにいし<sup>灰</sup>はいの

御はいのおりは。いかゝさせ給ひしと。まつお  
もひ出らる。くはんし参りたるや。時よくなり  
にたりやと。とくくゝと申させ給ふに。我ひと  
りぬきかへてさふらふへきならねはぬきかへ  
つ。局におりても。先きかへんともおほえす。  
是をさへぬきかふること。院の御かたみとお  
もひつれ。これをさへぬきつれは。いと心ほそ  
し。一天の人。御心さしあるもなきもみなした  
りつるに。したしくつかうまつりつるさへ。一  
度にぬきてんする。思ふにやからぬ事なれと。  
ぬきかへましき心地する。かきり有ことなれ  
は。いかゝとそぬきつ。遍昭僧正の。深草の帝  
にをくれまいらせて。法師になりてこそうせ  
けるか。又のとし御ふく人々ぬきけるに。  
みな人は花の袂になりぬなり昔の衣よかはきたにせよ  
とよみけん。かくて八月に成ぬれは。廿一日御  
渡りと定りぬ。ひとくゝいとなみあひたり。さ



れは。我はかはらぬ九重のうちの有さまをみ  
んに。はしめたる御わたりに。えねんすましき  
心ちのすれは。参らんともおもはぬ。院より。  
さるへき人々みな参るへきよし。参らせ給へ  
と。三位殿よりあれは。そのさたあらはさて  
あてたらん。ひとり水とりばかり参らせて。わ  
れはまいらしとなん思ふといへは。けにさそ  
覺しめすへき事にてそあれと仰らるゝに。ま  
いらせ給はさらむも。ひか／＼しきやうなり。  
思ひねんしてなをまいらせたまふへきとて出  
したてらるれは。かはかりの事たに。心にまか  
せぬ事と思ひながら出たつ。その日もなりて。  
内大臣殿御ひんつらにまいらせ給ひて。朝か  
れるのみす卷あけて。御ひむつらゆひまいら  
せらるゝみれは。かはらぬかほしてみえさせ  
給ふもあはれなり。暮はてぬれは行幸なりぬ。  
御仰に。やかて引つゝけてまいりぬ。中御門の

門いるより。思ひしにしるくかきくらさる。か  
うりう寺に参るとてみいれしに。我明くれ出  
入し門をかし。をとゝしのしはすの廿餘日こ  
そ。堀河院にうつろはせ給ひしか。それに出け  
んまゝにこそは有けめ。かきりの口ともおも  
はてそ出けむかし。今は何事にてかは。此世に  
て又いらんすると思ひしを。我身もおな！身  
なから。又たち歸りいるそ。心うくかなしくも  
覺ゆる。参りつきて見れは。局は大貳三位殿お  
はせし所とそ。ひる三位殿ありつれは。御物の  
くを持て参りつるとて。そなたへ出んからく  
らへやをあゆみ過て。今も少しのほる。その夜  
も御そはにふしてみれは。夜のおとゝ見るに。  
みしよにかはらぬさましたるにそ。みのとこ  
ろ此かなとたにこそなしはしめたる御あたり  
なれは。火とり水とりなどのわらはもちたり  
つる。御まくらかみに左右にをかれたるそ。た

かひたる事にてはある。御かたはらにふしたるも。かやうにてこそ。宮のほらせ給はぬ夜なとは侍らひしかとおほえて。哀にのみそ。みな人はよけにぬれとも。我は物のみ思ひつゝけられて目もあはず。瀧口の名たいめむ。御ゆとのゝはさま殿上の口にて申聲ぞ。聞ゆるほとにおほえたりしかと。耳に立て聞ゆる。うけせう時そうして尋へし。心みねはといひて。時のふたにくひさす音す。左近の陣の夜行てんめきたるありくも。昔にもかはる事なし。御帳のかたひら見るにも。先仰られし事とも思ひ出らる。むかしをしのふいつれの時にか。露かはく時あらんとおほえて。かたしきの袖もぬれまさり。枕の下につりしつばかり。萬の事に目のみたちて。たかふ事なくおほゆるに。たゞ一所のすかたのみえさせ給はぬとおもふそかなしき。御まへのふさせ給ひたる御方をみれば。

いはけなきにておほとのもりたるぞ。かはらせおはせましゝとおほゆる。をとゝしの頃に。かやうにて。よるひる御かたはらに侍らひしに。御心ちやませ給ひたりしかとも。院より。あなかしこ。よくつゝしみて。夜のおとゝを出させ給はて。しはしと申させ給ひしかは。つれ／＼のまゝに。よしなし物かたり。昔今の事かたりきかせ給ひしおり。殿のあとかたにより奉らせ給ひしかは。そのまゝにてさふらはんは。なめけにみくるしく覺えしかは。おきあかりての給はんとせし。みえ參らせしと思ふなめりとおほして。たゞあれ木丁つくり出んとて。御ひさをたくなして。陰にかくさせ給へりし御心のありかたき。今の心ちす。いつものまにかはりける世のけしきそと。萬の人たちの。そのかみの人ならぬ中に。我はかりありし昔なからの人。いかにむすひ置けるさきの

世の契にかと。物のみおもひつゝけられて。哀  
しのひかたきこゝちす。あけぬれは。いつしか  
とおきて。人々めつらしき所々見んとあれと。  
くしてありかはいか。物のみおもひ出られ  
ぬへければ。たゞほれてゐたるに。御前のおは  
しまして。いさ／＼くろ戸のみちを。おれらし  
らぬに。をしへよと仰られて引たてさせ給ふ。  
参りてみるに。清涼殿（昆明池）しう殿いにしへにか  
はらす。たいはん所（昆明池）こむめいちの御さうし。今  
みれは見し人にあひたる心地す。弘徽殿に皇  
后宮おはしましゝを。殿の御とのゐるところに  
成にたり。黒戸の小はし（牛）とみのまへにうへを  
かせ給ひし前栽。心のまゝにゆゝ／＼とおひ  
て。みはるのありすけか。

古今君かうへし一村溝むしのぬめしけきのへと成にけるかな  
といひけむも思ひ出たる。御溝水の流になみ  
たてる色々のはなとも。いとめてたき中にも。

萩の色こきさきみたれて。朝の露玉をつらぬ  
き。夕のかせなひくけしきことに見ゆ。是を見  
るにつけても。御覽せましかは。いかにめてさ  
せ給はましと思ふに。

萩の戸におもかはりせぬ花みて。昔を忍ふ袖を露けき  
と思ひいたるを。人にいはんもおなし心なる  
人もなきにあはせて。事のはしめにもりきこ  
えむよしなければ。承香殿をみやるにつけて  
も思ひいてらるれば。里につく／＼とおもひ  
つゝけ給はんと。をしはかりて。これを奉りし  
かは。

おもひわれ心をまふ諸ともにみし萩の戸の花ときくにも  
思へはさておなしさまにて。しありかせ給ふ  
たにさおほすなり。ましてつく／＼とまきる  
るかたなくおもひつゝけんは。をしはかられ  
てそありし。かくてあるし。昔今すこしおもひ  
出らるゝ。かくて長月になりぬ。九日御せ（面句）く参

らせなとして。十餘日にも成ぬ。つれ／＼なる  
ひるつかた。くらへやの方をみやれば。御經を  
しへさせ給ふとて。よみし經をよくしたゝめ  
とらせんと仰られて。御おこなひのつひて  
に。ふた間にてたちておはしまして認させ給  
ひて。局におりたりしに。御經したゝめてもて  
参りて。わらはれんとそおほしめして。あまり  
なるまてかしつかせ給ひし御事は。思ひ出ら  
るゝに。御まへにおはしまして。われいたきて  
さうしのゑ見せよと仰らるれば。萬さむる心  
ちすれと。朝かれゐの御障子の繪御覽せさせ  
ありくに。夜のおとゝのかへに。あけくれ目な  
れておほえんとおほしたりし樂を書いて。をし  
つけさせたまへりし。笛のふのをされたるあ  
との。かへにあるを見つけたるを哀なる。

笛の音のをされし壁の跡みれば過にし事は夢とおほゆる  
かなしくて。袖をかほにをしあつるを。あやし

けに御覽すれば。心えさせ参らせしとて。さり  
けなくもてなしつゝ。あくひをせられて。かく  
目に涙のうきたると申せは。みなしりてさふ  
らふと仰らるゝに。哀にもかたしけなくもお  
ほえさせ給へは。いかにしらせ給へるそと申  
せは。ほもしのり<sup>文字</sup>もしの事思ひ出たるなめり  
とおほせらるゝは。堀河院の御事と。よく心え  
させ給へると思ふもうつくしくて哀もさめぬ  
る心地してそゑまるゝ。かくて九月もはかな  
くすぎぬ。十月十一日大嘗會の御禊とて。天の  
下の人いとなみあひたり。其日になりて。播磨  
守なりさね御ひんつらに参りたり。内の大い  
殿朝かれゐのみすまきあけて。なけしの上に  
殿さふらはせ給ふ。ゑんに左衛門佐いとあか  
らかなるうへのきぬきて事をきてゝ。しはし  
ありて御ひんつらはてかたに成て藏人参り。  
女御たいめんにまいらせ給へりとそうすれ



は。聞せ給ひぬ。事ともすゝめよといそかせ玉ふ。事なりて。皇后宮なとめてたくしたてさせ給へり。かやうに世のいとなみ。やうく過て。今は五節りん時のまつりいとなみあいたり。ことしの五節は大嘗會の年なれば。例にも似す。上達部かすそひて。いとめてたかるへき年といひあひたり。女房たち我もくくと。御覽の日のわらはとて。ゆかしき事。とらの日のよすてに例の事なれば。殿上人かたぬき有へければ。いつれよりかのほるへきととひあはれたれば。いらへせんともおほえす。一とせ限のたひなりければにや。常より心に入て。もて興して。參の夜よりさはきありかせたまひて。その夜。帳臺の試などによふけにしかは。つとめて。御朝いの。例よりもありしに。雪降たりときかせ給ふて。おほとのもりおきて。皇后宮もそのおりにおはしましゝかは。御かたゝ

に御ふみ奉らせ給ふとて。御前にさふらひしかは。日かけをもちともに作りて。むすひぬさせ給ひたりし事など。うへの御局にてむかしおもひ出られて。物ゆかしうもなき心地して。まてなとわらはのほらんする。なかはし例の事なれば。うちつくり參りてつくるを。そきやう殿のきさはしより。清涼殿のうしとらのすみなるなかはしとのつましてわたすさま。むかしなから也。御前めつらしうおほして御覽すれば。くるゝまで御かたはらにさふらふにも。雪のふりたるつとめて。またおほとのもりたりしに。雪たかくふりたるよしをきこしめして。その夜御かたはらにさふらひしかは。諸共に具し參らせて見しつとめてそかし。いづも雪をめてたしとおもふ中に。ことにめてたかりしかは。あやしの賤家たに。それにつけて見ところこそは有に。まいて玉鏡よとつく

りみかゝれたる百敷のうちにて。諸ともに御覽せしありさまなと。繪かく身ならましかは露たかへす書て。人にも見せまほしかりしかと。をしあけさせ給へりしかは。誠にふりつもらたりしさま。梢あらん所は。いづれを梅とわきかたけなりし。仁壽う殿のまへなる竹の臺。おれぬと見ゆるまてたはみたり。御前の火たきやもうつもれたるさまして。今もかきくらし降さまこちたけなり。瀧口のほん本所そのまへのすい垣なとに降をきたる。見所ある心ちしておりからなれはにや。こせんのたちし。はせめての我心の見なしにや。かゝやきしまてに見るに。我ねくたれの姿まはゆくおほえしかは。常よりみまほしきつとめてかなと申たりしを。おかしけに覺しめして。いつもさそみゆると仰られて。ほゝゑませ給ひたりし御口つき。むかひまいらせたるこゝちするに。五節のお

りきたりしきなるより紅まてにほひたりし。紅葉ともにゑひそめのから衣とかやきたりし。我きたる物の色あひ雪の匂ひ。ふさ／＼とこそめてたきにとみにもえ參らせ給はて御覽せしよ。瀧口の本所のさうしなめり女の聲にて。すいかいのもとちかくさし出てみるけはひして。あなゆゝしの雪のたかさや。いかゝせむする。さをもえとりゆくましきはとよといひしをきかせ給ひて。是きけ。いみしき大事出来にたりとこそおもひあつかひたれ。雪のめてたささめぬる心地するとて。わらはせ給ひしなと。思ひ出されてつく／＼と思ひむすほるゝも。たゝも御覽ししらす。なのうちへくもやりもちたる物こはせて。いて／＼出てゆかぬさきにこはせよ。それいへ／＼とひきむけさせ給へは。うつくしさに萬さめぬる心ちす。御返事申なとするに。まされぬれはまかてな

んといへは。あなゆゝし。なと物も御覽せてといひあひたり。皇后宮合下の御方。つねよりは心こ  
とに。細殿の几張なにも。織物の三重の木丁に菊をむすひなとして袖口きくもみち色々にこほし出されたりしかは。過にし方。例はさやうにみたれさせ給ふ事もなかりしか。をとゝしもうへの御局に。人々のきぬとものの中に。よしと御覽せんを。上らう下らうともいはず。それかれをいたさん。わさといたしたるとはなくて。はつれてゐあひたるやうにせよとて。御手つから人たち引すへて。一のまには出せと仰られしかは。皆人の袖口能もりうたんなるに。我からきぬのあか色にてさへありしかは。ひとりましりたらんかけしきおほえて。是こそみくるしくやと申しかは。とをくては何か見えむ。あへなとその人といふ書つけてもなし。よもみえし。あなちちにせんとおほしめした

りし事なれば。とかなきやうにいひなさせ給ひて。すへてくろとのかたはらにつゝきたる小はしとみより御覽して。あの袖今少しさし出せ。これすこし引入よなと。もて興せさせ給ひし有さま。いかてかおもひ出さるへきをなとおほえて。目とゝめらるれ。とまりてなと思ふ程に。院よりせい話ぞ堂のみかくらには。すけ二人。さきくも参ると仰られたるに。一人そ辨のすけまいる。今一人は参らせ給ひなんやと。殿仰らるれば。その出たち事つけて。出なんとおもひて。むかへに人をこせよといはせたれば。くるゝまゝにをこせたり。道すから心やすく。夜のふけぬさきに出るにつけても。物のみぞ哀なる。こと人何事かつかうまつりなれし。御心に侍らひしおり。ふけしさまに所せかりし心地せし物を。まして出悦ひすとして。わひさせんとおほしめしたりしおりは。あや

にくかりて。とみに御手もふれさせ給はさりし物を。いそぎてまかてんと思ひしよの事ぞかし。宮の御方にわたらせたまひて。夜のふくるまで歸らせ給はさりしに。かろうしてまちつけ參らせて。すゝめ參らせしを。いかて心えさせたまひたりしにか。まかつる事仰られしかは。さにさふらふと申たりしを。きかせ給ふまゝに。うちふさせ給ひて。こよひは明かたに何事もせん。ねむたし。ねなんと仰られて。いかにつきなうそ見あへる物かなと思ふ人あらんと。ほゝゑませ給ひて仰られしかは。我は何の心にかさまでは思ひたまはん。待りたりとも。人いつはるとこそわひしからめと申せは。いつみもわひよ。いけもわひよ。我くるしからすと仰られて。御たゝみの上にうちふさせ給ひて。みつかはして。あはれゆゝしに。にくけにおもひたるさまこそしるけれ。いかゝせむ。

くるしければうちふしてやすむそかしと。しはし念せよかし。あなわひしなと仰られて。さまでもなき事をこちたけに仰られなして。わらはせ給ひし事など。思ひ出られなからまかてぬ。つとめてかたぬきまたしからんと思ひゐたる程に。かみつかひ。うつくしけなる文これまいらせん。内にもちて參りてさふらひつれば。出させ給ひにければ。こち參りさふらひつるなりとてさしいれたり。おもひかけすとおもふに。やまと殿よりといふ。とりてみれば。

そのかみのをとめの姿おもひ出ていと、戀しき雲の上人と書たる。

そのかみの忘かたさに雲の上もいつる日高くおとろかす哉とそかゝれぬるに。小安殿の行幸とてのゝしりあひたり。里よりやかて參る。大嘗會の事かかすともおもひやるへし。みな人しりたる事



なれはこまかにかゝす。御神樂の夜に成ぬれは。事のさま内侍所のみかくらにたかふ事なし。これは今すこしいまめかしくみゆる。みな人たちを小忌みのすかたにてあかひもかけ日蔭のいとなまめかしく見ゆるに。かさしのはなの有さま見る。臨時の祭みる心ちする。皆座につきて。をのくすへき事ともとりくにせらるゝに。殿も本末のひやうしとり給ふそうるはしき。ひのそうそくなる殿は今すこし人たちの座よりはあかりて。御さしきなれは。それにあさせ給ひたり。つかひのかさしの花さゝせ給ひたるみるに。さまかはりてめてたき。もとのひやうしあせちの中納言宗通の子の中將備中のふみち。ことそのおとゝのひちうのかみこれみち。ひちりきあきの前司つねたゝ。あまたゐたりしを。事なかけれはかゝす。かくて御神樂はしまりぬれは。もとすゑのはうしの

音さはかりおほきに。たかき所にひゝきあひたり。聲さゝしらぬ耳にもめてたし。みかくらやうくはてかたになると聞ゆ。せんさいせんさい萬さいくとうたふこそ。あまてる神の岩戸にこもらせ給はさりけんもことほりと聞ゆ。我君のかくいはいけなき御よはひに世をたもたせ給ふ。伊勢御神もまもりはくゝみ奉らせ給ふらむと。位たもたせ給はん年の數そひ。すゑはなか井のうらのはるく。と。濱の眞砂のかすもつきぬへく。みもすそ川の流いよいよひさしく。位の山の年へさせ給はん。誠にしら玉椿八千世にちよをそふる春秋まで。四方の海の浪の音靜にみえたり。かくてみあそひはてかたに成ぬれは。殿御こと。治部卿もつなひは。はうしもとのとくむねたゝの中納言雅實。しやうの笛内大臣雅實の御子の少將まさたゝ。笛ひちりきもとの人々御つかひにて。殿の御

聲にてまんさいらく出せとて。われうちそひ  
させ給ひ。ふたかへりはかりにて。あなたうと  
いせのうみなど。みたれあそはせ給ふ。むねた  
たの中納言拍子とりて出す。事はてぬれは。各  
さうそくぬきかへさせ給ふ。殿の御琴の音つ  
まをと。なへてならすめてたし。みなく人々  
ろくかたにかけてたつに。殿は人には今ひと  
きはまさり参らせて。御したかさねかち御そ  
かたにいたかせ給ひたるを見まいらすれば。

三笠の山にさし出る望月の。世々をへてすみ  
のほるらんやうに見ゆ。御年のほと<sup>五十</sup>と。誠に  
盛なる櫻の花の咲とゝのほりたらむを見る心  
ちす。御よそほひ。天りんしやうわうかくやと  
おほえさせ給ふ。たゝせ給ふとてたまはりた  
る物なり。をきてたつへからす。なめけなりと  
て。御かたにかけなからおはしまして。大しや  
うしの前にて。御子の中將殿をまいれ。これ給

はれとて。ゆつり参らせ給ふ。見参らすれば。  
二葉の松の千世に榮へむ御ゆくさき。雲をわ  
けてなりのほらせ給はん程たのもしく見えた  
り。事はてぬれは。車をたてゝやかてまかて  
ぬ。又の日。よへの名残めつらしく心にかゝり  
ておほゆるにも。先むかしの御名残おもひ出  
られさせ給へは。周防内侍のもとへ。たひく  
おほえて。けにと思ひあはせらるらむとて。い  
ひやる。

めつらしき豊のあかりの日影にもなれにし雲の上を戀しき  
かへし。

おもひやる豊の明のくまなきもよそなる人の袖をそはつる  
つこもりに成ぬれは。朔日の御まかなひすへ  
きよし仰られたれは。いそきあひたるにも。我  
はたゝ。わかれやいさとのみおほえて。つこも  
りの夜内へ参るとて。堀河院過るに。二條の大  
路堀河など。かいすみ物さはかしけに。人の出

入たるけしきみえす。目のみ先とまりて。

後拾遺  
つしな

と答ふる人もなけれとも宿の氣色そいふに増れる

とよみけむふるこしさへ思ひ出らる。うちみ  
ん人。女房の身にて。あまり物しりかほにく  
しなとそ。そしりあはんすらむ。かやうの法問  
のみちなとさへ。朝夕のよしなし物語に。つね  
に仰られきこえさせ給ひしかは。事のありさ  
まおもひ出らるゝまゝに書たる也。もとくへ  
からす。忍ひまいらせさらん人は。なにとかは  
みん。我はたゝ一所の御心の。ありかたくなつ  
かしう。女房しうなところかくはおはしまさ  
めとおほえ給ひしか。わすらるゝ世なくおほ  
ゆるまゝに。かきつけられてそ。

歎つゝ年のくれなは無人の別やいとゝとなくなりなむ

十月十餘日の程に。里にゐて。萬の事につけて  
も。おはしまさましかはと。常よりもしのはれ  
させ給へは。御すかたにこそみえさせ給はね

と。おはします所をかしといへは。香隆寺にま  
いるとてみれは。木々の梢ももみちにけり。外  
のよりは色ふかく見ゆれは。

いにしへをこふる涙のそむれはや紅葉の色もことにみゆ覽  
御はかにまゐりたるに。おはなのうすしろく  
成て。まねきたちてみゆるか。所からさかりな  
るよりもかゝるしも哀なり。さはかりわれも  
われもと男女のつかふまつりしに。かくはる  
かなる山の麓に。なれつかうまつりし人もひ  
とりたになく。たゝ一所まねきたゝせ給ひた  
れとも。とまる人もなくてと思ふに。大かた涙  
せきかねて。かひなき御跡はかりたに。霧ふた  
かりて見えさせ給はす。

花薄まれくにとまる人をなきけふりと成し跡はかりして  
たつれ入心のうちをしりかほにまれくお花をみるを苦しき  
はな薄きくたに哀つきせぬによそに涙を思ひこそやれ  
これをおる人いひをこせたり。

いかてかく書とめぬみる人の涙にむせてせきもやらぬにかへし。

思ひやれなくさむやとて書置し言のはさへそみれば悲しき我おなし心にしのひ参らせん人と。是をもらともにみはやと思ひまはすに。忍ひまいらせぬ人は誰かはある。されと我をあひおもはさるむ人に見せたらは世にわつらはしくもれ聞えんもよしなし。またあひおもひたらん人も。かたうとなとなからん人は。はへなき心ちすれは。此みかとにあひたらん人も哉と思ふに。

ひたち殿はかりそ。此みかとにあひたる人はあなれとおもひむかへたれは。思ふもしるく哀に心やすくわたられたり。日くらしにかきらひくらしして。

右申請 官本。俣源極庸俊治書之。與岩倉中將一校畢。

寛永十六稔臘十六

秘書郎

右讃岐典侍日記以奈佐勝皋本書寫以百花庵崇因本校合



群書類從卷第三百二十三

日記部四

辨内侍日記上

寛元四年正月廿九日。とみのこうちとのにて  
御讓位なり。そのほとのことともかすくしる  
しかたし。いとくめてたくて。辨内侍。

今日よりは我君の世と名つけつゝ月日し空にあふかさらめや  
三月十一日。官廳にて御即位。春の日もことに  
うらゝかなりしに。さまくのきしきとも。い  
はむかたなくめてたし。人々のすかたともめ  
つらかにみえ侍しかは。辨内侍。

玉ゆらに錦をよそふ姿こそ千とせはけふといやめつらなれ  
四月一日。平野のまつり也。上卿土御門大納  
言。秋定。辨。經俊。車。すけつ。くやく。ときつ。いたし

きぬ。若かへ御てうつまいらせよといふをみれ  
は。かみをぬらしてくしにはさみて。ことく  
しけに車へさしいるゝもおかし。松の木かけ  
風すゝしく吹て。けいきおもしろく侍しかは。  
辨内侍。

萬代と君をそいのる千早振ひらの、松の古きためしに  
おなし日。少將の内侍。松尾のつかひにたつ。  
上卿二位中納言。良教。辨。ちか。くやく。ためな  
車。かれといたしきぬ。ふ。しけき木するにほ  
とゝきすの初音をきつて。少將内侍。

千早ふる松のおやまの郭公神もはつねをけふやくと覽  
四月十三日。りむしに内侍所へ使にたちて侍  
しに。こむらうをとをりて。きやうてんのたむ

のうへなれば、夜ふけてめくる月かけ。さやかに見えしかは。辨内侍。

増鏡くらぬみよに仕へてそさやけき月のかけもみるへき五月五日。あさかれるに。かつみを參らせたるを。歌をそへてとりてまいらせよと。仰ことありしに。あやめと思ひて侍れば。ひきたかへたるもおもしろくて。辨内侍。

かつみおふる淺香の沼もまたしらて深くあやめと思ける哉五月の廿日あまり。在明の月くまなくて。ことにおもしろく侍りしに。御ちよくろにて御連歌ありしこそ。いとやさしく侍し。かた家ためつくはかりにて。人數もすくなかりしかは。いとまさりし程に。此ついてにこうたうの内侍のひはをきかはやと。仰ことありしかとも。月もいりかたちかくなりて。みなかへり侍にし。名残おほくて。つりとのかたにやすらひて。辨内侍。

月をみて思ひも出はをのつから忍はれぬへき有明のそらかへし。少將内侍。

思ひ出む後とはいはし今のまの名残の――有明の月七月七日。きかうてむの夜。頭中將。へ。事とも奉行す。あさかれるにて。こう當の内侍。こちたてられて。ちとかきならしていたされしこそ。いとおもしろかりしか。頭中將奉行からにや。今宵の雨もしめやかにふるなど。人々おほせらるれば。少將内侍。

しめくと今宵の雨のふるまひに奉行の人の氣色をそしるなど申せは。大納言殿ことにけうして。わらひ給もおかし。ことゝもよくなりて。うへの御つほねより二間にてみれば。ともし火の影かすかなるもおもしろくて。少將内侍。

ともし火のかけもはつかし天河あめ。もよにとや渡りかぬ覽返し。辨内侍。

星あひの光はみせよ雲ぬよりくもぬはちかしかさゝきの橋

八月十六日。御せ所へ行幸ありしに。萬里の小

路の大納言。公基。左衛門督。實藤。頭中將。雅家。

頭辨。顯朝。なんと參て。御あそひとも有。御留

主には。中納言のすけとの。宮内卿との。辨内

侍など。朝かれるのひろひさしにたちいてた

れは。かうらむにそへてたてたるむまかたの

障子はつれより。ほのかにみゆる月影いとわ

りなきを。いにしへ二條の後後涼殿に候給ひ

けむは。此一の對の程をかし。その世にもかく

や心つくしなりけんなど申出て。辨内侍。

むかしよりくもらすといふ月影をよかにみのは心なりけむ

還御のうち。これを聞て。少將内侍。

雲の上に猶澄なから秋のよの月をさやかになとかみさらん

八月晦日。女く所へさたまるへき内侍。朱雀門

へむかふへきにて侍けるに。少將内侍いたは

ることありて。代官にたて侍しに。風いとすく

しく吹て。みかさかはらおもしろく侍しかは。

辨内侍。

おほうちや古きみかきに尋きてみよ改まるけふにも有かな

九月八日。中宮大宮社の御かたより。菊のきせわたま

いりたるか。ことにうつくしきを。朝かれるの

御つほの菊にきせて。夜のまの露もいかゝと

おほえわたされて。おもしろく侍しかは。辨内

侍。

九重やけふこゝぬかのきくなれば心のまゝに咲せてそみる

十月一日。除目ときこえしか。十一日にのひ

て。土御門院の御忌日とて。ちむに公事あり

て。大宮大納言公基。萬里小路大納言公基など參らせ給

へり。職事とも。つねとし後。むねまさ宗雅。光國など

まいり。御いのりのことさためらる。十九日よ

り金輪の法てんちさいへむなとはしまるへし

ときこえし。奉行藏人侍従むねまさ。おりしも

あらはけしくさへたるけいき。いとおもしろ

くて。辨内侍。

やをよろつ祈るしるしもあらはれて霞玉ちる數もみえけり  
十月廿四日。河原の御はらへなり。その日の事  
ともめてたしといふもおろかなり。しとみや  
より見わたしたれは。はるかにいさこ地しろ  
しろとみえて。河風さえたりしに。辨内侍。

けふ社清き河原のいさこ地に千世へむ數もとり始むらめ

十一月十四日の夜。雪いとおもしろく。みちた  
えてつもりにけり。夜番にて。花山院宰相中  
將。師監もろつく。頭中將なと候けるも。院の御所へ

参りにければ。人々清涼殿へたちいて、みれ

は。竹にさえたるかせのをとまても身にしみ  
ておもしろきに。月はなを雪けにくもりたり

しも。中々見所あり。大宮大納言。きんす萬里小

路大納言。きんもなとまいらせたまひて南殿に

てよもすからなめ給けるか。曉かたことに

さえたりければ。うへのをのことも。殿上のお

りまつめしけれとも。つきたるよし申ければ。

ひろ御所のきたむきにて。かれたる萩の枝な  
と。おり松にせられけるときし。いとやさし  
くて。辨内侍。

霜かれのふるえの萩のおり松はもえ出る春の爲とこそみれ  
有明の月くまなかりしに。雪のひかりさえと  
をりて。おもしろくみえ侍しかは。常の御所の  
かうらむのもとへたちいてたりしに。公忠の  
中將。大宮の大納言殿の。すゝりこはせ給と  
て。もちてまいりしも。いつくの御文ならむと  
ゆかしくて。辨内侍。

明やうてまた夜は深き雪のうちにふみゝる道は跡やなか覽  
十四日のよ。少將内侍女く所へわたりゐて。心  
ちなをわひしくて侍りければ。なにこともし  
らすふしたるに。曉かた。はるかに雪ふかきを  
わけいるくつのをとのきこゆるにおとろき  
て。こゝちをためらひて。やをらおきあかりて  
きけは。大宮大納言殿よりといふこゑにつき



て。つまとををしあけたれは。いまた夜はあけぬものから。雪にしらみたるうちの、けいき。いつのよにもわすれかたくおもしろしといへは。なへてなり。御ふみをあけてみれば。

九重や大内山のいかならん限りもしらすつもる白雪かへし。少將内侍。

このへのうちの、雪に跡つけて遙に千代の道をみるかなその雪のあした。少將内侍のもとより。

九重にちよなをかされてみゆるかな大内山の今朝のしらゆき返し。辨内侍。

道しあらんちよのみゆきを思には降共のへの跡はみえなん十七日。雪なをいとふかうつもりしに。吉田の使にたちて。かへさに。しゆき<sup>主</sup>かたの女く所の事からゆかしくて。そなたさまやれと申侍しかは。くやく。<sup>ためもち</sup>六位のくるまのともものなとも。夜ふけてはるかにめくらむ事。かなふましきよし申侍しかとも。せめてたつね

まほしさに。吉田のつかひのかへりには。かならず女く所へたちいるしきにてあるそと申侍しかは。まことにさる先例ならはとて。はるはるとたつねゆきたりしに。ゑしかもむをそくあけ侍しに。今にはしめたる事か。吉田使のかへさに。内侍のいらせ給に。ことあたらしくあけもまうけぬかと。あらゝにいさめ申侍しも。かやうの事や。先例にもなり侍らむと。おかしくて。辨内侍。

とはましや積れる雪の深きよに是もむかしの跡といはすは十八日は。中のとりの日なり。<sup>實</sup>攝政殿参らせ給ひて。御くしそかせおはしますに。ものゝくにてまいるへきよし仰ありしかは。おりしもをしいたしの衣。よそひなきよし申て。なえたらむも又いかゝとて。辨内侍。

しほれたる衣なきせそおほうみの蟹の袖かと人もこそみれゆきかたの女く所は。こう當の内侍なり。この

程の雪さえとほりたる夜もすから。ことひきあかしたまふとききしも。ことにいみしくおほえて。辨内侍。

よすから野への白雪ふることも千世松風のためしにやひく少將内侍。女く所。左近ふのつかきの中なれは。はる／＼と見たされたるに。月のさえたる雪のうへは。かきりなく面白て。少將内侍。

いつのよも忘れやはせむしら雪の古き御垣にすめる月影ない衛士めふるとか。夫ともとるとて。になひたる

ものともうちをかせて。さま／＼つかはるゝなかに。こにもものいれてになひたるか。ことになきて。さしたる所へまかるに。かまへていとまたへと。なくやうにいふも。いと／＼をしくて。少將内侍。

身におへはさと思ふ覽たけのこてをはなつよの心迷ひにおかしけに。色々なるものとも。ぬひかけたれは。ゆきとけにぬれぬへくて。衛士ともうへに

のほりて。雪かく音もおもしろく。みゝにとまゐるこゝちして。少將内侍。

あはらなる板屋の軒のしら雪のかくはかりなと降つもる覽ことにかせふきさえて。おそろしき程なりしに。奉行辨ちかより。うちのゝ風に吹すゑらるる心ちして。たへかたくて。つや／＼とものもいはれす。けさよりきやうし所へのかせにふかれて。何事もおほえす。かゝるたへかたきことなしと。ふるひ／＼いはるゝも。まことにことはりとをかしくおほえしに。女官とも。辨殿こそ。まいらせ給ひたれとて。ひしとならひいてそめく。さなにかさかりて。御ことかけはてなんすと。こゑ／＼申侍しかは。すへてふるはれて。ものもいはれはこそとありし。おかしくて。少將内侍。

言の葉も思ふにさこそなからめ吹とふくよの風の景色に廿二日。官廳へ行幸ならんとて。かねて中宮の

行啓也。

廿日。よひ月まぢいつるほとに。ふけてそいら  
せおはします。藏人のすけ。經後。内侍たつぬと  
き。奏事にやあらんとて。たいはむ所のぬ  
いの障子のもとにてまつ程。行啓の供奉の人  
人。こなたさまへくるをとして。中宮權大夫。  
通成。花山院宰相中將。師繼。頭中將。雅家。通世の  
少將など。ゆつえのをとまでも。さえとをりて  
おもしろきに。きりみすのほとに。藏人の侍従  
むねまさか聲にて。ゆゝしき月の光かな。しろ  
うすやうのころこそ。思ひやらるれといふ。け  
にかきりなくみゆれば。辨内侍。

かねて思ふ豐の明のさむけをなましていかにとすめる月哉  
廿二日の曉。官廳へ行幸あり。ことにさむくて  
雪さへこほりたるに。あからさまにしつらひ  
たる御所なれば。大さうの御屏風のすきまの  
風に。雪のちりくるもいとおもしろし。大宮大

納言殿まいらせ給て。やふれたる御かうしと  
も参りわたり給ふ。御所はたかみくらむきな  
り。かはらのむねに雪しろくつもりたるに。只  
今も修理しきとものほりて。おのゝをとまた  
たこゝもとにきこゆ。清涼殿は、つねの御所の  
御障子のあなた。二間をしつらひて。御拜の座  
とす。くるゝとよりしもは。おもものやとり御つ  
し所也。つほね一まを四にへたてゝ。二三人つ  
つあひいたれば。せはきもわりなし。中宮の御  
かたへいらせおはします。御みちはつまとの  
ひとまより。せいそたう見わたされて。いと  
おもしろし。かりそめにしつらひたれば。人々の  
あしをとまでもおかしうきこゆる。今宵は帳  
たひの心みなり。清涼殿にしつらひたる二間。  
殿上のくしかたあるまには徳大寺の大將。  
を。はしめて上達部のいたしつまのすかたと  
も。めとまりてそ見ゆる。常の御所の御障子の

かたは。たいはむ所なり。女房たち袖をつらねていなみたり。なかにたいそうの御屏風をた

てたれとも。ひきくて。御所へ参る人々も。あなたの方卿ともに。めをみあはするもまはゆくて。むかし女房のやうに。いさりありきしもおかし。あらこものやうなるものをしきたれは。おりものゝきぬのすそは。みなちにそなりし。あらしはけしく吹て。へたての屏風つゝきてたをれにしかは。わた殿までみわたされたる。はれゝしきかきりなくて。辨内侍。

へたてつる風のたよりもおしなへてさらにを豊の明也ける少將内侍。くろ木のやへむかひて侍けるに。かみあけのくをとおりおとして。官廳のつほねへこひにたひたりしに。是にもさしあふほとにて。かなはさりしかは。ことゝもよくなりて。とくゝとたひゝせめられしも。たへかたくて。少將内侍。

しはしまてうちたれ髪之差櫛をさし忘れたる時のまはかり後にこれをきゝて。辨内侍。

さしくしのさしあふほとの時の間はうち垂髪も我を亂れしとらの日は。みやの御方のえむすいなり。夜も更にしかは。御所も御よるにならせおはしましたりしか。しろうすやうのこゑに。御めさまして。又出させおはします。をのゝたちてまひ給。右大將。實基。三と。大宮大納言。公相。五度。萬里小路大納言。公基。四度。右兵衛督。有實。いたしうたなり。左衛門督。實藤。ときこえしか。俄にきやうふくになり給ひし。いとゝほなし。又は花山院宰相中將。師繼。中院三位中將などを見えし。その夜はちこのまつりの使にたちたりしに。顯朝の辨。院の推参えんすいなどとはてゝ。まいりたりしかは。あかつきになりて。宮のことからも心すみて。物の音しらへたるも。おりからおもしろくて。辨内侍。



今宵しもいかなる神の誓にてものゝねならず跡となりけむ  
藏人の侍従むねまさ。いそきないらんすへし  
とて。いそきの節會より。しうきにうつらむ  
に。御隨身はなをしたかふへきにやと申侍し  
を。あまりにことしけくて。え申とをさゝりし  
かは。しきりにいそき申へきよし侍しを。中納  
言のすけとのたゝなかにて。歌などにてはか  
らへかしときこえしを。さしものことのまき  
れに。なかめいたしたらむ心つきなさと。おか  
しくて。心にはかくそおほえし。辨内侍。

さしも身にしたかふ夜半の月なれは移る方にそ影は廻らめ  
卯の日は。せいそたうのみかくらなり。中宮の  
御方へまいるみちにて。人々きかはやとあり  
しかとも。攝政殿候はせ給ひて。いとくちお  
し。清涼殿のかたへたちいてたれは。職事とも  
たちならひたり。又きぬかつきかさなりて。さ  
らに道なし。つねの御所の御帳のもとに。人々

のろくともにたきものなとして。ほのかにき  
きしかは。大宮大納言ひは。花山院大納言ふ  
え。兵衛督ひやうし。面白ともいへは中々な  
り。辨内侍。

雲より猶はるかにやきこゆらんむかしにかへす朝倉の聲  
ことゝもはてゝ。大宮大納言殿。常の御所へま  
いり給て。勾當内侍とのに。ほくはのねはいか  
か侍つるとありしかは。かの大こくてむのひ  
はのねとかやのやうに。いつくまでもくもり  
なくこそと申給も。けにかきりなくて。辨内  
侍。

いにしへの雲井にひくひはの音に引くらへても猶限なし  
辰の日は節會也。たかみくらへいらせおはし  
ます。たかきいしはしに。はかまのふみところ  
たとられて。扇もさゝれす。いとわりなし。其  
夜のことゝものめてたさ。いひつくすへから  
す。辨内侍。

雲のうへと思ふも高き古への道をそあふくけふのみゆきは  
 節會はてぬれば。わらはのはり。露臺の亂舞。  
 御せむのめしなとはて。せいそたうの月のあ  
 り明のかけ。あかす身にしてみて。おもしろき  
 を。人々なかめて。辨内侍。

九重によをかされつる雪のうへの有明の月をいつか忘れむ  
 かくて閑院殿へいらせおはしまして。大内裏  
 の事おもひいて。辨内侍。

雲ぬにて有し雲井の戀しきは古きを忍ふ心なりけり

臨時祭は十二月一日ときこへしか。のひて十  
 二日也。日來ふる雪さえとほりたるに。いしは  
 いの間にかへりたち。つく／＼とまちいたり  
 し。ひえさまもいとたへかたし。少納言内侍少  
 將はいせむのいくさあらそひして。しかれし  
 もおかし。攝政殿。公卿には花山院宰相中將は  
 かりそみえし。職事光國。庭火のかけに月のひ  
 かりさえて見えしも。おもしろくて。辨内侍。

あか星のこゑもさこそはすみぬらめ庭火に月の影を移るふ  
 内侍所の御神樂は。十二月十五日なり。すけ。  
 按察しす。内侍。言。少納言。月いとおもしろくて。人々い  
 さなひできくにおはせしか。中院三位中將。雅  
 忠の中將など。こむらうのかたにみえしかは。  
 むなしくてたちかへりたりしを。大納言殿。こ  
 のせきもりの心つきなき。いか、おもふとお  
 ほせられしかは。辨内侍。

うちもねぬその關守のこゝちしてとをさぬ道に立かへる哉  
 廿一日。せちふむの御方達の行幸。官廳へなり  
 たりしに。ありしよの事思ひ出られて。清涼殿  
 にしつらひたりし所に。少納言内侍とよもす  
 から月をなかめて。辨内侍。

あかさし雲井の月のこひしきにまためぐりさぬ有明の影  
 廿四日。久我太政大臣のかたせち會なり。夜ふ  
 けて殿まいらせ給ひたりしに。かみあけの内  
 侍にて。少納言とふたり大はん所に候しに。夜

はふけぬるか。うしのくひのほとかとゝはせ給ふを。たれも何とも申さゝりしを。少納言心のうちに。御返事さためてありつらむ。いかゝときこゆれば。辨内侍。

轉染に日つ過なましさよ中の丑のくひともさしてしらすはやくしの御修法。十二月十八日よりはしまりて。廿四日けちくわむときゝしか。のひて廿六日佛名の夜。けんしゝまもりたてまつるとて。つく／＼と候しに。のりのこゑ／＼いとたふとくて。辨内侍。

七日そと思へはあかぬ<sup>ら</sup>目のへておこなふ法の聲を聞ゆる寛元五年。元日のはいらいのけひき。ことにめてたくて。辨内侍。

今日そとて袖をへらぬる諸人のむれたつ庭に春はきにけり七日。白馬節會也。春の日かけもうらゝかなるに。内辨のよそほひゆゝしくみえしかは。辨内侍。

右大將殿九條殿

とれりめす春の七日の日のひかり幾萬代のかけかめくらむその夜。はくはのわたるをみて。辨内侍。

ひきつれてうちもたゆまぬ駒の足はやく此よは更やしめ覽十九日。攝政かはらせ給とて。せんきせらる。上卿二位中納言。良教。職事頭辨。顯朝。そうたてまつるほど。おりしも月くもりかちにて。なにとなくものあはれなれば。辨内侍。

はるゝよの月とは誰かなかむらんかたへ霞める春の空かな奏したてまつるを。御ゆとのゝ上にて。少將内侍みてちやくたうせられたるかや。かみのさうしのつまをやりてかきつけたる。少將内侍。色かはるおりも有<sup>近事イ</sup>けりかすかやま松をときはと何思ひけむこれをみて。辨内侍。

かすか山松はときはの色ながら風こそしたに吹かはるらめ日記の御雙子三帖。おほたいりの比。中納言のすけ殿にあつけさせ給たりしを。光國申いて。返しまいらすへきよし申侍しに。なにとま

れ申さはやといふことにてありしかとも。御なけきのほと心はかりはよういせられて。辨内侍。

濱千鳥あとをかたみの恨みたに波の上にはいかゝとゝめむ廿三日。御拜の御ともに。大納言殿中納言のすけとのなとまいりて。二間のすのこのもとにたち出給へるに。餘寒のかせも猶さえたる。くれ竹に日はてりなから。雪のふりかゝりたるを。中納言のすけとの。文屋のやすひてかいとひけむこそ。おもひよそへらるれ。さすかさほとのとしにはあらしとやなときこゆれは。辨内侍。

たか身にかわきていとはん春の日の光にあたる花のしら雪二月廿八日。年號かはりて寶治といふ。ちんのさための人々。大藏卿八條大納言。通忠みちた。土御門大納言。顯定。のこりの人々は。きゝしかとわすれにけり。攝政殿。わかのやとのまいらせ給

兼經。

て。いにしへの陣の定に。四納言たち。いかにゆゝしかりけむ。さてこそ。てる少將。ひかる少將などは。つかさくらゐたかくのほらむとおもふは。身のはちをしらぬなりけりとおもひとりて。世をのかれけめなど。ふることかたり出させ給も。けに思ひやられて。辨内侍。

いにしへに定め置くことはな今もかされて思ひやる哉三月一日。ことうの御神事に。きやうふくにて仁壽殿のつまの局にわたりゐたりしに。左衛門の陣むきなれは。東三條の木するも。ちかくみえわたされて。いとおもしろし。けふは陣に公事ありて。經光の宰相。頭中將。頭辨もまいり。たきくちともしたかひてみゆるもおかし。宗雅光國なども参る。花もさかりにいとおもしろきに。おりしも大宮大納言参り給。なをしすかた常よりも心ことに。にほひ深くみえたまひしかは。辨内侍。あなかりきぬきたる人そ御ともにありし。



花の色にくらへて今そ思ひしる櫻に増る匂ひ有とは

三月九日。左衛門督。實藤。夜番にまいり給て。

こよひは宿をとほすへきよしありしに。衛門督。通成。もまいりたるよし。きかせおはしまし  
て。なにことにても。おもしろからむ事なくては  
ほむなしとて。殿上にたれ／＼かさふらふ。  
せう／＼めしてまいるへきよし。有資卿うけ  
給はりて。公忠。公保。通世。隆經やうの人々ま  
いりて。五節のまね亂舞なとはて。左衛門  
督りやう山みやまの五よう松。右衛門督。兵衛  
督つけうた。おもしろしとおろかなり。今夜  
のなこりをとめはやと。人々ありければ。辨内  
侍。

いつはりのとしもいかゝ忘るへき豊のあかりは時そともなし  
中宮の行啓は。やよひの頃なれば。其程に人々  
いさなひて。いつくの花も雲井よりとてたつ  
ねむに。さかぬ櫻はあらしなと。萬里小路大納

言殿のたまひしかとも。なにとなくてやみに  
し。くちおしくて。辨内侍。

花みむと頼めいとやいかなれば尋ねはかりのなたに留らぬ  
返し。少將内侍。

華咲の花やあたなに立ぬらん空たのめにも成にける哉

三月廿一日。御いのりともあるへしときこゆ。  
藏人の侍従奉行す。金輪法は太政大臣殿。佛眼  
法は殿の御さたとそきこえし。さきの座主仁  
壽殿に候はせ給へき御しつらひに。なにとな  
くよもふけぬと思ふに。もむしやくのこゑき  
こゆ。たゞいまうてはなと申さうりけるにか  
とたつぬれば。こよひはくわんそうとて。陣に  
公事ありてといふもことはり也。なにとなく  
おもしろくて。辨内侍。

我ならぬ人もさこそは聞つちめ曉かたのたきくちのこと

廿三日は季の御讀經也。大宮大納言。萬里小路  
大納言。左衛門督まいりて。皆御所へ御まいり

有。殿より。かてのえたに手まりを付てまいらせさせ給ひたるを。中納言のすけとの見たまひて。こそさきのとより。ふねにまりを十つけられて。まいりたりしこそ。おもひ出らるれとて。なにとなく。ふねのとまりは猶そ戀しきと。くちすさみ給へは。辨内侍。みなと川なみのかゝりのせとあれてと。つけたりしを。是を一首になして。返す人のあれかしときこゆれば。辨内侍。

いかにしてかけたる波の跡や、そのうきたる舟のとまり成覽  
花山院宰相中將。西園寺のはなみの御幸の御  
供にまいりたりけるまに。はゝのうせにける  
を。ことになけかるゝよしきゝしも。いと哀に  
て。少將内侍さとなりしに申つかはし侍し。辨  
内侍。

かなしさのさらぬ別をしらすしてちよもと花の陰や頼めし  
返し。少將内侍。

春との花 又ともたのみなむさらぬ別れよいつを待らん  
三月廿八日。洞院敦實攝政殿の十三年に。せんにん  
門院。御とし十九御くしおろさせ給ときゝしおりし  
も。雨降ていと哀なりしかは。少將内侍のもと  
へ。辨内侍。

たちなれぬ衣のうらや春雨にはしめてあまの袖ぬらす覽  
かへし。少將内侍。

津の國の難波もしらぬ世中にかあまの袖ぬらすらん  
權大納言ひるはむに参りて。常の御所のかう  
らんのもとにて。なにとなき御あそひあり。公  
忠。公保。資保なども候。みかはみつに山ふき  
の花のなかるゝをみて。大納言新吉野川と見  
ゆものかなと聞ゆるを。御殿のうへのうへには。人々  
もいとおもしろくこそ。なにとまれ申さはや  
なとありしかは。心のうちに。辨内侍。

山ふきの花の陰みる水なれはうつすよしゝ、河といふ也  
卯月十日のころは。太政大臣殿北山におはし

ますほと。女房たち。ほとゝきすのはつ音たつねにおはしましたりけるに。甲斐々々しくまいたりりしか。我心のうち。うたによめと有しかは。辨内侍。

いとはし何方よりも尋ねとへあかぬ名残にきなは返さし最勝講は十八日よりなれば。結願廿二日也。行香にたつ人々。左大臣殿。近衛殿。花山院大納言。たさま。權大納言。さねを。なとそ。御あかしのひかりにはのみしりたりし。さならぬ人々はいとみわかつ。殿はおにの間に候はせ給ふ。きゝもしらぬ論議のこゑも。結願なにとなく名残おほくて。辨内侍。

くらへみる御法のちゑの花ならはけふやはつかに雷開けん花山院宰相中將。く。もろつ。いろにてこもりいられたりしに。南殿のたち花さかりなりしを。一枝おりてつかはすとて。兵衛督とのにかはりて。辨内侍。

あらさらむ袖の色にも忘るなよ花たちはなのなれ。匂ひを返し。宰相中將色のうすやうにかきて。しきみの枝につけたり。

いにしへに馴し匂ひを思ひ出て我袖ふれははなやゝつれむ五壇の御修法は。十七日よりはしまりて。七日なれば。廿三日けちくわむなり。こよひはいとなこりおほくて。曉の御時に。かならずちやう聞せむなといひて。月のかたふくまで。常の御所の御えんのかうらむにおしかゝりて。兵衛督殿。勾たうとの。少將辨など。なにとなきそそろ事ともいひかはして。とのゐすかたもつましきに。唯いま人のまいりたらんになといへは。これほとふけたるに。たれかはこゝにものせんといふ程に。按察使殿まいらせ給ひてのち。御ゆとのへとをりのたてしとみに。かふりのさきのみへつる心ちのする。人のおともしつるにやなといひ出して。あなたさま

にたれか候。いさとはんとて。女主人にやたかつんししてたつぬれは。三條の中納言殿。公親。こそおはすれといふ。あなあさまし。たてしとみのうへよりも。よく／＼見えぬらんと。心うかりなけくほとに。あかつきの御時のかねのこゑきこゆれは。ちやうもむして。たゞいまふかくなけきつるつみもうかふらむとおほえて。いたうとくて。辨内侍。

何となき心のつみも消ぬらん月もあり明のかれのひゝきに六月一日。つちみかとの中納言。あきちの夜はんなり。その日は院の御所のも。よはんなりけるにや。いとくひるほとにまゐりて。かくとこうたうの内侍とのにきこえさすれは。めつらしくこそとて。あひしらひ給を。きりみすのもとにてのそけは。なをしの色はなやかに。ことにひきつくりひて。にほひふかくみゆ。今の世にはこれ程なる人も有かたしなと。人々も

きこゆ。番にもけたいなくまいり。さらぬ奉公もおこたるましきよしなと。こまやかに聞えてたちぬるなこりも。なにとなくとまるこゝ地す。たきのくちよりいてむを。ひろ御所にてやみるへきなといふほと。殿上にひさしくたすみて。にぎうの御ふた。ちやくたうなと見て。とのもんつかさにもものいひ。着到つけてもなをいてやらす。なりいたのほとにたちて。なにゝもめとまるけしきなるを。いかなることにか。さき／＼は院の御所に心のひまなき人にておほろけには。番にもまいらぬに。あやしきこそなといふほとに。つきのひきけは。はや此あかつき。りやうせんにて世をそむきぬときくも。むかしものかたりをきく心ちして。あはれさかきりなくおほえて。辨内侍。

そむきえて心もかせも涼しさの岩のかけちを恵ひこそやれ八日。けふはひるのはんにまいらしものを。



くまのゝみちのほとにてやあるらむと。あはれにて。大納言とのに。辨内侍。

たひ衣たちて幾日に成ぬらんあましかはとけふを悲しき時繼の辨まいりて。たいはむ所にてしんこむしきの御神事のこと申侍しついでに。土御門中納言のことあはれさ。こゝろ有人のめてぬはなし。うき世をしらぬ人は。ちくしやうに人のかはをきせたとこそきゝ侍れといふも。けにかなしくて。辨内侍。

かく聞は流石身の毛もたつものをとりに劣らぬ心なれとも七月十五日。月いとおもしろきに。清涼殿いかならんとおほせことありて。只今は御前にまゐるほとなれば。御かうしもすへらす。御丁のもとにて。御覽せさせおはします。ことにくまなくみゆれ。はいせむ爲氏なり。

今宵又はしめの秋のなかはとてかすゝ月の影をみちぬる十六日。除目なり。殿まいらせ給ふ。つねとし

みつくなるとまいりて。たいはむ所に。内侍もてそうまつへきよし。つねとし申侍しかは。内侍たち月なかめて。何事も物をまつはひさしきやうにおほゆる。夜もすからもなかめあかしてのみこそあれとも。これまでも。公事とおもへはこゝろもとなきなといひて。辨内侍。

是も又侍となれば秋のよのふけぬさきにと月をみろ哉御ゆとのゝうへに。少將内侍候しに。女主してきこえたれば。かへし。少將内侍。

心にもあらで今宵の月をみて更ぬさきにと誰を待らん八月一日。中宮の御方よりまいりたりし御たきもの。よのつねならす匂ひうつくしう侍しかは。辨内侍。

けふはまた空焚物の名をかへてたのめは深き匂ひとそなる院の御所の辨内侍。こうたうの内侍のもとへ。はきのとの萩はさきたりやとたつねられたるに。一枝おりてつかはすとて。こうたうの内侍

にかはりて。辨内侍。

秋をへて馴こしにはの萩のえにとめし心の色をみせはや  
かへし。

思ひやる萩のふるえになく露はもとみし人の涙なりけり  
十一日はしやくてんなり。あさかれいにて。あ  
りつくそうす。ゆゝしきみちの人々。詩つくり  
てあそふらんこそゆかしけれ。なとこの殿上  
なとにてなかるらむ。さもあらは。たちきゝて  
むなと。人々おほせられしかは。辨内侍。

道しあらは尋れてそ聞ん敷嶋や倭にはあらぬ唐のことは  
八月十五夜。常盤井とのにて。院の御會侍し  
に。大宮大納言。萬里小路大納言。藤大納言。爲  
家。權大納言。實雄。右衛門督。通成。吉田中納言。

爲經。ためうち。ためのもりなと。さらぬ殿上人も  
侍しかとも。これこそとをりにみえし。花山院  
の大納言。定雅。はすこしさかりて。歌講せられ  
しほとにそまいられたりし。月はくもりかち

にて。いとくちおし。このあかつき。みくしけ  
とのうせさせ給ひぬときこえしほとなれば。  
よろつもの哀なり。御連歌なともありき。また  
みるかけのなかるらんといふふることの。御  
くちすさひにきこえしものとあはれにて。辨  
内侍。

秋のよのうき雲はるゝ月はあれとまたみの影に誰忍ふらん  
十六日は。こまひきなり。上卿中納言すけすゑこよひは月ことには  
れて。いとおもしろく。あきともの辨。十五夜  
にはおそれをいたき。すましたる月かな。内侍  
たちこれにかとて。夜への月のくもりたりし  
も。身のとかのやうにうれへありくもおかし  
くて。辨内侍。

澄まざる今宵の月のいかなれば半よりけにさわけかるらん  
みくしけとのひきわけのつかひは。公保の中將ときこえし  
か。にはかにきやうふくに成てまいらぬよし。  
きかせおはしまして。たれならむと御たつね  
公忠の中將とそ

ありしに。辨内侍。

雲井よりこなたかなたへひきわけの使は誰そきりはらの駒月のあかゝりしよ。清涼殿のまこひさしに人あまたあそふ中へ。中宮大夫。隆親。あふきのつまをゝりたるにかきつけて。

よるつよもすむへき月の影そとはいかにか今宵契をくらん少將内侍。

契ありてすむへき月のかけ迄も空にそしるき秋のよるつよ辨内侍。

萬代とちきりをきてもあり有月にともなふ雲のうへ人權大納言は夜番にまいりて。はきのとにて御あそひ侍しに。たゞいまはなにの時そと御尋あれは。おきてゐの時と申給へと。よるのおととには。内侍もねなんとせしかは。ゐよりはふけぬらんとて。辨内侍。

たゞいまはおきてゐそとはいふめれと衣片敷誰もれなゝん中宮の御方へ御使にまいるとて。はきの戸の

すいかゐよりみれは。花もさかりにおもしろきに。きりたちわたり侍しかは。辨内侍。

よゝに咲ふるえの萩のもとなれはきり立渡り鷹をなくなり(るい)こうたうの内侍のつまのつほねにて。よもすからひは引あかし給しを。按察三位殿の心のうち思ひやられて。いとこそおもしろれとおほせられしかは。辨内侍。

あまそゝき袖にや露のかゝるらんかはの月の影を更行九月十四日。殿の上表也。ことゝもはてゝ。夜ふくるほとにまいらせ給ひて。あまりに月のおもしろきに。女房たちさそひて。月み侍らむとて。南殿つりと<sup>六十二</sup>のなとの月御覽す。かやうの月のよは。むらかみ一條院の御ときは。わかきかんたちめ殿上人など。いまやううたひ。と經あそひなと侍けるに。まいりてあそふ人のなき。いとこそくちおしけれ。こよひのはんの人<sup>は</sup>はたれか候つるとはせ給へは。萬里小路

大納言たゞいまゝて候つるものを。いましはしなと申いてゝくちおし。すけよしといふ六位めし出て。月みるへきやうなとおしへさせ給も。いとおかし。あかつきかたにもなりにしかは。御ちよくろへいらせ給ひしに。兵衛督との御なこり申さはやとあらまして。辨内侍。

いさといひてさそはさりせは久方の雲の月を誰か詠めむおなし月の比。萬里小路大納言。按察のすけとの。中納言のすけ殿なとさそひて。かはよりあなたまて。夜もすからあそひてかへり参りたりしに。按察三位殿きかせ給ひて。いとおもしろかりけることかな。かはをへたてたる戀といふ題にて歌よめとおほせられしかは。辨内侍。

袖ぬらすかはよりをちにすむ月のかけにも人を戀や渡らん秋のよなかくていとつれ／＼なるに。御よるのゝち。大納言との。按察すけとの。中納言の

すけとの。少將辨。歌をつきてあそひ侍しに。こうたうの内侍とのはましらしとて。つまのつほねにてことひかるときゝて。按察のすけとのうらみやらはやと侍しかは。辨内侍。

和歌の浦にうらむる波も有ものを松のあらしよ心してふけ中宮大夫たかつむしといふ女主に。かくいははやとおもふいかゝとて。

思ひそむる心の色そまたみせぬよそめ計りに年はへぬれと女主にかはりて。辨内侍。

人しれぬよそめ計りにかひもなしみえぬ心の色をしらはやつねの御所の御つほに。秋のくさともうへられたるなかに。かしらけつらすといふ木の。ちいさくていたひけしたるを。いはのはさまにうへられたるを。權大納言見給て。かしらけつらすとこそあかくさけなれときこえしを。いとおかしと人々おほせられしかは。辨内侍。

亂たるそのなはかりの黒髪につけの小櫛もいかゝとるへき



月あかきよ。おなし御つほねの菊。いとおもしろきぞ。左衛門督<sup>實藤</sup>。おりてまいらせられたる枝の残り。またおりてまいらせよと。おほせことありしかは。辨内侍。

月かけに折けん人の名残とて結びなとめそ菊のした露<sup>らゐ</sup>

おなし比。大宮大納言。萬里小路の大納言。左衛門督。なへてならすうつくしう見ゆるきくともをまいらせて。御つほにうへられたるを。いつれにてもことに見えむ一枝。おりてまいれとおほせことあれば。辨内侍。

いつれとか分てもおらむ色々の人の心もしらきくの花

五節は十六日よりはしまる。月ことにさえておもしろし。丁たいのこゝろみ。ふたまよりやをらみやりしかは。攝政殿<sup>家經</sup>。あつゝま。實基。内大臣殿。こは。おほみやの大納言殿<sup>公相</sup>。まつか。のこりの人々はいともみえわかす。とらの日。月いとあかきに。五節所へ行幸なりしに。攝政殿まいらせ

近衛殿

給。左大臣殿御供にまいらせたまひたりしか。御ふむとていたされたりしくしを。御ふところへいるゝよしにて。さながら御袖のしたよりおとさせ給ひし御ことから。いひしらす見え給ひしかは。辨内侍。

霜こはる露の玉にもあらなくに袖にたまらぬ夜半のさし櫛御覽は。殿いたさせ給ふ。わらはもなへてならすみえ侍りき。ひとりはふるきはしたものの。ふくらかにうつくし。いま一人はいつくのきみとかや。ほそらかに思ひいれたるけしき。とりとりなり。人々ことにもてなして。かさみの袖なとつくろひ侍るもめとまりて。辨内侍。

あかすみるをとめの袖の月影に心やとまる雲のうへ入節會は十八日なれば。月いとあかゝりしに。めしにすゝみて侍し。御階の月わすれかたきよし。中納言のすけとのに申いてゝ。辨内侍のかみあけのきぬ。ゆきのしたのこうはい。

雪した梅のにはほも袖さへすゝむみはしに月をみし哉  
權中納言五節いたさるゝときゝて。くしこひ  
たてまつるとて。辨内侍。

思ひやれ誰かはみせんこゝのへや豐の明のよはのをきくし  
返し。大納言。

たれこめて豐の明もしらさき君こそみせめよはのさし櫛  
いたはることおはしけるともしらて。申たり  
けるも。けにこゝろつきなくて。辨内侍。

たれこめし比ともしらぬおたりに豐の明の月は更にき  
臨時のまつりの御うま御らむのよ。大宮大納  
言まいらせ給て。御所にをかれたる風流に。  
九十くもといふこゝろしたるたなをみたまひ  
て。あれをかくしたいに人のうたよみたりけ  
る。なにはうくしうくもえせしとかやなとい  
ひてわらひ給。いさおりくに歌よまむときこ  
えさすれは。程なくものにかきて。御丁のもと  
にさしをきたれはいとこそはやけれ。かへる

はなにからとかやうのやうに。かゝるこはき  
ことこそなけれとて。大納言殿。

くるゝよはしのゝは草のうはゝまで碎くる露のもる時雨哉  
少將内侍。

雲の上やしるきみ垣の内にのみくるゝよすからもるや殿守  
辨内侍。

吳竹の霜をく夜半のうは風にくもらぬ月のもるをみる哉  
叙位に。たきくちのすくるをきけは。こひと思  
とてなと。さまゝなこりおしむときくほと  
に。たちかへり。うれしやみつとはやす。いつ  
しかいかにとおもへは。なかやす一朧になり  
たるよろこひやときくも。うつりかはるほと  
なさおかしくて。辨内侍。

しほりつる袖の名残を引かへてつゝむあまりになる瀧の水  
廿四日。記録所の行幸なり。萬里小路大納言。

左衛門督。されふ右衛門督。みちな右兵衛督。あり

頭中將。まさち頭辨。あさとなとまいりて。れいの

さま／＼おもしろき御遊とも侍しに。いつれかことにおもしろくおほゆると。人々おほせられしに。少將内侍。左衛門督のことのねなをすくれてきこゆるよし申て。

柏木のはもりといへる神もきけそのことの音に心ひかすは五せちのまねのいたしうたは。なをまさりてこそとて。辨内侍。

ことの音に心はひかす柏木のはにふく風のこゑそ身にしむ權大納言はをそく參給ひて。御よるになりてのち。御かうしのとにたゝすみて。さすやをかへのまつのはのと。返々なかめたまふも。みゝにとまりて。きく人もやあらむとおほえて。辨内侍。

夕月夜さしてしるへきかたそなきつれなき松にそむる心を後夜にうつるかねのこゑ／＼きこゆとてくわむきよなりぬ。人々みな出給ふに。ちかき火ありとて。少々はさふらひ給。權大納言女房たち

なとともなひて。南殿のかたさまにてあそひ侍しに。左衛門のちむのはしに。霜のしろくさえたりし。さむくつめたさかきりなかりしもおもしろくて。辨内侍。

をき迷ふ霜もさながらさゆる夜に誰けちかぬるほは成覽寶治二年。母のいみにてさとに侍しに。いはし水のりむしの祭廿日おもひやりて。辨内侍。

日影さす春のかさしの色々もおりしらぬ身の程そかなしきおなし比。夏のひとへをたまはせたれば。辨内侍。

かゝる身は時しもわかね衣手にけふ社夏のたつとしりぬれ十二月十九日。佛名のよまいりたりしに。月いとさえて面白し。職事とも例の鬼の間にて。ふむはい。左右の頭中將。もとも。まいらす。つねとし。むねまさ。みつくなと。せちかゝりしたひにします。ちんこのまつりはむねまさなとそきこえし。むかしは小袖あはせといふこ

と。こよひ有けるなとかたる。上卿皇后宮權大  
夫。もろつきゝもしらぬ佛の御名。ともになの  
りつゝくるこゑく。まことに滅罪のやくも  
あるらむとおほえて。辨内侍。

まことには誰も佛のかすなれやなのりつゝくる雲の上人  
寶治三年正月一日。寅時四方拜也。清涼殿へ出  
させ給。御ともに按察三位殿。中納言佐殿。勾  
當内侍殿。奉行宗雅。春のはしめの事からまこ  
とに日出度て。辨内侍。

今日になるときは春のはしめとて祈りなれたる方も畏し  
正月十五日。月いとおもしろきに。中納言のす  
けとの人々さそひて。南殿の月見におはしま  
す。月華門より出て。なにとなくあくかれてあ  
そふ程に。あふらのこゝ地おもての門のかた  
へ。なをしすかたなる人のまいる。いとふけに  
たるに。たれならむ。皇后宮大夫の参るにやな  
といひてつまへいりてみれば。權大納言殿也。

いとめつらしくて。兵衛督との。たいはん所に  
てあひしらひ給ふほとに。まことやけふは人  
うつひそかし。いかゝしてたはかるべきなと  
いひて。出給むみちにていかにもうつへし。い  
つかたよりかいて給はんをしらねは。あしこ  
こゝに人<sup>昆明池</sup>をたゝせむとてましみつるいつるひ  
ける。こめいちのしやうしのもと。御ゆとのゝな  
けしのしもの一間に。勾當内侍との。みのとの  
きりみすのもとに。中納言のすけ。兵衛督との  
年中行事のしやうしのかくれに。少將辨なと  
うかゝひしかとも。あかつきまで出給はす。い  
とつれなくおほえて。すけやすの少將して。な  
にとなきやうにてみすれば。殿上のこ庭の月  
なかつて。たち給へるといふ。兵衛督殿日の御  
さの火ともけちて。くしかたよりのそけは。殿  
上のかへにうしろよういしてゐたまへり。か  
くしてしけむもねたし。なにとまれ。つえにか



きつて。くしかたよりさしいたさはやなと。

さま／＼あらますほとに。夜もあけかたに成ぬ。いかにもかなはす。つひにあふらのかうち  
の門のかたよりいて給ぬと聞も。かきりなく  
ねたくて。しろきうすやうにかきて。つえさき  
にはさみて。をひつきてつかはしける。少將内  
侍。

うちわひぬくらへのつえなれは月みて明す名こそ惜けれ  
返事。權大納言。

うちわふる心もしらて有明の月のたよりに出にける哉  
かくてつきの日の暮ほとに。かれより。うはか  
きには。御あしつめたの御かたへとそかゝれ  
たる。御てうつのまにて。兵衛督殿勾當内侍殿  
なとあけてみれば。

うちわひてれにける夜半の鐘の音に驚かされて月や詠めし  
待かれし身は夏虫のともしけちいたつらことに物思ひけん  
御はきのふときほそきもたちそひて月に忘れぬ夜半の面影

返事。辨内侍。

うちはへてぬるとは何ぞ有明の月を見すてし心ならずは  
いさしらすたれ夏虫のともしけち竹のは風や吹もしつらん  
忘れすよ月の面かけ立そひてその御はきもくるしかりけむ  
さにと。春のはしめとて。とくさく紅梅ありと  
きかせおはしまして。おらせてまいらせよと  
おほせことありしに。尋につかはしたれば。さ  
かりなる枝にむすひつけて。寂西。

雲井まていともしこく匂ふかな垣れ隠れの宿のむめか枝  
その花の枝をかめにさして。はきの戸にをか  
れて。めむ／＼にかへされたるを。やかてぬし  
ぬしのかきてむすひつけける。太政大臣。實氏。  
雲あまて匂ひきぬれば梅花かきれかくれも名のみなり見  
四條大納言。隆なかつか。

垣れよりくもゐに匂ふうれしさな色に出ても花そみせける  
冷泉大納言。公相きんすけ。  
咲そむるかき隠れの梅の花君かやちよめかさしにそおる

萬里小路大納言。公むもと。

君か代に垣けにかくれもあらはれてあまなく匂ふ梅の初花

權大納言。實姉な。

くもゐまてかきれの梅は匂ひけりいともかしこき春の光に  
このかすにかへすへきよし。おほせことあれ  
は。辨内侍。

雲ゐにてみれば色こそ増りけりうへし垣れの宿の梅かえ

大納言二位殿。この大臣のむすめ。

よりまいりたりける

うすやうのこそうしを。權大納言たまはりて。  
おもしろき戀のうたともを。なへてならすか  
きてまいらせられたるをみて。少將内侍。

戀すてふ名をなかしたる水莖の跡をみつゝも袖ぬらせとや  
辨内侍。

なをななな元なすその水莖の跡にしも戀てふことをみぬを悲しき

二月一日。よふくるほど。大はん所より参りて  
鬼の間のぬのしやうしかけんと思ひしかと  
も。ともしひのかけかすかにて。つねよりは

かにやらむおほえて。朝かれいより常御所へ  
まいりたれば。宮内卿佐との。兵衛督殿。こう  
たうの内侍とのなと候はせ給ふ。御所も。いま  
た御夜にもならせおはします。御手習なと  
ありて。おもしろく思はむ詩かきてまいらせ  
よと仰ことあれば。蘆葭洲裏孤舟夢とかきて  
そはに。辨内侍。

身ひとつのうれへや波に沈むらん蘆の下れの夢もはかなし  
なとかきて秋の詩はいつれもおもしろくてこ  
そと。さま／＼申ほと候はむに。公忠の中將候  
か。まことにさはきたるけしきにて。せうしの  
候。皇后勤の御かたに火のといふ。あさましと  
もをろかなり。あまりうつゝともなくて。やな  
きのうすきぬうら山吹のからきぬきたりしを  
ぬきて。はかまはかりにてつほねへすへり  
て。あらゝかにたゝきて。いそきさはなるむめ  
かさねのきぬに。ゑひそめのからきぬかさね

てまいりたれば。勾當内侍とのやかてよるのおとへいりて。けむしとりいたしまいらす。あふらの小路の門のかたへゆく。御所後深草も。二位とのいたきまいらせて。中納言少將の内侍はおほはらの、使にたちて。心ちわひしくてつほねにふしたりけるか。あらくたゝくをとおとろきて。火ときゝて。いそぎ御所へ参りたりければ。人もおはします。けふりはみちたり。いつかたへ行幸もなりつらんと。あさましくてまよひありく程に。よるのおとゝの一聞にやといふ人有。はけものにやと。おそろしなからゆきてみれば。なにやらむのみ御そに。うす御そかさねて。さしものさはきの中にも。さまよくもてかくして。御くしのかゝり。御ひたひのかみ。御たけまてかゝりたり。せんしとの御たちもちて。これはいつくへか具しまいらすへき。按察三位とのに申せとおほせらるれ

とも。いつくともこれもしり候はぬとて。あふらのこうちおもてのつまとの方へいてたれば。ひしと人々おはします。かくと申せは。兵衛督殿。みちひきまいらむせんとおはしましぬ。一はんに權大納言殿のくるま参りたるに。御所。皇后宮。中納言のすけ殿。宮内卿のすけ殿のらせ給。門のにてそ御輿にはめしうつりける。皇后宮。冷泉大納言とのゝかたをふまへて。めしうつるへきよし侍りけれとも。なにとなきさまにて。やす／＼とそめしうつりける。權大納言。萬里小路。冷泉大納言など。そのまされにもゆゝしけに。いそめきあはれけるに。中納言のすけとのよく御かいしやくして。したすたれにてとかくまきはしてそ。御こしにはめしける。夜めにも。御ことからたゝの人にはみえさせ給はさりしとぞ。のちにかたり給ひし。けんしは二位殿のめしたる御車

に勾當。辨内侍もちまいらせてのりたりしを。御輿にもおはします。とり出しまいらせたりけるにやと。なにのなかにも。さうとうにて

ありけるにもちていてたまひつる人おはしましつといひけるとて。たれかみつるといはれるに。兵衛督殿。一定勾當辨とりいてまいらせつるとありければ。勾當辨めしたる御車はいつれそくと。馬をはやめて。はしりちかひはしりちかひたつねられし。なに事ならむと思へは。けむしはおはしますかくとそ。あつたきて。聲のかはるほど。たつねおはしますといふに。なを一定にやとゝはれし。けにもことはりなりけん。しやうはのりとときそ。とり出しまいらせける。大納言殿たちうつしうまにのりなから。あるはゆみもち。やおひなとして。かどにたゝれし。夢のこゝちしていと淺まし。さりなから。延喜天曆のかしこき御代にも。あ

またゝひ侍けるなど。おほせらるゝ人々もありしかは。辨内侍。

やけぬともまたこそたてめ宮はしらよしや烟の跡も歎かしまのこうちとの内裏になりて。ひろ御所のつまの紅梅さかりなりし比。月のおほろなる夜。二月十六日たれとはなくて。しろきうすやうにかきてむすひつけられたりし。

色もかもかされて匂へ梅の花このへになる宿のしるしにこの御返事は。院の御所へ申へしとおほせられしかは。辨内侍。

いろも香もさこそ重ねて匂ふらめ九重になるやとの梅かえこうたうの内侍とのゝつほねは。女院の御所なりけるほど。宰相とのと申人のつほねにてありける。その人のもとより。むめやさかりなるらんとたつねたる返事に。勾當内侍にかはりて。辨内侍。

色もかなれし人をやしのふ覽みせはや梅の花の盛な



返事。宰相殿にかはりて。權大納言。

なかもはやなれし梅の花のかも今九重に色はそふ覽

このうたとも。太政大臣殿實氏きかせ給て。さしも  
ゆゝしき色もかもの御秀歌にかよひて。いろ  
もかもとあるわろし。又御返事も。こゝのへに  
なるといみしくつゞけられたるに。いまこゝ  
のへとよみたる。たゞしかるへからず。ともに  
おつとなりとおほせらるゝ。ときゝしめむほ  
くなさ。おかしくて。辨内侍。

匂ひなき色を重ねて梅のはなつらくも人にとかめられぬる  
廿七日は。七社のほうへいなり。やかてその日  
は七らしいの御はらへなれは。内侍たち大はむ  
所にて。きせきぬのさたして。花もさかりにお  
かしきを。つく／＼となかめゐたり。御所にも  
なりて御覽せさせおはします。冷泉大納言御  
しやうそくにまいらせたるも。やかて御とも  
に候て。ことしは御まりあるへきよし申たま

ふ。からはしの大納言。まさ。上卿にまいられた  
る。もゝとせに一とせたらぬほとにやとみえ  
て。雪と霜とをいたゞけるかみ。けにくろきす  
ちなきもいといとをし。花のこかけにたゞれ  
たるをみて。辨内侍。

君が代に花をしみけるしるしには頭の雪もいとほさりけり  
三日の御鳥あはせに。ことしは女房のもあは  
せらるへしときゝしかは。わかき女房たち。心  
つくしてよきとりとも尋られしに。宮内卿の  
すけとのほ。爲教の中將か。はりまといふ鳥を  
いたさんなとそありし。萬里小路大納言のま  
いらせられたるあかとりの。いしとさある  
かけいろもうつくしきをたまはりて。あきつ  
ほねにほこらかしてをきたるを。もりありと  
いふ六位か。そのとりきとまいらせよといふ。  
かまへてとりなとにあはせらるましきよし。  
よく／＼いひてまいらせつ。とはかりありて。

かためはつふれ。とさかよりちたり。おぬけな  
として。見わたるほとになりてかへりたり。お  
ほかた思ふはかりなし。今はゆゝしき鳥あり  
とも。なにゝかはせん。たまはりの鳥なれば。  
きくもいみしらむところ思ひしになと。かへ  
すかへすこゝろうくて。辨内侍。

われそ先れにたつばかりおほえけるゆふ付鳥のなれる姿に  
三日。御鳥合なり。御所もひろ御所へいてさせ  
おはします。冷泉大納言。萬里の小路大納言。

左衛門督。三條中納言。公親。頭中將。公保。伊與  
中將。公忠。すけやすの中將。藏人はのこりな  
し。はつゆきなるあかこくろなといふ鳥とも。  
かねてよりふせこにつきて。をのゝあつか  
りて。丁子しやかうすりつけ。たきものなとし  
て。いつれかにほひうつくしきとそあらそひ  
し。みすのうちより出されしかは。萬里小路  
の大納言たまはりて。あはせられし。ゆゝしか

りし君なり。ひよゝより御所に御手ならさ  
せおはしまして。かひたてられしいみしさは  
かりにてこそ侍れ。御とりからはあやしけな  
れはかたせんとて。それよりをとりたる鳥と  
もにあはせられしもおかし。公忠公保かとり  
あはせしおり。伊與中將かとり。そらおとりす  
るとて人々わらひしに。冷泉大納言。ひさか  
たのそらおとりこそおかしけれとのたまへ  
は。公忠さこそといひたりしおかしゝて。辨内  
侍。

雲おとはなれさへしるや久かたの空おとりする鳥にも有哉  
廿日は。りむしのまつりの御馬御覽なり。さき  
さきはたゝめふかひきわたしたるはかりにて  
有しに。御隨身かねみねに。あけさせて御覽せ  
しいとおもしろし。公卿はまてのこうちの大  
納言そ候給し。けつけ中將するさね。庭の月か  
けいとおもしろくて。辨内侍。

なにしおふ月けの駒のかけまでも雲をはさそとみえ渡る哉  
はなさかり。ことにおもしろかりしに。ためう  
ちの中將奉行にて御まりあり。花山院大納言。  
冷泉大納言。萬里小路大納言。左衛門督。右衛  
門督。すけひら。きむた。ためうち。ための  
り。たかゆき。日くれかゝるほと。ことにおも  
しろく侍しかは。辨内侍。

花の上にしはしとまるとみゆれともこつたふ枝に散櫻かな  
少將内侍。

思ひあまり心にかゝる夕くれの花の名残も有とこそきけ  
かすもあかりて。木するゑのあなたへまはるほ  
と。左衛門督のあしもはやくみえ侍しを。兵衛  
督との。まりはいしいものかな。あれはと左衛  
門督をはしすることよとありしを。大納言。我  
もさみつるを。いみしくもめいくを聞えさす  
る物かな。めのとにてあるに。この返りことあ  
らはやと侍りしかは。辨内侍。

散はなをあまりや風の吹つらん春のこゝろはのとかなれ共  
三月廿八日。延長改元也。公卿八人。上卿花山院大  
納言。さたま經光の宰相なとそきこえし。奏ま  
つほと。ふくるまで大はん所に。内侍たちなに  
となきものかたりして。往古の延暦延喜は廿  
年にもあまりけるに。かくほとなくかはる。な  
こりおしきやうにこそなといひて。辨内侍。

ほともなくかはるもつらし古はたとせあまる年も有世に  
四月七日。松尾の使にたつ。上卿吉田中納言。  
爲經。辨。經俊。かつら川をわたりしに。みなかみ  
のかたに。やなといふものに。水のたきりてお  
つるをとのきこえ侍しかは。辨内侍。

川のせにやなうちわたすみつなみのあまりも音の碎け行哉  
十七日。御方違の行幸なり。今出川殿へなる。  
女院もやかてわたらせおはしますほとなり。  
左衛門督まうけの御所に候給。御けんのすけ  
まさいるの宰相の中將。兩貫首も還御まで候。

月ことにおもしろく。たれも夜もすからねて  
そなかめし。冷泉大納言。萬里小路大納言。左  
衛門督と。かゝる月こそなけれとてことにめ  
て給。幣にうつりたる有明かたのかけ。たとへ  
むかたなくおもしろきに。おりしもほとゝき  
すのなき侍しかは。辨内侍。

歸るさのかれまつ程の有明につれなからしと鳴ほとゝきす  
祭は廿日なれは。けいこのめしおほせ十八日  
なり。上卿權中納言。冬忠。賀茂よりあふひとも  
まいりしを。大はむ所にて。人々さうしにをさ  
んとて。こあふひえりて候よしほと。左頭中  
將。もと。ことに色はなやかなるなをし。けい  
このすかたいとうつくしうてまいりたり。お  
なしく右頭中將。きむや。もまいりたり。これも  
はなやかに。あらぬすちにほこりたるけしき。  
とり／＼にみゆ。公忠もほそたちゆるさると  
そき／＼し。けいこのすかたともおもしろくて。

辨内侍。

千早ふるまつりのころに成ぬれは近きまもりも心してけり  
攝政殿まいらせ給て。廿一日の夜の月いと心  
もとなくまたせ給ほと。人々にいてたるやと  
とはせ給へは。さま／＼にやうをかへて中に。  
やまのこなたへはいてなから。ひかりのいま  
たあらはれぬと申人侍しを。この申やう念あ  
りて。さもあらなと人々もおほせられしかは。  
辨内侍。

山のはにせめても月の遅きよは此方と思ふも猶そまたる、  
さいせう講は。廿二日よりはしまりて。廿六日  
結願也。この御所にては。これかはしめなれは  
めつらかに。行香のほとおもしろし。鬼の間を  
かみにて。御てうつつの間。大はむ所はうしろに  
。堀川内大臣ともみ。冷泉大納言。權大納言。  
新大納言。左衛門督。三條中納言。ふそくさた  
ひら。きんたゝ。ことゝもをそくはしまりて。



有明の月出るほとに。人々出給し。そのころ聖  
護院僧正正觀音法をこなはる。ひろ御所。廿七  
日結願なるへきを。そのよ行幸にて侍しかは。  
あかつきの御ときをひきあけて。夕暮におこ  
なはれし。れいのこゑもことさら心すみてた  
うとかりしかは。辨内侍。

曉のかれよりもなをくれのれいしにれいの聲もすみけり  
卅日。大はむ所のこいしのまいりたるを。御ら  
んせさせおはしまして。せちゑのにつくりた  
るわろし。あかつきにこそつくるへけれと  
てかへさる。天上のこいしは。いにしへ寛平法  
皇と業平朝臣と御すまひありけるにあたり  
て。おれたりけるを先例にて。いつもそのおれ  
たるすかたにつくられ侍と。つたへさへさく  
もいとおもしろくなと申いて。辨内侍。

ふりにける昔の跡をそのまゝに變らすみるや名残なるらん  
六月廿八日より。ことなる御いのりとも侍し

に。醍醐の座主。實賢。普賢延命法。皇后宮御か  
たの日。御座をしつらひておこなはる。冷泉大  
納言殿御沙汰。七佛樂師ひろ御所。太政大臣殿  
御沙汰。秋になりて。風いとすしくふきて。  
皇后宮の御かたの御つほねに。やうくむし  
のこゑほのきこえて。おもしろく侍しかは。辨  
内侍。

君かへむ千とせをいのる法の聲。なたかなたに松蟲のなく  
神なりていとおそろしかりしに。御所はあさ  
かれるにわたらせおはします。六位のつるう  
ちめすほと。たきくちのくやくかゆみめして。  
冷泉大納言とのつるうちし給。かみのなるを  
とに。いみしくてうしのあひてきこゆる。た  
いまは壹越調ならむと。すけやすにふえふき  
ならさせてきかせ給へは。まことにそのてう  
しなりけりとて。こうたうの内侍とのもけう  
し給。いとおもしろくて。辨内侍。

ものゝ音をひきも鳴さて梓弓をして調べをいかてしるらん  
八月十五夜。院の御所にて御連歌ありしに、夜  
ふけゆくまゝに身にしみかへりて。おもしろ  
き句とも有しおりしも。かねのをと。こゝもと  
にきこえしかは。御いのりはしまりたるにや  
ときくほと。權大納言みすのもとにさしより  
て。後夜のときこそはしまれ。とくくつけよ  
とおほせられしこそおかしかりしか。かねの  
をとも心すみて聞えしかは。連歌をはさしを  
きて。少將内侍。

秋のよの月に冴たる鐘の音にやかてもときのうつりぬる哉  
辨内侍。

時うつる鐘のなとそと聞からに月もなかはのかけや更ぬる  
九月八日。まての小路大納言。ひろ御所に夜は  
むにしにゆく<sup>イ元</sup>をととして。さふらひ給しに。きく  
につけて。少將内侍。

菊のうへにをきゐる露も有ものをたれ徒らにれてあかす覽

返事。大納言。

九重の雲のうへふし袖さえてまゐるむ程の時のまもなし  
雲のうへふし。いとやさしくて。辨内侍。

まゐるまゐる程をきくにぞ思ひし露をかたしく雲のうへ人  
大納言殿三位せさせ給たりしよろこひ申と  
て。少將内侍。

秋風の身にしむはかりうれしきやなを人しれぬ心成らん  
辨内侍。

かひ有て今こそみつのくらぬ山まよはぬ道は猶うれしき  
御返し。大納言三位殿。

身にしみてうれしき物と今そしるたゝ大方のあきのはつ風  
この御所より常盤井殿はちかけれは。月のこ  
ろは夜をへて。まてのこうちの大納言との。女  
房たちさそひて。よもすから遊び侍しに。水に  
うつりたる月いとおもしろく見えしかは。少  
將内侍。

やかて我心を移るときは井の水にやとれる月ならね共

これを聞て。辨内侍。

おりふしを空にしりける月なれば猶常盤るの影そさやけき  
かやうに遊ひ行侍し程に。女院の御方の女房  
たち。内裏の月見にとて。あまた参られたりけ  
るか。たつねあはせ給けれとも。いさいつくへ  
やらんときこへければ。まいりて侍つれとも。  
ほいなくてこそ侍れといひをかれたりける  
を。かへりまいりて。かくときつて。女院の御  
かたのひせんとのといふ人のもとへ。少將内  
侍。

あくかるゝ心くらへもある物をなを尋れみよ秋のよの月  
返事。

またもみむのとけき御代の秋の月近き雲るに心へたつな  
此御返事。いとおもしろくて。辨内侍。

尋みむ心のへたてくまもあらしちかき雲井の秋のよの月

## 辨内侍日記下

今年五節は。この御所はせはくて。冷泉とのへ  
十二日行幸ありて。十八日よりはしまりし。月  
はくまなくていとおもしろし。兩貫首。もとくき  
んやことなる人々なれば。きさいまちの亂舞な  
す。侍イともことにはへありてそみえし。女院の御か  
たのえむすい寅日也。四條大納言空親女房達さそ  
ひて。御帳のうしろよりはつかにのそきて侍  
しこそ。いとおもしろかりしか。閑院大納言二條殿御子實基た  
ちはさらなり。いとけうありて侍しに。内大臣  
殿いかにはやしたてまつれとも。うるはしく  
もたち給はさりしに。右兵衛督。ありすしらさ  
きこそしらはへのそくなれと。ひやうしをあ  
けてはやすたりしかは。さしあふきしてたち  
給ひたりし。御ことからことによくみえ給ひ  
しかは。辨内侍。

しら驚はいかなる色のためしにて立舞袖のかけなひくらん  
卯日はわらは御覽なり。ことしはつねのとし  
にも似す。御覽のわらはみなほり侍し。いと  
めつらかに。辨内侍。

いにしへのならひは聞す九重やあまたをとめの數をみる哉  
權大納言。木のさきのゆへおはしたりしに。雪  
ふかくつもりたる頃。兵衛督のとのゝもとへ。  
内侍たちにつたへよとて。

九重にふりつもらんしら雪を深きみやまに思ひこそやれ  
返し。少將内侍。

このへの雪の中にもたひ人のふみゝる道を思ひこそやれ  
辨内侍。

このへになをかされても思はすよふみゝる程の山の白雪  
十二月十八日。月くまなきよ。頭の中將。もと、  
夜はむにまいりて。おにのまに候ほと。しや  
うそくのをとのする。たれならんみてまいれ  
と。すけやすの中將におほせことあれば。かへ

りまいりて。中將。

おにのまに人をとのする誰ならん弓とるかたのとうの中將  
左の心もことにえむありて。とりなしたりな  
と。按察三位殿もおほせられき。やかていてぬ  
るよしきゝて。辨内侍。

やといひて引やとめまし梓弓いるかたしらぬとうの中將  
十九日。れいの佛名なり。宣化門皇后宮御方もこよひ  
なるへしと聞えしほとに。ことにいそかる。月  
ばいとおもしろきに。いてゐの殿上人のおり  
まつするも。この御所にては。大はむ所もわた  
とのちかくて。たゝこゝもとにそみゆる。定  
平。伊頼。伊長。基政なとそみえし。女主かめつ  
らしくはかまのすそみしかにきなして。おり  
まつするを。定平はやしあけたるもおかし。辨  
内侍。

いとせめてさゆる霜夜のなくさめにしは折くふる雪の上人  
ふけてのち。行香にたつ人々。四條大納言。左實



宰相中將。皇后宮權大夫。土御門宰相中將。左

大辨宰相。けそくさたひら。これより建長二年

正月三日殿上のえんすいなり。このたひは。ち

もくに貫首もあかるへしと聞えしかは。四條

大納言ことに忠つくすへきよし。奉行し給ふ。

御所もこしとみより御覽す。さねたか。つねた

た。これもとなとこゑある人々。てをつくして

はやされしかは。兩貫首十度はかりまひたり

し。興ありてみえ侍しかは。辨内侍。

みたれつゝうたふちくはの松の色に千代の影そふけふの盃

やかて。皇后宮御かたへまいる。みち／＼おも

ひの津に舟のよれかしと。はやし／＼まいり

し。こまにてみ侍し。いとおもしろくて。辨内

侍。

しほしまて立よる波にとゝはむ思ひの津にそ舟よはふなる

二月五日。春日使にたちたりしに。上卿皇后宮

權大夫。もろつくればとになしはらにつきたれ

は。夕つくよほのかにおもしろく侍しほと。辨内侍。

梨原の其なは秋になりならすれてやは夜半の月を見るへき

さくやといふさうしを具したりしを。くやく。

ためなは。しやくとりてもてならして。今は春へ

さたむら。とさくやこのはなと。したひをとりてはやし

たりし。まことにをのかはるにあひたる心ち

やすらむと。おかしくて。辨内侍。

春をみる我身ひとつになにおひて咲やと人にいはれぬる哉

佛法僧となくとり。太政大臣殿よりまいりた

るを。常の御所の御えむにをかれたりしか。雨

などの降日はことになく。けにそなもさやか

にきこゆ。すかたはひえとりのやうにて。いま

すこしおほきなり。辨内侍。

とにかくにかしきき君か御代なれば三のたからの鳥も鳴也

局は二のたいのつまなれは。夜ふけてすへる

おりは。かならす京極おもての大やなきのこ

かけより。月のさやかにもりたるか。さしむかひて出たるやうにみゆる。いとおもしろくて。少將内侍。

青柳のいとはよるとも見えぬかな木かけくもらぬ月の光におなしつほねなれは。ともとにすへり侍しか。（トイナシ）まことに月のかけおもしろかりしかは。辨内侍。

青柳の糸にはかけもみたれは同じすちにそ月はさやけき三月十六日。七瀬の御はらへなり。使々まつほと。大はむ所のかうらんのもとへたちいて。閑院殿には。はなはかりやまさりたるらむなど。御さたありしかは。少將内侍。

櫻花やへに咲ともこのへと思ひなすにそ色増りける又辨内侍。

なにこともしのふむかしの雲ぬには花こそ及ふ匂ひ也けれ三月廿九日。御まりなり。冷泉大納言。公相。萬里小路大納言。公基。權大納言。實雄。左衛門督。

實藤。右衛門督。通成。源宰相。有資。頭中將。爲氏。爲教。資平。公忠。時經。（稱イ）はなはちりすきこするなかなかおもしろきに。人々のよいことから。とりくみにそみえし。くれかゝるほと。院の御所より御隨身頼峯御使にて。御葉松のえたにそ御鞠はつけられたる。頭中將とりてまいらす。しろき薄様むすひつけられたり。あけて御覽せらるれは。

吹かせもおさまりにける君か代の千歳の數は今日を數ふる御返し。辨内侍。

かきりなきちよの餘りのあり數はけふ數ふとも盡しと思御鞠はてゝ。はなのかけにたちならひ給へる。御名こりともなとさまく。申いてゝ。少將内侍。

かすくにあまりなる迄戀しきはいかに詠めし夕とかしる返し。辨内侍。

風に匂ふあまりは花の色に出て數限りなき夕とそみし

そのうち又御まりあるへしとて。まつ萬里小路大納言殿へ申されて。やかて奉行せらるへきよし。おほせことありしに。かせの氣とこそせくて。かなふましきよし申されたりしほとに。常盤井にて。しのひてまりあそひ侍よしきかせおはしまして。にくし。なにとまれいひやれと。仰ことありしかは。少將内侍。

春風のつらさをかこついつはりの身に餘ぬる程をしらるゝかへし。大納言殿。

春かせのつらさをかこつ心より身の僞りになるかゝなしきなをいつはりならすときこゆるこそなと。御さたありしかは。辨内侍。

花のためあまりそなをもつらからむ僞にやは風の吹へき卯月の八日はくわん佛なりしに。むろまちの大納言。さねふたまはせたる布施に。くれなるうちの色こゝに花やかなるに。蔦かへて青葉なるをきて。うつつの山の心し。さまことにうつ

くしうて。かねのうちえたにつけたり。人々の殿上へいたされてのち。をそくまいらせたりしを。大はむ所より職事にたはんに。その人のとて出さるへきよし。按察三位殿。兵衛督殿おほせられしこそ。ことによりいあるへくやとおほえて。辨内侍。奉行光國

傳へきく蔦もかへても若葉にてまたうつろはぬうつつの山道祭の女使に。中納言のすけとのたち給しに。なてしこのきぬ。すこし色うすく侍しををくるとて。辨内侍。

くらへみるこゝには色の薄ければ唐撫子にいかてそむへき六月十一日は。しむこんしきのまつりなり。上卿土御門中納言。通行。辨。顯雅。内侍とうよりたちてのち。辨上卿ははやたゝせ給。内侍とくと申侍ければ。少將内侍。

なをしとは誰をいふらん君をこそ待ちんと思ふ時も過ぬれ歸りまいりて侍しに。少將内侍かくとかたり

侍しかは。上卿よりとくたちて。我こそまちし  
かなとかたりて。辨内侍。

いつもさそ我を待とはいひしかとまたれし物をさよふる迄  
權大納言。くろとののはむなともかきかちにて。  
まとをになり給しを。こそその七月ほしあひの  
ほとに。參り給たりしなど申いて。少將内  
侍。

雲ををはよそにのみしてあまの川遠き渡りにはや成にけり  
返し。辨内侍。

くもゐにてとをなしとはみし天川人の心やわたりなるらん  
七月十三日。閑院殿のことはしめの日。事のそ  
う辨。<sup>つれ</sup>まいられたり。なにとなく心もとな  
き心ちして。辨内侍。

百敷の大宮つくりけふよりやかれてその日と定めなくらん  
八月十五夜。れいの御會也。雨ふりていとくち  
おし。ことゝもはてゝ。つまとあけさせ給ひ  
て。御覽せられしかとも。月のくもりさまいと

くちおし。なこりに阿彌陀佛連歌たゝ三人せ  
むと仰事あり。いひすてならんこそねむなけ  
れ。少將おほえよとそおほせことありし。

なこりをはいかにせよとて歸るらむ

御所

もしやとまたむ秋の夜の月

少將

あかなくにめくりあふよもありやとて

御所

みちうきほとにかへるをくるま

辨

たくひなきわか戀草をつみいれて

御所

つゝみあまるはそでのしら露

少將

夜もあけはなれにしかは。のこりはまたの御  
連歌にしつかんとて。名殘おほくてそかへり  
まいりにし。此おりくゝの御連歌を。大納言三  
位殿きかせ給て。この戀くさの御連歌思ひい  
てなるへし。そのよしのうたよみて。家の集な  
とにかゝるへしと仰られしかは。辨内侍。

思ひ出のことはとなる草ならはなゝ車にも我をつむへき  
十六日はこむまひき也。上卿萬里小路大納言  
宰相。<sup>まさ</sup>ひきわけの使もとまさ。ことゝもは



て。大納言殿局のつまにかきて。公忠して。

君か代につかへて今宵みつるかなよそに聞こし望月の駒返し。少將内侍。

君か代につかへてし身は望月の駒も千とせのためしにや引ことのやうことにやさしくて。おなしく返し。辨内侍。

今もさそよのおもかけかはらめや秋のこよひの望月の駒今出川殿へ行幸ならんとて。夜雨ふりけに侍しに。とうたいのくひを。七人していはせられ侍しはてに。ゆふ人はてれく日のこと。まうことにてありしを。いつも少將内侍そのやくつとむる人にて侍しか。さとへいてたりし代官に。まふへきよし人々おほせられしに。あまりにあるへくもおほえて。つほねにかくれゐて侍しかは。いよといふ人まひけるとぞ。辨内侍。

楳をとるその舟人にあらぬみのあすのひよりないか。祈覽

御神事のほど。御人すくなにて。いと御つれつれなりしに。おもてかたして。人々をとせと仰事ありしかは。はかまをむねまてきて。こきひとへをかつきて。大はん所のくちにたちたれは。大番のものとも。さはきて弓なとりなをして。たちめくり侍しかは。かへりて。あまりにおそろしくて。やり水におちいりて侍しを。おめたる鬼かなとて。人々わらはせ給。つきの日。さとりつゝしむへきことありとて。ものいみをたひたりし。おやのまもりあはれにて。辨内侍。

あつき弓引たかへたる命こそそへける親のまもりなりければ。節會臨時祭のしたいなと御覽せさせおはしにして。そのまねを女房たちにせさせて御覽せしを。太政大臣殿。この御遊は。まことにおもしろく侍るらむとて。けうせさせ給て。しやくともつくらせてまいらせ給。頭中將。爲氏。節會

の次第なと書て參らす。人數は大納言三位と  
の太政入道大僧のむすめ。按察のすけ殿。たかひら卿のむすめ。大納言の  
 すけ殿。たかちか卿のむすめ。中納言のすけ殿。實家卿女。宮内卿  
 との。あき氏卿のむすめ。兵衛督殿。家みち卿のむすめ。こうたうの内侍  
 殿。たか時入道のむすめ。少將いよの内侍。しやく共に。み  
 な名を書てもち侍し。中納言のすけとの。權大  
 納言になりて。節會の次内辨もよほされて。し  
 たうつをえはかす。そうらうとてこしやう申  
 て。つほねにおはせしに。あしのはにかきつけ  
 て。つほねのみすにさす。辨内侍。

津の國の蘆の下根のいかなれば波にしはれて亂れかちなる  
 大納言三位殿は。御し失ち卿らいのたひに。これは  
 いへのやう／＼とおほせらるゝを。中納言の  
 すけ殿。いつもかくきこゆれば心にくきやう  
 に侍しか。まさしきいへの日記にきみさらむには。  
 たのむましきよしきこゆるも。ことはりとお  
 ほゆ。少將内侍は三條大納言になりて。つねに

しちらひかちにて。小てうはいにも。しやくを  
 をきてせうはいなとせられ侍しを。兵衛督殿。  
 ぬしにかたられて侍ければ。さしもしちらひ  
 もせぬと思ふに。たへかたきことかなといは  
 れけるそをかしき。伊よの内侍は。いつもりん  
 しのまつりには人長になりて。みつからわを  
 つくりてそれをもちてまはる。いかほふるへし。  
 あまりに此やくのつとめたくもなきとて。わ  
 ひられしもまことにとおほえておかし。辨は  
 行幸のとしにうそをふくやくをつとめ侍し。  
 又これも人長にはをとらすおほえ侍き。冷泉  
 大納言殿衣番にまいりて。此御遊にましりて。  
 うそふくやくつとめさせ給たりしこそ。いと  
 いうれしかりしか。按察すけとの。いかに  
 もをの／＼の中にては。いたしうたもらむふ  
 も。てをつくし侍るへし。ことなる人々御參り  
 あらむには。かなふましきよし。かねてよくよ

く申させ給て。ことにみたれてつとめ給き。近習の人々御所へ御まいりあるはみなましはり給。萬里小路大納言などは。なけしのしもの一間より袖さし出して。かうくなど。よくまはせ給もおかし。又五節のまねに宮内卿のすけとの。いたしうたせらるへきにて侍しおりしも。左衛門督まいり給たりしに。たゞいまはいかにもかなふましけにて。おほかたこゑもいたし給はぬを。按察三位との。これはかりはことほりにこそと申させ給しもけにおかし。あまりをそくなりて。そのさもすみて侍しに。左衛門督も。ちとはおかしけにおもひてそたち給にし。いとくおかしくてこゝろのうちに。辨内侍。

聞はやすしろうすやうの折からはいかいふへき卷上の筆十月十三日。鳥羽殿へてうきむの行幸にて。よひのほとはしくれもやなと思ひ侍しに。あし

たことに晴て。いとめてたくそ侍し。鳥羽殿の御所のけいきのおもしろさ。ことほりにもすきたり。いろくのもみちも。おりをえたる心ちす。れうとうけきすうかへる池のみきは紅葉など。たとへんかたなし。かみあけの内侍。こゝう當の内侍。少將内侍なり。日くらしかみあけて。さまくの内侍おもしろくめてたきことゝも見たして。おいのちのものかたりは。いくらも侍へしなといひて。少將内侍。

かたり出む行末迄の嬉しきはけふのみゆきのけしき成けりこれをきゝて。辨内侍。

よゝなへて語り傳へん言のはやけふのみ庭の紅葉なる覽還御のち。めてたかりしその日の事とも申いてゝそ。めしたるまね。たれかしはなにいろいと。少々はきのとにてしるし侍しに。太政大臣殿のうらおもてしろき御したかさね。こ

とにいみしくおほえて。辨内侍。

白妙のつるの毛衣なにとして染ぬをそむる色といふ覽

廿七日。仙花皇后宮の御かたへいらせおはしまし

て。日の御座の御つほのもみち。御覽せさせお

はします。女房たちも。みきはにちりつもりだ

るなとたちいてゝみる。おもふことかなふと

いはゝ。あのちりたるもみちのかすかそへて

んやと。人々おほせられしかは。少將内侍。

もみちはの數をかそへて流すとも思ふ心はえやはゆくへき

今も風にちりみたるゝ程。なをいとおもしろ

くて。袖にうけんなど。人々おほせられしに。

こむらうのみうらの上卿にて。つちみかとの

中納言。みちゆき別當のさきことゝしくきこえ

しに。おとろきてみなうちへ入侍し。なこりお

ほくて。辨内侍。

をとつて聞ゆるさきの追風に散もみちはをみすてゝを行

五節は十六日なり。あさかれのよのひろひさ

し御とりやなど。露臺につくりなさむとて。かねて十二日。今出川殿へ行幸なり侍しに。御留守に候て。月くまなく侍しかは。辨内侍。

雲の上や豐のあかりのおなし名をかねてあらはす月の影哉

をしいたしは。大はん所の二間かけてにしむ

きなり。てうきむの行幸のきくもみちなと秋

の色にて。つねの年よりも。世にしらすうつく

しう見え侍しを。大納言三位殿。ありし行幸の

なこりとまりたる心ちする。いかにとおほせ

らるれば。辨内侍。

神無月ありし行幸のなこりとて紅葉の錦たえぬなりけり

十九日。節會。露臺の亂舞などとはてゝ。御前の

めしつねよりもいとおもしろく。ものいひて

のよまひには。左頭中將。爲氏。六位や候。さし

あふらせよ。右頭中將。されひうちなかめて。か

はつえつきて。とよのあかりはくもらさりけ

りと。爲氏か方みやりゝなかめたりし。おか



し。經忠はきぬかつきのなかに。兩貫首をみて。このほとはしろく。又そくたいの人々みやりて。あしこのほとはくろく。とはいひし。これもとはていつていはたかな。刑部卿ときこゆる。てんたつしやこは。正くはんより次第いひつゝ。けて十月は十せ。れうたにまひ給。ましてむねのりかまはさらめやは。とてをれこたれ。身をなきになしてまひたりし。ふしきにおかしく興あり。つねさたむはらこきのしたにいたち。ふえふく。さるかなつ。こ

とにおもしろくきこえき。ものさねに爲氏。實久。經定。伊長。爲教。經忠。伊基。みなむれたちて。あらたにおふるとみくさの花。おもしろくうたひて。たう<sup>田</sup>へ<sup>植</sup>のまねしたりし。なにゝもすくれて。ことにおもしろく見え侍しかは。辨内侍。

君か代に靡かぬ人はあらしかし風になみよるわたの早苗は

ものみのきぬかつきのなかに。兩貫首をみて。ちうのはんはしとそみゆるりやうくはむ首。といふ連歌をしたりけむ。いとおかし。少將内侍つくへきよしきこえければ。めにたつものと人やみるらんと。つけたりける。

廿四日は。りんしのまつりなり。あはれなりし

事は。にはかに久我大將はかなくなりぬと聞

源通忠三十五歳

えし。この十二日の行幸に供奉せられたりしほと。のちかさもいとはかなし。このはるのりむしの祭のかさしによりしこと。たゝ今の心ちして。いとあはれに思ひ出られ侍しかは。辨内侍。

藤涙のかさしによりし面影のなとてもはるに立わかるらんかへし。少將内侍。

この春のかさしによりし面影の立わかれぬる心ちこそせれ十六日。ちもくなり。冷泉大納言<sup>公相</sup>右大將。花山院大納言<sup>定雅</sup>左大將になり給。とりくにゆゝし

き大將たち。いとくめてたし。其ちもくの頃人々の申文こなたかなたより侍しに。ある人。いとしもなき先祖ひきたてゝ。申文にかきのせたりしを。大納言三位殿。いにしへみき公任は五代の太政大臣の子なりと。かきたりけむにはをとりにやと。仰られしかは。辨内侍。

のほりえぬ山をくしと思ふなよのかきか行ときも有世に十二月十六日。野さきの使のたつ日也。南殿の庭にまん引まはして。たいそうの御屏風なとたてゝ。みくらやつかひなとか。雪はかきたれふるに。あらしをしのきて。つかひくいそかしもよほすけしき。いとさむけなり。雪うちはらふもおもしろくて。辨内侍。

風ませの雪うちはらふ袖さむしのさきのつかひ心しらなん建長三年正月十二日。法勝寺の修正の御幸。院の御方のいたしくるまにまいりたりしかは。

月あかくていとおもしろきに。うしろとのさるかう。けう有てそみえ侍し。すゝのすかた。すのこゑ。すこく聞ゆるも。おりからおもしろくて。辨内侍。

しらかはの三代の御寺の跡なれや昔ふりせぬすゝのこゑ哉十五日。頭中將。爲氏。まいりたりしを。かまへてたばかりてうつへきよし仰事ありしかは。殿上に候を少將内侍けさんせむといはすれと心えて。大かたたひくになりて。こなたさまへまいるをとす。人々つえもちてよういするほと。なにとかしつらむ。みすをちとはたらかすやうにそ見えし。かへりて少將内侍うたれぬ。ねたき事限りなし。十八日よりは。うちに。はたゝ御所のやうとてうつへきよしおほせこ。とありしに。十六日にさき丁やかれしに。たれたれもまいり「し」かとも。頭中將はかり。なかはしへものほらて出にけり。いかにもかなは

てやみぬへかりしに。十七日。雪いみしくふりたるあした。とはとのへ院の御幸なりて。此御所の女房まいるへきよしありしかは。ひとつくるまに。こうたう。少將。辨。いよ。侍従。四條大納言のりくして

し。せはさかきりなし。きぬのそてはかも。たゝまへいたにこほ

れのりたり。道すからの雪いかにもふるめり。いとおもしろし。とはとのゝけいき。山のこすゑとも。みきはの雪いひつくすへからす。爲氏うちかねたることを。きかせおはしましたりけるにや。御所にはつえを御ふところに入て。もちてわたらせおはしました。これにて爲氏けふうちかへせ。たゝ今つかひにやらむするを。こゝにてまちまうけて。かまへてうてとおほせこと有。少將内侍よういしてまつ程。思ひもいれすとほるを。つえのくたゝとおるゝほ

とうちたれは。御所をはしめまいらせて。公卿殿上人とよみをなしてわらふ。さもそにくうちにせさせ給とて。にけのきしもおかし。そのち。北殿へ御船よせてめすほと。はれゝしさかきりなし。いりあひうちてのち還御なる。たゝかやうの御遊はかりにてやみぬるもくちおしくて。御車にめすほと。御太刀のまきふにはきの舞をかきたりをにむすひつけつゝ。少將内侍。

あらましの年をかされて白雪のよにふる道はけふそ嬉しき還御のゝち。御よるにならんとて。御まくらに御たちをきたりけるをり。御らんしつけてそ御返し侍し。しろきうすやうに。

あらましの年積りぬる雪なれと心とけてもけふそおほえぬかやうに。ことならむ御歌の返しは。ともに申つへしと。按察三位殿仰られしかは。たゝこゝるのうちばかりに。辨内侍。

年つもる雪とし聞はけふそへに心とけてもいかゝみゆへき

此雪に内侍たち。さためて面白うたともあるらん。いよの内侍はてかきなれば。ゆきのうへにもかきちらすなど。しゆこうおほせ有けるもおかしくて。辨内侍。

かきつくる心はしらすふりつもる雪には鳥の跡をやはみんすけやすかもとに。國基、譯ぬきのふのあるまいらせよといふ心。うたによみてやれとおほ〔せ〕こと有ければ。少將内侍おりくに。

昔のむすの山の奥の麓にてこれを〔〕みへてかへりけん返し。中將。

ふるさとの花の盛をもろとに〔〕みまむかしなりやとなをせめにやれと。仰こと有しかは。辨内侍。

ふる里の花よりもけに思ひやれそれよりおくのしかの山越やよひの十日ころ〔〕

御かたの花いと盛なるに。こそのはるは〔〕

〔〕にて。花山院宰相中將日ことにまいられしに。なにとやらむしはしこもりゐられたり

し所へ。一枝おりてつかはすとて。兵衛督殿にかはりて。辨〔内侍〕。

こそ春なれけるみやの花のかも〔〕おもひ出すや返事。宰相中將。

宮人のなさへ遁るゝ此春ははなやか〔〕てあたにみるらむ三月十一日。月おほろにて。おもしろかりしよ。四條大納言。萬里小路大納言など。女房たちあまたさそひて。鷺尾の花さかりいとおもしろく侍しに。月のかたふくまであそひて次日。少將内侍。

見ても猶あかぬ名残をおしまるゝ臘月夜の花の下かけかへし。あるしの入道。たかひらの大納言。

このしなにかさる蓮の色を社みれともあかぬ姿とはきけ法門にとりなされたるも〔〕。辨内侍。

あかすみる櫻もいへはおなしとこの品とは思ひへたてし三月卅日に。皇后宮院號かうふらせおはしまして。まかりいてさせ給。御なこりおもひやり



たてまつりて。辨内侍。

行春の名残はことのかすならず [ ] ぬけふのわかれに返し。少將内侍。

またはよもあひも思はし雲の上に霞る月はよにめくる共

五月五日。三條の中納言のもとより。れいのうつくしきくす玉 [ ] ころもみたれ

て。そさうなるよし申され [ ] いうつく

し。むすひたるよもきの露にふかき [ ] みえ

しを。兵衛督殿。このころいはいやとありしかは。辨内侍。

あやめ草をこしらぬまの長きれにふかきといふや蓬生の露返し。中納言。

あやめ草をこしらぬまの長き根を深き心にいかゝくらへんひろ御所よりみやれは。かつらといふものゝ。あやしのすかたしたるか五六人。かたみといふものひちにかけて参る。あれもおほやけものぞかし。 [ ] いとおもしろく

て。辨内侍。

かつらより鮎つる少女ひきつれて [ ] 井のひなみしるらんよるのおとゝは。つねの御所よりあさかれるをへたてたれは。内侍も二三人はかりそふしたる。夏はゝしあけたるに。月のさしいりて。まはゆきほとにそみえし。夜ふけぬれは。柳のこすゑのおそろしきに。たてゝねなんとするおりしも。水鶏のたゝくをとのきこゆるを。こなたうのないしとの [ ] きくやとあれば。少將内侍。

明てのみぬる夜かちなる月影にたかとを叩く水鶏なるらんこれをきゝて。辨内侍。

木末をそ叩きもすらん月みむと [ ] さゝぬよはの水鶏は六月廿八日。閑院殿 [ ] しなり。女房廿四人こきものゝくわらはしもの。物 [ ] みなしろきあこめともなり。かみあけの内侍。こ<sup>後</sup>う當の内侍。少將内侍。攝政殿<sup>後</sup>をはしめたて

まつりて。まいらぬ上達部殿上人なし。三日か  
 ほととはさまくの御遊ともありなときこえし  
 こそ。いにしへ九條右大臣の。てうろくうちた  
 まひたりけむこと思ひ出られて。いまさらゆ  
 ゆし。左大將。さたま 右大將。きんす たちならひ  
 て。ことに

さらためしなく。とりくみに  
 つれかなほまさると。おほせられあひた

色深き花やもみちにわきかねて春秋をむる我こそ哉

常の御所には。きやうようの丸いかけちに。ほ  
 らかひをすりたる御つし。御手はこ二。御すゝ  
 り。御はんさうたらひ。はきのとにはきりたけ  
 まき。かひすりたる御つし。御手はこ。御すゝ  
 りかい。うへにたかき御手はこに。院の御所へかね千へ  
 のたひか六けん。きたのたい八間。二のたい十  
 五間。さほにしろきかさねのすわうのうはき。

ふたあひのから衣  
 ま。はんさうたらひ。とうたい。お  
 殿に。はんゑまきたる御つし。御手はこ御硯  
 たい十五間。ものくのをきやう。みなお  
 なし。ろたいあ殿ところくつくりそへ  
 られたり。たまかゝみなとのやうにかゝやき  
 たる心ちす。三日かほとは。こきものゝ具に  
 て。よるなどのあつさたへかたし。あさかれる  
 のみすうちかつきて。なけしによりかゝりて  
 そ。わかき人々うたゝねなから。あくるまでみ  
 なふしたる。三日すきて。七月一日  
 のすちかうし。ふたへあやなと。心をつく  
 かさねともをそきかへ侍し。二日はまた  
 きぬふとんでうのうす物。すちかう  
 のなかにぬひ物し。いろくのゑ  
 のくにて。  
 ぬほとなり。仁  
 さふらはせ給。

御所出御なりて。南殿のつゆ〔せさ

せおはします。御ともに女房たち。みな露臺になみゐたり。女院の御かたみ〔御らんしいたされたりし。いと／＼すゝろ

殿。きんすけの大納言たち。御ともにて。

女房〔らむせられしこそ。いとはれは

れしか〔木丁ひやうふなと。めむ／＼に

心ことなり。月あ〔殿よりとて。車二三

兩はかりにてあそはぬ。ことに〔月あかきに。

仁壽殿の露臺のしろきうすやうにかきて。を

されたりけり。

よのつれの月も光や増らん千とせの秋の露のうてなは

たれとはしらねと。〔おもふにさこそあらん

とて。御返しは。あの御所へ。少將内侍。

雲の上に千歳を廻る月なればよの常よりけにそさやけき

辨内侍。

この秋は露のうてなの數そひて〔ち／＼にさやけき

後にき／＼しかはまた〔

中將して。院の御所よりおさせられけ〔

〔夜のことなり。十四日のよ。おなしく月〔

〔南殿釣殿などにてあそひ侍しに。い

つ〔れては覺ゆるを。人々おほせられ

しかは。少將〔の方さま。みかは水のす

ゑ。弓庭殿〔まつなとはうつもれて。月

花門のはしらあくるまでみなふしたる。三日

すきて。七月一日。いろのすちかうし。ふたつ

あやなと。心をつく〔かさねともをそ

きかへ侍しに二日はま〔きぬ〔ふせんてう

のうす物。すちからのなかに。ぬいもの〔し

いろ／＼のゑのくなとをかく。心もおよはぬ

〔さふらはせ給。御所出御な〔せさせお

はします。御とも〔まつなとはうつもれ

て〔れひてたる。只今もとめてたらんこ

こちしおほゆるに。月のさやかにやとりたる

程。たとへむこそとて。少將内侍。

水の上は雲間の月の心ちして

影そさやけき

辨内侍は。露臺のきは

もりたる

月はなをめつらしく面白くこそとて。

雲のうへやいつくはあれと軒合の隙もる月の影そさやけき

八月十五夜。二間にこうたうの内侍との少將

辨など。清涼殿の庭の月いとおもしろきをな

かめいたして侍しに。南殿のかたにふえひは

の音きこゆ。あなおもしろ。たれならん。いさ

たちきかむとて。こなたよりめくりて。月花門

のかたさまにてきけは。ひは、藏人のりとき。ふえ

はやすけなり。又そりはし

ふえつけて

ふく人あり。誰といふすき

おほつかな

し。こうたうのつまにて。ひは

こゝに

てきこゆやときけとて。ひとりかへりてつけ

給しこそ。いとおもしろかりし。すけやすか

井にとほりてきこえしかは。少將内侍。

名に高き今宵の空の月影に

そへて秋風を吹

御ひはならはせおはし

なれは。かや

うのくわんけんもつねにせさせて。きか

します。

八月十七日。はきのとにて。宮内卿すけとの

琴。勾當の内侍との。

のふなりの宰相中納言の女

左衛門督殿ひは。宰相

との侍従内侍殿こと。ひろ御所にてと

きへん

ふえのねたゝこれもとうたう

たはせなと

おはします。かやうの事よそ

にきゝ侍し

くて。少將内侍。

琴のれにかよはぬ物は心なりうらやましきは峯の松風

辨内侍。

なとて我露のかとをかけもせてなかはの月の影にもれけむ

宮内卿すけとの。院の御所の御講ことに参り

給しか。このあきはひはひき給へしと

ひとかたならすいみしくおほえて。辨内侍。

なさけ有ことは身にしむ松風

なとか調へかへけん



九月十一日。〔かひに

たちて侍しに。なにとなく内裏のけいきは。

いとおもしろし。すへりていそうの御屏風つ

〔はなれたるを。たてまはしてゐたり。う

しろ〔さきのころゑ。はなやかに聞ゆるを。た

れならん〔のあなよりのそけは。上卿

右大將殿。<sup>きんす</sup>中〔て。わきのちむ

とかやにつき給へり。御屏風のは〔

みれは。辨たかまさことも奉行す。にしき

〔りいたし侍らぬとて。つかひはしりち

かひて。ほとことゝもさかりて。くれかたにも

成〔もうちしくれ侍しかは。辨内侍。

夕時雨このはを染るときしもあれなとおりあへぬ錦なる覽

九月廿七日。〔權大納言ひるはんなり。さ

きのはむつとめさりしかはりに。こよひはよ

もすから候はんなどの給ひて。有明の月いつ

る程にそいて給し。二のたいのほとすくると

て。おもはぬかたにたなひきにけりといふ歌

をなかめてすぎ給し。おりからおもしろくな

と人々きこえしを。さにと少將内侍に申遣し

たりしかは。少將内侍。

やかて我戀の煙にくらへはや〔たははるかなりとも

返し。辨内侍。

はるかなる鹽やはよその烟に〔思ひのけつかたそなき

さにと侍し頃。〔十六日。新大納言。

され。夜番にまいりて。れいの〔にきり。

をのつからなれとも。ままいり給ぬれはいと

ひさし。〔に。きりみすのほとにた

たすみて。なのめ〔しみかへりた

るころにて。わさとならす。なにとな

〔にけり。みせよきほとにうたひすてゝ。いて

た〔を。ありししはやのけふりにもた

ちこえ。それをかはりにかたりかへすそと。少

將の〔

「つかはして侍しかは。辨内侍。」

聞はやな倭にはあらぬからおのみにしむ風は秋ならず共返し。少將内侍。

大和にはあらぬものから唐彩<sup>六イ</sup>かへすくも猶そわすれぬ五節は十二日よりはしまる。月いとおもしろ

し。てうちやうとて「名高きこゆるてん

こつしやも侍しかは。ことにけう有おり。さる

からなとは。むねの「ほとのこととは

なし。たつの日せちゑなとはて。」<sup>亂</sup>

舞に御所も「仁壽殿へいらせおはします

に。右大將殿。御とも兩貫首。<sup>あきかた。ちかより。</sup>てをつ

く「をみにて。ひかけのいとを」ろたい

のはしらにむすひつけて。ときかねて。引かな

くりてまいりたりし。「ことにけふ

ありてみえ侍しか。はてぬれば御

しも。ことにおもしろく侍き。ものゝまねさる

「中將。頭辨<sup>現頭</sup>。つねさた。つねた。これも

と。たゝすけ。あきつしまへなかれこと。次第

をとりてはやし侍しに。むねまさ。竹になりて

ふして。次第になかくるまねして侍し。

「く見え侍き。又おなし人々。我君の代に。」

「せことあるに。ほうらいの山つきい

たさんと。「一たひあるちりのといふう

たをうたひて。い「のつもりてか

山となるらむといふに。むねまさの

「なりて。次第々々にたちあかりくして。つ

きいたしてはやさせて。うるはしくたちて。ち

やうせいふしのくすりといふ「

「此間四行蟲損」

もりにかゝみをすかせて侍しを。ひまなくと

りかはしてみ侍しかは。いとむつかしとあり

しに。このま「りは。ひとりをふせ

こにすかしたるを。これもようなとて。辨内侍。

たきもの、匂ひを袖にうつし〔ぬか、みのかけな惜みそ〕  
十七日。女〔〕して侍しに。ろくを  
ことしらぬといふ〔〕たりしか  
と。さま／＼いはひことも申〔〕  
く。辨内侍。

立なる、霞の袖につゝみても〔色やあまらん〕  
二月十四日。まての〔〕とのゝもと  
より。とみのこうちとのゝむめさ〔〕  
につけて。

なへて世の色とそ今は〔雲ゐの春の梅か、〕  
返し。

梅花なれし雲ゐのちかけ〔なへての色とやはみる〕  
北山殿より〔〕こしといふ心。ふ  
りうにしたる〔むめのはな〕いら  
せさせ給て。このこゝろ歌によめと。おほせこ  
とありしかは。辨内侍。

鶯のことゝふ宿のむめの花むかしを今にうつしてを見る

顯方の宰相中將。あつまへくたるとて。いとま  
申にまいりて侍。〔貫首にてちかくなれ〕

しなこりもなにと〔〕るへし。〔〕

十九日鳥もちて參て〔はせにまいる〕

へきよし申さる。井〔經忠〕惟基など。

めむ／＼に鳥とももちて〔せられけるに。〕

顯方の白鳥ことにゆゝし〔ともみなまけ〕

にけり。ひろ御所の北むきの御〔れ〕

てを侍し。いま一とまいらむと申されしか。〔〕

まゝにてそくたりにし。御鳥屋の事。少將内  
侍。

たのめこしゆふつけ鳥はよそに〔れにね社なかるれ〕

かへし。宮内卿。

あふ坂の關ちの鳥に思ひ出〔リのわかれ有とは〕

四月廿一日。御〔〕なり。右大將とのまいら

せ給ふ。けらむのめ〔〕たはてさりけるに。

けいこにてもまいらせてとて〔〕殿さまに

て御えいはかりなをしてまいり給て。□

ゑ□しやうは。くらのかうたかゆき。もちてま  
いる。右大將とのほ。てうきんの行幸にまいり  
たりし。御ひはをひき給ふ。そのほとのことゝ  
もいとめてたくて。辨内侍。

よつのをのしらへはけふを始にて□ためしを引や傳へん  
御てさりの□ゑとも。こなたかなたよりま  
いたりし。□むかしの花山院の御

繪。又圓融院□侍しに。左大將。朝光。右大  
將。成時。御幸に□を人々みたまひ

て。ゆゝしかりける。□ならひて。こ

とにしたかひけむ。いかにい□お  
ほせられしかは。いまの大將。さたまさ。  
きむすけ。な□

とて。辨内侍。

咲ならふ昔の花の色

枝に匂はさらめや

土御門の宰相。□つまへかたりて

のちまで。くろとのはん□る名はか

はらすのこりて侍けるをみ□

雲のうへになのりすてゝ郭公□には思ひ立けむ  
返し。辨内侍。

郭公雲のいつくにすぎぬらんなの□てたる跡を残して

事わさしけき御まつりことのおまりにや。こ  
の御所中のくみいれのかすを。みなかそふへ  
きよしをうけ給はりて。伊與内侍はりまなと。  
敦説が妹

安福殿あけさせてかそへ侍しに。つりとのゝ

くみいれのことにおほくて。いとゝつもりた  
るといふことにて侍。辨内侍。

みるまゝにいとゝつもりて釣殿□かすは限りしられす

五月雨し□つれゝなるに。大は

ん所に女房たちなに□て。大

はむのかみに。御物たなたきのはんあ□

さしもこのたひの内裏ゆゝしくつく□

のたくみのつくりたる。棚のゆかみ

て□みゆれは。辨内侍。



ひた匠そのてつくりにあられは[ ]のすくにしもなき  
五月五日に。つ[ ]女房たちに。

しやうぶかぶとせさせ。花とも[ ]あやめ  
のかつらかけは。けしきほとに。かさ[ ]

大臣殿。御ゆとのうへより。御まいりあり  
し。[ ]侍従内侍など。はきのとよりと

をりて二間[ ]にせられしに。辨はす

こしきかりて侍しほと。[ ]頭中將み

えしかは。清涼殿よりはみとをして。ひろ御所

のきたむきの御鳥の一間に。日くらしこもり

ゐ[ ]て。人にやみえむと。いとおそろしく

て。辨内侍。

黒髪のおやめはなきを額なるかふとは[ ]と人やみる覽

五月廿日より最勝講也。[ ]しつら

ひて。いまた事ともはしまらぬほと。まつ御覽

せさせおはします。次に女房たちにとて。を

りなはせられしこそいとけう有[ ]

には。二位殿三位殿ならせ給。あさくゆ[ ]かは  
る。四條の大納言もましりて論議す。[ ]

[ ]をかしきことゝもをしへ給。本[ ]かうの

[ ]論議はかなふましとて。いつも讀師

の[ ]ほとは。なことももちてまいるか

けにいとおもし[ ]ちやく座の

公卿になりしかさまの女房[ ]そつ

とめ侍し。日たけて奉行の職[ ]僧

ともゝやうゝまいりて。夕座はいそぎ[ ]

[ ]なはれ侍しもおかしくて。辨内侍。

いそけたゝあさゝ夕さもうち續き[ ]かれといはなん

廿六日。萱三位。<sup>なりし</sup>まいりて。むかひの[ ]

[ ]文あり。すけやす。さむひろ。時つねなと

候。そのみち[ ]<sup>室三位のむすめ</sup>侍従内侍大藏卿

なとまいりて候しに。おなしくいるへきよし。

おほせありしがは。辨内侍。

敷嶋や大和も唐もふみみればその道しらていかゝましらん

御文はてゝ「つねの御所へいらせおはしまして。菅三位かたり申けるからのことなと御物語はへりしを。をよはぬ心ちにもいとお

侍しなかに。それかしとかや。ことにまつ

て。中「となりのともし火のかけをたのみちんにて。かくもむをしけ

るといふ事を。まし。ことにあは

れにいみしくおほ

たのみけんその燈火を哀なる「かへのあなたおもてに

さぬきといふ「いそきて参るへ

きことありて。あさかれる「しに殿の

御参りありて。大はん所「か

なはて。ひもくれほとになりしかは。

「るゆふかれるにそなりにけるといふ

も。

ことはりにあさまつりことしけ

「さ社なるらめ

みな月のころふり「へもちてまいるとて。うちおとしてわらふ聲「いつれのめすそと御たつね侍しに。これはたそ。なに「

「るめすこそといふに。ことに

よしあるけもなきか。おもひいれす。しほのこ

うちと申候といひたりし。いみしくしものく

にきこえし。いとおかし。大納言すけとのゝ。

たれといふそとおほせらるゝに。すけよしこ

そ。えこそかなふましけれとまぬひたりし。め

すそなと申て。わ「

なのらすは人や咎めむなとに聞木のまろ殿にあらぬ物から

あさかれるまいりてのち。「けのおち

たるを。まての小路の大納言殿。「かきて

なかにとりをかゝれたる。このそは「

つけよと。大納言三位とのおほせられしかは。

子を思よるの鶴にもあらな「かこのうちになく

神泉池なるへし。

「繼とりてまいり

たりしを。かさねよとお辨内侍。

蓮葉の露のかすくかさねまね色もみるへき

夏のよの月りしに。三條中

納言きんや宰相中あさか

れるの御覽に候しほと。御所もい

して月御らむす。中納言はゐのつきてん

子にはつみたるやうにて。なつなれと月

はひかりみえ。日は又あたゝか

にみゆるなと申侍しを。大納言二位との。れい

のよしありていふにこそ。いかゞきくと侍し

かは。辨内侍。

久かたの照目にあへといかなれば霜とみゆるん夏のよの月

五月十三日。院御所の御しに。

事ともはてゝ。夜ふけて人々けふ

「しをりしも。郭公の聲きこえ侍

「ろくて。少將内侍。  
折をえてさそなのらん郭公」  
「たははるかなれ共

返し。辨内侍。

夜もすから月みるとちの心あ「なのるほとゝきす哉

七月七日。「人々かねてより申

ちきりて。あかつすかたみ

えぬほとに。なとあらまし侍

たれもねすきてあけにしかは。清涼殿なイ

「たつゆもふみ侍らす。常の御所のせ

「りあらそひふみ侍しもおもしろく。

道遠く分る草葉の心ちして「き庭の朝露

廿六日。攝政殿まいらせ「の御連歌

おもしろかりしことなり。おほせられいた

「れむ歌ひとおりかゝせむとて。發句は

せさせおはします。兵衛督殿をかき給し。辨少

將たゝ三人なれば。いとします。なにとなく日

くらし候はせ給し程に。「御いてのゝち。

御拜せさせおはしゝかは。ゆふひのかけ仁壽  
殿のかうしにきら／＼とうつり。「けのこ

すゑうちなひきるほと。月のひかり  
らすおほえて。辨内侍。

くれ竹の夜のまの月やわす  
ふ夕日かけ哉

八月十五夜。月  
時はゐとのよ  
り。太政大臣。

池水にこよひの月をうつし  
みるかひもなし

御返し。少「將内侍」。

とふ人は我をまたるゝ夜  
まさりかけしなれば

また。

とひとはすみきはな過て  
の月のかげをやとして

までの  
しはしこもりゐんするよし。

申さ  
いとをしと聞えわたらむ

はせ給  
いふさた侍しに。

さらはいとをしといふ事  
かきて

さうもむにたへと侍しに。少將内侍

さはやとありしかとも。心はかりに

心してしばしふるまへ笹蟹のいとをしとこそ思ひよりぬれ

辨内侍。

夏引のいとをしといふ一節  
計ともかけてしらはや

重代な  
心はかりは。歌こ

のむ人侍しか  
少將内侍  
とてと

きときよみ侍しに。  
吹田殿の御

「まりや侍けん。おほつかなき事

「とかに。太政大臣殿おほせられなすと

和歌の浦に人のかきなく藻汐草  
かたにゐるゝ袖哉

かへし。

くやしくそたゝよふ涙のみなかまで  
袖濡しけり

北  
て太政大臣殿より。

もみちはのわきてしくるゝ  
れの方とみてもしなゝむ

御

しくれたによきて染ける  
同し深山と思ひける哉

辨内侍。

もみちはのこきも薄きもゆふし  
の色とこそみへ



女院の御かたより。いろく〔をま

いらせさせ給たりし御返事申せと。おほせこ  
とありしに。少將内侍。

染盡すやしほの色を九重にみよ〔深き紅葉なるらん

御返しはなくて。〔夜のつほねの

みすに。きくの枝につけてさゝれたり。

九重にかされてもみよ君か代に〔すも白菊の花

又御返し。

このへに猶幾千世をかきぬら〔ときくにつけても

辨内侍。

九重にかされてもなをしら〔かもあかぬ也けり

九月十〔御連歌侍しに。あめ

ふりていと〔月ことにくまな

かりしに。いる〔の地下なるして。

兵衛督殿〔かくなかめさせられける。

今更にそのよの空のつ〔月のかけをみるにも

御返事。

誰もけにそのよの空はつ〔もはれける月そと思へは  
辨内侍。

はるゝよもくもるも同しうら〔しともみす秋のよの月

十月十三日。〔かはらけ給ぬれ

とも。なを大殿とてまいらせ給〔

くて。辨内侍。

さもこそはかはらの色のたれ〔ふ松を猶きはなり

と〔院の御所より。なへてならず

〔を人々にたまはすとてなとも

きつけられて侍りしに。その名の〔

〔きて御返事に。申すへきよし。

〔はからひおほせられしかは。少〔

いさしらす誰に心を〔をくしはさすかひもなし

〔に辨内侍

〔いくとせもおきてや〔

〔のをくしのみ。かくひかり〔

〔いらせ給し〔出御なりて

御え

侍しに。女房たちみな供奉人

な

つとめ侍しこそい

とおかしか

大納言も

ましりて。さまく

をしへ

内藏頭

侍し

に

み

これほと

私云。

此集。後深草院辨内侍歌多見之。仍號ニ彼集。  
此辨内侍者。閑院冬嗣公一男中納言長良卿  
之末葉中務大輔信實息女也。辨内侍日記  
下云々。

右辨内侍日記以二本接合之傍注以草書者原本所附蓋當時之  
爲也楷書則今之所加以便覽者云

群書類從卷第三百二十四

日記部五

中務内侍日記

いたつらにあかしくらす春秋は。たゝひつしのあゆみなる心地して。するの露もとの雫にをくれさきたつためしの。はかなき世をかつ思ひなからも。得達のえんにはすゝます。みな生々世々にまよひぬへき人間の八苦なるそあさましき。たゝかゝる世のそゝろことのみ。心にしみてわすれかたき中にも。弘安三年ふしみとのゝ御せん法とて。院の御かたはかなくなりしに。十五夜の月も雪うち散て。かせもひやゝかなるかれ野の庭の氣色。物あはれなれと。おなし心にみる人もなし。ひとりなかもめ

もすき／＼しかりぬへければ。入てふしぬるに。春宮御方つり殿にいてさせおはします。御ともさゑもんのかうの殿内侍殿。おそこには左中將はかりまいる。宰相殿宮内三人ねぬるを。御所になりぬるとてあはれは。みなおきてまいる。すさましき物とかやいひふるすなる。しはすの月夜なれと。宮の中そみなしろたへにみえわたりて。木々のこするは花とみゆ。池のかゝみもされたるに。かれ蘆のはかなくしほれふしたるほと。よろつにみところあり。をとなくしつまりたるに。たえ／＼いはにもるゝ水のほとはかりして。軒端の松のみそつれな

くみゆる。權大夫具守しこうしたるほとなるに。御つかひあり。ときは井殿の御まいりとはかりこたへて。つほねにはちいさきわらははかりそある。いとねんなく。はつ雪の心地してなと申。女院の御かたも御るすなり。御つほ御らんせらる。軒ちかく一むら生たるくれ竹の雪おれしたるも。なへてかれぬる草よりもはかなく。よろつにけちかきさまに。み所そひてそ侍る。また女房のつほねとも。いまたぬ所もあり。いとえんたちて。おかしきことゝもおほし。猶たちかへり。ありつるかたを御らんせらる。すこしはれつる空もまたかきくらし。風もはけしくさえたるに。やもめからすの一聲もあはれをそへておほゆる。

なかもわひ心も空にかきくれて降白雪にすむ月のかけ。うきふしを思ひみたれてはかなきは汀の蘆の雪の下おれかくていらせ給ひぬれは。御るすの御所にぬ

ぬれとも。しはしは猶はしをあけて。はれくもる空をなかめて。なにとなく物かたりともするに。時うつり鳥もしはくなくに。またあはれをそふるかねのをとも。まくらにちかき心地して。いとあはれにものかなし。

我ならて鳥もなきけりれをそへて明行鐘のさゆるひきにたゝ心の中はかりつゝかぬことのみあんせらるゝも。われなからおかし。又弘安三年の所なりしに。四年の八月十六日。たそかれのほとよりかきくれてふる雨のふくるまゝになこりなくはれて。おなし空ともみえぬ月影おもしろければ。春宮の御かた入らせおはしまして御月見あり。きりふりておかしきに。猶くもらぬ露の光り。聲々になく蟲の音も。とりあつめたる心地して。吹まよひたるかせにみたれまさる露の玉も心くるしきに。松にかゝるひ



かりはことなるも。如意ほうしゆの玉かとみえけんさか野も。これにはすきしとおほえて。をのつから暫しもきえぬたのみかは軒端の松にかゝる白露御かた／＼にいらせ給ひぬ。あかつきちかくなるほとに。院の御方はまた南殿の月を御らんせらる。よひよりはこよなうきりもふりまさりて。木々のこすゑもみえわかす。かすめる空にかりなきわたりて。あはれもそへておもしろければ。

霧こめて哀もふかき秋の夜に雲井の鷹もなきわたる哉

御よるのゝちもとみにねられす。

よなくはねぬよの友と眺むるに霧なへたてそ秋のよの月また弘安五年四月十七日。さかとのゝ御るすなりしに。雨もをやます。空さへとちて日數つもあるころ。おほやけわたくしはつねをまつなくさめはかりに。あま夜の空を御らんせらる。御ともに三位殿。御つほね。大納言殿。別當

殿。男にはあやの小路の三位。土御門の少將。そゝることゝもまうして。おかしくけうあることゝもなり。心つくしにまちあかしつる郭公は。それかとおほめくほとの一聲に。花たちはなのかほりなつかしきも。よそふる人もありかほの心地して。ひかりなきよのやみのうつゝも。おもひなすかたはいつれもあさからねは。なか／＼なるわすれかたみに。いまでもつさせさりけり。

時鳥おほめくほとの一聲になこりの空もむつまじきかな

世にふれは。なにとなくわすれぬふし／＼もおほく。袖もぬれぬへきことはりもしらるゝこそ。かはゆくおほゆれと。ことに弘安六年四月十九日。れいのさかとのゝ御かうなりて。還御なる御よるのゝち。春宮の御方土御門の少將はかり御ともにて。院の御方さまにしのひて御らんせらるゝ。南殿のはな橘さかりなる

ころなれば。かをなつかしむ時鳥もやと。また  
せおはしますに。心つくしの一聲もあかすう  
らめし。そのころ。左中將なにことにかありけ  
ん。こもりて久しくまいらさりけるに。有明の  
空になきぬる一聲を。ねさめにやきくらんな  
と。かたしけなくもおほしめしいつるは。夢の  
中にもかよふらんをと思ひやらるゝに。

思ひやるれきめやかに時鳥なきてすきぬる有明の空

と御けしきあれば。内侍との。たと／＼しきほ  
との有明のひかりにかきて。花たちはなに  
つけられたり。さるへき御つかひもなくてあけ  
ぬへければ。土御門少將人もくせず。たゝひと  
りむまにて行ぬ。てつから馬の口をひきてか  
とをたゝくに。とみにもあけす。空はあけかた  
になるもあさましくおかし。かとをあけぬる  
に。思ひよらすあきれたちけんもことはりな  
り。さらぬなされたに。おりから物はうれしき

に。かしこき御なさけもふかく。色をもかを  
とおほしめしいつるも。御つかひのうれしさ  
は。けにいかなりけん。おなしたくひならん身  
は。けにいかてかうらやましからざらん。あり  
かたきめんほくいける身の思ひ出とそ。よそ  
に思ひしられて侍りし。ほの／＼とあくるほ  
とにそかへりまいりたる。

みやのうち鳴てすきける時鳥まつ宿からは今もつれなし  
その日土御門少將に。

あし引の

山ほとゝきす

しゐてなを

まつはつれなく

ふくる夜に

とはかりたゝくまきの月はあらぬくゑなと

まかへても

さすかに明て

たつねればしけき草はの

露はらひ

わけ入人の

すかたさへ

思ひもよらぬ

おりにしも

いともかしこきなさけとて

つたへのへつる

ことのはを

我身にあまる

心地して

けに世にしらぬ

有明の

月にとゝむる

おもかけの

名残までこそ

わすれがねぬれ

言の葉にいかにいひてもかひそなき顯れぬへき心ならぬは

返事に少將。

久かたの 月のかつらの かけにしも ときしもあれと  
ほととぎす 一聲なのる ありあけの 月毛のこまに  
まかせつゝ いともかしこき 玉つさな ひとりある庭の  
しるへにて たつれし宿の 草ふかみ ふかきなさを  
つたへしに 袂にあまる 嬉しさは よそまでもけに  
しら雲の たえまに日影 ほのめきて 朝なく露の  
たまほこの 道行人の くれはとり あやしきまでに  
いそぎつゝ そのかひありて 千はやふる かみしもともに  
おきあつゝ まつにつけても すみよしの 岸におふなる  
草のなの わすれかたみの おもひてや これあらはれは  
闕 なか／＼いかに うちみまし 心にこむる  
わすれかたみを

### 内侍との少將にことつけ。

時しもあれみかきに、ほふ橋の風につけても人のとへかし  
かへりこと。

### 廿日。内侍殿に。左中將。

いかならん世にかわすれん橋の匂ひもふかきけさの情を  
返ことに。

橋の匂ひにたくふなさけにもことゝふいまを思ひしらるゝ

弘安七年三月十七日。これもさかとの御る  
すなりしに。御あそひあり。御ともに女房四人  
おとこ三人を侍りし。たいの御方大納言殿れ  
んせい殿。御てうつまのみすまきあけて。御  
所御ひは。あやの小路の三位らうゑい。はくの  
少將ふえ。土御門の少將こと。よもすから御あ  
そひともあるに。いつもといひなから。ちやう  
の屋の花の木すゑおもしろく。秋ならねとも  
身にしむはかり風もはけしき花のあたりは。  
けにゆきてもうらみまほしき心ちして。おほ  
つかなきほとにかすめる月は。しく物なくお  
ほえて。おりからはものゝねもすみのほりお  
もしろきに。のちも又しのふはかりのことの  
葉を御たつねありしに。めん／＼にあらはす  
もおかし。さためなくはれくもる村雨の空も。  
つくりいてたらんやうなり。かこちかほなる

ともいひぬへうなかめたるに。三位。

はれくもり花のひまもるむらさめに

とあれと。うちまされつゝつくる人もなければ

は。心の中に。

あやなく袖のぬるゝ物かは

とおほえし。こよひはけに春のみやゐもか  
ひある心地して。

月影にいく春へてか花もみし今宵はかりの思ひ出そなき

八月十三日。ひるより雨ふりてしめやかなる  
に。くれぬれは。月はなやかにさし出て。をく  
らの山もたとるましけ也。よもふけしつまり  
たるに。人たゝふたりはかりたちいてゝみれ  
は。御所になりてしはし御覽せられて。いらせ  
おはしましぬれとも。ふたりは猶のこりて。む  
かし今をなきみわらひみ。てんほうりんの契  
り。ちやうせい殿の心地して。あかつきちかく  
なれば。入かたの月山のはにかたふきたるは。

入日ならねとをくるゝ心地して。いにしへの  
をのゝ山さへゆかしきまておほゆるも。入な  
んあとの心ほそさを思ふにふしぬ。

なかめつる月もいるさの山端に心ばかりやなをしたふらん  
八年三月十七日。夢にいくらもまさらぬ春の  
夜も。あかしかねぬるねさめに。まことやこそ  
のこよひ。月と花とによをあかし侍りしも戀  
しく。たゝいまのやうなるに。ほとなくもめく  
りあひぬるさためなき世に。なからへにける  
かなと思ひつゝくるを。いまた御所は御よる  
のほとに。すへりて人しれす。ほかには。しらぬ  
心の中をと思ひて。大納言とのゝ御つほねへ  
はなにつけて。

我ならぬ人もやこそこのこよひとて月と花を思ひいつらん  
かくまて御所に御人すくなゝりつれば。御ひ  
るよりさきにといそきまいりたれば。女くわ  
ん。土御門の少將殿まいらせよとて候といふ。



とりてみれば。ちりたる花につけて。こそこのこ  
よひおほやけわたくしのこと葉をこめて。歌  
ともあまたかきたり。めん／＼みなひろうせ  
よとて。あるなかに。三位はおなしかきりなら  
ぬなけきにたへて。みやこのたのみたになく。  
かやうにまうて侍るときけと。人しもこそあ  
れ。なとかゝりけんと。かならずあひぬること  
くさのすゑもあはれにかなしきに。ありし夜  
のむらさめ。けふまた袖に時雨ぬる心地して  
そ侍る。

忘れすよしなは共にといひなきしこそ軒端の春のよ月  
此歌のはしめはあはれ也しことなり。すゑは  
かしこき御ことの葉を。ひとつによりみこめた  
るとみえたり。御返事に。

月影のち忍ふへき物そとはななへてにもなかめける哉  
わひぬれば移ふ人はつられと心のそこにあはんとそ思ふ  
これもはしめは。さそふ人あらはと。身を木か

らしのとありしことゝみえたり。心のそこと  
いふ事はとかむへきふしなり。あはんと思ふ  
といふは我ことの葉のすゑなり。かへりこに。

瀧川のなかれてあはん行末を心のそこにわすれやはする  
めくりあふけふまちえても面影のかすめる月は物そ悲しき

これはこと葉にてひとへにこめたる御かへり  
ことなり。かゝる世のそゝろことゝもきくに  
つけても。あるましかはとおもふためしもか  
なしくて。まして宮このほかをおもひやるは。  
あはれもふかくかなしければ。けふとわすら  
れす申せといはせて。ちりたる花につけて。

なけきこしそのかれことの末ならは諸共にとや身は厭ふ覽  
よそにたにたへぬ歎きの花櫻ちりにしあを思ひこそやれ  
みやこにかへりてのち。三位。

今こそは思ひしちるれかれことの歎によらぬ思ひありとは  
花ならて散にしあのおも影はたえぬけきの殘はかりそ  
又大納言殿の御つほねへ。三位。

わすれしと契をきてし言の葉や都にのこるかたみなりけん  
むら雨の空にはあらてみし月の我袖からとかけそやつれし  
思ひいて、まつ袖ぬれし村雨やうき身ひとつの涙なりけん  
又三月卅日。へたゝる日數のなこりも。あはれ  
におもひやられて。

いかばかり哀そふらんへたて行日數もけふの春をなこりに  
かへりこと。三位。

かくはかりなきやはせし大方の年へてなれし春の名残を  
少將。てゝにて侍し人にをくれてこもり侍る  
に。をくれさきたつも。これにかきる世のため  
しとのみなけくに。ほとなく月日もへたゝり  
ぬれは。秋もふけゆく山さとのすまゐは。袖も  
ひとつの村雨のみ。みねのあらしやこととふ  
らん。宮古たに。ふりみふらすみさためなきこ  
ろは。たゝおほかたのなかに侍るをと。あは  
れもふかくおもひやるはかりにて。ひさしく  
とはぬにつけて。

物思ふ袖の涙もくれなゐのおなしちしほにそむるもみちは  
返ことに。

ちしほまでそむる紅葉をみるよりも袖の涙や色まさるらし  
又弘安七年のとし。遠き所にしのひて。ものこ  
もり侍るに。としころあさからす申かはし  
たる人なくなりて。としもあまたへたゝりぬ  
るに。これにまいりて。つねにこもりしやとに  
侍といふ所をみれば。いたうあれなとはせね  
と。人なくあはれけなり。かけつくりなるに。  
しはかきやり水なとはかなき物から思ひ入ぬ  
るはかりにや。みところある心ちして。あはれ  
になつかしければ。たつね行てみれとも。いか  
にととかむる人もなし。かけすみはてぬとみ  
るいけ水にも。やともの月たになきころなれ  
は。をとする物は。山よりおちくる瀧のひゞき  
はかりそおとろかしかななる。あはれもおな  
しかきりに。ふかき涙はかりは。袖にうかへて

も猶ところせきいは波たかく。谷になかるゝ水のをとまても。とりそへものかなし。

柚の上におちくる瀧のすゑなれやをとたてゝ行山川の水世にすまは又みんとこそ思ひしかおも影なれし山の井の水なかれあふ涙の末もかひそなきかけすみはてぬ宿の池水たゝかひなきひとりことのみそあはれなる。七月五日。北山殿に行けいなる。御かうもなりしかは。はへ／＼しき御あそひともなり。ひるは山瀧なと所々御らんせられて。くるれば御舟にめす。夕つく夜より有明になるまで。かゝるよもなし。

九日。月さしいつるほとに。れいの御舟にめす。大夫<sup>實家</sup>ちさんし侍りぬと。あそひくたひれ侍と申。しはしはつり殿にやすらはせおはしまししかと。御舟さしいたさる。御樂あり。殿上人ともちいさき舟に乗て。なか嶋をへたてゝ吹あはせたるものゝね。たとへんかたなくお

もしろし。はるかにこきいてぬるに。かすかにかつこをうつをと聞ゆるを。人々あきれて。いつくならんと申に。大夫にやあらんとて。むかへの小舟に。かくしらうゑいなとして。さしよせたれは。火をたきてそまいりたまふを。いみしく興せさせ給ふ。春宮の御かた。十三日は御くたひれにやありけん。御舟にもめさす。無量光院のひさしにて月御覽せらる。すのこに花山院<sup>家数</sup>大納言大夫殿さふらひ給ふ。さま／＼おかしき御物かたりともあり。ひんかしのつま戸の口に。大納言殿權大納言殿さふらひ給ふ。やかてそのひんかしのまのすみ。かうらんに宮内宰相殿三人さふらふ。なにとなき物かたりともして。ふけ行まゝに。ことにちかきにしの山もと。入かたちかくかたふきたる月の。池に移ひておもしろきを。ところからはけにみところあるよゝの月かけ。いかなる世にもわ

すれしやなど。いひあはせつゝ。廿五のほさつ  
らいかうの御かたみるよりはしめて。たのも  
しくあはれなるかたもそひて。なこりおほけ  
に。なからへは又こん年のこよひ。おもひいて  
なるへしやなどいふ心のうちに。

山かけになかむる月よめくりあはん都の空に面かはりすな  
ふけぬれはいらせ給ひぬ。

十六日もこの御方は御ふねもなし。あさかれ  
ゐのみすまきあけて。月御らんせらる。御えん  
に人々さふらひ給ふ。はくの新少將衛門の藏  
人めしいてゝまいらせらる。花山院大納言<sup>家数</sup>笛。  
大夫殿たいこ。さらぬ殿上人とも。りちには月  
の光りもことなるに。<sup>坂頭</sup>はとうのまいいてたる  
ほとは。まことにおもしろし。なこりおほくて  
はてぬ。宮内のおもとに。おやのおやともいひ  
ぬへき人の許より。月のたよりにとたのめ侍  
るに。人々くしてまへわたりしてみえ侍るを

うらみて。

偽と思ひなからまちかれつねぬよの月にかけあくるまで  
といひをこせたる返事を。あまりひたやこも  
りならんもさすかなれは。しのひて返ことつ  
かはし侍るか。さるへきつかひもなきを。いか  
かし侍へきと。いひあはするかひなからんも  
と思ひて。あらぬさまなるすかたをして。夜も  
なかはにすきて。あか月ちかくなるほとにゆ  
きて。御まやをつほねにしつらひたるしとみ  
を。しのひやかにうちたゝけと。みな人ねたる  
氣色にて。こたふる人もなければ。あまりこと  
ことしからんもいかゝ也と。思ひわつらひて  
やすらふほとに。東のつまとのかたに。たゝく  
くゐなのと。うちなかむる聲すれは。それにや  
あらんと。ことはりもすきて。やさしくもおも  
しろくもおほえて。聲につきてやりとにたち  
そひて。月をなかむるなりけりときくに。まこ



とに月をまつにはあらで。人まつほとすさ  
みにやとおもひやられて。うちたゞけは。たそ  
ともいひあへぬはかりにあげたれは。なにと  
はいはすふみをさしをくに。袖をひかへては  
なたす。おそろしくあきれたる心地してあさ  
ましかれと。さはかぬさまにもてなして。さり  
けなく。やをらすへりにくるに。くまなき月に  
みゆらんうしろてもはつかしく。われなから  
心あさかりけるふるまひも。そらおそろしく  
あんせられて。くやしくおほえて。心のうち  
に。

くあなかと疑はれつるまきの戸をあくる迄とは何叩きけん  
人にはいはぬことなれば。よろつはあいなき  
心ひとつなり。

十八日。野上の御かう行けいなる。礎道ゑんたうに  
殿上人ともわらうたをあまたしてしきたる  
を。またひろひをとらしとはしりなとするも

おかし。のかみのけしきまことにおもしろし。  
かけひの水のけしき。はかなき本草までも。み  
ところあり。ひろき野に。われもかうを。まし  
る物なくうへわたしたるに。わかきねうはう  
たち。山きはまてわけ入てみれと。みちなくて  
かへりぬ。くるゝまて御あそひありて。いらせ  
給ぬれは。れいの御ふもイねはてぬ。

十九日は。めうをんたうの御幸なり。おもしろ  
くめてたし。

廿日。夜はことにひきつくろひたる御ふなか  
くあり。春宮御ひは。花山院大納言ふえ。こと  
はれん中也。とく大寺の大納言らうゑい。大夫  
殿は二位入たうか御ものやとりのとしといふ  
ものとのりたる舟にて。入江の松の下にかく  
ろへて。ひはをしらへてをとつれ給ふ。いつく  
ならんいたしたれは。御舟さしよせてまいり  
給ふ。けいせいの舟に乗たかり侍つるほとに

なと申給ふ。いとおかし。廿日月はすこし心もとなくまたるゝほと。御堂の御あかしの光りかすかに水にうつろひたるほと。おもしろくみゆ。月さし出ぬれは。まはゆきほとなるに。漕まはすふねのかちのをとに。たちさはく水鳥のけしき。なか嶋の松の木末。物ことにおもしろきことかきりなきにも。又かゝることいかなる世にかと。なこりかなしうこそ。あそひはてぬれは。また田むきの月御らんせらるゝに。春宮の御かたは。道遠くことはなれたるやうなれはならず。のかみへそいらせ給ふ。たむきのかた。ことに草ふかくわけ入たるに。なにおふもけにとおほえて。はてはいつくとみえぬまてはるゝとひろきに。いなはにをきわたす露の光はたまをならへたらんやうなり。とり／＼さま／＼なる所々のけしき。いひつくすへうもあらず。還御なりていらせ給ひ

ぬれは女はうたちは猶大御堂のひろひさしにいて。よ／＼雲のひまみえゆくに。すさきにたてる松の木たち。つり殿ちかき松にふねうきたりし中嶋に。羽うちかはしたる鳥とものむれゐたるまでも。よろつにみすてかたけれど。心にさしきの野上わけ行に。あるかなきかの月のなこりなをしたひけん。さしきはにしの山もとゆかしくて行ぬ。まつ山にわけておひたるまきの木末露けき山田のいはまでもはかなく。いなはの風にみたれたるほと。山のはちかく雲にきえゆく有明の影。とりあつめたるあさほらけものかなしくて。心ほそくなかめつるさへ入ぬれは。

横雲の空に消ゆく有明を心ほそくなかめつる哉

しのゝめの明行空の秋風になひくいなほも露をこほるゝかやうにつゝかぬことのみを心の中心におほき。また野かみより還御なりて。あけほのに御

舟めされて。あけはてぬれは入せ給ひて。やか  
てそのまゝなから御くわいあり。數ならぬす  
ゑすゑまでも。心々にうちぬる時もなくそあ  
そひあひぬる。

廿一日は還御なり。院の御かたはくるゝほと  
になりぬれは。御なこりあかす。月まつほと御  
舟にめす。月いてぬれは。野上へいらせおはし  
ます。よきにはひきかへのとかにて。ふけぬれ  
は還御なる。そのゝち御心地れいならず。わら  
はやみにてわたらせおはしませは。おもしろ  
くわすれかたかりしなこりも。此御ことのあ  
さましさに。よろつものうくて日數つものに  
八月にもなりぬ。ありし野上ふとおほしめし  
いてらるゝに。大夫とのゝ御歌あり。

今かゝる心にも猶忘れずのかみのみちのけさのあけほの  
御返事。

今思へは誠やけふにてありし哉のかみの松の夜のあけし色

あさましきなかにも。おほやけわたくしわす  
れかたく戀しきに。わかき女房たち。けふはい  
かになといふにつけても。思ひ出らるゝ事お  
ほし。さらに露をきたるか。ありしなからそか  
しと思ふに。我から衣の戀しさもかなしくて。  
わすれすよ野上に茂るわれもかうわけし袂の露もまたひす  
かくて日數つもらせ給ふ御こと。あさましか  
りしに。めてたくおちさせおはしましぬ。

晦日に里に出て。九月四五日のほとに。尼崎と  
いふ所にゆくに。京をよふかくいてゝ。とは殿  
ちかきほとにて。夜やうゝあけゆく空に。木  
本の本末も色つきそむるころなれは。えんな  
るほとにて。なかゝおもしろし。舟にのらん  
とするに。かすしらすさりあへぬまでふねお  
ほきに。きゝしらぬさまにおそろしけなる聲  
したる物ともひしめくをきくにつけても。ひ  
きかへたるしきもあはれにて北山殿思ひ出ら

れて。いかにとたにいひあはする人もなし。はるはるこき行に。河霧たちてこしかたゆくさきもみえす。きん<sup>然</sup>やかた野といふ所するに。をとにのみきゝわたるをと思ひてしはしみるに。遠ければさたかにはあらねと。しは野のなかより鳥のたつを。きゝすにやあらんなといへは。

古もありとはかりはなとにきく交野のきゝすけふみつる哉。またはしおほくすきぬるなかに。これなんあまの川に侍るといふをみれば。はしやふれてそのかたはかりそ。はつかにのこる。

これやこの七夕つめのこひわたる天の河原のかさゝきの橋かくて日の入ほとに行つきぬ。日は水の下に入とのみみえて。河よりうみになるけちめ波あらくたち。はるかなる沖にくく舟は系にかきたらんやうなり。うしとらのかたをみやれは。すみよしの松むらたち。たえゝにかすみ

てみゆ。たちかへる波風も。うらならねともいたうはけしき心地とする。ひるきふねのうらといふかたに出てみれば。うらの松風波にかよひて。入海心すこく神さひていとたうとし。はまにあまとものかひひろひ。また沖に釣するもあり。たくなはあみなといふほしをきたるをみれば。ほすひまもありけるをと。

うちはへて苦しき物と思ひしに蜚のたく繩ほすひまもあり夕日の影おもしろきに。沖よりあまの釣舟とおほくかへるもあはれなり。くるれば。遊女か舟とも歌うたひ物かすへなとするもおかし。一かたならすみやこのみ心とまりしに。海山へたゝりぬる心ほそさを思ふに。おも影はかりかたみとて。波ちはるかに月をなかむるさへ。よそにくまなき影も。我からは猶くもらぬ夜半もなし。かくて心もとなくかすへられつる日數も。ほとなくてのほるは又立歸りあ



かぬ心地して。さすかなれぬるうら風に。心は  
なひくからと。われなからあやにくにて。思ひ  
しらるゝ。こしかたもはるかになりぬるも心  
ほそく。梢をかへりみれとも。へたゝりかすむ  
雲井はかりをなかめて。

こし方をかへりみれ共にゝと宵隔てゝそこはかとなし  
をそくいてゝ。あすも日くれぬへしといへは。  
夜もすから舟をこくに。廿日の月なれは。ふく  
るまゝにすみまさりておもしろきに。みな人  
ねぬれは。ひとりおきゐてみるに。かけもなか  
るゝとみゆる月は。なをこそをくれさりけり。  
よろつを思ひつゝくるに。はては物おそろし  
き心地して心ほそし。むしあけのせとにとい  
ひけんむかし物かたりさへそあはれに思ひい  
てらるゝ。人おとろきて。はるかにもきにける  
かなと。みちもおそろしかんなるを。いつく  
かとまるへきなといふ。はしもとゝいふ所に

つきぬ。あさましおかしけなる家とも。川のつ  
らにつくりつゝけたる所にとまりぬ。かくす  
るすまゐはいかならんと思ふもあはれな  
り。あけぬといへは。また舟に乗る。よもすか  
らひとりなかめし月は。あけ行きりにひかり  
もさへにけり。ほのかにきえのこりたるけし  
きに。心つくしけなる秋の空なるは。物かなし  
きこゝちするに。あまり夜ふかくいてゝ。あふ  
舟もなきに。きりにかすみてほのかにくるを。  
ちかくなるまゝにみれは。はかなき木をくみ  
てのりて行ものあり。なにそととへはいかた  
と申物に侍るといふ。あたなるさまもはかな  
くあはれなり。

朝霧もはれぬ川せにうきながらすき行ものはいかた也けり  
みなせといふ所をすくるに。これなんむかし  
御所にていみしかりしも。いまかくなりぬる。  
あはれに侍ると。ふるめかしき物かたりする

ものあれは。

あさからぬ昔のゆへを思ふにもみなせの川に袖そねれぬるかへりてのち。あはれなりしすさひも戀しくもわすれかたく。御所より人々御ふみあり。とりたてゝはなけれど。心地なやましくて日數つもるに。さらてもはかなくもはかなきに。いつかうき世の風にさそはれんなと思ふも心ほそくおほゆるころなめれは。めつらしさもうれしさも一かたならず。いつしか御所さまのおなしわかれの秋の色に。あはれもふかき御ふみはいつよりありかたかりぬへしと。心ひとつにはなくなつたのまるゝそあはれなる。

花鳥の色にもれにも忍ふやとありのすさみもあらはあらましさとともと。おなし心のたのみにも。またるゝ人のひさしくたえて。かゝるをなとかと思ふもうらめしくて。

身のうさも命もかきこの秋を哀とはかり人のとへかしかくてほとなく年もかへりぬれは。また三月十七日もめぐりあひぬ。さためなき世になからへにけるもうれしなから。しめの外なるふせやにうつもれ過しぬるも。おなしうき世にめくれとも。なをかひなき身なりけりと。くちおしくおほゆるに。みちのたより木すゑはかりをよそにみるもなか／＼なる心地して。大納言殿花につけて。

月もすむ雲井の花をよそにみてなれし昔のけふを戀しき御返ことに。

をしなへてやよひのけふを忘れぬを花故にこそ思ひ出けれ花ゆへとかやみゆるもうらめしく。その世のこともとたゝいまの心地して。こよひは入まて月をみるもかはゆく。我なからおかしくけうさめておほえなから。

雲の上の月に心はすむ物をしめの外にや思ひなすらん

猶はかなく。大かたのかすにはもれぬこともやと。おほゆるそおかしき。

また四月廿五日まつりなれは。御けいなとひしめく。めん／＼にあふひつけなとするも。年に一たひもいくめぐりあひぬらんと思ふに。こそこの此ころもたゞいまの心ちして侍るほとなさもあはれにて。そのなにつけていにしへをわすれすしのふ人もあるらん。まち／＼心にみるらんけふのかさしをと思ふに。まことや新宰相殿のことしはひきかへてあらぬさまにやよそにみて。かひなきそのかみのこともいかにと。かす／＼おもひやられて。あふひにつけて。

そのかみのもやはかなき葵草何ゆへよそになのみきくらんかへりことほとへて後。

さま／＼に思ふ心をしこめてとふにそいと、涙おちける五月六日。御かうのひて。六條殿へ十三日御幸

なる。御るすもいつしか人なくさひて。雨しめやかなる夕くれに。まつむきとのゝみすまきあけて御らんしいたされたり。御まへに大納言殿はかりさふらひ給ふ。すのこにたちいててみれば。池にはわくへきひまもなくしけりたる蘆まにみゆるふねの。ありかさためすうきたるさまもはかなきに。さはりおほくみゆれは。

はかなくて蘆まにみゆる浮舟のよるへさためす物を悲しくれぬれはいらせ給ひぬ。こよひは御よるもとし。おそろしきまで人なくのとなるつり殿に出てみれば。雨もすこしをやむけしきなり。雲の絶間にとき／＼もりいてゝかすめる月のひかりもめつらしき心地して。大納言殿。あま雲にしはしやすらふ夜半の月ながむる人の心をやしるとおほえ侍て。いたく心つくしけなる影もうらめしく。なにとなく物哀也。南殿の橋もさか

りなるに。かれたる軒のあやめもひとつになつかしくて。

かれ／＼に残るあやめもなつかしく花橘もひとつかほりに七月二日、御くわいあり。ゆふつく夜のころなれは。更行まゝの空は星の光りはかりなるに。しつまりたるよの氣色。長閑におもしろし。まつむき殿にみすまきあけて。御ひきなをしにていてさせ給ふ。ひろひさしに三條の三位頭辨。すのこに殿上人ともはさふらふ。かうしためさねなり。

あら玉の年をかさぬれは。春のみ山の木かくれより花郭公月雪につけて。心をのふるなくさみも。さすかにありといへとも。おほやけわたくしうちまきれて。物まいりなどのひま。いつをかきりとなければ。ならはつせのかたへおもひたちて。いまたみぬかたの木するゑもゆかしくて。いとま申しれんとて。けん立き門院の

御所衣笠殿へ。九月十三日にまいりたれば。人おほく。せうほう院の山にてまつとらんとて行に。時雨うちそゞき風すこしふきて。やうやう木するゑも色つくころの氣色。なにとなく物あはれにみえたるに。おなしふせやのなかに。すこしよしあるさまになして。軒ちかくうへたる萩のひかきのうへよりみえて。かきほに植たる夕良のつる。かれのこりたるかれ葉とも。月にみたれてそよ／＼となる。みゝもめもとまる心地して。いかなる人のすむならんといへは。むかしのぬしは世をいとふ人にて。いまはなし。そのふるきすみかときくといへは。哀もまさりて。

枯残る賤かきほの夕顔に心をそめてすきそやられぬ

萩の葉もおなしふせやのかきなればたゞには過ぬ風の音哉  
おなしき十三日。はりまの中將。日比のわつらひをもくなりて。いまはたのみなくなんとき



く。あはれにかなしきをおもひなから。いまゝ  
てとはぬをこたりもうたてくて。

いかにして暫し此世に影とめん別れんもの悲しくもある哉  
限りなく哀とのみはなげゝ共いはれは人のしらすそ有らん  
あるかなきかのやうにて。うき身世にかけと  
とむへき心ちせぬ心ほそさは。たゝ思ひやれ  
といへは。

いさやけにあはれ悲しと思ひける心のほとも今こそはしれ  
ことはりもけにとかなしくあはれなり。こよ  
ひは十三夜そかし。御くわいあれともましら  
ぬはあはれに。いつしかこの世なからあらま  
しかはのかなしさも。やうく人々あはれか  
る。くれぬれは春宮は院の御所へいらせおは  
しまして。御舟にめして月御らんせらる。空は  
くもりむら雲たちて。なか／＼みところある  
さまなり。心の中に。

はれくもる月そながく珍らしき空も心のあるよなる哉

御舟ともはてぬ。御湯殿のうへのすのこにた  
ち出てみれば。月のあたりなる雲もはれて。庭  
のあさちも露の光もみえわくに。ふけにける  
夜のけしき。つり殿のかたへ出てみれば。とう  
ろのともし火かすかにて。やり水のいしまに  
もるゝをとのみあはれにきこゆ。

岩まもるいしまの水のをとすみて秋は哀ときゝそなざるゝ  
まてもイ

十月十日ころ。はつせにまいり侍れば。河原の  
ほとにてほの／＼とあくるに。川霧たちて行  
さきもみえず。よこ雲の空はかりけしめみえ  
ていとおもしろし。

川霧に道こみえれ小車のまはりていつくわたせなるらん  
うちなるをちといふ所をみれば。いつれ昔の  
あとならんと。色々のもみちともみえたるに。  
しる人あらまほしくおほゆ。

おほつかないつれ昔の跡ならんをち方人にことよとはまし  
まきのしまといふ所。すさきに鷺のゐたる。お

ほきなる水車にもみちのいろ／＼。にしきをかけわたしたらんやうなり。芝つむ舟ともあり。つみはてゝいそき岸をはなれんとするもあり。

心ほそやぬくぬにつなく柴舟の岸を離れていつちゆきなん平等院をみれば。極樂のしやうこんゆかしくみるとかやきこゆるもことはりに。もみちの色さへことなるも。時雨もこの里はかりわきてそめける。みやこのつとにおらまほしく。かへらんだひと思ひなしてすくるに。又にゑのゝ池といふ池のはたをすくれば。鳥のおほく水にをりゐてあそふ。なにそとへは。かもめといふ鳥なりといへは。

池水もあさけの風もさむけきにをりゐてあそふ鴈とりかな春日にまいりつきて。宮めぐりすれば。春日野はる／＼と入て。鹿のふすはきもしもかれてみえす。

春日野は鹿のみそふす霜枯て萩のふるえもいつれなるらん御まへにまいりたれば。かり殿の御ほとにて。やう／＼作りたてまいらするいとたうとし。心のうちに。

頼もしや三笠の山をあふきつゝ影にかくれん身なし思へばさてさる澤の池をみれば。にこりなくすみて。采女か身をなけけん昔の影もいまうかひたる心ちして。いまはとみけん面影を。我なからいかにかゝみのかけのかなしとみけん。御幸ありけん帝の御心ちも。かたしけなく哀也。

思ひやる今たに悲し我妹子がかきりの影をいかゝみつらんとあはれなり。はつせにまいりたれば。朝ほらけ霧たちて。かり田のおもさひしきに。つるのむれゐてなきあひたる聲いとすこし。

秋はつる山田の庵のさひしきに哀にもなく鶴の聲かな三輪の山といふ所をみるに。をとにきくはかりなりしを。ゆかしく心もとなけれと。かへら

んたひと思ひてすきぬ。はつせにまいりつき  
て。のほりらうを入よりたうとく。おもしろき  
ことの世にあるへしとおほえす。らんしゆ  
のけしきもなへてならずたうとし。かひ／＼  
しく心にしむるおもかけ。しんおこりて。年月  
のあらましけふこそと。うれしきことかきり  
なくて。御帳もあきておかまれさせ給ふ。おり  
なんのちいかゝとおほゆ。

へたゝらん後を思へは戀しさのいまよりかれて涙こほれぬ  
かねては長閑におもひしかとも。めてたき御  
世のひしめきて。京よりつかひあれは。心も心  
ならず。あかつきはいそき下かうするに。宮こ  
もいそきながら又これもなこりおほし。この  
たひそみわにまいる。をとにきゝしよりはた  
うとく。杉の木にわを三つけたるもおもしろ  
し。

年月は行ふもしらてすきしかとけふ尋ねみるみわの山もと

みつなりなる杉の實のおちたるをとりひろひ  
て。しゆく願ありて又まいらんおり。かへしを  
かんと思ふに。

しろしみるしの杉のかたみとて神世忘れす行先をまて  
又たまの井といふ所すくる。いてやあらん水  
はといへは。くみてきたり。

くみみれは戀さめに社なかりけれ音にきゝし玉の井の水  
あくる日は京へかへりぬ。さとしやうそく

したゝめまうけたれは。やかて御所へまいり  
ぬ。御しやう<sup>位</sup>る廿一日。節會はてぬれは。けん<sup>劍</sup>

しいらせおはします。たゝ行幸のきしきのや  
うなり。ゑん<sup>延</sup>とう<sup>道</sup>しきて。御劔は左近中將むね

さた。璽<sup>璽</sup>をは右近中將のふもと。さきに公卿供  
奉。左右大將公卿のすけは。けんしのさうの御

うしろにくふす。左右近衛つかさ。中門のとな  
とゝまりてれちにたちたり。けんしははしの

まより入御なれは。左右大將さうこんの木

下にたつ。母屋のみすすへらかして。御丁のまへに御ひきなをしにてわたらせ給ふ。こうたう左より御けんをうけとる。つきに璽をわたす。右より少將内侍璽をうけとるありさまゆゆしくめてたし。とかくしき久しくて。あくるほとにそ内侍所はいらせ給ふ。明はてぬれは。御せんももんしやくはなし。内しゆときをそうす。

三日は。おのことも殿上につきて大はんをこなふ。年中行事のしやうしのもとに出御なりて。ないく御らんせらる。やかてこん夜けちんなり。中門に出御なる。

十一月九日。はりまの中將ともあきなくなりぬ。雲のうへに心をかけて。今一たひとくわんともたて。なにかしけれども。かきりある世のならひなりければかなはず。まうねんのみあはれにかはゆきことも。いまはのきは思ひさ

ためてといひしにと悲し。

九日は。春日まつりに内侍勾當たつ。

十五日。まつりことはしめ。

十七日。けさいの御てうつ。

十二月五日。りんしのまつりなり。つかひは花

山院宰相中將。せいりやう殿に出御なる。きく

ちんの御はう。つゝしの御したかさね。御簾に

殿下御まいりあり。御神馬ひきたてゝつかひ

まいりて。御へいとれは。御はいありていらせ

給ひて。御いしに御しりかけさせ給ふ。つかひ

舞人とも座につく。中門の下に公卿つきたり。

けんはい三こんはてぬ。かさしの公卿内大臣。

左大將。權大納言。花山院中納言。大炊の御門

の中納言。久我の中納言。皇后宮權大夫。さし

きにしさいありて。殿上はかりにて着座なし。

洞院の宰相中將。左大辨宰相。みの時にもよほ

されて。まひ人もとくまいりたれとも。さしき



とも久しくて日もくる。けんはいはてぬれは。内大臣殿つかひのかさし藤をとりてかうふりにさゝせ給ふ。つらにまかはぬかさしの色もおもしろく世のはしめにて。公卿の使よろつはへ／＼しきにも。雨雪のさはりたになくて長閑にめてたし。神もめつらしとやうけみ給ふらんとおほえて。

色ふき雲井の藤をかさしにて神もうけみるつかひなる覽かさはてぬれは。すのこにちやくさ。まひ人ともさうにたちて行ちかふ。あをすりのそてくちおかし。とのもんれうのたちあかし立の光りにみえたるいひつくすへうもなし。ふえのをと。わこんのねもおかしうきこゆ。北のちんわたさるゝに。なかはしのつまに行幸なる。はてぬれはやかて御はいあり。かくてふけぬるに。やかて還たちなれは。このたひは御ひきなをしにていてさせ給ふ。庭火のかけにまひ人

の櫻かさして。にんちやうがひやうしにあはせたるあしふみ。わこんのねすこく。やう／＼明行空の光りかきあひて。いひつくすへうもなくおもしろし。

八日九日は。ちもくなり。

十二月十二日。神こんしきのつかひたつ。しやうけい權大納言。辨には右大辨宰相。もんより薙道しきて。をりてやくにしたかふことゝも。おさなきあそひのやうに。おかしきことゝもなり。

十五日。内侍所御神樂。雪宮の中におひたゝしくふりたるに。わこんにれんせいの侍従よりなり。本ひやうし二條中將すけかた。すゑのひやうし綾小路少將少のふあり。ひちりき山ものとの中將かね行。笛はくの新少將やすなか。月はふけゆくまゝにさえたるに。日數へてふりつみたる雪に。かつふりそふけしき。池のなか嶋

松の木する木々のこするかゝやきたるも。庭火のかけにそくたいのくろきかうへにふりかかる雪は。うちらはらふもおりからことにすみ。神さひたるけしきかきりなし。雪おひたゝし所作くてそさの人たゆへくもなければ。はしをとりて中門の下にてあり。

廿五日は。北山實榮とのへ御かたゝかへの行幸はしめなり。又雪ふりて。月たにあらはとおほえし。けんしのやく花山院宰相中將。やくの内侍勾當内侍新内侍となり。すけに權大納言のすけあせち殿少將内侍はうき殿。まうけの御所へまいりてむかひて。こうたうといそきかみあけて。もやの御すのうちにて。御こしまちまいらせてさふらふ。入御なりぬれは。御装束御ひきなをしめしかへて。月もなきころなれは。殿上人ともしそくさして雪御らんせらる。いらせ給ふて御くわいあり。おとこには左中將

ためかぬはかりなり。けいこのすかたにてま傍いりたる。いとやさしくみゆ。權大納言のすけ殿。新さい相殿。女房三人。おとこ三人。かすにもれぬ身。我なからうれしうこそおほゆれ。還御はほのくゝとあくるほとになりぬれは。雪うちらはらふけいこのすかたとも。やさしくおもしろくみえたり。

廿六日。皇后宮養老門院の御かたへなる人なくて。御供もたゝひとりまいりたれは。還御まちなまいらせて。池のかたみいたしてつくゝとなかむるに。かりのなきてすくるか。きのふよりこそ春もたちしに。いつしかこしちにやかへらん。いまは秋こそたのみなるらめと思ふに。

春きぬと鷹はこしちにいそくなり心に秋をたのめてそ行弘安十一年二月五日。春日まつりにたつ。しやうけい一條大納言。辨榮にはかねなかなり。雨すこしふりてかすみたるに。こつ川のはたをゆ

けは橋あり。しはをくみてわたしたるはしと申。

十日。そのからかみのまつり。しやうけい大井の御門の大納言。辨にはため<sup>高</sup>とし。

十二日。大原のゝまつりなり。雨うちそゝきかすめるに。またみぬさとゝめつらしくみゆれは。かつら川なといふところもすきて。にし山とこそ申といふ。

心ほそくつねにしたひてなめせし是や日の入にし山本みやにまいりつきぬれは。辨しやうけいつきでことゝもをこなふ。木丁さして御まへにまいてみれば。四所の御戸ひらきて。にしきの御ちやうにたちをよこさまにすちかへたるやうにつけて。とひらのわきにはこたてたり。日くるれは。いとめつらかにたうとし。はてぬれはかへるに。雨もとき／＼なをそゝく物から。夕日のかけに影もすこしみえつるに。又あり

つるかつら川にもなりぬ。うふねも二三あり。橋の下行やうにて。さしとゝめたるに。つなてひくやうに。人ふたりはかりつなをひきてさきにあり。くるまのとをれは。つなを水にしつめて。

かつら川くたす鵜舟のつなて繩沈むる果よいかになりなんこよひ北山とのへ行幸に歸まいらんといそくに。亥のはしめにそまいりつきたる。やかてかみあけてまいる。あくる日御舟にめされんとて。薙道しかせて。りやうくわん<sup>兩</sup>す。皇后宮大夫殿。しきしとも。さらぬ殿上人六ゐると御供にてあり。御堂のつり殿より御舟にめす。こきわたせは。中嶋の松のしつえに鳥のすくひたる。うきすと申侍れは。これよなとて御らんす。かゝるすみかとして。いまよりうきたるはかなさもあはれなり。

はかなげの鳥のうき巢の哀さや池のこしまの松のしつえに

けふ十三日なれば。さかとの、御八講とて。御幸なれば。いそぎ還御なる。その、ちくる、ほとに野上へ行幸なる。人々さきに参りて。ありつるやうにゑん道しきて。殿上人六位しりなりつるをいそぎとりて。さきにをとらしとして。少藏人のゑもんのすけ。せき<sup>赤</sup>ゐ<sup>友</sup>のすかたこととしきに。ときはるあを色きてましりたり。野なかにはしりちりたる女郎花の中にくわんさうのさきたる秋の、をみるにて。こたまのめもやたつらんとおもしろくそみゆる。春宮の御時もなりたりしか思ひいてられて。松山の中なればたゞ昔の秋にかはらす。かけひのをと。みねの松の氣色かはるけしめなし。いやすたれかけわたしてすゝしけなるに。月はやう／＼さし出て。このもとにて御みきまいる。りやうくわんす殿上人ともは。心とけてあそひあひたり。御せんとわすれたる氣色わ

らはせおはします。

思ひ出の昔の秋もほとふれはこの夕くれにまさりしもせし心の中にをの／＼よみあへる歌とも。あくる日そけ<sup>具</sup>さん<sup>全</sup>に入ける。やかて北山とのへまいらせらる。

二月廿七日。くわんのちやうの行幸。かみあけの内侍勾當と少内侍なり。

三月八日は。ちもくなれば。あかつきちかく御よるなれとそうしよをもちて。あくるまでねす。ほの／＼とするに。明ほの、花みんといひて。大納言。權大納言。すけとの。新少將殿。四人つり殿にいて。池の花をみれば。さかりなるもあり。すこしちるもあり。ことしは風やふかぬ。花やさかりとみえてひさしくなりぬといへば。

九重は風もよきてやふきする盛久しくみゆる花哉  
八日は。御むま御らん。



九日。りんしのまつり也。つかひにまいる。花もさかりなるに。風すこし吹て。ちりまかふ花の下に。まひ人ともゑにかきたらんやうなり。たちまふ袖の氣色神かきもおもひやられて。

待えたる御世のはしめに咲匂ふ花のかさしないかゝみる覽

三月廿一日。禮服御らん。日の御座に出御ならせ給ふ。御ひきなをし。母屋の御すをたれたるはしのみすをあけてすのこに圓座をし。關白大臣のはあつゑんさ。その外の公卿のはうすゑんさなり。奉行五位の職事四世あきよ。六位基なにかた。公卿に關白殿。内大臣殿。こかの右大將通との。おほいの御門大納言。皇后宮權大夫殿なり。御らんはてゝいらせ給ふ。おにのまにて御らんあり。殿下おほゐの御かと大納言皇后宮權大夫殿めしいれらる。よく／＼御らんありて。このたひもちひられんするはめしとゝめられぬ。其外はらいぐさうへかへしおさめ

られぬ。うち／＼つきの日より。たまの御かうふりめして御らんあり。なかつね召て御らんしたゝめすへき御かうふりなと御よういあり。御ものそんしたる所。御めのとのさたにてなをさる。

三月十五日。御そくゐ行幸のきしき。關白殿左大將以下供奉の人々めつらしくおもしろし。かみあけの内侍。この御所より少將内侍。せうのないし也。御所御しやうそくめされぬ。殿いらせ給ふ。めし仰はてぬるよし。奉行しきし申せは。南殿へならせ給ふ。御こしにめされぬれは。くわんのちやうへいそきこうたうもまいる。かみあけのとくせんまうけたれは。くるまのしりにのせて。くわんのちやうの北むきより參りて。かみあけしたゝめて。あした所の南むきに勾當もさふらへは。やう／＼行幸ちかつかせおはしますとて。供奉の公卿したいに

れちにたちたり。御こしよらせ給ひぬ。關白殿御下かさねひきなをしまいらせらる。公卿のすけまいりて。けんしとりて内侍につたへて後。御こしにつきて。みつなのすけそうそきぬ。奏はてゝ主上いらせ給へは。殿御れんにまいらせ給ふ。ひさしのみすあらはより。しきしあきよたれては。御もやの御れんあけられて。主上大しやうしにわたらせ給ふ。けんしも大しやうしにをき奉りて。内侍あした所の北むきにいてゝさふらふ。そのうち大しやうしのひんかしにひらしきの御さに。うけん二帖のうへに御しとねよそひて。この上にて。わきの御せんなとまいらす。御はいせんは女房。やくさうのねうはうはこ上らう。あした所の北むきに北にさふらふ。奉行のしきしをめして。たかみくらの事はくしたるかとおほせくたさるれは。しきしかへり参りて。くしたるよしそう

す。ひらしきの御さにて。御そくたいときくつろけさせおはしまして。玉の御かうふりめさる。らいふくめされて。大じやうしに主上わたらせおはします。たまの御かうふりにあけのをゝつく。あけの御はうに。左右の御かたは月と日とをいたし。御なをしにはほくと七星をあらはしたてまつる。御むね御袖にはたつのほりたるをぬひたり。あられちの御うへのはかまのうへに。らいふくの御裳をめす。その上に御大そての御はうをめす。御くひかみ御まひもなり。そのうへにたかくひの御小袖の御はうをめす。この色々の御もんは御小袖の御はうにあらはしてうへにめしたり。あかちの錦の御したうつ。はなかたのからの御くつ。あかちのにしきにてつゝみたり。御こしには。御しゆとて。ひらをのしろきをひかせ給たり。左右の御うしろの御わきのとをりに。たんし

ゆとて二すち。御よをろのほとにさせられたり。御まへの左右の御わきに。きよくはいとて玉をつらぬきてつけられたり。御すそにひうちかたのかうかねをつけられたれは。ふけんのことくにりやらめきならせ給ふ。御ちかへには大しゆをむすひさせられたり。たちのひらをのことくむすひたれたり。たかみくらの事くしたるよししきし申せは。やかて行幸あり。御劔は勾當給る。璽はこれのやくなり。右の御わきにまいる。殿下のおほせに。そのしるしの御はこのうへにかけたるあみをゆひにかけつれは。とりはつしてあやまちはせぬとおほせあるに。御なさけの有かたく。心もつよつよしとおほえて。あやまちなし。たか御くらへことゆへなくまいりつきぬ。とはりあけの役ははくの三位のむすめなり。みやうふ藏人四人。やくの内侍六人。うらこきそはう。こき

ものゝく。行幸たかみくらへなれは。御さきの命婦四人御さきにたつ。そのうちかみあけの内侍二人二行にならひて参る。たか御くらの御はしの左右にないしたちとまれば。殿下御れんのやくにまいり給ひぬ。左の内侍まつのほりて。左の御わきより御けんをまいらせをく。御はしをしりそきて。右のしもに内侍のさにつきぬ。女王のしやうそく。二色くれなるのひとへ。そはうのうはき。あか色のからきぬ。かみあけの内侍は。勾當とこれ新内侍なり。御せん命婦。みあれの。いつぬき。宮人。いしかは。いきの命婦。はゝ木。さぬき。ひせん。たまかき。これみなうらこきそはう。やなきのから衣なり。こせうの命婦。

右衛門督殿。

やなきにくれなぬのひとへ。こうはいのうはき。

新左衛門督殿。

もえきにくれなぬのひとへ。山ふきのうはき。

新宰相殿。

むらさきのうすやうにしろきひとへ。やまふきのうはき。もえきのから衣。

宮内卿殿。

新宰相におなし。

治部卿殿。

むらさきのうすやうにもえきのうはき。えひそめのから衣。

少將内侍。少輔内侍。

まつかさねにくれなぬのひとへ。やなきのから衣おなし。

つねの衣のうへに。かいふにからきぬ。かうけつの衣。ひらひたいなり。

きやうれつのあいたの事。

みさきにいきの命婦四人。ゑんたうの左。右につく也。

しやうちやうの左につく。

つきにけんしの内侍二人。左こうたう。右はこれなり。

こせうの女房。御うしろにあゆみつゝきてまいる。ことしつまりて。みなみをはるかにみやれは。せちけのはたとて。風にひらめきてたちたり。おほきなるかうはんに。みやうかうやにほふらんとみえたり。こかねのたからすとて。

あしのみつある鳥みゆ。しんこんたけうのなかに。日の中にさんそくのからすあり。月の中にはろくそくのうさきありときゝしも。本ほんせちあることなりけりと。しんおこりておほえて。から人のすかたともなみたちてはいし奉るに。身のけもたち涙かましく。めてたうれし。右大臣殿からめかしき御すかたにて。まくのうらよりねりいて給へは。きよくはいのをとかや。みちにりやらめきてひさしく。御たけのたかさ御てんのたかさにもたちをとり給はす。たかみくらにむきてはいし給ふをみるにも。めてたく侍。

ためしなき心社すれ君か世のかゝる行幸にけふ仕へつるとおもひつゝけたれとも。うちまされぬ。やうやうたいれいのきとも。はてぬれは。殿たかみくらへのほり給ふ。あした所へかへりいらせおはします。御けんしるしの御はこなとも



とのことくつとむ。主上御装束めしあらためて。くわんきよのきになるほとに。この御やす幕まくへいらせ給ひぬ。花山院さい園寺殿候はせ給ふ。還御の御きしきくせらるゝほと。大しやうしのひんかしひらしきにてはくこまい。御はいせんは女房もとのことし。又大しやうしのにしにからゑの御ひやうふをたてられたり。そのにしにて。兩大納言殿御わりこひらき給ふにや。そのやくそうには。五位のしきしよりふちあきよなとみえ侍つ。御せんはてぬれはくわんきよなる。公卿のれち御こしよりてめされぬれは。すさともよせて。またかへりまいりぬ。出車には。一のくるまには。

左衛門督殿。新左衛門督殿。はゝき。さぬき。  
二の車に。

宮内。新さ。ひせん。たまかき。

三の車。

新兵衛。ちふ。みあれ。いつぬき。  
四のくるま。

少將。少。宮人。いつぬき。

十六日。夜ふけしつまりたるに。せいりやう殿へ月にさそはれて。はなみにいてければ。大納言殿いけの花のおも影月にさたかに覺えて戀し。こゝのへになる花の色あかてむかしや戀しかるらんとおほゆれと。それにつけても。ふりにし昔は思ひ出らるゝを。わすれしといひしその世のともは。なきもあるにとそひきかへたる雲のうへ草のかけにや思ひやるらん。かゝるなさけのつゐてにはわすれぬ。おほくしのはれんとやいひをきつらんなどいふに。舟にのらんとて。池のみきはなる花の下に月のかほのみまほられて。しはしあるに。大納言殿。哀にこの世ならても思ひいつらんやとてあれは。

月にとひ花にかたりてしのふるをまた哀なる人もありけり  
つとめて。大納言殿。

年をへてけふかならず契こし人しもなとか留らさるらん  
御かへし。

春をへて變らぬ花の色なればさこそみし世の友とこふらめ  
いつとても哀は絶て有なから忘るなといひしけふそ悲しき  
三月廿六日。雲井の花みなちりはてたるに。春  
日殿へ御ふみのまいりたる御返ことに。花を  
まいらせらるゝに。少將とのちいさき枝をお  
りくしてことつけ侍るに。世にありかたきこ  
ろなれば。はつはなよりもめつらしと思ふに。  
おりくしぬれはとてやらんめされぬ。やつれ  
ぬ花のちきりはいみしけれと。ころはしもと  
おほえて。花のかへり事。

思ひきやまれなるころの櫻花君かなさけをそへてみるほと  
いたつちに散なん花をあはれくいま一枝とみるよしも哉  
又返こと。

なへて咲ころにしあらは櫻花かゝること葉の色もそへしな  
雨風に花はあとなく散果ぬむなしき枝をかたみとはみよ  
四月十九日。まつりなり。つかひ一條中將さね  
つくのあそん。皇后宮のつかひはしるへし。

五月五日。軒のあやめもことしはめつらしき  
さまにふきたり。しやうふの御こしかきたて  
て。ことにおもしろし。もとへの女官とも。く  
すたまのしやうふもちてゆきかふ。御くす玉  
のはなともまいらす。

五月八日。むらさきのゝ若宮より。まつのみと  
りにしつけてまいらせたり。御はいまたしき  
ほとなるに。御所へまいりたるに。なにとなく  
きくもやさしく。これをにいて歌をよみ侍  
らはやとさたあれは。

むらさきにみとりかへたる姫小松あたし色とや君にみす覽  
九日は。小五月の御幸なり。

五月十五日。御はいの御ともに。せいりやう殿

のすのこにさふらへは。花はあとなくて。木くらきあをはのこするもおもしろし。

六月二日。女御まいり。

五日。ろけんなり。御つかひに一條中將さねつく。紅のうすやうの御ふみあさかれのよりまいらせて。女御の御かたのたいはん所よりろく給へる。

六月六日。御とのあふらまいらせてのち。つねの御所の御えんを新宰相殿ととざるに。むしのなきそむるをきゝて。新宰相殿。

なきそむるむしの聲をしきゝつれば

とて。しもものくもなければ。

すてに秋なる心地こそすれ

とつけたるを。新宰相殿のこゝちさへするに。

いひたきになんせさせ給ふいかゝ。

おなしき七日。人の許より。女御御まいりのめてたく。仁治<sup>四條</sup>のれいのまゝに。雨さへたかはぬ

もめてたくて。

古へをいまに傳ふる雲の上は雨さへふるためしをそしる返ことに。

そのまゝを傳ふる雲の上なれば雨さへそけに時をたかへぬ六月十六日。月さし出て。空はむら雲たちて。はれくもりするしも心ありかほなるに。花山院中納言御ともにて。せいりやう殿にいてさせ給ひて。月御らんせらる。皇后宮權大夫まいり給ひて。舟にのり侍らんと申給ふほとにしも。大はん所の物ともめしいてゝ。舟にのせらる。とう院の宰相中將もまいりて。やかて御舟にまいりて。藏人左衛門のりなをひちりき。權大夫しやうのふえ。花山院よこふえ。いとおもしろし。

おなしき廿七日。新王のせんしなり。その日常盤井とのゝいつみとのへ御わたましに。女房たち御まいりともあり。いと御人すくなにて

長閑やかなるに。御はいの御てうつもちて。ま  
いりてみいたしたるに。女御のたてしとみに  
あをやかに藤のしけりたるを。ことしは花さ  
かてすぎぬると申せは。このほとさきたるを  
いまたみすや。うたてとおほせことあれは。さ  
も侍らすと申せは。さてそれはこなたよりみ  
えさりけり。いつふさはかりさきたりき。いつ  
ものころにはあらて。ことしもおりしりてさ  
きける花の心もありかたし。

おりしりてかく咲あへる藤の花猶なへてには思ふへきかは  
れいのまゝならは。いまはさかりもすきまし。  
七月七日。院の御所より。露の御さうしとて。  
めん／＼に給はりて。歌よみ侍る。權大納言の  
すけ殿にたつねまいらすれば。御しもにとあ  
り。御つほねをひきあげたれば。この御さうし  
かけは。北山とのゝ。けふ戀しくおもひいたさ  
れてとて。

たきものゝふけし煙の末までもよとせの秋はあはれ也しな  
とやかてかへらせ給へは。思ひいての戀しき  
もかくなれはいとゝ色そひて。

けにやけにいつも星合の空なれとよとせの秋け哀なりしを  
待えたるけふもけふ乞巧奠社嬉しけれ七夕つめやけふもけふなる  
くれぬれは。きかうてんの火の光り水にうつ  
ろひて。けしきことにおもしろし。ことちたて  
よ。洞院の宰相中將なり。くわいのしるしとめ  
つらしくや。七夕つめもおもひやられて。

手向なく玉のを琴も此秋は七夕つめのいかにきくらん

此秋は七夕つめに手向なく玉のを琴にれもやそふらん

たむけするそらたきものにいかはかり天の羽衣袖蕭るらん

權大納言まいらせ給ふて。御かたりあり。前大  
納言殿ひは。ごとは女御の御かたの權大なこ  
ん殿。とう院の宰相中將。ふえ花山院中納言  
殿。はくの少將やすなか。ひやうしあやの小路  
の少將。御かくはてぬ。心の中しつまりはて



て。月みんなといひて。女御の御かたにしひて御ひはひかせ給ふ。

七月十九日。くはんのちやうの行幸なり。

廿一日。御けいの行幸。出御の内侍少將少輔内侍なり。女こそ所のないしむまにはのるへしとて。勾當とこれと命婦四人。伯は木。言かはち。備せん。ひせん。藏人にみあれのすむつる陰陽れうにていてたつ。うらこきそはうの三衣。あをきひとへ。類かうけちの編も。こきはかま。むらさきのさしぬきのもゝたちよりつまをいたして。くはんのくつとてはきて。かみあけてむまにのりてくたる。すかりやにまんをひきて。女御代の御くるまたてられたり。いたしくるま色々にみえて。ひんてうさうし車のまへにたつ。そらたきものゝ勾ひ心にくゝくゆりみちてなん。

閑院とのゝあとに御さしき七けん。なかのま

は院の御かた。左は皇后宮の御かたなり。もみちかさねのをしいたしみゆ。御所のにしにひらいたしきに。むらさきへりしきて。さうし二人ていしたり。御はしのまにさいをんしの大納言とのつかせ給ふ。右のかたのかりやに殿上人ともちやくさしたり。そのしもに北おもて御すい身ゐたり。きくもみちうへて。御さしきのきしきいひつくすへくもなし。すきぬれは。みちよりおりて。くるまにてしとみやにまいる。石たて松植たり。主上ようよにめしてはらへとのへなる。くはん御なりて後十三日。そのたひにそのおりつら／＼久しからんおりなとあり。御わきまへはそのおりにてあり。

十一月は。大しやうゑとて。しも月八日女工所はしめとて。ゆうきしゆきにてつくるか。いまたいてこねは。ゆうきには神きくはんをもちゐらるとかや。しゆきには陰陽れうなり。

八日。月さしいつるほとに。こうたうと一くる  
まにてゆく。夕つく夜のさひしき影。うちのゝ  
はる／＼と。霜かれの野へにさはる物なくみ  
えたるもなか／＼おかしきに。

霜枯の野へにしあればはる／＼と處えかほに月のみそすむ  
さて月入てのちかへる。女工所にかねて十二  
日とてありしかと。をそくつくりにいたすに。十  
七日より入に。雪うち〔る〕りて冬こもりたる空  
のけしきのすこきに。陰陽れうのなかなるに。  
やしろのみそひとつにみいたしたる。こうた  
うは神きくはんのつかさの東に。女工所のや  
たてたるに侍る。これには陰陽れうのうちに  
いぬゐのすみなり。とくせんをとらぬおとゝ  
い。女官にはつかさとて。代々のくはんと名の  
りて。れいともひき。きやうしくはんにたゝみ  
をめいたしてしく。さとよりひやう風さほつ  
しやうのてうとともめしよせてしつらひつ

る。さるほとに日くれぬ。さとより人まい、て  
つしたてさほつらせなとす。思ひもよらぬほ  
とに御幸ありとき。こうたうの所よりこれ  
へ入らせおはします。はれかましくなる女房  
たち。いくらも／＼をし入て。いかに／＼なと  
おほせらるゝ。さほなるはかまひきおとして  
きつ。やかていらせおはしまして。衣のかけや  
う思ひ所あり。幸にこそかけたれとおほせこ  
とありて。しつらひやさしなときよかんにあ  
つかる。こよひおとなしき人まいらすは。いか  
にいかにはちかましからましとおほゆ。木丁  
なともたてめくらしつ。よく／＼御らんあり  
て還御なりぬ。めんほくもはちかましきも。  
をとるかたなくこそおほえ侍れ。さても夜も  
あけぬれは。くはんよりきやうしくはんとて。  
いりさふらはんことうけ給はらんと申。大し  
やうゑのいなのみのおきな。いんこや女とか

や。色々のものゝしやうそくの衣。色々のそめ草花くれなゐなとまいらせたり。かたのことくなれば。女官このちやうにては。みち行かたきしたいとも。奉行の辨<sup>仲</sup>な<sup>衆</sup>かかぬにふれ申せは。國々へ下地し侍れともいまたさせず。せめふせ侍らんかと申。きやうしくはんと女官といさかふ。おそろしなからおかし。

十八日には。行幸なる。

十九日。權大納言御つほねへくるゝほとに。

きのふよりちかきたのみは慰むに覺束なくてけふも暮ぬると申せは。御返事。

いましかくかき通はせは情こそあひにあひぬる近き驗<sup>よイ</sup>にいまは心つよくおほゆるにつけて。

つれ／＼はみる心ちせよこゝにいま大内山の暮のけしきを廿一日は。まいりの夜。ちやうたいの出御に。御つまいたしてなる。女房たち御しりにつきてまいる。女工所はてぬほとは。夜をこさぬこ

とにて。あからさまにまいりて。かねうたぬさきに女工所へかへる。つきの日新宰相殿のものとより。ことのまさけなるにかく。

人しれすやさしくそみし月影もおほ富人の袖のけしきもよそにみん物とはかれてしらざりき豐のあかりの有明の月夜もすから大内山の月影にたちまふ袖をおもひこそやれせめてたゞもしや心のなくさむとはこやの山の月を社みれをのつから馴し名残を忘れすは見せはやともや思ひ出らんかへし。

ありしにもあらずや人の恨むらん思ひ乍ちに日數へぬればよそにみてさこそきのふは思ひけめ大宮人の袖のけしきをまさけつゝ忘るらんとや思ふらん心の中にとはぬ日はなし哀にも心よはくそながめけるとよのあかりのありあけの月さこそけに豐の明のもる人のたちまふ袖もおもひやりけめさるほとに。きやうしくわん色々のそめ草まいらせたれば。女官つかさにうけとらす。しるしふみにまかせて。御ちやうのかたひら。いなこのみのおきな。いんこや女の装束の衣。うけと

らするに。そめくさとも。りやうのこくしのもとへつみつかはす。また奉行の辨なかかぬ。とさまのもよほしもしきりかけて御けうそつかはす。行事くはんちきにうけとらせ給へとていてきたれは。さふらひともをいたしてあひしらはするに。心えぬことゝもあれは。女工所のねうはうをはしにいたして。みすのきはへ。かの行事くはんをめしよせて。きぬのすんほうなとこまかにあひしらはせたれは。心えてよろこふといへとも。そめくさの色々みえすして。御所の御りきしやを申て。ところ／＼へつけて。かたのことくせめいたしつ。ころもをとにかさねて。花の色々くれなゐの色々を。ひとへによせててうせさせて。のちにそのいろいろしな／＼にわかちぬはせて。ほとなくさたしいてたれは。行事の辨よりはしめて悦ふ。いまた夜の中に。行事くはんならひに奉行の

辨。めん／＼に装束うけとらす。そのきもつきぬし／＼女工所にいてきて。しやうそくもあり。いなのおきなとて。ひん白く髭は帯のもとまてなかくて。年ももゝとせにもやとみゆるにそくたいせさす。これをみて心の中に。いなのみ翁さひたるひん白し君か千年もかれてしられてかやうのともから。しやうそきつれたちていてぬれは。たいりより出車給はりまいりぬ。つほねともせはくて。とのゝ御やすまくのにしのらうに。あつまりそさふらふ。  
廿二日。ひをの山<sup>山</sup>ひく。ひしめく。しやうそくともしてわたしつれは。心やすくてくるれは。くわいりう殿の行事に。こうたうはまいらせ給はす。少將内侍のとそまいり侍る。くろ木のやにまいる。行事なりて。山陰の氏の藏人またせて。御ゆまいりて。はくの御しやうそくにて薙道しき。神殿になる。御きしき中もをろか



なり。殿いけしよしのをみともきて。神殿に内

侍もまいるへかりしかとも。かたてかはりて。

女三所のならてはまいらぬことなれは。ひと

りしてふたつのことをつとむへきにもあらず

とて。これにとまりて還御なりて。又御ゆを

めして又なる。殿はたひ／＼御まいりありて。

されともまた御歸ありて。還御のほとに御む

かへに御まいりあり。ほの／＼と明行にみれ

は。こしばあちこちおほくゆひまはして。くろ

木のとりゐあまたたてたるめつらかにおもし

ろきに。かゝる公事の御けいきをみのこした

らましかはと。さはりなくけふまでのことみ

つるもうれしくてありかたく。ことはてゝあ

ふへきにもあらず。

君にかく契り有けり畏くてけきの御ゆきにかくてあふ身よ

還御なれは。夜は明はてゝ日さしいつるほと

に。風もしつかに。さし出る日影ものとやかな

れは。

御幸なるけさとや峰に出る日も常よりことに影ものとけき

ゆふきしゆきのせちる。とよのあかりのせち

る。ことになこりおほくおほえて。ゐたいのら

んふ。ほの／＼とするほとに。こゑはかりき

く。ゆふきしゆきとよみしに。かはる／＼かみ

あく。とよのあかりのせちるはてかたに。まひ

ひめのほか大うた所うたふをそうす。まひ人

樂をそうす。まひことのもとはてゝ。よことの

そうとて。さいしゆたてあかしの光りにみれ

は。をみのしやうそくことにうるはしく。こは

こはしけにしやうそきて。はいしたてまつる

をみるにも。

すへらきのやな萬代と祈るらし天津ひるめの神そしるらん

と思ひつゝけらる。ことはてゝ。たかみくらよ

りあした所へなりぬ。せいしよ堂の御かくら

は御代のはしめの御いのりなれは。ことに君

もしんも。御神事にてもてはやし給ふことなれは。そさの人かねてより。その人々とさため

られてみなまいりぬ。御かくらの御しやうそ

くはてゝ。出御なりてはしまりぬ。ものゝねす

みのほりて。けんしやうの御はちをと。ことに

ひゝきのほりて。わこんのしらへ。もとすゑの

ひやうしにあはせてかきなす。おもしろくや

さしきに。ふるめかしなと申もをろか也。八そ

ちにあまりたるさねたかの二位實の聲の色。む

かしゆかしくおほゆ。とき／＼きえ返て。とし

のしるしとかすかなるおりにも。けんしやう

の御はちをとにまきれて。おもしろくやさし

くきこゆ。やう／＼御かくらもはつれは。空も

あけぬ。神きくわんもことにちかけれは。なう

しうし給ふらんとおほえて。心のうちに。

君か世を千世の初といのる哉神のつかさのちかきたよりに  
御神樂はてぬれは。人々ろくたまはりていて

ぬ。をみのすかたあくる日影にかゝやきてやさしくみゆ。

山あぬの色やこほりにみたるらん日影うつるふなみの衣手  
そのゝち御せんめし。あした所の南おもて  
のひろひさしに殿上人まいりて。まひのゝし  
るものゝまねなとするに。なにをもよくさう  
するいままいりめしいたしたれは。馬をよく  
さうして。この御馬はかさおとろきやし侍ら  
んと申せは。いしくさうしたりとて。しう人わ  
か身さうせよといふに。かみはなにこともめ  
てたくわたらせ給て。つねに御からかさおと  
ろきや候らんとさうしたりしもおかしう。其  
のぶもとの中將久しくたいりさまへもまいら  
す。いかにとなりたるやらん。いとおし。

正月元日の御きしき。つねのことし。

二月五日。大原野へたつ。かつら川をわたるに  
みれはみの時になりぬ。いまいくたひかかく

これをとをるらんと思ひて。

久しからん君か世なれば我もかくて今幾度かこのせ渡らんにし山といふ所になれは。あはれにいとおしくおほしいつらんといいひしあまのすみし所。いまはなくなりぬ。むかひの明神ちかきほにて。つねにまいるといひしか。思ひいつるよりあはれになつかしくて。

なつかしむ心をしらはゆくさきを向の神のいかゝみるらなきて大原野にまいりつきぬ。辨としみつ。しやうけいをそくて。かへさくれはてゝ。みちたとたとしきに。夕つく夜かすかなるに。くるゝまにすこし光もさしゆけは。

夕つくようすき光りを待出てみちのしるへもなかくてそ行二月十日。春日のりんしのまつりにたつ。此きはしめたることなれは。おもしろく嬉しくて。とりのはしめになしはらにつきぬ。ねにもやなりぬらんの程にそ宮にまいる。ふけたる月

の木のまよりみえて。庭火のかけ神さひたるふえのね。ひやうしのをともすこく。まひ人のたちまふけしき。光を神もいかにとおもしろくめてたし。

君か世にかゝる光の色そふる神の心もおもひしられてことはてぬれは。なしはらへかへりぬ。つゐてにちと入たうなとして。京へまいりつきぬ。

三月九日夜。せいりやう殿にむしやまゐりて。つねの御所へまいらんみちを。藏人やすよにとひける程に。にけてかゝることゝ申せは。御所は中宮の御方にそわたらせおはしますほとに。つねの御所へ。中宮くしまいらせてにけさせおはしましぬ。女つとひしめきのゝしりて。とく女こしゆ火あをけちて。けんあしやうとりて。これと申せは。手さくりにうけとりて御所にをきつ。夜のおとゝへけんしとりにまいれは。人のとりいたしまいらせてみちにあひたり。せ

けんそのうちひしめき。大はんのふしひしめく。おそろしきことゝもいてきぬ。せいりやうてんけかれて。御所もあくれば春日とのへなる。とりあへぬことなれば。御ひきなをしにて。ようよにてなる。供奉の人々ちよくいなるすかたにて。めつらしくことゝしき。常よりもおもしろくて。

十九日。とみの小路殿へ御くそくとりくして。花山ふきおりくしてまいりたるに。權大納言のすけ殿。

ながめこしたゝ人つてのひと枝に花も哀やそへてみゆらん返しに。

おりてみるこの一枝の哀より残るみきはの花を戀しき君しかく残る木末かとへとこそつれより花の色もふかきは藤の花にさして。

人しれす心になれてみし藤のたれまたねとも時をしりけりみな人のおりて。木すゑの残りなくとききは。

君まちてちらしと花や思ふらん誰なさけなく折やつすらん大納言殿さくら木につけて。

折てみる人の心のなさけよりみきはの花の色そそひぬる又中つかさ。

思ひきやまちし軒はの櫻花たゝ一枝をつてにみんとはいかにまたみるに哀の色をひて咲残りける花のこゝろよ一枝もおりてみせすは櫻花たゝいたつらにちりをすきまし此花を一ふさ。あつまへ行たる人のもとへ。ふみの中に入ておなしくやるとて。

東路のみちのおくにも花しあらは雲井の春や思ひいつらん返し。

いまさらに哀をまさるこの花のおなし梢をながめてしかは三月廿日。夜雨ふる。中宮大夫殿かくらをうそふき給ひて。せうゝたるくらき雨のまとうつこゑと。くちすさみ給ふ。ゑ物かたりにかきたらむことを。きくやうにておもしろし。雨風もともにはけしけれは。

物ことに哀れすゝむるけしきにて秋とおはゆる雨のをと哉



あくる日。せいたりやう殿のかたに。大納言殿へ御ともに三人いてゝみれば。雨風に花はあとかたなくちりて。すのこにしろくちりたり。

よゝゝもの雨と風とにしほられて軒端の櫻ちりはてにけり  
大納言殿。

おりしもあれ花散比の雨風ようたても春のすゑにふりぬる四月十四日。松尾へたつ。おほぬさにあふひをくしてくるまに在る。かもならて又あふひはありけりと。けふはしめてめつらしうおほえて。

待わひしその神山のあふひ草又ゆるすよの神もありけり  
大納言殿の御つほねへ。まつかひありて。たゝいま郭公のなき侍りつるは。もしおなし聲をやきくとて。

今なかん聲をしきかは郭公をしへやりつるはつれとはしれ  
御返に。

君か宿にまつかひありて時鳥うちやましくもなきてける哉  
いかにゝあはれときかんに子規いましもおなし聲と思はゝ

雨はるゝ空にのとけく詠めしてまつらん程を思ひやらるゝやまひわつらはしくてさとに侍るに。新宰相殿。

もろ共に詠めはとのみおもほえてけさの雪にも君を戀しき返し。

さこそと思ひやらるゝ降雪に我も君をしおもひいてゝは哀もおもひいてつゝながめつる時しも人にとはれぬるかな  
正應五の二月までつほねにさふらへは。いよいよやまひおもくて。さとにいてたるに。三月つこもりにちりたるはなにかきつけて。新宰相殿。

ちる花のなこりのみ社歎かるれまたこん春もしらぬ我身に返し。

ことしはた花ふく風も厭はれず唯我身をもさそへと思ふに

右中務内侍日記以扶桑拾葉集校合

群書類從卷第三百二十五

日記部六

堯孝法印日記

文安三<sup>兩</sup>年正月一日。天氣悠然屬<sup>二</sup>陽春<sup>一</sup>。とし  
としの例にまかせて。五條の社頭にまうて  
て。講はへりし三首。

社頭春

まもれ神道ある御代の身の春にあふをかしこみ猶そつかへむ

社頭松

いく春もまつのことのはまつの春手向かされて神を仰かん

社頭祝

ことし猶道をもたてゝ宮柱わかひのまゝにみかきそふへし

方陽景鮮七社法樂歌。

八幡

八幡山はるをかさねる春にあひてかすそふ神の恵をそしる

玉津嶋

道しあるよに白ゆふのかけまくもかしこき神を猶そ仰かむ

北野

心さへひらくる梅の色香をそいとゝきたのゝ神にたむけん

住吉

すみの江の松の恵のかしこきは道につかへて猶そあふかむ

祇園

猶守れ神のそふをそのゝまゝに残すは雲の道もたゝしく

稻荷

稻荷山たちそふ杉のふかみとり霞になひく春風そふく

日吉

神の名の日吉とけふをかそへても春の手向や千世もかされん

及<sup>二</sup>深更<sup>一</sup>講頌。讀師予。講師春喜譽君。法

樂以後。古今集披覽。序春部上。於<sup>二</sup>神前<sup>一</sup>讀

之。勤行及<sup>二</sup>數刻<sup>一</sup>。終夜不<sup>二</sup>一睡<sup>一</sup>。

美乃國眞桑庄。爲<sup>二</sup>本領<sup>一</sup>舊冬令<sup>二</sup>還補<sup>一</sup>。仍一

昨日御下知。御施行等拜領之時。細川右馬助

入道家へ申侍し。

仰く哉みの、を山のまつかひも有ける御代の道のめくみを返し。其日世務繁昌念劇無極侍るに。即返しを殊更書狀にそへて。申たまひはへる。

立かへるみの、を山の松のたれ猶さかふへき千代の行する只今の贈答。上世をはちさるよしなと申侍き。今日また管領職の佳躅にて。室町殿御女中方々の御あひしらひ。さいはひなともかきりなく侍る中に使あり。一昨日の返歌下句。さかふる道のするそはるけきと侍らんこといか。もし此方まさり侍らはこれに治定したく存よし示送らる。道と云文字こゝに金言のせ申て。此下句に定む。今日殊吉日にて侍れば。會始の題を出すへきよし同被<sub>三</sub>相示。仍庭松契久と云題出<sub>レ</sub>之。三善常房。飯屋彦六左衛門。來て祝詞をのふ。典廐音信之義なと。此道繁昌時いたり侍るよし申て。様々祝かしこまり申さ。

三日。寒嵐吹<sub>ニ</sub>雲霞。晩頭西天にむかひて纖月を拜に。霞いとふかくてさたかならず。夕くれの月はそれともみえわけて霞に匂ふ遠方のそら

今夜修正之儀能願。

四日。漢雲還晴。民部少輔。顯經。下總入道。素欣。

三善元秀。宮道親忠以下ひねもす人々來。

五日。天氣快晴。叙位執筆師郷。

神も猶光たちそふ春きぬと空にしめゆふあさかすみかな

今日も日くらし人々來て述<sub>レ</sub>祝。眞桑庄申沙

汰之。奉行三善爲教もとより。

ふみ分し未あらはれていにしへに又立かへるみの、なか山と申侍し返事に。

いにしへに返るもうれしなに高きみの、中山道もたとて六日。寒風吹<sub>レ</sub>雪。又まうて。

世を祈り道を學に春をへてはこふあゆみは神もうくらん入<sub>レ</sub>夜深雪。

七日。雪のうちに參詣して。

ふる雪は袖にさゆれと神の爲春の野に出て若な猶なり

八日。出仕以前夜ふかくまうて。

長閑にと君かみかけを祈るにも神に夜深くつかへぬる哉

方々參賀每春のことし。晩頭三善常房來りて。一續張行せしに。

歌闕

九日。白雲散亂。つとめて又まうて侍り。

この神に霜をいたゞき雲を分つかへまつりて年ふりにけり  
沙彌素欣もとにすくにまかりて。三十六首  
うた讀はへりしに。

春天象

のとかなる岩戸のせきの明方に霞吹こす春のはつ風

春人事

夢ならて結ふへしやは春のよのねよけにみせる草は有とも

秋人事

月をめて露をかなしふよなくもつもれば老の秋と成ぬる

冬雜物

こきかへりよ、のみきはの跡とめよわかの浦半の雪の友舟

戀地儀

たのみこしいなはの山のかひ有て今かへりくる契をそしる

今度還補眞桑庄。稻葉山程近し。仍爲逸與

如レ此詠之。但彼行平中納言の古歌は。いな

はの國のいなは山也。同名たる計におもひ

よせ侍る。不可有ニ混亂事也。

人數。正徹禪師。下總入道素欣。沙彌常勳。正

晃。知蘊。藤原氏世。此外一族等少々。鶴丸。

十日。又まうて侍しに。昨日夜に入て會はてゝ

かへりしに。夕月夜其興侍き。今朝うす雪ふ

りて春の空いとえんにおほえければ。六條  
殿。左女牛。五條天神。因幡堂。三條八幡宮な  
と巡禮。

さえかへる夕の月の面影もわすれぬけきの春の雪かな  
十一日。七日參今日にみちぬると申上。年始の  
かゝみなと奉りて。

いく春も猶あきらかにてらさなん千代の鏡を神も守りて  
十二日。讀經稱名如レ常。

十三日。此亭月次三首會始に。

霞知春

のとかなる春の心のしる人と空になれきて立かすみ哉

松殘雪

猶殘る雪さへあかすうす綠なひきそめたる春の松かえ

寄神祝

守るてふ道につかへて神も猶光立そふよを祈らむ

當座五十首に。

朝霞

あまの戸を明る光は霞にてはる日のとけき御代にも有哉

稀戀

誰にかは思ふ契りをわくらばにとふこそつらき心なりけれ

浦鶴

和歌の浦にあまたむれぬる友鶴の數々契る千よの行末



人數。出題予。讀師同。講師實能。中務大輔。春喜譽丸。民部少輔顯經。法橋長全。法橋經長。圓雅。散位爲數。沙彌常勳。沙彌元康。藤原重隆。源貞信。藤原正信。沙彌智蘊。藤原經俊。

廿二人。

宮道親忠。宗順。念阿。以上

十四日。讀經稱名如常。自寶池院法印御坊。法樂二十首題御所望。則注進了。長全法橋二十首題所望。同染筆了。自方々和歌添削事中。

十五日。勤行如每日。無他事。心靜吟和歌。唱稱名。

十六日。朝天參三室町殿。御いのりの義被申。

大方殿同卷數進入。晚頭人々來て。五十首歌よみ侍し時。

鶯出谷

たれもみな出つかふよの春とてや谷にのこらぬ鶯のこゑ

遙尋花

みよしのもたつたの奥も猶あさし心のはなの道そはるけき

名所鑑

むしろ田のつるのよはひを數嶋の道に友なふ人そ契らむ  
題予。讀師同。講師春喜譽公。

人數。愚詠。春喜譽公。素球。太平入道。知安。安田入道。

元康。內藤入道。圓雅。紀元盛。安田勳入道。源久國。常繼。

矢野。藤原元康。內藤。紀元家。安田。常安。與州入道。

堅有。在岡入道。三善元秀。高安。藤原元賀。源元

仲。橘元家。矢野。興阿。以上十八人。

十七日。勤行如常。每春之例にまかせて。七所にて御百度つとめ申せし。

十八日。三善爲數もとにて。月次會始に。

都早春

雲きえぬみ山もとなくかすむより都の野へに春そしらるゝ

梅薰風

匂ひくる風さへうれし梅花はるにあふみのそてにつまむ

寄世祝

いにしへのたしき道を其儘に今も行なふ御代のかしこさ

當座十五首に。

鶯告春

のとかなるよのしるへかも鶯のさへつりそむる春のはつ聲

門早歲

誰かけさ早わらひあさる春きても寒き岡への霜のふりには

契戀

かはるなよたのめしまゝに聞えくる入逢のかねは偽もなし

欲顯戀

いかにせんうき身とかむる犬かみの床の山風たのみ難さを

海村烟

もしほやく浦はも民いかまとゝや賑はふ烟たゝぬ日もなし

題予。讀師同。講師貞基。

人數。愚詠。永祥。飯尾肥前入道。時繁。左京大夫。圓雅。貞

基。布施民部。熙。齊藤上野。源持子。富永修理亮。爲數。常

勳。貞秀。以下數輩。

十九日。中龍上人來て。觀經講讀。信心銘レ肝。

終日勤行無ニ他事。男山へ進ニ代官。

廿日。畠山修理大夫入道。賢良。家にて。月次會

始に。

初春松

今日しこそ子日にかさせ春にひく心をたれの松のことは

對花

なをさりにいひいたすへき色そなき見る花の陰闇とりの聲

雲霧

夕つくよさたかにもなき松のはに猶霧まよふ秋風そふく

樟衣

秋さむき淺茅かすゑの麻衣夕日かくれの霜にうつなり

名所關

ふはの山關の坂屋の板ひさし久しき道もあらはなるよに

旅

故郷にかよふばかりの道も哉すゑもつゝかり夢のうきはし

出題飛鳥井中納言入道。讀師同。講師宗砌。

人數。飛鳥井。亭主一宮左京大夫。予。正徹。

春日三位入道。畠山次郎。圓雅。賢盛。常勳。

心惠。正晃。思小忍誓。常佐。智蘊。宗砌。以下數

輩。

愚詠中霧歌及ニ披講ニ之所に。題一首不足。俄

可レ詠之旨。題者密々被レ申之間。馳レ筆了。講

師宗砌。初春之松ヲヨメル和歌と讀上。中

斷腸。賢盛神樂歌に。梅かえうたふと詠也。

催馬樂也。

廿一日。兵庫助貞親もとにて。月次會始に。

初春見鶴

春くれば花さく色をまな鶴の千代のすかくる峯の松かえ

當座三十首に。

霞春衣

此會初度出現

いく春そ空に霞の衣手もつられ初める千代の行末

祈久戀

つれなくともとのみしめは朽に梟更に靡けとかげや初まし

名所松

今日よりそみきと語らふ武隈の松のもとたち床しかりしを

兼日題他人。當座題予。此會自今日一出頭之

間如レ此。臨期之義也。

廿三日。一色左京大夫教親家にて。月次會始

に。

竹週年友

言のはの花にもなひく千代のかけを窓に友なふ春のくれ竹

當座五十首に。

野雲雀

夕日かけ遠方のへは長閑にてあかるひはりの聲のひまなき

寄木戀

思ひのみこりつむ事をやくにして苦しく辛き蟹のもしほ火

名所鶴

かへりきて結ふもうれしたつのすむいつめき川の古き流を

思往事

しきしまの道にいらすはさのみかく思もいてし代々の古事

出題予。讀師同。講師智蘊。

人數。修理大夫入道。賢良。亭主。正徹。三位

入道。常闇。沙彌周道。三上。圓雅。正晃。常勳

近藤

入道。範盛。三上右。貞爲。賢盛。智蘊。時阿。壽

阿。常佐。

廿四日。細川右馬助入道道賢家にて。月次會始

に。

庭松契久

宿にしろ松のよはひの思ひ出を八千よの色に契るはるかな

當座五十首。

題闕

をしなへて人の心のなひくよを空にもみする朝霞かな

聞戀

いもせ山中なる川をいかにせん吹こす風はきゝわたるらん

神祇

かしこしな神の心もすなほなる道にまかせて現はるゝとは

題者予。讀師同。講師三善元秀。

人數。管領。亭主。正徹。治部少輔。氏久。下野

入道。常忻。中務大輔。持經。僧都長算。遠江

賴益。天竺持宇。賢秀。常勳。近藤伊。素球。太平

智安。安田。元康。内藤。橘元吉。釋庭。藥師寺

元明。元盛。安田勘解山以下廿餘人。

廿五日。三寶院門跡にて。社頭祝<sub>レ</sub>君と云事を。

をの／＼よみはへりしとき。

この門は神のみむるもひとつにて老せぬ君そ千代を迎へん

當座連歌百韵あり。及<sub>二</sub>曉天<sub>一</sub>退出。

廿七日。沙彌元康來。自<sub>二</sub>典厩<sub>一</sub>勅撰清書事談

合。爲<sub>二</sub>往來<sub>一</sub>云々。

廿九日。任大臣

二月一日。勤行如<sub>二</sub>每朝<sub>一</sub>。太政大臣家より。正月

分百首歌の内。題五首給り侍りし時。

春山

春の日の名におふ神も峯高き君かみかけに光そふらし

秋河

誰か今あその河原にふむ石の數もとらて月をみるらん

秋社

よや寒きいろやはうすき花手の杜の露霜置まよふ頃

冬風

れくらとふ鳥うかるゝ聲す也木からし寒き夕くれの空

蔡花園の難波の梅盛に侍し時。細川右馬助

入道のもとへ。一枝をくり侍し次に。結ひ付

侍し。

返し

この花はなにはたかつの高きよに及ふいろ香そ知人にせよ

十七日。兵庫助貞親もとにて。月次の三首に。

夕春雨

かれの音は霞のよそにくればてゝ春雨近し軒の玉みつ

名所花

いもせ山にほへる花の瀧津せは中に落たる聲もむつまじ

祈身戀

うかりける我みの程に初瀬路の苦しかれて祈りやはせし

當座三十首に。

春夜

心ありて花をはよきよかすむ夜の月のかつらをしほる春風

春杉

春をへて又おひそふもふる河やいつれむかしの二本のすき

春衣

あま人もしほなれ衣めき置て霞やかつく春の夕なき

春懷

身にはたゝ老の涙のみ數そひてみしよの春そ立もかへらぬ

題者予。讀師同。講師親忠。人數如<sub>二</sub>先月<sub>一</sub>。

十八日。三善爲數もとにて。月次三首に。

河柳

青柳のはるのかけとや立田川からあぬくる水のしらなみ



春月

のとかなる光は空に猶みちてかすむともなき夜半の月哉

忍戀

——うき身しのふのあさ衣たゝうちふてよをやつくさん

廿三日。實相院准后住吉にまうて給て。社頭の

松の枝につけて。神前にて思ひつゝけ侍る

とて。給りし。

道にめくむ神の心のしらるればわきてそみする千代の例を

御返し

あふきみる千世のためしに道を思ふ神と君との恵しるしも

廿四日。一色左京大夫教親家にて月次三首に。

歸鴈

こしちをはおもふかたとて行鴈の鳴れまかはぬ春のよの空

初花

さは姫の今や手にまくいと櫻吹とく風もにほひそめつゝ

契戀

草の名のさしら人やは思ふへき我はいふきのやます忘れす

當座五十首歌。

早蕨未遍

雪消るたるみのうへはもえ初てまた春しらぬ谷のさわらひ

夕落花

けさまては花にいとひきふけやたゝ夕への雪の庭の春かせ

寄枕戀

うきなのみたかでの淀にさはく也いつ薦枕かはしそめまし

雲浮野水

そことなき野澤の末の雲水の浮てたゝよふみにこそ有けれ

みさひさへふるきほり江の蘆のはの昔もなひく浦風て火

題者予。讀師同。講師壽阿。人數如三々々。

石清水社に奉納のためとて。細川讃岐守す

すめ侍し五十首に。

梅薰袖

さくむめに神の昔をおもへとや今も匂ひそみつゝの衣手

聞時鳥

時鳥初音かたらふ枕こそ老のれさめのうさもわするれ

早秋露

秋のくるかたのゝみのゝ白しはに馴てをきちる露やまさ覽

浦千鳥

和歌浦にもとよりかよふ濱千鳥猶みちありてなるゝよも哉

祈身戀

長らへはうきみしめさへかぐて社くちぬ契りの限をもみめ

三月八日。細川右馬助入道。道賢。家にて。月次

三首。去月の分なり。

浦春月

霞さへおほふかた枝にもる月もえならぬ春のおふの浦なし

山寒花遅

さえかへる袖ふる山の朝ほらけいつか櫻の雲にまかはむ  
洩始戀

いつしかと板間もとむる初時雨さをなくたさんねやのさ蓮  
當座三十首に假名題。

今日の子日の

みち廣き千代のためしに引初つ今日の子日の松のことのは

梅のにほひに

やとれ月梅のにほひにかすみても又光そふ花の上のつゆ

春のくれかた

をのつからななき日影にまとゐして心のとけき春の暮かた

題者予。讀師同。講師元秀。人數如レ先。

今日吉日之間。福壽。典廐養子。管領弟。はしめて物を

ならはしそむへきよし。申され侍し程に。詠

歌大概はしめつかた。仍子日の歌其意趣を

あらはし侍り。二十首之題をさくりて。

夜思花

櫻花明行いろやいそくらん月さへにはふこよひならすは

十三日。蔡花園にまうてゝ。法事の後。御室木

寺の神殿などの花を。只獨眺望して。

たくひなき色をしるへきうき身さへ獨み山の花のかけ哉

十四日。黒谷の花のもとに。三寶院門主をまち

たてまつる事有て。寶池院法印皆門下人々。

ひねもす花にむかひ侍し時。

夕日影うつるひけりなけさの間に思ひ立にし花のしら雲

十八日。三善爲數もとにて。月次三首に。

遠尋花

みよしのもあさき山路に分なれぬ花ゆへしけき春の入めに

花下友

なれにけりあかの一木の花の陰衰いくよの契なるらん

旅宿

やとりをぬきをもとらぬ旅なれや手向も同じ花の下ふし

橘元吉藥師寺四郎左衛門すゝめ侍て。崇徳

院の法樂百首に。

子日

子の日せし春もわすれぬ松山の神やむかしに心ひくらむ

廬橘

よをへてもそのことのはに立花の匂ひ残れる陰はむつまし

七夕

あまの河よりくる涙のたまゝも逢瀬にさへや心くたくる

落葉

露霜のそめ涙も夕くれのおつる木のはにいさなはれつゝ

佛名

初戀

おもひしれはつとやいてしわか鷹のなれぬ縁に通れぬよな

祝言

八すみしるそのかみたかき恵もてやすくや四の國守るらし

出題予。

太政大臣家月次續百首に。

三月三日

今日とてや流れも清き水くきに取かはすらん花のさかつき

立秋

秋はけきたつの市人いつしかと露もうるほす袂なるらむ

爐火

いたつらにれやの埋火かたらひて窓の光をそむくへしやは

山

たかきよに風の姿も立かくれふしの煙のたえぬ道とて

親王

ことのほの花そふ竹のその影や草にも木にもあらて匂へる

廿八日。一色左京大夫教親家にて月次二首に。

水邊躑躅

浪よする磯の岩ほに咲つゝしあまのたく火のかけかあらぬか

山家暮春

この頃はいつち行らん山にすむ山人さへに春をしたひて

鐘聲何方

れぬる夜も夢のなちも鐘の音もそこはかとなき曉の空

當座五十首。

暮春天

空にたゞ霞の關しまさしかれくれゆく春はとめあへすとも

暮春磯

たえくにかずむ磯への夕附日みらく少なき春のかけかな

暮春車

小車のめくる日數に春も哉花の錦のひもはたゆとも

暮春旅

我のみそなく峯こゆる行春の鳥は空路にかへるゆふへも

出題予。讀師同。講師壽阿。人數如三先々。此

會果て。沙彌智蘊庭の藤盛に侍しを。立より

て見侍るとて。人々一首のこし侍し時。

かへるさそいとわするゝことのはに心をかくる松の藤浪

廿九日。橘元吉人のすゝめ侍るよし申て。三十

首題所望せしに。同よみてつかはし侍し。

初春霞

春といへは猶のとかにて天津空限しられす立かすみかな

契待戀

こよひたにいつしかかはる心哉更るまてとは契らさりしに

曉遠情

老の浪よるのれ覺の枕にはまつかよひけりわかのうら風

親元筆をかきならす。

同日。智蘊夜前一座難レ忘侍るよし申て。

松風ににはひし花のいろくそ面影にたつ宿のふちなみ

返し

色そふる君かことはのはな、くはしほれやはてん宿の藤浪  
四月一日。勤行如三毎朝。

三日。石清水にまうて、六首歌讀て奉りし

時。

春朝

白雲のはなに朝ある朝ほらけ雪さへにはふ春の八重山

夏夕

月をそく出るかたの、夕くれに聲も雲間の山ほと、きす

秋夜

遠方やかはせの涙はみえわかて月そいさよふうちの山さと

冬曉

冴にけり明るむかひの里かくら霜もわかへのさ、うたふ聲

戀心

かきりなく塵ならぬ名も立やせん空にしめゆふ心つからに

神祇

石清水あふく心のともか、み猶もか、みて神そまもらむ

おなし時紀元盛參籠して。廿首うた法樂申  
はへりしに。

首夏朝

歌闕

祈逢戀

今そしるいのれはかなふ理になひくみしめのむすふ契を

曉更鵲

時をしる八聲のとりもおさまれる御代は今とや神に告らん  
題者予。讀師同。講師元盛。已刻參三神前。酉  
刻歸京。其間に於三橋本坊一法樂。當座遂三講  
頌了。

七日。三善爲秀飯尾備中守もとにて。はしめて

三十首歌よみ侍し時。庭躑躅賞翫。

首夏

夏きてもさ、れに匂ふ岩つ、し八千代の春を残すとそみる

早苗

つくはれの茂き恵にあふ民やすそはの田井に早苗取らん

鵜川

月は、や入ぬる西の河よとに山あひ出るうかひ火のかけ

契戀

我方にあたなる涙はこされとも涙せく袖や末のまつやま

久戀

契しも袖ふる山のためしにてけにみつかきのみつかからそ愛

水郷

たちかくれよるつの道もさ、波や大津の宮の深きためしに

十七日。伊勢兵庫助貞親もとにて。月次三首歌  
に。

賀茂祭

いつまでそいつきの宮の宮人もけふに葵をかさしげんよは



薄暮時鳥

寄雨戀

れくらとふ習もしらてくれ行は猶のくかるゝほとゝきす哉  
なをさりに佐つゝ、れんにかこちしや月に慰む雨のかれこと  
當座三十首に。

郭公類

名所鵜川

此ころはもりの雫のをちこちに鳴ぬ日もなきほとゝきす哉  
かゝり火のいさよふ浪にしられけり夜河更ゆく宇治の山本

述懷非一

ことのほろ心のたれもつくは山分る道にはかけ茂くして  
時阿去月をこたり侍しを。同じく張行せし  
に。

雲雀

遲日

あさゆふにあかる雲雀の心さしわか道芝にいかてまなはん  
色にそむ心のはなの咲ちるにのとけき春のかけを忘るゝ

懷舊

郭公しのひねそへてことつてんみしよの人の行ふ知かも

廿一日。畠山右馬頭入道。仙室家にて三十首歌

讀はへりしとわ。

庭新樹

歌闕

塵穢薰枕

牽照射

立名戀

相互恨戀

雲浮野水

匂ひきて夢はとまらぬ枕にも過し昔を残すたちはな  
さ月やみはかなき鹿のよるほとそ哀に峯のほかけいさよふ  
あふにしもかへぬ思ひの唐錦立まくおしきなのみふりつゝ  
覺束ないつかたよりかくゆりけんつらき二見の浦の藻鹽火  
朝雲のまよふ野さはもよそならぬ庭の清水の面影にみゆ

出題予。讀師同。講師壽阿。

人數。正徹。亭主父子。素欣。智蘊。壽阿。

廿四日。祭の日。智蘊もとより。かつらの枝に  
付て申侍し。

ぬるかうちに神のみせける花そとはけふの翳しに思合せて  
夢に。八重櫻を鉢にうつくしくそたてたゝ  
を。よかもとへ人のたひたるを。これかれめ  
またきて。みはやしもてあそひ侍るよしお  
ほゆるとて。如此申云々。

返しあふひに結びつけ侍き

夢のつけあふひを結ふ今日さへに心かけける程をうれしき  
廿五日。一色左京大夫家月次三首。

山新樹

きのふかも柳とりしは御影山そのかけわがす茂りあひぬる

曉時鳥

心あれや曉おきなもよほしてあかすかたらふ山ほととぎす

立名戀

うかりけりなたかの浦に迷哉扱なひきもはかつくよもなく

當座五十首に。

忿早苗

はなみんと春もいそきし櫻田に又はつ苗をとりやそめまし

野徑夏草

いにしへの水の心はえもしらす茂る野中に草や結はむ

寄海人戀

心あるあまとなりてもいつまでかつれなき人をまつか浦嶋

湖水眺望

さゝ浜やよるとてかへる海人もなし月にこき向ふ興津嶋山

夕聞法

いほしめて聞は夕の涙の聲ふかき御法にかよふなりけり

出題予。讀師同。講師壽阿。人數如レ例。畠山

匠作二月以來無ニ出現。依ニ違例一也。會之間

に園の豆をおりいたし候侍しかは。人々こ

はれくふ。俳諧に紙のはしに書付侍る。

しき嶋の道のすさひにひろひくふことはの園の豆にも有哉

廿八日。畠山修理大夫。賢良。家にて月次三首

に。

卯花處々

花さきぬむかひの里のうつき原わがすむ方も同しかきほに

對月待郭公

時鳥なれもかたらへ小夜深て月待出る有明のころ

來不留戀

うつりゆくかりそめふしのさゝ枕一夜の夢も結ひはてなて

當座五十首に。

子規何方

ほととぎす聞そ定めぬ鳴こゑも一村雨の雲まよふそら

寄星戀

やとりきてなかるゝ星の影もなし涙の床の曉のそら

松作友

としへてもななき心のしるへとや松のみさはをさして契覽

徑苦

いかなればたもともいほも通路も深き契りの苔にあるみそ

心靜延壽

しき嶋の道に心のいる人を老ても和歌の浦にともなふ

題者兼日飛鳥井中納言入道。當座予。讀師

同。講師壽阿。人數如ニ先々一。

玄與日記

文祿五年七月十日。薩州鹿兒嶋より近衛前左大臣信輔公御歸洛也。黑齋玄與令三供奉。御船海上に出れは。鹿兒嶋の僧俗船にのり。御なこりをしたひ送り奉りぬ。十日之曉景に。大隅濱之山に御着船。則相良善右衛門尉所。御旅館に。なる。明る十一日。龍伯館にて御歌の會を申すすめらる。

兼題松蔭新涼

立かへる名殘こそあれ松蔭はすゝしき秋のやとりと思へは

杉

龍伯

暑日の影も忘れて馴なる、松の下枝に秋風そふく

近衛殿

長治

間よるもかはらぬ友と松蔭にかならふ秋の袖の涼しさ

玄與

枝しけき松の下露落そひて衣手涼しあきの初かせ

杉

當座早秋月

見る程もまたみしかよや秋といへば月にあかなき初なる覽

薄露

龍伯

行袖をむすひもとめ糸薄末はの露は玉とちるとも

夕鹿

杉

狩人のあるやもゆるを哀しらは妻こふしかの夕暮の聲

隣持衣

幸侃

聞馴て近き隣のきぬたさへ更ゆく空はかすかにそなる

河霧

杉

秋風にまほひく船の行衛にやわけていらまし淀の河霧

籬菊

珠長

ゆるされぬ籬のうちの菊の花たゝ咲こそをよそにみよとや

嶺紅葉

玄與

みる人の心は行て手折ぬもかさしになれる嶺のもみちは

寄鏡神祇

龍伯

神垣のうちゆたかにもうつし置心やよゝの鏡成らむ

此外御會之人數十五人程侍し。晝よりはしまり。深更になりて御成就也。十二日には御座敷能あり。十三日には秋月入道宗闇舞臺にて。能九番興行なり。十四日早天にめぐりへ御船よりうつりおはします。幸侃假屋御旅所になる。十五日はめぐりへ御逗留。十六日に庄内の渡川なりぬ。龍伯庄内まで送り給ひぬ。十九日幸侃宿所にて御當座の御歌あり。折節草花座敷に侍れは。

小男鹿の音もかよはなん秋草の花をこかめにさせる宿には御家門様被レ遊候。

龍伯

花々を分にし野への歸るさや手折もてきてかめにさすらん  
秋草の花もてかさる宿と見は問來る袖にしはしとまれ

幸 侃  
玄 與

玉たれのこかめの花は秋の野の露にしられす盛成哉

此外にもあまたはへりつれとも書もらし侍りぬ。廿日幸侃所にて座敷能あり。打つゝき二十

一日に秋月入道興行なり。廿五日しふしに御着被成候。大慈寺といへる寺。御旅宿になる。役寺の坊主參扣。則和漢あらましある。拙者發句つかうまつるへきよし。近衛様尊意之まゝ仕りぬ。役寺松木ふかきところなれば。

波のこゑまつに入江の秋の海

玄 與  
杉

蘆火招二釣船一

又御出船を祝侍りて。

玄 與

追風も有明の月の船出かな

しふしへ御逗留の間。松良吉右衛門尉。福崎久五。兩人御旅の調仕りぬ。閏七月五日しふしを御出船。くしまのうらちのゝ湊といふ浦に夜更て御船をとめらる。秋月入道馳走被申候。七日ちのゝ湊を漕出侍れば。唐土かけて見え

侍りぬ。和田の原漕出て見れば久かたの雲井  
「に」まかふ沖津しら浪の歌。おもひあはせ侍りぬ。其日暮かたにことの浦へ御着船なり。彼浦に十日餘り御船をとめられ候。御つれつれのあまりに御うた有。

海邊月

杉

和田の原むかふ嵐にいかなれば月のみふれのまほに行らん

初會戀

同

つれなきに心つくしのはても今ありける物よあふの松原

羈中衣

同

峯を分麓の露にぬれ衣野路ゆく程や萩が花すり

同じ題をくたされて

玄

與

沖津風吹につけてや夜はの月くまもなきさによする白浪

同

しきかはす新手枕が別れ路のうきをもしらぬ心なりけり

同

袖の露にやとれる月の光りまでやつしはてたる旅衣かな

又詠五首和歌。

初秋風

玄

與

秋に來るかたとしられて西の海の波吹風も音かはる也

松下萩

庭に生ふる松のれさしやかよふらん吹もたゆまぬ風の下萩

海邊曉月



寄露戀

あかつきの雲は消つゝいそ山の嵐の上の月のさやけさ  
我袖にくらいてやみん消かへりなく夕影の草の上の露  
社頭祝君

此外に近衛様二十首の御歌有。愚詠も廿首あり。かくて浪風静まり。十五日内之浦といふ浦まで御成候。道すからおもしろき磯山の有様など有中に。もうとの岩屋を見侍りて。

千早振神代に今もかへる波の玉よるなきさみまへにそなる拙子。武神阿蘇の明神は。うかやふきあはせすのみことの御孫なれば。かくおもひつゝけ侍りぬ。又玉依姫も阿蘇明神の御うばなればなり。内海にては日向伊東より御□調なとと申候。十七日に陸路をおほしめしたち給ふ。御馬などの事とも。きよたけの城主川崎是を馳走也。近藤殿拙子は。十七夜の月に船を出し侍りぬ。よるの船はいとゝ心ほそく侍りて。十八日細嶋へ七時に着侍りぬ。廿日に近衛様細嶋へ御着被成候。細嶋にてあかたの高橋九郎。可然上を付置て。御旅の調侍りぬ。廿三日に細嶋を

曉天に御出船にて。豊後國の内かまへと申浦へ御着船。海士の住さとなれば。御宿に成へき所もなきに。松蔭ふかきあたりに古たる寺有。是御宿に成へき處やらんとおもひ。立入て見れば。住人かけかすかなり。取あへす狂歌申つつけ侍りぬ。

ふる寺のあるし顔にてさひしさの待かまへたる御宿也けり俄に塵かきはらひ。たゝみ所々敷て。二三日御逗留也。夫より廿五日御船を出し。同國よなふ津とやらん。人家すくなき浦に御着船也。此浦にて御發句有。

萩のこゑ梢にもろし落楸

眞砂地となき秋のゆふなみ

杉  
玄 與

五十韵程御沙汰被成候。拙子又發句つかふまつりぬ。

夕きりに日の影つゝむみ谷哉  
と申候。

京都にて。紹巴隱居三井寺へ行て。此發句にて百韻獨吟に申つゝけみせ申候へは。右之發句長あはれ候。八月一日御船を出し。海上壹里計過侍るに。日向船とやらん。岩にあたり白浪に

沈ぬ。乗たる人はたすかり。哀なる有様を見侍りて。いよく船路のかなしきせんかたなし。大嶋と申浦へ其夜明し。三日にほとゝいふ所へ着給ふ。雲とまりと申所。ちかくみえければ。

影きゆる月やいつこの雲とまり

と申狂句仕候。それよりさかの關迄御着被成候。去七月十二日之地震之時。かみの關と申浦里は。大波にひかれて家かまともなし。いのちを失なふもの數をしらす。哀なる事ともなり。彼須磨の卷に。高鹽におちて。むすめをは岡部の里へやり侍ると見えしも。ことはりおもひしられ侍りぬ。同七日にいまの海へ渡りぬ。あをしまこく嶋なと、申浦々にうき泊りして。讃岐へうつりぬ。こゝに松山のみへたるを。いかなる所と浦人に問侍れは。是なんしら峯と申侍る。保元のいにしへ。崇徳院の。身は松山に音をのみそなくと遊はされし御歌。今のやうにおほえ侍りき。十日備後ともの浦へ着給ふ。夫よりは順風も心のまゝにて。はりまの

室の津に御着也。十五日朝天に。室の津を御出被成。波路はる／＼うつり行に。高砂の松など見え侍りぬ。彼松。愚身先祖一見之事。高砂之うたひにみえ侍れは。由緒なつかしく見侍りぬ。最中の月を須磨明石にて詠め侍りぬ。

時しもあれ名高き空の月影を今宵明石の浦にみる哉

と申侍りぬ。近衛様御詠歌前に書付はへりぬ。夫より和田の御崎。難波の浦つたひなとして。大坂近くなれば。船子とものうたふ聲にきははしく成て。十八日大坂に着船なり。地震の折節。浪たかく風はけしき海上。つゝかなく侍りつること。佛神のまもりうたかひなくおもひはへりぬ。近衛様の御門前市のことくに見え。枯たりし木の春にあへることく也。昔周公旦のさすらへ立歸たるも。かくこそと思ひ侍りぬ。太閤様より。福原右馬介。長谷川右衛門。兩使御迎として參られ。都へ御のほりなされぬ。其頃愚身所勞之義有。愚宿せんは町也。近衛様拙子御覽あるへきとて。よるに成て御渡なりぬ。忝事共なり。もうしう法印に被仰。良藥を

用侍りぬ。人心付侍りぬ。武庫様よりも伊地知  
與兵衛にて御たつね被成候。忝事とも侍ぬ。然  
るに幽齋老より御使下着し。九月六日一葉の  
ふねをさし秋風にさそはれて淀河をのほり侍  
りぬ。江口の里なと過て。三嶋江のあたりに  
て。夕月夜はとく入て。村蘆のほのかなるかけ  
猶あはれなり。あくれば長月七日。八幡山崎  
など見侍りて。伏見の入江に着侍りぬ。八日武  
庫様へ參上。武庫様拙子病氣草臥を御覽被成。  
忝尊意など侍りぬ。重陽幽齋老吉田より伏見  
に御くたり也。則拜尊顔也。十一日。竹崎千左  
衛門尉幽齋老御用之事ありて。薩摩へかへし  
申候。伏見にて盛方院良藥を用侍りて。病氣よ  
く成侍りぬ。伏見より九月廿四日京のほり  
侍りぬ。同廿六日吉田にて。幽齋老御興行。

爪木こる宿さへ秋の山路哉

二位法印玄旨

まかきを近みなしかなくくれ

兼 如

見渡しの四面の原は霧ふりて

玄 興

廿七日。昌叱へ行侍りて近衛様に參上申候也。  
十一月一日。吉田より幽齋老御供申。名所々々

を御おしへ候也。吉田より新黒谷を通り。東三  
條の森。鹿の谷杯を見侍りて。南禪寺にまいり  
ぬ。南禪寺と新黒谷のあはひに法性寺有。如意  
かたけなと見え侍りぬ。僧正遍照の古跡花頂  
山。夫より祇園の社。八坂のたかつらのほし。  
鷲峯りやうせん雙林寺。きおんはやし下河原。  
六條鳥邊山。あみたか峯東岩倉。又鳥邊山の  
上。に十住心院しんけいの舊跡あり。東山の紅葉  
を見侍りて。

冬かけては山に見ゆる薄紅葉猶も時雨の雨やまつらん

と申侍りぬ。夫より東福寺通天橋を渡り。いな  
りの社。藤の森。深草を分過て。伏見へ着侍り  
ぬ。神無月十一日たひこしの隣石田と申所に。  
玄蕃頭との御座候まゝ參りぬ。十三日絶巴幽  
齋三井寺へ行侍りぬ。たいこ寺迄は。玄蕃頭殿  
か送り也。笠取山。日野。山科。音羽里など通り  
相坂を越大津に出申候。志賀の山ひらの高ね  
のしくれ。かゝみ山もかきくもり。水うみの船  
のゆきかひ。たくひなき有様也。大津町にて玄  
蕃頭との役人まいられ。途中にての御振舞。筆



に盡しかたき事ともなり。三井寺坊舎皆々くつれはて。紹巴の栖古寺の傍也。終日遂閑談。日くれ侍れはかへり侍りぬ。三井寺のかねかすかに残りて。淋しき事とも也。神無月十九日大比叡の雪を見侍りて。

東路の空に心のかよふ哉都のふしの雪をみれともと申侍りぬ。又發句に。

出る日やおしむ初雪朝曇

雪にみるすゝきや秋を忘れ草

又よし田にとまりて。

ふかきよの夢路に通ふ松風は月みよとてやおとろかすらん

十月廿三日上京。兼如宿にて興行。

とふ宿のかことなりけり夕時雨

玄旨法印

庭に紅葉のちりのこるかけ

兼如

廿四日近衛様へ祇候。廿五日伏見へくたりぬ。其折節建仁寺の雅長老へ參扣。又十月十七日紹巴より合點の連歌到來。其便宜に松前の昆布送給也。霜月より慶長元年に改。霜月三日幽齋老拙子と兩吟被遊候。四日八ッ時百句成就也。右之兩吟名譽のよし。紹巴老人より褒美の一書預り候。同四日幽齋御宿にて中國太守毛

利殿參會仕候。飛鳥井殿なと御座候也。毛利殿御盃御さし候。其晚景若狹少將殿御發起にて。伊勢物語幽齋御講釋也。聽聞人數。少將殿。木下宮内少輔殿。山名禪高。山中山城守殿。溝口大炊介殿。其外歷々御人數也。同日夜に成て紹巴より書狀并松前之一種預り候。十五日吉田へのほり侍りて。明十六日。菊亭前右大臣殿幽齋御宿所にて御茶湯也。墨跡はきとうの筆かかる也。御相手に拙子御座鋪へまいり侍りぬ。夫より書院にて終日亂舞。觀世大夫其外京中の名人とも參り候。幽齋四番目の御子茶智丸。太鼓あそはし候。十七日近衛殿へ伺候。十八日吉田へかへり侍りぬ。其日幽齋老基の會御興行。京中の碁打皆々被參候。本因坊なと也。せんやも被參候也。廿日吉田にて連歌御興行也。氷りゐて行水ふせく河邊哉  
蘆の枯葉にましろ萍  
春風に田面の柳色みえて  
昌叱  
玄旨法印  
玄興

日野大納言殿なと御出座也。其懷紙。從禁中吉田神主殿を以被成勅言。叡覽に侍り申候。拙子



第三一せならぬ冥加のよし。京都にて人々被仰候。廿一日北野社へ參詣候。社頭にて。

春にみん山口しとし冬の梅

と仕候。能禮にて一折。かへる道すから嵯峨山のつゞきの雪を見侍りて。

日のいろもこほるか今朝の峯のゆき

夫より。日野殿飛鳥井殿三條西殿などへ參りはへりぬ。廿二日盛方院參り。南禪寺へ茶智丸様御逗留のまゝ參りぬ。廿三日上京。幸前興行。

ちりちらす雪さへ花の都かな

こすの外山のさむき朝風

幸 前  
支旨法印

廿四日近衛様祇候。鷹司殿御座候也。將基仕候。廿六日南禪寺にて。茶智丸能九番被遊候。

廿七日伏見へくたりぬ。三條河原のあたり曉通候。寒月の體言語同斷。廿八日より伊勢物語の注寫し侍りぬ。八條宮様へ幽齋御傳受の注なり。京都へも拙子下國迄は禁中八條様。御兩所までに御寫被成候注にて極月五日常心様にも。幽齋老能九番御興行。茶智丸三番。常眞二番。老松なとなり。樋口又次郎

兩人にて候。重平一番はやし候。九日に幽齋老丹州へ御下向。拙子は御留守居し侍りぬ。是書寫の本多き故也。十日に近衛様より御書被下候。紹巴より一札到來候。盛方院より寒中の藥又々給候。七日薩摩より安右衛門參候。文などのほり候。十一日に紹巴老に助五郎遣候。巴より美濃紙十帖給り候。廿三日近衛様に伺候。勸修寺殿など將基仕候。笛の名人安中其外公家衆御參會之座敷也。廿五日。

冬木にも春や立枝の梅花

杉被遊候。

出る朝日のかげ寒き庭

と拙子仕候。

廿六日龍山様。光照院殿。入江殿。大炊御門殿。富田殿。昌叱など夜更まで御酒宴也。廿七日聖門様。龍山様又々御參會也。廿八日に御家門様御馬に御のせなされて。伏見に歸り侍りぬ。慶長二年伏見幽齋老御屋形にて年をこえ侍りぬ。

試筆

支 與

吳竹のふしみの里の朝露に一夜をこめて春や立ちらん

發句

こそたちて今朝光そふ春日哉

玄 與

七日の翌日初子なれば

袖はへて若菜摘の、ゆくてにや明る子の日の松をしめなん  
七日之日。紹巴へ右之發句にて獨吟申候て遣  
候。其かへりに紹巴試筆預候。

谷も今朝よそならぬ春の光かな

紹 巴

又醉中の狂句とて。

皆人は世にあふ坂の春といへと我身は老のくたり坂也

又紹巴七十三歳の年のくれの晦日に。

なからへて浮山住も七十のみ冬の暮のおしまるゝかな

書付給候。其時筆なと預り候。同十一日丹州より御狀被下候。

試筆

二位法印玄旨

ふる雪のふかき山路も春と立ことしと越てかすむ色哉

丹州千とせのうらちかきゆへ

立かへり千とせやよばふ浦の波

同

十二日近衛様より御書被下候。本壹札薩摩

表町田入道存松より被頼書遣候也。十六日近

衛様より被成御書。則出京申候也。同日紹巴より

合點の連歌到來也。十九日上京。いまたちう

ちにて一折有。兼如同心也。廿日勸修寺殿へ參

候。さけさや被掛御意候給也。廿一日近衛様に  
て一條殿御目にかゝり候也。廿二日近衛様に  
留田殿伺候也。廿三日近衛様にて連歌御興行。  
昌叱。其外廣橋殿。勸修寺殿。西洞院殿など。拙  
子も御連衆也。廿四日紹巴にて一折興行。廿五  
日北野へ參詣也。法樂に十首の歌よみ候也。近  
衛様も被遊候。かしら字を置く也。

家門息災安堵此字也。

夜梅

玄 與

風ならておとろかれけり春夜の夢路に通ふ梅の匂ひに

花近簾

百鳥の聲さへちかしこすのとの花の盛の間ほのゝそら

見花

村々の霞も消て蘆のやの浦のみるめや花にからまし

池邊藤

袖はへて折やかさゝん玉敷のみきりの池に匂ふ藤浪

浦歸鴈

暮渡る浦半の波のかへるさや雲井の宿の心なるらん

野旅行

さらわたに旅の衣の露けきに小篠かた敷野路 夕くれ

夕颺

いつはあれとさひしかりけり山里の暮る梢のむさゝひの聲

夜風雨

海邊鶴

明やらのよるの船人いかならん舟ふりそひてあらし浦風  
むは玉の夜半の月影浦風にさへまさりてやたつの鳴らん

祝言

ときはかぬ恵みの程は春日山峯の朝日の光りにもしれ

廿六日兼如にて。一折興行也。廿七日近衛様に  
て。灯下片時に十首被遊候。愚詠も十首也。廿  
八日幽齋老御上着。吉田にて御目にかゝる也。  
むすめへくゝし小袖被下候。廿九日伏見に御  
下向。御供申也。大佛御門跡様へ參候なり。二  
月一日古今真名序の清濁傳受申也。同日宗技  
一卷寫し。新古今注の書そへ仕候也。五日京へ  
上り申也。六日近衛様參。櫻の御所にて御連歌  
興行。并御當座の歌あり。七日近衛様へ。幽齋  
老御案内者申參候也。十日清水觀音に參詣申  
法樂に。

いろかへて四方の梢に咲花もあまれき春の光りとそみる

又清水寺にて。

あし引の山風吹は散花の波やこゆるん谷のかけはし

十一日幽齋老より。態御飛脚給り。其故一條殿  
御連歌に參候得とも。ふしみへくたり申候。十

二日東條殿にて。黒田如水老餞別の連歌。  
枝々やあひにあは縹々糸柳

主旨法印

二月六日。近衛様糸櫻の亭にて。かしら字を置  
て。御當座あり。

山櫻

龍山

るいもなき花は櫻のよしの山ちらぬもちるも雪とみる迄

松藤

見るまゝに池のさゝ波藤浪のさそはれこゆる岩れ松かれ

春日

おろかにも誰かおもはん春日山あまれき神の深き恵を

早春

杉

千々の秋も宿にや經なん年々にまつへる春をいはふ諸人

水鳥知主

見るまゝにちかよりつゝも鴛鴨の我になれ行池のおはしま

伊勢

守れ猶清き流れやわたらへやいすゝの川の末絶ぬ世を

朝菰露

聖門様

一かたはこほれやすらん萩が枝のをもけに置る庭の朝つゆ

池柳陰

柳かけ梢をひたす池水の底のみとりや猶まさるらむ

石清水

長閑なる春まぢえつゝ、石清水花をかさしのけふの舞人

籬罌麥

一乘院殿

みたれそふ籬の露の玉敷の床なつかしき花の色かな

## 河時雨

聲高き河瀬の波や水上の山風さそふ時雨なるらむ

## 水邊月

よせ歸る波まのかけは遠近に見えてすゝしき秋の夜の月

## 庭霜

日ののこるみきりなからも吳竹の葉分の霜やかつ結ふらん

## 夕納涼

庭の面に木々の露ちる夕風によそにはふらぬ雨のすゝしさ

二月十四日。伊勢へ參宮中。富田信濃守殿馬御馳走也。相坂を越大津粟津を過て。みかみ山鏡山など見て。水口といふ所に着侍りぬ。十五日鈴鹿山を越てあの津に着ぬ。富田甚五殿さまさま御馳走也。十六日伊勢の山田へまいり着ぬ。御炊大夫宿所へ行侍りぬ。外宮内宮へまいり。かたしけなきになみたこほるゝと。西行のうたおもひ合侍りぬ。外宮の前をなかるゝ川。宮河と申也。外宮の上に天の岩戸たかまか原あり。月よみの森有。内宮へは一里隔る也。内宮の前の橋宇治はしと申也。神路山より流るゝ水みもすそ川。その末いすゝ川。其末わたらへ也。是内宮也。うち山は内宮より南也。神

路山は東也。あさくら山は内宮より東也。ふたみの浦に。内宮よりたつみ。大淀の浦そのつゝき也。外宮内宮法樂に。

跡たれて世をやす國と守りぬる神の心や猶もあふかむ  
浅みとり霞の衣打はへてみもすそ川の名こそしるけれ  
宮かけて杉むらふかし朝霞

十七日あの津へ歸り侍りぬ。又甚五殿亂舞などにて。終夜の酒宴。十八日鈴鹿山の麓土山にていうかの谷の内留りぬ。雪ふり積りて。あれは十九日大津に着ぬ。其夜紹巴へとまりて。いろくの物語也。廿日伏見へ歸りぬ。八十瀬川はすゝか山の麓也。あこきか浦はあの津よりはあなた也。かゝみ山の雪をみて。

寒歸る空の霞は風に消てくもらぬ雪のかゝみ山哉

幽齋老いつれの歌も御氣色にあひ申。紹巴宿所を別れ侍る時節。扇など給りて。又はるゝ送出られて。から崎の松なからの山のつゝき。かたゝまのゝ入江のあたりおくられ候。三井寺とひゑの山の間は。志賀の山也。あふさかの走井は。大津のかた也。大津を打出の濱と申侍



る也。しみつ相坂のなかは也。廿二日近衛様に  
參上。廿四日に禪高江雪參。即興の御歌あり。  
又御發句にて一折。

さかぬ間や我をとひ來し花の友  
影ものとかに月うつる庭

遺水のかすみなかなす音澄て

田面のはしの雨ははれけり

同日雨に糸さくらをよみ侍る。

春の雨に糸くりにかけて庭の面はみたれあひたる花の色哉

咲出ん砌の花の盛をも松のときはにならへとそおもふ

近衛様御返しあり。

咲はちる花にはありともことしより松の常盤に習ひても哉

廿八日。吉田にて幽齋老御興行。

一たびにさかはいつれか初櫻

梅うつるへる軒の山嵐

うくひすの間垣へたつる聲はして

昌 叱  
玄旨法印

如 水

日野殿飛鳥井殿など御出座也。卅日伏見へ下  
り侍りぬ。近衛様餞別之御うた被下候。

へたつとも沖津しら波立かへり又もきてみよ花の盛な

御かへし申侍りぬ。

うき旅を忘れやせまし言のはの花の匂ひを袖にうつして

三月一日。伏見江より船にのり大坂へ着侍り

ぬ。二日大坂にて龍伯様へ伺候。則御暇被下  
候。三日すみよしの鹽干を見物申侍る也。

五首の法樂。

海邊霞

春風はおさまりつゝも寄てくる涙のなきさの朝霞哉

春月

片敷の枕もとらしつくくと朧月よの影ななめて

苗代

村々にたてる梢は青柳のみとりふかめる小田の苗代

松間藤

咲ふしのさかりてしるし浦かけて松の木間に波を立くる

社頭花

千早振神のあかきに咲花や春の手向の色に見ゆらん

住吉の行あひの間。ほろえあられ松原津守遠

里小野など見侍りぬ。又住よしの花かけにて。

歸るさも忘れこそすれ咲花の陰をしめつゝすみよしのさと

かくて海上長閑にて。十七日月になりて。細侍

へ着ぬ。夫より庄内郡之城へ。廿三日に着侍り

ぬ。

群書類從卷第三百二十六

日記部七

宗長手記上

大永二年五月。北地の旅行。越前國のしる人につきて。かへる山をしらねとも。宇津の山をこえ。小夜の中山にいたりて。

このたひは又こゆへしとおもふとも老の坂也小夜の中山

朝比奈備中守掛川泰能亭に逗留。この比普請最中。外城のめぐり。六七百間堀をほり土居をつきあけ。凡本城とおなし。この地岩土といふものにて。只館をつきあけたりともいふへし。城と外との間堀あり。冷々としてのそくもいとあやうし。此城にて發句とて。

五月雨はくも井のきしの柳哉

又南に池あり。岸たかく水ひろくして大海に似たり。凡龍池ともいふへし。又發句。

池の面やきしはすみのえ春の海

是は四五ヶ年さきのことなり。本城に井あり。

朝比奈

前備中守泰熙當國の事承はしめ此山を見たて

築といへ共。水かたし。鶴のはしかなつき鋤鍬はいふにおよはす。種々の道具數をしらす。二百日にいたれとも。みつほりいたせることかたし。既に退屈におよふ所に。黒小蛙小蛇土あくる籠に有。さては水近にやとて力を得。終に水に掘あたる。麓の川の底とおなし。汲あくる轆轤の繩千尺にもあまりぬらんかし。武藏

野のほりかねの井はいかゝ有けむ。此城をめぐりて大なる川あり。仍懸川といふにや。東西

都鄙の大道なり。今川一門後該二保左衛門佐抑備中守泰熙當國におきて

粉骨戰忠の次第。社山に左衛門佐殿在城。配流

をもつて二保の城へ退け。則尾張の國當國浪

人等。足を空にしてかくるゝ所なし。信濃三河

の國境まで手裏にしたかひ。又河西村櫛堀江

下野守數年の館。伊勢第九郎氏家濱名の海南北にめぐり。本城

外城黒山といふ。早雲庵備中守相談せられ。當

國諸軍勢うちよせ。兩三日に落居す。濱松庄。

吉良殿 三州之主人源三位賴政末業 持明院ノ流業御知行。奉行大河内備中守堀江下野守にくみし

てうせぬ。其刻飯尾善四郎賢連吉良より申下

され。しはらく奉行とす。すへて此父善左衛門

尉長連。義忠入部の時に當庄の奉行として。度

度の戰忠他にことなり。剩義忠歸國の途中に

して凶事の時に。名譽の防矢數射盡し。則討

死。其息善左衛門賢連。其子善四郎乘連。伯父

善六郎爲清まで。其舊號をわすれ給はす。永正元年九月初に鎌倉山内扇谷。號兩上杉。山内管領職。鉾楯。

扇谷は早雲一味河越江戸。山内は上戸鉢形。い

つれも合戰すへきになりて武藏野にもあまる

はかりなるへし。坂東路三里はかり。敵退に及

す味方すゝむにあらず。十餘日相さゝへて注

進あり。今川修理大夫氏親九月十一日俄に進發。十三日備中

守福嶋左衛門尉。駿遠兩國の勢逐日出陣す。同

廿日廿一二日早雲の陣武州益形着陣。駄退くやと

見えき。をひすかひ一夜野陣。明る辰刻計の朝

霧のうち。武藏野も深山のやうに。敵味方の軍

兵みえけるとなり。凡雷電のことし。午刻はか

り馬を入あひ。數刻の合戰敵討負て本陣立川

に退。其夜行方しらす。山内へ於後長尾義景加勢ス。勢歸東上出初九也二千餘討死討捨。生捕

馬物の具充滿。一日一夜有て。大將修理大夫氏

親同十月四日鎌倉まで歸陣。一兩日逗留。可州

熱海湯治一七日。韭山二三日。陣勞休られ歸國

ありしなり。其時三嶋明神に立願申侍りし。則神前にして。同十日より三日に千句獨吟。發句題。四季第一。

たなひくやちさとものほる霞

青柳やかけそふみしま木綿かつら

氏親  
宗長

又八九年して大河内備中守おほけなきくはたて。濱松の庄にうち入。引馬にして當國浪人等

百姓以下を楯籠らす。則發向。今度は悉寺庵在家放火。大河内及生害所。されとも吉良殿御代

官につきて懇望。先以免せられ各歸陣。泰熙永正九年十二月其冬不慮に病死。力およはす。泰熙永正十一年幼少にして。

伯父泰以しはらく輔佐。また大河内信濃三州

尾張をかたらひて大亂くはたつ。今度は御進

發。笠井庄慢嚴寺に御馬たてらる。諸軍勢川を

打越大菩薩といふ山に着陣。北に伊井次郎深

嶽といふ山武衛を覺悟申。又浪人以下相あつ

まり。毎夜の箏曉の星のことし。泰明比奈以やすく

とうちおとし武衛同奥の山に退。則尾張歸國。

此深嶽の城は。なかくろ甲斐美濃守數千の軍

兵にて三ヶ年に及責。つゐに落居。せすとなり。

泰以戰功により。當國無爲に屬す。其後甲斐國

武田次郎鉦楯に付て。氏親合力の事あり。又此

刻をえて。大河内當國浪人等信濃國人を催し。

武衛をかたらひ申。天龍川前後左右在々所々

押領す。其冬當城に八幡を立らる。八幡の祝發

句。

これつ世にこほらぬなかれ石清水

泰能伯父時茂八幡を守護し。當國同駿州迄の

御留守嚴重なり。明る夏五月下旬かの城にう

ちむかはる。折節洪水大海のことし。舟橋をか

け。舟數三百餘艘。竹の大繩十重廿重。只陸地

にたり。此橋の祝として千句あり。發句。

水無月はかち人ならぬ瀬々もなし

今おもへは。みなかち人のわたりかなと申へ



かりけり。敵川のむかひにうちいて。射矢雨の

ことし。數萬の軍兵やす／＼とうちわたす。敵

はすなはち引入ぬ。敵の城六ツ七ツ。めぐり五

十餘回の内おひこめ。六月より八月まで攻ら

る。城中そこはくの軍兵、數日をへて八月十九

日に落居。安部山の金堀をして。城中の筒井こ

とことくほりくつし。水一滴もなかりしなり。

大河内兄弟父子巨海高橋其外楯籠傍輩數輩。

あるは討死。あるはうちすて。あるは生捕。男

女落行體目もあてられすそありし。武衛又子

細有て出城。ちかき普齋寺と云會下寺にして

後出家。供の人數各出家。尾張へ送り申され

き。すへて秋山二俣伊井の奥の山。今度共に三

四か度如此。希代の不思議にや。此大河内備中

守當國に敵する事。同三四ヶ度なり。抑當國尾

張半國當方分。中比上意いかむ。しはらく武衛

御領國として御あつかひの事にや。範圍。本庄。明定光寺殿。

法名。永仁五年丁酉誕生。範氏誕生正和五年丙辰。

省心。泰範誕生建武元年甲戌年。範政誕生貞治三甲辰年。

範忠誕生應永十五戊子年。義忠誕生永享八丙辰

年。知行は泰範の時にや分明ならず。八十五年

有て義忠入國。子細は河勾庄普光院領。懸川庄

普廣院改替。共に御判有て入部の事。その時狩

野宮内少輔といふ者。遠州守護代職。吉良殿の

内巨海新左衛門尉。この庄を請所にして在城。

よき城をかまへ。狩野と申合入部を違亂す。し

かるに義忠自身進發。八月より十一月まで狩

野か城府中責らる。同廿日せめ落され。狩野生

害す。此宮内少輔は伊豆狩野助一類。武衛の狩

野加賀守。當國之郡代。同名にして與力す。結句加賀

守息次郎生害させ。家督となりて。當國心のま

まに進退す。是又當方の力を以てかくのこと

し。されは安部の狩野介謀叛。此山中甲州につ

つきせめ入かたくして三ヶ年。宮内少輔遠州

數千軍兵を引入て。此山中にうち入。案内者して悉責亡す。いまに靜謐。其忠も又異他なきにあらず。當國の事。應仁年中細川義之讚州。三河國守護代東條近江守國氏等銚楯につきて合力の事。伊勢守貞親して被仰下。依其忠國遠州の御判なさるへきにて。宮内少輔巨海退治。則參河堺引馬に兩手勢衆先手計さしつかはされ。義忠其十二月歸國。明る年浪人蜂起して。小夜の山口にして陸奥守堀越不慮に討死數輩。雖然所々合戦味方理運。されとも敵の殘黨等不休。義忠又進發。然る所に面々中あしくして。味方の凶事を互に悦ひなとして。はては各討死す。三ヶ年の間に矢部左衛門尉。肥後守泰盛。岡部左衛門尉三人病死す。是たゞにあらず。されは度々の合戦に利をうしなはれ義忠歸國。途中の凶事廿餘年にや。氏親遠州入國靜謐とはいへとも。隣國の凶徒等たゆることなし。三河國境舟方といふ

山に味方有。田原甲田彈正忠諏訪信濃守以下浪人衆催し。舟方の城うち落す。城守多末今川方又三郎討死す。敵この城をもつ。泰以時をうつさす。濱名の海渡海して。則うちおとし數輩討捕。則奥郡過半發向して懸川に歸城。如此十ヶ年。泰以補佐して泰能にわたし。暇申駿河に下り。府中のかたはらに閑居。されとも御用には遁れすとなん。濱松庄奉行今は飯尾善四郎乘連。爰に一兩日逗留。當庄のうち山崎よりいなさ細江をこかせ。濱名備中守館。一日連歌あり。水はれてそらやさつきのあまつき

本坂といふ越て。西郷宿所あないして。熊谷越後守館勝山。一日ありて連歌あり。

あふち咲くもゐをちりのふもとかな

八幡ちかき所 牧野四郎左衛門尉宿所本野か原といふ野を分ていたり。一日連歌あり。

ゆく袖を草葉のたけの夏野哉

此國折節俄に鉾楯する事ありて。矢作八橋を  
はえわたらす。舟にて同國水野和泉守館荊屋  
に一宿。尾張知多郡常滑水野喜三郎宿所一日。  
野間といふ所義朝の廟あり。こゝより伊勢大  
湊へわたり。山田につき侍り。則參宮す。かね  
て立願の事ありて。當宮にをいて千句。宗頌法  
師さそひくたし侍り。七月下旬下着。やかて八  
月四日より始め。毎日二百韻兩吟。五日にはて  
ぬ。此千句の事。今の管領高國江州より御入洛  
の刻。御法樂として。立願申せし事也。紫野大  
德寺眞珠庵のかたはらにありし時御芳恩。か  
つは其謝とも申へきにや。第一之御發句京都  
より申下す。

朝日影四方にはへるかすみかな  
梅さきてあらしもなひく柳かな

高國  
宗長

山田の各馳走。目をおとろかしつ。宗頌は此つ  
いて尾張へ越。長阿は北地の旅行やう／＼雪

になるへくおとろかれて。この十六日におち  
ひ立ぬ。雲津川阿野の津のあなた。當國牟楯の  
堺にて。里のかよひも絶たるやう也。あなたは  
關民部大輔。今は隱遁何似齋。こなたは多氣よ  
り宮原七郎兵衛尉盛孝。あの、津の八幡まで  
いひあはせ。自身平尾の一宿まで山田を立。平  
尾の一宿のあした夜をこめて出。辰の刻より  
雨しきりにふりて。みわたりの舟渡り鹽たか  
くみち。風にあひて雲津川又洪水。乗物人おほ  
くそへられをくりとけらる。此津十餘年以  
來荒野となりて。四五千軒の家堂塔跡のみ。淺  
茅蓬か杣誠に鶏犬はみえす。鳴鴉たに稀なり。  
折ふし雨風たにおそろし。をくりの人は皆か  
へり。むかへの人は來たりあはすして。途をう  
しなひ方をたかへたゝすみ侍る程に。有知人  
きゝつけて。このあたりのあしかるを頼。窪田  
といふ所二里をくりとけつ。其夜中に關よ

りのむかへ。乗物以下具してたつね來りぬ。けふの無爲こそ。ふしきにおほえ侍れ。この所の一宿おり句なとして。その夜のね覺に。

思ひたつ老こそうらみ鈴鹿山行すゑいかならむとすらんあのことく江州きのふよりみちふたかるとなり。何似齋の館龜山程三里はかり山に入て。三町へたてゝ。新福寺といふ律院のうち成就院旅宿。奇麗の掃除目をおとろかし侍り。十日餘り休息。毎日の懇に中々心いたくそ侍りし。連歌一座あり。

八十の瀬のみながみたかし秋の聲

鈴鹿川八十瀬の水上といふはかりなり。

なかれも霧のおくふかきやま

何似

會席の體。歴々息三人。十七十三十一。秋の野の花のやうにて出立し。又こゝにも鉾楯軍の用意隙もなし。江州蒲生の城主護より退治。日數になりてこゝかしこ浪人あつまり。後詰の

合戦度々と聞ゆ。道のやすからぬをあないせられしかと。なにならぬかよひはかりは有。乗物等のをくりはかたきにより。又山田に立かへりなんとすれば。雨風やます。逗留して。

梓弓をしてはる雨けふもふるあすもふるとて宿や定めん爾あらはこのまゝ逗留にもなと。誹偕の筆のすさひ。硯のあたりにちりほひけるを。人何似へ傳へけるにや。

いかて君やとり定んあつき弓をしてけふ降雨なかりせばいひをくられぬ。艶なるかへしなり。窪田の六太院より發句所望に。

すゝかやまいろくになるこゝろかな

この院の本尊觀音の心にや。越前へ人つかはすにも。これよりあないしりたるものを坂本までそへのほさる。阿野の津を退たる里。鹽屋のやうなる蓬ふきに。何似よりをくらる。又の日は宮原盛孝よりむかへの人を待て逗留。こ



の津の人々懇望にて。連歌あり。

かへるよなまつやしらなみ秋の海

此里もとの津還住のあらまし事なるへし。此濱のゆふへ立出て。渺々たる遠近伊勢尾張の海つらくまもなく見えわたされ。休らふほとに。爰かしこより若衆誘引。所につけたる酒肴笛鼓などもて來たりて。興に入しかは。かのはなも紅葉もなどの歌まで心に贈答して。

この夕はなも紅葉も有物をうらの笛屋の人の心に

夜に入て歸る。まことに浪をまくらの心地せしに。けふの若衆いづれありけむ。旅ねをとふらひやかてかへりしあした。いひつかはしつ。思はずも蘆のかりねのせゝの涙しき捨られし名残なしやは九月一日こゝをたちて。をの／＼もとの津のあたりまで酒もたせ。かたみに別おしみて。雲津川にいたりぬ。朝倉太郎左衛門教景の使の山伏たつねあひ。文ともみて。平尾の宿へとも

なひ。一宿のあしたに返事書て。

こし路にそ何そはありと恨つる名はけふかへる鈴鹿山かな盛孝この一宿を聞つけて。けふの送りをもせられしとなり。同二日に山田へかへりて。この程の旅の老屈を書しるし侍るものならし。

同月廿日あまり。内宮の建國寺にまかりて。西行谷とてかの上人の舊跡へ各誘引有て。五十鈴御裳濯のすゑをわたり。山田のあせのほそみち萩薄の霜かれを分さし入より。まことに心ほそけなり。山水をかけひにて。その世なから。の松のはしら。竹あめる垣のうち。坊に尼十餘人はかり。昏の衾麻のつゝり櫛のかほり。むかしをもみるやうにおほえて。ふと心にうかふことを。

聞しよりみるはあはれに世を厭ふ昔おほゆる住居かなしも松かきの柱にかきつけ歸り侍りし。誘引の人人發句所望に。

秋ふかし神路のおくの谷の聲

宗長  
建國寺

月はゆふへのみれのまつかせ

いづれも上人の舊歌の面影なるへし。

十月に。山田をたちて。多氣二日三日逗留。連歌一座。

神な月もみちをふける軒端かな

泊瀬に詣て。一日二日侍りしに。はやく京にて知人來りて。終日物語してかへられしに。申つかはし侍りし。

はつせ山入相の鐘を聞までにむかしを今のけふも忘れし多武峯より祭禮見物の誘引につきて登山して。誠に聞しより見るは目おとろかれ侍り。宿坊安養院連歌あり。發句。

霜をあやこすゑをたむ錦かな

今春七郎夜ふけて來り。童形さそひ出て酒。夜あけかたになりぬ。翌日橘寺一見して。大和の府八木に一宿。あくる日白土法眼澄英の坊に

一宿。又明る日南都千手院澄英同道。連歌あり。發句。

冬やいつわかくさ山の春日かな

一日ありて慈尊院。十日あまり宿坊。連歌發句。

今朝ちるやあらしの花の雪の庭

蓮華院にして。

もしれちれあらしの雪の花もみち

大佛に參れり。それより山城薪へまかりのほる。門をくりかれこれさきにたちて。般若坂にまたる。折食籠數しらす。坂の松の本に。落葉を焼て酒あたゝめなとして。興に入侍りし。宿坊にして出立の數盃。坂にて乗物よりおり侍るとて。腰をつき損し。則。

たのみこし杖つきながら耶等は續かね老の武さところひぬさて薪酬恩庵にはふくつきぬ。紹崇として尺八吹僧。もとは東山靈山の時宗五條東洞院

常福寺紫野大仙院。四五年もありて。この比は和泉の堺夢庵尺八の弟子。旦那にて活計。伊勢參宮とて。長阿折ふし山田に逗留。尋來て十日あまり。長阿は山城薪へのほりしなり。晝夜もてなし共とぞ聞えし。いかゝありけむ二見の浦の浪にしつみけるとつたへ聞て。

無常心おこす一曲いかにして吹しつみけむあなうみのよや南都にてつたへ聞しことなるへし。山田へ申つかはし侍りし。此尺八物にもかへて。跡のこつとふらはむとて。妹の尼時宗度々いへとも。つゐにのほせず。さらはあすか川かはる瀬をものほせずとなん。酬恩庵きこしめし及はれて。三條西殿逍遙院殿より。

折にあふ薪は有ともはる近き宮古の花の名をもとへかし御返しとは侍らねと。山家の冬を申侍りし。

つれくらくとくらす薪の山里の名をのみたのむ雪のうかな。宗傾法師津の國へくたりのほりにも無音。か

の清胤僧都のむかし生田の森の初あらし思ひ出られ。申つかはし侍し。

君すまはとはまし物を山城の岩田の森の雪の下かせ酬恩庵にして。末期のねかひ。さりとともことし歳暮にやと。心の祝ひはかりに。

れかはくはことしの暮の薪きる峯の雪よりさきに消なん  
明る正月酬恩庵にはへりしに。逍遙院殿御詠をくり給ひし五首。

長閑にて更によはひものひぬへし塵の外なる春をむかへて  
いとはやも谷の戸出よ待里の一かたならぬはるのうくひす  
富士の雪清見か月を心にてすむらん山の春を床しき  
山人のおへる名にある薪をは花のかけにも行てとは、や  
我もいま炭よりさむき心にてのりの薪もひろひ侘ぬる

右卒述卑懷呈柴屋老人禪旅下

逍遙子

大永癸未上毛後二日

贈答申はへり。

なをつから思ふはる哉長閑にて塵の外にはわくみなられとおとろかす部の春のつてなくはいさしら雪の谷のうくひす  
いつこなか思ひやらまし目の前の春の大ひえうちの渡りに

やすむへきかけをそかれて見せつらむ薪の峯も花し咲はと  
朝夕のみのりの薪いくとせもよはひとともに君そひろはん  
京よりなにかと文のありしに。老懷を申をく  
りし。

老つゝもおもふことゝはけふあすの今はの外の慰めそなき  
おなし年正月にせんへい。もちゐ。かゝみをゝ  
くりしに。

我よはひとりもみまうき朝なく此鏡にはうちそふまるゝ  
木津より所望に。

やまかすむ雪けの水かいつみ川  
南都より所望に。

そめかくるさほかせいくかはるのいろ  
うくひすのいにとよらるゝやなき哉

樋口油小路護國寺力重とて。久朋友あり。閑居  
をとふらひ來りて。十夜にあまり枕をならへ  
しに。いかにもいきたなき人にて。時衆の時を  
もわかさりしに。

數ふれば七つも六つもいつとてか時しらぬ時衆山はふしれ

宇治白川別所辻坊より。年始の音信とて。柳一  
荷。梅漬桶二。青梅漬おけなとにそへて。  
はる雨の露も忘れぬ心さしいと細撫の柳とや見む  
かへしに扇なとそへて。

淺みとり柳に梅の二桶はふたあけあへすもてはやす哉  
長阿眞子承葩喝食つねに聞及はれて。やしな  
ひにすへきなと。たひ／＼の文。つゝの中より  
見いたして。そのうらを。金剛經承葩十三の幼  
少にしてかゝせて。薪心傳庵に侍りし。此庵は  
能勢因幡守後室慈香禪尼結ひをかるゝ庵な  
り。其經をみて奥の端に書付侍りし。

露けさはた、吹風にやしなひのはゝその色のあさからぬ跡  
けさむにも入らぬよしおもひをくなと。い。ま

はの時までもたひ／＼ありしとなり。因幡守

片川城主

頼則。年來異他の芳恩遠行追善のため。東山安  
養寺にして。千句のとふらひし侍りし。頼則歌  
連歌なをさりの數奇ならさりし故なり。逍遙



院殿申たて。宵栢法師宗碩法師寺町波々加部  
河原林對馬守など上洛。まことに珍重の事な  
りし。千句第十。

月にあはれあらましかはも夢路哉

慈香禪尼この事なとをよろこひて。承葩をや  
しなひにとやおもひよられ侍りけむ。

三月薪より出京の次に。宇治白川の別所辻坊  
にして。

はるやはなつれをわすれぬはつ櫻

さわらひの巻のよせにや。むかひの寺なとこ  
の巻にあり。京にてある宿所にして。

うつせみのうすはなさくらさくよ哉

山科より所望に。

いく岩椶音羽のたきつはるのみつ

丹後より所望に。

まつたてるかすみになみやよさのうみ

閏三月に。

あひにあひぬうるふのやよひ花の春

人の年忌のとふらひに。

花にてふふりにし玉かはるのかせ

三井寺より所望に。

聲をせきたれ杉村のほとゝきす

紫野大徳寺山門造營の事。門徒老僧祖心禪師。  
越前一乗深嶽末期に。京都へ乗物むかへにて。  
急き罷下るへきよしありて。三月十五日に一  
乗に下差。朝倉太郎左衛門教景。造營の事申届  
へきよし有て。申届侍り。ほともなくて祖心遠  
行後罷上。則駿河へ下りて翌年罷上りしに。眞  
珠庵より。此造營の事大功成かたし。先うちを  
くへき書狀有て。長阿奉加の用意も。薪妙勝寺  
惣門修造の出錢五十貫文。山門の事は無覺悟  
の處に。眞珠庵宿所へ入來有て。寺の衆議如此  
し。越前へ罷下奉加の事再興すへきよし有し。  
教景にも。此修造うちをかるゝ事さたしつれ  
は。いかゝといなひつれと。猶衆議のさりかた

きにより罷下り。教景五萬疋。其外法眷二萬疋  
餘申調つれど。今に京着せすとなむ。眞珠庵用  
捨。今はけにもとこそ覺え侍れ。長阿奉加。何  
ならぬ物沾却。當年迄凡三萬疋におよひ侍り。  
寺木四郎左衛門とて京にありしか在國。年來  
異他知吾により。是は長阿奉加の合力とて。去  
年夏四月まで三萬疋寺納。修功あらは猶寺納  
申へきなと、書狀あり。越前逗留中發句。

行と來と木すゑやあふち峯の雲

雨かほらはなたちはなの五月かな

時雨軒とて。庭の石木無比類所にて。

夕たちやまかせしみつの岩小菅

おもかけはふみわけかたき一葉かな

宗祇年忌に。

まつむしやよりきかもとの秋のこぶ

萩すゝきふかぬ野分のあしたかな

八月十四日。

月夜いかにてらんあすの夜くまもなし

平泉寺より所望に。

霜をきてしらやまの名也月の秋

越前よりのほり侍りし時。江州觀音寺にして。

あさきりの外山は八重のはれまかな

みしやみなこすゑうつろふ朝戸かな

鹿の音や尾上のあらし夕月夜

志賀にて。

秋の海はなさくなみのちくさかな

薩摩の坊の津の商人京にて興行に。

磯の上のちしほもあきのゆふへ哉

四條の坊門町にて。

よるはしくれ朝戸は霜の板屋かな

有馬の湯治のついでに。兒屋寺にて。

しなかとりあな野をゆきのあした哉

有明やそらに霜かれのはなすゝき

城山能勢源五郎千句に。

くれてなをのとけき年のひかり哉

越年は薪酬恩庵傍捨蜜下。爐邊六七人あつま

りて。田樂の鹽曾のついて俳諧たひくゝに。

あてのしるたまかきりなるあらめ哉

かははしはすのはるのはつよめ

談

藤原うちかもんはふちなみ

馬鞍はきんふくりんの源九郎

引つれつゝもねはりこそすれ

津の國のゆの山ももた枕にて

高野ひしりのやとをこふ聲

夏の夜のやふれかや堂たち出て

はんにやし坂の大乞食とも

こゝろみなせちへん坊や文殊院

風情もつきてひきやいれなん

人に月おもしろかられふけにけり

兒が女かれてのあかつき

まへうしろさくる手に月の有明に

主も従者もつえをこそつけ

もろともにこしなれ歌をよみつれて

なんほうこされたはなにたはふれ

お茶の水梅かえこそにくみよせて

小聖道みなはなみをとする

ちこ小袖やなきさくらをこきませて

にやけのあたりはたゞ菊のはな

あき風の吹上にほふとほそかみ

しりぬかしたるすはりわか俗

もてなしのはらの音こそ聞えけれ

一帖貳帖はりますういら

ひきてものあふきの風になひかせて

かすみのころもすそはぬれけり

なはしろをおひたてられて歸る鷹

五條あたりになてゐるあまこせ

たか後家のうかれ君とはなりぬらん

おなし年こそ三人はあれ

まおとこを二かたしむる腹のうち

おもしろしけにもあきかせそふく

立ならへたなはたおれるあし拍手

おもきかたにはもたれこそせれ

そも戀よちんにても誰よとはれん

人のなさけやあなにあるらん

女ふみかしこゝにかきすてゝ

たのむ若俗あまりつれなや

ひつくんでさしもいれはやちかへはや

不動も戀にこからかす身か

我よりもせいたか若衆まちわひて

神の代よりもすきのすんきり

ちはやふる三輪山もとの茶屋坊主

ふしつころひつむかしこふらし

とやかくとすれともおへぬ物おもひ

かすみこまかに引まはしけり

うつくしなたゝ丸貌のほゝほまゆ

馬にのりたる人丸をみよ

しもにたつ中間おとこひとりにて

をひつかんゝとやはしるらん

高野ひしりのあとのやりもち

高野ひしりのさきのひめこせ

愚句はをひつかむといふ心付。まさり侍らんや。

碁盤のうへにはるは來にけり

うくひすのすこもりといふつくり物

朝かすみすみゝまては立いらて

宗鑑  
宗長

宗鑑  
宗長

是も愚句つけまさりはへらんかし。

大永四年正月一日。薪酬恩庵。早朝に遁世者とて。門外より案内するを聞て。

新玉の初もとひきり一年を小僧とや云ん小沙彌とやいはん  
試筆於酬恩庵院主を奉賀一首

七十に七とせのけふを加ふれば君かちとせの春はるかなり  
報答柴屋老人年頭試筆和歌一首。 紹鳳

行末も猶はゝの春の日に君かよはひをかゝみにもみよ

同正月十日あまりの夜半はかりに。夢中に玉の出行を。我玉にやとおもひゆめさめて。

見かきりて我身出行むくひなん錢の御玉の入かはり給へ

此錢のみたまやかて入かはれかしと。念し入

はへるなるへし。中御門殿より。

さむからぬ都の春に薪をはひろひ捨こよまさとのとも

同つゝみ紙に。心中難述。以一首呈萬詞千八句餘。老後再會。念願難盡短筆乎。贈答由はへり。

長閑なる都のうちに薪をはひろひを捨んはるの山人



おなし正月に。

としくのはるや立かへるあさかすみ

南都より所望に。

いつくよりわが草山の春日かな

八幡梅坊にて一折の興行に。

むめのはなうつりしそてか朝かすみ

夜に入て兒若衆餘多酒宴。老嶋とて罷入侍り。

たひく使ありしと。平臥なからあまり無下

のことゝおもひ。柳のちいさき枝につけて出

しはへり。

思ひやれ柳の糸のみたれこゑむかしはよそに聞し春かは

やかて酒の席詠せられしこゑせしなり。

京にて。

あつさ弓おしなへ春のひかりかな

三井寺勝藏坊京に出て興行に。かの寺にてけ

に山のはは出うかりけりのよせにや。

細川高國  
管領一日千句に。

なひく世は雨のとかなる草葉かな

三人千句。逍遙院殿月村宗長江州種村中務丞  
於月村齋張行。宗廟

うくひすやわのかねふはな笠やとり

豊雅樂頭藥をくられしつゝみ紙に。

君も我も老す死すの藥にて又あひみんも心成けり

かへし。

これやこの遠くもとめし生藥今も老せぬ君つたへけん

の中へ下侍る折ふしの事なり。中御門殿より。

宣風法名  
乗光。

老の友まつそとしらはかへりこよ田子の浦波立は行とも

御返し。

君により田子の浦はに老の波思ひしたゝぬ日もそながらん

朝倉太郎左衛門教景宿所の庭に。鷹の巢を四

とせ五とせかけさせて。去年はしめて巢立せ。

大小二ツ。誠にふしきの事なるへし。これにつ

きて。鷹の記建仁東堂一花。又詩歌なともとり

とり侍りしに。

また聞すとかへる山の峯ならて巢たゝせそむる庭の松かえ

尾張の國知人さそふ文たひく有。しはし逗留あるやうになとありしに。卯月十一日京をたちてひんかしの旅行。先都の南は八幡ちかき薪酬恩庵。一休和尚遷化の地あり。まかり申の焼香のために下り侍り。京の知音の人々。上は下京まで。下は法勝寺深草のあたりまで。かたみにわかれおしみて立わかるゝに。

なからへは又ものほらん都人もとなくねかふことしある老されたる歌の結句俳諧一咲。都人とは。今をくりて別るゝ人々の事なるへし。伏見津田備前入道かねて約あり。立よりて。薪の山材木。この津より紫野へ車力の事奉加申調へ。いまた日もたかく。いそくに付て。宇治の川舟さしのほらんといふに。發句所望に。

くれたけのなつ冬いづれよゝのかけ

此所祝はかりなり。此津より宇治橋までさしのはさするに。船の間美豆の御牧。八幡山木津

川なかれあひて。水ひろく湖水のことし。京よりいさなはれくる人々。舟はたをたゞきて。尺八笛吹ならし。宇治の川瀬の水車なにとうき世をめくるなど。このころはやるこつた興に乘し侍り。岸の卯花汀の杜若さきあひて。おもしろかりしなり。いくせともなきはやせ。のほりわつらふ綱手のふることうち吟して。船さしよせおるゝ。みな心ならず。其夜は白川別所辻坊一宿。曉水鶏のうちたゞくを。

谷ふかみくゐなのめくる外山かな

俳諧にそ侍る。當國守護所東雲軒。薪のをくりなといひつけらるゝ間に酒あり。一折のゝそみありしかと。いそくにより發句。

ほとゝきす月や有明のあさ日山

のこりおほくそ侍りし。酬恩庵一夜。山の材木申調へ。十三日に影前焼香。其日。三井寺勝藏坊とてわかき法師。此春京へ出て連歌興行あ

りしなり。此法師出あはれて。大津の濱旅宿の誘引夜に入て上光院。相州宮根別當童形。二とせ三とせ住院。このはる得度。兵部卿。盃出て夜ふけぬ。あくるあした院主一折の興行。さり所なくて。

ほとゝきす山のぬのあかぬはつねかな

結ふ手のしづくにゝこるこゝろのよせはかりなるへし。脇。

いはほもしろしきけるうのはな

兵部卿

是も巖にも咲るなどのよせにや。宗碩一兩輩。昨日坂本祭禮見にありと聞て。曉人つかはして今朝きたりあひ。興ありし事なり。一折果てさかつきのついて。此寺の老僧八十の坂ちかつく。東圓坊尺八。今夜兵部卿尺八とり出られて。平調一手二手はかり吹すてられし。身にしみてぞ覺し。俊成八十におほくあまりて。百首歌奉られし中に。蓬かもとの松虫の音もさな

からと覺ゆ。夜明かたに旅宿大津へ歸り侍りし。十五日この亭主宗珪。さりとてはとて頓に興行。いなひかたくて。

よるなみやはなの山越なつの海

麓の波更に花とそみえしはかりなり。連歌半に。本須大和守。木の濱のあたり宿所より迎舟さし來りて。まことに心あはたしく漕出侍るに。このはる京にて勝藏坊の興行に。

いつ出てかすむ山のは夕月夜

發句おもひ出はへりて。此寺にて。

月をなとまたれのみすと思ひけんげに山端は出うかりけり千載集の歌にや。まことに舟も出て覺え侍りしなり。夜に入て南の風吹。片時はかりにやはしり渡りぬ。今夜十五夜の月。おほろけならぬ光かゝみの山より立のほり。誠に鏡をかけたるやうにこそ。一日ありて又の日の連歌に。

くゑなゝくむら苗はこふ朝戸哉

河井駿河守の迎のゝり物。もる山まで來り。か

かみの山をこえて。翌日連歌あり。

卯のはなやみるくふれる木々の雪

観音寺より種村中務丞かれこれ下られ。駿河守息の童形同五郎連衆。おもしろく老をわすれぬ。廿二日たひく抑留ありしかと罷出ぬ。

鈴鹿山の坂の下まで乗物。以下同行衆馬。其程ゐのはな土山内の白川外の白河。かねてやつたへをかれけむ。酒肴山中の興忘れかたし。所所をくりの人出て。關々とかむるもなし。坂の下につきぬ。龜山より又乗物たふ。今日の老屈休息。其夜は坂の下の旅宿。此山のむかし齋宮御くたりの頓宮あしのかり庵などおもひいつる。ねさめに時鳥しきりになく。

鈴鹿山しのに鳴なる時鳥みやこにいかにか聞とすらむ

しのに鳴つるは。すゝかのよせにや。又かの上人この山を越とて。

鈴鹿山うき世をよそにふり捨ていかななり行我身なるらん

うらやみ侍るはかりに。

すゝか山ふり捨て身の悲きは老かゝまれるこしをかゝれてこしをかゝれて俳諧比興々々。又川をわたる

とて。

けふ渡る影はつかしき鈴鹿川八十瀬の涙を老のしはにて其日のひるほとはかりに龜山につきぬ。旅宿は野村大炊介。やかて風呂あり。何似齋きのふ鷺山正法寺とて山庄あり。紫野の門徒。程五十町はかり。此寺へ作善の事につきてのほりあり。廿二日早朝乗物たふ。よそよりはされふからぬとみえし。入きて行は折ふし雨氣の空。四五朶の山雨よそはへるけしき。巖たかく苦ふかく。松杉いく村ともなし。凡寺のさま高雄山神護寺にも似たり。まつさし入の寺大龍寺。谷行水めぐりてはしあり。梅尾にもおほゆ。仙家ともいふへく。やまことにをのゝえもくたしつへし。正法寺長老拜顔。何似齋點心以下盃



有沈醉。雨にきはひて龜山に歸りぬ。翌朔日いとよくはれて。何似齋の館より招請。朝飯より晩頭におよひかへり侍りしなり。又連歌興行發句。おとゝしの秋京へ登りしついでに。一折の事はへりし。

八十の瀬の水上天かし秋のこゑ

此たひは中々と。たひ／＼いなひ侍りしかは。

とるたひももつは高し八重櫓

ゆふかけてなげやまほとゝきす

一 閑  
宗 長

一日をきて又ひと折。

うへてこなた幾ことし生の園の竹

又二日三日ありて正法寺齋あり。前夕より一宿。同道已下風呂。又の日鷺の巢山見にとて乗物何似齋誘引。莓の細道なめらかにて。うへよりみなきる水。谷廣くひたして入たる海のことし。たま／＼手をかくる岩もあしはとまらす。むかし山寺ありけるとなむ。鉾楯の用意にや。をのつからの巖を楯。矢倉門は石を棟柱。

四方五十町。谷めぐりてみゆ。凡數萬軍兵とりむかへるとも。おそるへくもみえず。其日正法寺のならひ興禪寺。是は東福寺門徒住持。和漢張行あり。

わしのすむ山とやとをきほとゝきす

人如五月涼

一折のうちより盃出て。沙喝數盃になりて。歸路暮におよひき。又今月廿五日月次法樂とて催しに。慈恩寺といふにて。

五月雨にますけの水のすゑ葉哉

又廿九日新福寺にて。

かはる香ははなたちはなの五月かな

是は四郎種盛の代。

六月二日。於關何似齋一續十五首。息次郎盛祥明題集の内書ぬかれて當座。又盃いて、數獻。夜ふけぬ。人に扇をつかはし侍り。なにゝても書つけてと所望に。

誰をかも友とはいはむなからへは君と我とし高砂のまつ

扇の繪松ありて。七十八七十七。

龜山旅宿。大炊介。此はるより鴈をひとつ

かこに入て。とりかはるへきためとて有。不便

かなしさのあまりに旅宿の小庭に水を桶にた

たへせり。ませ。色々してなつけにける。ま

かり立あした。この歌を柱にかきつけをきぬ。

かりふしも露かけすつなさそひこん秋をたのむの友に逢迄

何似齋息關入郎正祥。有夜おもひかけ侍らぬ

に旅宿をとふらはれし朝に申をくりし。

人よりも老の思んことをしそけさは亂てこゝるともなき

返し。

正祥

心にもあらで亂て思ふてふ人のことのほくまやならん

何似齋にて。五月雨暮しかたかりしに。各心う

つくしく。日ことに來りてなくさめおほく。面

白かりし中に。神戶右京進盛長物かたりのつ

いてに。この尺八關阿彌にやとてみせられし。

うつくしきよし申つれば。さらはたふへきよ

しいなひ及はす。文してよろこひ侍るとて。

曉の友をそえたるいそのかみふりにし老のかひはなけれと

人の許より。篠粽せんへい二色送られしに。

心さしみやまのしけき篠粽數は千秋千へいにして

杉原伊賀入道宗伊百首歌。龜山にて自筆一卷。

こゝかしこ虫はみて有をみせられ侍り。所望

してうつして。本をば今の伊賀守孝盛のほせ

侍り。例の瓦礫。

今も世はさもこあらめいその上ふる言のはや類なからん

龜山は。慈恩寺。新福寺。阿彌陀寺。長福寺等四

箇寺。各律院七堂みえたり。をの／＼宿所々々

東西市あり。既に尾張の國へとおもひ立はへ

る折ふし。駿河より使をし返して二たひ文と

もあり。清宮内卿法印申合同道して罷下るへ

きのよしあれば。さりかたくて。龜山より京へ

人度々のほせ。關何似齋より申調られ。むかへ

の使傳馬五六千水口のとまり鈴鹿山坂下とま

り申つけられ。六月五日龜山下宿。こゝのもて  
なしわつらひいひつくしかたし。一日休息。七  
日に。森隼人佐送にとて。伊勢尾張のあはひの  
舟わたり。何似齋のをくりの人に。舟をとゝめ  
て申をくりはへる。

靜なゝ浪のあはひの海つらなかへりみるゝ行空そなき

龜山五十日にをよひ逗留。時々刻々何似齋の  
芳志難謝のあまりなるへし。六月七日尾張知

多郡大野の旅宿。八日に參河荊屋といふ所水

野和泉守宿所一宿。同國土羅一向堂一日逗留。

十日に今橋牧野田三二宿。十一日遠江吉美。十

二日引馬飯尾善四郎一宿。十三日懸川一宿逗

留。十五日駿河藤枝鬼巖寺。十六日府中。折節

夕立して宇津の山に雨やとり。此茶屋むかし

よりの名物十たんと云。一抄子に十つゝ。か

ならすめらうなとにすくはせ興して。夜に入

て着府。一兩日休息。龍王殿對面。孟三獻。匠作

氏親子息

氏親

の御藥等の事逐日驗氣の事。とかくして清見  
か關のあらましに。又京より同道の人あひと  
もなひ侍る事を。先あないせんとて。興津藤兵  
衛尉正信宿所にいたり。七月廿七日。此磯の夕  
やみにまかり過るとて。

浪の音夕やみふけて岩つたふ磯まのみちをてらすいさり火

廿八日。京よりの人々の爲に。此いそにて一續

三十首。題三條前内府御在國中うけて張行し

侍り。同御詠卷頭小原親高。磯よりいひをくら

れし。

まつらむと駒のあし並よる出て清見か關にひるねをそする

返し。

契りしも忘れにけりな老の浪朝みつしほのひるねするとて

廿九日。宗祇故人先年當國下向おもひ出て。折

にあひ侍れは。としわすれの一折張行。

おもひいつるそてや關守月となみ

此こゝろは。先年此寺に誘引して。關にて一折  
の發句。

月を行袖にせきもれきよみかた

おもひ出るといふ愚句なるへし。新古今集に。

みし人の面影とめよ清見瀉袖にせきもる波の通路

この歌本歌にや。宗祇此寺一宿。ことし五十八年  
に成ぬ。一折のついて。寄月懷舊といふ題。

愚歌。

月はしるつこの磯なれて七十に三四までのあきのしほ風

酒長寺

山ノ上説アリ

此寺中に瑞雲庵。塔より上に有。杖にて腰をか  
かへさせ。まかりあかりて。日暮し興に乗する  
餘り。俳諧に。

みてもく猶又みても浪のうへの雲を片しくあかつきの寺

雲波とて京の人。此寺性海庵のかたはら。京に  
ちきりて草庵をむすひ。十とせあまりにや。今  
はなき人にて。荒しはてたるをみて。

結ひなく清見が磯の草の庵あらすやなみのかたみなるらん  
日比止端初月也

正廣先年下向。又此磯に誘引して。三保か崎あ  
たりまで舟をこかせて。かへるさに。

月ながら幾世の波を清見瀉よせてもあらず關のあらかき

關のあらかきの柱にかきつけてをかれしな

り。今はその柱たに朽はてぬれば。

かきつけし柱たにこそあらかきの朽てのこらぬ浪の言のは

高氏所重

關山也

此寺回祿の後は。等持院殿御影堂關國さへ。塵  
のかたはらにおはしますを拜して。深く悲涙  
して。

清見瀉關のあらかきよる浪を昔にかへす國をさかへん

なとよみてかへられて後。此柱を短冊宮にさ

義忠義長實寺毀柱山

す程所望。やかて長寶寺殿とりよせつかはさ  
れしに。おなしく御歌をそへられてとありし  
に。

たつれつと都にかたれ清見瀉これそしるしの關のあらかき

此歌を箱のふたに蒔繪にさせて自愛ありし。

島山修理大夫

いまは能登國の守護にあるとなむ。

藤増とて十三四の童形。手跡まことの器量と

みゆ。父市川宿所にて。八朔の翌日一折興行。

執筆藤増。

はやしそめて幾世のはな萩のつゆ



此こゝろは。この童手跡器量進退のしかるへきを褒美して。柚土のはやしはしめのさの萩と。萬葉とやらん歌にや。萩はもとあらにすくに生立たるを。柚形のやうによめるにや。府中に歸りて。京より同道の人の爲に興行。

さそはれはみやこのふしの秋の雪

心は。此山さそはるゝものならは。都のふしの秋の雪ならんとはかりなり。八月中旬ころまで。子規夜晝となく鳴ければ。齋非時にもたへかたくて。

聞たひに胸わるければ時鳥へとゝきすとそいふへかりけれ  
九月始に。こゝもと四五町罷出て。かへるさに落馬して。半身いたみ。右の手かなはすして。  
いかにせん物かきすさふ手はなきて箸とると。尻のこふ事  
京よりの人々。おなしく薪酬恩庵の僧達。かへのほられ侍る。ことつてに。

哀なるわかことつてや山城のなきゝこるへき七十のはて  
酬恩庵にして終焉の事を。申をくり侍る心な

るへし。神無月するゑつかた。興津にて鹽湯の湯治のついでに。此城の庭の山水を發句にと。所望ありしに。

みるたひにめかれぬ庭の草木かな

今年の暮までなにかとあれと。もらしつ。

大永五年正月はしめに。龍王殿發句にて獨吟。

氏神靈名  
雪のうちの梅咲庭のあらしかな

宗長

はつ子の日とやまつのうくひす

あら玉のとしのいくはるかすむらん

伊勢のあのゝつより所望に。

あまなふれはるやあこきのうらの松

甲斐の國より。人の所望に。

かすみけりはるやあさみつしほのやま

河邊の宿所にして。

すゑやみな川かみすめるはるのみつ

有注

興津よこやまの城にて。清見か關近きところにて。

はるのくもよこやましるし浪のうへ

三條殿御方御月次に。  
寶徳公也氏親嫡子也御方トハ公兄卿ノ事也三條殿御子

ほととぎすまことをけふははつれ哉

河原ちかき所にて。

夕すゝみ身も日もさむし河原風

つれ／＼のあまりに書つらねて。京のしる人

のかたへのほせける。<sup>歌イ</sup>

みな月の あつさをあらふ けふの雨 庭の池みつ

はちすのは 露はしら玉 かす／＼の うつつうへなく

木も草も まかきの竹も わかえつゝ こゝろよけなる

すゑはにも 老をのはへて とり／＼に みるはことなる

宿ながら おもふことゝは めしおあし にこり九くんも

まれ／＼に さすかに人の いていりは 絶るひもなく

みえくれと なにもてこれは もてなさず むねのみすみて

つれ／＼と 御茶をたにと いふばかり むかしかたりの

老のとも かたれふりして はて／＼は 立さるをさへ

しらさりき こゝをしめなく 我庵は するかのこふの

かたはらに 竹あみかくる 窓こしの ふしのけふりは

蚊遣火の 夕顔しろき かきつゝき 小家かちなる

あたりにて 市女あき人 さりあへす な候いも候

なすひ候 白ふり候と こゑ／＼に 門をとわれと

いつとなく 我今日明日の あすか川 かはるへき瀬も

たえぬれは みゝにのみふれ すこきなつ哉

我等田舎の住居。かやうにかきつけ侍るにて。

御をしはかられ候へし。又京はいかゝ候つら

ん。田舎此頃大雨ふりくらし。いつくかしらさ

し出へくもなくて。隣のかよひもたえ侍りし

に。

いつくもる木柴炭たえ茶湯たえ味噌鹽しらぬ雨のつれ／＼

時鳥さへ。文月于蘭盆かけて。耳のまもなく鳴

は。十三日に。

あすはこん過去聖靈に立かはれまつらんしての山時鳥

七月廿九日宗祇年忌に。發句。

のこしつる夜やはわするゝ秋の月

朝かほにさけいにしへの夢

又。

ひとりして思ふかひなき營みに君をそけふは戀くらしぬる

此連歌の懷紙にそへて。宗傾かたへ申のほせ

侍る。

豊雅樂頭統秋一回忌に。

宗長

氏親法名 紹喜

こそこのけふ月日書つる一筆のこれをかきりとおもひける哉  
いつかみん都の風のつてことに戀しゆかしのうつ山ふみ  
玉ゆらもかゝるとやいはん末の露はかなの萩のものと雫や  
こひしさも限ありけりなれくてなきか多もあるか中にも  
思ひたにたゆるまも哉秋の露さえしと聞てひる世なければ

たゝあらましのふしの白雪

かりそめも惜みしひなの名残こそかたみに長き別なりけれ  
もる共に老すしなすの言のはは常ならぬ世のすさひとそ思  
數ふれば一なととも先たちてこのかみにさへなる世なり覺  
はかなしやしらへの道の類なく聞えあけゝん名こそ高けれ  
豊雅樂頭統秋。京に有ても田舎にありても。片  
時おもはすといふ日もなく。かたみに文のか  
よひ八十に近きまで絶す。去年秋京へ文のほ  
せ侍りしに。此月のけふ十九日いまはの折ふ  
し此返事。奇縁淺からぬことなとかきて。明る  
廿日に身まかり侍るとなん。抑此統秋は。我道  
の長者として。天子の御師範に参り。そのしら  
へ雲井をひゝかせ。又大和歌の千首をつらね  
叡進。所々の當座の二首三首の歌まで其艶なる

名をえ。物ことになさけふかし。されは我等に

いたるまであさからさりけんかし。京都なら

はかのとふらひの歌勸進して今日の跡をもと

ひ侍らん。又心おなしくする人もおほかるへ

し。逍遙院殿三條西殿にしても。必今日の一續御興行。

おもひやり奉るのみ。さてこの曉のねさめに。

かのためを十首の歌につらねて。懷をのへ侍

る事しかならし。同三條内府御在國。此十首を

申請書加はへる。統秋一回忌に付て。追善の爲。

十首の詠歌加一覽。哀憐をもよほし候。仍愚詠

の事斟酌ながら申さるゝ事候間。瓦礫を述候。

を車のめくるやはへき去年の秋のけふの別れを思ひ出るに

いまはたゝ都の風のつてとても猶なをさりに聞やなすらん

咲萩のものと雫や末の露と消し名残ものこることのは

折々は我もなれきて唐衣はるいく秋の哀そふらん

面影はまつ立きえて笛竹のねのみ雲ぬに猶のこるらん

露深み草のかけにもうけひくや言のはことのけふの手向に

よしや今夢となりてもうつの山うつゝに残る面影も哉

秋の夜の長きやみちもまよはしなことはの玉の数の光に  
夢ならて今はいかてか水莖の跡や身にそふ形見ならまし  
のちせ山しゐて後とふ言の葉の色にや深き情みゆらん

去月三日尊札。今日十九日到來。致拜見先以  
本懷候。

一路次中無事御下着之由。尤珍重候。殊彼御驗  
氣之由。御祝着令察候。

一御約束之鴈皮之紙上給候。雖不始于今儀候。  
御芳情之至。難盡紙面候。畏入候。

一去月十五日不慮痢病煩。存命限今日候處。御  
札拜見。年來奇縁之純熟候哉。不可得之至  
候。哀致存命。今一度再會之念願計候。一向  
平臥候間。以他筆申入候。處存之外候。恐惶  
敬白。

八月十九日

統秋在判

柴屋尊答

如此返札。翌日廿日遠行。

統秋一同忌道遙院殿十首。十一月十二日下着。

書加奉るものなり。悼統秋朝臣和歌十首。以法  
花經題號置句首。

めのまへにきえぬ佛ものいは、たえず昔のことやかかはさむ  
うつ蟬のよの一ふしや笛竹の聲をしるてふ人もたえゆく  
ほけ經に契結へるかひ有てかならず長き闇をいつらん  
うちなすに花を催す調へをは手に任せてしつゝみとそしる  
れい人のなかに立出おり／＼も物にまきれぬ姿なりしな  
むつましとへたてぬ物にみつかきの久くなれし名残を思  
けふわかれあすはと頼む此世に名残は人に悲しからずや  
きみに傳へ人に教て笛竹のみちのきはめは只ひとりのみ  
やよやまてと計りたにも聞せはや老は後るゝ程あらし身に  
うつゝある物とはなにを思川みよや消行水のうたかた  
爲一周忌。自我偈を。御自筆にあそはされて下  
さる。御奥書云。

此偈者。一經所說之眼目。諸佛出世之本懷也。  
而今迎故雅樂頭統秋朝臣周忌辰。拭老淚染  
短筆。仰願幽靈增進佛果乃至法界平等利益。

大永五年八月廿日

桑門堯空

三條西殿

したふそよ月はつかの雲かくれ常にある空と思ふ物から



旅宿のきちかく萩萩をうへをきての秋。

心からくらへくるしき夕也はき萩うへて風と露とに

此萩をおりて人に。

てる月もよるの錦の萩が花おりはへけふや露もみるらん

去年の秋尋はなちしすゝむしにや。おなし庭  
になきけるを。

哀こそたつれはなちしそれがあらぬすゝきか本の鈴虫の聲  
五夜六夜鳴て。いつちかいにけむ。又まつ蟲の  
鳴侍ければ。

たうかはりおとらぬ物や是ならんすゝ虫のれに松虫のこゑ

長田四郎太郎親重。此年月病して。剩心たかひ  
のみありて。奉公にも及はす。然あれは給恩に  
もはなれて後。本心に立かへり。そのはつかし  
さおもひ出るにしたかひ。さし出る事もせず。  
されは又誰とり申かたもなくて月日をふるほ  
とに。窮困いふはかりなく。一振一腰身にかく  
るものまでも沽却し。あるはまつりはらへの  
祈の物につかはし。あるはけふあすのまかな

ひにして。飢寒の二字この宿のものともいふ  
へし。はて／＼は妻子をも縁々にはなちやり。  
此頃はひとりすみにてあかしくらす。舊借の  
返辨にもおよはねは。催促のせめつかひしき  
りにして。いかむともせず。思わひての事にや  
此月の十七日の夜。近き所の觀音に參下向し  
て水をのみ。繩の一尺なければにや。自在と  
いふかきのなはに頭を入て。桁にしめあかり  
てすへりくたり死するとなり。明る朝巳の刻。  
下女みつけ。あたり告げるとなり。如此のお  
もひいかはかりのことにや。五日さきよりい  
さゝかの朝暮をたちて。しか思ひとりけんこ  
とあはれ淺からす。すへて人は當座の口論に  
てさしもちかへ。戰場にして討死する事。侍の  
常のことなり。虎は死して皮をとゝめ。人は死  
て名をとゝむといふことあり。希代の事なる  
へし。彼とふらひのため。六字の名號を句のか

みにすへて。終に六字をさなからをきて。志を  
いふ所しかり。

なこりなく露の命のかけところ別るゝはては南無阿彌陀佛  
むへもこそ思ひ入せはとも角もかなはぬ果の南無阿彌陀佛  
あさ顔の露の命の秋をへて風をもまたす南無阿彌陀佛

みつせ川渡るみさほにかけゆかむみなれ衣の南無阿彌陀佛  
たらちれの心や又も立かへりあはれかくへき南無阿彌陀佛  
ふれはかくうき事をしもみつ聞つ命長さの南無阿彌陀佛

令用親官藤原加賀守

此文加賀守安元。予舊好のあまり。芳恩又いく  
はくそや。かくなからへてかゝる事にあひ侍  
る。返々遺恨に。

誰となきをちかた人の上にてもかゝるを聞は歎かさらめや  
又此七八九年の愚句に。

かくおもふとは人はしらしな  
たかうきも身にかふはかり悲きに

九月四日に。野分おそろしく吹出て。夜もすか  
ら老の心玉しるもなき様にて。明る朝の庭の

露を。

萩か花とふしかくふし老か身は野分せし夜のはなの朝露  
紫野山門再興奉加の爲に。なにならぬ物から。  
これかれ沾却し侍りしはてに。源氏物語を老  
の手なれしをはなちやるとて。

けふよりはなにゝかはらん飛鳥河此瀬をはての老の白波  
此本はなちやる人に。

見るたひに露をきそへよ徒然のなくさめ草の言のはことに  
萩を折てと人のいひをこする歌。

秋風の吹みたすらん系萩の心なき枝もおしみやはする  
かへし。

あき風はふきみたとすといと萩を折てといふや心なるらん  
旅宿の庭に。楨の一丈はかりなる。みちの程五  
里はかりなる所より堀よせて。

まきの葉はみやまの霧の朝戸哉

此連衆各一種一瓶。興に入し事なり。

端山がま興津彦九郎。清見か關より。かくなんとて書を

くられし。

清見かた明まほしき涙の上に月の關もる末の白雲

かへしとはなくて。

清見鴻關もる月のことのはのなかめをよするをちのしら波

此秋の九月の盡に。七旬有餘の長命なることをなけきて。七十八九月盡といふ事を。我と題して。

けふことの長月をしもさきたつる老よいかなる賤のなをた卷

此秋の御歌。内府淨空御方紹倍氏兼親高保悟

殊易。

淨空

くり返ししつのをた卷長月や幾たびけふにあはんとすらん

御方公兄

老らくのかくてふやとは長月やけふいかへり賤のなをた卷

紹倍

ちとせへんやそちは越んけふの秋くり返しし賤のなをた卷

氏兼

更にへん老かちとせの長月のけふのくるは惜まさりけり

親高

いくとせの長月のけふをさきたてゝ老せぬ宿のしら菊の花

保悟

もろともに老をそ契るけふことの長月も猶ゆくすゑの秋

殊易

老らくの猶行末も長月のけふにくれてもしつのをた卷

此御短冊。奥津彦九郎所望仕侍り。稽古の爲とて申送りし。やさしきあまりに。又書くはへはへり。

けふに暮て幾秋老の長月や行末も猶しつのをた卷

冬のはしめ。鴈を一文にそへてもてきたる。其

返事に。

音にのみ初かりかれの秋風のつはさなかはす神無月哉

匠作より。りんたうのしろく咲る一枝をみせ

られはるに。そへられたまふ歌。

あるか中にこの一枝のいかにして雪まつ花の色に咲らん

御返し。

數々にめやは移らん有か中にまれなる花はうとんけにして

下野國那須助太郎とて。出家して。草庵の庭を

一見とて立より。高野參詣（並男）なと語て。瓦礫一首

懇望。其故は愛着せし若きものを討死させて。

愁傷にたへずして。跡をたにとふらはんとて

なと。同行の僧かたりし。あはれにおほえて。

曉をいかに契て立ぬらんたかの、奥（にイ）の有明の月

やかて此一首を卒都婆に書付へきなとそあり

し。

此十月。（今川破宮）三浦彌太郎とて行跡いとしかるへき

有。痢病を煩て日數ありて死去す。愛着のわか

き齋藤四郎。そのなけきをなし、折ふし。菊の

枝に付てつかはしはへりし。

よそにたに菊上の露（マ、ハ、ハ）いかはりかゝらん君か袖をしそ思ふ

ねさめのそら。鴈鳴て過行を聞て。時鳥あかつ

きかたの一こゑは。うき世の中をすくすなと。

古こと思ひあはせて。

曉の嵐にむせひとふ鷹のこゑしとろ也いつちおつらん

由良美作守法名保悟。かみこのためとて。富士

のわた一把。その文の返事に。いひつかはし侍

る。

何々にとかく駿河のふしわたのたえぬ裾野に雪はふりつゝ

保悟かへし。

雪は唯けさふる富士の綿帽子たえぬ裾野のしはしまたなん

十一月十四日。父の年忌に。何のいとなみもな

くて。

年々にけふの泪の玉のみはなにの光もなきたむけかな

痢病に日比わつらひて。たはことに。

思すも直垂をこそきたりけれ名をは養へこめるといはん

あるつれ／＼に。當宮惣社（府中、宮下、清間一所、御座也）の神主志賀駿河守

泰守終日ものかたりせしに。當社造宮由來の

事あきらかに。代々守護の敬信願文などの事

かたりて後。文にいひつかはし侍り。歌方の事

執心有かたくそ覺し。

跡たれししつはた山のそのかみの道のくまなく聞も畏こし

十一月廿日。龍王殿御元服ありて五郎氏輝。を

のをの祝言馳走。例年にもこえはへると也。同

廿五日。かの祝言法樂連歌發句。



霜とをしばつもとゆひの若みとり

古今集聞書五冊。口傳切紙八枚。氏輝へまいらせをき侍る。あとはかもなきことはつかしく思はぬには侍らねと。氏輝廿にもあまり。この道いたりふかくならせ給ひてのち。自見ありて無用のものともおもひ捨給は。八人童子にあたへらるへからんや。

あさければ聞しはかりを君はこれ我家の道に傳へそへけん  
宗祇古人この道執心あさからすして。諸家の師範となり。殊に近衛殿下逍遙院殿堯空。唯受一人の御口傳とかや。長阿同宿して數年無執心。一紙の物もきかすしらすかし。やう／＼此集結縁はかり。只一篇あら／＼の事なるへし。此時に。青蓮院殿治部卿法眼泰綱同□有。人の中心よからすして年月をふるに。いひやはらけとありしかは。臘月十日に。連歌興行の席參會。發句。

風やはるふるとしにとくるこほりかな

かの袖ひちて結ひし水のよせにや。

長谷寺觀音勸請の所。長谷堂有夜爐火のあやまち。すての事なりしを無事にうちけちて。そのころほひ法樂連歌に。所望の發句。

うつみ火は池水こほるあしたかな

火坑變成池のこゝろまでなるへし。

建長寺の東堂。歳暮とて出府あり。幸のついにや。下野守時茂和漢連歌興行。

かたえ咲て片枝春まで梅のはな

雪消尙臘天

建長寺

長樂寺

鶯兒纔學語

天龍寺

養得寺

發句は五郎氏輝の代に申侍る。

宗碩法師。

月村齋

歌よみて文にあり。中の七文字

ふたもしたらず。

都には三十もしあまり一もしの二文字たらぬ歌も有けり

と申のほせ侍り。

表布衣師三郎五郎と云。綾小路室町とのあひ

た北のつらにあり。詔のものたひく使に下さす。かへりてはてまのゝこりあるにより。無沙汰のよし申くたしつ。則のこりのほせつかはすとて。

あつちへのかきりのほせつくたさなん三郎五郎てまの關守  
權大弼當院氏降ノ時也太永五年  
 中御門一位。此十一月十七日御逝去注進下着。  
八十四歳

長阿京都にては晨昏御芳恩。されは一七日茶湯焼香。閏十一月十七日御月忌はしめに。

東なる人をも西にあひみんとさらぬ別れも末はたのもし  
 御辭世の歌とて。見せたまひぬ。  
宮龜卿ノ

思ひあへすあはれ打みるうちつけの袖になかるゝ水莖の跡  
 此御返しとはなくて。おちの人文のはしに御歌とて。

みれは猶涙おちそふ袖のうへにをき所なきみつくきの跡  
 御辭世のうた五句を句のかしらにをきて。三十一首の題内府淨空に申請て。月忌の始一續申催しはへり。此一續中愚歌二首。初秋露。披

## 書逢昔。

秋風の萩の上葉も旅にして袖にや露のなれんとすらんのちもおしあるかなきかのいそのかみよゝへて消ぬ筆の倂この一續御覽せられての事とて。おちの人の文に。

みてなけき聞てとふらふ皆人のものはしけきををしと思ふ下野守時茂爐火に來て閑談。歳暮の不辨借錢返辨扶持給分。萬に事たらはぬなどの次手に。例の老のたはこと。

一借錢借米可償了簡なければ。人にはつかしめられ惡口せられて。去へき人も。忽に無理非道のみにて。見し人ともあらず。

一所詮用脚をもとめ。利々賣買をせんにはしかし。此等の人は。佛神ともいはず。世間の盛衰をおもはず。雪月花の興遊をもしろず。朋友にもうとく。むらさきの故をまかこたせず。唯利々賣買の工夫。曉のねさめも他事

ならんや。此等の活計なかたちともいふへし。又如形も知行寺領あらむ僧俗の。利々賣買つたなかるへし。又酒屋とて。京堺南都坂本こゝもとにも。利々賣買世をわたるしわさなるへし。

一巡禮往來時々刻々養るゝ事。慈悲のかきりとはいへと。巡禮するものを。唐土には遊手の民とて。許容せすとなん。あるは佛事作善のついてなどには有へし。かならずとすることにはあらずかし。

一なま／＼の瘦侍。一所懸命の知行にもあたはず。いかんともせず。さすかに妻子ははなれず。けふあすの糧つきて。女は水を汲。男は爪木をひろひ。子はめのまへに人のやつことなり。はひかしこまる體。まことに不便のかきりなるへし。されは心あるはくひをくゝりなとするもあり。一紙半錢のことも

これらにこそ云人も侍りし。是慈悲の至極なるへし。路頭に物をこひ。家々門々にたすむものいふにたらず。慈鎮和尚歌に。

たれそこの目をし拭ひたてる人この世を渡る道の邊にこの世をわたる人といふ心あるへし。又古今やらん。

俗人のわきて立よるこのもとは頼むかけなく紅葉散けり不運のかきりにや。

一獅々舞猿飼金たゞき鉢たゞきやうのたくひは。けには手にしわさあり。哀まさらぬにはあらねと。これは世中なにとなき人のたすけもあらん。たゞいかむともせさらんは。世をわひ人なるへし。癪病以下の乞食いふにおよはず。かはゆき物の限なるへし。

一參禪學道の人あり。かたき大切の人なるへし。しかはあれと。なま／＼の參禪。都鄙隨分の侍多く進退を損す。

一教外別傳不立文字の宗師今誰人ならん。參者凡魔魔とも天狗ともいふへからんといふ人侍し。是みな世俗にいふ溝越天狗等にや。今程長老坊主會下。ともに或は官家にましはり。あるは土檀那をほりもとめ。山林斗藪を結縁し。奔走し參者を接し。我身接する知識たれともきこえず。中々念佛三昧こそあらまほしき修行ならめといふ人侍り。かゝるともこそ床しくも侍れ。是つらは我等やうの愚癡暗鈍の修行にこそ侍れ。

一父祖の祭。父母過去聖靈の月忌齋粥。僧衆寄次第。座頭以下餘りに多人數はいかにそや。盆彼岸は各別。毎月人數さためらるへきにこそ。一月の中度々の月忌寄次第粥飯の雜事。目にみえすして借物積るなるへし。

一弓馬物具をもとめ。よき者を扶持せられんや。侍道ともいふへからん。又何ならぬ物。

ことかけぬもの。奔走結搆せずともなるへし。朝暮の活計いかゝとそいふ人のはへりし。

宇津の山の傍。年比閑居をしめをきて。五とせ六とせ京にありて。臘月廿六日に又歸り住侍らんとて。

年の暮の薪こるへきかとのみうつゝの山の宿もとむ也此門出は。山城薪まかりのほらんの事なるへし。

今よりはちよの薪もこりぬへしうつゝの山の松にまかせて彼山居。萱垣といふもの。あるは蔣箔。竹のすかき。あらためなとして。ふと住居侍りしに。廿七日あした大雪ふりて。こゝもかしこも埋れかはりて。なか／＼あたらしくもみえ侍れは。

我庵はかやゝこも垣あし簾すゝろに雪をもてはやす哉此ころ雪を十首。

有注

はるかにて立歸りすむけさしもあれふる里人は庭の白雪



たてうへし庭の石木に花咲ていつこ荒ともみえぬ雪哉  
山里の三の友とや今朝の雪かきれのしとゝ窓の吳竹

雪ふれば垣根もたはにふみならしそこはかとなく通ふ山里  
萬楓日のめもいつる太山路のあまりあらはに雪はふりつゝ  
夜をふかく道まよふらしふる雪に手兒の喚坂人とよむ也  
もるとともに心ほそくも消る也笈の竹のゆきのあかつき

霞たちきゆへき峯の春をのみまつことにする老の白雪  
八十まで出ぬる事なうれへすむ宿も雪をそはつへかりける  
雪の内つみをくと云も今そしる一つかれにもたらし爪木を  
彼上人の庭にうき木をつみをきて。みし世に  
も似ぬとしの暮の満足。思ひ出られ侍り。人の  
心さしわつかなるを。満足して申侍る物なら  
じ。既に除夜に至て。

あけん年のけふのこよひの新玉のくると云人の誠しるへき  
除夜のあした。試筆に。

くるといふ今夜も明ぬ玉のをの絶なはけさの春の淡雪  
同二日の朝。山椒にむせて息の下にて。

何もかも取ふと老の山椒にむせにしといはん名社惜けれ  
正月廿八日。五郎殿御興行に。

不盡やこれかすみの四方の州の春

すみの山をたち入て申侍り。

本所様御方入御。歴々御會席にや。二月八日泰  
以亭。七日暮程より此亭に旅首途一折興行。

なへてはるいたり至らぬ宿もなし

九日夜に入。北川殿御見參。三獻。色々御心の

氏眞ノ母公伊勢寄九郎妹

とかなる御物かたり。こゝもとの御他事御袖  
をしほり給へるやうに候て。悲しさ迷惑。此度  
は子細を申につけて。ともかくもとおほしめ  
し候事にて候。必々罷下候へとおほせ。やかて  
罷下候はんするなと申て。やう／＼罷歸候。御  
折紙過分。ことの葉も候はてこそ候つれ。

同十日。宇津の山の麓丸子閑居一宿して。作事  
なと申付。十一日の早朝小川へ罷立ぬ。小川長  
谷川充長千句懇望。去かたきにより。十三日始  
行。泰以をの／＼をくりにとて同道。千句三  
日。發句。

まつの葉ははなそみつしほ山櫻

當國此はるまでの心ほそき。一入面白かりしなり。又兩日。

つはめとふ雨ほのけふるやなきかな

行と來といつこまかりの名残かな

餞別の會席とおほえ侍れはなるへし。

同廿日。すてに小川をまかり立侍るに。泰以そてをひかへて。

立別れ今より後はたらちれのおやのいさめと誰を思はんかへし。

おほち父君まで老か長生をあはれむにつけ驚かれぬる

かたみに立わかれ。さ夜の中山のふもとかなやといふ所に一宿して。

幾度も又越んとそ祈る也君をれさめにさ夜の長山

かの身をおもふとてこゝろなるへし。このいのるなり。いびおほせられぬやうにこそ覺え侍れ。

抑長山の事。西行上人この山にして。齡たけた

る男ゆきつれて。事とも尋られけるに。男語て云。この山は昔長山と申けるといひければ。いかて長山とはいひけるにか。男。四郡の中に有て山長かりければにや。古歌にもありとやらんいひけり。旅のふる小袖杯ぬきてやられけると。彼<sup>西行</sup>上人の東路の記にあり。されと命なりけりさ夜の中山。小夜の長山とや上人も詠せられけるとおもひあはせ侍り。此東路の記は。糟屋中務松綱。<sup>今川被官。相州住人。</sup>所持と聞て。此度小川より借用して一見し侍りしなり。

廿一日懸川泰能亭。廿二日則一折興行。

はし鷹のとかへる花か山さくら

當城數年さま／＼普請。堀は幽谷のことし。山は岑の椎檜しけく。よそめもたゞ鷹の巢山ともいふへく。春の花雲のたなひくかとみえわたさるゝを興して。花を愛してとかへるにやなど。おもひよせ侍る計なるへし。

懸川廿一日。二日より霖雨。三月朔日まで晴間もなくふりくらしして又連歌あり。

春雨の、とけき眞木の板屋哉

三日府中六郎殿。明日連歌。日あしければ今晚發句とて。

花さきてなるてふ三の千とせ哉

けふ桃花のよせまてなるへし。

## 宗長手記下

大永六年駿州にして正月廿八日。

天の原ふしやかすみの方の春

同二月九日こゝを立て。宇津の山埋谷。年比しめをき行かよふ柴屋。石をたて水をまかせ櫻をうへなど。普請のついて。かたはらに又杉あり松あり。竹の中に石をたゝみ垣にして。松の木三尺ばかり。一方けつりて。

柴屋の苔の下道つくる也けふを我世の吉日にして

柴屋に一兩宿して。おなし國三里はかり南北川といふ所。かねてより千句の連歌こふにより。今川被官朝比奈氏嫡孫左京亮泰以かれこれ誘引。

まつの葉は花そみつしは山櫻

おなし廿日に。をの／＼立別れ。遠江懸川さ夜の中山の麓金谷といふ里一宿。廿一日山をこゆ。西行上人東國みちの記に。この山をこえ侍るに。年なかはたけたる男行つれ。ゆく／＼かたりけん。昔此山はさ夜の長山と申。ふるき歌にも有とやらん。ほゝゆかめてかたりけるとなん。さては若命なりけりさ夜の中山も。長山にてやとそおほゆる。山中の道三里はかり。長長と松の木の本につゝきたる道なり。旅衣なとぬきてたひけると。かの記にあり。菊川といふ川も此山の中なり。里あり。かひのしらねはるかに見えて。さやにも見しかけゝれなくよこをりふせる山なるへし。この山なかはこえ

て日坂と云。こゝを二里はかり過て懸川。十餘年先の年の神な月のころ。こゝにての發句。筆ついでに書加。

かひかれは雪にしくるゝ山路かな

甲斐かねは雪にて。こゝはしくるゝといふばかりなり。懸川にて連歌あり。

はし鷹のとかへるはなか山さくら

この山年々椎櫟ふかくなり行中の櫻なるへし。鷹も花をは自愛しけるにや。

三月三日。おなし國見つけの國府堀越六郎亭と。先祖は伊豫守貞世。九州探今山風雅玉葉作者。法名了俊の事。

はな咲てなるてふ三の千とせ哉

天龍川の西濱松庄飯尾善四郎宿所。

すみれさく野は幾すちの春の水

ひくまの野邊名所なり。こゝをたちて濱名橋。ひととせの高汐より。あら海おそろしきわたりすとて。此たひの旅行までと。なにとなく心

ほそく物悲くて。

たひくのはま名の橋も哀也けふこそ渡りはてと思へは

此わたりまで。飯尾善四郎爲清うちをくり。歸

路の袖をひかへてのことなるへし。參河國今

橋牧野田三。彼父おほちより知人にて。國のさ

かひわつらはしきに。人おほく物の具なとし

て。むかへにとて。ことくしくそ覺えし。此

所一日熊谷越後守來り。物語夜更侍りし。田三

同名平三郎猪名といふところ一宿。松平太炊忠定

助宿所連歌。

澤のうへの山たちめくる春田かな

此所の様なるへし。

東條殿はしめて參する事なり。二三日逗留。連

歌發句は色代申て。

ふちなみやさかりかへらぬはるも哉

暮春のよせにや。翌日宗長。

浪や行はるのかさしのわたつうみ

おなし暮春なり。



荊屋水野和泉守宿所。

かせやはる磯のはな信定きつなみ

廿七日。尾張國守山松平與一館千句。清須より織田の筑前守伊賀守同名衆に。守護代坂井攝津守。皆はしめて人數。興ありしなり。

あつさうはなにとりそへはる野かな

新地の知行。彼是祝言にや。

熱田宮社參。宮めぐりやしつるに。松風神さひて。誠に神代おほゆる社内。此御神は東海道の鎮護の神とかや。宮の家々くきぬきまで。沙の満干鳴海星崎松のこのまゝ。伊勢海みわたされ。こゝの眺望たかことのはもたるましくなむ。旅宿瀧の坊興行。筑前守來あはれて。

ほとゝきすまつの葉こしの遠干潟

神官人所望に。

うす紅葉松にあつたのわか葉かな

後堀川院後百首やらん。こゝもあつたのなとあるやうにおほゆる。老のひかおほえにや。

宮をたちて四五町。松原に。兼てさきたち。宮の若衆僧俗色々さかなもとめて。たひ／＼うたひまひ。つゝみ笛興に入し。心易といふされ法師又興ありしなり。かたみになこりおしみて。立わかれぬ。

おきのゐて身をやくよりも覺ゆるはけふの熱田の宮の別そ一笑々々。

清須の旅宿は坂井攝津守。庭ひろくふるきたちの。ほりせき入て。柳の古木。藤山吹のきし。池のさゝ波。水鳥とも羽うちかはす様。繪にもかゝまほしくそみえし。連歌興行。

さきさかす木は夏木立花もなし

緑陰花にまさるとやいふへからん。咲さかすは。花のさかぬ木も咲し木も。緑陰はおなしやうといふへし。此館は代々守護所。招月庵正徹東國みちの記にあり。筑前守亭にして。

朝かしはぬるやしのゝめほとゝきす

筑前守息藤左衛門宿所。

なつや時卯月はかりのやとのふし  
伊賀守亭。

卯の花はきよかるなみのかきれかな

かやうの事は。自然の事おほかる中なるへし。  
高島孫左衛門宿所。

水鶏なくあしはらくらき朝戸哉

藤左衛門短冊かきてとて。一兩枚何とも心え  
侍らねとも。とかくいなみかたくて。

兼てより都のつての文にたにうとき今はの老そくやしき

此たひはしめての見參の心なるへし。

おなし國津嶋へたち侍る。旅宿は此所の正覺  
院。領主織田霜臺息の三郎禮とて來臨。折紙な  
とあり。宿坊興行。

つゝみ行家路はしけるあしまかな

此所のをのゝ堤を家路とす。橋あり三町あ  
まり。熱田の長橋よりは猶遠かるへし。およひ  
洲俣河落合近江の海ともいふへし。橋のもと  
より。舟十餘艘かさりて。若衆法師誘引。此河

つらの里々數をしらす。桑名までは河水三里  
はかり。舞うたひ笛つゝみ大鼓。舟はたをたゝ  
き。さゝすしてなかれわたりしなり。桑名より  
むかへの舟。うたひのゝしり。さしあはせこき  
ちかへ。送迎のふねひとつになりて。心もとな  
くそをり侍りし。あくるあした正覺院へあし  
のはにつけて。

綱手繩ひかれわすれし老の波けふは袂に立歸りつゝ

又此津にて等運所望。

飛はたる百舟のとまる蘆火かな

此津南北美濃尾張の河ひとつに落て。みなと  
のひろさ五六町。寺々家々數千軒。きこゆる西  
湖ともいふへし。數千艘橋の下ひろく旅泊の  
火。星か河邊のなとふること。さなからにそ  
みえわたる。おなし國龜山關民部大輔。今は何  
似齋見參あらまほしき事ありて。路次申合。既  
に罷出る折ふし。俄の合戦注進。思ふにかなは

ぬ世中。引かへし八峯峠になりぬ。又をくりの僧俗こゝにてもかしこにても數盃。梅戸よりの迎の人來りて。その日に八峯をこえぬ。この峠は昔より馬輿とをらぬ子細ありと聞とも。老の足一あしもすゝます。人に負るれば胸いたみいきもたえ。谷にも落入ぬへくおほえはへれは。老のこしかき二三十人。梅戸よりやとひよひて。左右の大石をふまへ。おち瀧津波をまたけ。度々心をまとひし。空へもかきあくるこゝちして。やう／＼峠の一屋に一宿。あくるあした江州山上の會下寺一見して。麓のたか野といふ里に。日たかく一宿。このあたりの知人酒肴もたせ。物語めつらしかりしなり。又觀音寺より、後藤但馬守佐々木六角氏牙の臣のむかへこしかき人夫あまた來りて。長覺寺爰も日たかく一宿。谷中務なども。中郷土佐守來て物かたり。明る日矢嶋の少林寺。薪酬恩庵末庵。かゝみ山をすくと

て俳諧。又一笑々々。

鏡山いさ立よりて見てゆかし年へぬる身はおしはかるなりひとりわらひして少林寺。そのあした木の濱のわたりまで寺の僧をくりして。されて發句所望に。

ほとゝきすしける木の葉まの渡り哉

坂本金輪院より。旅宿いろ／＼もたせたふ。夜に入て來臨。明日一折のもよほし。京ちかきいそきにことつけて。發句はかり申をくりしなり。

かさねあけふしのれもいさ郭公

大津一宿。寺より上覺院。さりかたきに。

明ぬとや夜ふかき月の水鷄哉

大津のあるし宗桂。又さりかたくて。されともいかにも發句拂底の石木をとらへて。

なつの雨薺のよかなる岩木かな

ある人の所望。またさりかたくて。

さみたれは雲のこなたの柳かな

寺の東圓坊八十の老宿。連歌の内夜ふくる。物語のついでに。尺八のおもしろくもあはれにも身にしみてそ侍りし。關山をこえ粟田口に至れとも。人ひとりもあはす。さしも此峠は。かさをかたふけかたをすり。馬輿さりあへさりし道そかし。京をみわたし侍れは。上下の家昔の十か一もなし。只民屋の耕作業の體。大裏は五月の麥の中。あさましとも申にもあまり有へし。武者小路ふる知人の所にして。ちやうとの乗物の身を。

老のこしけふそのへつる時わかね花の都の風にあたりて  
さすかに都といふ名をむつまじみてなるへし。

同廿八日。紫野龍寶山大德寺山門。去正月廿六日立柱拜見。去四月七日崩御。御葬禮は東山泉涌寺。雨さへふり道の草木もうちしほれ。されとも其夜は天氣たちなをりけると也。御七々

日は伏見御山庄。般舟三昧院。後柏原院と申とかや。御弔山の座主。寺の長吏。紫野龍寶山南禪五山律衆淨土門。御焼香ひまもなしとなん。この間は京中なにはのこともたえはて。火をけちたるやうにそ聞えし。御踐祚は去三日とそきこえし。

五月六日。月村齋宗碩密々興行。

天か下やはれまゝつ時さつきやみ

諒闇の御事は作者あるへきことゝ度々いかゝあらんたと申き。逍遙院殿きこしめしつけられて。さらにくるしかるまし。天下あるとあるものしつ山賤に至るまで此御歎は存へき事とて懷紙にかきつけさせらる。うちつゝき兩座。

朝露にてる日をうつすあふひ哉

常夏の外はこゝろのちくさかな

大性寺大仙院東大寺齋點心終日。廿三日下京。十五日建仁寺常光院湘雪（紫雲）にして小齋。一花院東堂靈仙院東堂相看申て。その日に伏見津田



聚荷軒 宿。桑風呂腰痛養生。やかて平臥。夜に入て園の竹に陣とる。蚊とも大なり。ちいさきも多く打出。家中にみち／＼。蚊の大將軍勢時の聲たゞ雷のことし。蚊火をたいていかにふすふれとも。おもてもふらすこみ入。古紙帳の城はらふかたなく。夜もすから團扇の粉骨もかひなし。曉かたに思へは。これもうき世中にやと觀して。

吳竹のしけふしみの蚊の聲や拂ふにかたき塵の世中

夏のみしかきころも。明ぬ夜のこゝちぞせし。明る日は聚荷軒同道。宇治の川舟さしのほせ。橋のもとよりおりて東雲軒。當國奉二三獻ありて橋をわたり薪へまかりくたるとて。

我庵は都のなつみしかそすめ世をうちにしもなにか苦しき薪酬恩尊像拜し奉り。焼香申て。

するかよりのそかぬ日なく山城の薪を老の荷をそかるむる

七月三日泉州のあたりの人興行に。  
今いくかけふ三日のはらあまの川

七夕に法衣かし奉とて。

法にあふ二の星のかり衣けふのえにてや思ひはなれん  
今日の法衣を借衣にて。二星ともに萬年の業をつくしはて侍れかしといふこゝろなり。

廿九日宗祇年忌。いつくにてても毎年一折あるは千句などの弔。人數もなし。酬恩庵茶湯次。地下殿原までの事にて興行と。院主尊意にて。門外の心傳庵にして。

朝かはやゆめつゆはなの一さかり

八月四日。院主江州矢嶋少林寺御下向。おなしく罷下へきにはあらねとも。逍遙院殿古今集御筆そめさせられ拜領。かたしけなきをも申上んとて。十一日出京。宇治白川別所辻坊一宿。十二日東雲軒。兼日よりあらまし連歌。

霧の朝け河音くらきはれまかな

宇治橋の遠かたの朝夕眺望なるへし。その夜半まで酒あり。風呂あり。十三日の朝明過て。伏見よりむかへの舟橋にさしよせて。又ふね

あり。東雲軒をくりにとて。種々とりつませ。茶の湯などの用意。とり／＼面白そありし。槇の嶋水のよとみにさしよせ。終日河逍遙。たゞ身にのみあまることにて。

月日のみ身にそはやせの宇治川やけふはいさよふ老の波哉舟のうち。短冊なと／＼りあへすして。扇に書て東雲軒の扇にとりかへしなり。京より印政因桂各興にそ。聚情軒に沈醉ながら桑風呂に湯治して。翌日出京。袖をひかへて發句所望。

朝戸明の田面いろつく千里かな

十五日。名月とて。月村兼日のあらましにて誘引。逍遙院殿古今集拜領かたしけなさ申上て。月村因桂同道。日くれて罷歸しなり。二三日して月次の連歌。

吹あへすちりあへぬ風の柳かな

下京茶湯とて。此ころ數奇なといひて。四疊半敷六疊鋪。をの／＼興行。宗珠さし入門に大なる松あり杉あり。垣のうち清く。蔦落葉五葉六

葉。いろこきを見て。

今朝や夜のあらしを拾ふ初紅葉

此發句かならず興行なとあらましせしなり。

波々泊部兵庫助宿所。

源政經

うへし世や秋といふ秋の宿の菊

同十日。伊勢備中守亭。

いつくもる千代しのこりの菊の露

十三日。一色綱州亭。

〔頼方〕

秋の月いつこてらさぬくまなし

寺町三郎左衛門宿所。千句。

鷹鳴てさむき空すむあした哉

逍遙院殿久うかゝひ申さぬことゝて御詠。

恨みあれや都に來てもうつつの山夢はかりなるあふとにして身にあまるなと。中々にして。ことのほも侍らぬなり。いつかたへも。年老はて行歩かなはぬ體。罷出ることとはなし。この御詠しかし愚存にやと。かたしけなくて。しかあらは短冊を一首の懷紙に申請て。表紙をさせて御目につかけ。宗

長我心をみ侍る物ならし。眞珠庵假屋作事奇麗。折ふし旅宿。又竹の縁。ひかし南ぬれ縁にして。手洗所の水門石四五たて。梅に椿篠つくしうへそへ。すな入させて。すしけにそ有し。樋口油小路其國守梅名所望せし返事に。あかねとも岩にそかふるなとありしに。

あかねとも岩にしかへは同くはつしなも猶添てたへかし伏見聚情軒桑風呂。五木八草湯治。兼約とて。罷下るへきの夜。伊勢八郎殿兄弟一色新九郎殿誘引。若衆八九人。下京なる宿へ夜更て入來。心とけたるさかつきたひかさなりて。老を忘侍し。あしたに。

人しれす身にしめめし千入をはよそに過行初時雨哉いかにせは思ひ絶なん忘れなむころのまゝの心ともかな今夜より伏見の里の草枕いく露けさをはらひあかさん

新九郎ふし見へたふ。

いかにともおほつかなきに我も又おなし心の袖もしくろなれこは夢か現かとはかりも語んほとこのこゝるとも哉

しらすさ 草の枕の終夜たれに伏見の夢通からん  
八郎殿文のかへしに。

幾夜われふしみの月を思ふともしちてや人の袖のかたしき京へ出てかへし。

結てはさめし伏見の夜半の月君かよはする夢にや有けん  
伏見への夜。盃の次に。新九郎の扇にとりかへし尺八。そのあふきにかきつけてうちをかすこそ。

あかね夜のせめてしるしに取替し忘れ形見なく方をなき  
聚情軒桑風呂一七日あまり。時々刻々起居のねんころさ。まことに聚情とそおほゆる。醍醐に聚情同名北村兵庫助。朝めしの招請誘引せられて。おなし乗物にて同道。伏見を拂曉にいて。宇治八幡春日山を見わたし。木幡の里を過るとて。

昔わがおちてはつく老なれば馬のある里の名さへおそろし  
此二三年さき落馬に。今あし腰かなはぬことなり。日野七佛薬師門前より杖にて。まことに

さひしく哀に。あらしにまよふ落葉。佛前のふるき戸帳に吹まよひ。車のわれこゝかしこに

ちりほひ。むかしおほゆる心ちして。鴨長明閑居の舊跡。かの重衡卿笠やとりの跡。泪こほれ侍し。ふる坊所々の道しは紅葉の朽葉を分て。

醍醐のあるしまことに上味ともいふへし。菩提院一見。故准后持佛やうにおもひ給ひける

と也。九山八海といふ石。淺茅の中にあり。ききしよりは見るはともいふへし。宗長師匠駿

河の宰相とて。此院家に宮つかへせし人なり。常に物語せられしにかはらす。笠取山のふも

とうち時雨。今朝宿所に立かへり。又ゆつけないとあり。連歌の用意硯文臺ありしかと。發句は

かり。

はつくれかさとりあへぬ山路かな

その日に伏見へかへりて。あくるあした鳥羽

の知人一宿。發句。

たかさとのしくれせぬ空神な月  
聚情軒杖二枝。内外のためとて。みしかくなかく切てをくらる。

此杖はたかにはあらず君とわか八十の坂へ越ん嬉しさ  
文にそへて。つかはし侍りし。

三井寺東圓坊。八十まで尺八の名をえたと  
也。尺八をきりしらへらるゝこと上手にもや。切て送らる。歌あり。

すさめをけ五のしらへすむ竹の齡八十の身になすをみて  
まことに八十の作不思議のことこそ。かへし。

君かなす五のしらへすむ竹の千代に八十を取そへてける  
祝着をかさねて。殊にこの竹なり。うつくしく手にふれたければ。

竹のよのうつくしさ手にふれたかたみ君が調へを聞ぬ限りは  
此一二日はむらさき野より出て。月村所にし  
て。廿五日の夜北野宮司能祐法師の宿所。因桂  
若衆誘引。終夜若衆笛吹うたひ。おもしろかり

し。朝に社參。發句。



今朝手にもうすきは雪紙屋川

むらさきのへそかへりはへりし。

ある夜眞珠庵かたはら小寮にして。小僧達聯句の次。一盃のもよほしに。予隣寮に老の夕まとひ平臥し侍りし。をひおこされて罷出ぬ。ある人狂歌とやらむいひて。

七十九年古來まれなり

上句は失念。小僧達けにとや。みなわらはれはへりし。返しとくく／＼なとせめられしかと。なにことをかと。いはむかたなし。田樂のうたひものにや。こひしの昔やたちもかへらぬ。老の浪いたく雪ましら。かのなかきいのちそうらみなる。よくそとりあはせけると思ふに。かきつけ侍り。老を祝し賀せらるれと。老は興なくそありし。をしはかるへし／＼。

七十九述老懷歌十首。

やすけなみたちぬにつけて歎かるゝ我身は老も嘸な苦しき

よせかへるいつこも我身あら磯になにむつまじき老の白波やく鹽とあまのしわさの朝夕のからきないはゝ老の白浪よしや老さもあらぬ世かと思へ共歎くは我身有のすさみに人のうへに常はきけ共我しらぬにくき物とは老のつれなさはも又咎そと思ふつれもなき老の憎さのかきもしもなき今は我人のためさへわひしてふことを思ふになく老かな忘れてはなからぬ老をなけく哉心になふ命ならぬにこんとしりて初め四十のかとさゝは八十に至る老は歎かしくりかへし同じことの老ぬればしつのをた卷賤のをた卷逍遙院殿御贈答。

昨日閑談。近年無如此事。本望満足難忘候。又加様に參會所期候。仍十首金玉難打置。於燈下書付候。眞實指燭の體。詠草まて見せ申候。一笑々々。期面計候。

老の波立て見ゐてみ思ふにもかへらぬ物と過し年月をしかへし思へは老を睦ましきうき身を捨す墓ひ來にけり老はたうきめをみつにやく鹽の難波のこともからき世中なくてそと云れん事はしらぬ身のいつ迄老の有のすさみそ人の上になしてはいかにくからむ我たに老は飽果にけり

にくからむ人こそかはつれもなき老はよの常何か苦しき人の爲わひしからても老か身の安らかにして世を盡さはやなかつらしとはかりしれば命のみ老は心になふと思ふそのかみはこむとしちて杉の門深くも老の入たちける老の後同じ事とて云へくはなむあみたふつなむあみたふつ右同宗長述老懷和歌十首。於燈下馳凍筆。

逍遙子。去年の冬。駿河宇都の山丸子柴屋閑齋にして越年し侍りし。つれ／＼のあまり。岩山道堅古今一句を題にして。百首の歌よまれけりとて。人みせしを。つゞけはへり。このたひまかりのほり。逍遙院殿へ持參。御一覽。御點四十二首。奥の御詠。

いかにして時雨降にしことの葉をあらぬ色にそ染返しけん身にのみあまることゝもな〔る〕へし。

十月廿三日四日。京都不慮のさほき。なにこととは聞えず。右往左往の體。耳にも目にもたゝあさましとそおほえし。江州矢嶋少林寺薪酬恩庵院主。此八月下旬やかて罷下へきとて。と

かくする程に。此さはきいてきて延引。今月十日下京に出て。あすは大津までと云。かれこれ物かたりして。やかてなといふついでに。

老ぬれはあすは近江とたのまぬに夜更れとも袖そしくも、俳諧一笑々々。

若松の池しる谷。白浪さはくなといへは。道の人あまたして。三井寺勝藏坊。山科花山までむかへとて。人おほくして。若衆誘引。先心をのへしなり。京よりの人をかへし。神なひの森を過て。關屋の軒端見ゆ。折しりかはの時雨。とはかりして。

空蟬のうすき丸屋の夕時雨立よるはかりあふ坂の山

時雨も人もたちとまらぬやうにや。

大津々田宗桂一宿。京よりの堅等勝藏尺八吹て。夜ひとよおもしろく明ぬ。うち出の濱より舟にて坂本。船の中勝藏堅等かれこれ數盃。時雨し風の名殘あらくて。ふねにや酒にや。いつ

れともなくて酔ふしなから。比叡辻の法泉寺  
榮能の聴月軒。又こゝにて酒ありてを勝藏か  
へられし。一兩夜休息。この軒のつくりやう。  
こゝろをつくされ。茶湯等まで。數奇さへ又た  
くひもなし。其夜雪ふりて。あかつきかた門に  
出て。海見やられ。ひえの山つゝき横川の峯。  
ことのはもなし。俳諧に。

打忘れやすらふ程の朝ほらけ身とてもあしもひえの大雪  
一笑々々。聴月の屋を發句と所望に。月をきく  
とはいか様にそや。分別なれと。月ながら雪  
折やう計を。

月ながら雪おれ竹のきはかな

月をも聞こゝちそかし。

矢嶋へとて。木の濱舟に火鉢入て。あらしも雪  
もしらすそわたりし。少林寺相看門外の妙勝  
庵宿庵。海をへたてゝもなを都のさはきゝこ  
ゆれは。

爰もく耳やすからぬ白浪の都の風のつてしたえは  
此里人の稻の藏まちつけはこふ馬牛。富にと  
みをつむにやとそ見ゆる。めの子ともいねつ  
きこうたうたひたはふるゝ聲。是そ耳にめて  
らるゝこゑなるへし。

耳やすきことゝは今夜里の子の稻つきうたふ聲聞ゆ也  
大嘗會のさか田のいねと侍るも。此里のちか  
きあたりとやらん。

旅宿の小庵。此すみあらし。嵐も雪もたまるへ  
くもなければ。大工めじてうちかたむれと。山  
とをくして材木まれなり。堅田坂本よりもと  
めて。よしのかきね蘆をふちにわたし。冬籠の  
かまへをろそかなるを自愛して。

梓弓やしまの里の冬こもり今をよるへと梅も咲なん  
ある人來ついで。發句所望に。

わたる瀬やいつくやす川朝こほり

今日よりいなひはて侍るへし。

中郷土佐守ふる知人。二三里へたてあり。きゝ

つけて。炭十荷かれこれ。此里は山遠くて。炭薪賣買もたやすからす。難得の音信懇志々々。文のかへしにつけて。

その里に住こちさへしからきの眞木の炭やく煙たてつゝある夜爐火しとろなる火榻し。ねふりかゝりて。紙子に火のつくをもしらす。おとろきて。とる所なくてそ明ぬかた裾もむれはしり火の恨めしのよや杉江の兵庫とて。此あたりちかき古知人尋來。樽一荷又色々。此人は清宮内卿法印につきて。又のさきの年駿河にくたられし。三上越後守使者坪田平右衛門尉。樽一荷兩種そへたふ。十一月廿一日。少林寺一休和尚年忌。曉より雪ふりて。

庭の松空しもけふをしら雪の枝もたはゝにふれるあかつき院主。

十かへりの花ともみえてけふことにいく白雪の庭の松か枝よき酒とて。小甕に一をくりし。院主へ例の俳

諧。

玉たれの小甕はみるめその底はうつすに靈の年はへぬへし院主。

不消安排一口無兩舌

玄周とて南都の人。この比は京。參河國知人有て。遠江駿河までくたりて。此廿二日少林寺尋來。二三ヶ國は無爲の演説。尾州小守護代坂井攝津守音信傳達。百疋赤池茶筌二。懇切にそ。廿三日。三井寺勝藏坊日くれて訪來。終夜尺八。玄周ありあひ。なにとなくおもしろく侍りし也。廿四日歸寺。少林寺僧達一兩人若衆誘引。酒ありて。やう／＼にそ歸られし。このあかつきせめてのことに發句。

そらは月あけかたとつるこほり哉

寒月の有明にたへすしてなり。脇。

夜ふかき鳥にそてのうすゆき

しかあらは。今日一折なと申侍りしかと。殘多



し。廿六日京へ人のほするついでに。三井寺勝藏へ。

左右おもふ君々立はなれ一夜もそや出うかるらん

若衆多くつとへ。自愛の人なるへし。彼寺のふるき歌。けに山のはしのよせもあるへし。

長夜夢にくるしみて。

心のみまところみさめはまところまで覺め夢路や絶んとすらん

しはふきやみに身をくるしむ。曉に。

誰そこの老のしわざのしはふきを先に立つゝ常にをとする  
七十九の易命期。極月一日殘夜と卅日に限れることを。

えしなすは生かはれるか我なれやことしをかきる命成けり  
少林寺納所へ。さむきあしたに。

老ぬればぬかひ物をよあま酒のみなから口にすゝり入はや

方外軒道堅。此一兩年能登の太守品山□助在國。予

駿河にありとや座頭つたへて。芳書。江州矢嶋  
少林寺駿河文の中にあり。歌あり。

猶そ思ふ越のみ雪に埋れてもふしのたかれの春の明はの  
京へつたへ。月村便風あらはと申をくりし年  
の暮。雪中とゝきかたき事にこそ。

昔君ふしのれはみき雪もよに白山の名やたくふ空なき  
一休尊像太刀の尊像感得奉て。

打拂ふ床のあたりになく太刀のさやかにいつこ臺る塵なき

くもりなき刃すゝしき劔太刀ときし心のますかゝみかな

臘月四日夜。曉夢中。柏木兼井雅祝禪門榮雅宗祇もあり

て。駿河府下向。御上のをくり申。國の境とお

ほゆ。そこにて。さてもなとて清見關をは御覽

せさらんと申心地にや。

思へともかへらぬ浪や清見瀉けふは岩こそ磯うらむらむ

夢中にやさめてにや。おほつかなし。あまりに

ふしきに覺て。おきてかき付侍り。しはすの煤

はきする家にもきこゆ。

すゝ花は枕に咲て老か夢ひきおろしにをのれさめつゝ

一笑々々。

臘八。

今夜これいかなる星の曉にみれば空のみきらくとして  
院主。

知音識後更誰知

毎夜まところみたにせぬあかつきに。

鳥の音にめのみさめつゝいつちとも行方うとくあたち曉

旅宿草庵。杉の板戸もすぎまおほく雪風吹入。

所々とかくふせくとて。

身をつめはいとはるゝ老の風の音ちりのすぎまで防く心に

中郷土佐旅宿を訪。飯米薪雜事等とりくし

て。爐邊の閑談二夜。かへりて後傳達せしな

り。

米に薪雜事等とりくしてたひれの雪を酒のよひく

此旅宿は。しな木の濱。山田矢嶋の海つら。鳥

とりあみをく舟とも。棹をよこたへ敷しらす。

伊吹おろしひらのねおろし。簑笠なみにゆら

れ浮沈する體。殺生のにくさ。又かれらことわ

さ不便さ。おもへはおなしやうにや。曉夜鴈の

をりわつらひかなしむ聲々。水鳥ともの羽音。  
いつれかいつれならむ。やうくにおりぬや  
ときけは。はへをく網にや。すなはちころされ  
さはく聲。あさぬしともいふにたへす。たゝ耳  
をふさく。枕うくはかりにて。

〔ま歌〕

哀なる鴈の聲哉めもはるにあみをきわたすなみのあけほの  
波のうへたちぬまかするあし鴨の網の網てにかゝりぬる哉  
此下句等類ありや。使者右兵衛尉高好より。樽  
一荷なにやかや。くたゝ敷にもらしつ。河井  
又五郎使者。樽は代。炭十箇。雪中音信真ケ  
真ケ。親父故駿州連歌とて合點。吊の事書狀引  
ひらきみるより涙せきあへす。去年の夏にや。  
彼宿所連歌。今にわすれかたし。逢坂の關屋よ  
り吊下人。上下につたへて發句所望。これを關  
のよき過書とよろこひ入て。

雪に人たえずあふさかやまちな

關屋の祝言。これに過へからす。一笑々々。

十一月晦日。駿河より彌太郎上。駿遠無事先々大慶。黃金二兩。泰以時茂。左京下野。越年の音信。又一兩。房州。これは京へとて思をきたまひけん。遠行のあとより此たひのほせらる。

我爲に思ひ置けんからぬかての心いかにむくひん伊勢龜山關戸部。臘月十七日矢嶋の旅宿尋來入。殊に雪中。年の暮無餘日に。さらはものゝたよりもあらず。眞ケとぞ覺る。此月のはしめ飛脚書狀。このあらまし。唯尋常のなをさることにとやと思へは。かく雪ふりはへたることのはもなし。則旅宿のため食籠などをくりはへるついで。

鈴鹿山さそなふりつむ雪のうちいかに越ける心なるらんやかてかへし。

すゝか山ふり埋もるゝ雪のうちもみまほしさの道求つゝ夜に入て來臨。雪よりつもるかたみのことは。夜も更。爐邊ひさをならへ。田樂たうふの盃た

ひかきなりて。旅宿にかへられき。樽五荷代五百疋。炭六箇。蜜柑二籠。干物色々。旅宿所せくこそ。逗留五日。此内種々懇志とも。日夜かれへもこれへも來入。爐邊盃の中。連歌八句。

ふるかうちのゆきあふみちのやとり哉

雪中國をへたて尋來入の心なるへし。脇。

たひれわするゝうつみ火のもと

宗 鐵

廿二日拂曉。飛駄の陣へとて歸城。今朝はたかひに暇にをよはすと。きのふ申かため。旅宿をたゝれ一町はかり乗物に人はしらせて。

たのまれとはるとそ契る行年の残りおほかる君に引れて春はかならずと。きのふちきりしことなるへし。年の暮世俗と云節季とて。此里も家々つきのゝしるを聞て。

白杵の音にゝきはふ此里にいかてたひれのすむ心かな

此たひ丹波の軍何となく破て。若槻次郎無比類討死の聞えあり。父若狹守先年河原林の城

に一人入て。名譽の死のきこえありしなり。父子ともになれみし人なり。歌ことなとなけきて。逍遙院殿へも。常に参りかよはれし。哀にも不便にもこそ思ひ給けめ。

とりつたへ若槻弓のいかなれやしなぬか中のあらぬ死するとりつたへは。父子名譽のこゝろなるへし。

廿五日。節分の夜。大豆うつを聞て。

福はうちへいり豆の今夜もてなしを拾ひくや鬼は出らん京には役おとしとて。年の數錢をつゝみて。乞食の夜行におとしとらする事を。おもひやりて。

かそふれは我八十の雜事錢やくとていかゝおとしやるへき立春のあした廿六日。易の勘文七十九の年已暮て。

けさはかつ八十に息を延てけりかふかへ文の年もくれにきおなしあした。

けふよりはいきていつまでいつ迄の急く方なき八十年の春

天明和尚の歌に。

死なうとも生ていつ迄あらふ共身にいるはれは煩ひもなしおもひ出けんなるへし。

宗梅法師。歳末とて茶五袋。種村中務貞知觀音寺より米一駄。宮木入道眞觀しのね藥のためもとむるを聞て。

君か爲冬の野に出てしのねほる我紙衣に雪はふりつかへし。

我爲にもとむるしのね雪のうちのたかなと社は生も出けめ宗牧伊勢みやけとて。芥子三袋京より。

鞍馬路や小野路や爰に入かはれけしからぬ雪の旅の宿りに口のうちさはやかなる事なり。

正月餅つく家々ほこらしきを聞て。

大方の旅のやとりにもことたりぬ隣の餅をみゝにつかせて除夜に今夜はなき玉歸くる事と經にもいへり。詞花集やらん。涙の玉を手向つる哉ともあり。宗長七十九。おほくの故人。茶湯焼香燈を



かゝけて。

我そ此道しるへしてくへきよひまたゝき向ふともし火の影  
已大永六年くれて。七年正月元日。

梓弓やその春をちからにて人の界をひきはなちてよ

今日少林寺齋點<sup>止イ</sup>心。試筆元日祝を。

動きなき千年のかけの春にあふ世を人もちぬかゝみ山哉

當國太平。大守心のまゝ。都鄙いつくももちろ  
のかろからぬこゝろを。試筆にとりかく事に  
や。もちろぬかゝみ。初音の巻にやとおほゆ。俳  
諧にはあらしかし。抑八句存命言語道斷。此一  
兩年。まめことにもあたことにも。毎日のなく  
さめに日記しをき侍る。いつしかおとろきて  
もかへらぬ老の波に筆なけ捨。けふまでの事  
なるへし。

まことにや僞にやといひすてゝ罪さり所いつく尋れん  
折にふれなくさめ筆のなにならぬ根は結ふ夢行水の泡  
如此のあたこと元日までとて。筆をなけ捨つ  
れと。逍遙院殿年始御書御詠。これ又うちをさ

かたく存ることにて。

なめやる雪の麓の柴の庵いかに吹らむひらのねおろし  
柴屋旅宿おほしめしやらるゝかたしけなさ  
に。御返し。

今そ思ふひらのねおろしなむらん雪の麓は住へかりけり  
宗牧御發句申請。旅宿に下て。脇第三よりつら  
ねて。百韻のあやにく。御發句の珍重銘心肝さ  
りかたくて。終に百韻にそなりぬる。

梅かゝをきえあへぬ雪や匂ふらん

心さしふかく染てしの雪。かへりて梅か香を  
にはふらんなど。まことに歌異なる御作意と  
そおほゆる。

少林寺宗精藏主。俄和泉堺へ下向。離別の詩あ  
り。三四句題として歌二首。

兩地江山今白頭

またるなよ今わかる共春の内に君にそ老をわかえつゝみん  
半窓月落一燈幽

わかるへきことを思ふにまंतरまぬ月は有明のよひの燈火

此五日六日。さきの日むかへの文來りしをは。  
とかくいひのへ。けふはいかにもとゝめやる  
かたなきに。

しゐてみなかれて別をとゝめすは俄に物のけふや悲しき

少林寺近里地藏院詩をゝくる。又三四句。

茅橋雖野有祇待 晴好雨奇江上止

涙の上の山ほの霞む雨ならし春しも君を知人にして

觀音寺より平井右兵衛尉年始音信。樽二荷。鴈

荒卷色々。中郷土佐正月に獨吟のためとて。舊

冬より所望に。

あさかすみみなみを四方の立とかな

江州は南北といふにや。

矢嶋馬場兵庫助興行。

梅やなきにほふかうへのかすみかな

三井寺よりとて。所望に。

かせやはるさゝなみよするこほり哉

馬淵宮内少輔殿。かけても思ひよらす。かねて  
も申通る事もなし。超過音信。福田八郎僧宗觀

久知音につきて傳達あり。内儀にや。領中天神  
宮千句發句とて所望あり。廿五日明日よりと  
て俄の事也。種々の音信にめてゝ。

梅さかりにはてる波のはる日かな

宗祇月忌初。廿九日焼香のついて。

立かへり春やふゆこもるけさのゆき

はるやとき冬こもらす今朝の雪

おなし事ながら分別なし。

餘寒の雪。曉より少林寺の松竹ふりなひかし。

下折のひゝきひまなかりし朝なるへし。おも

ふに夢まほろしといふ事つくゝと。

なにかそれ幻とは。夢やこれ我まほろしのなのりかほせん

わきて誰二になつていひをきし夢や幻まほろしや夢

生死に暗々として。

いかにして何そと。は。心より外にはすへぬ關にそ有ける

音羽山きゝてもいかにあふ坂や關のこなたに八十へぬらん

福田八郎僧歌をかきて懇望。

一筆の跡みるたひに思ひ出て南無阿彌陀佛と唱へわするな

返し。

なれし世を忘れたみに思ひ出は何れかさきの南無阿彌陀松平大炊助。去年秋九月とやらん。舊妻にをくられて。愁傷つたへ聞しかと。ほのかなること。は。えなむ文にてもとふらはて。此春たしかに聞て申つかはし侍り。

去年の夢をかたしき衣さむしろの塵うちらはらへ春の手枕はや新枕なともやといとおかし。

京へ田舎へと。人つかはす朝に。

一人二人めしつかふ猶いな舟のいなと名つけて下し登せつめしつかふもの油斷して。雜事錢なととられ。事かくるまゝに。

爰もとの不弁をいへは雜事錢今宵ぬもしにともしせらるゝ又京都の事きゝて。

こきませの櫻はさけと淺みとりみやこは柳一もとのほる舊冬以來京都右往左往。うつゝの事にもあらず。大永七二月十二日十三日。七條わたり、合

戰。武田伊豆守代々粉骨の勝利をうしなはれ。

さらは敵といふへきも誰ならず。丹波山家樵夫やうのものにや。抑明德に。山名陸奥守内野にいたり。數萬の軍兵雲霞のことくたなひき入洛す。然はすなはち御動座。一日一夜のうち。陸奥守悉く滅却。又應仁年中諸國守御敵となり。京中三分二大堀をかまへ。東西十町其半に。大内左京大夫御敵にくみし上洛。終は降參有。御免下國。されは國々の守もちりく下。さてしはらく靜謐。又永正年中。三好筑前守といふもの阿波より攝州にをしうつり。おほくの城郭落居。道永江州山上に下向。程なくその五月に入洛。筑前守父子一類侍。あるは討死うちすて生捕。又しはらく無異にして。舊冬丹波浪人等蜂起して。剽嵯峨西京桂川を過て。七條邊迄亂入す。しかれば六條大宮わたりまで御動座。道永東寺南大門一日一夜。桂川左

右の合戦。御動座とて。御敵楯をふせ射矢をとめかしこまりけるとなり。夢のさめたるやうにして。十四日に坂本へ御下向。志賀木濱山田矢橋守山二三日。長光寺かりの御所しつらはれ御うつり。筑地以下普請。しはらく御座のやうに聞ゆ。長光寺名詮自性を。

此時とあふかさめや春の日のなき光を四方にしきつゝ東海道北陸西國中國の侍參給。萬の名乗。昔木丸殿のゆくは誰子そなとも。さなから長光寺の今にや。あらゝの行する。筆にまかせはへるへし。

三月四日。矢嶋をたちて。甲賀水口といふ里は十町はかりつゝきて。昔御參宮の御所なともおもひ出られ罷する程に。此所關おほく門門より關々といふを聞て。

水口に我やみゆらん門ことにせきよくともろこゑによふ佐治長坂。今は少雲軒三雲軒。むかへにとて同

庵兩宿。人數なくして。連歌一順八句。

やまかすむ谷の戸ひろき田面かな

甲賀谷といふ心なるへし。此庵主あまりの懇志を。

ことにふれ人の情をやそちまて見しも君のみ深き色哉返し。

契あれや一木の陰のことは花にとはるゝはるの行する又江州河井又五郎。父一回忌のためとて。名號の發句。

なきにしもしかし夢てふはるのはな

木濱ちかき所。井口三郎左衛門。伊勢龜山までをくり來り。歸路に所望の發句。

里つゝき門うたかひのやなきかな

柳おほき里のさまなるへし。

細字のもの五六十丁。老眼をしほりうつすに。文字のかたち鳥のあとにてもはかなく。筆うち置て獨わらひに。



墨筆もつくえ硯も笑ふへしまことに鳥の跡にこそあれ

三月七日。鈴鹿山をこえて龜山逗留。十四日連

歌。

おそさくらのちそさかましさかりかな

廿首題ありて。歌一續。

初春霞

宗 鐵

かすむのりいつより春の曙と思ひもわかぬ四方の空哉

竹鷺

宗 長

雪とつるいさゝ村竹すゝか風吹ときぬらしうくひすそなく

浦眺望

おきつ波鹽ひのかたの松原のこすゑの上にかへるともみゆ

寄神祝

なへてよやもなくもあらむ事もなく願ふ心は神を知るへき  
此ちかきわたり。あみた寺の本尊。齒生いてゝ  
人のことし。奇特ともいふにたらず。此寺の院  
主九十八とやらん。同の此齒こと／＼く生出  
たるなり。人やらん佛やらむ。折しも花のこ  
ろ。龜山の左右寺々の花盛り過て青葉まじり

の山路をわけて。河原三町はかり。神戸佐藤長

門守宿所。一日有て翌日連歌とて。發句一廻も

よほしに。

はるやこの松にかゝれるやとの藤

暮春は萬物景氣の後にて。はやう藤山吹の外  
もなし。脇亭主。

さくらのはこの庭の木ふかさ

なにとなく。暮春のおもかけやさしく候て。又

廿首題ありて一續。

海上霞

舟人も心をくらしいせの海うちへうたふあさかすみかな

不逢戀

よせかへる汐干のかたの白波のうつせにゝたる物おもふ哉  
神戸を立て。高岡寺のこなた一里あまり。長門  
守うちをくり。若衆をの／＼引具して。日くら  
し酒の中に。

長ちへはけふの心もみゆへきに老しす物はかひなかりけり  
又若衆の中へとて。

さそはるゝ人ならませはふしのれの駿河へいさといはまし物を  
寺の院主所望發句。

今朝はたれわかのまつ原朝かすみ

此松原ちかき寺なるへし。けさと朝霞いかゝ  
とおほゆれと。けさの朝けなといふおなし詞  
にやと。心をやりはへり。

あさけ日永をすきて。桑名等運一里はかり迎  
にとて。追々若衆來て。日暮等運庵。翌日連歌  
興行。

たなひかれゆくはるならし夕かすみ

廿六日。尾州津嶋河のほと三里はかり。桑名衆  
老若。舟にて雨後河水をさしのほす。數盃の中  
津嶋より又むかひのふねにのりうつり。をく  
りの舟もしはし川上にうかへてさしやらす。  
見をくりみかへりてそへたゝりぬる。正覺院  
やかて一折興行。

ちるをみよ青葉はいつく花もなし

若衆執筆。手跡うつくしくそみえ侍し。

廿七日。尾州清須坂井攝津守旅宿ねんころに  
いひつけられ。又翌日興行。

はるいくへ岩かきつはたきしの藤

脇亭主村盛。

水にかけそふ庭のやまふき

織田丹波守興行。

はるよたゝあかすはちよもこよひ哉

三月盡なるへし。會ともかれこれ懇望ありし  
かとも今月一日まかり立ぬ。かつは傍若無人  
にやとおほえ侍れと。うちつゝきの老屈たへ  
かたくて。熱田宮へ。攝津守うちをくりのやう  
にして。宮人同意。途中にても酒ありし。一興  
にそ。宮の宿坊興行の事。老屈とて。兼日より  
無益のよし申さためしかと。攝津守同道さり  
かたきに。さらは發句。攝津守さた有へきよ  
し。數度色々申つれば。

ほととぎすはつれそはなの遅さくら

俄にては思案入たる趣向珍重。脇なにとも分別なけれは。

なつとはしるしはるやくれぬる

若衆おほくありて。その興ありしなり。

宮をたちて。又攝津守をのく。四海まではるはると打をくられ。名残おほくこそ。宮と鳴海の間に笠寺と云あり。人おほく詣つるをみて立よれは。寺の本尊觀音のほうはれて。笠をきせつる。殊勝にもあはれにも。さまくなり。此寺のむかしも此本尊ほうはれて。笠をきせ奉りける。さてなむ笠寺とはいひけるにや。

參河荏屋水野和泉守館兩日逗留。俄一折興行。はるはくれぬほととぎすはたはつ音哉

みやけにとて五百疋。去年のほりしにも千疋はなむけ。以下の芳恩。惣して此年來萬疋にもおよひ侍らん。おそろしく。安城一夜。松平

與<sup>信定</sup>一尾州よりこゝもとにて一夜。それよりや

はきのわたりして妙大寺。むかしの淨瑠璃御前跡。松のみ残て。東海道の名残。いのちこそなかつ侍つれ。今は岡崎といふ。松平次郎三郎の家城なり。深溝とて松平大炊助宿所。去年上にも一日逗留。このたび一日逗留。興行。

しけりあふ木すゑはなつの外山かな

西の郡鶴殿三郎宿所ひるとをり。ゆつけなとありて。井奈といふ牧野平三郎家城一日逗留。又興行。

卯の花やなみもてゆへるおきつしま

此城上嶋といふ名をよそへてなり。わたつみのかさしにさせる白妙の波もてゆへるあはし嶋山。ことはをかりて。たゝこを卯の花の波もてゆへる興津嶋となり。

今橋牧野田三宿所一日。興行。こゝは古日以來年々歳々芳恩の所なり。興行。あはれにもむか

しおほえて。老屈をわすれぬるなるへし。

けふさらに五月まづはなのやとりかな

むかしをおもひ出ぬることになん。此はなは五月をまちて咲といへは。卯月の花と申侍。風雨に又一日ありて。國のさかひの城鵜津山にいたりぬ。此鵜津山の館といふは。尾張三河信濃の堺。やゝもすれは競望する族ありて。番衆日夜無油斷城なり。東南北濱名の海めぐりて。山のあひくせき入。堀いたる水のことく。

城のきしをめくる。大小舟岸につなかせ。東むかひは堀江の城。北は濱名城。刑部城。いな佐山細江。舟の往來自由なり。西一方山つゝきに。敵のおもひかゝるへき所もなし。此一兩年を。長池九郎左衛門尉親能承。普請過半。本城の岸谷の底まで堅にほりつゝけ。あしをとゝむへきやうもなし。三ヶ國の敵のさかひ。晝夜の大鼓夜番の聲無寸暇きこゆ。一日逗留。連歌

興行有増。しかれとも老屈休息。發句はかり一順八九人。

なみやこれかさしおる花なつの海 宗長

當城の景氣までなるへし。わたつみのかさしにさすといはふも。君か爲にはおしまさりけり。本歌とおほゆ。かさしおる花は。當城を以て隣國のかさしたるへき。千秋萬歲なるへし。夏の海とは。春過てなにの花もなき時。此海のすゝしき波をかさし折花と申侍り。脇親能。

まつにのこれる磯のうきみる

本歌のよせもゆへありてみゆ。

引間馬子に一夜。みつけの國府ひるとをり。そと六郎殿へ申入。懸川二日逗留。さ夜の中山途中杉原伊賀守上洛。かたみにことの葉もなくて立わかれぬ。その夜かなや一宿。それより懸川の旅宿へつたへて。



夢なれやさ夜の中山ながくにあひみすはとぞ立別つる  
糧物など。ゆめくしきをくりものなるへし。  
かなやにとまりて。

幾度か又やはこゆと越て又けふはやそちのさ夜の中山

大井河を見わたり。藤枝を過て。宇津山丸子の  
閑居にいたり。さてもおもへは。去年七十九を  
かきりと門出せしに。又越きぬるつたの細道。  
心ほそきころも長々。いつちいぬらん。長生  
の老の因果。いかなるはてのしにせんと。恥お  
もふより外はなし。抑喬山御事はをきぬ。房州  
豆州又かれもこれも。一とせの夢は我いかて  
さめさりけむ。

數ふれは我たか爲もこのかみの死をくれきぬはいかにせん  
客人清見か關一見とて。彼寺へ文かきてそへ  
やる。かへりきてもともかくもなければ。興津  
彦九郎かたへかへしにかきそへて。

いさゝらは我名をかへて呼てみん宗長故やつれなかるらん  
京人に立かはりつゝ清見かた若しく波もおもふとなしれ

### 三井寺。

かへるにはふしのれもしかしほとゝきす

參河松平大炊助。勾當とて座頭弟子二三人一  
宿事。上下送馬などの事。書狀に。一兩夜隣庵  
毘沙門堂借用して。歸りのほするとて。あまり  
に不辨にて。扇一本つかはすついでに。

ほかくのたかき聞えの富士のれの柴やは煙立わひぬとて  
さひしとよ又もたつぬなくのしるしの杉を柴屋のかと

存城勾當坊。

喬山氏親法名一回忌六月廿三日。彼御詠草中廿首。五文  
字を一文字つゝ句の上にをきて。

### 獨吟百韻

かせはなをわすれかたみのあふきかな

清書人にあつらへはへれと領掌なし。ちから  
をよはす老筆にまかすとして。

さらてたに行としこほる水壑の八十の跡も手向とぞ思ふ  
奥州岩城民部大輔由隆多年書狀通用にて。度  
度座頭あまたくたしつるに。いつれも勾當ま

て四度六度の扶助。此度泰昭白川關一見愚狀。  
去年夏より彼館にて越年。此六月上られぬ。色  
色芳志。道の物可然馬ひかせのほせらる。され  
はかつは愚老もうら山しくおほえて。泰昭の  
文の傳達の様にして。

八十そよもしも猶もしながらへは岩木の奥の中にかくれん

述老懷俳諧一笑々々。

氏輝今川にして當座。

山眺望

月いつるあかつきかけて別ては入日にかゝる峯のよこくも

尋虫聲

夕風にすゝの聞えし秋のゝはふりすてかたき蟲の聲哉

おなし一回忌。長閑寺和尚有尊詩。題三四句以

和也。一首東和耳。

猶留仁愛口林齋 花白紅々草自青

俳はさながらあかし色香にてみちの草しけき花を悲き

同一回。中御門殿文字かしの歌御勸進に。り

もし。

山家

りんぞせは水草きよき山の井のあかぬ心はさもあらはあれ  
りうのすむ水上つねにはるゝ日も雲風雨の絶ぬ山かな  
七夕に氏輝にて。

名所七夕

田子の浦や天の河原の年々にすゝぬ日もなみ戀ぬ日もなみ

嶋鶴

よとゝもに浪より松のことのはの敷嶋の道をたつの諸こゑ

神祇

千はやふる神のしめ繩かけまくも今やかしこき例なるへき

七夕に。老のいのちなかきをなけきて。

ねかひきぬ願ふにたえぬ八十也けふそ我世はあひはての星

俳諧。一笑々々。

おなし日。庭の萩につけて人にやるとて。

もとあらの花咲にけり天の川萩かりあけて渡るかさしか

九子七月九日のあしたとくおき侍るに。隣の

いといたひけなるおさなひ。腹の煩にてうし

なひ。歎かなしむをきゝて。夕に。

けふいかになのみ立ちむよそにても思ひ暮しの袖を露けき

なてしこのはなに付てつかはし侍し也。

柴屋一とせの七月十四日朝の野分に。客殿吹こはたれつと聞し。その比越前に有て。歸下りても久あらしはてつるを。おとゝしの冬。又この三分一はかりの茅屋をとりたて。ことしの七月九日に歸住て。めくりの垣こもすたれとりのけて。庭のなかれ淺茅の中に埋石なども。門外の川よけに過半とり出し。のこる石ここかしこにちらしをきしを。又とりならへて。水をすまし心をなくさめ侍る。晩涼に。

影も手も老かゝまりぬあらたむる淺茅かその水はもと水すみうつる影恥かしなうつもれし蓬かもとのみつはくむ迄于蘭盆過て十六日に。

此たひに歸るさにたに捨られて又けふあすの老なしと思ふ宇津山柴屋庭もとの水石。所々ほりをこしなとして。過半畑になして。まひきなの種まかするとて。

まひきなのさゝれ石まの山畑のかたしや老の後まきの種あらゝ無下の庭數寄候哉。おなしはたに庵を結び。床に簀竹のこ笠かけ。わらうたをしきて。

思ひやれ我山畑の柴の庵鹿のなくれを老のあがつき西行上人も。雲かゝる遠山畑の秋されはおもひやるたにを。贈答しはへるなるへし。

宗祇年忌七月廿九日。

あさかほや花といふ花のはなのゆめ

柴屋むかひなる峯の畑に。鹿をふこゑを聞て。

獨吟

鹿のれやとを山はたのゆふあらし

又我園に大豆あつきをうへ。いほりを結び。鳴子をかけて。朝夕の自愛に。

まめくしくもなれる老かな

畑の菜をつみて。人につかはすとて。

つまでこそみすへかりつれ朝なゝ我山はたの秋の露けさ庭の山水雨にもよほされ。石ふしかしかやう

の聲聞れは。

せきいろゝ庭の山水ころゝと石ふしかしか雨すさむなり  
風やうゝ夜さむになりて。老のねさめ何事  
をおもふも。物のほしさのみを歎て。

天か下ありと有物のなくも哉さてやはしさの盡ると思へは  
閑居といへとも。けには巡禮往來の立よりて。  
京田舎の事かたるを聞て。

度ことにさても手なのみうつの山うつゝともなき事を聞哉  
人の所望に。

野はあきの露むしはなのさかり哉

今川そらみたれ雲野分たつゆゝきかな

範忠御歌。物にかきいろゝとて尋る中に。了俊  
三十三回忌。品經二十八品の中に。範忠の歌あ  
り。とふらふもとふらはるゝも。皆古人なるこ  
とを。

涙のみときあへぬ紐の巻々の言の葉ことにむすはれつゝ

山家の草庵にて發句。

鹿の音やとを山はたの夕あらし

興津宗鐵館にて。庭の眺望を。

しくれさへそめあかねやとの木末かな

おなし庭の水鳥を。

霜はけさはらふもなしのうはけ哉

大永六年六月廿三日。喬山御他界飛脚。臨川庵  
より山城薪酬恩庵七月廿九日到着。則承あへ  
す御品ひ罷下ぬへきに。宗長已七十九。命期當  
年とて。その御暇乞申て。紫野薪の末期覺悟の  
うへは。ふたゝとはいかゝいひしにたかふ  
世中にやと。先御中陰の儀式薪にして一七日。  
其内なる粥飯はかりの茶湯。若又命期當年に  
かきらすは。來春中罷下ぬへき事。御ちの人の  
御かた泰以時茂へ文して申候ひし。八月より  
逍遙院殿奉頼品經廿八品。諸家の御懷紙申調  
侍る。折節京都の忿劇に延引して。やうゝ當  
年二月十六日矢嶋へ下し給畢。則三月四日矢  
嶋罷立。此四月に下着持參。折ふし中御門殿歷



歷御下向。御講殊勝珍重本望。御樽御折紙以下。本所御感御書たひ候。又逍遙院殿御老筆の古今集。八九年先より懇望申。去年あそはしたてられ拜領候。同持參。又罷上の時も。彼集宗長一重の傳授口傳の物三冊一合進覽。御名殘にのみと覺し。喬山へも凡抄物多年下進覽。又持參畢。長寶寺殿桂山別而宮仕とはなくて。只朝夕多年御身ちかくこそ候つれ。今はたれも御知候まし。善思内室北川殿なにとなく御覺も候はんつらむ。いつそやめされてまいり候し時も。さやうにこそおほせられ候つれ。其時左京亮泰以祇候候にて候つる。喬山御幼少御時は。御暇申紫野徘徊。心さしにのみ御ことくしく。廿ヶ年ありて罷下まかり立。異他御めかけられし。これはたれくも存知あるへし。又は御用にもたちまいらせ候事もたひく候し。抑此四月より罷下。國の體次第承り。又見及申候。

何事もうつゝも候はぬ御事のみにてこそ。ことしは幾程も候はぬに。かくのことくかはりはてたる御事にやとおとろき入。罷過候ゆへ。しりかほの中事なから任筆候。此七月初九子の閑居へ罷歸候とて。泰以に申遣し候。

さしも有はあれとは思へとめに耳に聞てもみても餘る口そよなにことも過言のみ罷成候事。歎入事にて候。喬山も十ヶ年先より。御心も御中風氣につきて。御成敗の様も調儀の御思案もそやと。承度候ことのみ候ひし。今は又はたちの御内。御わらはの心の御程は。何事も御心のほとおさまりかたく。奉公の人々も心にまかせらるへし。されは此度當國罷下我等體まで。雜言空言傍若無人の事のみ耳にみち候。われらか身にをきてはくるしからず。なにとなく都鄙の身ほめのやうには侍れと。せめて身ほめたるなと筆にまかせつる。都鄙の外聞なけきてもあま

りなきにあらず。口惜きたれ／＼も可被察候。糺明の事度々申つれと不及是非候。その上讒者露顯現形候。只詮とする所は。なきかことくにして。丸子の柴屋末期の用意のみ。しかれとも丸子手越は河原はかりのへたて。けには往來もたえす。老のきく耳もくるしくこそは。興津左衛門の館しは風呂興行。一七日湯治。此次熱海湯治隨體。これよりひかし邊の古知人をもたつね見はやのあらまし。折節痼病散々式。結句脚氣さへ發あひ。車におされたる犬のこくとく。はいありきの體不及旅行。又年内幾程の日數にもあらず。存命にまかせ。年あけてふと關東可思立にて。館ちかき寺不捨院旅宿。名のきゝおもしろく覺て。瓦礫。

老のゝちすて捨すともいひ難みしはし名にのみめつる宿哉不捨院いまた板ひさしなくて。時雨霰いかならんとおもふ夜に。

こそ今年杉の板屋のまはらなる月に時雨を聞あかしつる去年のこのころより。矢嶋少林寺門外妙勝庵旅宿す。住あらしたる庵にて。伊吹おろし比良のねおろし。雪霰うすき杉の板戸とをすやうなりしを思ひ出て。おもしろさに述老心ものなるへし。八句も年暮ぬ。神無月下旬のほと。又なからへてもなと。つれなさを嘆て。

はかなさは露の夢路の幻の外をたつねは我身なり覺

中御門殿御在國。折ふし興津しほゆ湯治。旅宿へ文にあそはしそへて。

寒き夜はむかふうちにも埋火のをきつの事を思ひやらるゝ御かへし。

曉はいけるはかりのおきあつゝ思ふことゝは老のさむけき旅宿不捨院のあかつきに。

よそけにも杉の軒端の板間荒みもらぬ時雨にふかせたり覺人の歡樂法樂連歌發句所望に。

としのうちはふゆこそ松の深みとり

清見か關ちかきあたりにて一折に。

とわたるやまたてもしらむ小夜千鳥

伊勢内宮一禰宜書狀。守晨とて。先の一の禰宜  
十三回。來年二月十七日宇治山田知音せし。各  
興行。い

西行谷にてあらまし連歌發句所望。急便にて  
筆とりあへすつかはしつ。

あひにあひぬそのきさらきの花の春

慈廣院殿いつくやらん御歸に。丸子柴屋たち  
よらせおはしまして。庭をなかは畑に作て。田  
屋を結び。鳴子をかけ置たるを御覽して。其松  
木はしらにあそはしつけらる。あるしは興津  
しほゆ湯治。

山畑の鹿の鳴れの淋きを思ふにさそな老のあかつき

よとゝもの事なから。當八十歳の冬の曉。なを  
しのひかたさよ。

起わかれうらむ物てふ鳥の音の老の曉なとまたるらん

長善寺法樂連歌發句。客殿新造。

のきのまつ雪のしら玉つらゝかな

吉川次郎左衛門賴茂。淡路小守護の息。繼母の  
にくみにて。宗長につきて罷下。浪人とも被官  
ともなくて。當國より甲州手楯の合力の人数  
にて討死。今年十一月廿三日七年忌。藤五郎方  
善子  
へ申つかはし侍り。

あはち嶋あはとはるかにしほの山さしての磯をてらす月影  
七とせの冬そかなしき薄雪の葉はかりの事もあはて消けむ  
露はかりの給恩にもあらず。人なみくの討  
死不便。命は葉のうすきかことしといふこと。  
思ひ出て侍るものならし。泰昭この二三年富  
士一見。又筑波のあたりまで下向。この六月に  
駿府にかへり。此まゝ越年などのあらまし。俄  
東山治部卿法橋泰賢より迎たりぬ。すてに  
四五日中上洛。小原兵庫頭高親二三年知音。餞  
別の興行。發句さやかた。

さきさかす待としら河はなのほる

としになれぬ雪のくれかた

ゆきがへり薪こりつむやとならん

泰 昭

高 親

東山はしら川最勝寺にして雅經卿。

なれくみてみしは名残の春そともなとしら河の花の下陰  
此鞠のかゝりの櫻なるへし。

泰賢泰昭の父泰綱。予四十餘年の知音。他にこ  
となるに付て駿河國尋下。いま上洛。はるはや  
かて下向あるへきのちきりつゝとしらかはの  
心にや。

十二月一日曉。八十歳宗長ねかひ事の祝言に。  
れかはくはけふ元日のとしの暮いまこんはるは昔の下にて  
泰昭このあかつき火榻にあしさしならへて。  
君いなは風のつてにも曉はれかひしこと、袖ぬらすかに  
贈答。

なれくし君か心のあかつきの折ふしことをいかに忘れん  
中御門殿より。鴈にそへられてたふ御歌。

故郷にかへる心のすゑをきけ今おとつる、鴈の玉つさ  
御かへし。

身にあまる君か言の葉かけそふる鴈の玉章をくかたそなき  
早梅の枝もたはゝに咲たりけるを。人もち來

り侍る。やかて坊城殿へもたせまいらすとて。  
物はみなひとつ二つか花たにも咲くる枝はみところのなき  
冬の梅は。一りん二りんかすかに咲て匂ふこ  
そ。あはれふかゝらめ。あまりに正月に童の餅  
花つけたるやうにさきたるを。ふさはしから  
す見ての事なり。老後の腹たゝしき事おもひ  
つめたるを一書にしてうちむかひ。かつく  
といひて。そのまへにて火に入て。老心うちわ  
らふといふを。そこにある人きゝて。さそな心  
やすからんと。いひをこせたる歌のかへし。

聞人のよそにしるてふことわりと思ふばかりはいひ果ぬ共  
あまりにこゝもといつはりおほく。人をはか  
りうち讒するをきゝて。さやうならん折ふし  
ましはらは。我も人もおなし人ならんとて。  
よきにつけ悪きは況て世人のとはむくしまにかれつゝ

慈光院殿。中御門歳暮の一續申たてしに。



心あれやかりほのくらき夜の窓うつ音はして過る雨かな  
下野守時茂より小袖たふ。歌あり。心さしふか  
く染てしのよせあり。

心さしきえあへぬ雪も今そしるふかくそめてし花の色とは  
水仙花一本。人の文にそへられて。そのかへ

しに。

味氣なやことしもありてつれもなく歳暮の文を書交しつる  
おほちの父孫の代まで。歳暮の音信に。

おほち父むま子のとしの暮にして有てなさは嬉し聴かし

# 群書類従卷第三百二十七

## 紀行部一

### 上左日記

#### 木工權頭貫之

を<sup>（といふイ）</sup>とこもすなる日記といふものを。をむなも  
して見んと<sup>（こころみイ）</sup>とするなり。それのとしのし<sup>（のイナシ）</sup>はす  
のはつかあまり。ひとひのいぬのときにかど  
です。そのよしいさゝかものにかきつく。ある  
人あがたのよとせいつとせはてゝ。れいのこ  
とどもみなしをへて。げゆ<sup>（綱由）</sup>などとりて。すむた  
ちよりいでて。ふねにのるべきところへわた  
る。かれこれしるしらぬおくりす。としごろ  
よくぐしつる人々<sup>（どもイ）</sup>なんわかれがたくおもひ  
て。その日しきりにとかくしつゝのゝしるう  
ちに夜ふけぬ。

廿二日に。いづみの國までと。たひらかに願た  
つ。ふち原のときぎね。ふなぢなれどむまのは  
なむけす。かみ<sup>（か）</sup>なかし<sup>（な）</sup>もな<sup>（か）</sup>がら<sup>（イ）</sup>。ゑひ<sup>（あきイ）</sup>すぎてい  
とあやしく。しほうみのほとりにてあざれあ  
へり。  
廿三日。やきのやすのりといふ人あり。この國<sup>（人イ）</sup>  
にかならずしもいひつかふものにもあらざな  
り。これぞたゞはしきやうにてむまのはなむ  
けしたる。かみがらにやあらん。くに人の心の  
つねとして。いまはとて見え<sup>（やイ）</sup>ざるを。心ある  
ものははぢずぞなんきける。これはものによ  
りてはむるにしもあらず。

廿四日。講師むまのはなむけしにいでませり。  
ありとあるかみしもわらはまでゑひしれて。  
一文字をだにしらぬものしが。あしは十文字  
にふみてぞあそぶ。

廿五日。かみのたちより。よびにふみもてきた  
なり。よばれていたりて。日ひとひ夜ひとよ。  
とかくあそぶやうにてあけにけり。

廿六日。なほかみのたちにてあるじあるじのし  
りて。郎等までに物かづけたり。からうた聲あ  
げていひけり。やまとうた。あるじもまらうど  
もこと人もいひあへりけり。からうたはこれ  
にえかゝず。やまとうた。あるじのかみのよめ  
りける。

都いて、君にあはんとこしものをこしかひもなく別ぬる哉  
となんありければ。かへるさきのかみのよめ  
りける。

白妙のなみちを遠くゆきかひて我ににへきは誰ならなくに

こと人々のもありけれど。さかしきもなかる  
べし。とかくいひて。さきのかみいまのも。も  
ろともにおりて。いまのあるじもさきのも。手  
とりかはして。ゑひごとにくろよげなるこ  
として。いていりさいにけり。

廿七日。おほつよりうらとをさしてこぎい  
づ。かくあるうちに。京にてうまれたりしをん  
なこい（くにい）にくにてにはかにうせにしかば。このごろ  
のいでたちいそぎをみれど。なにごともしは  
ず。京へかへるに。をむなごのなきのみぞかな  
しびこふる。ある人々もえたへず。このあひだ  
にある人のかきていだせるうた。

都へと思ふものゝ悲しきはかへらぬ人のあればなりけり  
またあるときには。

ある物と忘れつゝ猶なき人をいつらとこふそ悲しかりける  
といひけるあひだに。かこのさきといふとこ  
ろに。かみのはらから。またこと人これかれ。

「にイナシ」  
 させなにともおひきて。いそにおりゐて。別  
 がたき事をいふ。かみのたちの人々のなかに。  
 このきたるひとくぞ心あるやうにはいはれ  
 ほのめく。かくわかれがたくいひて。かの人々  
 のくちあみもろもちにて。このうみべにて  
 になひいだせる歌。

をしと思ふ人やとまとあし鴨の打むれて社我はきにけれ  
 といひてありければ。いといたくめで。ゆく  
 人のよめりける。

棹させとそこひもしらぬわたつみのふかき心を君にみる哉  
 といふあいだに。かちとりものゝあはれもし  
 らで。おのれしさけをくらひつれば。はやくい  
 なんとて。しほみちぬ。かせもふきぬべしとさ  
 はげば。ふねにのりなんとす。このおりにある  
 ひとくおりふしにつけて。からうたども。と  
 きにつかはしきいふ。又ある人にしぐにな  
 れど。かひうたなどいふ。かくうたふに。ふな

「にイナシ」  
 やかたのちりもちり。そらゆく雲もたゞよひ  
 ぬとぞいふなり。こよひうらとにとまる。ふち  
 はらのときざね。たちばなのするひら。こと人  
 人おひきたり。

廿八日。うらとよりこぎいで。おほみなとを  
 おふ。このあひだにはやくのくにの「にイナシ」かみのこ。  
 やまぐちのちみね。さけよき物どももてきて。  
 ふねにいたり。ゆく／＼のみくふ。

廿九日。おほみなとにとまれり。くすし。ふり  
 はへてとうそ白散さけくはへてもてきたり。  
 心ざしあるににたり。

元日。なほおなじとまりなり。白散をあるもの  
 夜のまとて。ふなやかたにさしはさめりけれ  
 ば。風にふきならさせて。海にいらてえのます  
 なりぬ。いもしあらめも。はがためもなし。か  
 うやうのものなきくになり。もとめもおかず。  
 たゞをしあゆのくちをのみぞすふ。このあふ  
 「にイナシ」



ひとくちのくちをおしあゆもしおもふやうあらんや。けふはみやこのみぞおもひやらるゝ。こゝのへのかどのしりくべなはのなよしのかしらひゝら木ら。いかにぞとぞいひあへる。二日。なほおほみなとにとまれり。講師ものさけおこせたり。

三日。おなじところなり。もし風なみのしばしとおしむ心やあらん。こゝろもとなし。

四日。かせふけばえいでたゝず。まさつらさけよきものたてまつれり。このかうやうに。物もてくる人に。なほしもえあらで。いさゝけわざせさすものもなし。にぎはしきやうなれどまくるこゝちす。

五日。かせなみやまねば。なほおなじところにある。人々たえずとぶらひにく。

六日。きのふのごとし。

七日になりぬ。おなじみなとにあり。けふはあ

をむまを<sup>なと</sup>おもへどかひなし。たゞなみのしろきのみぞ見ゆる。かゝるあひだに。人のい<sup>野イ</sup>へのいけとなあるところより。こいはなくて。ふなよりはじめて。かはのもうみのものども。ながびつになひつゞけてをこせたり。わかなぞけふをばしらせたる。うたあり。その歌。

浅茅生の野へにしあれば水もなき池につみつる若菜也けりいとをかしかし。このいけといふは。所の名なり。よき人のおとこにつきて。くだりてすみけるなり。このながびつのものは。みな人わらはまでにくれたれば。あきみちて。ふなこどもは。はらつゞみをうちて。海をさへおどろかして。浪たてつべし。かくてこのあひだにことおほかり。けふわりごもたせてきたる人。そのななどぞやいまおもひでん。この人うたよまんとおもふこゝろありてなりけり。とかくい

ひいひて。なみのたつなることゝ。うれへいひてよめるうた。

行先にたつ白波の聲よりもなぐれてなかんわれやまさらむとぞよめる。いとおほごゑなるべし。もてきたる物よりうたは<sup>(はイ)</sup>いかゞあらん。このうたを。これかれあはれがれども。ひとりもかへしせず。しつべき人もまじれゝど。これをのみいたがり。物をのみくひて夜ふけぬ。このうたぬしなん。またまからずといひてたちぬ。ある人のこのわらはなるひそかにいふ。まろこのうたのかへしせんといふ。をどろきて。いとおかしきことかな。よみてむやは。よみつべくははいへかしといふ。まからずとてたちぬる人をまちてよまんととてもとめけるを。夜ふけぬとにや<sup>イニナシ</sup>ありけん。やがていにけり。そもいかがよんだるといぶかしがりてとふ。このわらはさすがにはおていはず。しゐてとへば。いへ

るうた。

ゆく人もとまるも袖のなみた川汀のみこそねれまさりけれとなんよめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらん。いとおもはずなり。わらはごとにては。なにかはせん。おんなおきなにしつべし。あしくもあれいかにもあれ。たよりあらばやらんとてをかれぬめり。

八日。さはることありて。なほおなじところなり。こよひ月は海にぞいる。これを見て。なりひらのきみの山のはにげて入ずもあらなんといふうたを<sup>(なんおほゆるイ)</sup>もほゆる。もし海べにてよましかば。なみたちさへていれずもあらなむとも<sup>(もイナシ)</sup>よみてましや。いまこの歌をおもひいでて。ある人のよめりける。

<sup>後漢</sup>てる月の流るゝ見れば天の川出るみなとはうみに<sup>そあい</sup>さりける

とや。

九日のつとめて。おほみなとより。なはのと

まりをおはんとてこぎいでにけり。これかれ  
 たがひにくにのさかひのうちはとて。見おく  
 りにくる人。あまたがなかに。ふちはらのとき  
 ざね。たちばなのすゑひら。はせべのゆきまさ  
 らなん。みたちよりいでたうびし日より。こゝ  
 かしこにおひくる。この人々ぞ心ざしある人  
 なりける。この人びとのふかき心ざしは。この  
 海にはをとらざるべし。これよりいまはこぎ  
 はなれてゆく。これを見をくらんとてぞこの  
 人どもはおひきける。かくてこぎゆくまにま  
 に。海のほとりにとまれる人もとをくなりぬ。  
 ふねの人も。見えずなりぬ。きしにもいふこと  
 あるべし。船にもおもふことあれどかひなし。  
 かゝれど。この歌をひとりごとにしてやみぬ。  
 思ひやる心は海を渡れとも文しなればしらすやあるらん  
 かくて。宇多の松ばらをゆきすぐ。その松のか  
 すいくそばくいくちとせへたりとしらず。も

とごととに波うちよせ。枝ごとにつるぞとびか  
 よふ。おもしろしと見るにたへずして。ふなび  
 とのよめるうた。

み渡せは松のうれことに住鶴は千世のとちとを思へらなる  
 とや。このうたはところを見るにえまさらず。  
 かくあるをみつゝこぎゆくまに。山も海  
 もみなくれ。夜ふけてにしひんがしも見えす  
 して。でけの<sup>天気</sup>こと。かちとりの心にまかせつ。  
 をの子もならはねばいともこゝろぼそし。ま  
 してをんなはふなぞこにかしらをつきあてゝ  
 ねをのみぞなく。かくおもへば。ふなこかちと  
 りはふなうたうたひて。なにともおもへらず。  
 そのうたふうたは。はるのゝにてぞねをばな  
 く。わかすゝきにて。手をきるゝつんだるな  
 を。おやゝまほるらん。しうとめやくふらん。  
 かへらや。よんべのうなるもがな。せにこは<sup>縁</sup>  
 ん。そらごとをして。おぎのりわざをして。せ

にもゝてこず。おのれだにこず。これならずおほかれどもかゝず。<sup>イ元</sup>これらを人のわらふをききて。うみはあられども心はすこしなぎぬ。かくゆきくらしして。とまりにいたりて。おきなびとひとり。たうめひとり。あるがなかにこゝちあしくして。物もものしたはでひそまりぬ。<sup>マイ</sup>十日。けふはこのなはのとまりにとまりぬ。十一日。あかつきに船をいだして。むろつをおふ。人みなまだねたれば。海のありやうも見えず。たゞ月をみてぞにしひんがしをばしりける。かゝるあひだに。みな夜あけて。手あらひ。れいのことどもしてひるになりぬ。いましはねといふ所にきぬ。わかきわらは。このところの名をきゝて。はねといふ所は。鳥のはねのやうにやあるといふ。まだをさなきわらはの事なれば。ひとくゝわらふ。ときにありけるをんなわらはなん。このうたをよめる。

まことに名にきく所はねならはとふか如くに都へもかなとぞいへる。をとこもをんなもいかでとく京へもがなとおもふ心あれば。このうたよしとにはあらねど。げにとおもひてひとくゝわすれず。このはねといふ所とふわらはのついでにて。又むかしの人をおもひいで。いづれの時にかわする。けふはましてはゝのかなしがらるゝことは。くだりし時の人のかずたらねば。ふるうたに。かすはたらでぞかへるべらなるといふことをおもひいで。人のよめる。世の中に思ひやれともこをこふる思ひにまさる思ひなき哉といひつゝなん。

十二日。あめふらず。ふんときこれもちがふねのおくれたりし。ならしつよりむろつにきぬ。十三日のあかつきに。いさゝかに雨ふる。しばしありてやみぬ。<sup>男イ</sup>をんなこれかれゆあみなとせんとて。あたりのよろしき所にをりてゆく。



うみをみやれば。

雲もみな浪とそ見ゆるあまもかないつれか海と問て知へく  
となんうたよめる。さてとうかあまりなれば。  
月おもしろし。船にのりはじめし日より。ふね  
にはくれなゐこくよききぬきず。それはうみ  
のかみにおちてといひて。なにのあしかげに  
ことづけて。はやのつまのいずしすしあはび  
をぞこゝろにもあらぬはぎにあげて見せけ  
る。

十四日。あかつきより雨ふれば。おなじところ  
にとまれり。ふなぎみせちみす。さうじ物なけ  
れば。むまどきよりのちにかちとりの昨日つ  
りたりしたひに。せになければ。よねをとりか  
けておちられぬ。かゝる事なほありぬ。かちと  
りまたたひもてきたり。よねさけし(などい)ばぐく  
る。かちとりけしきあしからず。

十五日。けふあづき小豆がゆにす。くちをしくなほ

日のあしければ。あざるほどにぞけふはつか  
あまりへぬる。いたづらに日をふれば。ひとび  
と海をながめつゝぞある。めのわらはのいへ  
る。

たてはたつぬれは又ある吹風と浪とは思ふとちにやある覽  
いふがひなきものゝいへるにはいにつかは  
し。

十六日。風なみやまねば。猶おなじ所にとまれ  
り。たゞ海に浪なくして。いつしかみさきとい  
ふところわたらんとのみなんおもふ。かせ浪  
ともにやむべくもあらず。ある人のこのなみ  
たつを見てよめる歌。

霜たにもおかぬ濁そといふなれと浪のなかには雪を降ける  
さて舟にのりし日よりけふまでに。はつかあ  
まりいつかになりにけり。

十七日。くもれる雲なくなりて。あかつきづく  
夜いとおもしろければ。船をいだしてこぎゆ

く。このあひだに。雲のうへも海のそこも。をなしごとくになんありける。むべも昔のをとこは。さをはうがつなみのうへの月を。ふねはおさふ海のうちのそらを。とはいひけん。きゝざれにきけるなり。またある人のよめる歌。

みな底の月のうへより漕舟の棹にさはるはかつらなるらし  
これをきゝてあるひとの又よめる。

かけみれは浪の底なる久かたの空きわたる我をわひしき  
かくいふあひだに夜やうやくあけゆくに。か  
ちとりらくろき雲にはかにいできぬ風ふきぬ  
べし。みふねかへしてんといひて舟かへる。こ  
のあひだに雨ふりぬ。いとわびし。

十八日。なをおなじところにあり。海あらければ船いださず。このとまり。とほく見れどもちかくみれども。いとおもしろし。かゝれどもくるしければなにごともおもほへず。をとことちは心やりにやあらん。からうたなどいふべ

し。船もいさでいたづらなれば。あるひとのよめる。

いそふりのよする磯には年月をいつともわかぬ雪のみを降  
この歌はつねせぬひとのごと<sup>如</sup>なり。また人のよめる。

風による浪のいそにはうくひすも春もえしらぬ花のみを咲  
この歌どもをすこしよろしときゝて。ふねのをさしけるおきな。つきごろのくるしき心やりによめる。

たつ浪を雪か花かとふく風をよせつゝ人をはかるへらなる  
このうたどもを人のなにかといふを。ある人の又きゝふけりてよめる。その歌よめるもじみそもじあまりなゝもじ。人みなえあらでわらふやうなり。うたぬしいとけしきあしくてゑず。まねべどもえまねばず。かけりともえよ<sup>すい</sup>みあゑがたかるべし。けふだにいひがたし。ましてのちにはいかならん。

十九日。ひあしければふねいださず。

廿日。きのふのやうなれば船いださず。みなひとびとうれへなげく。くるしく心もとなければ。たゞ日のへぬるかすを。けふいくか。はつかみそかとかぞふれば。およびもそこなはれぬべし。いとわびし。よるはいもねず。はつかの夜の月いでにけり。山のはもなくて。海のなかよりぞいでくる。かうやうなるを見てや。むかしあべのなかまろといひける人は。もろこしにわたりてかへりきける時に。船にのるべきところにて。かのくにびとむまのはなむけし。わかれをしみて。かしこのから歌つくりなとしける。あかずやありけん。はつかの夜の月出るまでぞありける。その月は海よりぞいでける。これを見てぞなまろのぬし。わがくにはかゝるうたをなん。神代よりかみもよんたび。いまはかみなかしもの人も。かうやうに

わかれをしみ。よろこびもあり。かなしびもある時にはよむとてよめりける歌。

青海原ふりさけみればかすかなるみかさの山に出し月かもとぞよめりける。かのくに人きゝしるまじくおもほへたれども。ことの心をおとこもじにさまをかきいだして。このことばつたへたる人にいひしらせければ。心をやきゝえたりけん。いとおもひの外になむめでける。もろこしとこの國とはこと／＼なるものなれど。月の影はおなじことなるべければ。人の心をもなじことにやあらん。さていまそのかみをおもひやりて。あるひとのよめる歌。

都にて山のはに見し月なれとなみよりいて、浪にこそいれ

うみ実

廿一日。うの時ばかりに船いだす。みなひとびとのふねいづ。これを見れば。春のうみに秋のこの葉しも。ちれるやうにぞありける。おぼろげの願によりてにやあらん。風もふかすよき

日いできてこぎゆく。このあひだに。つかはれんとてつきてくるわらはあり。それがうたふふなうた。猶こそくにかたはみやらるれ。わがちゝはゝありとしおもへば。かへらやとうたふぞあはれなる。かくうたふをきゝつゝこぎくるに。くろとりといふ鳥いはのうへにあつまりをり。そのいはのもとに浪しろくうちやす。かちとりのいふやう。くろ鳥キイのもとにしるきなみをやすとぞいふ。このこと葉なにとにはなけれども。物いふやうにぞきこへたる。人の程にあはねばとがむるなり。かくいひつづゆくにふなぎみなる人。なみを見て。國よりはじめてかいぞくむくひせんといふなる事をおもふうへに。海のまたおそろしければ。かしらもみなしらけぬ。なゝそぢやそぢはうみにあるものなりけり。

わかみ雪と磯への白浪といつれまされり沖つしまもり

とかちとりいへり。

廿二日。よんべのとまりよりことゞまりをおひてぞゆく。はるかに山見ゆ。としこゝのつばかりなるをのわらは。としよりはをさなくぞある。このわらは。船をこぐまにく。山もゆくに見ゆるをみて。あやしきこと歌をぞよめる。〔その歌〕。

漕てゆく舟にて見れば足曳の山さへゆくをまつはしらすやとぞいへる。をさなきわらはのことにてはにつかはし。けふ海あらげにて。いそに雪ふりなみの花さけり。あるひとのよめる。

浪とのみひとへにきけと色見れば雪と花とにまかひける哉廿三日。ひてりてくもりぬ。このわたりかいぞくのおそりありといへば。神ほとけをいのる。廿四日。きのふのおなじところなり。

廿五日。かちとりのきた風よからぬイあしといへば。船いださず。かいぞくおひくといふ事たへずき



こゆ。

廿六日。まことにやあらん。かいぞくおふといへば。夜なかばかりより船をいだしてこぎく。道にたむけする所あり。かちとりしてぬさたひまつらするに。ぬさのひんがしへちれば。かちとりのまうしてたてまつる事は。このぬさのちるかたにみふねすみやかにこがしめ給へとまうしてたてまつる。これをきゝて。あるめのわらはのよめる。

わたつみのちふりの神に手向する幣の追風やますふかなんとぞよめる。このあひだに風のよければ。かちとりいたくほこりて。船にほあげなどよろこぶ。そのおとをきゝて。わらはもおきなもいつしかとしおもへばにやあらん。いたくよろこぶ。このなかにあはちのたうめといふ人のよめるうた。

おひかせのふきぬる時は行舟のほてうちて社嬉しかりけれ

とぞ。ていけのことにつけていのる。

廿七日。かせふきなみあらければ船いださず。これかれかしこくなげく。をとこたちの心なぐさめにからうたに。日をのぞめばみやことほしなどいふなることのさまをきゝて。あるをんなのよめる歌。

日なたにも天雲近く見るものを都へと思ふみちのはるけさまたある人のよめる。

吹風のたへぬ限りしたちくれば浪路はいとゝ遙けかりけり日ひとひ風やます。つまはじきしてねぬ。

廿八日。夜もすがら雨やます。けさも。

廿九日。ふねいだしてゆく。うら／＼とてりてこぎゆく。つめのいとながくなりたるを見て。ひをかぞふれば。けふは子日なりければきらず。む月なれば京のねの日の事いひいでて。こまつもがなといへど。海なかなればかたしかし。あるをんなのかきていだせる歌。

覺束なけふはれのひかあまならは海松をたにひかまし物を  
とぞいへる。うみにて子日のうたにてはいか  
があらん。またある人のよめるうた。

けふなれと若菜もつます春日野の我漕わたる浦になければ  
かくいひつゝこぎゆく。おもしろきところに。  
船をよせてこゝやいづこととひければ。とさ  
のとまりといひけり。むかしとさといひける  
所にすみけるをんな。この舟にまじれりけり。  
そがいひけらく。昔しばしありし所のなたぐ  
ひにぞあなる。あはれ。といひてよめる歌。  
としころなすみし所の名にしおへはきよる涙をも哀とて見る  
とぞいへる。

卅日。あめかせふかす。かいぞくはよるあるき  
せざなりときゝて。夜なかばかりに船をいだ  
して。あはのみとをわたる。よなかなればにし  
ひんがしもみえず。おとこをんなからく神ほ  
とけをいのりてこのみとをわたりぬ。とらう

の時ばかりにぬしまといふ所をすぎて。たな  
がはといふ所をわたる。からくいそぎていづ  
みのなだといふ所にいたりぬ。けふ海になみ  
ににたるものなし。神ほとけのめぐみかうぶ  
れるににたり。けふふねにのりしひよりかぞ  
ふれば。みそかあまりこゝぬかに成にけり。い  
まはいづみのくににきぬれば。かいぞくもの  
ならず。

二月一日。あしたのま雨ふる。むまどきばかり  
にやみぬれば。いづみのなだといふところよ  
りいでてこぎゆく。海のうちへ昨日のごとくに  
風なみ見えず。くろさきの松ばらをへてゆく。  
ところの名はくろく。松の色はあをく。いその  
浪は雪のごとくに。かひのいろはすはうに。  
五色にいまひといろぞたらぬ。このあひだに  
けふは。はこの浦といふ所よりつなでひきて  
ゆく。かくゆくあひだにある人のよめる歌。

たまくしけはこの浦浪たゝぬひはうみを鏡と誰かみさらん  
またふなぎみのいはく。この月までなりぬる  
こととなげきて。くるしきにたへずして。人も  
いふことゝて。心やりにいへるうた。<sup>イナシ</sup>

ひく舟の綱手の長き春の日をよそいかまて我はへにけり  
きく人のおもへるやう。なぞたゞごととなると  
ひそかにいふべし。ふなぎみのからくひねり  
いだして。よしとおもへることを。ゑじもこそ  
しいへとて。つゝめきてやみぬ。にはかに風な  
みたかければとゞまりぬ。

二日。雨風やまず。ひゝとひ夜もすがら神佛を  
いのる。

三日。うみのうへ昨日のやうなれば舟いださ  
ず。風の吹ことやまねば。きしのなみたちかへ  
る。これにつけてよめるうた。

をゝよりてかひなきものはおち積る涙の玉をぬかぬなり見  
かくてけふ暮ぬ。<sup>はい</sup>

四日。かちとりけふかせ雲のけしきはなはだ  
あしといひて。船いださずなりぬ。しかれども  
ひねもずに浪かせたゝず。このかちとりは日  
もえはからぬかたゐなりけり。このとまりの  
はまには。くさぐさのうるはしきかひいしな  
どおほかり。かゝればたゞむかしの人をのみ  
戀つゝ。ふねなる人のよめる。

よする浪打もよせなむ我こふる人わすれ貝おりてひろはん  
といへれば。<sup>（のイナシ）</sup>ある人のたへずして。ふねの心や  
りによめる。

忘貝ひろひしもせし白玉をこふるをたにも形見とおもはむ  
となんいへる。をんなの<sup>こい</sup>のためにはおやをさな  
くなりぬべし。玉ならずもありけんを<sup>（死にしこい）</sup>と人い  
はんや。されどもしゝこかほよかりきといふ  
やうもあり。猶おなじところに日をふること  
をなげきて。あるをんなのよめるうた。

てをひて、寒さもしらぬ泉にそ汲とはなしに日比へにける

五日。けふからくして。いづみのなだよりをつ  
のとまりをふ。松ばらめもはるくなり。こ  
れかれくるしければよめるうた。

ゆけとなをゆきやられぬは妹かうむをつの浦なる岸の松原  
かくいひつづくるほどに。ふねとくこげ。ひの  
よきにともよほせば。かちとりふなこどもに  
いはく。みふねよりおほせたぶなり。あさきた  
のいでこぬさきにつなではやひけといふ。こ  
のこと葉のうたのやうなるは。かちとりのを  
のづからのことばなり。かちとりはうつたへ  
にわれうたのやうなることいふともあら  
ず。きく人のあやしうためきてもいひつる  
かなとてかきいだせれば。げにみそもじあま  
りなりけり。けふなみなたち。そと人々ひねも  
すにいのる。しるしありて風なみたず。いま  
しかもめむれるてあそぶところあり。京のち  
かづくよろこびのあまりに。あるわらはのよ

める歌。

祈りくるかさまともふをあやなくも鷗さへたに浪と見ゆ  
といひてゆくあひだに。いし津といふ所の松  
原おもしろくて。はまべとをし。またすみよし  
のわたりをこぎ行。ある人のよめる歌。

今見てそ身をはしりぬる住の江の松より先に我はへにけり  
こゝにむかしつひとのほ<sup>(ベイ)</sup>。ひとひかた時も  
わすれねばよめる。

すみの江に舟さしよせよ忘草しるしありやとつみて行へく  
となん。うつたへにわすれなんとにはあらで。  
戀しきこゝちしばしやすめて。またもこふる  
ちからにせんとなるべし。かくいひてながめ  
つづくるあひだに。ゆくりなくかせふきて。  
こげどもくしりへしぞきにしぞきて。ほと  
ほとしくうちはめつべし。かちとりのいはく。  
この住吉の明神はれいのかみぞかし。ほしき  
ものぞおはすらん。今は<sup>(こはい)</sup>いまめくものか。さて



ぬさをたてまつりたまへといふ。いふにしたがひてぬさたいまつる。かきたいまつれど<sup>「イナシ」</sup>も。もはら風やまで。いやふきにいやたちに風なみのあやうければ。かちとりまたいはく。ぬさにはみ心のいかねば。みふねもゆかぬなり。なをうれしとおもひたぶべきもの。たいまつりたべといふ。またいふにしたがひて。いかゞはせんとて。まなこもこそふたつあれ。たゞひとつあるかゞみをたいまつるとて。海にうちはめつれば。いとくちおし。さればうちつけに海はかゞみのことなりぬれば。あるひとのよめる歌。

千早振神のこゝろある、海に鏡をいれてかつみつるかな  
いたくすみのえわすれぐさ岸の姫松などいふ  
かみにはあらずかし。めもうつら／＼。かゞみに神のこゝろをこそは見つれ。かちとりの心はかみのみ心なりけり。

六日。みをつくしのもとよりいで。なにはに<sup>つ</sup>つきて。かはじりにいる。みな人々をんなおきな。ひたひにてをあて、よろこぶ事ふたつなし。かのふなゑひのあはぢのしまのおほいこ。みやこちかくなりぬといふをよろこびて。ふなぞこよりかしらをもたげて。かくぞいへる。いつしかといふせかりつる難波瀉蘆漕そけてみふれきに曳いとおもひのほかなる人のいへれば。ひとびとあやしがる。これがなかにこゝちなやむふなぎみいたくめでて。ふなゑいしたうべりしみかほにはにすもあるかなといひける。

七日。けふかはじりに船いりたちてこぎのぼるに。川の水ひてなやみわづらふ。ふねののぼることいとかたし。かゝるあひだにふなぎみの病者。もとよりこち／＼しき人にて。かうやうのことさらにしらざりけり。かゝれどもあはちたうめのうたにめでて。みやこぼこりに

もやあらん。からくしてあやしきうたひねり  
いだせり。そのうたは。

きときは川の堀江の水を浅み舟も我みもなつむけふかな  
これは。やまひをすればよめるなるべし。ひと  
うたにことのあかねば今ひとつ。

とくと思ふ舟なやますは我ために水の心のあさきなりけり<sup>るへし</sup>  
このうたはみやこちかくなりぬるよろこびに  
たえずしていへるなるべし。あはぢのこのう  
たにおとれり。ねたきいはずらましものをと  
くやしがるうちに。よるになりてねにけり<sup>いりてねにけり</sup>。

八口。なほかはのぼりになづみて。とりかひの  
みまきといふほとりとまる。こよひふなぎ  
みれいのやまひおこりていたくなやむ。ある  
人あさらかなる物もてきたり。よねしてかへ  
りごとす。をとこどもひそかにいふなり。いひ  
ほしてもてるとや。かうやうの事ところ<sup>もつる</sup>く  
にあり。けふせちみすればいをもちひず。

九日。こゝろもとなさに。あけぬから船をひき  
つゝのぼれども。河の水なければ。ゐざりにの  
みぞゐざる。このあひだにわたのとまりのあ  
かれのところといふ所あり。よねいほなどこ  
へばおこなひつ<sup>をくりつ</sup>。かくてふねひきのぼるに。な  
ぎさの院といふ所を見つゝゆく。その院。むか  
しをおもひやりてみれば。おもしろかりける  
ところなり。しりへなるをかには松のきども  
あり。なかの庭にはむめのはなさけり。こゝに  
ひと人のいはく。これむかし名だかくきこへ  
たるところなり。故これたかのみこのおほん  
ともに。故ありはらのなりひらの中將の。世の  
なかにたえてさくらのさかさらは春の心はの  
とけからましといふ歌よめる所なりけり。い  
まけふある人ところ<sup>もつる</sup>ににたるうたよめり。

千世へたる松にはあれといにしへの聲の響きは變らさり見  
またある人のよめる。

君こひてよなふるやとの梅の花むかしの香にそ猶匂ひける  
といひつゝぞ。都のちかづくをよろこびつゝ  
のぼる。かくのぼる人々のなかに京よりくだ  
りし時にみなひと子どもなかりき。いたれり  
し國にてぞ子うめるものども有あへる。人み  
な船のとまる所にいだきつゝおりのりす。こ  
れを見てむかしのこのはゝ。かなしきにたへ  
ずして。

なかりしも有つゝ歸る人の子を有しもなくてくるか悲しさ  
といひてぞなきける。ちゝもこれをきゝてい  
かゞあらん。かうやうの事ども。うたもこのむ  
とてあるにもあらざるべし。もろこしもこゝ  
も。おもふことにたへぬ時のわざとか。こよひ  
うどのといふところにとまる。

十日。さほることありてのぼらず。

十一日。あめいさゝかふりてやみぬ。かくてさ  
しのぼるに。ひんがしのかたに山のよこほれ

るをみて人にとへば。やはたのみやといふ。こ  
れをきゝてよろこびてひとくゝをがみたてま  
つる。山ざきのはしみゆ。うれしきことかぎり  
なし。こゝに相應寺のほとりにしばし船をと  
どめて。とかくさだむることあり。このてらの  
きし<sup>の</sup>ほとりにやなぎをほくあり。ある人この  
やなぎのかげの河のそこにうつれるを見てよ  
める歌。

さゝれ涙よするあやをば青柳の影の糸しておるかと思ふ  
十二日。やまざきにとまれり。

十三日。なほやまざきに。

十四日。あめふる。けふくるま京へとりにや  
る。

十五日。けふくるまゐてきたり。船のむづかし  
さに。ふねより人の家にうつる。このひとのい  
へよろこべるやうにてあるじしたり。このあ  
るじのまたあるじのよきを見るにうたておも

ほゆ。色々にかへりごとす。家の人のいでいりにくげならずゐやゝかなり。

(リイナシ)

十六日。けふのようさりつかた京へのぼるついでに見れば。山ざきのこびつのゑもまかりのおほ<sup>ほら</sup>ちのかたもかはらざりけり。うるひとの心をぞしらぬとぞいふなる。かくて京へいくに。しまざかにてひとあるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちてゆきしときよりは。くる時<sup>(かへるイ)</sup>ぞ人はとかくありける。これにも。かへりごとす。夜るになして京にはいらんとおもへば。いそぎしもせぬほどに月いでぬ。かつら河月のあかきにぞわたる。ひとくのはく。この川あすかがはにあらねばふち瀬さらにかはらざりけりといひて。ある人のよめるうた。

久かたの月におひたる桂川をこなるかけもかはらざりけり  
またある人のいへる。

あま雲のはるかなりつる桂川袖をひてゝもわたりぬるかな  
またある人よめる。

かつら川わか心にもかよはれと申し深さになかるへらなり  
京のうれしきあまりにうたもあまりぞおほかる。夜ふけてくればところくも見えず。京にいたりたちてうれし。家にいたりてかどにいるに月あかければ。いとよくありさま見ゆ。きしよりもましていふかひなくぞこぼれやぶれる。家をあづけたりつる人の心もあれたるなりけり。なかがきこそあれ。ひとついへのやうなれば。のぞみてあづかれるなり。さるはたよりごとに物もたへずえさせたり。こよひかかることゝこはだかにものいはせず。いはつらく見ゆれど。こゝろざしはせんとす。さていけめいてくぼまり水つける所あり。ほとりに松もありき。いつとせむとせのうちにちとせやすぎにけん。かたへはなくなりけり。



いまおひたるぞまじれる。おほかたのみなあれにたれば。あはれとぞひとくいふ。思ひいでぬことなくおもひ戀しきがうちに。この家にてうまれしをんなごのもろともにかへらねば。いかゞはかなしき。ふなびともみなこたかりてのゝしる。かゝるうちに猶かなしきにたへずして。ひそかに心しれるひとゝいへりけるうた。

むまれしも返らぬものを我宿に小松のあるを見るか悲しさとぞいへる。なをあかずやあらん。またかなん。

見し人の松の千年にみましかは遠く悲しきわかれせましやわすれがたくくちをしきことおほかれど。えつくさず。とまれかうまれ。とくやりてん。

延長八年庚寅土佐の國にくだりて。承平五年乙未京にのぼりて。左大臣殿しら河殿におはします

御ともにまうでたる。歌つかふまつれとあればよめる。

百草のはなのかけまてうつしつゝ音もかはらぬ白河の水

本云

土佐日記。以三貫之自筆本。故將軍御物希代之靈寶所申出也。今度密々自小河御云々。依人或人數寄深切所望書之。古代假名猶三科蚪。末愚臨寫有魯魚之哉。後見輩察之而已。

明應壬子仲秋候

亞槐藤原 判

右土佐日記以作者自筆轉寫本書寫雖假名遣相違多不敢私改而以扶桑拾葉集及流布印本按合畢

いほぬし

## 増基法師

いつばかりのことにかありけん。世をのがれて。このろのまゝにあらむとおもひて。世のなかにきゝときく所々。おかしきをたづねて心をやり。かつはたうときところへおがみたてまつり。我身のつみをもほろぼさむとある人有<sup>すい</sup>けり。いほぬしとぞいひける。神無月の十日ばかり熊野へまうでけるに。人々もろともになどいふもの有けれど。我心ににたるもなかりければ。たゞ忍びてとうしひとりしてぞまうでける。京より出るひやはたにまうでてとまりぬ。その夜月面白うて。松の梢に風すゞしくて。むしの聲もしのびやかに。鹿の音はるかにきこゆ。つねのすみかならぬ心地も。よのふけ行にあはれなり。げにかゝれば。神もすみ給ふなめ

りと思ひて。

こゝにしもわきて出ける石清水神の心をくみて知はやそれより二日といふ日の夕ぐれにすみよしにまうでつきぬ。みればはるかなる海にていとおもしろし。南には江ながれて。水鳥の様々なるあそぶ。あまの家にやあらん。あし垣のやのいとちいさきともあり。秋の名残夕ぐれのそらのけしきもたゞならずいとあはれなり。みやしろには庭も見えず。色々さまざまなるもみぢちりて冬ごもりたり。經などよみ聲して人しれずかくおもふ。

ときかけつ衣の玉は佳のえの神さひにける松の梢にかくてやしろくくにさぶらひていのり申やう。この世はいくばくにもあらず。水のあは草の露よりもはかなし。さきの世のつみをほろぼして。行末のぼだいをとらんとおもひ侍る心ふかうて。世をいとふこと。おもひ

をこたらずあらんによりてなり。ねがはくはわれ。春は花を見。秋はもみちを見ると。にはひにふれ色にめでつる心なく。朝の露夕の月をみるとも。せけんのはかなきことををしへ給へ。

世中をいとひ捨てんのちはたゝ住のえにある松とたのまむいづみなる信太の もりにてあるやう有べし。

我思ふことのしけさキイに比ふれば信太の杜の千えはものかはきの國の吹上のはまにとまれる月いとおもしろし。此濱は天人常にくだりてあそぶといひ傳へたる所なり。げにそもいとおもしろし。今宵のそらも心ぼそうあはれなり。夜のふけゆくまゝに。かものうはげの霜うちはらふ風も空さびしうて。たづはるかにて友をよぶ聲もさらにいふべきかたもなう哀なり。それならぬさまぐの鳥ども。あまた

洲崎にもむらがれてなくも。心なき身にもあはれなることかぎりなし。

をとめか天の羽衣ひきつれてむへもふけ井の浦におる覽月の海のおもにやどれるを。浪のしきりあらふを見て。

月に濱かゝるおり又ありきやとふけぬの浦の蟹にとはゝや波いとあはれなるよしを。また。

濱にもあれかゝるよの又有はこそ昔をしれる海士も答へめふき上の濱にとまれる。夜ふかくそこをたつに。なみのたかう見ゆれば。

あまのとを吹上の濱に立濱はよるさへみゆる物にそ有けるしゝのせ山にねたる夜。しかの鳴をきゝて。うかれけむ妻のゆかりにせの山の名を尋れてや鹿もなく覽いはしろの野にねたる夜。あるやうあるべし。

石代のもり尋てといはせはやくよか松はむすひはしめしちかの濱浦イにこいしひろふとて。

うつ濱にまかせてをみん我拾ふはまゝの數に人もまさらし

みなへの濱にしりたる人のみやまより歸るにあひぬ。同じうはもろともにまて給へかしといへば。かへる人。忍びて申給ふこともこそあれといへば。いほぬし。なにごとにかあらん。ものうたがひはつみうなりとて。ひろひたる貝を手まさぐりになげやりたれば。ものあらがひぞまさるなる。かうなあらがひ給そとて。かうなのからをなげをこせたり。また浪にもうかびてうちよせらるゝを。かれ見給へ入ぬるいそのといへば。かへる人。こふる日はと心ありがほにいへば。いほぬし。くまのおのづからといへば。浦のはまゆふといらふる<sup>に</sup>いほぬし。かさねてだになしとこそといへばかへる人。中々にとて。もしは草浪はうつむとうつめともいや現れに現れぬかりいほぬし返し。

みくまの、浦にきよす、濡衣のなき名をすゝ程と知なむ

などいひてたちぬ。さらば京にてといへば。いほぬし。おさふる袖のといらふれば。あなゆゝしや。後瀬の山になどいひてたちぬ。その夜むろのみなとにとまりぬ。きのもとに柞のもみぢして。いほりつくりて入ふしぬるに。夜のふくるまゝに時雨いそがしうふるに。

いとゝしくなけかしきよを神無月旅の空にもふる時雨哉  
御山につくほどに。木のもとごとくに手向の神おほかれば。水のみにとまる夜。

萬代の神てふかみにたむけしつ思ひと思ふことはなりなん  
それより三日といふ日御山<sup>地</sup>につきぬ。こゝかしこめぐりて見れば。あむ<sup>室</sup>ぢちども二三百ばかりをのがおもひくにしたるさまもいとおかし。したしうしりたる人のもとにいきたれば。みのをこしにふすまのやうにひきかけて。ほだくひといふものを枕にし



て。まろねにねたり。やゝといへば。おどろ  
きて。とくいり給へといひていれつ。おほん  
あるじせんとて。こいしけのおほきさなる  
いものかしらをととり出てやかす。これぞい  
ものはゝといへば。さはちのあまさやあら  
んといへば。人の子にこそくはせめといひ  
て。けいめいすれば。さてかねうてば御堂へ  
まいりぬ。かしらひきつゝみて。みのうちき  
つゝ。こゝかしこにかずしらずまうであつ  
まりて。れいしはてゝまかり出るに。あるは  
そ上の御まへにとゞまるもあり。らい堂の  
なかのはしらいのもとに。みのうちきつゝ忍び  
やかにかほ引いれつゝあるもあり。ぬかづ  
きだらによむもあり。さまぐにきゝにく  
くあらはにそと聞もあり。かくてさぶらふ  
ほどに。霜月の御はかうになりぬ。そのあり  
さまつねならずあはれにたふとし。はかう

はてゝのあしたに。ある人かういひをこせ  
たり。

をろかなる心の暗にまといつゝ浮世にめくる我身つらしな  
いほぬしもこの事をまごゝろにたう心を佛  
のごとしとおもふ。

白妙の月また出ててらさなむかさなる山の遠おくにいと  
また年ごろ家につくせることをくいて。

玉のをむすふ心のうらもなく打とけてのみ過つしけるかな  
さてさぶらふほどに。霜月廿日のほどのあ  
すまかでなむとて。をとなし川のつらにあ  
そべば。人しばしさぶらひ給へかし。神もゆ  
るし聞え給はじなどいふほどに。かしらし  
ろきからすありて。

山後拾からすかしらも白く成にけり我がへるへき時やきの覽

さて人のむろにいきたれば。ひのきを人の  
たくか。はしりはためくをととりて侍まれば。む  
ろのあるじ。この山はほだくひけんありて。

はた／＼とぞ申すといへば。たきごゑならむといひてたちぬ。さてみふねじまといふ所にて。

山おイ  
そこのな<sup>おイ</sup>に誰さはさしてみふね嶋神の泊りにとよさせけむたゞの山のたきのもとにて。

名にたかく早くよりきし瀧の糸に世々の契りを結びつる哉。この山のありさま。人にいふべきにあらず。あはれにたうとし。かへるとて。そこにかひひろふとて袖のぬれければ。

藤衣なきさによるうつせ貝ひらふたもとはかつそ濡けるこの濱の人。はなのいはやのもとまでつきぬ。見ればやがて岩屋の山なる中をうがちて經をこめ奉りたるなりけり。これはみろくぼとけの出給はんよにとり出たてまつらんとする經なり。天人つねにくだりてくやうし奉るといふ。げに見奉れば。この世ににたる所にもあらず。そとばのこけにうづも

れたるなどあり。かたはらにわうじのいはやといふあり。たゞ松のかざりある山也。その中にいとこきもみちどもあり。むげに神の山と見ゆ。

法こめてたつの朝をまつ程は秋の名こりを久しかりける夕日に色まさりていみじうおかし。

心あるありまの浦のうら風はわきて木の葉も残す有けり天人のおりてくやうし奉るを思ひて。

天津人いはほをなつる袂にや法のちりをばうちばらふ覽四十九院のいはやの　もとにいたる夜。雪のいみじうふり。風わりなくふけば。

うら風に我こけ衣ほしわひて身にふりつもる夜半の雪かなたてが崎といふ所あり。みイかものたゝかひしたる所とて。たてをついたるやうなるいはほどもあり。

打浪に満くる汐のたゝかふをたてか崎とはいふにそ有ける伊勢の國にてしほのひたる程に。見わたり

といふはまをすぎむとて。夜なかにおきてくるに。道も見えねば。松ぼらの中にとまりぬ。さて夜のあけにければ。

よをこめていそきつれ共松の根に枕をしてもあかしつる哉あふ坂ごえしてやすむほどに。雪うちふりなどす。ものゝ心ぼそければ。なちの山にとまりなましものを。いづちとていそぎつらんなどおもふほどに。きあひたる人。いかで關はこえさせ給ひつるぞなどいふにつけてかうおぼゆ。

雪とみる身のうきからにあふ坂の關もあへぬは泪なりけりとてたちぬ。つゝみのもとにて。京極の院のついづくづれ。金衆むまうしいりたち。女どもなどかさをきて。こむくうちありくをみるに。ことのおはせし時思ひあはせられて。なを世中かなしやなどおもふ。

けにそ世は鴨の川浪たちまちに淵もせになる物には有けり

など。見ることの木艸につけていはれける。かもに葉月ばかり。すぐむしのいみじうなき侍りしかば。

聞からにすこさそまざるはるかなる人を忍ふる宿の鈴虫おぎおほかる家にて。風のふき侍に。よの中のはかなきことなど思たまへられて。

いかにせむ風にみたるゝ萩の葉の末はの露に異ならぬみを秋のゝに鹿のしからむ萩のはのすゑはの露の有かたのよやおなじ月の十日ごろに月いづるまで侍しに。たゞ入にいり侍しかば。これと思ふやう侍りて。

さもあらはあれいってゝさも入ねはみるへき人のある都かはおなじころ。つれづれにねられて侍しに月のいで侍ければ。

新古今天原はるかにひとりなかわれは袂に月のいてにけるかなそのころのことにや侍けん。いつとも侍らねども。

つれなくてをさふる袖のくれなゐにまはゆき迄に成にける哉

かものふた<sup>不</sup>經にあひ侍しに。しかのなき侍しかば。

鹿の音にいとゝわりなさまりけり山里に社秋はすませめ  
すどか山に。

をとにきく神の心をとろく<sup>神</sup>とすゝかの山をならしつる哉  
かはのまゝに<sup>神</sup>かん<sup>旅</sup>だちにまかりしに。かは  
なみのいみじうたちしかば。

わりなくも心一つをくたかなよをへて岸にたつ浪はたゝ  
つのくになるてらにまかりけるに。神なび  
のほどにしかのなきければ。

我ならぬ神なび山のまさきへてつのまく鹿もれこそ鳴けれ  
よのこゝろうきこゝろひとつに思わびて。

君たにもみやこなりせは思ふ事まつかたらひて慰めてまし  
十月かもにこもりて。あかつきがたに。

みつかきにふる初雪を白妙のゆふしてかくと思ひけるかな  
二三日侍てきぶねのもと<sup>の</sup>宮に侍しに。む  
らぎえたる雪ののこりて侍しかば。うちと  
けぬことや思いでけん。

白雪のふるかひもなき我身こそきえつゝ思へ人はとはぬを  
もみちのえもいはず見え侍しかば。みくら  
し侍て。夜になしていで侍とて。

紅葉はの色のあかさにめをつけてくらまの山に夜たとる哉  
ある人のはつ雪のふり侍しつとめて。きく  
にさしていひて侍し。

ませの中に移るふ菊のけさいかに初雪といはぬ君を恨みん  
かへし。

初雪のふるにも身こそ衰なれとふへき菊のそのしなけれは  
あけぼのにながめたちて侍しに。きりのい  
みじうみるまゝにたちわたりて。そらに見  
ゆらんとまことにいひ侍ぬべかりしかば。  
からにしき染る山には立田姫きりのまくを引まはしたる  
かたらふ<sup>ゆ</sup>そ<sup>ゆ</sup>うのまうでこで。かはもにさし  
て。

こゝにとてくるをは神もいさめしを御手洗川の川藻成とも  
かへし。

みな人のくるにならひて御手洗のかはも尋れず也にける哉



みた し川のつらに侍しに。もみぢのかたへはきくにあをばなみはへしを。人々みたまへてかへり侍てみえず侍しに。ちり侍しかば。

御手洗のもみぢの色は川のせに淺きも深くなりはてにけり京よりまうできたりける人の侍らざりけるほどにまうできて。かういひをきてまかりにける。しものみやしろなりしほどに。

みたらしのかさりならては色のみえつゝかゝらましやはとてまかりにければ。こと人をかくなんとひていざなひて。はし殿にもろともに侍しに。日のくれ侍しかば。

ひとの落る御手洗川の紅葉はなよにいろまでも折てみる哉夜ねられ侍ぬまゝにきゝ侍れば。まことに夜中うちすぐるほどに。ちどりのなき侍しかば。

曉やちかくなるらんもろとにかならずもなく川千鳥かな

神のおまへによるあかつきとさぶらひての御事をいのり申に。

いひいづれは涙さし出る人の上を神もあはれや思すくらししものをきて侍しつとめて。もみぢはいかにと人のいひて侍しに。

なく霜のあさふす程やあらん今一日たにみぬはもみぢ紅葉のちりはてがたに風のいたうふき侍しかば。

おちつゝも庭をたにとてみるものをうたて嵐の吹はらふ覽十月一日かんしに人々うたよみしに。

もみぢ葉のこのもとゝしにみもわす心をのみも廻らかす哉つきぞ。

山のはな出かてにする有明の月は光そほのかなりけるしぐれぞ。

ことそとて思ふともなき衣手に時雨のいたく降にけるかなあるそうのみやしろに一夜さぶらひてまかでけるに。しものみやしろにまうでて侍しほどに。かくかきてすだれにさしはさみて

まかりにける。

たひのいもれて心みつ草枕霜のおきつるあかつきそうき  
返いひにつかはしう。

さてをしれしもの社もよをへてはおきつゝかよふ我衣手を  
神に申侍し。よにはべるかひ侍らぬをこゝ  
ろにかなふなどおぼえ侍しかば。ながれむ  
のちの名も。しらでやはべりなましなどお  
もひ給へられ侍しかば。身をやなげてまし  
とおぼえ侍て。

ひたふるに頼むかひなき浮身をは神もいかに思なりなん  
まかりいでしに。きぶねに。

うきことのつゐにたえずは神にさへ恨を残す身とや成なん  
かたをかのすぎにむすびつけし。

片岡のいかきのすきしるしあらは夕暮毎にかけて忍はん  
いひちぎる事ありける人に。

契をきし大和なてしこ忘るなよめまに露の玉きえぬとも  
こまかなる文を尋えてうれしき事の侍に。

うきこともきみかゝたまつみつるより露残さすそ思捨つる

のぼらん事。はるかに人ののたまへるに。く  
らうなるほど。しとみおろす人のなどかさ  
てはといふに。おもふたまへし。

思やるかたしなればつれ／＼と

よろづに思ひやりきこゆるに。しだりを  
とのみ思ひしられ侍。みによりづしられ侍  
て。

かくしあらは冬のさむしろ打拂ふよはの衣手今やぬらん  
風にはかにおこり侍て。宮しろよりまかり  
いで侍て。

かつらきのくめの岩橋しるまではと思ふ命の絶ぬへきかな  
きくやうある人に。

した紐は結びをきけん人ならてまた打とけむ事やものうき  
返し。

濡衣につけゝん紐はきながらも結びもしらすときも習はず  
すのりとりにとて。人々あまたまうできて。  
かりたてゝゐてまうできたるに。これをと  
思ふ人や侍けん。よ半のけしきぞいとあは

れに侍や。

すのりとるぬまかは水におり立て取にもまつ袖は濡ける  
さきく見る人のねごろになりて。うとう  
もてなして侍に。月のあはれなりし夜。

ほのかにもほのみしものを遙かにも雲かくれ行空の月かな  
これはとをたあふみの日記。

三月十日。あづまへまかるに。つゝみてあひ  
みぬ人をおもふ。

都いつるけふ計りたにはつかにも逢みて人に別れにしかは  
あはたでらにて京をかへり見て。

都のみかへりみられしあつま路に駒の心にまかせてそゆく  
せきやまの水のほとりにて。

せき水に又衣手はぬれにけりふたむすひたにのまぬ心に  
人のとうくだりねといひしをせきいづるほ  
どに思いでて。

うかりけり身は東路の關守も思はえこそイはくしてとめさりけり  
阿田をかたのはらといふ所をめぐるに。

うきなのみおひ出る物を雲雀ある岡田の原をみすて、そ行  
かゞみ山のみねに雲ののぼるを。

鏡山いとてみつるわか身にはうきより外の事なかりけり  
あかつきにきじのなくを。

すみなれののへにをのれは妻とれて旅きイゆくかほに鳴雛子哉  
はるかにひえの山をみて。あすよりはかく  
れぬべしと思て。

けふ計りかすまさらなんあかて行都の山をあれとたにみん  
むかしこもりてをこなひ侍し山里寺イの火にや  
けて。ありしにもあらずなりて。あむすし祭つち  
のまへにありしやまぶきの草のなかにまじ  
りて所々あるを。

あたなりとみるく植し山吹の花の色しもくたらさりけり  
また。

山吹のしるしばかりもなかりせはいこな住し里としらまし  
そこよりくだるに日くれぬ。かたらひしひ  
じりのある所にまかりたれば。その人はし  
にけり。もろともにはじめはべりしに。ふけ雲

かうをこなふとて。人々あまた侍れど。みもしらぬ人なり。ひとをよびいだしていふ。

われをとふ人こそなけれ昔みし都の月はおもひいつらん又こと人々のさるべきもなくなりけりときつて。

なそもかくみとみし人は消にしをかひなき身しも何留り劍すのまたのわたりにてあめにあひて。そのよやがてそこにとまりて侍に。こまどもあまたみゆ。

澤にすむこまほしからぬ道にいて、日暮し袖を濡しつる哉おはりなるみのうらにて。

かひなきは猶人しれすあふことの遙なるみのうらみ成けりふたこ山にて。つゝじのはるぐと咲て侍に。

からくにのにしなりとてくらへみむ二村山の錦にはしその夜こふにとまる。このをりしのをかに人々とまりて。きたなどいふべきにもあらず。かしは木のしたにまくひきてやどり侍

て。人しれずおもふことおほう侍に。曉がたに。

れらるやとふしみつれとも草枕有明の月も西にみえけりしかすがのわたりにて。わたしもりのいみじうぬれたるに。

旅人のとしも見えれとしかすかにみなれてみゆる渡守哉みやち山の藤のはなを。

紫のくもとみつるはみや地山名高き藤のさける也けりたかし山にてすへつきつくるところときて。

たつならぬ高師の山のすへつくり物思ひをそやくとすと聞はまなののはしのもとにて。

人しれすはまなの橋のうちわたりし歎を渡るいくよなきやはしのこぼれたるを。

中絶て渡しもはてぬ物ゆへになに、はまなの橋をみせけんまかりつきてのち雨のふり侍にければ。かくおぼえ侍。

誰に言むひまなき比のなかめかる物思ふ人の宿りからかと



ほとゝぎすのこゑをきゝて。

此比はれてのみそまつ時雨<sup>〔鳥カ〕</sup>しはし都のものかたりせよ

はこ鳥のなくをきゝ侍て。

故郷のことつかとてはこ鳥のなくをうれしと思ひける哉  
ぬなはのながきを人のもてまうできたるを  
みて。

我ならはいけといひても浮ぬなは遙にくるはまつ留てまし  
夜ぶかくほとゝぎすをきゝて。

身をつめは哀れとそきく時鳥よをへていかゝ思へはかなし  
五月五日。あめのふり侍に。

世の中のうきのみまさるなめには菖蒲のれ社先流れけれ  
たちばなの木に郭公のなき侍に。

郭公花たちはなのかはかりになくはむかしや戀しかるらん  
山里<sup>寺</sup>よりむめをもてまうできたるをみて。

部にはしつえの梅も散はてゝたゝ香はかりの露<sup>のイ</sup>やなくらん  
ほとゝぎすのなくを。

我はかりわりなく物や思ふらん夜ひるもなくほとゝぎす哉  
六月七日。またつとめて。

夏山のこのしたかけに置露のあるかなきかのうき世成けり  
よもすがら月をながむる曉に。

つれくと思まれともよもすからみらるゝものは大空の月  
つごもりにねられず侍まゝに。夜ふくるま  
で侍て。

そらはると闇のよるく眺むれば哀れに物そ見え渡りける  
おなじ月の六日。つゆのほたるにかゝりて  
侍りければ。

戀わひてなくさめにする玉つきにいとゝもまさる我涙かな  
<sup>しイ</sup>

七日のつとめて。かはらへ人のいざと申に。  
たなはたのあまの羽衣すきたらはかくてや我を人の思はん  
おなじ日。うらやまれぬるなど思ひ侍て。

七夕をもとかしとみし我身しもはてはあひみぬ例とをなる  
又。

逢ことわけふとたのめて待たにもいか計りかはあるな七夕  
ある僧のもとよりをみなへしををこせて。  
白露のなくに咲けるをみなへしよ半にやいりて君をみる覽  
おとこのこと所よりかよふ人のちとより。

つくろふ人侍らねば。いとことやうになん  
とて。うりををこそせて侍に。

秋ことにたゝみるよりはうりふ山我そのにやはなり試みぬ  
あか月にむしのなくを。

きゝしかなわかこと秋のよもすかられられぬ儘に虫も鳴也  
あるそうののぼり侍らん事とひて侍しに。

君はおもふ宮古はこひし人しれすふたみちかけて歎比哉  
きくをいとおほううへて侍に。のぼり侍な  
んとてむすびつけ侍し。

みつきなほふる郷もこそ忘らるれこの花さかぬまつ歸り南  
をちゝうるこどものはゝの。ことおとこに  
つきてはべれば。いみじうなげくよしをき  
き侍て。

その原の梢をみれば箒木のうきを<sup>ほの</sup>きく袖もぬれけり  
かひのすけといふもののごを<sup>さ</sup>いみじうこの  
み侍しにつかはす時。しかのなき侍しに。

よりこをそしかも誠に思ひけるかひよくとこと草にして  
京よりねんごろなる人々の御ふみどもある

に。なくなり給にし人おはせましかばと。み  
ればおぼえ侍て。

今一人そへてやみましたまつさを昔の人のあるよなりせ  
きくにむすびつけしふみのある人のみたま  
ひて。九日。

みつきなく留れと返は思れとけふは<sup>まて</sup>いくといふ花に社みれ  
返し。

眞心によはひしとまる物ならはちゝの秋迄すきもしなまし  
なをい<sup>侍</sup>いでて十一日はまなのはしのもとにと  
まりて。月のいとおもしろきを見侍て。

うつしもて心靜かにみるへきをうたても涙の<sup>た</sup>うち騒<sup>イ</sup>くかな  
夜ふけてしかのなくに。

たかしやま松の木すゑに吹風のみにしむ時を鹿もなきける  
うつろひする所にいはひのこゝろを。

君か代はなるをの浦になみたてる松の千歳を數にあつめん  
このまへになるをのはまといふ所の侍な  
り。さてそのまつは見え侍しなりとぞ。

右いほぬし一卷以亞相爲氏卿眞蹟書寫以扶桑拾葉集及  
一本校合畢

群書類從卷第三百二十八

紀行部二

さらしな日記

菅原孝標朝臣女

あづまぢの道のはてよりもなをなをおくつかたに  
おひ出たる人。いかばかりかはあやしかりけ  
むを。いかに思ひはじめける事にか。世中にも  
のがたりといふもののあんなるを。いかでみ  
ばやとおもひつゝ。つれづれなるひるまよる  
など（二）あねまゝ母などやうの人々の其物語。か  
のものの語。ひかる源氏のあるやうなど。ところ  
どころかたるをきくに。いとどゆかしさまさ  
れど。わがおもふまゝに。さらにいかでかおほ  
えかたらむ。いみじく心もとなきまゝに。とう  
じんにやくし佛をつくりて。手あらひなどし

て。人まにみそかにいりつゝ。京にとくあげ玉  
ひて。ものがたりのおほく候なる。あるかぎり  
見せたまへと身をすてゝぬかをつき祈り申ほ  
どに。十三になるとしのぼらんとて。九月三日  
かどでして。いまだちといふ所にうつる。年ご  
ろ遊びなれつるところをあらはにこぼちちら  
して。立さはぎて。日の入きはのいとすぐく霧  
わたりたるに。車にのるとて打みやりたれば。  
人まにはまいりつゝぬかをつきしやくし佛の  
立たまへるをみすて奉る。かなしくてひとし  
れず打なかれぬ。かどでしたる所は。めぐりな  
どもなくて。かりそめのかややのしとみなど

もなし。すだれかけまくなど引たり。南ははる

かに野のかたみやらる。ひんがし西は海ちか

くて。いとおもしろし。夕霧たちわたりてい

みじふおかしければ。あさいなどもせず。かた

がたみつゝこゝをたちなん事もあはれにかな

しきに。おなじ月の十五日雨かきくらし降に。

さかひを出て下野〔参イ〕の國のいかたといふ所にと

まりぬ。家いはイなどもうきぬる計に雨ふりなどす

れば。おそろしくていもねられず。野中〔カイ〕にをり

たちたる所に。たゞ木ぞみつたてるところに。

其日は雨にぬれたるものどもほし。國にたち

をくれたる人々まつとて。そこに日を暮しつ。

十七日のつとめてたつ。昔下つさの國〔参イ〕にまの

の長といふ人住けり。引ぬのも千むら萬むら

をらせさらさせけるが家の跡とて。深き川を

船にてわたる。むかしの門のはしらのまだ残

りたるとて。おほきなる桂川の中によつたて

り。人々歌よむを聞て。心のうちに。

くちもせぬ此川はしら残らずは昔の跡をいかてしらまし

その夜はくろどの濱〔山イ〕といふところにとまる。

かたつかたは廣濱〔山イ〕なる所のすなごはるゝと

しろきに。松原しげりて。月いみじうあかき

に。風の音もいみじう心ぼそし。人々おかしが

りて。歌よみなどするに。

まともましこよひならてはいつかみんくろとの濱〔山イ〕秋のよの月

そのつとめてそこをたちて下つさのくにとむ

さしのさかひにて有。ひと井ふかイタふとがはといふがか

みのせ。まつさとのわたりのつにとまりて。夜

ひとよ舟にてかつぐ物などわたす。めのと

なる人は。おとこなどもなくなして。さかひに

て子うみたりしかば。はなれてべちにのぼる。

いとこひしければ。いかまほしくおもふに。せ

うとなる人いだきてゐていきたり。みな人は

かりそめのかりやなどいへど。風〔山イ〕すさまじく。

〔参イ〕大原頭文章博士今事流和泉介



ひきわたなどもしなどしたるに。これはおとこなどもそはねばいとてばなちにあら／＼しげにて。とまといふものをひとへ打ふきたれば。月のこりなくさし入たるに。紅のきぬうへにきて。打なやみ（遠イ）ふしたる。つきかげさやうの人には。こよなく過（遠イ）て。いとしろくきよげにて珍らしと思ひて。かきなでつゝうちなくを。いとあはれに見すて難くおもへど急ぎゐて（イイ）わかるゝ心地。いとあかずわりなし。おもかげにおぼえて悲しければ。月のけうもおぼえずくんじふじぬ。つめとて。舟に車かきすへてわたして。あなたのきしにくるまひきたてゝ。をくりにはへ（きつるイ）つる人々。これよりみなかへりぬ。のぼるはとまりなどして。いきわかるゝほど。行もとまるもみななきなどす。おさな心地にもあはれに見ゆ。今は武藏の國に成ぬ。ことにおかしき所も見えず。はまもすなごしろくな

どもなく。こひちのやうにて。むらさき生ときく野も。あし萩のみたかくおひて。馬にのりてゆみもたるすゑ見えぬまでたかく生ひしげりて。中（はイ）をわけ行に。たけしばといふ寺あり。はるかにいゝ（はイ）さらふといふ所のらうのあとのいしすへなど有。いかなる所ぞとへば。是はいにしへたけしばといふさかなり。國の人の有けるを火たきやのひたく衛士にさし奉りたりけるに。御前の庭をはくとて。などやくるしきめを見るらん。わがくに七三つくりすへたるさかつばにさしわたしたるひたえのひさごのみなみ風吹ば北になびき。北風ふけば南になびき。西吹ば東になびき。東ふけば西になびくを見で。かくてあるよと。ひとりごちつぶやきけるを。その時帝の御むすめいみじうかしづかれ給ふ。たゞひとりみすのきはに立いでたまひて。柱によりかゝりて。御覽するに。此

おのこのかく獨づつをいとあはれに。いかなるひさごのいかなびくらんと。いみじうゆかしくおぼされければ。みすをしあげて。あのをのこ。こちよれとめしければ。かしこまりてかうらんのつらにまいりたりければ。いひつること今ひとかへり我にいひてきかせよとおほせければ。さかつぼの事をいまひとかへり申ければ。我ゐていきてみせよ。さいふやうありとおほせられければ。かしこくおそろしく思ひけれど。さるべきにや有けむ。おひ奉りてくだるに。びんなく人<sup>ひと</sup>をひてくらんとおもひて。その夜せたのはしのもとに此宮をすへたてまつり。せたのはしをひとまばかりこぼちて。それをとびこして。このみやをかきおひ奉りて。七日七夜といふに。むさしの國にいきつきけり。みかどきさき。みこうせ玉ひぬとおぼしまどひとめ給に。武藏の國のゑじのをの

こなん。いとこうばしきものをくびにひきかけて。とぶやうに逃けると申しでてこのをのこをたづぬるになかりけり。ろんなくもとの國にこそ行らめと。おほやけよりつかひくだりてをふに。せたのはしのこぼれてえゆきやらず。三月といふにむさしの國にいきつきて。このをのこをたづぬるに。此みこおほやけ<sup>(のこ)</sup>つかひをめして。われさるべきにや有けん。このをのこ家ゆかしくて。ゐてゆけといひしかば。ゐて來たり。いみじくこゝありよくおぼゆ。此をのこつみにうせられれば。我はいか<sup>に</sup>であれど。これもさきの世に此國にあとをたるべきすぐせこそありけめ。はや歸りておほやけに此よしをそうせよと仰られければ。いはんかたなくてのぼりて。帝にかくなん有つると奏しければ。いふかひなし。そのをのこをつみしても。いまは此みやをとりかへし。都にか

へし奉るべきにもあらず。たけしばのをのこに。いけらん世のかぎり。武藏の國をあづけとらせて。おほやけごとみなさせじ。たゞ宮にその國をあづけ奉らせ給ふよしの宣旨下りにければ。此家を内裡のごとくつくりてすませ奉りける家を。宮などうせ玉ひにければ。寺になしたるをたけしば寺といふなり。その宮のうみ給へることもは。やがてむさしといふ姓をえてなん有ける。それより後。火たきやに女はゐるなりとかたる。野山あしをぎのなかをわくるよりほかの事なくて。武藏と相摸との中に有てあすだ川といふ。在五中將のいざことはむと。よみけるわたり也。中將の集にはすみだ川とあり。舟にてわたりぬれば相摸の國になりぬ。にしとみといふ所の山。ゑよくかきたらん屏風をたてならべたらんやうなり。かたつかたは。海はまのさまも。よせかへる

波のけしきも。いみじうおもしろし。もろこしがはらといふ所も。すなごのいみじうしろきを二三日ゆく。夏はやまとなでしこのこくうすく。にしきをひけるやうになん咲たる。これは秋の末なれば。見えぬといふになを所々は打こぼれつゝ。あはれげに咲わたれり。もろこしがはら。やまとなでしこしも咲けんこそなど。人々おかしがる。あしがら山といふは。四五日かねて。おそろしげにくらがりわたれり。やう／＼いりたつ。ふもとのほどに。空のけしきはか／＼しくも見えず。えもいはずしげりわたりて。いとおそろしげなり。麓にやどりたる所に。月もなく。くらき夜のやみに。まどふやう成に。あそび三人いくよりともなく出来たり。五十ばかりなるひとり。二十ばかり成。十四五なると有。いほのまへに。からかさゑさゝせてすへたり。をのことも火をともし

て見れば。むかしこはだといひけんがまごといふ。かみいとながく。ひたいとよくかりて。色しろくきたなげなくて。さても有ぬべきしもづかへなどにもありぬべしなど。人哀がるに。こゑすべてにるものもなく。空にすみのぼりて。めでたくうたをうたふ。人々いみじうあはれがりて。けちかくて。人々もてけうするに。こしくに扶にのあそびはえかゝらじなめでたくうたひたり。みるめのいときたなげなきに。こゑさへにる物なくうたひて。さばかりおそろしげ成山中にたちて行を。人々あかず思ひて。みななくを。おさなき心地には。まして此やどりをたゝん事さへあかずおぼゆ。まだ曉より足柄をこゆ。まいて山のなかのおそろしげなる事いはむかたなし。雲はあしの下にふまる。山のなからばかりの木の下のわ

づかなるに。あふひのたゞ(三イ)すぢばかりある世はなれて。かゝる山中にしもおひけんよと人あはれがる。水はその山に三(三イ)とこ(三イ)ろにながれたる。からうじて越(三イ)はてゝ。門山にとゞまりぬ。是よりは駿河なり。よこはしりの關のかたはらにいはつぽといふところ有。えもいはずおほきなる石のよはうなる中に。あなのあきたる中よりいづる水の。清くつめたき事かぎりなし。富士の山は此國なり。我生出し國にては。にしおもてにみえし山なり。その山のさま。いと世にみえぬさま也。さまこと成山のすがたの。こんじやうをぬりたるやうなるに。雪の消る世もなくつもりたれば。色こききぬにしろきあこめきたらんやうに見えて。山のいたゞきのすこしいらぎたるより。烟は立のぼる。夕暮は火のもえたつも見ゆ。清見が關は。かたつかたは海なるに。關屋どもあまた有



て。海までくきぬきしたり。けぶりあふにやあらむ。清見が關の波もたかくなりぬべし。おもしろき事がぎりなし。田籠の浦は。波たかくて船にて漕めぐる。大井川といふわたりあり。水の世のつねならず。すりこなどをこくてながしたらんやうに白き水はやくながれたり。ふじ川といふは富士の山より落たる水也。その國の人の出てかたるやう。ひとゝせごろ。物にまかりたりしに。いとあつかりしかば。此水のつらにやすみつゝ見れば。川上のかたよりき成ものながれきて。物につきてとゞまりたるをみれば。ほぐなり。とりあげて見れば。きなる紙に。にしてこくうるはしくかゝれたり。あやしくてみれば。らいねんなるべき國どもを。ぢもくのごとみなかきて。此國らいねんあくべき事に扶もかみなして。又そへて二人をなしたり。あやしあさましとおもひて。とり上てほし

て。おさめたりしを。かへるとしのつかさめしに。この文にかゝれたりしひとつたがはず。此國のかみとありしまゝなるを。三月のうちになくなりて。またなりかはりたるも。このかたはらにかきつけられたりし人也。かゝることなむ有し。らいねんの司めしなどは。ことし此山にそこばくのかみくゝあつまり扶ない玉ふなりけりと見給へし。めづらかなる事にさぶらふとかたり。「うい」ぬましもと云所もすがくゝとすぎで。いみじくわづらひ出て。遠江にかゝる。さやの中山など越けんほどもおぼえず。いみじくくるしければ。天りうといふ川のつらにかり屋つくりまうけたりければ。そこにて日ごろするほどにぞ。やうくをこたる。冬深くなりたれば。河風はげしく吹上て。たへがたくおぼえけり。そのわたりしつゝ。「てい」はまなの橋についたり。はまなのはしくだりし時は。く

ろきをわたしたりし。このたびはあとだにみえねば舟にてわたる。入江にわたりし橋也。とうみはいといみじくあらく。波たかくて。入江のいたづらなるすどもに。こと物もなく。松原のしげれる中より浪のよせかへるも。いろいろの玉のやうにみえ。まことに松の末より波はこゆるやうに見えて。いみじくおもしろし。それよりかみは。井のはなといふさかのえもいはれずわびしきをのぼりぬれば。三河の國の高師の山といふ。八はしはなのみして。橋のかたもなく。なにの見所もなし。二むら山の中にとまりたる夜。大きなかきの木の下にいはをつくりたれば。夜ひとよいほのうへにかきのおちかゝりたるを。人々ひろひなどす。宮ぢの山といふ所こゆるほど。十月晦日なるに。紅葉してさかりなり。

嵐こそ吹こさりけれ宮路山また紅葉葉のちらて残れる

三河と尾張となるしかすがのわたり。げにおもひわづらひぬべくおかし。尾張の國なるみの浦を過るに。夕しはたゞみちにみちて。こよひやどからんも。ちうけんにしほみちきなば。こゝをも過じと。あるかぎりはしりまどひすぎぬ。美濃の國なるさかひに。すのまたといふわたりして。野がみといふ所につきぬ。そこにあそびどもいできて。夜ひとようたうたふに。あしがら成し思ひ出られて。哀に戀しき事かぎりなし。雪降あれまどふに。ものゝ興もなく。不破の關あつみの山などこえて。近江の國おきながといふ人の家にやどりて四五日あり。みつさか山(のい)のふもとに夜ひるしぐれあられ降みだれて。日の光もさやかならず。いみじうものむづかし。そこをたちて。いぬがみかむざきやすくもとなどいふところゝなにとなくすぎぬ。みづ海のおもてはるゝとして。

なでしま竹生嶋などいふ所なすのみえたるいと

おもしろし。せたのはしみなくづれてわたり  
わづらふ。あはづにとどまりて。しはすの二日  
京にいる。くらくいきつくべしと。さるの時ば  
かりに立てゆけば。關ちかく成て。山づらにか  
りそめなるきりかけといふものしたるかみよ  
り。丈六のほとけのいままであらづくりにお  
はするが。かほばかりみやられたり。あはれに  
人はなれて。いづこともなくておはする佛か  
たと打見やりてすぎぬ。こゝらの國々を過ぬ  
るに駿河の清見が關と相坂のせきとばかりは  
なかりけり。いとくらく成て。三條の宮の西な  
る所につきぬ。ひろくとあれたる所の過ぎ  
つる山々にしもおとらず。おほきにおそろし  
げなるみ山木どものやうにて。(以下一本三七八頁下段三行ニツマク)はくなくなり  
にしめひどもも。むまれしよりひとつにて。よ  
るはひだり右にふしおきするも哀に思ひ出ら

れなどして。心もそらにながめくらさる。たち  
ぎきかいまむ人のけはひして。いといみじく  
ものつゝまし。十日計有てまかでたれば。てゝ  
はゝすびつに火などおこしてまちぬたりけ  
り。くるまよりおりたるを打みておはする時  
こそひとめもみえさぶらひなども有けれ。こ  
の日ごろは人ごゑもせず。まへに人かげもみ  
えず。いと心ぼそくわびしかりつる。かうての  
みも。まろが身をばいかゞせむとかするとう  
ちなくを見るもいとかなし。つとめても。けふ  
はかくておはすれば。うちと人おほく。こよな  
くにぎはゝしくも成たる哉とうちいひてむか  
ひぬたるもいと哀に。なにのにはひの有にか  
と涙ぐましうきこゆ。ひじりなどすらさきの  
世のこと夢にみるはいとかたかなるを。いと  
かうあとはかないやうにはかゝしからぬ心  
ちに夢に見るやう。きよ水のらい堂にゐたれ

ば。別當とおぼしき人いで来て。そこはさきの生に。此みてらの僧にてなんありし。佛師にてほとけをいとおほく作り奉しくどくによりてありしすざうまさりて人と生れたるなり。このみだうの東におはする丈六の佛はそのつくりたりし也。はくををしさしてなくなりにしぞと。あないみじ。さばあれにはくをしたてまつらむといへば。なくなりにかば。こと人はくをし奉りて。こと人くやうもしてしとみてのち清水にねんごろに参りつかうまつらしかば。さきの世にそのみでらに佛ねんじ申けんちからに。をのづからようも」おこがまし

く見えしかば。われはかくてとぢこもりぬべきぞと。のこりなげに世をおもひいふめるに。心ぼそきたへず。東は野のはるくゝとあるに。ひんがしの山ぎはは。ひるの山よりしていなりなどいふ山まであらはに見えわたり。西は

ならびの岡の松風いとみゝちかう心ぼそく聞えて。内にはいたゞき扶のもとまで。田といふもののひだひきならす音など。井中のこゝちしていとおかしきに。月のあかき夜などは。いとおもしろきをながめあかしくらすに。しりたりし人さと遠く成ておともせず。便につけて何事かあらんとつたふる人におどろきて。

おもひ出て人社とはれ山里の笹に秋風を吹

といひてやる。十月に成て京にうつろふ。母あまになりて。おなじ家の内なれど。かたことにすみはなれてあり。てゝはたゞ。われをおとなにしすへて。我は世にもいでまじらはず。かげにかくれたらんやうにてゐたるを見るも。たのもしげなく心ぼそくおぼゆるに。きこしめすゆかりあるところに。何となくつれくゝに心ぼそくてあらんよりはとめすを。こだいのおやは。宮づかへ八イはいとうき事也とおもひて

皇子内親王 當今第三皇女 後中宮皇子間後也 御坐于圓白殿二宮

以下一本三七三頁上段二行ニツマク

以下一本三七八頁下段三行ヨリツマク

八イ



すぐさするを。今の世の人はさのみこそはい  
でたて。さてもをのづからよきためしもあり。  
さてもこゝろみよといふ人々有て。しぶぐ  
にいだしたてらる。まづ一夜まいる。きくのこ  
くうすき八ばかりに。こきかいねりをうへに  
きたり。さこそものがたりにのみこゝろをい  
れて。それを見るよりほかにゆきかよふい  
しぞくなどだにことになく。こだいのおやど  
ものかげばかりにて。月をも花をもみるより  
ほかの事はなきならひに。たちいづるほどの  
心地。あれみにもあらすうつゝとおぼえで。  
あかつきにはまかでぬ。さとびたる心地には。  
中々またまりたらむ。さとすみよりはおかし  
きことをも見きゝて。心もなぐさみやせんと  
思ふおりくありしを。いとはしたなくかな  
しかるべきことにこそあべかめれと思へどい  
かゞせむ。しはすになりてまたまいる。つぼね

して。このたびは日ごろさぶらふ。うへには時  
時よるくものぼりて。しらぬ人の中にうち  
ふしてつゆまどろまれず。はづかしうもの  
つゝましきまゝに。しのびてうちなかれつゝ。  
あかつきは夜ふかくおりて。ひくらしてこの  
おいおとろへて。われをことくもたのもしか  
らむかげのやうに思ひたのみむかひるたる  
に戀しくおぼつかなくのみおほゆ。」くちお  
三頁下段「五頁ヨリツグ」(以下「一本三七  
頁」)  
し。いかによしなかりける心なりと思し見は  
てゝ。まめくしくすぐすとならば。さてもあ  
りはてず。まいりそめし所にも。かくかきこも  
りぬるを。まこととおぼしめしたらぬさま  
に人々もつげ。たえずめしなどする中にも。わ  
ざとめして。わかいひとまいらせよと仰らる  
れば。えさらずいだしたつるにひかされて。又  
ときぐいでたてど。過にし方のやうなるあ  
いなだのみの心をこりをだにすべきやうもな

くて。さすがにわかい人にひかれて。おり／＼  
さしいづるにも。なれたる人はこよなく何ご  
とにつけてもありつきがほに。我はいとわか  
うどに有べきにもあらず。又おとなにせらる  
べきおぼえもなく。時々た扶のまらうどにさしは  
なれてすゞろなるやうなれど。ひとへにそな  
たひとつをたのむべきならねば。我よりまさ  
る人あるも。うらやましくもあらず。中々心や  
すくおぼえて。さるべき折ふしまいりて。つれ  
づれなぐさむべき人（るい）ものがりなどして。  
めでたきこともおかしくおもしろき折々も。  
我身はかやうにたちまじり。いたく人にも見  
しられむにも。はゞかりあんべければ。たゞお  
ほかたの事（るい）にのみきゝつゝ。すぐすに。内（るい）の御  
三（るい）日宮達入内給。藤原十四日主上。渡御二十日。兩宮白由是出給。  
とも（るい）にまいりたるおり。有明の月いとあかき  
に。わがねむじ申す天てる御神は。内にぞおは  
しますなるかし。かゝるおりにまいりておが

み奉らんとおもひて。四月ばかりの月のあか  
きに。いとしのびてまいりたれば。はかせの命  
ぶはしるたよりあれば。とうろの火のいとほ  
のかなるに。あさましくおい神さびて。さすが  
にいとよう物などいひゐたるが。人ともおぼ  
えず。神のあらはれ玉へるかとおぼゆ。又の夜  
も月のいとあかきに。ふぢつばのひんがしの  
とをしあけて。さべき人々物がたりしつゝ。月  
をながむるに。梅つばの女御（るい）ののぼらせ給な  
るをとなひ。いみじう心にくゝいうなるにも。  
故宮のおはします世ならましかば。かやうに  
のぼらせ給はましなど人々いひいづる。げに  
いとあはれなりかし。

天のとを雲あなからもよそにみて昔の跡をこふる月哉

冬になりて。月なく。雪もふらずながら。星の  
ひかりに空さすがにくまなくさえわたりたる  
夜のかぎり。殿の御かたにさぶらふ人々とも

左御藤生子長曆三年十二月二十一日。内内大臣教通女

中宮藤子長曆元年正月七日入内二十九日爲女御。同白安三月。元暦二年八月二十八日開御

のがたりし明しつゝ。あくればたち」やあらま  
（以下一本二八七頁上段「四行ニツヅク」）（以下一本三七〇  
頁上段「二行ヨリツヅク」）

し。いといふかひなくまうでつかうまつるこ  
となくてやみにき。十二月廿五日宮の御佛名  
にめしあれば。そのよばかりと思ひて参りぬ。  
白ききぬどもにこきかいねりをみなきて。四  
十餘人計出るたり。しるべしいでし人のかけ  
にかくれてあるがなかに。うちほのめいて。あ  
かつきにはまかづ。雪うち散て。いみじくはげ  
しくさえこほるあかつき方の。月のほのかに。  
こきかいねりの袖にうつれるも。げにぬるゝ  
がほなり。みちすがら。

年はくれ夜は明かたの月かけの袖に移れる程そはかなき  
かう立出ぬとならば。さても宮づかへのかた  
にもたちなれ。世にまぎれたるも。ねぢけがま  
しきおぼえもなきほどは。をのづから人のや  
うにもおぼしもてなさせ玉ふやうもあらま  
し。おやたちもいと心えず。ほどもなくこめす

へつ。さりとてその有さまのたちまちにきら  
きらしきいきほひなどあんべいやうもなく。  
いとよしなかりけり。すゞろ心にても。ことの  
ほかにたがひぬる有さまなつかし。

幾千たひ水の田芹をつみしかと思ひしことの露もかなはぬ  
とばかりひとりごたれてやみぬ。其後は何と  
なくまぎらはしきに。ものがたりのことも打  
たえわすられて。物まめやかなるさまに心も  
成果てぞ。などておほくの年月をいたづらに  
てふしをきしに。をこなひをも物まうでをも  
せざりけん。此あらましごととても。思しこと  
どもは。此世にあんべかりけることどもなり  
や。ひかる源氏ばかりの人は。此世におはしけ  
（「るい」）  
りやは。かほる大將の宇治にかくしすへ玉べ  
（以下一本三七二頁下段八行ニツヅク）（以下一本二八七頁上段十四行ヨリ  
ツヅク）  
きもなき世なり。あな物ぐるをやくに。て物  
（「イナシ」）  
まうでをわづかにしても。はかしく人  
やうならんともねんせられず。此ごろの世の

人は。十七八よりこそ經よみをこなひもすれ。  
さることおもひかけられず。からうじて思ひ  
よることは。いみじくやんごとなき<sup>く</sup>かたち有  
さま。ものがたりにあるひかる源氏などやう  
におはせん人を年にひとたびにてもかよはし  
奉りて。うきふねの女君のやうに山里にかく  
しすへられて。花紅葉月雪をながめて。いと心  
ぼそげにて。めでたからん御文などを時々ま  
ちみなどこそせめとばかりおもひつゞけ。あ  
らましごとにもおぼえけり。おやとなりなば  
いみじうやむごとなく我身もなりなんなど。  
たゞ行衛なきことをうち思ひすすぐすに。おや  
からうじてはるかに遠きあづまになりて。年<sup>長元</sup>  
<sup>五年二月八日任常陸六十二</sup>  
頃はいつしかおもふやうに。ちかきところに  
なりたらば。まづむねあくばかりかしづきた  
てゝ。ゐてくだりて。海山のけしきも見せ。そ  
れをばさるものにて。わがみよりもたかうも

てなしかしづきてみんなこそおもひつれ。我  
も人もすぐせのつたなかりければ。ありく  
てかくはるかなる國になりたり。をさなか  
りし時。東の國にゐてくだりてだに。こゝちも  
いさゝかあしければ。是をや此國にみすてゝ。  
まどはんとすらんと思ふ。人の國のおそろし  
きにつけても。わが身ひとつならばやすらか  
ならましを。ところせうひきぐして。いはまほ  
しき事もえいはず。せまほしき事もえせずな  
どあるが。わびしうもあるかなと心をくだき  
しに。いまはまいておとなになりたるを。ゐ  
てくだりて。わが命もしらず。京のうちにてさ  
すらへむはれいの事。東のくにいなか人に成  
て。まどはんはいみじかるべし。京とてもたの  
もしうむかへとりてんとおもふるいしぞくも  
なし。さりとてわづかになりたる國をじし申  
べきにもあらねば。京にとゞめてながきわか



れにてやみぬべき也。京にもさるべきさまに  
もてなして。とどめんとはおもひよる事にも  
あらずと。よるひるなげかるゝを聞こゝち。花  
紅葉のおもひもみなわすれて。悲しくいみじ  
く思ひなげかるれどいかゞはせん。七月十三  
日にくだる。五日かねては見んも中々成べけ  
れば。うちにもまいこず。まひて其日は立さは  
ぎて。時成ぬれば。今はとてすだれを引あげて  
うちみあはせて。涙をほろ／＼とおとして。や  
がていでぬるを見送る心ち。めもくれまどひ  
て。やがてふされぬるに。とまるをのこのをく  
りしてかへるに。ふところがみに。

思ふ事心になふ身成せは秋のわかれを深くしらまし  
とばかりかゝれたるを。えみやられず。ことよ  
ろしき時こそしおれかゝりたる事も思ひつ  
づけけれども。かくもいふべきかたもおぼえ  
ぬまゝに。

かけて社思はさりしか此世にてはしも君に別るへしとは  
とやかゝれにけん。いとどひとめも見えず。さ  
びしく心ぼそく。打ながめつゝ。いづこ計と明  
暮おもひやる。道のほどもしりにしかば。はる  
かに戀しく心ぼそき事限なし。明るより暮る  
まで。東の山ぎはをながめてすゑす。八月ばか  
りにうづまさにもるに。一條よりまうづる  
道におとこくるまふたつばかりひきたてゝ。  
物へ行にもろともにくべきひとまつなるべ  
し。過て行にずいじんだつものをおこせて。

花見にゆくと君をみるかな

といはせたれば。かゝるほどの事はいらへぬ  
もびんなしなどあれば。

千くさなるころならひに秋の野の

とばかりいはせていき過ぬ。七日さぶらふほ  
ども。たゞ東路のみおもひやられてよしなし。  
（こゝからうじてイ）  
とかくしてはなれて。たいらかにあひみせ玉

へと申は。ほとけもあはれときゝいれさせ給ひけむかし。ふゆになりて。日暮し雨ふりくらひたる夜。雲かへる風はげしう打吹て。そら晴て月いみじうあかう成て。軒ちかき萩のいみじう風にふかれて。くだけまどふがいと哀にて。

秋をいかに思ひいつらん冬深みあらしにまとふ萩の枯はは東より人きたる。神拜といふわざして。國のうちありきしに。水おかしくながれたる野のはるばるとあるに。もりのあるおかしき所かな。見せてとまづ思ひいでて。こゝはいづことかいふととへば。こしのびのもりとなん申とこたへたりしが。身によそへられて。いみじくかなしかりしかば。馬よりおりて。そこにふた時なんながめられし。

とゝめをきて我こと物や思ひけんみるに悲しきこしのひのもりとなむおぼえしとあるを。みる心ちいへばさ

らなり。返ごとに。

こしのひを聞につけても留をきしちゝふの山のつらき東路かうてつれづれとながむるに。などか物まうでもせざりけん。はゝいみじかりしこだいの人にて。はつせにはあなおそろし。ならざかに人にとられなばいかゞせん。いし山關山こえて。いとおそろし。くらまはさる山ゐていさん。いとおそろしや。おやのぼりてともかくもと。さしはなちたる人のやうにわづらはしがりて。わづかに清水にゐてこもりたり。それにもれいのくせはまことしかべいこともおもひ申されず。ひがんのほどにていみじうさはがしうおそろしきまでおぼえて。うちまどろみいりたるに。み帳の方のいぬふせぎのうちに。あをきをりものの衣をきて。にしきをかしらにもかづき。あしにもはいたるそうの別當とおぼしきがよりきて。ゆくさきのあはれなら

むもしらず。さもよしなしごとをのみとうちむづかりて。み帳の内にいりぬとみて。打おどろきて。かくなん見えつるともかたらず。心にも思ひとどめでまかでぬ。はゞ一尺の鏡をいさせて。えゐてまいらせぬかはりにとて。そうをいだしたてゝ。はつせにもうでさすめり。三日さぶらひて。此人のあべからんさま。夢にみせ玉へなどいひてまうでさするなめり。そのほどは精進せさす。このそうかへりて。夢をだにみでまかでなんがほいなきこと。いかゞ歸りても申べきと。いみじうぬかづきおこなひてねたりしかば。御帳のかたよりいみじうけだかうきよげにおはする女のうるはしくさうぞき玉へるが。たてまつりしかづみをひきさげて。此かづみにはふみやそへたりしととひ給へば。かしこまりて。ふみもさぶらはざりき。此鏡をなんたてまつれと侍しとこ

たへたてまつれば。あやしかりける事かな。ふみそふべきものとて。此鏡をこなたにうつれるかげをみよ。これみれば哀にかなしきぞとて。さめぐとなき玉ふを見れば。ふしまろびなきなげきたるかげうつれり。此影をみれば。いみじうかなしな。これ見よとて。いまかたつかたにうつれる影をみせたまへば。みすどもあをやかに。木帳をしいでたるしたより。いろ／＼のきぬこぼれいでて。梅さくら咲たるに。鶯こづたひ鳴たるをみせて。これを見るはうれしなどの玉ふとなむみえしとかたるなり。いかに見えけるぞとだに見もとどめず。物はかなき心にもつねにあまてる御神をねんじ申せといふ人あり。いづくにおはします神佛にかはなど。さはいへどやう／＼おもひわかれて人にとへば。神におはします。伊勢におはします。紀伊の國にきのこくさうと申すは此

御神なり。さては内侍所にすべら神となんおはしますといふ。伊勢の國まではおもひかくべきにもあらざなり。内侍所にもいかでかはまいりおがみ奉らん。そらの光をねむじ申べきにこそはなどうきておぼゆ。しぞくなる人あまに成て。すがく院に入ぬるに。冬頃。

涙さへふりはへつゝそ思ひやるあらし吹らむふゆの山里かへし。

わけてとふ心のほとの見ゆる哉木陰をくらき夏のしけりをあづまにくだりしおや。からうじてのぼりて。西山なる所におちつきたれば。そこにみなわたりて見るに。いみじう嬉しきに。月のあかき夜ひとよものがたりなどして。

かゝる世も有ける物を限りとて君にわかれし秋はいかにそといひたれば。いみじくなきて。

思ふ事かなはずなそといひこし命のほとも今そうれしきこれぞ別れのかどでといひしらせしほどのか

なしさよりは。たいらかにまちつけたるうれしさもかぎりなけれど。人のうへにてもみしに。老おとろへて。世にいであまじらひしは。（以下一本三六九頁上段一五行ヨリツマク）「みやこのうちとも見えぬ所のさまなり。ありも

つかずいみじうものさはがしけれども。いつしかと思ひし事なれば。物語もとめて見せよ

見せよとは、をせむれば。三條殿イ元イモの宮にしぞ

くなる人の衛門の命婦とてさぶらひけるたつねて文やりたれば。めづらしがりてよろこび

て。御前のをおろしたるとて。わざとめでたき

さうしどもすぶりの箱のふたにいれてをこせたり。嬉しくいみじくて。夜ひるこれを見るよ

りうちはじめ。又々もみまほしきに。ありもつ

かぬみやこのほとりに。誰かは物がたりもと

め見する人のあらん。上總大輔後拾遺作者中宮大進從五位上高院成行まゝ母なりし人は。みや

づかへせしがくだりしなれば。思ひしにあらぬことどもなどありて。世中恨めしげにて。外

女老婦御臣爲上總時爲依親上總

女老婦御臣爲上總時爲依親上總

長和二年正月廿七日得二品宮内權後三家遷給三條宮

イ元イモ

寛仁四年



にわたるとて。いつゝばかりなるちごどもな  
どして。あはれなりつる心のほどなんわすれ  
ん世あるまじきなどいひて。梅の木をつま  
かくていとおほきなるを。これが華のさかん  
おりはこんよといひをきてわたりぬるを。心  
の内に戀しくあはれ也とおもひつゝ。しのび  
ねをのみなきて。その年も歸りぬ。いつしか梅  
さかなんこむと有しを。さやあるとめをかけ  
てまちわたるに。花もみな咲ぬれどをともせ  
ず。おもひわびて。花を折てやる。

たのめしを猶や待へき霜枯し梅をも春はわすれさりけり  
といひやりたれば。あはれなることどもかき  
て。

なをたのめ梅の立枝は契をかぬおもひの外の人もとふ也  
その春世中いみじうさはがしうて。まつさと  
のわたりの月かけ。あはれに見しめのとも三  
月ついたちになく成ぬ。せんかたなく思ひな

げくに。物がたりのゆかしさもおぼえずなり  
ぬ。いみじくなき暮して。みいだしたれば。夕  
日のいとはなやかにさしたるに。さくらは  
なのこりなく散みだる。

散花も又こん春はみもやせんやかてわかれし人そ戀しき

權大納言記云三月十九日卯刻御前氣絶之哀不世所爲四月九日觀峰寺此地

またきけは。侍従の大納言の御むすめなくな

り玉ひぬ也。殿の中將のおぼしなげくなるさ

ま。わがものの悲しきおりなれば。いみじくあ

はれ也ときく。のぼりつきたりし時。これ手本

にせよとて。此姫君の御てをとらせたりしを。

小夜深てねざめざりせばなどかきて。鳥へ山

谷に烟のもえたらははかなく見えし我としら

なむと。いひしらずをかしげにめでたくかき

玉へるを見て。いと涙をそへまざる。かくの

み思ひくんじたるを心もなぐさめんと心ぐる

しがりて。はゝ物語などもとめてみせ給ふに。

げにをのづからなぐさみゆく。むらさきのゆ

かりをみて。つゞきのみまほしくおぼゆれど。人かたらひなどもえせず。されどいまだみやこなれぬほどにてえみつけず。いみじく心もとなくゆかしくおぼゆるまゝに。この源氏物がたり一の巻よりしてみなみせ玉へと心のうちにいのる。おやのうづまさにもり玉へるにも。こと事なくも事を申ていでんまゝに。此物語みはてむとおもへど見えす。いと口おしくおもひなげかるゝに。をばなる人のゐなかりのぼりたる所にわたいたれば。いとうつくしうおひなりにけりなどあはれがりめづらしがりてかへるに。何をか奉らん。まめくしきものはまたなかりなむ。ゆかしくし給なるものを奉らんとて源氏の五十餘巻ひつにいりながら。ざい中將。とをぎみ。せり川。しらゝ。あさうづなどいふものがたりども。一ふくろとり入て。えてかへる心地のうれしさぞいみ

じきや。はしくわづかに見つゝ。心もえず心もとなく思ふ源氏を。一の巻よりして。人もまじらず木丁のうちに打ふして。ひきいでつゝみる心地。きさきのくらゐもなにゝかはせむ。ひるは日暮しよるはめのさめたるかぎり火をちかくともして。是を見るよりほかの事なければ。をのづから名とはそらにおぼえうかぶを。いみじきことに思ふに。夢にいときよげなるそうのきなる地のけさ着たるが來て。法花經五巻をとくならへといふと見れど。人にもかたらず。ならはんともおもひかけず。物がたりのことをのみにしめて。我は此ごろわろきぞかし。さかりにならば。かたちもかぎりなくよく。かみもいみじくながくなりなん。ひかる源氏のゆふがほ。宇治の大將のうき舟の女ぎみのやうにこそあらめとおもひける心。まづいとはかなくあさまし。五月ついたち頃。

つまちかき花たちばなのいとしろく散たるを  
ながめて。

時ならず降雪かとそながめし花たちはなのかほらさりせば  
あしがらといひし山の麓にくらがりわたりた  
りし木のやうにしげれる所なれば。十月ばか  
りの紅葉よもの山邊よりもげにしみじくおも  
しろく。にしきをひけるやうなるに。ほかより  
きたる人のいま参りつる道に紅葉のいとおも  
しろき所の有つるといふに。ふと。

いつこにも劣らし物を我やとのよを秋はつる氣色ばかりは  
ものがたりの事をひらは日暮しおもひつゞ  
け。よるもめのさめたるかざりは。是をのみ心  
にかけたるに。夢に見ゆるやう。此ごろ皇太后  
宮の一品の宮の御れうに。六角堂にやり水を  
なんつくるといふ人あるぞ。そはいかにとと  
へば。あまてる御神をねんじませといふと見  
て。人にもかたらず。なにともおもはでやみぬ

る。いといふかひなし。春ごとに此一品宮をな  
がめやりつゝ。

咲とまぢ散ぬと歎く春はたゝわかやと顔に花をみる哉  
治安二年

三月つごもりがた。つちいみに人のもとにわ  
たりたるに。櫻のさかりにおもしろく。いまま  
でちらぬもあり。かへりて又の日。

あかさりし宿の櫻を春暮て散かたにしも獨見し哉

といひにやる。花のささちるおりごとに。め  
となく成し折ぞかしとのみあはれ成に。おな  
じおりなく成玉ひし侍従大納言の御むすめの  
書を見つゝ。すゞろにあはれ成に。五月ばか  
り。夜ふくるまで物がたりをよみておきぬた  
れば。きつらんかたもみえぬに。ねこのいとな  
がうないたるを。おどろきて見れば。いみじう  
おかしげなる猫あり。いづくよりきつるねこ  
ぞと見るに。あねなる人。あなかま人にきかす  
な。いとおかしげなる猫なり。かはんとある

に。いみじう人なれつゝ。かたはらに打ふした  
り。尋ぬる人やはと是をかくしてかふに。すべ  
て下すのあたりにもよらず。つとまへにのみ  
ありて。ものもきたなげなるはほかざまにか  
ほをむけてくはず。あねおとゝの中につとま  
とはれて。おかしがりらうたがるほどに。あね  
のなやむ事あるに。物さわがしくて。此ねこを  
きたおもてにのみあらせてよばねば。かしが  
ましくなきのゝしれども。なをさるにてこそ  
はとおもひてあるに。わづらふあねおどろき  
て。いづら。猫はこちゐてことあるをなどとと  
へば。夢に此ねこのかたはらにきて。おのれは  
じじうの大納言殿の御むすめのかくなりたる  
也。さるべきえんのいさゝかありてこの中の  
君のすゞろにあはれとおもひ出たまへば。た  
だしばしこゝにあるを。此ごろ下すのなかに  
ありて。いみじうわびしきことといひて。いみ

じうなくさまは。あてにおかしげなる人と見  
えて。打おどろきたれば。此ねこの聲にて有つ  
るが。いみじく衰成なりと<sup>【以下七文字一本ニナシ】</sup>かたり玉ふを聞に。  
いみじくあはれ也。そののちは此ねこを北面  
にもいださずおもひかしづく。たゞひとりゐ  
たる所に此ねこがむかひゐたれば。かいなで  
つゝ。侍従大納言の姫君のおはするな。大納言  
殿にしらせ奉らばやといひかくれば。かほを  
うちまもりつゝ。な<sup>な</sup>か<sup>が</sup>う<sup>う</sup>なくも。心のおもひ  
なし。めのうちつけに。れいのねこにはあら  
ず。きゝしりがほに。あはれや。世中に長恨歌  
と云文を物がたりにかきてある所あんなりと  
聞に。いみじくゆかしけれど。えいひよらぬ  
る。さるべき便をたづねて。七月七日いひや  
契けんむかしのけふのゆかしさに天の川なみ打出つる哉  
返し。



立いつる天の河邊のゆかしさに常はゆきしきことも忘れ  
その十三日の夜の月。いみじく隈なくあかき  
に。みな人もねたる夜中ばかりに。えんに出  
て。あねなる人空をつくくとながめて。たゞ  
今ゆくゑなくとびうせなばいかゞおもふべき  
と問に。なまおそろしとおもへるけしきを見  
て。ことごとくにいひなして。わらひなどしてき  
けば。かたはら成所にさきおふくるまとまり  
て。おぎのはくとよばすれどこたへぎなり。  
よびわづらひて。笛をいとおかしくふきすま  
してすぎぬ也。

笛の音のたゞ秋風と聞ゆるになと萩のはのそよとこたへぬ  
といひたれば。げにとて。

萩の葉のこたふる迄も吹よらてたゞに過ぬる笛の音そうき  
かやうにあくるまでながめあひて。夜あけて  
ぞみな人ねぬる。そのかへる年四月の夜中ば  
かりに。火のことありて。大納言殿の姫君と思

此大納言無異所

治安三年

かしづきしねこもやけぬ。大納言殿のひめ君  
とよびしかば。聞しりがほになきて。あゆみき  
などせしかば。てゝなりし人も。めづらかに哀  
なること也。大納言に申さむなどありし程に。  
いみじうあはれに口おしくおぼゆ。ひろく  
もののふかき山<sup>の</sup>やうにはありながら。花  
紅葉のおりは四方の山邊もなにならぬを。見  
ならひたるに。たとしへなくせば。所の庭の  
ほどもなく。木などもなきに。いと心うきに。  
むかひなる所に梅の<sup>（のイナシ）</sup>こうばひなど咲みだれ  
て。風につけてかほりくるにつけても。住なれ  
し古郷かぎりなく思ひ出らる。

にはひくる隣の風を身にしめてありし軒端の梅を戀しき  
其五月のついたちにあね成人こうみてなくな  
りぬ。よその事だにおさなくよりいみじくあ  
はれと思ひわたるに。ましていはん方なくあ  
はれかなしとおもひなげかる。はゝなどはみ

ななく成たる方にあるに。かたみにとまりたる。おさなき人々を左右にふせたるに。あれたる板屋のひまより月のもりきて。ちごのかほにあたりたるがいとゆゝしくおぼゆれば。袖をうちおほひて。今ひとりをもかきよせて思ふぞいみじきや。其程過てしぞくなる人のも

とより。むかしの人のかならずもとめてをこせよとありしかば。もとめしに。その折はえ見いでず成にしを。いましも人のおこせたるが。あはれにかなしき事とて。かばねたづぬる宮といふ物がたりをおこせたり。まことにぞあはれるや。かへりごとに。

理もれぬかはれを何に尋ねけん昔の下には身こそ成ぬれめのと成し人。今はなににつけてかなど。なくなくもと有ける所に歸りわたるに。

故里にかく社人は歸けれあはれいか成わかれなりけんむかしのかたみにはいかでとなん思ふなどか

きて。硯の水のこほれば。みなとぢられて。とどめつといひたるに。

かきなかす跡はつらゝに閉てけり何を忘れぬ形見とか見むといひやりたるかへりごとに。

なくさむるかたも渚の濱千鳥何かうき世にあともとめむ此めのととはか所見て。なくく歸たりし。

のほりけむ野へは烟もなかり見いつこをはかと尋てかみし是を聞て。まゝ母成し人。

そこはかとしりてゆかれと先に立涙そ道のしるへ成けるかばね尋ぬる宮。をこせたりし人。

住なれぬ野へのさゝ原跡はかもなくくいかに尋ね侘けん是を見て。せうとはその夜おくりにいきたりしかば。

見しまゝにもえし烟はつきにしないかゝ尋し野へのさゝ原雪の日を経てふるころ。よしの山にすむあま

君をおもひやる。

雪降一まれの人も絶ぬらん吉野の山の峯のかけ道

かへるとしむ月のつかさめしにおやのよろこ  
びすべき事ありしに。かひなきつとめて。おな  
じ心に思ふべき人のもとより。さりともと思  
ひつゝ。あくるを待ゐる心もとなさなどいひ  
て。

明るまつ鐘の聲にも夢さめて秋のまよの心ちせし哉  
といひたる返事に。

あかつきを何に待けむ思事なるともきかね鐘の音ゆへ  
四月つごもりがた。さるべきゆへありて。東山  
なる所へうつろふ。道のほど。田のなはしろ。  
水まかせたるも植たるも何となく青み。おか  
しく見えわたりたる山の陰くらう。まへちか  
く見えて。心ほそくぞあはれなる。夕暮水鶏い  
みじく鳴。

たゞくとも誰か水鶏のくれぬるに山路を深く尋ねてはこん  
靈山ちかき處なれば。まうでておがみ奉るに。  
いとくるしければ。山寺なる石井によりて。手

に結びつゝのみて。此水のあかすおぼゆるか  
なといふ人のあるに。

おく山のいしまの水を結び上てあかね物とは今のみやしろ  
といひたれば。水のむ人。

山の井の雪に濁る水よりもこはなをあかね心ちこそすれ  
かへりて。夕日けざやかにさしたるに。宮古の  
方ものこりなくみやらるゝに。此しづくに濁  
る人は。京に歸るとて心ぐるしげに思ひて。ま  
たつとめて。

山のはに入日の影はいりはてゝ心ほそくそなかめやらまし  
念佛する僧のあかつきにぬかづく音のたうと  
く聞ゆれば。とををしあけたれば。ほのぐくと  
明行山ぎは。こぐらき梢ども霧わたりて。花  
紅葉のさかりよりも何となくしげりわたれ  
ば。そらのけしきくもらはしくおかしきに。郭  
公さへいと近き梢にあまたゝびないたり。

誰に見せ誰に聞せん山里の此曉もおちかへるれも

此つごもりの日。谷のかたなる木の上に郭公  
かしがましくないたり。

宮古には待らんものを時鳥けふひれもすに啼暮す哉

などのみながめつゝ。もろともにある人。た  
だいま京にもきゝたらん人あらんや。かくて  
ながむらんと思おこする人あらんやなどいひ  
て。

山深く誰か思ひはおこすへき月見る人はおほからめとも  
といへば。

深き夜に月みのおりはしられとも先山里を思ひやらるゝ  
あかつきに成やしぬらんと思ふほどに。山の  
方より人あまたくる音す。おどろきて見やり  
たれば。しかのえんのもとまできてうちない  
たる。ちかうてはなつかしからぬものゝ聲也。  
秋の夜の妻こひかぬる鹿のれは遠山にこそ聞へかりけれ  
しりたる人のちかきほどにきて歸りぬときく  
に。

またひとめしらぬ山邊の松風もおとしてかへる物と社きけ

八月に成て。廿餘日のあかつきがたの月いみ  
じくあはれに。山の方はこぐらく。瀧の音ども  
似る物なくのみながめられて。

思ひしる人にみせはや山里の秋のよふかき在明の月  
京に歸出るに。わたりし時は水ばかりみえし  
田どもゝみなかりはてけり。

苗代の水かけはかりみえし田の茹はつる迄なかぬしにけり  
十月つごもりがたに。あからさまにきて見れ  
ば。こぐらうしげれりし木の葉ども残なく散  
みだれて。いみじく哀げにみえわたりて。心地  
よげにさざらぎながれし水も。木の葉にうづ  
もれてあとばかり見ゆ。

水さへにすみたえにけり木葉散あらしの山の心ほそさに  
(そい)  
そこなる尼に。春まで命あらばかならずこむ。  
花ざかりはまちつけよなどいひてかへりにし  
を。年歸りて三月十餘日になるまでおともせ  
ねば。



契なきし花の盛なつけれ哉春やまたこぬ花や匂はぬ  
たびなる所にきて。月の頃。たけのもとちかく  
て。風の音にめのみさめて。うちとけてねられ  
ぬ頃。

竹の葉のそよく夜毎にねさめして何ともなきに物ぞ悲しき  
秋のころそこを立てほかへうつろひて。その  
あるじに。

いつことも露の哀はわかれしをあさちか原の秋ぞ戀しき  
まゝ母成し人。くだりし國のなをみやにもい  
はるゝに。こと人かよはして後もなを其名を  
いはると聞て。おやの今はあいなきよしいひ  
にやらんと有に。

あさくらや今は雲井に聞物を猶きのまろか名のりをはする  
(ヤイ)  
かやうにそこはかとなき事を思ひつゞく  
(以下一本三七頁上段一行ヨリツバク)  
わかれ／＼しつゝまかでしを。おもひいでけ  
れば。

月もなく花もみさりし冬の夜の心にしみて戀しきやなそ

われもさおもふ事なるを。おなじ心なるもお  
かしうて。

さえし夜の氷は袖にまたとけて冬の夜ながられを社はなけ  
御前にふしてきけば。池の鳥どもの夜もすが  
ら。こゑ／＼はぶきさはぐ音のするにめもさ  
めて。

わかことそ水の浮れにあかしつゝ上毛の霜を拂ひわふなる  
とひとりごちたるを。かたはらにふしたまへ  
る人きゝつけて。

まして思へ水のかりれの程たにそうは毛の霜を拂ひ怪ける  
かたらふ人どち。つばねのへだてなるやりど  
をあげあはせて。物語などしくらす日。又かた  
らふ人のうへにものしたまふをたび／＼よび  
おろすに。せちにことあらばいかむとあるに。  
かれたるすゝきのあるにつけて。

冬枯のしのゝを薄袖たゆみまねきもよせし風にまかせん  
上達部殿上人などに對面する人はさだまりた

るやうなれば。うゐくしきさと人はありなしをだにしらるべきにもあらぬに。十月ついたちごろのいとくらき夜。ふだん經にこゑよき人々よむほどなりとて。そなたちかきとぐちにふたりばかりたち出て聞つゝ物がたりしてよりふしてあるに。まいりたる人のあるを。にげ入てつばねなる人々よびあげなどせんもみぐるし。さはれたゞおりからこそかくてだ【うい】にといふ今ひとりのあれば。かたはらにてききゐたるに。おとなしくしづやかなるけはひにて物などいふ。くちおしからざなり。いまひとりはなどとひて。世のつねのうちつけのけさうびてなどもいひなさず。世中のあはれ成ことどもなどこまやかにいひ出て。さすがにきびしうひき【うい】いるかたはふし【うい】く有て。我も人もこたへなどするを。まだしらぬ人のありけるなどめづらしがりて。とみにたつべくも

あらぬほどほしのひかりだに見えすくらきに。うち時雨つゝ木の葉にかゝるおとのおかしきを。中々にえんにおかしき夜かな。月の隈なくあかからんも。はしたなくまばゆかりぬべかりけり。春秋の事などいひて。時にしたがひ見ることに。春がすみおもしろく。空も長閑にかすみ。月のおもてもいとあかうもあらず。とをうながるゝやうにみえたるに。琵琶のふがうてうゆるらかにひきならしたるいといみじく聞ゆるに。また秋に成て。月いみじうあかきに空は霧わたりたれど。手にとるばかりさやかにすみわたりたるに。風の音。蟲のこゑ。とりあつめたる心ちするに。箏のことかきならされたる。ひやうじやう【ひやうじ】のふきすまされたるは。何の春とおぼゆかし。又さかとおもへば。冬の夜の空さへさえわたりいみじきに。雪の降つもりひかりあひたるに。ひちりきのわ

なゝきいでたるは。春秋もみなわすれぬかし  
といひつゞけて。いづれにか御心とどまると  
とふに。秋の夜に心をよせてこたへ給を。さの  
みおなじさまにはいはじとて。

あさ緑花もひとつにかすみつゝおほるにみゆる春の夜の月  
とこたへたれば。返すくうちずんじて。さは  
秋の夜はおぼしすてつるなゝりな。

今宵より後の命のもしもあらはさは春の夜を形見と思はん  
といふに。秋にこゝろよせたる人。

人はみな春に心をよせつめりわれのみやみん秋の夜の月  
とあるに。いみじうけうじおもひわづらひけ  
るけしきにて。もろこしなどにもむかしより  
春秋のさだめはえし侍らざるを。このかう  
おぼしわかせ給ひけん御心ども。おもふにゆ  
へ侍らんかし。わが心のなびき。そのおりのあ  
はれともおかしともおもふ事の有時。やがて  
その折の空のけしきも月も花も。心にそめら

るゝにこそあべかめれ。春秋をしらせたまひ  
けんことのふしなむいみじうけたまはらま  
ほしき。ふゆの夜の月はむかしよりすすまじ  
きもののためしにひかれて侍けるに。またい  
とさむくなどして。ことにみられざりしを。齋  
宮の御もぎのちよくしにてくだりしに。あか  
つきにのぼらむとて。ひごろ降つみたる雪に  
月のいとあかきに。旅の空とさへおもへば心  
ぼそくおぼゆるに。まかり申にまいりたれば。  
よの所にもにず。おもひなしさへけおそろし  
きに。さべきところにめして。圓融院の御世よ  
りまいりたりける人のいといみじく神さびふ  
るめいたるけはひのいとよしふかく。昔（のい）ふる  
ごと（どもい）もいひいで。うちなきなどして。ようしら  
べたるびはの御ことをさしいでられたりし  
は。この世のことともおぼへず。夜のあけなん  
もおしう。京のことも思ひたえぬばかりおぼ

萬壽二年廿一日院堂御着安勤使藏人右兵衛佐賀通海院來月五日着安云々

え侍しよりなむ。冬の夜の雪ふれるよは思ひ  
しられて。火をけなどをいだきても。かならず  
いでゐてなんみられ侍る。おまへたちもかな  
らずさおぼすゆへ侍るむかし。さらば今宵よ  
りはくらきやみのよのしぐれうちせんは。又  
心にしみ侍なんかし。齋宮の雪のよにおとる  
べき心ちもせずなどいひて。（ひい）わかれにしもち  
は誰としられじとおもふしを。又の年の八月  
に内へいらせ給に。夜もすがら殿上にて御あ  
そびありけるに。この人のさぶらひけるもし  
らず。そのよはしもにあかして。ほそ殿のやり  
どをおしあけてみいだしたれば。あかつきが  
たの月のあるかなきかにおかしきを見るに。  
くつのこゑきこえて。ど經などする人も有。ど  
經の人はこのやりどぐちに立とまりて。もの  
などいふにこたへ。これはふとおもひ出て。時  
雨のよこそかた時わすれずこひしく侍れと

云に。ことながうこふべきほどならねば。  
何さまで思ひ出けん等閑の木の葉にかけし時雨はかりな  
ともいハやらぬを。人々又きあへば。やがてす  
べりいりて。そのよさりまかでにしかば。もろ  
ともなりし人尋てかへししたりしなども同年十二後  
にぞきく。ありししぐれのやうならんに。いかで  
びはのねのおぼゆるかぎりひきてきかせんと  
なんあるときくにゆかしくて。我もさるべき  
折をまつにさらになし。はるごろのどやかな  
るゆふつかた。まいりたなりとききて。その夜  
もろともなりし人といざりいづるに。とに人  
人参り。うちにもれいのひとくあれば。いで  
さいていりぬ。あの人もさや思ひけん。しめや  
かなる夕暮をおしはかりて参りたりけるに。  
さはがしかりければ。まかづめり。  
かしまみてなるとの浦にこかれ出る心はえきや磯のあま  
とばかりにてやみにけり。あの人がらもいと

御東向對一條院院八月十日附宮御退出

長久四年七月廿三日附宮入内

長久三年十月八日丑時大内焼亡

月二日一條院焼亡 日蓮御高麗院廿一日自高麗院還御東三條

同年十二



すくよかに。世のつねならぬ人にて。その人は  
かの人はなどもたづねとはで過ぬ。いまはむ  
かしのよしなし心もくやしかりけりとのみ思  
ひしりはて。おやのものへゐてまいりなごせ  
でやみにしも。もてかしく思ひいでらるれば。<sup>【七十一】</sup>  
今はひとへにゆたかなるいきほひになりて。  
ふたばの人をもおもふさまにかしづきおほし  
たて。わが身もみくらの山につみあまるばか  
りにて。後の世までの事をもおもはんと思ひ  
はげみて。霜月の廿日いしやまにまいる。雪  
うち降つゝみちのほどさへおかしきに。あふ  
坂の關を見るにも。むかし越しも冬ぞかしと  
思ひいでらるゝに。そのほどもいとあらう  
ふいたり。

あふ坂の關の山風吹聲は昔聞しにかはちさりけり  
關寺のいかめしうつくられたるをみるにも。  
その折あらづくりの御かはばかりみられし折

思出られて。年月の過にけるもいとあはれな  
り。打出の濱のほどなど。見しにもかはらず。  
暮かゝるほどにまうでつき。ゆやにおりてみ  
だうにのぼるに人聲もせず。山風おそろしう  
おぼえて。おこなひさして打まどろみたる夢  
に。中堂より御かう給はりぬ。とくかしこへつ  
げよといふ人あるに。うちおどろきたれば。夢  
なりけりと思ふに。よきことならんかしと思  
ひておこなひあかす。またの日もいみじく雪  
降あれて。宮にかたらひ聞ゆる人のぐし給へ  
ると物がたりして。心ぼそさをなぐさむ。三日  
さぶらひてまかでぬ。そのかへる年の十月廿  
五日大嘗會御禊とのゝしるに。はつせの精進  
はじめて。その日京を出るに。さるべき人々一  
代に一度の見物にて。ゐ中せかいの人だにみ  
るものを。月日おほかり。その日しも京をふり  
出ていかむと。いとことも扶のくるおしく。ながれ

ての物語ともなりぬべき事やなど。はらからなる人はいひはらたてど。ちごどものおやなる人は。いかにも／＼心にこそあらめとて。いふに思たがひていだし<sup>る扶</sup>たつ。心ばへも哀なり。ともにゆく人々もいといみじく物ゆかしげなるはいとおしけれど。ものみて何にかはせん。かゝる折にまうでん心ざしを。さりとともおぼしなん。かならず佛の御しるしを見んと思ひ立て。その曉京をいづるに。二條のおほぢををし<sup>わたりて</sup>いくに。さきにみあかしもたせ。ともの人々上ゑすがたなるを。そこらさじきどもにうつるとて。いきちがふ馬も車もかち人も。あれはなぞとやすからすい<sup>「あれはなぞとやすからすい」</sup>ひおどろき。あざみわらひあざけるものどももあり。良頼の兵衛のかみと申し人の家のまへをすぐれば。それさじきへわたり給なるべし。門ひろうを。あけて。ひと／＼たてるが。あれは物まう

で人なめりな。月日しもこそ世におほかれとわらふなかに。いかなる心ある人にか。一時がめをこやしてなににかはせん。いみじくおぼしたちて。佛の御とくかならずみ給べき人こそあめれ。よしなしかし。物見でかうこそ思ひたつべかりけれど。まめやかにいふ人ひとりぞある。みちけんぞうならぬ御きにと。夜ふかう出しかば。立をくれたる人々もまち。いとおそろしう深き霧をもすこしはるけんとして。法性寺の大門にたちとまりたるに。ゐなかよりものみにのぼるものども。水<sup>「のい」</sup>のながるゝやうにぞみゆるや。すべて道もさりあへず。物の心しりげもなきあやしのわらはべまで。ひきよぎて行過るを。車をおどろきあざみたることかぎりなし。是等を見るに。げにいかに出たちし道なりともおぼゆれど。ひたぶるにほとけをねんじ奉りて。うちの渡りにいきつきぬ。

そこにも猶しもこなたざまにわたりするものども立こみたれば。船のかちとりたるおのこども。舟をまつ人のかずしらぬに心おごりしたるけしきにて。袖をかひまくりて。かほにあてゝ。さほにおしかゝりて。とみに舟もよせず。うそぶいてみまはし。いといみじうすみたるさま也。むごにえわたらでつくぐとみるに。むらさきのものがたりにうぢの宮のむすめどもの事あるを。いかなる所なれば。そこにもすませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにおかしき所哉と思ひつゝ。からうじて渡りて。殿のさぶらう所(御所)のうち殿をいりて見るにも。うき舟の女ぎみのかゝる所にや有けんなどまづ思ひ出らる。夜ふかく出しかば。人々こうじて。やひろうちと云ところにとゞまりてものくひなどするほどにしもともなるものども。かうみやうのくりこま山にはあら

ずや。日もくれがたになりぬめり。ぬしたちてうどとりおはさうせよやといふをいと物おそろしうきく。その山越はてゝ。にへの池のほとりへいきつきたるほど日は山の端にかゝりにたり。今はやどとれとて。人々あかれてやどもとむる所。はしたにて。いとあやしげなる下すのこいへなんあるといふに。いかゞはせんとてそこにやどりぬ。みな人々京にまかりぬとて。あやしのおのこふたりぞゐたる。その夜もいもねず。此おのこいでいりしありくを。おくの方なる女ども。などかくしありかるゝぞととふなれば。いなや。心もしらぬ人をやどしたてまつりて。かまはしもひきぬかれなば。いかにすべきぞとおもひて。えねでまはりありくぞかしと。ねたると思ひていふ。きくにいとむく／＼しくおかし。つとめてそこをたちて。東大寺によりておがみ奉つる。いそのかみも

まことにふりにける事おもひやられて。むげにあれはてにけり。そのよ山のべといふ所の寺にやどりて。いとくるしけれど。經すこしよみ奉りて打やすみたる夢に。いみじくやむごとなくきよらなる女のおはするに。まいりたれば風いみじうふく。みつけてうちゑみて。なにしにおはしつるぞととひ給へば。いかでかはまいらざらんと申せば。そこはうちにこそあらんとすれ。はかせの命婦をこそよくかたはらめとのたまふと思ひて。うれしく頼もしくて。いよくねんじたてまつりて。初瀬川などうち過て。その夜みてらにまうでつきぬ。はらへなどしてのぼる。三日さぶらひて。あかつきにまかでむとてうちねぶりたるによさりみだうの方より。すはいなりよりたまはるしるしのすぎよとて。物をなげいづるやうにするに。うちおどろきたれば夢なりけり。曉よふか

く出て。えとまらねば。ならざかのこなたなる家をたづねてやどりぬ。是もいみじげなるこいへなり。爰はけしきある所なめり。ゆかいぬ（みい）な。れうかいのことあらんに。あなかしこ。をびえさはがせ給な。いきもせでふさせ玉へと云をきくにも。いといみじうわびしくおそろしうて。夜をあかすほど。ちとせをすすす心ちす。からうじて明たつほどに。すれはぬす人の家也。あるじの女けしきあることをしてなむありけるといふ。いみじう風の吹日。宇治のわたりをするに。あじろいとちかう漕（すぐるにイ）よりたり。音にのみき、渡りこし宇治川の網代の涙も今日そかそふる二三年四五年へだてたることを。しだいもなかくかきつゞくれば。やがてつゞきだちたるす行者めきたれど。さにはあらず。年月へだたれる事也。春ごろくらまにこもりたり。山ぎは霞わたりのどやかなるに。山のかたよりわづか



にところなどほりもてくるもおかし。いづる道は花もみなちりはてにければ。なにともなきを。十月ばかりにまうづるに。道のほど山のけしき。此頃はいみじうぞまさる物なりける。山のはにしきをひろげたるやうなり。たざりてながれ行水。すいしやうをちらすやうにわかかへるなど。いづれにもすぐれたり。まうでつきて。そうぼうにいきつきたるほど。かきしぐれたる紅葉のたぐひなくぞみゆるや。

おく山の紅葉のにしき外よりもいかに時雨で深くそめけむとぞみやらるゝ。二年ばかりありて。又石山にこもりたれば。夜もすがらあめぞいみじくふる。たびゐは雨いとむづかしきものときゝて。しとみをしあげてみれば。在明の月の。たにのそこさへ曇りなくすみわたり。雨と聞えつるは。木のねより水のながるゝ音なり。谷川のなかれは雨と聞ゆれとはかよりけなる在明の月

また初瀬にまうづれば。はじめにこよなくものたのもし。處々にまうけなどして。いきもやらず。山城の國はゝその杜などに。紅葉いとおかしきほどなり。初瀬川わたるに。

初瀬川立歸りつゝ尋ねれば杉のしるしもこのたひやみむとおもふもいとたのもし。三日さぶらひてまかでぬれば。れいのならざかのこなたに。小家などに。このたびはいとるいひろければ。えやどるまじうて。野中にかりそめにいほつくりてすへたれば。人はたゞ野にゐて夜をあかす。草のうへにむかばきなどを打しきて。うへにむしろをしきて。いとはかなくて夜をあかす。かしらもしとゞに露をく。曉がたの月。いといみじくすみわたりて。よにしらずおかし。

行衛なき旅の空にもなくれぬは都にてみし有明の月。なに事も心にはなぬ事もなきまゝに。かやうにたちはなれたる物まうでをしても。道の

ほどをおかしともくるしともみるに。をのづから心もなぐさめ。さりとめたのもしう。さしあたりて。なげかしなどおぼゆることどもないまゝに。たゞおさなき人々をいつしか思さまにしたてゝ見んとおもふに。年月の過行を心もとなく。たのむ人だに。ひとのやうなるよろこびしてはとのみ思ひわたす心ちたのもしかし。いにしへいみじうかたらひ。よるひる歌などよみかはしゝ人のありくても。いとむかしのやうにこそあらね。たえずいひわたる。越前守のよめにてくだりしが。かきたえをともせぬに。からうじてたよりたづねて。これより。

たえさりし思ひも今はたえにけりこしの渡の雪のふかにといひたる返ごととに。

白山の雪の下なるさゝれ石の中の思ひは消んものかはやよひのつゐたち頃。西山のおくなる所に

いきたる。人目もみえずのどくと霞わたりたるに。哀に心ぼそく花ばかり咲みだれたり。里遠みあまり奥なる山ちには花みにとても人こさりけり世中むづかしうおぼゆるころ。うづまさにもりたるに。宮にかたらひ聞ゆる人の御もとよりふみある。返ごとと聞ゆるほどに。鐘の音の聞ゆれば。

しけかりし浮世のこととわすられず入相の鐘の心ほそきにかきてやりつ。うらくと長閑なる宮にて。おなじ心なる人三人ばかり。物語などしてまかでて。又の日つれぐなるまゝに。戀しうおもひ出らるれば。ふたりの中に。

袖ぬるゝあら磯浪としりながら共にかつきをせしそ戀しきときこえたれば。

あら磯はあされと何のかひなくてうしほにぬるゝ蜚の袖哉いま一人。

みるめおふる浦にあらすは荒磯の涙ま數ふる蜚もあらしな

おなじ心にかやうにいひかはし。世中のうきもつらきもおかしきも。かたみにいひかたらふ人。ちくせんにくだりて後。月のいみじうあかきに。かやう成し夜。宮にまいりて。あひてはつゆまどろまず。ながめあかいしものを。こひしく思ひつゝねいりにけり。宮にまいりあひて。うつゝにありしやうにて有とみて。打おどろきたれば夢成けり。月も山のはちかうなりにけり。さめざらましをといとどながめられて。

夢さめてねさめの床のうくはかりこひきとつけよ西へ行月さるべきやう有て。秋頃和泉にくだるに。よどといふよりして。道のほどのおかしうあはれる事いひつくすべうもあらず。たかはまといふ處にとどまりたるよ。いとくらきに。夜いたうふけて。舟のかちのおと聞ゆ。とふなれば遊びのきたるなりけり。人々けうじて。舟にさ

しつけさせたり。遠き火のひかりに。ひとへのをでながやかに。あふぎさしかくして歌うたひたる。いとあはれに見ゆ。又の日。山の端に日のかゝるほど。すみよしの浦をすぐ。そらもひとつに霧わたれる松のこずゑも海のおもても。なみのよせくるなぎさのほども。ゑにかきてもおよぶべきかたなうおもしろし。

いかにいひ何にたとへてかたらまし秋のゆふへの佳吉の浦

と見つゝ。つなで引すぐるほど。かへりみのみ

せられてあかずおぼゆ。冬になりてのぼるに。

(津イ)

おほえと云うらに舟にのりたるに。その夜雨

風いはもうごくばかりふりふゞきて。神さへ

なりてとどろくに。浪の立くるをとなひ。風の

吹まどひたるさま。おそろしげなること。いの

ちかぎりつと思ひまどはる。をかのうへに舟

をひきあげて夜をあかず。雨はやみたれど。風

なをふきて船いださず。ゆくゑもなきをかの

うへに五六日をすぎす。からうじて風いさゝかやみたるほど。舟のすだれまきあげて見渡せば。夕しほたゞみちにみちくるさま。とりもあへず。入江の田鶴の聲おしまぬもおかしくみゆ。くにの人々あつまりきて。その夜この浦をいでさせたまひて。いし津につかせ給へらましかば。やがて此御舟なごりなくなりなましなどいふ。心ぼそうきこゆ。

あるゝ海に風より先に船出していし津の波と消なましかは

世中にとにかくに心のみつくすに。宮づかへ

(マインシ)

とても。ことはひとすぢにつかうまつりつど

(マインシ)

かばや。いかゞあらん。時々立いでばなになる

べくもななめり。としはやくはた過行に。わか

わかしきやうなるもつきなうおぼえなげかる

るうちに。身のやまひいとおもくなりて。心に

まかせて物まうでなどせし事もえせずなりたればわくらはの立出もたえて。ながらふべき

心ちもせぬまゝに。おさなき人々を。いかにも

いかにもわがあらん世にみをつく事もがなと。

ふしおき思ひなげきたのむ人のよろこびのほ

天喜三年七月卅日從五位補僧道任信濃守御替公文

どを心もとなくまちなげかるゝに。秋に成て

待いでたるやうなれど。おもひしにはあらず。

いとほいなくくちおし。おやのおりより立歸

つゝみしあづまぢよりはちかきやうに聞ゆれ

ば。いかゞはせんにて。ほどもなくくだるべき

事共いそぐに。かどでは。むすめなる人のあた

らしくわたりたる所に。八月十よ日にす。の

ちのことはしらず。そのほどのありさまは。物

さはがしきまでひとおほくいきはひたり。廿

七日にくだるに。おとこなるはそひてくだる。

仲俊承暦元年閏十二月奉允文義生同三年正月廿七日式部

紅のうちたるに。秋のあを。しをんのおりもの

承暦元年正月七日五位廿五日紀伊權守

のさしぬききて。たちはきて。しりにたちてあ

ゆみいづるを。それもをり物のあを。にびいろ

のさしぬきかりぎぬきて。らうのほどにて馬



にのりぬ。のゝしりみちてくだりぬる後。こよ  
なうつれぐなれど。いといたうとをきほど  
ならずときけば。さきぐのやうに心ぼそく  
などは。おぼえであるに。おくりのひとぐ又  
の口かへりて。いみじうきらくしうてくだ  
りぬなどいひて。此曉にいみじくおほきなる  
人だまのたちて。京ざまへなむきぬるとかた  
れど。ともの人などのにこそはと思ひ。ゆゝし  
きさまにおもひだによりむやは。いまはいか  
で此わかき人々おとなびさせんと思ふよりほ  
かの事なきに。歸る年の四月にのぼりきて。夏  
秋も過ぬ。九月廿五日よりわづらひいでて。十  
月五日に夢のやうにみないておもふ心ち世中  
に又たぐひある事とおぼえず。はつせにか  
がみ奉りしに。ふしまろびなきたるかげの見  
えけんは。是にこそは有けれ。うれしげなりけ  
んかげはきしかたもなかりき。今行末はあべ

いやうもなし。廿三日はかなくも煙になす夜。  
去年の秋いみじくしたてかしづかれて。うち  
そひてくだりしをみやりしを。いと黒ききぬ  
のうへにゆゝしげなる物をきて。車のともに  
なくぐあゆみ出て行をみいだして思ひいづ  
るこゝち。すべてたとへむかたなきまゝに。や  
がて夢路にまどひてぞ思ふに。その人やみに  
けんかし。むかしよりよしなきもの語。うたの  
事をのみ心にしめて。よるひる思ひて。おこな  
ひをせましかば。いとかゝる夢の世をばみず  
もやあらまし。はつせにてまへのたびは。いな  
りよりたまふしるしの杉よとてなげ出られし  
をいでしまゝに。いなりになうでたらましか  
ば。かゝらずやあらまし。年ごろ天照御神をね  
んじ奉つれとみゆる夢は。人の御めのとして  
内わたりにあり。みかどきさきの御影にかゝ  
るべきさまをのみゆめときもあはせしかと

も。その事はひとつかなはでやみぬ。たゞかな  
しげ也とみし鏡のかげのみたがはぬ。哀に心  
うし。かうのみ心にもものかなふ方なうてや  
みぬる人なれば。くどくもつくらずなどして  
たゞよふ。さすがにいのちは憂にもたえずな  
がらふめれど。後の世もおもふにかなはずぞ  
あらんかしとぞうしろめたきに。たのむ事ひ  
とつぞ有ける。天喜三年十月十三日の夜の夢  
に。ゐたる所のやのつまのにはに阿彌陀佛た  
ち玉へり。さだかには見えたまはず。霧ひとへ  
へだたれるやうにすきて見え玉ふを。せめて  
たえまに見奉つれば。蓮花の座のつちをあが  
りたるたかさ三四尺。ほとけの御たけ六尺ば  
かりにて。金色にひかりかゞやき玉ひて。御手  
かたつかたをばひろげたるやうに。いまかた  
つかたにはゐんをつくり玉ひたるを。こと人  
のめにはみつつけ奉つらず。我一人見たてまつ

りて。さすがにいみじくけおそろしければ。す  
だれのもとちかくよりてもえ見奉つらねば。  
佛さはこのたびは。歸て後むかへにこんとの  
給ふ聲。わがみゝひとつにきいて。人はえ  
きゝつけずとみるに。うちおどろきたれば。十  
四日なり。この夢ばかりぞ後のたのみとしけ  
るを。ひとなどもひと所にて朝夕見るに。かう  
哀にかなしきことの後は。所々になりなどし  
て。誰もみゆることかたうあるに。いとくらしい  
夜。六はらに(らうい)あなるをい(たい)のきたるに。めづらし  
うおぼえて。

月も出てやみにくれたるをはすてに何とて今宵尋きつらん  
とぞいはれにける。ねむごろにかたらふ人の  
かうて後音づれぬに。

今は世にあらし物と思ふらん哀なくくなをこそはふれ  
十月ばかり。月のいみじうあかきをなくく  
ながめて。

ひまもなき泪に疊る心にもあかしとみゆる月の影哉

年月はすぎかはりゆけど。夢のやうなりしほどを思ひいづれば。心ちもまどひ。めもかきくらすやうなれば。其ほどの事はまたさだかにもおぼえず。人々はみなほかにすみあかれて。古郷にひとりいみじう心ばそくかなしくて。ながめあかしわびて。ひさしう音づれぬ人に。しけり行蓬が露にそほちつゝ人にとはれぬ音をのみそなくあまなる人也。

世の常の宿のよもきに思ひやれそむきはてたる庭の草むら

ひたちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也。母倫寧朝臣女。傳のとののはうへのめいなり。よはのねざめ。みづのはままつ。みづからくゆる。あさくらなどは。この日記の人のつくられたるとぞ。

孝標。右中弁從四位上  
資忠朝臣一男。

長保二年正月廿七日補藏人。元春宮藏人右衛門大尉使。

三年正月廿四日叙爵。寛仁元年正月廿四

日任上總介。四十五。五年正月得替。九。長元

五年二月八日任常陸介。七月赴任。正五

下。六十。

橘俊通。但馬守爲義四男。  
母讃岐守大江清通女。

治安三年四月廿日昇殿左衛門尉。元帶刀長。萬

壽四年三月三日使宣旨。長元四年十一月

廿一日補藏人。五年正月七日叙爵。廿一。

長久二年正月廿五日下野守藏人使巡。四

十。天喜五年七月卅日任信濃守。從五位下。任中。

康平元年十月五日卒。五十

參議從二位勘解由長官源朝臣資通。贈從三位  
正四位上

修理大夫  
濟政一男。

長和五年正月十二日大膳亮。祖父大納言二合。寛仁

四年正月九日藏人。十六。正月廿四日左衛

門尉。治安二年正月卅日式部丞。二月廿九

日從五位下。九月廿三日侍從。三年正月十

二日藏人。十二月十二日左馬權助。依御賀  
舞人任

衛府。四年十二月十五日左兵衛佐。萬壽二年

正月七日從五位上。中宮御給。十月廿六日民部

少輔。四年正月七日正五位下。上東門院御給。長元

元年二月十九日左小弁。三年十一月五日

右中弁。四年三月和泉守。藏人巡。十一月廿九日

從四位下。七年正月七日從四位上。行幸上東  
門院

八年十月十六日權左中弁。九年二月廿七

日兼右京大夫。十月十四日攝津守。止大長  
夫

曆元年八月十一日正四位下。石清水行幸。二年六

月廿五日左中弁。三年十二月五日右大弁。

長久二年止守。四年九月十九日藏人頭。卅九

五年正月七日正四位上。寬德元年十二月

十四日參議。兼。二年十月左大弁。永承元年

十一月從三位。五年九月大貳。止大弁。十一月

十一日正三位。天喜二年讓大貳入洛。五

年正月從二位。康平元年正月兼兵部卿。十

一月勘解由長官。三年八月十一日依病出

家。廿二日薨。五十  
六

經朝卿。萬壽二年十一月廿日戊戌伊勢齋宮御裝束。織

物唐衣一領。五圭。重白綾裳一腰。織物。紅重袴

一具。綾褰入帷等也。予有仰調之奉大

內。是來五日着裳給之。仍差藏人左兵衛

佐源資通爲勅使。遣件御裝束。兼仰作

物所令作花莖一合。入此御裝束。又令

作銀小莖一合。入合燒物副御裝束

使。明日進發。

十二月三日。差藏人令收初雪見參。給

小右記祿。

長保二年十一月。

來七日伊勢齋王着裳。年十七左兵衛佐能通

爲勅使參齋宮。奉遣御裝束使也。明日



憲定賴定朝臣又參<sub>二</sub>齋宮<sub>一</sub>。中將來借<sub>二</sub>取厩馬雜具等<sub>一</sub>。

十右記

長久三年六月廿三日。藏人少將隆俊爲<sub>二</sub>勅使<sub>一</sub>參<sub>二</sub>齋宮御着裳<sub>一</sub>。先朝之御時。右大弁資通爲<sub>二</sub>兵衛佐<sub>一</sub>時爲<sub>二</sub>勅使<sub>一</sub>參<sub>二</sub>彼宮<sub>一</sub>云々。

先年傳<sub>二</sub>得此草子<sub>一</sub>。件本爲<sub>レ</sub>人被<sub>二</sub>借失<sub>一</sub>。仍

以<sub>二</sub>件本書寫人本<sub>一</sub>更寫<sub>レ</sub>之。傳々之間。字誤甚多。不審事等付<sub>レ</sub>朱。若得<sub>二</sub>證本<sub>一</sub>者可<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>合之<sub>一</sub>。爲<sub>二</sub>見合<sub>一</sub>時代。勘<sub>二</sub>付舊記等<sub>一</sub>。右さらしなの日記以古本書寫以屋代弘賢藏本及扶桑拾葉集按合畢

〔以玉井氏按訂本補按畢〕

群書類從卷第三百二十九

紀行部三

高倉院嚴嶋御幸記

土御門内大臣通親公

はかなくて。としもかへりて。治承四年にもなりぬ。春のはじめにめづらしきことども。かきつくしがたし。くらゐおりさせ給て。いつくしまの御幸あるべしなどさゞめきあひたるも。ゆめのうきはしをわたる心地するに。きさるぎの廿日あまりにや。安徳春宮にくらゐゆづりたてまつり給て。ないし所しんじほうけんわたしたてまつられし夜こそ。日ごろ思召とりしことなれど。心ぼそき御けしきみえしか。宮人もかぎりなくあはれつきせざりしが。そらのけしきもかきくもり。のこりの雪にはもまだ

らにうちそゞぎて。くれがたになりしほど。かんだちべぢむにあつまりて。あるべきことどもふるきあとにまかせてをこなはれしに。せんじうけ給りて。ぢんにいでて。御くらゐゆづりのこと。左大臣おほせしをきつて。心ある人袖をうるほして。なにとなくおもひつゞくる事色にいでたる。その中にとりわき心ざしふかき人にや。かくぞ思ひつゞける。

かきくらし降はる雨や白雲のおるゝなこりを空におしめるときよくなりぬとて。なにとなくひしめきあひたり。弁内侍御はかしとりてあゆみいづ。せいやう殿の西おもてに。やすみちの中將うけとる。備中の内侍しるしのはことりいづ。隆房

中將とりて。ちかきまもりのつかさたちそひ  
ていづ。としごろちかく候て。もちあつかひし

御はかし。しるしのはこ。今宵ばかりこそ手を  
もふれめと思ひつゞけん内侍の心のうち。  
おもひやられてあはれなり。まうけの君にく  
らゐゆづりたてまつりて。はこやの山のうち  
もしづかになど。おぼしめすまゝなるべきだ  
にあはれもおほかるに。まして心ならずあは  
れなるらんさきぐゝのありさまおもひやら  
る。だいのことどもはてゝ。夜もあけがたに  
なりしほどに。人々歸まいりて。なにとなく火  
のかげもかすかに。人めまれなるさまになり  
て。なみたとゞまらぬ心地するに。院號おほせ  
られて。殿上はじめなにくれさだめらる。鶏人  
のこゑもとゞまり。たきぐちのもむじやくも  
たえて。もんちかくくるまののりせしも。  
ひがごとのやうにぞおぼえける。そのころか

む院の池のほとりのさくらはじめてさきたる  
を見て。

こゝのへの匂ひ世せは櫻花はるしりそむるかひやあらまし  
かくていつくしまの御幸あるべしとて。やよ  
ひの三日。神ほうはじめらるべき日次のさだ  
あり。位おりさせ給ては。加茂八はたなどへこ  
そいつしか御幸あるに。おもひもかけぬうみ  
のはてへ。浪をしのぎていかなるべき御幸ぞ  
となげきおもへども。あらき波の氣色。風もや  
まねば。口より外にいだす人もなし。四日。よ  
き日とて。御幸はじめあるべしとてさだめら  
る。そのあしたより雨ふりて。夕にぞはれた  
る。そむかうなどせさせ給て。實國大納言使に  
てまいる。夜に入て土御門高倉邦つなの大納  
言の家に御幸あり。殿より。からの御車。うつ  
しのむま。なにくれと殿へまいらせさせ給。御  
車たてまつるよそひもいとめづらし。御隨身

どもさまぐゝふるまひて御前まいる。上達部  
殿上人のこりなくつかうまつる。ひきさがり  
て中宮<sup>立</sup>行けい有。今宵ぞいつくしまの神ほう  
はじめらる。御ともの人さだめらる。わづらひ  
なく無下にしのびたるやうにとぞさだめる。  
宮の鶯こゑしづかにさへづりて。よもの山邊  
もかすみこめ。春ふかきけしきにも。たびの  
空。なにとなく世の中さまぐゝあやなく。わか  
れをおしむともがらおほくきこゆ。ながき春  
日もはかなくくれて。十七日に宮古を出させ  
給べきにてありしに。山の大しゆなにくれと  
申ときこえてしづかならざりしかば。けふは  
八條殿へ御がど出あるべしとて。八條大宮二  
位殿のもとへ御幸あり。なにとなく波のうき  
すにゆられありきて夢か夢にあらざるかとの  
み。おほやけわたくしおもひあひたるなごり  
も。いかにとあらぬわかれもなど。あながちげ

に申たりける人のわりなさに内裏へいとま申  
さんとて参りしたよりにたち入て。定なき世  
のをくれさきだつためしも。たびの空のあは  
れさなど申あはせつゝ。おぼろなる月かげほ  
のかにさし入て。まどの梅のちりすぎたる。木  
ずゑにとまるなごりばかりに。風のたよりに  
ほのめかしたる。いひつくしがたし。ほどなく  
夜もやゝふけぬるよしいさむるこゑにもよほ  
されて。たちいづるとてかきつけける。

めのまへにとまらぬものはいまはとて立出る程の泪也けり  
思ひやれ都のそらをなかくても八への鹽しのたひの哀さ  
八條殿へ御幸いそがるべしときこゆる御使ま  
いりなどしつゝ。ならはせ給はぬたびの空。お  
ぼつかなきなど申させ給ひける。隆季大納言  
まいりて。御幸もよほしかくして候などすゝ  
め申。あはれに御ともすべき人みな舟にまい  
るべしとて。草津といふところにひらはりう



ちてまいらせたり。隋帝のにしきのともづなにてつなぎたりけん舟にはかはりたれども。心ことにひきつくろひたり。御ふねども峯のあらしに色々のこのはみぎはに散しきたるやうにうちちらしたり。おほかたこゑどもは。木ずゑのせみのなつふかき心ちして。御ともの女房たちみふねにまいる。立よりてさたしのせても。いかなるべきたびの御あそびぞと。こといみもせずなげきあはれたるを。御かどいでになどいさむる心地の中にもたゞならず。日さしいづるほどに御幸なる。殿上人十よ人上達部七八人ばかりにて御なをしにてぞおはします。御車さしよせて御舟にたてまつる。かんの院のいけのふねなどこそたてまつりならひしか。いつかはかゝる道にも御らんせんとぞおぼゆる。御ふねにたちさるまじきよしおほせごとありしかば。御まへには御送の人もき

しになみゐたり。公卿には帥大納言隆季。藤大納言實國。五條大納言邦綱。土御門宰相中將通親。殿上人には中將隆房。弁兼光。御幸の事うけ給りをこなふ。むくのかみ宗のり。この外は前右大將宗盛。頭亮重衡。さぬきの中將時實などは女房四五人ばかりさがたき人々ぞまいる。人おほかからずとおぼしめせど。さすがに船數おびたゞしく。ほどなくみつのまにつかせ給。八はたの御へいたてまつらせ給ふ。御舟ながら。はまのうへにしきのおくをば。こもをしきてぞ御へいよせたつる。御あがもの。隆房中將とりて御船にまいらす。宗教役送はつかうまつる。かもんのかみするひろごけいにまいる。かくて御舟いだして。こちかせをおいてくだらせ給。さるの時に川しりのてら江といふ所につかせ給ふ。邦綱の大納言御所つくりて。御まうけこゝろをつくして。御舟ながらに

さしいれて。つりどのよりおりさせ給。御しやうじどもも。からのやまとのゑどもかきちらしたり。むまやにあしげのむまども二ひきたてゝ。めづらしきくらどもかけたり。御よそひの物ども數しらず。上達部殿上人の居所どもみなその用意あり。ふくはらより。けふよき日とて舟にめしそむべしとて。からのふねまいらせたり。まことにおどろくしく。ゑにかきたるにたがはず。たうじんぞつきてまいりたる。こまうどにはあだには見えさせ給はじとかや。なにがしの御時にさたありけんに。むげにちかく候はんまでぞかはゆくおぼゆる。御舟にめしそめて。江のうちをさしめぐりてのぼらせ給ぬ。ゆふべの雨しづかにそぼちて。たびのとまり。いつしか宮古戀しく心ぼそきありさまなり。あめかくふらば。あすはこれにやとまらせたまふべき。またかちよりやふくは

らまでつかせ給べき。御ふねにてやあるべきなど右大將におほせあはせらる。あくるあした。あめなをはれやらで。日ついでかぎりあれば。とまらせたまふべきにあらずとていでさせたまふ。あめの空は風さだまらずとて。かちより御幸なる。にしの宮のへいたてまつらせ給。にはにて御はいあり。むねのり御つかひにてまいりぬ。御こしにていでさせ給。人々むまにてみなつかうまつる。をとにきつるなるおのまつ。きゝもならはぬなみの音。いそべちかくいつしかなれぬる心地しつゝ。いづくともわかず山川をうちすぎ。はるくゝとゆきける。西の宮のまへにて。ほつせたてまつりて。たいらかに宮古へ歸べきよしぞいのり申さる。ひつじのときはとがの山ざかにつかせ給。よものうみをいけに見なして。なにかは三千世界のこらんと見えたり。これにてひるの

くごまいりて。やがて出させたまひぬ。いくた  
のもりなうち過て。さるのくだりにふくは  
らにつかせ給。入道大きおほいまうち君心をつ  
くして。御まうけども心ことばもをよばず。  
あめのしたをこゝろにまかせたるよそほひの  
ほどいとなまれたるあり。ありさまおもひや  
るべし。まことに三十六のほらに入たらん心  
地す。こだち庭のありさまゑにかきとめたし。  
をとにきゝしにもやゝすぎて。めづらかに見  
ゆ。つかせたまひてのち。いつしかいつくしま  
のないしどもまいりてあそびあひたり。御所  
のみなみおもてににしきのきぬやうちて。こ  
まばこのさはたてわたしたり。内侍八人ぞあ  
る。みなからの女のよそほひぞしたる。はなか  
づらの色よりはじめて天人のおりくだりたら  
んもかくやとぞ見ゆる。萬歳樂などさまゝ  
まひたり。左右にめぐりてつかることをし

らす。あさゆふしつきたるまひ人にはまさり  
てぞみゆる。利曾のがくのこゑもかぎりあれ  
ば。これにはいかでかとぞおぼゆる。まひはて  
ぬればうへにめしあげて御まへにてかぐらを  
ぞうたはせらるゝ。ちかく候かんだちべ殿上  
人もてなしあひたり。山かげくらう日もくれ  
しかば。にはにかぐりをともして。もろこしの  
魯陽入日を返しけんほどもかくやとぞおぼゆ  
る。夜もふけしかばいらせ給ぬ。なにのなごり  
もなくぞ。うちゝはおぼしける。世のありさ  
まにだにもてなしまいらせば。堯舜のひじり  
の御代にはをとらせたまはじとぞみゆる。か  
の天ほうのすゑに。ときかはらんとて。ときの  
人この舞をまなびけり。大真といふもの。ほか  
にはあんろく山といふもの。うちにはおもふ  
所ありけん。そのこゝろには似たまはざりけ  
ん。君の御心にかはりたれど。いかにと申人も

なし。げにぞおもふにかひなき。

廿一日。夜をこめて出させ給。宮をいでさせたまふより。かむだちべ殿上人みなじやうえをぞきたる。をとに聞しわだのみさき。すまのうらなどいふ所々。うらづたひはるくあらきいそべをこぎゆくふねは。帆うちひきて。なみのうへにはしりあひたり。ふくはらの入道は。からのふねにてぞうみよりまいらる。はりまの國までこえけるにや。いなみのなどきこゆるにぞ。あはれにおぼゆる。御こしちかくさぶらひて。ところくとはせたまふ。八瀬どうじをぞさすのめして。御こしつかうまつる。はりまの國山だといふところにひるの御まうけあり。心ことにつくりたり。庭にはくろきしろきいしにて。あられのかたにいしだたみにし。松をふき。さまぐのかざりどもをぞしわたしたる。御まうけうみのいろくづをつくし。

山の木の實をひろひていとなめる。とばかりありてぞいでさせ給。かせすこしあらだちて。波のをともけあしくきこゆる。うかべるふねどもすこしさはぎあひたり。あかしのうらなどすぐるにも。なにがしのむかししほたれけんもおもひいでらる。さるのときにたかさごのとまりにつかせたまふ。よものふねどもいかりおろしつ。うらくにつきたり。御舟のあしふかくてみなとへかゝりしかば。はしぶね三ぞうをあみて。御こしかきすへて。かんだちべばかりにて御ふねにたてまつりし。きゝもならはぬなみのをと。いつしかおどろくしく。うら人のこゑも耳にとまりたり。これよりぞ。國々へめされる使など返つかはさる。たよりにつけて宮こなる人にをとづれける。

思ひやれ心もすまにれさめしてあかしかれたるよゝの恨を



いづれのさにかにはとりのほのかにきこえていとものはれなり。よものうら／＼かすみわたりて。たゞならぬはるのあけぼのに。たびのそでのうへそのこととなくぞしほたれける。しほみちぬいでさせたまふべしとて。我も我もとふねどもいとなみたり。ちかく候へなどたのもしくおぼしたるいとかたじけなし。からの御ふねよりつゞみを三たびうつ。もろもろの舟どもはじめてこのころにみなとをいづ。いではてゝぞ一の御ふねはいださるゝ。舟こかんどりなど心ことにさうぞきたり。はじこかしのあゐすりに。きなるきぬどもかさねて廿人きたり。なぎたるあさのうみに。ふな人のゑいやごゑめづらしくぞきこゆる。むまのときかたぶきし程に。むろのとまりにつき給。山まはりて。そのなかにいけなどのやうにぞみゆる。ふねどもおほくつきたる。そのむかひ

にゑしまといふとまりあり。つくしへときこゆるふねどもは。かせにしたがひてあれにつくよし申。むろのとまりに御所つくりたり。御舟よせておりさせ給。御ゆなどめして。このとまりのあそびものども。ふるきつかのきつねのゆふぐれにばけたらんやうに。我もわれもと御所ちかくさしよす。もてなす人もなければまかり出ぬ。この山のうへにかもをぞいはひたてまつりける。御へいまいらせたまふ。またわたくしにもまいりてへいたてまつる。としおいたる神とのもりあり。このやしろはかものみくりやに。このとまりのまかりなりしそのかみ。ふりわけまいらせて。御しるしあらたなり。やしろ五六。大やかにてならびつくりたる。つゞみうちて。ひまなく神なぎどもあつまりてあそびあひたり。これは御みちのほどあめかせのわづらひなどの御いのり申とぞ

きこゆる。雲わけむの御ちかひも。思ひがけぬ  
うらのほとりに。たのもしくぞおぼゆる。

廿三日に空もはれかせもしづまりて。有あけ  
の月あはちしまにおちかゝりてまたなくおも  
しろければ。

あはち嶋かたぶく月を詠てもよにありあけの思ひてにせん  
びせんのくにこじまのとまりにつかせたま  
ふ。御所つくりたり。御もののぐどもあたらし  
くとゝのへをきたり。かんだちべ殿上人ども  
のしゆく所どもつくりならべたり。しほすこ  
しひて。御ふねつき給。みぎはとをければ。御  
こしにてぞのぼらせ給。御所の東の御つばに  
がくやをつくりて。入道内侍どもぐしてまい  
る。さまぐのひたゝれども。にしきをたちい  
れはなをつけたる八人あつまりてでんがくを  
す。女のおそびどもみえず。たゞあらんだにあ  
るべきに。うみのほとりにめおどろかす物や

あらんとおぼゆ。でんがくはてにしかば。國の  
すしとて。おかしげなるものどもまいりて。す  
しはしりつかうまつる。日くれにしかばみな  
まか下ぬ。うらく御らんじやりて。いる日の  
そらにくれなゐをあらひて。むかひなるしま  
がくれなる山のこだちども。ゑにかきたる心  
地するに。御めにかゝる所々たづねさせたま  
ふ。このむかひなる山のあなたに入道おとゞ  
はおはすると申に。きこしめして。御氣色うち  
かはりにしかば。人々までもあはれに思心の  
中どもみえたり。あからさまとおもふとまり  
だにも物あはれなるに。ましてゑびすがたち  
にいりぬらん氣色。いかばかりとおぼゆ。く  
つなの大納言御をとづれありしなど申ける。  
なにはへもおぼしめしわかず。この國にや  
はたのわかみやおはしますときこしめして。  
へいたてまつらせ給。

廿四日のとらのときにつゞみをうちてび中のくにせみといふ所につかせ給。くに／＼ふかくなるまゝに。山の本だちいしのたちやうもきびしくみゆ。

廿五日のさるのときにあきのくにむま嶋といふところにつく。これにてみなうしほにてかみをあらひ。身をきよむ。宮じまちかくなりにつけりときよき心をおこす。

廿六日空のけしきうらゝかにて。神の心もうけよろこばせ給にやとめぐみもかねてしるし。日さしいづる程にいでさせ給ふ。むまのときに宮嶋につかせ給。神ほうのふねたづねらる。かねてまいりまうけたるよし申。をんやうしのふねしばらくまたるゝ。空のけしき。所のありさまめも心もおよばず。だいたうの湖心寺かくやとぞ見え。神がみ山のほらなどにいでたらん心ちす。宮じまのありのうらに神ほ

うとゝのへたてゝ御はいあり。やしるづかきかりぎぬなどきたるもの神ほうもちてまいる。おほぬさにはらへきよめ申てまいらす。ときざねの中將とりつぎてまいらす。しほいくほどにて御所へ御ふねいらねばはしぶねにてぞおりさせ給。かんだらへ御舟にさぶらひて。宮嶋のみなみの方。三げん四めむの御所つくりて。しやうじのゑともうみのかたをぞかきたる。うみのうへなぎさまでらうをつくりつゞけて。しほみたば御ふねをさしよせんしたくをぞしたる。御ゆ殿などありて。きぬの御じやうえめしていでさせ給。御所のひんがしのはにしらきのつくえをたてゝ。こもをしきて。しろたへのへいをよせたつ。そのひがしにからびつのふたをあけてこがねのへいをつく。そのにしにわらぎをしきてをんやうしのざとす。神馬一疋たつ。さゑもんのせうのぶさ

だ時むねこれをひく。北面などいまだはじめをかれねば。御ともにはかんだちべのさぶらひをぞめされける。たかふさの中將御前にさぶらふ。宮内少輔むねのりやくさうをつとむ。御けいはてぬれば。めしつかひ御くつをもちてさきにまいる。くはいらうのきたのはまをめぐりてまいる。らうをとをりてまいらせ給。くらゐの御ときは。一二町をだにもえんどうをこそまいらせしに。めしならはぬ御くつもいかゞとぞおぼゆる。かん達部殿上人御ともに候す。まらうどの宮にまづまいらせ給。こむくのへいは二ささげ。しろたへのへい。神くはんとりてほうせんにそなへならべたつ。はいでんのうちのほど。かうらいのはんでう一疊御はいのざとす。こんくのへいは。かねみつの弁つたへととりて。たかすゑの大納言。たう大納言。つたへ取てまいらす。御はいをはりて歸

らせ給。成師のとのしたまはる。御こと一。御びは一。御ひやうしよこぶえうけとりて。ほうせんにならべをく。内侍ども色々さまぐにしやうぞきてにしきをたちきたり。ぬひ物せしめも心もをよばず。御かぐらをはりて大宮へまいらせ給。御ほうべいはてゝ御きやう供養あり。金でいの法花經一部。壽量品。壽命經。御てづからかゝせたまひける。御導師こうけん僧正參りて。此よしを申あげらる。こゝのへのなかをいでて。やへのしほちをわけまいらせたまふ御心ざしなど。きく人も袖をしぼりあへず申上ける。かづけもの一かさね一包をぞたまはりける。けんじやうおほせらる。法けん一人なし給ふ。神ぬしかげひろくらゐあげさせ給。宮じまの座主阿闍梨になしたぶ。あきのみありつねかゝいしなあげさせ給。院の殿上ゆるさる。隆季大納言ぞかねみつにおほせ



ける。御神樂のやをとめ八人きぬ。一々わたなどたばせける。日くれて歸らせ給。上達部殿上人のとのゐ所。心をつくしてまうけたり。内侍どもかやかたをしつらひてぞをのくすごしける。月のころならましかば。いかにおもしろからまし。月なき空をぞ口おしくおもひあひたる。

廿七日にそらの氣色うらゝかにはれわたりて。のこりの鶯おもはぬみやまの木かげにかたらふこゑす。夜をこめて。しほみつとて御所のまへまでさしいりたる。まことにこの世の有さまとも見えず。供御などはてにしかば。御宮めぐりあるべしとてみやへまいらせたまふ。けふはぬのの御じやう衣をぞめしたる。國國のかみどもまいらせたる宮のまへにはこびをく。らうのまへに樂やをつくりて拜殿をたてたり。内侍ども老たるわかきさまぐあひ

みつらなりて神供まいらす。とりつゞきてがくどもして。御戸ひらきてまいらす。それはてしかば。宮司神人まで物をたまはる。ちやうくはんなどぞわかち給。内侍ども。かねをのべにしきをたちて。さまぐのはなをつけて。太くちをきて。でんがくつかうまつる。八人ならびは天人のおりあそぶらんもかくやとぞおぼゆる。そののちそがうこまほこなどまふ。さほとれるすがためも心もをよばず。日もくれにしかば。たきのみやへまいらせ給。こうけむ僧正うたよみてかきつけける。

雲より落くるたきの白糸にちきりをむすふことを嬉しきよに入にしかば。こよひ御つやあるべしとてまいらせたまふ。内侍どもあつまりて夜もすがら御神樂あり。ふくるほどに。七になるこ内侍あるに神つかせ給て。はじめはたふれふして。時中ばかりたへいりにし。おとなしき内侍

どもかゝへて。ほどへていきいづ。御神樂つかうまつるべきよしおほせられて。神主めしいでてさまぐの事ども申さる。めもあやにかにとうたがひをなす人もありぬべきに。さしもいふかひなきもののさまぐ法文などとして。御神のはじめてのしまにあとをたれ給ひしごとばとて申。きく人なみだをのごはずといふことなし。入道めしいでておほせらるゝことどもあり。これを入きかず。法華經のじゆりやうぼんをたびぐ誦しける。かうべをかたづけずといふことなし。あるひはけだかき女房うしろのしやうじにうつりて寶殿にむかひたまへるすがたを見たるなど申人もあり。つねにありとおぼえぬにはひ。神殿のうちよりかうばしくにほひこし。あまたおどろきさはぎあひき。まことに高唐の神女はかのやうだにおりて。みかどのゆめにいりて。あし

たに雲となり。ゆふべには雨とならんと契りたてまつりけんあとも。かくやとぞおほゆる。あけがたになりしかば。やしろのには鳥こゑごゑあけぬとなふ。なみのをとまたかくみづがきをあらふはしほみつるにや。はくらく天のうしほのこゑは來てみゝにいとつくりけるも。きゝてはふせいもたくみなりけるにやと。かたぐとりあつめたる折からのありさまいひつくしがたし。かくてあけにしかば。御所へかへらせ給。

廿八日このわたりのうらくを御らんすべしとて。あまどもかづきさせ給。からのほなだのかりの御なをし。からあやのしろき御で二。御大くちたてまつらせ給。御すがたいみじうなまめかしう。うつくしうみえさせ給ふ。うらつたひてさしまはして御らんず。まことにせんのはらもかくやと。りうぐうともこれにい

ふにやとおぼゆる所々のみおほかり。みるめなどもてまいる。とばかり御らんじまはりてかへらせたまふ。あくるたつの時に又御みやめぐりありて。やがて御舟にたてまつる。しまのうちにもおどろ／＼しくさはぎあひたり。内侍どもみぎはにいでて。なにとなくひごろのなごりしのびおもひたる氣色なり。なごりおほきよしのうたつかうまつれとありしかば。

立かへりなこりもありのうらなれは神も哀をかくるしら波かせもしづかに物のあはれも春ふかくなりにけるけしき。おもひかけぬしまのうへにさくらのちりがたになりたるみゆ。いみじくおかしくおぼえしに。三月盡になりにつけり。廿九日いかでたびのとまりとても春をおしまざらんとて。人々ふみつくる。もてなしけうせさせ給べきにもあらず。なにのはへもおぼしめされ

ず。ことはりとぞみたてまつる。

四月一日になりぬれば。けふは衣がへなどいふことぞかしとおもひやらる。またくもりたれど。あめやみにたれば。舟どもみなとをいだしたりしかば。浦々とまり／＼うちすぎつ。やう／＼みやこちかくなる心地してたびのなごりもおぼえず。とく／＼とすぎさせ給。むかへのきしに色ふかきふぢ。松のみどりにさきかゝりたるを御らんじて。あれとりにつかはせとおほせられしかば。ちやう官やすさだはし舟にてとをりしをめしとぞめてつかはす。をかのうへののぼりてまつのだにかけてもてまいる。こゝろばせありとおほせられて。そのよしのうたつかうまつれとおほせありしかば。

千歳へむ君かかしのふちなみは松の枝にもかゝる也けり空はれて日さしあがるほどに。我も／＼と船

ども帆うちあげて。雲のなみけぶりのなみを  
わけてはしりあひたり。びせんの國うちうみ  
とをらせ給。日いりがたにこじまにつかせた  
まふ。

四日のあかつき御ふねいださる。夜ふねこぐ  
こゑまことにうらがなしげにきこゆ。

五日雨ふりしかば。たかさごのとまりにつか  
せ給。みやこ人のくだるにこそ。なにごとかと  
上下たづねける。さるの時にふくはらにつか  
せ給。いま一日もみやこへとくと上下心のう  
ちにはおもひける。ふくはらの中御覽せんと  
て。御こしにてこゝかしこ御幸あり。所のさま  
つくりたる所々。こまうどのはいしけるもこ  
とほりとぞみゆる。あしたといふよりもりの  
いゑにて。かさがけやぶさめなどつかうまつ

らせて御らんせさす。日くれてかへらせ給。  
八日家のしやうをこなはる。かゝいどもたま  
はせけり。かねみつの弁うけたまはりておほ  
せける。左少將すけもり。丹波のかみきよくに  
ぞかゝいしける。宮古ちかくなるまゝにやは  
た山の見えしもたのもしくうれしくぞおぼ  
ゆる。ひえの山みゆるなど申しかは。女房達も  
たちさはぎ見あひたまふ。さるの時に御車に  
めして八條どのへいらせ給。二ゐどののもと  
へかへらせ給。宮古のうちもめづらしくぞお  
ぼしめさるゝ。かくて御やせもたゞならずな  
どきこえて。くすしども申すゝめて。御きうち  
などぞきこえし。



後鳥羽院熊野御幸記 京極中納言定家卿

建仁元年十月。

五日。天晴。曉鐘以後營參。左中弁夜前示送云。

折烏帽子可參。但於二津邊可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>立烏帽子<sub>一</sub>。

又高良御幣使可<sub>レ</sub>存。兼又曰。前使同可<sub>レ</sub>勤

也。所々御布施取可<sub>レ</sub>存知<sub>一</sub>者。仍着<sub>二</sub>折烏帽子<sub>一</sub>。

兼日俊光折<sub>レ</sub>之。淨衣。短袴。柏。生小袴。下緒。腰巾用。白。初每人如此。淨衣。度如此云々。シトニタビラ付。

昇<sub>二</sub>緣邊<sub>一</sub>坐。左中弁同如此。〔少〕時如<sub>レ</sub>例御拜

如<sub>レ</sub>例。訖出<sub>二</sub>御門中庭<sub>一</sub>。被<sub>レ</sub>懸<sub>二</sub>御床<sub>一</sub>。晴光奉<sub>二</sub>仕御

禊。向<sub>二</sub>門中央<sub>一</sub>。奉<sub>二</sub>仕之<sub>一</sub>。公卿以下列居。非<sub>二</sub>御供<sub>一</sub>人々着<sub>二</sub>布

衣藁履<sub>一</sub>候。門外。御禊訖。廳官等徹<sub>二</sub>御精進屋<sub>一</sub>

被<sub>レ</sub>入。此間令<sub>二</sub>相待御<sub>一</sub>。〔取始了。未<sub>レ</sub>訖之間出

御。殿上人取<sub>二</sub>松明<sub>一</sub>前行。左右。非<sub>二</sub>道者前陣出<sub>一</sub>

南門<sub>一</sub>了。御<sub>二</sub>御船<sub>一</sub>之間乘<sub>二</sub>私船<sub>一</sub>下。先達早速

立了。遲明改<sub>二</sub>衣帽<sub>一</sub>。船甚遲。構營參着<sub>二</sub>大渡<sub>一</sub>。

出<sub>二</sub>御御船<sub>一</sub>之間也。騎馬先陣。公卿等多乘輿。

先陣了。入<sub>二</sub>御宿院<sub>一</sub>有<sub>二</sub>御禊<sub>一</sub>。陪膳之役人如<sub>二</sub>日

吉。事訖起<sub>二</sub>御坐<sub>一</sub>。御床。之間。予進仕。高良御

幣參上。取<sub>二</sub>御幣<sub>一</sub>授<sub>二</sub>祠官<sub>一</sub>。束帶之男也。祝之間即登

坂。自<sub>二</sub>藥師堂方<sub>一</sub>參儲。自<sub>二</sub>馬場<sub>一</sub>昇御。御步。御

奉幣。內府取<sub>二</sub>御幣<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>進。御拜祝了御神樂。御拜。廻<sub>二</sub>御馬<sub>一</sub>。御

隨身引<sub>レ</sub>之。次入<sub>二</sub>御簾中<sub>一</sub>。黃衣男取<sub>二</sub>桂櫛<sub>一</sub>。黑衣

僧懸<sub>二</sub>幡花幔<sub>一</sub>。御經供養。公胤。訖仲經。俊宗。予。

隆清。有雅取<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>。請僧。三口。訖即退下。騎馬出<sub>二</sub>木

津。最イ。故方人々晝養打屋形御所之儀等如<sub>レ</sub>例嚴

重。予最前乘<sub>レ</sub>船下。解<sub>二</sub>衣裳<sub>一</sub>及<sub>二</sub>一寢<sub>一</sub>。着<sub>二</sub>水干淨衣。

申始許着<sub>二</sub>木津<sub>一</sub>。先達次第申可<sub>レ</sub>觸。之由仍不相具。先約拜王子人々

前後會合。良久御船着御。御幣。長房取<sub>レ</sub>之授<sub>二</sub>御先達云々進之。

御拜二度。先達部二退出。候<sub>一</sub>。御經供養。里神樂

了上下亂舞。宿老人々已前退出。即騎馬馳奔。

先陣參<sub>二</sub>坂口王子<sub>一</sub>。又如<sub>二</sub>前儀<sub>一</sub>。又前陣參<sub>二</sub>コウ

ト王子<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>前儀<sub>一</sub>。又先陣參<sub>二</sub>天王寺<sub>一</sub>。俳<sub>二</sub>側西門

鳥居邊<sub>一</sub>。公卿以下。少時入御。御船之後。每度揖御予等少々騎馬先陣。御金堂

禮三舍利。公卿以下參進禮之。次々如レ形禮了。

殿上人廻三後戶方。取三御經供養布施。導師之外

十禪師云々。二累計取具。取之。如修二月等。即下御。入三御御所。

之後退出。宿所ヨリ禮了食。依三窮屈。今夜不

レ參三御所。又疎人無三所役云々。猶々此供奉世

世善緣也。奉公之中宿違令レ然。感涙難レ禁。御

共人內府。春宮權大夫。通判。宗行在私。共非供奉。右衛門督。宰

相中將。公經。從三位仲經。大貳。範光。三位中將。

通光。殿上人保家。予。隆清。定通。忠經。有雅。

通方。上北面略皆悉也。下北面又清撰在。此中。

面目過レ身。還多レ恐。人定有吹毛之心。歟。入

夜左中弁出。（イイ）給題三首。明日於三住江殿。可

有披講云々。窮屈之間。沉思不レ叶。今夜宿三讚

良庄。勤三仕之一。

六日。〔天霽〕拂曉私出馬。指三參阿倍野王子。

先達相伴致。奉幣之儀。〔次〕參三詣住吉社。先達同奉幣。始而

奉三拜三當社。感悅之思無レ極。依レ及三〔夜〕深更。

小宅休息。天明訖又參三社頭。辰終御幸。御奉

幣。如此。例袍衣冠男給三御幣。傳生絹袍。衣冠男令レ申祝。兩人共給。祿。御經供養訖。里神

樂有ニ相撲三番。勝負訖入三御御所。住江。即被

レ講三和歌。予依レ召勸三仕講師。內府被レ書レ序。

代詠訖退下。小食。歸參以前出御馳奔。今日御

馬也。次參三境王子。次第又如レ例。次於レ境有

御楔。田中也。南向。自三此所。先陣參三晝御養御所。但

此所不可レ有沙汰。仍觸三右中弁前陣。次大鳥

居新王子云々。次第如レ例。次篠田王子又如レ例。

次平松王子。於三〔此〕王子。殊有亂舞沙汰。自

是停三御馬。步入三御平松新造御所。各入三宿

所。國皆悉諸假屋。充行。予等分。此所三間小屋也。無板敷也。

今日詠歌。

初冬侍三

太上皇幸三住吉社。同詠三三首。應

寄社祝

正四位下行

制和歌

あひおひのひさしき色も常盤にて君か代まゐる住吉の松

### 初冬霜

冬やきたる夢はむすはぬさ衣にかされてうすき白たへの袖

霜心已に終年霜間不及カ

### 暮松風

淡路嶋がさせるなみの夕まくれこふふきなくる岸の松風

### 御製祝云

かくてなをかはらすまもれよなへて此みち照す住吉の神

感歎之思難禁。定有ニ神感ニ歎。今遇ニ此時ニ

拜ニ此社ニ一身之幸也。

今日宿ニ「雜事」大泉庄<sup>九條</sup>。宇多庄。<sup>有實朝臣申</sup>領

狀共不見來。尤以不便。三間萱葺屋。風冷月

明。

七日。天晴。遲明猶取ニ松明ニ出レ路。參ニ井口王

子<sup>此王子新王子云</sup>。於ニ此所ニ待ニ御幸。忠信少將乘

輿來會奉幣。語云。昨日損レ足云々。小時臨幸。次

第如レ例。訖競出。騎馬參ニ池田王子。於ニ此所ニ

被レ彈<sup>小袖</sup>琵琶。法師給レ物。<sup>稗歟</sup>從レ是先陣參ニ淺

宇河王子。不レ待ニ御幸。又前陣參ニ鞍持王子。又

馳ニ入畫養所。<sup>コ木二王堂云々。</sup>食了參ニ胡沐新王

子。從<sup>最イ</sup>是<sup>最イ</sup>指<sup>最イ</sup>也。過<sup>最イ</sup>御所。畫御宿鵲子云々。參ニ升

野王子。次參ニ靱井王子。相ニ待御幸。良久臨幸

了。御奉幣里神樂訖。亂舞拍子及ニ相府。次又

白拍子。加以五房友重二人舞。次相撲三番。訖

競出騎馬。先參ニ厩戸王子。即馳ニ入宿所。此御

宿惣名信達<sup>シタチ</sup>宿。此所厩戸御所云々。如レ例有ニ

萱葺三間屋。自レ國充行。御所聊近。還懷レ恐。戊

時計有レ召參上。被レ召ニ入御前。被レ講ニ二首。忽

有定被<sup>シタチ</sup>出ニ直題。次第雪爲<sup>シタチ</sup>先。如レ例讀上了。

御製又以殊勝。

愚歌。

### 曉初雪

色々のこのはのうへにちりそめて雪はうつます東雲のみち

### 山路月

袖のしものかけうち拂ふみ山ちもまた末遠きゆふつ、よ哉

讀上了人々詠吟。即退出。



内府。宰相中將。大貳。三位中將。下官。定通。長房。通方。信綱。家長。清範。昇等也。(イモ)

八日。天晴。拂曉出。道參。信達。一之瀬王子。又

於坂中。祓。次參。地藏堂王子。次參。ウハ目王

子。次參。中山王子。次參。山口王子。次參。川邊

王子。次參。中村王子。次入。晝養假屋。所信等

無沙汰。其所甚荒。於此所。有。非時水コリ。

相。待御幸。甚遲。忠信少將參會。小時先參。此

王子。ハシ。暫相待之間御幸訖。先出儲。御禊所。

ワサキノクチ云々。予爲。御幣。使。小時於。此所。有

御禊。予取。御幣。立。御禊訖。返。給廳。官。神

馬。二匹。令牽。相。具御幣。參。日前宮。社頭甚嚴

重。淨衣折烏帽子甚凡也。但道々。之。習何爲乎。

坐。兩社之間中央石帖。如舞上。敷薦二枚爲座。

依。社司之訓。取。御幣。拜。前後。付。二社司。御使取。

舞。不知其例。諸社奉幣使。付。御幣於社司。以笏拜歎如何。社司指。唐笠。來。不。當。

料云々。並通束帶也。但此男大宮司男云々。日影。猶其父戴。紙冠。不。出。戶外。僅見。在。戶内。取。御幣。以。

黃衣冠。神人。令。入。中門戶内。祝音聞訖。神人

又出。中門外。有。還祝。予立坐。東薦。又取。御

幣。本也。二拜付。同社司。次第如前。訖退出。

於石帖下。徹シト。擔着。歷中。奉仕。此役有。恐。自。是。向道甚遠。過。滿願

寺。之間。僧等忽喚入。每度。日前御幣使參。此

寺。云々。怒參入。廳官相。具御誦經物。僧等稱。

乏少之由。不。似。先例。頗比興也。僧怒昇。禮

盤。之間。予退出。凌。遠路。出道。參。ナクチ王

子。先。是。又兩王子御坐云々。(和佐王子)平緒王子。非。次。道次。之間不參。先達許奉。幣。王子。(廿王子イ无)

參。松坂王子。次參。松代王子。次參。菩提房王

子。自。是。步指。御。次參。二祓戸王子。次。入。藤代宿。不。

御所。二町。許北宅也。窮屈平臥。

九日。天晴。朝出立頗遲々間。已於。王子御前。

有。御經供養等。云々。雖。營參。自。拍子之間。雜

人多立隔無。路。強。不。能。參。逐電。攀。昇。藤代

坂。五。鉢王子有。相撲等。云々。道崔嵬殆有。恐。

又眺。望。遼海。非。無。興。參。塔下王子。次參。橘



下王子。次參ニトコロ坂王子。次參ニ一壺王子。

次昇ニカフラ坂。參ニカフウサカ下王子。又崔次

參ニ山口王子。次入ニ晝養所。過ニ御所。次參ニイ

トカハ王子。又凌ニ嶮岨。昇ニイトカ山。下山之

後。參ニサカサマ王子。水遠流河有之。河有之

過ニ今日御宿ニ三四町許。入ニ小宅宿所。自レ上雖

有ニ例假屋。此家主依レ儲ニ雜事。入ニ此所。文義

男云。先是又依ニ文義顯從男。取ニ宿所。先入ニ

小宅之間。件宅有レ憚之由聞ニ付之。仍騷出入ニ

此所「了」。先達如此事不レ憚之由被

カキテ。以ニ景義令レ戒了。又依レ有所レ思。取レ

潮垢離カク。是臨時之事也。此湯淺入江邊。松

原之勝形奇特也。家長送ニ題ニ首。詠吟窮屈之

間甚無レ術。秉燭以後又着ニ立烏帽子。如ニ一夜

參上。小時被レ召ニ入部内。又依レ仰講師。事了即

退出。今日又一首當座。

題

深山紅葉

海邊冬月

愚詠

こゑたてぬあらしも深き心あれやみ山のもみちみゆき待り

曇なき濱の眞砂に君か世のかすさへ見ゆる冬の月かけ

今日偏文義得意等。沙汰田殿庄。女房中納言。殿使書。遂

不見參ニ云々。

十日。自レ夜雨降。遲明休。朝陽漸晴。晝天猶陰。

拂曉凌レ雨赴レ道。無レ程王子御座云々。但依ニ路

遠ニ向ニ路頭樹ニ拜ニ云々。クメサキ。次參ニ井關王子。

於ニ此所ニ雨漸休。夜又明。次參ニツノセ王子。次

又攀ニ昇シ、ノセノ山。崔嵬嶮岨巖石不レ異。昨

日。超ニ此山。參ニ沓カケ王子。過ニシ、ノセ椎

原。樹陰滋路甚狹。於ニ此邊有ニ晝養御所云々。

又私同儲レ之。暫休ニ息山中ニ小食。於ニ此所上

下伐ニ木枝。隨レ分造レ槌。付ニ櫛枝持參。内ノハ

タノ王子。童子金剛。各結ニ付之云々。次出ニ此木

原。又過レ野。秋薄遙靡。眺望甚幽。此邊高家

云々。聖護院宮并民部卿領云々。此所共有ニ便事。

但未尋得。次又參<sub>ニ</sub>王子。<sub>田藤次</sub>次又愛德山王

子。次クリマ王子。<sub>ワイ</sub>次寄<sub>ニ</sub>小松原御宿。御所邊

向宿〔所〕之處已無<sub>レ</sub>之。國沙汰人成敗獻<sub>レ</sub>之。

假屋乏少之間。無<sub>レ</sub>緣者不<sub>レ</sub>入<sub>ニ</sub>其員。占<sub>ニ</sub>小

宅。立<sub>レ</sub>簡之處。內府家人押入宿了。不<sub>レ</sub>可

出之山忿怒云々。國沙汰之人又非<sub>ニ</sub>我進止之

由後聞云々。只依<sub>ニ</sub>人涯分<sub>ニ</sub>偏頗歟。不<sub>レ</sub>迫<sub>ニ</sub>相

論。又非<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>身。此御所有<sub>ニ</sub>水練便宜。臨<sub>ニ</sub>

深淵。構<sub>ニ</sub>御所。即打過遙尋<sub>ニ</sub>宿所。渡<sub>レ</sub>河參<sub>ニ</sub>イ

ハウチ王子。入<sub>ニ</sub>此邊小家。重輔庄云々。宮戶部

兩人便書<sub>如</sub>形到來。覺了房周梨自<sub>ニ</sub>御山。下

向。今日相待。更可<sub>ニ</sub>伴參<sub>ニ</sub>云々。以<sub>ニ</sub>代官。可<sub>レ</sub>足

之由雖<sub>ニ</sub>相示。猶丁寧之山也。秉燭以後甚雨。今

夜甚熱不<sub>レ</sub>異<sub>ニ</sub>三伏。着<sub>レ</sub>帷。南國之氣歟。蠅多又

如<sub>レ</sub>夏。

十一日。雨降。中後聊休。入<sub>レ</sub>夜月朧々也。遲明

出<sub>ニ</sub>宿所。<sub>不知</sub>超<sub>レ</sub>山參<sub>ニ</sub>鹽屋王子。<sub>此邊又勝</sub>地。<sub>有</sub>被。次

入<sub>ニ</sub>晝宿。小食。次ウヘ野王子。<sub>野徑</sub>次ツイノ王

子。自<sub>ニ</sub>此邊一步指。<sub>〔臨イ〕</sub>次參<sub>ニ</sub>イカルカ王子。次參<sub>ニ</sub>

切部王子。入<sub>ニ</sub>宿所。<sub>最狹少。海</sub>御所前也。但

國召宛云々。小時御幸入御。步。晚景又有<sub>レ</sub>題。即

書之持參。戌時許如<sub>レ</sub>例被<sub>ニ</sub>召入。讀上了退出。

<sub>〔幕イ作二</sub>種<sub>無</sub>極品<sub>〕</sub>

羈中聞波 野徑月明

うちもねすともやに波のよるのこゑ誰をと松の風なられ共

於<sub>ニ</sub>此宿所。鹽垢離カク。眺<sub>ニ</sub>望海。非<sub>ニ</sub>甚雨。者

可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>興所也。病氣不<sub>レ</sub>快。寒風吹<sub>レ</sub>枕。

十二日。天晴。遲明參<sub>ニ</sub>御所出御前。先陣又超

レ山。參<sub>ニ</sub>切部中山王子。次出<sub>レ</sub>濱參<sub>ニ</sub>磐代王子。

此所爲<sub>ニ</sub>御小養御所。無<sub>ニ</sub>入御。此拜殿板每度被

レ注<sub>ニ</sub>御幸人數。先〔例〕云々。右中弁召<sub>ニ</sub>番匠。板

放天カンナヲカク。書<sub>ニ</sub>人數。天如<sub>レ</sub>元令<sub>レ</sub>打<sub>ニ</sub>付

之。建仁元年十月十二日。<sub>陰陽博士晴光未<sub>レ</sub>參。上北面</sub>

<sub>以<sub>ニ</sub>左中弁。申入。即可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>聽。</sub>此人數之中其署無<sub>レ</sub>衛之山。

御幸四度。

御先達權大僧都法印和尚位覺實

御導師權大僧都法印和尚位公胤

内大臣正二位兼行右近衛大將皇太弟傳源朝

臣通親

次々如レ此。殿上人上北面僧。寛快已下三人。下北面皆書レ之。此最末カク後在レ之。

自レ是又先陣過三千里濱。此處一町許。參三千里王子。次

參三鍋王子。自レ是入三晝養所一食了。參御所一

之間。御幸已出御。自レ此宿所。御布施以忠弘送遣之。絹六匹。綿百五十兩。馬三匹。

次參ニハヤ王子。御幸入御之間。先陣參ニ幽立

王子。於此濱。御鹽垢離。御所有御禊云々。又先陣見ニ田邊御宿。入ニ

私宿所。宿所在(權)別當自レ上儲之云々。甚廣不レ似一切部。御所美麗。臨河

有ニ深淵。田邊河云々。去夜寒風吹レ枕。咳病忽發。心神

甚惱。此宿所又以荒。又鹽垢離。昨今之間一度

可レ有之由。先達命レ之。但今(日)猶遂ニ此事。

十三日。天晴。天明參ニ御所。未レ上三格子。御先

達參ニ儲御拜所。近臣人々未レ出之間。早出前陣

參ニ秋津王子。春宮權大夫參會。又超レ山參ニ丸

王子。次ミス、山王子。次ヤカミ王子。次稻葉

根王子。此王子准ニ五鉢王子。每事過差云云。御幸之儀同ニ五鉢王子云々。次入三晝養宿

所。馬自ニ此所一停。被置師(預)。(イキ)自レ是步指渡ニ

石田河。先參ニ瀨王子一候之。(イキ)次參ニアイカ王

子。河間紅葉淺深影映レ波。景氣殊勝。河深處及

石之中也。入レ夜給レ題。使者還參即詠レ之持參。

如レ例披講之間參入。讀上了退出。參ニ此王子

歸ニ宿所。

河邊落葉

そめし秋をくれめとたれかいはた川また浪こゆる山姫の袖

旅宿冬月

たきかはのひ、きは急く旅のいはを静かにすくゝる冬の月影

一寢之後乘輿。師沙汰之力者十二人豫示付之。件法師原裝束十二相具。師布施送了。紺藍摺ワハキ

許也。頭巾（風イ）今夜付<sub>二</sub>晝養山中宿<sub>一</sub>。此所又不思議奇

異小屋也。寒嵐甚難堪。

十四日。天晴。天明出<sub>二</sub>山中宿<sub>一</sub>。參三重照王子。次

參大坂本王子。次超<sub>レ</sub>山丁入<sub>二</sub>近露宿所<sub>一</sub>。（子時日）

自瀧尻<sub>二</sub>至于此所<sub>一</sub>。崔嵬陂泄。（地カ）自眩轉魂恍々。

昨日渡<sub>レ</sub>河足聊損。仍偏乘輿。（此宿近御所）午終御幸

步。訖即給<sub>レ</sub>題。

峯月照<sub>レ</sub>松

さしのほる君なちとせとみ山より松をそ月の色にいてける

濱月似<sub>レ</sub>雪

雲さゆるちさとの濱の月かけは空にしられてふらぬ白雪

只今披講。長房朝臣注<sub>二</sub>送之<sub>一</sub>。驚即持參僻事也。

供御之間云々。即退出。秉燭以後又參上。講際（録イ）

阿闍梨依<sub>レ</sub>召參候部外讀經。良久有<sub>レ</sub>召參<sub>二</sub>御

前<sub>一</sub>。又讀上了退出。即（子時）乘輿出<sub>レ</sub>道渡<sub>レ</sub>河。即

參<sub>二</sub>近露王子<sub>一</sub>。次ヒソ原。次繼櫻。（次）サクウ

中ノ河。次イハ神（云々）。夜中着<sub>二</sub>湯河宿所<sub>一</sub>。

路間崔嵬。夜（行甚有レ恐）寒風無<sub>二</sub>爲方<sub>一</sub>有<sub>二</sub>非時水<sub>一</sub>コリ。

十五日。天晴。天明後水。（窮屈之間）訖見<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>。禮

了。（此宿甚寒）又出<sub>二</sub>道路<sub>一</sub>。（此所今日御宿也。）午時許

着<sub>二</sub>發心門<sub>一</sub>。宿<sub>二</sub>尼南無房宅<sub>一</sub>。（此宿所尋常也。）件尼自

柏（着）此道之間。常不<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>筆硯<sub>一</sub>。又有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>思。未

書<sub>二</sub>一事<sub>一</sub>。（他人大略每）此門柱始書<sub>二</sub>付一首<sub>一</sub>。（閑所）

發心門。一首。

惠日光前饑<sub>二</sub>罪根<sub>一</sub>大悲道上發心門。南山月下結緣力。西剎雲

中吊<sub>二</sub>旅魂<sub>一</sub>。

いりかたき御法のみかはけふすきね今よりむつの道にかへすな

今日王子湯河。次猪鼻。次發門。此王子寶前殊

發<sub>二</sub>信心<sub>一</sub>。紅葉飜<sub>レ</sub>風。寶殿上四五尺木無<sub>レ</sub>隙生。

多是紅葉也。社後有<sub>二</sub>比丘尼南無房堂<sub>一</sub>。（此内又書）

（聞此尼制止不<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>書）夕又水訖出<sub>二</sub>王子<sub>一</sub>。御前所作

了。月出山之間也。

今日之道。深山樹木。多有<sub>二</sub>莓苔<sub>一</sub>。懸<sub>二</sub>其枝<sub>一</sub>。

如<sub>二</sub>藤枝<sub>一</sub>。遠見偏似<sub>二</sub>春柳<sub>一</sub>。



十六日。天晴。拂曉又出ニ發心門。王子二。内水欽

白ニ被殿一步指參ニ御前。過ニ山川千里ニ遂奉レ拜ニ

寶前。感涙難レ禁。自レ是入ニ宿所。遲明更歸參ニ

祓殿。左中弁白爲レ奉ニ待御幸ニ也。但數刻。仍入

ニ近邊地藏堂。更被寄ニ衣食ニ暫住。已時許御幸

御共參ニ寶前。公私是自イ天ヌレ、ハイ。即入ニ御御所。

訖即退下。コリ訖着ニ奉幣之裝束。新物立烏帽子。ハ

歸參數刻之後出候了奉幣。左中弁取ニ金銀御

幣ニ進レ之。令取御此間親兼朝臣取ニ白妙御幣。

御拜訖。祝僧法眼。取合申レ祝先登祓殿。次

兩所。御幣二本。前後兩段次若宮殿。御所御拜御幣ノサキヲ右

萬御前。御幣白。御祝申了退之間。予取ニ被物ニ給

之。在立即入ニ御御經供養御所。禮殿公卿在

西。殿上人在東。御誦經俊家朝臣親兼朝臣取ニ

布施。次公胤法印御經供養了。公卿被物。殿上

人取ニ布施了。予退下。此間舞相撲等云々。御加

出物。不見ニ其儀。咳病殊更發無ニ爲方。心神如

レ無。殆難レ遂ニ前途。腹痛痞瘍等競合。秉燭以後

又コリ。此事臨時依又着ニ晝裝束。先達相共參ニ

御前。奉幣。其儀如ニ晝御拜。公私不替幣ノサ稠人

狼藉淺猿。次入ニ經供養所。依禪入ニ西道師來說

法了。置ニ布施了。被物一次滅レ火。經所云々。鑪有加持僧

十二人來加持了。置ニ布施。依貧乏ニ綿退出。自ニ

此經所路一入ニ宿所。扶レ病又參ニ御所。數刻寒風

病身無ニ爲方。深更被ニ召入。

二座和歌。

發心門料二首

遠近落葉 暮聞河波 歌凡非ニ尋常ニ

窮屈病惱爲方ナシ。

二座事發心門本宮序。

本宮三首。内府有レ序。

讀上了退出。心中如ニ已更無ニ爲方。

十七日。夜雨降。今朝猶陰風甚寒。明日新宮下

向。船更以無レ之云々。御所召以下皆闕如云々。扶

病未時許參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>。以前出御了芝僧供云々。御所<sub>レ</sub>西南禮殿也。公卿候<sub>二</sub>前庭<sub>一</sub>。兩塔<sub>二</sub>東西行敷<sub>一</sub>。庭爲<sub>二</sub>客僧座<sub>一</sub>。山伏各引<sub>二</sub>率其徒<sub>一</sub>。相替坐次第被<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>之。

了即起又替。今日人々皆着<sub>二</sub>楚々裝束<sub>一</sub>。長袴張下袴如<sub>二</sub>供花時予獨不<sub>レ</sub>存。着<sub>二</sub>日來御會裝束<sub>一</sub>。甚見苦<sub>二</sub>云々<sub>一</sub>。

此間參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>。心閑奉禮。所祈者只出離生死臨終正念也。僧供了令<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>候。次第御所作了。如<sub>二</sub>昨日<sub>一</sub>還御。殿上人在<sub>レ</sub>前。公卿在<sub>二</sub>御後<sub>一</sub>。

次山伏御覽。公卿殿上人又候<sub>二</sub>御前近邊<sub>一</sub>。山伏作法恒例云々。依<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>要不<sub>二</sub>委注<sub>一</sub>。渡御前乘船入<sub>二</sub>向山<sub>一</sub>寒風

無<sub>レ</sub>術。見了即入<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>。今夜可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>種々御遊<sub>一</sub>云々。此先達構<sub>二</sub>驗競事<sub>一</sub>云々。依<sub>二</sub>所勞<sub>一</sub>臥<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>。

十八日。天晴。天明拜<sub>二</sub>寶前<sub>一</sub>。出<sub>二</sub>河原<sub>一</sub>乘船。所<sub>二</sub>行<sub>一</sub>加<sub>二</sub>一艘<sub>一</sub>。私三艘并四艘。共下人等多<sub>二</sub>力者法師二人<sub>一</sub>止了。

略定<sub>二</sub>侍三人<sub>一</sub>。覺本房稱<sub>二</sub>老屈<sub>一</sub>不參。圓勝房相具。舍人一人雜人等也。自<sub>二</sub>川程有<sub>一</sub>種々石等。或稱<sub>二</sub>精進屋所作<sub>一</sub>先達也。

御雜未一點許着<sub>二</sub>新宮<sub>一</sub>奉拜。小時御幸如<sub>レ</sub>例。權現

〔前〕行先令<sub>レ</sub>參<sub>二</sub>寶前<sub>一</sub>給。次入<sub>二</sub>御御所<sub>一</sub>。次立烏帽子。歸參良久出御。御奉幣如<sub>二</sub>本宮<sub>一</sub>。予取<sub>二</sub>祝師之祿<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>前。事了入<sub>二</sub>御御經供養所<sub>一</sub>之間。私奉幣。稠人如<sub>レ</sub>例。歸參取<sub>二</sub>御經供養布施<sub>一</sub>。次如<sub>レ</sub>例亂舞。次有<sub>二</sub>相撲<sub>一</sub>。此間退<sub>二</sub>下宿所<sub>一</sub>。入<sub>レ</sub>夜爲

加持<sub>二</sub>參<sub>二</sub>寶前<sub>一</sub>。僧等參差不<sub>二</sub>來會<sub>一</sub>。仍問<sub>二</sub>事之由<sub>一</sub>。示<sub>二</sub>先達<sub>一</sub>。參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>。例和歌訖退下。又有<sub>二</sub>序<sub>一</sub>。十九日。天晴。遲明出<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>。又赴<sub>二</sub>道<sub>一</sub>。輿持來<sub>二</sub>仍

傳馬等僅參<sub>二</sub>師沙汰<sub>一</sub>。送<sub>二</sub>先達侍等乘<sub>一</sub>之。山海眺望非<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>興。此道又王子數多御坐。未時參<sub>二</sub>着那智<sub>一</sub>。先拜<sub>二</sub>瀧殿<sub>一</sub>。嶮岨

遠路。自<sub>レ</sub>曉不<sub>レ</sub>食。無力極無<sub>レ</sub>術。次拜<sub>二</sub>御前<sub>一</sub>入<sub>二</sub>宿所<sub>一</sub>。小時御幸云々。日入之程參<sub>二</sub>寶前<sub>一</sub>。御拜之間也。又取<sub>二</sub>祝師祿<sub>一</sub>了。次令<sub>レ</sub>供<sub>二</sub>神供<sub>一</sub>御。別當取<sub>二</sub>儲之<sub>一</sub>。公卿次第取繼。一萬十萬等御前。殿上人猶次第取<sub>二</sub>繼之<sub>一</sub>。予同取<sub>レ</sub>之。次入<sub>二</sub>御御經供

養所<sub>一</sub>。取<sub>二</sub>例布施<sub>一</sub>。次驗クラヘ云々。此間私奉幣退<sub>二</sub>下宿所<sub>一</sub>。深更參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>。例和歌訖退下。二座也。

幣退<sub>二</sub>下宿所<sub>一</sub>。深更參<sub>二</sub>御所<sub>一</sub>。例和歌訖退下。二座也。

一明日香云々。窮屈病氣之間。每事如<sup>レ</sup>夢。

廿日。自<sup>レ</sup>曉雨降。無<sup>ニ</sup>松明<sup>一</sup>。天明之間。雨忽降。

雖<sup>レ</sup>待<sup>ニ</sup>晴間<sup>一</sup>。彌如<sup>レ</sup>注。<sup>(出イ)</sup>仍營步一里許行。天明

風雨之間。路窄不<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>取<sup>レ</sup>笠着<sup>ニ</sup>簑笠<sup>一</sup>。輿中如

海如<sup>ニ</sup>林宗<sup>一</sup>。終日超<sup>ニ</sup>嶮岨<sup>一</sup>。心中如<sup>レ</sup>夢。未<sup>レ</sup>遇<sup>ニ</sup>

如<sup>レ</sup>此事<sup>一</sup>。雲トリ紫金峯如<sup>レ</sup>立乎。山中只一字

有<sup>ニ</sup>小家<sup>一</sup>。右衛門督宿也。予相替入<sup>ニ</sup>其所<sup>一</sup>。如<sup>レ</sup>形

小食了。又出<sup>ニ</sup>衣裳<sup>一</sup>。只如<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>水中<sup>一</sup>。於<sup>ニ</sup>此邊<sup>一</sup>

適雨止了。前後不覺。戌時許着<sup>ニ</sup>本宮<sup>一</sup>付<sup>レ</sup>寢。此

路嶮<sup>(岨)</sup>難過。於<sup>ニ</sup>大行路<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>違記<sup>一</sup>。

廿一日。天晴。天明參<sup>ニ</sup>御所<sup>一</sup>。出御之間前行參<sup>ニ</sup>

寶前<sup>一</sup>。御拜了入<sup>ニ</sup>御禮殿<sup>一</sup>。又可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>御加持<sup>一</sup>云々。

此間退出。先陣馳奔。湯河晝養了。着<sup>ニ</sup>近露宿

所<sup>一</sup>。

廿二日。天晴。拂曉出<sup>ニ</sup>近露<sup>一</sup>。下瀧尻マナコ小家

晝養了。未一點許着<sup>ニ</sup>田邊宿<sup>一</sup>。日入了之後出<sup>ニ</sup>此

宿所<sup>一</sup>。過<sup>ニ</sup>切部<sup>一</sup>入<sup>ニ</sup>ニイハ<sup>一</sup>。明日可<sup>レ</sup>超<sup>ニ</sup>三宿<sup>一</sup>。遠路

無<sup>レ</sup>術之間。今夜如<sup>レ</sup>此迷惑。鷄鳴之程入<sup>ニ</sup>此宿

所<sup>一</sup>。一寢。

廿三日。天晴。日出之後渡<sup>レ</sup>川過<sup>ニ</sup>小松原<sup>一</sup>。超<sup>ニ</sup>シ

シノセ山<sup>一</sup>。午始許入<sup>ニ</sup>湯淺宿所<sup>一</sup>。〔此所〕五郎云

男宿所事甚過差。予之不<sup>レ</sup>堪<sup>レ</sup>感。引所餞<sup>ニ</sup>鹿毛

馬<sup>一</sup>了。今日適休息。終日偃臥。

廿四日。天陰。雨降間休。曉出<sup>レ</sup>道超<sup>ニ</sup>〔蕪坂〕藤

代山<sup>一</sup>。雨甚。路次失<sup>レ</sup>度。入<sup>ニ</sup>藤代宿所<sup>一</sup>。小食了又

出<sup>レ</sup>道。凌<sup>レ</sup>〔雨〕超<sup>ニ</sup>ヲレ山<sup>一</sup>。申時許入<sup>ニ</sup>信達宿<sup>一</sup>。

御所近邊也。國沙汰者送<sup>下</sup>如<sup>ニ</sup>菓子等<sup>一</sup>之物上。

廿五日。天晴。曉參<sup>ニ</sup>御所<sup>一</sup>。出御以前出<sup>レ</sup>道。於<sup>ニ</sup>

大鳥居小家<sup>一</sup>食了。出過<sup>ニ</sup>天王寺<sup>一</sup>。入<sup>ニ</sup>ナカラ宿

所<sup>一</sup>。自<sup>ニ</sup>京家<sup>一</sup>到來<sup>(渡イ)</sup>。仍候<sup>レ</sup>之。但此宿細川庄成時沙

汰也。人不<sup>レ</sup>來云々。仍即打出了。馳奔入<sup>ニ</sup>皆瀬宿

山崎前々宿所<sup>一</sup>也。今日過<sup>ニ</sup>十五六里<sup>一</sup>了。御幸

ナカラヨリ御船上御云々。一寢。

出御之由。左中弁示送之。仍念出。天明之程入御鳥羽御精進屋。卽又出御御幸稻荷御拜。御經供養。此間私奉幣。候法筵云々。如例取布施。俊家中將予取導師布施了。卽入御二條殿之儀。猶此人數可參云々。然而觸少々人々。自是退出。入九條小食了。卽馳出參日吉私宿願也。於馬場邊遇春宮權大夫。未

時許參着。奉幣了卽馳歸。於清閑寺邊取松明歸京。洗髮沐浴了付寢。今夜魚食。廿七日。早朝道之間雜物悉以水洗之。又雜物等取聚送先達許。是恒例云々。文義沙汰之。

右後鳥羽院熊野御幸記以古寫二本按合了以別本再訂了

惠言



# 群書類從卷第三百三十

## 紀行部四

### 海道記

源光行

白河の渡り中山の麓に閑素幽栖の侘士あり。性器に底なければ。能をひろひ藝をいるゝにたまるべからず。身運は本より薄ければ。報ひをはぢ命をかへりみて。うらみをかさぬるに所なし。徒に貪泉の蝦蟇となりて。身を藻によせてちからなきねをのみなき。むなく窮谷の埋木として意樹に花たえたり。惜からぬ命のさすがに惜ければ。投身の淵は胸の底に淺し。存するかひなき心はなまじゐに存じたれば。斷腸の棘は愁の中に茂り。春は蕨を折て臨る飢をさゝふ。伯夷が賢にあらざれば人もと

がめず。秋は菓を捨て貧き病をいやす。美子が薬もいまだ飢たるをば治せず。九夏三伏の汗は拭てくるします。手中に扇あれば涼を招くにいとやすく。玄冬素雪のあらしは凌ぐにあたはず。身のうへに衣なければ寒をふせぐにすべなし。窓の螢も集ざれば目は暗がごとし。なにを見てかこゝろざしをやしなはん。樽の酒も酌事を得ざれば心に常に醒々たり。いか

が憂を忘れんや。然間歳の水はやく流れて生涯はくづれなんとす。留とすれども留まらず。五旬のよはひの流車坂に下る。朝に馳暮に馳す。日月の廻りの駿駒のひま。かゞみの影に對

居てしらぬ翁に耻。鐻子を取て白絲をあはれむ。是によりて佛のうへにはよはひをおどろかす老をつけ。鶴鬢のほとりに早落をいとふ花。露におどろき霜をいとふこゝろざしたちまちに催して。僧を學び佛に歸する念漸におこる。名利は身にすてつ。稠林に花ちりなば覺樹の葉は熟するを期すべし。薛蘿は肩にすがり法衣の色そみなば衣のうらの玉は悟る事を得つべし。只暮の露の身は山かげの草を置所とすれども朝霞は望み絶て天を仰にむなし。世をいとふ道は貧道より出たれども。佛を念する思は遺怠とをこたる。四聖の無爲を契りしも。一聖なを頭陀の道にとゞまりき。ひとへにをのれが有爲をいとひむさぼり。をのれいよいよ座禪の窓にいそがし。然而曹腊が酒も人をえはしてよしなし。子罕が賄は心に賄て身の樂とせり。鵝眼なけれど天命の路に杖つ

きて歩をたすく。摩牙はかけたれども地恩の水に口すゝぎて渴をうるほす。空腹に一盃のかゆをすゝれば餘味あり。薄紙百綴の衿寒に服すれば肌をあたゝむるにたれり。槍笠をかぶり装とす。出家の身なり。わらぐつをふんで駕とす。遁世の道なり。抑相摸國鎌倉の郡は。下界の鹿澁苑天朝の築渦州なり。武將の林をなす。萬榮の花萬にひらけ。勇士道にさかへたり。百歩の柳百たびあたり。弓は曉月に似たり。一張そばだちて胸をたをし。劔は秋の霜のごとし。三尺たれて腰すゝし。勝鬪の一陳には爪を楯にしてあだを雌伏し。猛豪手にしたがへて直に雄構す。干戈威をいつくしくして梟鳥あへてかけらず。誅戮にきびしくして虎おそれをまし。四海の潮の音は東日にてらされて浪をすませり。貴賤臣妾の往還するおほくむまやのみち隣をしめ。朝儀國務の理亂は萬緒

の機かた／＼に織り。去年質耳外に聞をなし  
て。おほくの歳をわたり。舌の端唇していくば  
くの日をか送るや。心のふね洋爲に漕。いまだ  
海道萬里の波に掉さず。乗馬あらましには  
す。いまだ關山千程の雲にむちうたず。今便人  
の芳縁に乗じて俄に獨身の遠行を企り。後居河貞應  
二年卯月の上旬五更に都を出で一期に旅立。  
昨日はすみわびていとはしかりし宿なれども  
今立わかるれば名残おしく覺えてしばしやす  
らへども。鐘のこゑ閉行はあへずして。いつま  
たあはた口の堀道を南にかいたをりてあふ坂  
山にかゝれば。九重の寶塔は北のかたにかく  
れ。又相坂を下に松をともして過行ば。四宮河  
原のわたりはしのゝめに通ひぬ。小關を打越  
て大津のうらをさして行。關寺の門をだにか  
へりみれば。金剛力士忿怒のいかる眼を驚し。  
勢田の橋を東に渡れば。白浪瀧落て流眊とな

がれ。又身をひやす湖上にふねをのぞめば心  
興にのり。野庭に馬をいさめて手に鞭をかな  
つ。漸に行ほどに都を遙にへだてぬ。前途林幽  
なる纔に青薺梢に見ゆ。後路山さかりて白雲  
路をうづむ。既に斜陽景くれて。暗雨しきりに  
笠にかゝる。袖をしぼりて始て旅のあはれを  
しりぬ。其間山館に臥て露よりをく曉の望蕭  
蕭たり。煙高旱子巖の路をうづみ。水に望みて  
又水に望む。波の淺深長堤の汀にすゝむ。濱名  
の橋の橋下には往事をちかひてこゝろざしを  
のべ。清見關のせきやにはあかね名残をとど  
めて歩をはこぶ。富士の高根にけぶりのをぞ  
めば。臘雪宿して雲ひとりむすび。うつゝの山路  
につたを尋れば昔の跡夢にして風の音おどろ  
かす。木々の下には下ごとに翠帳をたれて。行  
客の苦みをいこへ。夜々の泊りにはとまりこ  
とにこもまくらをむすびてたび人のねふりを

たすく。行々として重て行々たり。山水野塘の興こそみちのをまし。歴々として更に歴々たり。海村林邑の感いやめづらかなり。此道若四道の間に逸興のすぐれたるをかね。又孤身が斗藪の今旅はじめなれば。遇孤たる舊客猶ながめを等閑にせず。況や一生の新賓なれば感思おさへがたし。感思の中に愁傷の交事あり。所謂母儀の老を□又幼を都にとどめて不定の再觀を契おく。無狀かな愚子が爲躰。浮雲に身を乗て旅天にまよひ。朝露の命にて風のたよりにたゞよふ。道をおなじうするものは我をしらざる客なり。語は親昵に契りていづちかはなれなんとする。長途に疲れて十日あまり。窮屈頻に身をせむ。湯井の濱に至りて一時半偃息しばらく心をゆるぶ。時に萍實西にしづむ。舊里を忍て後を期し。桂花東にひらけ。外郷に向て中懷をなやます。仍三十一字を綴り

て。千度思ひ萬度懷て旅のこゝろざしをのぶ。これは是文を以てさきとせず。歌を以て本とせず。只興にひかれて物のあはれを記するのみなり。四月四日の曉。都出し朝より雨にあひて。勢田の橋のこなたにしばらくとまりてあまじたくしてゆく。けふあすともしらぬ老人を。ひとり思ひ置てゆけば。

思ひなく人にあふみのちきりあらは今歸りこん勢田の長橋はしのわたりより雨まさりて。野徑の道芝露殊にふかし。八町なはてを過れば行人たがひに身をそばめ。一邑のさととをれば亭犬頻に形をほゆ。今日しもならはぬ旅の空に雨さへいたくふりて。いつしか心のうちもかきくもるやうに覺えて。

旅衣またきもなれぬ袖の上にぬるへきものと雨はふりきぬ田中打過民宅打過てはる／＼と行ば。農夫並び立てあら田をうつこゑは行鴈のなきわたる



がごとし。卑女うちむれ前田の面にゑぐつむ。  
存外しづくに袖をぬらす。そともの小川には  
川ぞひ柳に風たちて鷺のみの毛うちなびき。  
竹の編戸の垣根には卯花咲すさびて山時鳥忍  
びなく。かくて三上の嶽をのぞみて野洲河を  
わたる。

いかにしてすむやす川の水ならんよわたる計苦しきやある  
若相と云所を過て横田山を通る。此山は白榆  
のかげにあらはれて緑林の人をしきる所とも  
きこゆれば。益なく覺えていそぎゆく。

はや過よ人の心のよこた山みとりの林かけにかくれて  
夜景に大岳といふ所にとまる。年比うちかな  
はぬ有さまにおもひとりて髪をそりければ。  
いつしかかゝるたびねするも哀にて。彼廬山  
の草庵の夜曲は情ある事を樂天の詩に感じ。  
此大岳の柴の宿の雨には何事を貧道の歌には  
づ。

墨染の衣かたしき旅れしついつしか家を出るしに

五日。大岳を立て遙に行ば。内の白河外の白河  
といふ所を過て鈴鹿山にかゝる。山よりは伊  
勢の國にうつりぬ。重山雲さかし。越れば千丈  
の屏風彌しげく。群樹烟ながし。褰ば又萬尋の  
帷帳ます／＼あつし。峯には松風かた／＼に  
調べて嵇康が姿しきりに舞。林には葉花稀に  
残て蜀人の錦は纔にちりほふ。是のみにあら  
ず。山姫の夏の衣は梢のみどりにそめかけ。樹  
神の音の響は谷の鳥にこたふ。此路を何里と  
もしらず越行ば。羊腸坂きびしくして驚馬石  
にあしなえたり。すべて此山は一山の中に數  
山をへだて、千巖の峯にさはり。一河のなが  
れ百瀬に流て衆客の歩みに足をひたせり。山  
里江複は當路にありといへども。萬里の行者  
はなかばもいたらず。

すゝか川ふるさと遠く行水にぬれて幾せの涙をわくらん

薄暮に鈴鹿の關屋にとまる。上弦の月峯にかかれり。虚弓いたづらに歸鴈路にのこり。下流の水谷に落。奔箭すみやかにして虎に似たる石にあたる。爰に旅驛漸にかさねて。枕を宿縁の草にむすび。雲衣曉にさむし。袖をいはねのこけにしく。松は君子の徳をたれて。天のごとくおほへり。竹は吾友の號あれば。かせにふしてよをあかす。

鈴鹿山さしてふる里おもひれの夢路の末に都をそとふ

六日。孟嘗君の五馬の客にあらざれば函谷の雞の後夜をあかしてたつ。山中なかば過て漸下れば巖扉けづりなせり。仁者の栖しづかにして樂み。澗水堀ながす。智者の砌うごけどもゆたかなり。かくて邑里に出て田中の畔を通れば。左に見右に見立田眇々たり。或は耕しをのれがひき／＼に論じ。畦畝あせを竝て苗を我とり／＼に藝たり。民のけぶりは父君心躰

の恩火よりにぎはひ。王道の徳は子民稼穡の土器より開けたり。水龍は本より稻穀を護て夏の雨をくだし。電光はかねてより九穗をはらみて三秋をまつ。東作の業力をはげます。西收の税たのもしく見ゆ。劉寛が刑を忘れたり。蒲鞭定て螫になりぬらん。

苗代の水にうつりて見ゆる哉いな葉の雲の秋のおもかけ日數ふるまゝに古郷も戀しくて立歸り過ぬる跡をみれば。いづれか山いづれか水。雲より外に見ゆるものなし。朝に出て夕に入。東西を日の光にわきまふといへども晚ればとまり明れば立。晝夜を露命に論せん事はかたし。をのづから一步を捨て萬歩をはこぼさ。遠近かぎりありて往還を期しつべし。只あはれむ。遙に都鄙の中路に出て前後のおもひに勞する事を。ふる里は山のいくへにへたてきぬ都の空をうつむしら雲夜陰に市廛と云にとまる。前を見おろせば海

さし入て河伯の民うしろにやしなはれ。見あぐれば峯崎て山祇の髪風にけづる。磐をうつ夜の浪は千光の火を出し。木々になく曉の鰐は孤枕の夢を破る。此ところにとどまりてころはひとりすめども。明行ば友にひかれ打出ぬ。

松かれのいはしく磯のなみ枕ふしなれてもや袖にかくらん七日。市腋を立て。津嶋の渡と云所を舟にて下れば。蘆の若葉あをみわたりて。つながぬ駒も立はなれず。菱の浮葉に浪はかくれども。難面かはづはさはぐけもなし。とりこすさはの雫袖にかゝりたれば。

さして物と思ふとなしにみなれさはみ駒ぬ涙に袖は濡しつ渡はつればおはりの國にうつりぬ。片岡には朝陽の影うちにさして。焼野の草に雉なきあがり。小篠が原に駒あれて。泥しけしき引かへて見ゆ。又園中に桑の下宅あり。宅には蓬頭な

る女。簀にむかひて蠶養をいとなみ。園には僚倒たる翁鋤を持て農業をつとむ。大かた禿なる小童部といへども。田を習心ざしたる足をひづがごとするおもひのみあり。わかくしてより業を習ふありさまあはれにこそ覺れ。實に父兄のをしへつゝしまざれども。主孝の志をのづからあひなるものか。

山田うつ卯月になれば夏引のいとけなき子も足ひちにけり幽月景あらはれて。旅店に人しづまりぬれば。草のまくらをしめて萱津の宿にとまりぬ。

八日。萱津を立て鳴海の浦に來ぬ。熱田宮の御前を過れば。示現利生の垂跡にひざまづきて一心再拜の謹啓に頭をかたぶく。暫く鳥居に向ひて阿字門を觀すれば。權現の砌ひそかに寂光の色に□夫土木霜降て瓦上松風天に吹といへども。靈驗日新にして人中の心花春のごとくにひらけたり。しかのみならず。林の梢枝

をたる、幡蓋社頭の上におほひ。金玉の檐端をうつ金色を神殿の面にみがく。彼和光同塵は來際をかざる期なき事を憐む。羊質未參の後悔に向前のうらみあり。後參の未來に向方のたのみなし。願は今日の拜參をもちて必當來の良縁とせん。路次の便詣なりといふ事なかれ。此機感相叶時也。光をまじふるは冥を導誓ひなり。明神定てその名に應じ給はゞ。長夜の明曉は神にたのみ有ものをや。

光とつるよるのあまの月早あけよ。朝日戀しき四方の空見ん此うらをはるかに過れば朝には入海にて魚にあらずば游べからず。晝は鹽干潟なれば馬をはやめてゆく。西天は冥海漫々として雲水蒼蒼たり。中上には一葉の舟かすかに飛て白日の空にのぼる。彼仮男の船中にてなどや老にけん蓬萊の嶋は見ずとも。不死藥をばとらずとも。波のうへの遊興は一生の歡會なり。是延

年の術にあらずや。

老せしと心をつれにやるひとそ名なきくしまの藥をもうれ猶此干潟を行ば小蟹どもをのが穴々より出て蠢きあそぶ。人馬のあしにあはて、横にをどり平さまに走りて。我あな／＼へ逃入をみれば。足の下にふまれて死べきは外なる穴へ走りて命いき。外に恐なきは足の下なる穴へ走來てふまれて死ぬ。憐べし煩惱は家の犬のみにあらず。愛着は濱の蟹ふかき事を。是を見てはかなくおもふ我々。かしこしやいなや。生死の家に着する心は。かににもまさりてはかなき物か。

誰もいかに見るめ哀とよる波のた、よふうちに迷ひ來に見山重りて又かさなりぬ。河へだたりて又へだたりぬ。ひとり舊里を別而遙に新路におもむく。しらすいづれの日か古郷にかへらん。影をならべゆく道づればあまたあれども。心ざし



は必しも同じからねば。心に准ずる氣色は友をそむきて似たれども。折にふるゝ物のあはれは心なき身にもさずがに覺えて屈原が澤に呻ひて漁夫が嘲を耻。楊岐が路になきて騷人のうらみをいだきけんも。身のたとへにはあらねども。逆旅にして友なきあはれには。なにとなく心ぼそくそらにおもひしられて。

露の身をおくへき山のかけやなきやすき草葉もあらし吹つゝ湖見坂といふ所をのぼれば。吳山の長坂にあらずといへども。周行の短息はこゝにあへたり。數歩を通じてながき道にすゝめば。宮道二村の山中を賒に過て。山はいづれも山なれども。優興は此山にひく。松はいづれも松なれども。木立は此松にとゞまれり。翠を含風の音に雨をきくといへども。雲に舞鶴のこゑに晴の空を知。松の性松の性。汝は千年の貞あればおもがはりせじ。再往再往。我は一時の命なれば

後見期しがたし。

けふすきぬかへらは又よふたむらのやまめ名残の松の下道  
山中に堺川あり。身は河上にうかんでひとり  
渡れども。影はみなそこに沈て我とふたりゆく。かくて三河國にいたりぬ。雉鯉鮒が馬場を  
過て。數里の野原に一兩のはしを名づけて八  
橋といふ。砂に睡る鴛鴦は夏を辭去り。水にた  
てる杜若は時をむかへて開たり。花はむかし  
の色かはらず咲ぬらむ。橋もおなじ橋なれど  
も幾度つくりかへつらん。相如が世をうらみ  
しは肥馬に乗て昇僊にかへり。幽子身を捨る。  
窮鳥に類て當橋を渡る。八橋よ八橋よ。くもで  
に物おもふ人は昔も過ぎや。橋柱よはしばし  
らよ。をのれも朽ぬるか。むなしく朽ぬるもの  
は今もまたすぐ。

すみわひて過る三河のやつ橋を心ゆきてもたちかへらはや  
此はしのうへにおもふ事をちかひて打渡ら

ば。何となく心もゆく様におぼえて。遙に過れば宮橋といふ所あり。數雙のわたし板は朽て跡なし。八本の柱は残て溝にあり。心のうちにむかしをたづねてことのはしに今をしるす。

宮橋の残るはしらにこととはん朽て幾世かたえわたりぬるけふのとまりをきけば。前程なを遠しといへども。暮の空を臨斜脚既に酉金に近づく。日の入程に矢橋の宿に落つきぬ。

九日。矢橋を立て。赤坂の宿を過。むかし此宿の遊君花顔春こまやかにして。蘭質秋かうばしき女有けり。良を潘安仁が弟妹にかりて。契を三州吏の妻妾に結べり。妾は良人に先て世を早し。良人は妾にをくれて家をいづ。しらす利生のぼさつの化現して夫を導けるか。又しらす圓通大士の發心して妾をすくへるか。互の善知識大なる因縁なり。彼舊室妬が咒咀に拵舞惡怨かへりて善教の禮をなし。異域朝嘲

の輕仙に鼻酸持鉢忽に智行の徳にとふ。巨唐に名をあげて本朝に譽を留る上人誠に貴。誰かいはん初發心の道に入聖なりとは。是則本來佛の世に出て人を化するにあらずや。行々昔を談じて猶々いまにあはれむ。

いかにしてうつゝかみちを契らまし夢驚かす君なかりせはかくて本野が原を過れば。懶かりし蕨は春の心を生替りて。秋の色うとけれども。分行駒は鹿の毛に見ゆ。時に日重山にかくれて。月星躔に顯れぬ。曉をはやめて豊河の宿にとまりぬ。深夜に立出てみれば。此川はながれひろく水ふかくして。まことにゆたかなる渡也。河の石瀬に落る浪の音は月の光にこえたり。川邊に過る風の響は夜の色白し。又みぎはひなのすみかには月よりほかにながめなれたるものなし。

しる人もなきさに浪のよるのみそなれにし月の影はさしくる

十日。豊河を立て野くれ里くれはるくくとす  
ぐれば。峯野の原と云所有。日野の草の露より  
出て若木の枝にのぼらず。雲は峯の松風には  
れて山の色天とひとつに染たり。遠望の感心  
情つきがたし。

山の端は露より底にうつもれて野末の草に明るしのめ  
やがて高志山にかゝりぬ。石利を踏て大敵山  
を打過れば焼野が原に草葉萌出て。こずゑの  
色煙をあぐ。此林地を遙に行ば山中に堺川あ  
り。是より遠江國にうつりぬ。

くたるさへたかしといはゝいかせんのほらん旅の東路の關  
此山のこしを南にくだりて遙に見おろせば青  
海浪々として白雲沈々たり。海上の眺望は此  
ところに勝れたり。漸山脚に下れば匿穴のご  
とくに堀入たる谷に道あり。身をそばめ聲を  
吞で下る。くだりはつれば北は韓康獨往の栖。  
花の色夏の望み貧して。南は范蠡扁舟の泊り。

波の聲夕の關に樂しふ。鹽屋にはうすきけぶ  
り靡然となびきて。中天の雲片々たり、濱膠に  
は決れるうしほ涓焉とたまりて數條の畝礫々  
たり。浪によるみるめは心なけれども黑白を  
わきまへ。白洲にたてる鷺は心あれども毛砂  
にまどへり。優興にとゞめられて暫く立れば。  
此浦の景趣はひそかに行人の心をまとふ。

行過る袖も鹽屋の夕けふりたつとてあまのさひしとや見ん  
夕陽の影の中に橋本の宿にとまる。此泊は龜  
海南に湛て遊興をこぎゆくふねにのせ。驛路  
ひがしに通りて魯號を濱名の橋にきく。時に  
日車西に馳て牛漢漸あらはれ。月輪峯に廻り  
て兎景初て幽なり。浦ふく松風は臥もならは  
ぬ旅の身にしみ。巖をあらふ浪の音は聞もな  
れぬ老の耳にたつ。初更の間ひごろのくるし  
みにわかれて。七編のこもむしろにゆるめる  
といへども。深漏はこよひのとまりのめづら

しきに目ざめて數雙の松の下にたてり。磯もとどろによる波は。水口かまびすしくのゝしれども。晴くもりゆく月は。雲のうす衣をかうぶりて忍びやかにすぐ。彼釣魚のかげはなみの底に入て魚のきもをこがし。夜舟の棹のうたはまぐらのうへに音づれて客のねざめにもなふ。夜も既に明ゆけば。星のひかりはかくれて宿立人の袖はみえ。餘所なる聲によばれてしらぬ友にうちつれて出づ。しばらく舊橋に立とどまりてめづらしきわたり興すれば。橋の下にさしのぼるうしはは。かへらぬ水をかへし上さまにながれ。松をはらふ風のあしは。かしらをこえてとがむれどもきかず。大かた鞆中の贈答は此所に儲たり。誰か水驛の跡をいはん。

橋本やあらぬ渡りと聞しにも猶過かねつまつのむら立浪まくらよるしく宿のなこりには残してたちぬまつの浦風

十一日に橋本をたつ。橋のわたりより行々たちかへりみれば。跡にしらなみのこゑはすぐるなごりをよびかへし。路に青松の枝はあゆむもすそを引とどむ。北にかへりみれば湖上はるかにうかんで。なみのしは水の顔に老たり。西にのぞめば湖海ひろくはびこりて。雲のうきはし風のたくみにわたす。水郷のけしきは。かれも是もおなじけれども。湖海の淡鹹は氣味これことなり。浪のうへには浪に翳みさぐすどしき水をあふぎ。舟の中には唐櫓おすこゑ秋のかりをながめて夏の空にゆく。本より興望は旅中にあれば。感腸しきりに廻りておもひやみがたし。此所をうちすぎて濱まつのうらにきたりぬ。長汀砂深して行はかへるがごとし。萬株しげくして風波こゑをあらそふをみれば。又湖を吞は則曲浦の曲より吐出し。濱漪珠を沙汰は則疊巖の疊にきしく。



優なるかな艶なるかな。忘難く忍がたし。命あらば□年か再び來て此うらにすぎん。

波ははま松には風のうらうへに立とまれとや吹しきるらん  
林の風にをくられて廻澤のやどをすぎ。はるかに見たして行ば。岳の邊にはもりあり。野原には澤あり。峯にたつ木は枝をうへにさして生たれども。水にうつるかげはこずゑをさかさまにして互に相違せり。水と木とは相生中よしときけども。うつるかげは向背して見ゆ。時既にたそがれになれば。夜の宿を向へて池田の宿にとまる。

十二日。池田を立てくれぐ行ば。林野おなじさまなれども。ところぐみちとなれば見るにしたがひてめづらしく。天中川をわたれば大河にて水面三町ばかりあれば舟にて渡る。はやく波さかしくてさほもさしえねば。大なる舩をもいでよこざまに水をかきてわたる。

かの王霸が忠にあらざれば濠沱河漸むすべきにあらず。張轉望が牛漢浪にさかのぼりけん浮木のふねのかくやとおぼえて。

よしらは身をうきゝにて渡りなんあまつみ空の中川の水上の野原を一里ばかりをすぐれば。千草萬草露の色なをあさく。野煙徑風の音またよはし。あはれおなじくは。此道の秋のたびにてあれな。

夏草はまたうらわかき色ながら秋にさきたつ野邊の露かな山口といふ今宿を過れば。路は舊に依て通せり。野原を跡にしさとむらをさきにして打かへ打かへ過行ば。事のまゝと申社に參詣す。本地をばしらず。佛陀にもいますらん。薩摩にもいますらん。中丹をば神かならずあはれみ給ふべし。今身もおだやかに後身もおだやかに。すぎのむら立は三輪山にあらずとも戀しく。尋てもまいらん。願はたゞ畢竟空寂の法味を

納受して。眞實不虛の感應をたれたまへ。

思ふ事のまじかなへは杉たる神のちかひのしるしとそみん社のうしろに小川をわたれば。佐夜中山にかか。此山口をしばらくのぼれば。左に深谷右も深谷。一峯ながきみちはつゝみのうへに似たり。兩谷の梢を眼下に見て。群鳥の囀を足の下に聞。谷の兩片はたかく。又山のおひだをすぐれば中山とは見えたり。山はむかしの九折のみちふるきがごとし。こするはあらたなる抄千條のみどりみなあさし。此ところは其名ことに聞つるところなれば。一時のほどに百般立どまりてうちながめゆけば。秦蓋の雨の音はぬれずして耳をあらひ。商絃の風のひゞきは色あらずして身にしむ。

わけ登るさよの中山なかくにこえて名残を苦しかりける時に胡馬ひづめつかれて。日鳥翅さかりぬれば。草命をやしなはんがため。きく川の宿にと

まりぬ。或家のはしらに故中御門中納言宗行卿かく書付られたり。彼南陽縣の菊水下流を汲でよはひをのべ。此東海道の菊河西涯にやどりて命を全くせん事を。ことにあはれとこそおぼゆれ。身は累葉の賢枝にうまれ。其官は黃門のたかき階にのぼる。雲のうへの月のまへには冠の光をまじへ。仙洞のはなの下には錦の袖の色をあらそふ身たり。榮分にあまりて時々はなと匂ひしかば。人それをかざしてちかきもしたがひ遠きもなびきしも。かゝるうきめ見むとは思ひやはよるべき。さてもあさましや去承久三年中旬天下風あれて海内のなみさかへりき。鬭亂の亂將は花城よりみだれ。合戦の戰士は夷國より戰。暴雷雲をひゞかして日月光をおほはれ。軍慮地をうごかして弓鉞威をふるふ。其おひだ萬歳の山のころ。風わすれて枝をならし。一清の河の色波あやま

つてにぐりをたて。茨山汾水の源流たかくながれ。はるかに西海のにしくだり。卿相羽林の花族とをく落て東關の東にちりぬ。これのみにあらず別離宮の月のひかり所々にうつりぬ。雲井をへだてゝ旅のそらにすみ。鷄籠山の竹の聲方々にうれへたり。風のたよりをたえて外土にさまよふ。ゆめかうつゝか。むかしもいまだきかず。錦帳玉端の床は主失て武客の宿となり麗水蜀川の貢數をつくして邊民のたからとなりనికి。よるひるたはぶれて衿をかさねし鴛鴦。千歳比翼ちぎりいきながらたえ。朝夕にうやまひて袖をおさめし僮僕も。たねん知恩のこゝろざしおもひながらわかれぬ。實に會者定離のならひ目のまへに見ゆるに。刹利も首陀もかはらぬ奈落のそこのありさま。あはれにこそおぼゆれ。今はなげくともたすくべき人もなければ涙をさきだてて心よは

くうちいでぬ。其身にしたがふものは甲冑の兵こゝろを一騎の客にかく。其目にたつものは釵戟のつるぎ。魂を寸神のむねにけす。せめて命のをしさにかく書付られけんこそ。するすみならぬ袖の色もあらはれぬべく覺ゆれ。心あらはさをあはれと水くきの跡かきわくる宿の旅人妙井渡と云所の野原をすぐ。中呂の節にあたりて。小暑の氣やうくもよほせども。いまだ納涼のころならねば手にむすばず。

夏深き清水なりせは駒とめて暫しすゝまは日はくれぬへし播豆藏の宿をすぎて大堰河をわたる。此川は川中に渡りおほく。又水さかし。ながれをこえ嶋をへだてゝ。瀬々かた／＼にわかれたり。此道を二三里行ば四望かすかにして遠情をさへがたし。時に水風例よりもはげしくて。白砂きりのごとくにたつ。笠をかたぶけて駿河國にうつりぬ。前嶋を過るになみはたゝねども。藤

枝の市をとをれば花はさきかゝりたり。

前嶋の市には波の跡もなしみな藤枝のはなにかへつゝ

岡部の里邑を過てはるかにゆけば。宇都の山にかゝる。此山は山中に山を愛するたくみのけずりなせる山也。碧岸の下に砂ながうして巖をたて。翠嶺の上に葉おちて壤をつく。朮を背におひ面を胸にいだきて漸にのぼれば。汗肩袒のはだへにながれて。單衣かさぬといへども。懷中の扇を手にうごかして。微風の扶持可也。かくて森々たる林をわけて峨々たる峯を越れば。貴石の譽は此山にたかし。大かたおちこちの木立にこゝろをわけられて。一方ならぬ感望におもひみだれて過れば。朝雲峯くらし。虎李將軍が栖をさり。暮風谷寒し。鶴鄭太尉が跡にすむ。既にして赤羽西にとび。まなこにさへざるものとは檜原楨の葉。老のちからこゝを疲れたり。あしにまかするものは

苔の岩ね勤の下道嶮難にたへず。暫うちやすめば。修行者一兩客繩床そばにたてゝ又休む。立かへるうつの山ふしことつてよ都こみゝひとりこえきと行々おもへばすぎきぬる此あひだの山河は。夢に見つるかうつゝにみつるか。昨日とやいはんけふとやいはん。むかしを今とおもへば我身老たり。今をむかしとおもへば我心わかし。古今をへだつる物はわが心の中懷なり。生死涅槃猶如昨夢といへるもあはれにこそおぼゆれ。昨日過にしあとはけふの夢となり。今日此所をすぐる。明日いづれの所にして今はきのふといはん。誠にこれ過ぬるかたの歳月を夢よりゆめにうつりぬ。昨日今日の山路は雲よりくもにいろ。

あすや又きのふの雲に驚かんけふはうつゝのうつの山こえ手越の宿にとまりてあしをやすむ。十三日手越を立て野邊をはるゝと過。こずゑをみれ



ばあさみどりの夏のはじめなりといへども。くさむらをのぞめば白露まだきに秋の夕に似たり。北に遠ざかりて雪しろき山あり。とへば甲斐の白峯といふ。としごろきゝしところ命あれば見つ。をよそ此あひだ數日のこゝろざしをやしなひて。百とせのよはひをのべつ。かの上仙のくすりは下界のためによしなき物をや。

おしからぬ命なれ共けふはあれはいきたるかひのしらねをも見づ。宇度のはまをすぐれば。浪の音かせのこゑ殊にこゝろすむ所なり。はまの東北に靈地の山寺あり。四方たかくはれて四明天台の末寺たり。堂閣繁昌して本山中堂の儀式をかり。一乗讀誦のこゑは十二廻中に聞絶る事なく。安居一夏の行は採花汲水のつとめ驗をあらそふ。修する所は中道の教法論談を空假の願に決して。利する所は下立の衆生歸依を遠近のさか

ひにいたす。伽藍の名をきけば行基ぼさつと建立。土木の風情。本尊の實を尋れば觀世音と申。補陀落山の聖容出現の月あきらかなり。大形佛法興隆のみぎり。數百箇歳の星漢霜ふりたり。僧俗止住のみね。三百餘宇の禪房霞ゆたかなり。雲船の石神山腰に護て惡障をふせぎ。大形の本容は寺内に納て善業をなす。千手觀音かの山より石舟に乗て此地にくだり給ひけり。其舟善神となりて山路の大坂に石舟護法と號す。彼海岸山の千眼は南方より北を飛て有縁を此山に導。宇渡濱の品天面を地に得て舞樂を此濱にまなべり。むかし稻河大夫といふ人。天人の濱松の下に樂をしらべて舞けるをみてまなび舞けり。又人のみるをみて鳥のごとくに飛て雲に隱にけり。其跡をみれば一の面形を落せり。大夫これを取て寺の寶物とす。よつて其寺に舞樂をしらべて法會を始行

す。其大夫が子孫舞人氏とす。二月十二日常樂會とて寺中の大營なり。そのうち天人歸り。廻雪は春の花の色みねにとどまり。怨風は歲月のこゑはよつて此濱をすぐれば。松に雅琴有てなみにつゞみ有。天人の樂今聞に似たり。

袖ふりし天津をとめか羽衣のおも影にたつあとの白波

江尻の浦をすぐれば。青苔石におひ黒布磯にはる。南は澳の海森々と波をわかつて孤帆天にとび。北は茂松鬱々と枝たれて一道つるをなす。漁夫の網をひく。身をたすけんとして身をくるしみ。游魚の鈎をのむ。命をおしみて命をほろぼす。人いくばくの利をか得たる。魚いくばくの餌をかもとむる。世をわしるおもひ。命をたばふこゝろざし。かれもこれともにおなじ。これのみかは。山にあせかく樵夫は北風をになひて夕にかへり。野にあしなへく商客は。白露をはらふてあかつきに。出。面々のた

のしみまち／＼なりといへども。各々のくるしみは。みなこれ渡世の一事なり。

人ことにはしる心はかはれとも世をすくる道は一つ成けり此うらをはるかに見渡して行ば。海松はなみの岩ねに根をはなれたる草。海月は潮のうへに水にうつるかげ。ともにこれうき世を論じて人をいましめたり。

涙のうへにたゞよふ海の月もまたうかれ行とそ我を見る鹽清見がせきを見れば。西南は天と海と高低ひとつにまなこをまどはし。東北は山と磯と嶮難おなじく足をつまだつ。磐の下には波の花風にひらきて春のさだめなく。峯のうへには松の色みどりを含て秋をおそれず。浮天の波は雲を汀にて月のみふね夜出てこぎ。沈陸の磯は磐を道にて風の使脚あしたにふきてすぐ。名を得たる所かならずしも興をえず。耳に耽る所かならずしも目にふけらず。耳目の感

ふたつながら得るは此うらにあり。浪にあら  
ひてぬれくや□に道をとへば松風むなしく  
こたふ。岸柳にくるしみを尋れば槿花變じて  
石あり。

・關屋の邊に。布をたゝみといふ所あり。むかし  
せきもりの布を取たるが。つもりて石になり  
たるといへり。

吹よせよ清見うら風わすれ貝ひろふ名残のなにしおはゝや  
變らはやけふみるはかり清見瀉おほはし袖にかゝる涙ちは  
海老はなみにおよぎ。愚老は汀にたゞよふ。と  
もに老て腰かゞまる。汝はしるや生涯うかべ  
るいのち今いくほどと。我はしらず幻中の一  
瞬の身。かくておきつのうらをすぐれば。しほ  
がまのけぶりかすかに。うら人の袖うちしほ  
れ。邊宅には小魚をさらして屋上に鱗をふけ  
り。松のむら立なみのゆるいろ。心なき心にも  
こゝろあらん人に見せまくほしくて。

たゝぬらせゆくての袖にかゝる波ひるまのほとは浦風も吹  
岫崎といふ所は風飄々と翻て砂をまはし。波  
浪々とみだれて人をしきる。行客こゝにたづ  
さはりて。しばらくよせひくなみまをうかゞ  
ひていそぎとをる。左は嶮岳の下と岩のはざ  
まをしのぎ行。右はかすかなる浪のうへをの  
ぞめば眼うげぬべし。はるくくとゆくほどに。

大わだのうらに來て。小船の沖中にたゞよへ  
るをみる。飄帆飛で萬里風便をたのみて白煙  
にいり。鰲波うごきて千雲夕陽をあらひて紅  
藍にそむ。海館のうちに此所をのみとめて身  
をばとぞめず。

わすれしな波の面影立そひてするなこりのおほわたの浦  
湯居の宿を立てはるかに行ば。千本の松原と  
いふところあり。老のまなこは極浦のなみに  
しほれ。朧なる耳は長松のかせにはらふ。晴の  
天の雨には翠蓋のかさあれば袖をたくらず。

砂の濱の水には白花ちれども風をうらみず。行々あとをかへりみれば。前途いよくゆかし。

聞わひぬちの松原吹風の一かたならすわれしほるこゑ

蒲原の宿にとまりぬ。すがごものうへにふせり。十四日蒲原を立てはるかに行ば。前路にすすみさきだつ賓は。馬に水かひて後河にさがりぬ。後程にさがりくるをのれは。野に草しくてまだこぬ人をさきにやる。先後のあはれは行旅のならひにもおもひしられてうちすぐる程に富士川をわたりぬ。此河中にこそ石をながす。巫峽の水のみなんぞ舟をくつがへさんや。人のこゝろは此水よりさかしければ。老馬をたのみてうち渡る。老馬老馬。なんぢは智有ければ。山路の雪のみにあらず。川のそのころもよくしりにけり。

音にきゝし名高き山のわたりとてそこさへ深し富士川の水

うきしまが原をすぐれば。名はうきしまときこゆれど。まことは海中とは見えず。野徑とは見つべし。草むらあり。木の林あり。はるかに過れば人煙片々と絶て又たつ。新樹程をへだて、隣たがひにうとし。東行西行の客はみな知音にあらず。村南村北のみにたゞ山海を見る。山の頂に二泉あり。湯のごとくわくといふ。むかしは仙女が此みれにあそびて常にあり。ひがしふもとに新山と云山あり。延暦年中に天神くだりてこれをつくといいへり。すべて此みねは。天漢の中に沖て人衆の外にみゆ。眼をいたゞきて立。魂恍々とはれたり。

幾としの雪つもりてかふしの山いたゝき白き高ねなるらん問きつるふしの煙は空にきえて雪になこりの面かけそたつむかし採竹翁と云ものあり。女を赫奕姫といふ。おきなが家の竹林に鶯の卵子の形にかへりて巢の中にあり。翁養て子とせり。ひととなりてかはよき事たぐひなし。光ありてかたはらをてらす。嬋娟たる兩鬢は秋のせみのはね。



婉轉たる雙娥は遠山の色。一たび咲ばもゝの  
こびなり。見きく人みなはらわたをたつ。此姫  
は先生に人として。翁にやしなはれたりける  
が。天上にうまれて後は。宿世の恩を報せんと  
て。しばらく此おきなが竹に化生せるなり。あ  
はれむべし父子のちぎりの他生にも變せざる  
事を。これよりして青竹の世の中に黄金出來  
て。貧翁たちまちに富人となりにけり。其間英  
花の家。好色のみち。月卿ひかりをあらそひ。  
雲客色を重して。艷言をつくし。懇懷を抽て。  
つねにかくや姫が室屋に來會して。絃をしら  
べ歌を詠じてあそびたりける。されども翁姫  
難詞をむすびてうちとくるこゝろもなし。時  
のみかど此よしを聞しめてめしけれども參  
らざりければ。みかど御狩あそびのよしにて。  
鶯姫が竹亭に御幸し給ひて。鶯のちぎりをむ  
すび。松のよはひをひきたまふ。翁姫おもふと

ころ有て。後日をちぎり申ければ。みかどむな  
しくかへり給ひぬ。かたへの天これを知て。玉  
のまくら。金の釵。たまきはまた手なれざるさ  
きに飛車くだりて天にあがりぬ。開城のかた  
めも雲路にゑきなく。猛子がちからも飛行に  
はよしなし。時に秋の半。月のひかりくまなき  
ころ。夜半のけしき風をとづれ。ものをおもは  
ぬ人もものおもふおりふし。きみのおもひ臣  
の懷舊。おなじく袖をうるほす。彼雲をつなぐ  
につなぎ得ず。雲の色慘々としてくれのおも  
ひふかし。風を追ともおはれず。風の聲颯々と  
してよるのうらみふかし。花民は奈木の孫枝  
なり。藥の君臣として萬民やまひをいやす。鶯  
姫は竹林の子葉なり。毒の化女として一人の  
心をなやます。方士が大眞院をたづねし。貴妃  
がさゝめごと。二度唐帝のおもひにかへり。使  
臣の富士のみねにのほり。仙女がわかれの書。

なか／＼和君の情をこがせり。翁ひめ天にあらがりける時。帝の御ちぎりさすがにおぼえて。不死のくすりに歌をかきぐして。とどめをきたり。其歌に云。

今はとてあまのは衣きる時そ君をあはれとおもひ出ぬる  
みかどこれを御覽じて。わすれがたみは見る  
もうらめしとて怨戀にたへず。青鳥をとばし  
鴈札をかきそへてくすりをかへし給ひけり。  
其返事。

あふことの涙にうかふ我身にはしなぬ藥もなにゝかはせん  
使節智計をめぐらして。天にちかきところは  
此山にしかじとて。富士山にのぼりてやきあげければ。くすりも文もけふりとむすぼほれて空にあがりけり。これより此みねに戀の煙をたてたり。何この山をば不死の峯といへり。しかるを郡の名に付て富士とかくにや。彼も仙女なり。これも仙女なり。ともに戀しき袖に

たまれる。彼は死てさり。これはいきてさる。おなじく別てよるのころもをかへす。すべてむかしも今も好女は國をかたづけ人をなやます。つゝしんで色にふけるべからず。

あまつひめ戀しおもひのけふりとたつやはかなき大空の雲  
車返といふ所をすぐ。此ところは。もし蟪蛄が  
みちにあたりて行人をとめけるか。又若遊兒  
が土城をつくりて孔子に答けるか。昔小童部の路中に小家を造りて遊びけるに。孔子のとをるとて。車にあやうしそこのけといさめられけるに。小童部の云。車は家の有所をよぎて過べし。いまだ聞ず家の車にさる事をと。孔子これ若又勝母の  
閭ならば。曾子にあらずとも誰もいかゞとを  
らん。曾子は孝ふかき人にて。不孝の者の嶮岨の地なぬたる所は。車をかへしてとをらず。嶮岨の地なれば大行路といひつべし。よの道はさかしくてよくくるまをくだく。さ  
れども騎馬の客なればうちつれて通りぬ。  
むかしたれこゝに車のわつちひてなかな北にかけはしめけん  
木瀬川の宿にとまりて萱屋の下にやすむ。又  
彼中納言和歌一首よみて。一筆の跡をとどめ

られたり。

けふする身を浮嶋か原にきてつゐの道をそきゝ定めつゝこれを見る人心あればみな袖をうるほす。夫北州の千年はかぎりを知て壽をなげく。南州の不定は期をしらずして命をたのむ。誠にけふばかりとおもへどもこゝろのうちを推すべし。おほかたはむかしがたりにだも。あはれなるにはなみだをのごふ。何ぞいはんや。我も人も見し世のゆめなれば。おどろかすにつきてあはれにこそ覺ゆれ。さてもみねの梢をはらひしあらしのひゞきに。およばぬ谷の下くさまでもふきしほられて。かずならぬ露の身もをき所なくなりにより。かくいひて命を惜みて。うせにし人のこと葉を存す。厭身は今までありてよそにみるこそあはれなれ。此歌の心をたづぬれば。納言浮嶋が原を過とて。ものをかたにかけのぼるもの逢たりけり。とへば

按察使光親卿の僮僕主君の遺骨を捨て都にかへるとなく／＼いひけり。それをみるに。身のうへの事なれば。魂はいきてよりさこそはきえにけめ。本より遁まじきとは知ながら。をのづから虎口より出て龜毛の命もやうると。なをまたれけんこゝろに。今は終にときゝさだめて。げにうきしまが原より。我にもあらず馬の行にまかせて此宿に落つきぬ。こよひばかりの命。まぐらの下のきり／＼すとともにちぎりあかして。かく書留て出られけんこそあはれをのこすのみにあらず。無跡まで情もふかく見ゆれ。

さそなげに命もおしのつるき羽にかゝるあはれは浮嶋か原十五日。木瀬川を立て遇澤と云野原をすぐ。此野何のさともしらす。遙々とゆけば。納言はこゝにてはやく暇候べしと聞えけるに。心中に所作ありとしばらくとこひうけられけれ

ば。なをはるかに過行けん。まことに旅の空は  
いかゞものあはれなるべき。況や馬嵬のみち  
に出て。牛頭のさかひにかへらんずる涙の底  
にも。都におもひをく人々や心にかゝりて。あ  
りやなしやのことの葉だにも。今一度きかま  
ほしかりけん。されどもすみだ川にもあらね  
ば。こととふ鳥のたよりだにもなくて。此原に  
てながく日の光にわかれ。冥道にたちかくれ  
にけり。

都とはいかに花人はるたえてあつまの秋の木の葉とはちろ  
やがて按察使左兵衛督有雅卿。おなじく此原に  
てする露もとのしづくとをくれさきだちに  
けり。夫人つねの生なし。家つねの居なし。こ  
れは世のならひ事の理なり。されども期來て  
生て謝せば。理をのべて忍つべし。縁つきて家  
をわかれば。ならひを存してなぐさみぬべし。  
わかれし所はうき世なり。城ミヤコの外の荒々たる

野原のたびのみち。沒せん時はいまだしき時  
なり。うらみをふくみし悄々たる秋の天の夕  
の空。誠に時の災孽の遇にあへりといへども。  
こゝにこれ先世の宿業のむくゆる酬なり。抑  
かの人々は官班身を名譽のきゝをめぐ。君恩  
あくまでうるほして降雨のごとし。人望かた  
かたにひらけてさかりなる花に似たりき。中  
に黃門都護は家の貫首として一門の間に捷を  
おしひらき。朝の重臣として萬機の庭に線を  
とゝのへき。誰かおもひし天俄に災をくだし  
て天命をほろぼし。地たちまちに天をあげて  
地望をうしなはんとは。あはれなるかな入木  
の通りの跡は千とせの記念にのこり。歸泉の  
靈魂は九夜のゆめにまよひにき。されども善  
惡こゝろにつよくして生死はたゞ恨なりとお  
もへりき。つゝに十念相續して他界にうつり  
ぬ。夏の終秋のはじめ人醉世にごりし。其間の



妄念はさちあらばあれ。南無西方彌陀觀音。そのときの發心なをざりならずは來迎たのみあり。これやこの人々の別れし野邊とうちながめてすぐれば。淺茅が原に風たちて。なびく草葉に露こぼれ。無常の郷とはいひながら。無慚なりける別れかな。有爲のさかひとおもへども。うかりける世中かな。官位は春の夢。くさのまくらにながく絶ぬ。樂榮はあしたの露。苦のむしろにきえはてぬ。死出山路には隨はぬならひなれば。後世のうらみもいかにせん。東のみにひとり出て。あやうき武士にいざなはれ行けん。こゝろのうちこそあはれなれ。かの冥吏呵責の場には。ひとり自業自得の斷罪に舌をまき。此妻息別離の跡には。各不意不慮の横死に涙をやる。生てのわかれ死てのうらみ。ふたつながらをいかにせん。眞をうつしてもよしなし。一生いくばくならぬ。魂を訪て足

ぬべし。二世のちぎりむなしからじ。

おもへはなうかりし世にもあひ澤の水の泡とや人のきゆ覽けふ足柄山をこえて關の下の宿にとまるべき日。暮鳥むらがりとんで。林頭に驚ねぐらをあらそへば。山の此方竹の下といふところにとまる。四方は高山にて一川谷にながれ。嵐落て枕をあらふ。聞ばこれ松の音。霜さえて袖にあり。はらへばたゞ月のひかり。ね覺のおもひにたえず。ひとりおきゐてのこりの夜をあかす。見し人にあふ夜の夢の名残かな。けるふ月に松風の聲。更る夜のあらしの枕ふしわひの夢もみやこに遠さかりきて十六日。竹の下を立て。林中をすぎてはるく行ば。千束のはしを獨梁にさしこえて。足柄山に手をたてゝのぼれば。君子松いつくしくて。貴人の風過る笠をとがめ。客雲梢にかさなりて故山のいたゞきあらたに高し。朝の間雨ふりて松のかせ聲の虛名をあらはす。程なく

日岳□の東にのぼりて雲はやく驛路の天にはれぬ。彼山祇のむかしのうたに。遊女が口につたへ。嶺猿の夕のなきは。行人の心をいたましむ。昔青墓の宿の君女此山をこえける時。山神翁に化してうたをなしへたりけり。あしがらといふはこれなり。時に萬仞みねたかし。樹根にまとふてこしをかづめ。千里巖さかし。苔の鬚をかなぐりて脛をのゝく。山中を胡馬がへしといふ。馬もしここにとどまらましかば。此山をば鞍馬とぞいはまし。これより相摸國にうつりぬ。

秋ならはいかに木葉のみたれまし嵐そおつるあしからの山關下の宿をすぐれば。宅をならぶる住民は人を宿して主とし。窓にうたふ君女は客をとめて夫とす。あはれむべしちとせのちぎりを旅宿の一夜のゆめにむすび。生涯のたのみを往還の諸人の望にかく。翠帳紅閨萬事の禮法ことなりといへども。草庵柴戸一生の觀念これおなじ。

さくらとて花めく山の谷ほこりなのか匂ひもはるはとき道は順道なれども。宿を逆川と云所にとまる。鹽のさすとき。水の上ざまにながるれば。さかはいふ。北は片岡田鰐うちすきみて薄の焼おれ青葉にまじり。南は滿海蒼波わきあがりて。白馬ならびわたる。しかのみならず。前汀東西素布を長疊の浪にあらそひ。後園町段緑衫を萬きやうの竹にかり。時に暮行日脚は景を遠嶋の松にかへし。來宿疎人は契を同驛のむしろにむすぶ。彼草につなぐ疲馬は胡國を忍びて北風に嘶へ。野にやすむ群牛は吳地にならひて夜の月に喘。掉歌數聲舟船を明月峽のほとりによせ。松琴萬曲琵琶を尋陽江の汀にきく。一生のおもひ出今夜の泊りにあり。

行とまる磯邊のなみのよるの月旅れの袖にまたよとせとや十七日。逆川を立て平山を過て。高倉宰相中將範茂。笠峯山のうみじり急河と云淵にて底の

みくづとしづみにけり。つらく其むかしを  
おもへばあはれにこそおぼゆれ。日本國母の  
貴光をかゞやかす光の末に身をてらし。天子  
聖皇の恩波をそゞ波の雫に家をうるほす。  
羽林のはなあらたにひらけ。はるにあへるに  
ほひ天下に薰じ。射山の風あたゝかにあふぐ  
時にあたるひゞき遠近にふるふ。圖らざるや  
榮木山風たゞきて其はなちりとなり。逝水な  
がれ急にして其身泡ときえんとは。連枝の契  
かたえはやくおれぬ。家苑の地あとむなく  
のこれり。魼鰯のむつび一頬をならべず。他郷  
の水おちてかへらず。一生こゝにつきぬ。此河  
は三家の水口たるか。いふことなかれ水こゝ  
ろなしと。なみの聲鳴咽して哀傷をなす。

なかれ行てかへらぬ水のあはれにも消にし人の跡と見ゆ覽  
此つぎにあひ尋れば一條の宰相中將信能。美濃  
國遠山といふところにて露の命をかしてけ

る。夫洛中にわかれて維し日。家をはなれしう  
らみいよゝ惡業のなかだちたりしかども。  
たびのみにちに手をひらけしときに家を出しよ  
ろこび還て善縁のすゝめにあへり。たなごこ  
ろをあはせ念をたゞしくして。魂ひとり去に  
けり。臨終の義を論せば往生ともいふべし。西  
方には聖衆定て九品の寶蓮にみちびくらん。  
彼羽化をえて天闕にあそびしは。八座のむし  
ろ家門のちりをうちばらひ。虎賁を兼て仙洞  
にわしる。累葉の花寶枝の風に綻びき。傷哉平  
日のかげ盛にして。未西天の雲にかたぶかざ  
るに。壽堂の扉ながくとちて。北邙の地にうづ  
むことを。花の床をなにかざりけん。跡にとま  
りて主なし。親族はかなしめどもよしなし。旅  
に出てひとり心ざしぬ。楊國忠が他界にうつ  
りし。しらず人のうらみをなすことを。平章事  
の遠山にほろびし。おもひやりき身のかなし

みをふくみなんことを。彼東平王の舊里をおもふ墳上の風雨になびく。誠にさこそとあはれにこそは覺ゆれ。

おもひきや都を夜半にわかれ路の遠山野へに露きえんとは夫人のうまれたるは。庭におつる木葉の風にうごくがごとし。風やみぬればうごかず。死と思へば旅に出る行客のやどにとまるがごとし。こゝにわかれぬといへども。かしこにはうまれぬ。たゞ煩惱のうらみのみさる事をかなしみ。愚痴の心をしらざる事をうらむべし。はやく別れをおしまん人は。再會を一仙の國に約し。恩をこひんひとは。追福を九品のみに訪べし。

今更になになく覽末の露もとよりきえん身とはしらすや大磯のうら小磯のうらをはるくくとくれば。雲のかけはしなみのうへにうかみて。かさゝぎのわたしもありあまつ空にあそぶ。あはれさ

びしきたびの空かな。ながめなれてや人はゆくらん。

大磯やこいそのうらのうら風にゆくともしらすかへる袖哉  
さがみ川をわたりぬれば懷嶋に入。砥土が原を出。南のうらを見やればなみのあやをりはへて白き色をあらひ。北原をのぞめば草の緑そめなし淺萁さらせり。中に八松と云所あり。八千歳のかげにたちよりて。十八公の榮をさかりにす。

八松のやちよのかけに思ひなれてとかみか原に色も變らし  
固瀬川をわたりて江尻の海汀をすぐれば。江の中に一峯の孤山あり。孤山に靈社あり。江尻大明神と申。威験ことにあらたにして。御前を過る下り船は上分を奉る。法師はまいらぬときけば。そのこゝろをたづぬるに。むかし此邊の山寺に禪僧有て法華經を讀誦して夜をあかし口をくらす。其時女の形出來て夜ごとに聴



聞して。あくれば忽然としてうせぬれば其行方をしらす。僧これをあやしみて糸を搆てひそかに裾につけにけり。あくる朝に糸をたゞしてみれば。海土にひかれてかの山にいたりぬ。巖穴に入て龍尾につけたり。神龍顯形して後。僧にはちてこれを入すといへり。夫權現は利生のすがたなり。化現せば何ぞすがたにはばからん。弘經は讀誦の僧なり。經を貴みば何ぞ僧をいとはんや。ふかきちかひはうみにみてり波にたるゝあとは慈悲。躰は天に知れたり雲にひゞくこゑ。されども神慮は人しらす。きねがならはしにしたがひて。ふしおがみてとをりぬ。

江のしまやさして鹽路に跡たるゝ神は誓ひの深きなるへし路の池に高き山あり。山のみねかぶるにて貴からずといへども。恠石ならびゐて興なきにあらず。歩をおさへて石をみればむかしかの

堀うがちたる磐どもなり。うみも久しくなればひるやらんとみゆ。腰越といふ平山のあはひを過れば稻村といふ所あり。さかしき岩のかさなりふせる濱をつたひ行ば。岩にあたりてさきあがる浪のはなのごとくにちりかゝる。

うき身をはうらみて袖をぬらすともさしも波に心くたかん申の斜に湯井の濱に落着ぬ。しばらく休みて此所をみれば。數百艘の舟どもつなをくさりて大津のうらに似たり。千萬宇の宅軒をならべて大淀のわたりにことならず。御靈の鳥居の前に日をくらしして後。若宮大路より宿所につきぬ。月さしのぼりて夜も半に更にければ。をきたる老人おぼつかなくおぼえて。

都には日をまつ人を思ひをきてあつまの空に月を見る哉  
鶏鳴八聲のあかつき。旅宿一寢のゆめさめて。たち出見れば。月の光屋上の西にかたぶきぬ。

思ひやる都は西にありあけの月かたふけはいとこひしき  
十八日。此宿の南の軒ばに高き丸山あり。山の  
下に細き小川あり。峯のあらしこゑ落て夕の  
袖をひるがへし。灣水ひゞきそゞぎて夜の夢  
をあらふ。年比ゆかしかりつる所か。いつしか  
周覽相もよほし侍れども。いまだ旅なれば今  
日はむなしく暮しつ。相知たる人は一兩人侍  
るを頼て。物など申さんとおもふ程に。たがひ  
てなければ。いとゞたよりなくて。

頼めつる人はなきさのかたつ貝逢ぬにつけて身を恨みつゝ  
さらぬ人はおほけれども。うとければ物いは  
ず。其中にふるき得意ひとりありて。不慮の面  
談をとぐ。往事の夢に似たる事をあはれみて。  
次にむかしにかはる事をなげく。たがひに心  
懷を述て暫相語る。其後立出てみれば。此とこ  
ろの景趣は。うみあり山有水木たよりあり。廣  
きにもあらず狭にもあらず。街衢のちまたは

かた／＼に通せり。實に此聚おなじ邑をなす。  
郷里都を論じて望まづめづらしく。豪をえら  
び賢をえらぶ。門擲しきみをならべて地又賑  
り。をろ／＼將軍の貴居を垣間見れば。花堂た  
かくおしひらいて翠簾の色喜氣をふくみ。朱  
欄妙にかまへて玉砌のいしすへ光をみがく。  
春にあへる鶯のこゑは好客堂上の花にあざけ  
り。あしたををくる龍蹄は參會門前の市に嘶  
ゆ。論せず。本より春日山より出たれば。貴光  
たかく照て萬人みな瞻仰。土風塵をはらふ威  
驗遠く誠て四方こと／＼聞きにおそる。何  
ぞ況や。舊水源すみまさりて。清流いよ／＼遺  
跡をうるほし。新花榮鮮にひらけて。紫藤はる  
かに萬歳をちぎる。凡座制を帷帳の中に廻て。  
徵集郡國の間につゞめたり。しかのみならず。  
家室は扇をわすれて夜の戸をおしひらき。人  
倫は心を調てほこるともほこらず。愚政の至

り治りて見ゆ。

夜の戸ものときき宿にひらく哉臺らぬ月のさすにまかせて  
此縁邊に付ておろく歴覽すれば。東南の角  
一道は舟楫の津。商賣の商人百族にぎはひ。東  
西北の三方は高阜の山風のごとくに立廻て所  
をかざれり。南の山の麓に行て大御堂新御堂  
を拜すれば。佛像烏瑟のひかり瓔珞眼にかゞ  
やき。月殿畫梁のよそほひは金銀色をあらそ  
ふ。次にひがし山のすそに臨て二階堂を禮す。  
是は餘堂の蹕蹕して感歎をよびがたし。第一  
第二の重檐には。玉のかはら鴛の翅をとばし。  
兩目兩足のならび給へし臺は。金の盤鶴燈を  
かゝげたり。大方魯般意匠窮て。成風天に望む  
にすゞしく。毗首手功をつくせり。發露人の心  
にもよほす。見れば又山に曲木あり。庭に惟石  
あり。地形のすぐれたる佛室と言つべし。三壺  
雲に浮べり七萬里の浪池邊によせ。五城霞に

峙り十二樓の風階の上にふく。誤て半日の客  
たりうたがふらくは七世の孫に逢ん事を。夕  
にをよんで西に歸りぬ。鶴岡にとて鳩宮にま  
いらす。あけの玉がき金鏡に映じ。白妙のにし  
き幣風にそよめき。銀の鐙は朱檻をみがく。錦  
のつゞれははなにひるがへる。しばらく法施  
奉て瑞籬に候すれば。神女がうたの曲は權現  
垂跡の隱教にかなひ。僧侶の經のころは衆生  
成道の因縁を伸。彼法性の雲のうへに寂光の  
月老たりといへども。若宮の林の間に應身の  
風あふぎてあらたなり。

雲のうへにくもらぬかけをおもへとも雲より下に曇る月哉  
月のひかりにたゞすみて。石屋堂の山のこす  
るはるかにながめていぶせくかへりぬ。適下  
向なれば遊覽のこゝろざし切々なれども。經  
廻わづか一句にして。上洛すでに五更になり  
ぬれば。なごりのむしるをまきて出なん事を

いそぐ。時に晚鐘のうちおどろかせば。永しとおもひつる夏の日もけふはあへなく暮ぬ。一樹のかげの宿縁あさからず。拾謁のむつび芳約ふかき人あり。

きてもとへけふはかりなる旅衣あすは都にたちかへりなん返し。

旅衣なれきておしき名残にはかへらぬ袖もうらみをそする五月のみじか夜。時鳥の一聲の間にあけなんとすれば。菖蒲の一夜のまくら。再會不定のちざりをむすびて出ぬ。

かりふしのまくらなりとてあやめ草一よの契思ひわするな湯井の濱をかへりゆけば。なみのおもかげ立そひて。野にも山にもはなれがたき心ちして。なれにけりかへる濱路にみつしほのさすか名残にぬる、袖哉人をたのみてくだるほどに。たのむ人にはかにのぼりなんとすれば。身を無縁のさかひにすてゝ。こゝろざしを有縁のうちに

便宜あらば善光寺へ参るべ

きよしおもへり。とげばやと存れども。花京に老たる母あり。嬰兒にかへりて愚子をしたひ待。異郷にうかれたる愚子は。萬里をへだてゝ母をおもひをく。斗藪のためにいとまをこひて出しかども。我をすつとやうらむらん。無爲に入ば眞實の報恩なれども。有爲のならひはうとくにうらみあり。本よりおもはず東鄙の經廻を。今はいよゝゝ急ぐ西路の歸願。彼最後の今に逢事は先世の縁なれば。座したりとも違ひなん。違ともきたりなん。たゞちぎりの淺深に依てこゝろざしの有無にまかせたり。悲らくは親も老たり子も老たり。いづれかさきだちいづれかおくれん。たゞなげく所は母山の病木八旬の涯に傾て一房の白花いまだひらけざるに。子石のがれたる苦み。半白の波におぼれて一滴の雫いまだ汲ざること。朝に看夕にさだむ。こゝろざしとげずしてやみなば。佛に祈



り神に祈る。功ぞれいかゞせん。我さく佛神は孝養のために擁護のちかひをおこし。經論は報恩のために讃嘆のこと葉をのべたりと。壯齡のむかしは將來をたのみて天に祈りき。衰邁の今は先報をかへりみて身をうらむ。もしこれ不信の雲におほはれて感應の月顯れざるか。もしこれ過去の福因をうへずして現在の貧果を得たるか。先報によるべくは。佛のちかひたのむやいなや。誓願によるべくは。我孝なんどむなしき。信否ともに感じて妄恨みだりにおこる。天眼あひなだめて哀みをたれ給へ。悲母の目前に中懷を謝して白髪をおとし。愚子が身のうへには本望をとげず黒衣をきる事を。夢の間の筭はたとひ一旦の雪にもとめうしなふとも。覺路の蓮はかならず九品の露にひらきぞくらん。子養は子のこゝろざしにつくす。風樹は風の恨のこす事なかれ。

いかにせん結ふ此身をまたすして釈には、そのおつる山風東國はこれ佛法の初道なれば。發心の沙彌にとさらに修行すべき方なり。この故に木方初發の因地より萌して。金利極證の果門を聞かんとおもへり。觀夫けがらはしき濱路を過行だにも。白砂なをおもしろく見ゆ。まして極樂金繩のみにちにおもひやるもゆかしけれ。銀樹七重の風無苦のころをしらべ。紫蓮千葉の色に染。功德の池には水煩惱のあかをあらひ。善根のはやしには樹菩提のこのみをむすぶ。ゆるたる宮殿は十方に飛て居ながらすぐ。ことに利生を約諾す。生る人はみな說法集會の場にまじはりて無量の命を延年し。來るむかしは悉見佛聞法の室に誇て不退の樂に世會す。久遠世々の父母は珍本覺の如來に顯れ。過去生々の妻子はなづかしくて新來菩薩にむすびたり。法喜禪悅の味は口のうちにみち。端嚴殊

妙のかざりは身のうへにそなはれり。をよそ

三十一金の月胸にはれ。第一義空の水心にすめり。此故に無始來のねぶりはゆめながくさめ。六趣輪の冥は盲眼ひらけたり。彼無常念王の古郷を忍ぶちぎり娑婆にあつく。法藏因位の舊臣を顯れんこゝろざし我等にふかし。此に依て九品覺王の善政をたるゝ一念。奉公の輩ならびに平等引接の賞にあづかりて。諸天薩埵の僉議をなす。六賊重罪の犯却而皆空無漏の旨を奏す。七寶の高臺には四十八願の主五劫思惟のひかりをはなちて念佛のものをてらし。二脇片座には三十三尊大悲弘誓のあみをたれて苦海の沈没をすくふ。故に三世の佛の濟度にもたれる五逆の罪人も。願海不捨の舟に棹さして彼岸にわたり。十方土の淨刹にすてられたる此界の惡従も。大雄起世翅にかかりて西天に飛ん。あはれとく生れてみちに

入ばやな。

なみ風もみのりの聲をとく聞て見るめくるしき海を出はや迷ひきて又まよひこんかりのやになかくかへらん道にかへ覽東國にさまよひ行子あり。本のみやこを別てかりのやどにふせり。西刹に訪尋る母います。あはれ／＼もとめて彼國に導を其母といます。佛は三字の名號を子どもにさづけて。三因佛性のかくれたるをよび出し。十念の來迎を最期にちぎりて。十地證王の位につく。信力よはきものには他力をあたへてこれをすくふ。たをれふしたる赤子を親のいだがごとし。念緒つよき願緒にすがりてみづからすゝむ。驥につく蠅の千里に翔るがごとし。されども具轉(綱力)の浮身は一榮の肴にすゝめられて三毒の酒に酔ふす。世路の嶮難につかれて佛界の正道にまよはず。妻子をおもふ心冥にくらまされて心佛のひかりをへだてたり。菩提の鹿は

罪業の山にかくれて駄どもいまだ出す。煩惱の虎は功德のはやしを別て追どもかへらず。睡眠の閨にはあかつきのかねの聲うちおどろかせども諸行無常の告をさとらず。遊戲の床には暮の日さしおどろかせども分段の有爲のことはりわきまへず。老少不定の悲は眼にさへぎりて雲のごとくにさはげども心空にしておもはず。先後相違のわかれは耳にみちて風のごとくにひらけども聞つれなくしてあはれます。老たるは老たればいよ／＼餘命をおしみ。わかきは若ければ實に將來を期す。其間山水遡にながれて依に泉にかへる。風煙命滅て忽に冥途にまどひ。又貯持財はおしめどもになはず。養居僮僕は哭すれども隨はず。終に天使にめされて地獄に落ぬれば冥路山さかし。嬰兒のあゆみにたゞよひてひとり行黄泉水はやし。單己のわたりに溺て身をながす。

かなしきかなかなしきかな。獄卒の呵責にかかりて後悔魂をくだき。琰王の斷罪にをのゝきて前非の舌をまく。惡行はぢをあらはす鏡の中の影。自業のむかへは陳じがたし机上の文。嗚呼十八猛鬼の忿怒といかれる聲。天雷のおちかゝるがごとし。六十四眼の睚眦とにらめる。熟鐵のほどばしるに似たり。逃とすれども逃るにむなし刃のふるところ。よけんとすれどもよけられず焰にむせぶとき。心うきかな猛火の薪となりて萬億歲罪根山の林夏ひさし。寒嵐の水に沈て無量劫業報池の水春に別たり。我等が前罪こゝに謝せずば。後悔またいかげせん。こゝろあらん人たれかなしまざらんや。

見れはにやいたき心もなかるらんきくも身にたつ劍はの枝但極樂西方にあらずをのれが善心のますにあり。泥梨地のそこにあらずをのれが惡念の心

地にあり。彌陀うとき佛にいまさずみづからが本有の眞性にあり。獄卒しらぬ鬼にあらずみづからが所感の業嵐にあり。雪つもりて山をなす春の日にあたればきえてのこらず。金くだけて灰にまじる水に入て汰はうする事なし。罪雪ならば善心あらはれぬべし。まよへる時は目をふさぎてわが身をだにも見ず。さるときは眼をひらいて人の躰をみる。障子をへだてゝあなたは十萬億土とおもへども。ひきあけたればたゞ一間のうちなり。佛性の水煩惱の風に氷れども。おもひとけば水とは誰かしらざらん。貧とも嗟べからず。電泡の身にいくばくのなげきぞや。たのしめどもおごるべからず。幻化の世にはいくばくのあやまりぞや。たのしみは大憍慢のあだなり。あだはすなはち惡趣に引おとす。貧は又道心のさまたげならず則善所に引あげ。たのしみは先生の

怨敵なり。貪着身をしばらくして四生の牢獄にこむ。貧は今生の智識なり。愛欲心をゆるして三界の樊籠を出す。此故に世をいとふ人は沙門となづけてたのしめる人とす。我等八苦のやまひはおもけれども念佛のくすりにいへぬべし。名利の敵はうかゞふとも非人の身を敵とせじ。上界天人の快樂もこゝろにくからず。過去生々にいくたびかうけたる。國王大臣の果報もうらやましからず。流來世々のいくたびか得たる。六趣の栖はうとみはてたところなり。九品のみやこぞいまだ見ねば戀しけれ。こひしくばたれか參らざるべき。たまゝ人身をうけたるは梵天の糸に針をつけえたる時なり。佛法の教木龜眼の語に信じ得る時なり。これだにもありがたしと思はゞ。十方佛土に又ふたつなき一乗妙法に生れあひて。十惡をうとまず引接をたれたまふ阿彌陀佛を念じ



奉るは。口のあればたゞになへるたるか。耳のあればたゞに聞ゐたるか。あなあさましのやすさや。無始生死の間にちりの結縁つもりて泰山となる。露の功德たまりて蒼海とたへて。善根林をなし。機感時をえて。今生を生死の終りとし。當來を解脱のはじめとする人。此ときに生れて此縁にあひたり。故に慈父の長者は貧子どもの爲に福德の經を説て化一切衆生とこしらへ。みな皆令入佛道とよろこび。悲母の教主はよはき子共のために誓願を發して此願不満足と舌をのごひ。誓不成正覺と口をはく。こゝに知ぬ此南浮は西方の出門なりといふことを。道心はたとひかたからずとも。慙悔の箒をつかねて常に心を清めん。然ば則さくら花えだにこもり。春の候を迎て開なんとす。佛種胸にうづもれ。終のときに臨て宜くさざすべし。抑これは羈中の景趣にあらず。存

外のあさき狂言なり。然而魚にあらずば魚のこゝろをしるべからず。我にあらずば我心ざしを悟るべからず。駿蹄の千里にはするも。驚駘の咫尺に蹇くも。心ざしのゆくほどはいたる所たがはず。大鳳の雲にかけるをうらやみて。小鳥のまがきにあそぶばかりなり。此品家を出し始。道に入し時。身のあはれに催されて。人の嘲をかへり見ず。愚懷のためにこれに記す。他興のためにこれをかゝず。あざける人。あはれむ人。順逆の二縁ともに一佛土に生れて。一切衆生をすくはんとなり。

開くへき胸のはちすのたくひには春まつ花の枝にこもれるかはらしな濁るもすむも法の水ひとつ流とくみてしりなは

## 南海流浪記

## 道範阿闍梨

仁治三年<sup>寅</sup>七月十三日。本寺訴詔經二年<sup>一</sup>而不<sup>レ</sup>達。末院凶惡。忘<sup>ニ</sup>本末<sup>一</sup>而興盛之間。本寺衆徒企<sup>ニ</sup>發向<sup>一</sup>欲<sup>レ</sup>治<sup>ニ</sup>罰彼凶黨<sup>一</sup>之處。天火自然出。順風歟爾起。一院須臾成<sup>ニ</sup>灰燼<sup>一</sup>了。同月末。公家被<sup>レ</sup>召<sup>ニ</sup>當寺檢校<sup>一</sup>。卽八月始企<sup>ニ</sup>上洛<sup>一</sup>。卽被<sup>レ</sup>召<sup>ニ</sup>其惡行張本<sup>一</sup>之旨。注<sup>ニ</sup>進彼骨張十人交名<sup>一</sup>了。此十人付<sup>ニ</sup>長者<sup>一</sup>悉被<sup>ニ</sup>召上<sup>一</sup>了。同年拾月末。任<sup>ニ</sup>傳法院注進交名<sup>一</sup>。本寺宿老等廿六人。召符被<sup>レ</sup>下<sup>レ</sup>之。十一月十八日。參<sup>ニ</sup>六波羅<sup>一</sup>之處。卽各被<sup>レ</sup>預<sup>ニ</sup>武士<sup>一</sup>了。同下旬。日々有<sup>ニ</sup>兩方對問<sup>一</sup>。傳法院巧出<sup>ニ</sup>龜毛<sup>一</sup>。條々構<sup>ニ</sup>申詐僞非論<sup>一</sup>。雖然空花濫訴故。一々無實之旨顯中。如<sup>ニ</sup>對決<sup>一</sup>者。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>罪科<sup>一</sup>之由令<sup>ニ</sup>謳歌<sup>一</sup>之處。仁治四年正月之比。三十餘人悉可<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>配流<sup>一</sup>之由令<sup>ニ</sup>風聞<sup>一</sup>。爰宿老等都迷<sup>ニ</sup>子細<sup>一</sup>。忽亡<sup>ニ</sup>東西<sup>一</sup>。以<sup>ニ</sup>一兩惡行<sup>一</sup>口被<sup>ニ</sup>押懸<sup>一</sup>。宿老者不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>一言問答<sup>一</sup>。

就<sup>ニ</sup>兩方<sup>一</sup>理非可<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>糺明<sup>一</sup>者。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>刑罪<sup>一</sup>科。是只所詮當<sup>ニ</sup>彼一院磨滅時連<sup>一</sup>。感<sup>ニ</sup>此宿老等最惡之業<sup>一</sup>歟。唯察<sup>ニ</sup>因果理<sup>一</sup>勿<sup>レ</sup>生<sup>ニ</sup>怨恨思<sup>一</sup>矣。同四年正月廿五日。各被<sup>レ</sup>預<sup>ニ</sup>配流國武士<sup>一</sup>了。道範流<sup>ニ</sup>讃岐<sup>一</sup>守護所不<sup>ニ</sup>在京<sup>一</sup>間。付<sup>ニ</sup>淡路守護所四郎左衛門尉<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>下國<sup>一</sup>之由有<sup>ニ</sup>其沙汰<sup>一</sup>。卽正月卅日。出<sup>レ</sup>都宿<sup>ニ</sup>久我<sup>一</sup>。二月一日乘船。宿<sup>ニ</sup>神崎橋下<sup>一</sup>。過<sup>ニ</sup>淀渡<sup>一</sup>之時。遙花洛之方ヲ瞻望シテ。  
都をは霞の餘所にかへり見ていつち行らん湊の川なみ  
同二日。神崎ヲ立。筒井ニ至ル。路間五里。小屋福原ヲスグ。  
同三日。筒井ヲ立。石屋渡ヲ渡テ宿<sup>ニ</sup>石屋<sup>一</sup>。路間六里餘。スマタルミヲスグ。スマノ浦ノ氣色。マコトニ月ノ名所トミエタリ。東南ノ氣色霽テ。出<sup>レ</sup>山之清光可<sup>レ</sup>望。西北ノ海遠シテ。入<sup>レ</sup>浪之曉月可<sup>レ</sup>見。

なかれ行身にしあらすはすまの浦とまりて夜はの月は見てまし  
同日。夕方巡<sup>ニ</sup>見石屋并繪嶋。青巖之形。綠松之  
鉢。碧潭之色。晚嵐之聲。其感興忘<sup>ニ</sup>愁緒ヲ了<sup>一</sup>。  
卽繪嶋ノ明神詣シテ法施法樂。

見るはかりいか、語らむ繪嶋渦むへしを神はこゝにすみける  
四日。石屋ヲタチ乗船。瀧ノ口ニイタリテヲ  
ル。海路七里。海路之様。西ハ淡路嶋。臨行バ奇  
巖滑石宛モ如<sup>レ</sup>見ニ山水。東千里。青山ガモハル  
カニ遠シ。其中ニ眺望末ニアタリテ。幽ニ高野  
山ミユ。山門寺中ノコトナムドモオモヒヤラ  
レテ。アハレニオボエテ。舟中ノ人々ニアスヨ  
リハ高野ノミユル所ハ有間數歟ト問バ。淡路  
山中ニ入候ナバ高野ノミユル所ハヨモ候ハジ  
トイフヲ聞テ。

はなれくる高野の山の霞をもけふはかりやはな<sup>ハ</sup>かめ暮さん  
同日。船ヲ下テ。陸地三里行テ。淡路國府ニ至<sup>ハ</sup>  
テ中一日ヲ經タリ。石屋宿ニテハ淡路配國人

同道同宿之間。互世出世之事等相談シテナグ  
サム事アリ。件人ハ瀧ノ口ニトバマリヌ。又此  
八木ノ宿ヨリハ只同朋一兩輩許也。羈旅ノ思  
マコトニ心ボソシ。

さらぬたにれさめおほかる草枕まともむ夢を吹嵐哉  
六日。國府ヲ立三里行テ。フクラノトマリニ至  
ル。風あしくして三ケ日逗留。西風ハゲシク時  
時雪フバキスサマジク物アハレ也。

興津風ふくらかいそにひかすへてならはぬ浪にぬる、袖哉  
行さきもわかふるさとにあらなくに爰を旅とは何急くらん  
十日。フクラヲタチ阿波ノ戸ヲワタリテ佐伊  
田ニナル。海路三里餘。シマ<sup>ノ</sup>入江々々ノ有  
様。悅<sup>レ</sup>目養<sup>レ</sup>意。舟ヲヲリテ阿波國坂東郡大寺  
ニ宿ス。

十一日。大寺を立て。大坂をして。讃岐あいの  
中の山なる大津賀ニイタル。路間九里餘。  
十二日。サヌキノ國府ニイタル。路間六里。廳

沙汰トシテ有<sub>二</sub>祇候。次日六里傳馬。

十三日。國府ヲ立。讃岐ノ守護所長雄二郎左衛門ノ許ニ至ル。路間二里。次朝淡路使者カヘル。淡路ニ留る人ノ許ヘ。其國ヨリ以來。多ノ山海ヲ渡流浪之事。并老後流刑之事。返々モ不<sub>レ</sub>計之由ナムド申テ。

天か下なとすみそめの袖ならんおひのなみにも流れぬる哉  
十四日。守護所之許ヨリ鵜足津ノ橋藤左衛門高能ト云御家人之許ヘ被<sub>レ</sub>預。

十五日。在家五六丁許引上リテ。堂舎一字僧房少々有所ニ移シスヘラル。此所地形殊勝。望<sub>レ</sub>東孤山擎ニ夜月ニ勸ニ月輪觀之思。顧<sub>レ</sub>西遠嶋含ニ夕日ニ催ニ日想觀之心。後松山笠ニ海中。至ニ前湖滿時ニ砌近指入ル。

さひしさないかてたへまし松の風浪も音せぬすみか也せは  
サテ常ニ後ノ山ニ登リテ。海上嶋々ヲ眺望。爲<sub>二</sub>海中鱗類ニ作ニ自性能加持之法。有<sub>レ</sub>時浦ニ

出テ昔向山々ヲ問ヘバ。備前小嶋。備中。備後迄見え渡ル。小石ニ光明眞言等ヲ出テ海中ニ入ル。寶篋印ダラニヲ誦シテ鱗類ヲ離苦海ニ廻向ス。或時山ニノボリテミワタシテ。

うたつかたこの松かけに風立は嶋のあなたもひとつ白波  
三月廿一日。善通寺ニ詣テ大師聖跡ヲ巡禮ス。金堂ハ二階七間也。青龍寺ノ金堂ヲ被<sub>タル</sub>摸トテ。二階ニ各今少引入リテモ。コシアルガ故。打見バ四階大伽藍。是ハ大師御建立。于<sub>レ</sub>今現在せり。御作丈六藥師。三馬四天王像イマス。皆埋佛。後壁ニ又藥師三馬半出ニ埋作ラレタリ。七間講堂ハ破壊後今新造營。五間常堂同新造立。大師御建立ニ重寶塔現存。本五間。令<sub>ニ</sub>修理<sub>ニ</sub>之間。加<sub>ニ</sub>前廣廂一間<sub>ニ</sub>云々。於<sub>ニ</sub>此内<sub>ニ</sub>奉<sub>レ</sub>安置御筆御影。此御影ハ大師御入唐之時自圖<sub>レ</sub>之奉<sub>レ</sub>預<sub>ニ</sub>御母儀<sub>ニ</sub>云々。同等身像云々。大方様如<sub>ニ</sub>普通御影<sub>ニ</sub>。但於<sub>ニ</sub>左之松山ノ上<sub>ニ</sub>釋迦如來影現形



像有<sup>レ</sup>之云々。凡此善通寺ノ本ハ四面各二町。其  
内種々堂舍寶塔。灌頂院。護摩堂。嚴重羅列。今  
ハ皆破壊シテ纔礎石許在<sup>レ</sup>之。御筆之額二枚  
有<sup>レ</sup>之。皆善通之寺トアソバサレタリ。其外大  
寶樓閣ダラニアソバシタル額二枚有<sup>レ</sup>之。皆破  
損云々。抑善通之寺ハ。大師御先祖俗名。卽爲<sup>ニ</sup>  
寺號<sup>一</sup>云々。破壊之間。大師修造建立之時。不  
被<sup>レ</sup>改<sup>ニ</sup>本號<sup>一</sup>歟。金堂之西有<sup>ニ</sup>一直路<sup>一</sup>。一町七  
反許者。則自<sup>ニ</sup>寺中<sup>一</sup>參<sup>ニ</sup>御誕生所<sup>一</sup>之路也。則  
參詣拜<sup>ニ</sup>スレバ<sup>一</sup>之。正御誕生所ニハ石高ク廣疊  
タリ。今如法經奉<sup>レ</sup>納<sup>レ</sup>之。七重石塔有<sup>レ</sup>之。大樹  
少々有<sup>レ</sup>之。拜見之間。戀慕恭敬。催<sup>レ</sup>淚拆<sup>レ</sup>膽。

高野山岩のむろ月に澄月のこふもとより出けるかさは

此御誕生所ハ。西方ニ五岳山ト云テ。五佛之高  
山ノアル其麓也。同日午刻。於<sup>ニ</sup>講堂<sup>一</sup>有<sup>ニ</sup>法花  
講<sup>一</sup>。大師御報恩云々。其後有<sup>ニ</sup>童舞<sup>一</sup>云々。其日反<sup>ニ</sup>  
晚景<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>還向<sup>一</sup>。卽通<sup>ニ</sup>夜御影堂<sup>一</sup>云々。翌日字

足津ニ歸。寛元元年九月十五日。善通寺移住ノ  
寺僧等。兼テ大師御誕生所傍ニ庵室ヲ構テタ  
マヘリ。同月廿一日。大師至<sup>ニ</sup>御行道所<sup>一</sup>。世號<sup>ニ</sup>  
世坂參詣<sup>一</sup>。其路嶮岨嵯峨。老骨雖<sup>ニ</sup>攀躋<sup>一</sup>。只人ニ  
タスケラレテ登イタル。此行道ノ路ニハ于<sup>レ</sup>今  
草不<sup>レ</sup>生。清淨寂寞タリ。南北諸國皆見テ眺望  
疲<sup>レ</sup>眼。此行道所ハ五岳中岳。我拜師山西岫也。  
大師此處ニ觀念經行之間。中岳青巖綠松。已釋  
迦如來乘<sup>レ</sup>雲來臨影現タマフ。大師拜ミ玉フ  
故。云<sup>ニ</sup>我拜師山ト<sup>一</sup>也。此行道所ニ數刻。大佛  
頂寶篋印等陀羅尼ヲ滿眼ノ所<sup>レ</sup>及海生山獸等  
ノ養生ニアツ。如來影現事貴目出覺テ。

わしの山常にすむなる夜半の月來りて照す峯にそありける  
十月之比南大門ニ出テ。南方名山等眺望。南大  
門前ノ路。弘三丈五尺。長八町。左右ニ率都婆  
多立<sup>レ</sup>之。其門東脇ニ古大松アリ。寺僧云。昔西  
行此松ノ下ニ七日七夜籠居テ。

ひさに經てわか後の世をとへよ松跡忍ふへき人もなき身そ  
とよめるによりて。此松ヲハ西行ガ松ト申也  
ト申ヲキ、テ。

契り置て西へ行ける跡にきてわれもおほりなまつの下風

寛元二年<sup>甲辰</sup>正月之比。當寺ノ童舞裝束被レ調事

并會ノ日發願文事。同六月十五日夜。多度郡田

所入道<sup>號彌池入道隨佛</sup>夢想ニ云。御誕生所ノ石壇南邊

ニ大ナル蓮花生タリ。莖ノ長六尺許。大衆合

許。初ハ含テ漸開。其色其香美甚妙也。諸人集

會シテ拜<sup>レ</sup>見之。隨佛作<sup>レ</sup>奇特之想。問云。是何

ナル蓮花ゾ如<sup>レ</sup>是大ニ妙ナル。人答曰。是ハ高

野上人御房蓮花云々。合掌瞻得シテ夢覺了。同

八月之比。淡路國ナル人ノ許ヘ修行者ノ便ニ

文ツカハス狀ニ。此離山三年ニナリ。在國兩歲

ニナル事。本山戀慕。羈旅艱難。定同心歎。抑其

淡路嶋ハ。高野ノ大門マデチカ<sup>ハ</sup>トミエ侍

レバ。其國ニテモ南山ハサハ<sup>ハ</sup>ト見侍ラム。

浦山敷コトトテ。

君はなをみてやなくさむはなれぬるたかのの山の峯の白雲

サテモ又此居所ハ大師御誕生ノ座跡ナレバ。

御建立ノ伽藍于<sup>レ</sup>今少々現存。就中大師御眞筆

ノ御影常ニ拜見。是愁之中ノ喜ナル由申テ。

よに出て、みつからとむる影よりそ入にし月の形をも見る

以上兩首の返し。淡路。

高野山みれの白雲跡たえてむなしき空に雨そこほる、  
入月もひかりや共にならふらむみつからとめし影にうりて

寛元三年十月廿一日。出雲國配學圓房阿闍梨

法性延自ザリ。已死門之命誓以ニ廿一日ニ爲<sup>レ</sup>開

眼之期。是大師引接炳然歎。同十二月十八日。

自ニ本山ニ告<sup>レ</sup>遺之。聞<sup>レ</sup>之周章悶亂。悲泣哀慟。

彼阿闍梨者自ニ少年ニ同學也。交如<sup>レ</sup>芝蘭。昵同ニ

膠漆。加<sup>レ</sup>之受<sup>レ</sup>傳法灌頂於先師法眼和上位。既

爲<sup>レ</sup>祕密血脉一門。顯密因緣旁以深。離別哀傷

豈以淺乎。仍自ニ同十九日ニ始<sup>レ</sup>行阿彌陀護摩ニ

五十ヶ日。泣資<sup>ニ</sup>彼菩提。其後自行ニ念誦等ニ之

時。爲三廻向隨一。是爲<sup>レ</sup>蒙<sup>三</sup>彼還來引接<sup>二</sup>也。彼安藝無常。此出雲電光。哀傷一意。

かた／＼のもととしつくは散ぬ也いつか我身のすゑの白露

同年十二月十六日。高野淨菩提院阿闍梨<sup>尙禪房</sup>。覺

者。十一月廿五日逝去之由。同朋來テ告グ。未

聞<sup>レ</sup>終其詞。嗚咽悶絕。彼阿闍梨者。花王法水

稟源禪林教風傳心因之事。相教相互聞<sup>三</sup>蒙霧<sup>二</sup>。

世間出世俱無<sup>三</sup>内外<sup>二</sup>矣。彼賢哲者愚質<sup>二</sup>紀之

法弟也。而冥途前後。泣而有<sup>レ</sup>餘。凡一山學徒

滅<sup>三</sup>法燈<sup>二</sup>失<sup>三</sup>惠日<sup>二</sup>。爲<sup>レ</sup>之如何々々。筆與<sup>レ</sup>淚相

和記<sup>レ</sup>之。

たかの山流れし水もかれぬめり草木はいかいたれなきさむ

寶治二年<sup>申戊</sup>四月之比。依<sup>三</sup>高野二品親王仰<sup>一</sup>奉

摸<sup>三</sup>當寺御影<sup>二</sup>。此事去年雖<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下<sup>三</sup>御使<sup>二</sup>。當國

無<sup>三</sup>淨行佛師<sup>二</sup>之由依<sup>三</sup>申上<sup>二</sup>。今年被<sup>レ</sup>下<sup>三</sup>佛師成

祐<sup>鏡明房</sup>。奉<sup>レ</sup>摸<sup>三</sup>寫之<sup>二</sup>。所詣佛師四月五日出京。九

日下<sup>三</sup>着堀江津<sup>二</sup>。同十一日當寺參詣。同十三日

作<sup>三</sup>紙形<sup>二</sup>。當日於<sup>三</sup>御影堂<sup>二</sup>。佛師按<sup>三</sup>梵網十戒<sup>二</sup>。其後始<sup>三</sup>紙形<sup>二</sup>。自<sup>三</sup>同十四日<sup>二</sup>圖繪。同十八日終<sup>三</sup>其

功<sup>二</sup>。所<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>摸<sup>三</sup>御影<sup>二</sup>。其御影形色<sup>毫釐</sup>毛無<sup>レ</sup>違<sup>二</sup>

本御影<sup>二</sup>云々。同十八日依<sup>三</sup>寺僧評議<sup>二</sup>。今此佛師

改押<sup>三</sup>本御影之裏<sup>二</sup>加<sup>三</sup>御修理<sup>二</sup>云々。已上此等間

不<sup>レ</sup>出<sup>三</sup>御影堂<sup>二</sup>。佛師下着之時。<sup>院主絹一疋</sup>三昧各淺

黃一切給<sup>レ</sup>之。凡此御影者。當寺之古老相<sup>レ</sup>傳

之。大師御入唐時。爲<sup>三</sup>御母儀<sup>二</sup>自摸<sup>三</sup>置我影像

ヲ。爲<sup>三</sup>告面之孝<sup>二</sup>御ス云々。

此御影堂上洛事。

承元三年隱岐院御時。立佐大臣殿當國司之間。

依<sup>三</sup>院宣<sup>二</sup>被<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>迎。寺僧再三曰。上古不<sup>レ</sup>奉<sup>レ</sup>出

御影堂<sup>二</sup>之由。雖<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>言<sup>三</sup>上子細<sup>二</sup>。數度依<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>

仰下。寺僧等頂<sup>三</sup>戴之<sup>二</sup>。上洛御拜見之後。被<sup>レ</sup>奉

摸<sup>レ</sup>之。繪師御下向之時。生野六丁免田寄進

云々。嘉祿元年九條禪定殿下攝錄御時奉<sup>レ</sup>拜<sup>レ</sup>之

又摸<sup>三</sup>寫之<sup>二</sup>。御下向之時。免田三丁寄進云々。

同年六月二日御上洛。同十五日高野參着。即御拜見御歡喜云々。同十八日御報書云々。御影無爲ニ奉<sub>レ</sub>渡事返々悦入候。宿善開發數及ニ落涙。心中可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>察<sub>レ</sub>之云々。

同年十月廿七日。伊與國寒川地頭小河六郎祐長建<sub>二</sub>立

一堂。三尊供養導師勤<sub>レ</sub>之。彼路頭ニ比女ノ八幡ト云所アリ。讃岐ノ内。其所ニ大楠ノ木ノ本ヲ半出ノ阿彌陀佛ニ造テ堂ヲツクリオホヘリ。其木ノ末ハ大ニサカヘテカレヌ。

楠の木も本のさとりをひらきつゝ佛の身とも成にける哉

同廿八日舞樂。同廿九日。還向ノ次ニ琴曳ト云宮マウデ。讃岐内此宮ハ昔八幡大菩薩筑紫ヨリ此

處ニヲチツキテ。京ノ八幡ヘトワタラセ給。其

御舟ノ舶ト御琴トヲ宮内ニツクリコメタリ。

サテ琴曳ト云。山ガラ京ノヤハタノ山ノ形也。

三面ハ海也。殊勝地形。

松風にむかしのしらへかよひ來て今にあとある琴ひきの山

同年十一月十七日。尾背寺參詣。此寺大師善通寺建立之時杣山云々。本堂三間四面。本佛御作藥師。三間御影堂。御影并七祖又天台大師影有<sub>レ</sub>之。同十八日還向。依<sub>二</sub>路次<sub>一</sub>參<sub>二</sub>詣稱名院<sub>一</sub>。眇眇松林中有<sub>二</sub>九品庵室<sub>一</sub>。本堂五間。彼院主念々房持佛堂。松間池上地形殊勝。彼院主他行之旨。追<sub>二</sub>送之<sub>一</sub>。

九の草の庵と見しほとにやかてはちすのうてな成けり  
九つの草の庵もとめをきし心いさなへうみのにしまで

念々房返。

むすひおく草の庵のかひあれば今ははちすのうてなとを聞  
九つの草の庵にとゝめけん君か心をたのむわか身そ

稱名院への愚狀ヲ三品房ノ許へ相送タリ

ケル。其返狀ニ云。

善通寺御札。加ニ拜見一令ニ返上ニ候。彼歴覽之時  
不ニ參會ニ候之條。生前遺恨候。猶々御光臨候。

今我願充滿。衆望亦可<sub>レ</sub>足候者也。兼又二首御詠。萬感無<sub>レ</sub>極候。捧ニ五首之腰折。述ニ千廻之心



緒二而已。

いか、して君かみのりのもとし火を暗きみ山の庵にてらさん  
君かたのむ寺のむかしの座こそ此山さにとすみかしめけれ  
君ならて誰か覺らん草の庵やかて蓮の臺成とは

九品の蓮の露にやとりけん月の光を見ぬそかなしき

と、めけむ心の底をしるへにて此山里にすみ人もかな

當寺者。弘法大師御建立舊跡云々。便宜之時。

以<sub>レ</sub>此旨<sub>二</sub>可<sub>下</sub>令<sub>二</sub>洩達<sub>一</sub>給<sub>上</sub>。恐々謹言。

十二月十四日

三品判

十一月十八日。參詣瀧寺。<sub>坂十</sub>此寺東向高山

有<sub>レ</sub>瀧。古寺礎石等處々有<sub>レ</sub>之。本堂五間。本佛

御作千手云々。

一誕生院緣起之事。

右當所者。弘法大師御誕生處也。昔定有<sub>二</sub>精舍<sub>一</sub>。

宛如<sub>二</sub>釋迦如來淨飯王宮生處塔<sub>一</sub>。而五百廻ノ星

霜相遷之間。唯遺<sub>二</sub>基跡<sub>一</sub>。尙無<sub>二</sub>礎石<sub>一</sub>。于<sub>レ</sub>爰行竝

上人者。寛元二年木像御影建立之時。卽與<sub>二</sub>寺

僧<sub>二</sub>共評議シテ<sub>一</sub>。於<sub>二</sub>此御誕生所<sub>一</sub>建<sub>二</sub>立<sub>一</sub>一堂。可

レ安<sub>二</sub>置之<sub>一</sub>云々。因<sub>レ</sub>茲或勵<sub>二</sub>自力<sub>一</sub>。或唱<sub>二</sub>勸進<sub>一</sub>。  
以<sub>二</sub>今年建長元年己<sub>一</sub>月十日<sub>一</sub>。手斧始。同二月  
二日棟上。大公沙彌陀佛。同年五月一日<sub>戊寅時</sub>  
有<sub>二</sub>鎮壇<sub>一</sub>。阿闍梨道範。

以<sub>二</sub>我功德力<sub>一</sub>。大師加持力。及以<sub>二</sub>法界力<sub>一</sub>。  
願我成<sub>二</sub>吉祥<sub>一</sub>。今此一伽藍。奉<sub>二</sub>慈氏下生<sub>一</sub>。  
興<sub>二</sub>隆諸佛法<sub>一</sub>。利<sub>二</sub>益諸衆生<sub>一</sub>。

大勸進阿闍梨道範

建長元年五月廿一日。此諸國流人赦免之宣下  
有<sub>レ</sub>之。同六月八日件院宣并六波羅下知狀及長  
者御房御書狀來着。仍卽可<sub>二</sub>歸洛<sub>一</sub>之處。自<sub>二</sub>同  
十二日<sub>一</sub>。本病更發不<sub>レ</sub>能<sub>二</sub>出行<sub>一</sub>。經<sub>二</sub>四十餘日<sub>一</sub>。  
付<sub>二</sub>小減<sub>一</sub>。臨<sub>二</sub>歸山之期<sub>一</sub>。七年之間。世出世之事  
無<sub>二</sub>内外<sub>一</sub>。申談之人之許へ申遣云。

なとせのたえぬむくひの末の露同しはちすの上に遊ばん  
彼返報云。七ヶ年之祇候。一生中之大幸也。唯  
賴者世々欲<sub>レ</sub>蒙<sub>二</sub>御引接<sub>一</sub>云々。

末の露思ひのため（身にしあれと）ふことの葉にかゝらさうめや  
追申。御歸山之後。毎年一度可レ令二登山一之志  
深し。

たのめなきし法のしるへの燈のかされて照す峯をたつれん

同七月廿二三日之比。痼病得二小減一。欲二歸山一

之處。當國白峯寺院主靜圓（備後阿圍梨）當年宿願入壇

所望事。近々被二歎申一之旨。病後氣力雖レ不レ可

堪レ三作業。此寺國中清淨蘭若。崇德院法皇御靈

廟也。此阿圍梨年記六十六。練行慈仁之器也。

仍大師御門流於二此寺一永代流傳事。尤可レ爲二

興法萬人方便一之故。同七月廿九日立二善通寺一

到二彼白峯寺一。（路五）八月四日（天宣房宿念云々）入壇傳法。色

衆十人云々。同六日彼寺本堂修理供養曼陀羅

供。大阿闍梨勒レ之。此間雖二厓弱一不レ虧二法則一。

同七日立二白峯一至二白山一。（路六）同八日立二白山一

至二引田一。（路六）同九日立二引田一越二阿波大坂一至二

紀津一。（路六）即日酉始乘船。渡二牟野口村一移居。（海路）

四里。卽子時許至二淡路國賀集一。一里。同十四日

立二賀集一至二山羅一。七里。同十五日立二山羅渡戸一。（又云加多渡）

海路。至二大谷一。（亥時。陸地）同十七日登山。五里。即日

沒後開二御影一拜二見慈顏一。頂二戴御物等一。拭二歡

喜淚一。着二住房一云々。

同廿一日。奥院參詣。病身忘命參詣之處。上下

無爲不レ可一云々。

此事寫之外種々事等多之。右筆不レ遑。仍略之。

殊以爲二肝要一之所許二書脫一。于レ時正嘉第二

曆仲秋上旬之候。聊爲二後摸一之執筆了。巧披見

候。可レ被レ唱二念佛一云々。

私云。建治三年二月十一日書寫了。

右南海流淚記以正智院道範自筆本書寫校合畢

群書類從卷第三百三十一

紀行部五

東關紀行

前河内守親行

齡は百とせの半に近づきて。鬢の霜漸冷しといへども。なすことなくして徒にあかしくらすのみにあらず。さしていづこに住はつべしともおもひさだめぬありさまなれば。彼白樂天の身は浮雲に似たり首は霜ににたりと書給へる。あはれにおもひあはせらる。もとより金帳七葉のさかへをこのます。たゞ陶潜五柳のすみかをもとむ。しかはあれども。みやまのおくの柴の庵までもしばらく思ひやすらふ程なれば。愁に都のほとりに住居つゝ。人竝に世にふる道になんつらなれり。是即身は朝市にあ

りて心は隱遁にあるいはれなり。かゝるほどに。おもはぬ外に。四條仁治三年の秋八月十日あまりの比。都を出て東へ赴く事あり。まだしらぬ道の空。山かさなり江かさなりて。はるく遠き旅なれども。雲をしのぎ霧を分つゝ。しばしば前途の極なきにすゝむ。終に十餘の日數をへて鎌倉に下り着し間。或は山館野亭の夜のとまり。或は海邊水流の幽なる砌にいたるごとに。目にたつ所々。心とまるふしぐををかき置て。わすれず忍ぶ人もあらばをのづから後のかたみにもなれとてなり。東山の邊なる住家を出て。相坂の關うち過るほどに。駒引わた

る望月の比も漸近き空なれば。秋ぎり立わたりて。ふかき夜の月かげほのかなり。木綿付鳥かすかにをとづれて。遊子猶殘月に行けん函谷の有様おもひいでらる。むかし蟬丸といひける世捨人。此關の邊にわらやの床を結びて。常は琵琶をひきて心をすまし。大和歌を詠じておもひを述けり。嵐のかせはげしきをわびつゝぞすぐしける。ある人の云。蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに。此關のあたりを四宮河原と名付たりといへり。

いにしへのわらやの床のあたり迄心をとむる相坂の關

東三條院<sup>登子</sup>石山に詣て還御ありけるに。關の清水を過させ給ふとてよませ給ひける御歌。あまたひゆきあふ坂の關水にけふをかきりの影そかなしきときこゆるこそ。いかなりける御心のうちにかと哀に心ぼそけれ。關山を過ぬれば。打出の濱粟津の原なんときけども。い

まだ夜のうちなれば。さだかにも見わからず。昔天智天皇<sup>三十九代</sup>の御代。大和國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都うつりありて。大津の宮をつくられけりとさくにも。此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり。

さゝ波や大津の宮のあれしより名のみ残れるしかのふる郷曙の空になりて。せたの長橋うち渡すほどに。湖はるかにあらはれて。かの滿誓沙彌が比叡山にて此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて。漕行舟のあとのしら波。誠にはかなく心ぼそし。

世中を漕行舟によそへつゝなかくし跡を又そなかわるこのほどもも行過て。野路と云所にいたりぬ。草の原露しげくして。旅衣いつしか袖のしづくところせし。

東路の野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覽しの原と云所をみれば。西東へ遙にながき堤

古今雜下  
あふ坂の  
風のさむ  
くれしと  
れはわひ  
つゝそぬ  
る  
御融院女  
圓一條院  
母后法興  
院殿二女  
拾遺  
世中をな  
へんあた  
はらけこ  
き行舟の  
あとのし  
らなみ



あり。北には里人住家をしめ。南には池のおもて遠く見えわたる。むかひの汀。みどりふかき松のむら立。波の色もひとつになり。南山の影をひたさねども青くして混糺たり。洲崎所々に入ちがひて。あしかつみなどおひわたれる中に。をしかものうちむれてとびちがふさま。あしでをかけるやうなり。都をたつ旅人。この宿にこそとまりけるか。今はうちすぐるたぐひのみ多くして。家居もまばらに成行など聞こそ。かはりゆく世のならひ。飛鳥の河の淵瀬にはかざらざりけめとおぼゆ。

行人もとまらぬ里となりしより荒のみまざるのちの篠原

鏡の宿にいたりぬれば。昔なゝの翁のよりあひつゝ。老をいとひてよみける歌の中に。鏡山古いさたちよりてみてゆかむ年へぬる身は老やしぬるといへるは。此山の事にやとおぼえて。宿もからまほしく覺えけれども。猶おくざ

まにとふべき所ありてうち過ぬ。

たちよらてけふは過なん鏡山しらぬ翁のかけはみすともゆき暮ぬれば。むさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ。まばらなるとこの秋かせ。夜ふくるまに身にしてみて。都にはいつしか引かへたるこゝちす。枕にちかきかねの聲。曉の空にをとづれて。かの遺愛寺の邊の草の庵のねざめもかくや有けむと哀なり。行末とをきたびの空。思ひつゞけられていといたう物がなし。

都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわひぬ床の秋風この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに。おいその杜と云杉むらあり。下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行するも。はかなく移る月日なれば遠からずおぼゆ。

かはらしな我もとゆひに置霜も名にしおいその杜の下草音にきゝしさめが井を見れば。陰くらき木のしたのいはねより流出る清水。餘り涼しきま

ですみわたりて。實に身にしむばかりなり。餘熱いまだつきざる程なれば。往還の旅人多く立よりてすゞみあへり。斑婕妤が團雪の扇。秋風にかくて暫忘れぬれば。する遠き道なれども。立さらん事はものうくて更にいそがれず。かの西行が道の<sup>新</sup>へに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまりつれとよめるも。かやうの所にや。

新古今雜

道のへの木陰の清水むすふとてしはしすゝまぬ旅人をなき

人すまぬ

かしは原と云所をたちて美濃國關山にもかゝ

ふはのせ

りぬ。谷川霧の底に音信。山風松の梢に時雨わ

ひさしの

たりて。日影もみえぬ木の下道あはれに心ぼ

あきの風

そし。こえはてぬれば不破の關屋なり。萱屋の

そせい

板底年經にけりとみゆるにも。後京極攝政殿

みてのみ

の荒にしのはたゝ秋の風とよませ給へる歌

はなてこ

おもひ出られて。此うへは風情もめぐらしが

とにせんと

たければ。いやしきことの葉をのこさんも中

中におぼえて。爰をばむなくうち過ぬ。くろせ川と云所にとまりて。夜更るほどに川端に立出てみれば。秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて。照月なみも數みゆばかりすみ渡れり。二千里の外の古人の心遠く思ひやられて。旅のおもひいとゞをさへがたくおぼゆれば。月のかげに筆を染つゝ。花洛を出て三日。株瀬川に宿して一宵。しばゝ幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ。かつゝ遠情を先途千里の雲にをくるなど。ある家の障子に書つくるついでに。

しらさりき秋の牛の今宵しもかゝる旅れの月をみるとは

かやつ東宿の前を過れば。そこらの人あつ

まりて。里もひゞくばかりにのゝしりあへり。

けふは市の日になむあたりたるとぞいふな

る。往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家づと

も。かのみてのみや人にかたらんとよめる花

のかたみには。やうかはりておぼゆ。

花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる家つと

尾張國熱田の宮にいたりぬ。神垣のあたりち  
かければ。やがてまいりておがみ奉るに。木立  
年ふりたる杜の木の間より夕日のかげたえだ  
えさし入て。あけの玉垣色をかへたるに。木綿  
四手風にみだれたることから。物にふれて神  
さびたる中にも。ねぐらあらそふ鷺むらのか  
ずもしらず梢にきゐるさま。雪のつもれるや  
うに見えて。遠く白きものから。暮行まゝにし  
づまり行聲ごゑも心すぐく聞ゆ。ある人のい  
はく。此宮は素盞鳥尊なり。はじめは出雲國に  
宮造ありけり。八雲たつといへる大和言葉も  
是よりはじまりけり。其後景行天皇の御代に  
この砌に跡をたれ給へりといへり。又いはく。  
此宮の本跡は草薙と號し奉る神劔也。景行の  
御子日本武尊と申。夷をたいらげて歸り給ふ

時。尊は白鳥となりて去給ふ。劔は熱田にとま  
り給ふともいへり。<sup>六十六代</sup>一條院の御時大江匡衡と  
いふ博士有けり。長保のすゑにあたりて當國  
の守にて下りけるに。大般若を書て此宮にて  
供養をとげける願文に。吾願已にみちぬ。任限  
又みちたり。古郷にかへらんとする期いまだ  
いくばくならずとかきたるこそ。哀に心ばそ  
く聞ゆれ。

思ひ出のなくてや人のかへらまし法の形見をたむけなすは  
この宮をたち出。濱路におもむくほど。有明の  
月かげふけて。友なし千鳥ときぐをとづれ  
わたれる。旅の空のうれへすごろに催して。哀  
かた／＼ふかし。

古郷は目をへて遠くなるみかたいそく汐干の道そくるしき  
やがて夜のうちに二村山にかゝりて。山中な  
どをこえ過るほどに。東漸しらみて海の面は  
るかにあらはれわたれり。波も空もひとつに

て。山路につゞきたるやうに見ゆ。

玉くしけ二村山のほくくと明行末は波路なりけり

ゆきくして三河國八橋のわたりをみれば。在

原業平かきつばたの歌よみたりけるに。みな

人かれないゐのうへになみだおとしける所よと

おもひ出られて。そのあたりをみれども。かの

草とおぼしき物はなくて。いねのみぞおほく

みゆる。

花ゆへにおちし涙のかたみとや稻葉の露を残しをくらん

源義種が此國のかみにてくだりける時。とま

りける女のもとにつかはしける歌に。もろと

もにゆかぬ三河の八はしを戀しとのみや思ひ

わたらんとよめりけるこそ。おもひ出られて

あはれなれ。やはぎといふ所をいでて。みやち

山こえ過るほどに赤坂と云宿あり。こゝにあ

りける女ゆへに大江定基が家を出けるも哀に

思ひいでられて過がたし。人の發心する道そ

の縁一にあらねども。あかぬ別をおしみしま  
よひの心をしもしるべとし。誠の道におもむ  
きけん。ありがたくおぼゆ。

別路に蔑りもはて、葛のはのかてかあらぬかたに返りし  
ほむの川原にうち出たれば。よもの望かすか  
にして山なく岡なし。秦甸の一千餘里を見わ  
たしたらんこゝちして。草土ともに蒼茫たり。  
月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ。茂れ

るさゝ原の中にあまたふみわけたる道あり  
て。行末もまよひぬべきに。古武藏の前司道の

たよりの輩に仰て植をかれたる柳もいまだ陰

とたのむまではなけれども。かつくまづ道

のしるべとなれるもあはれなり。もろこしの

召公奭は周の武王の弟也。成王の三公として

燕と云國をつかさどりき。陝のにしのかたを

治し時。ひとつの甘棠のもとをしめて政をを

こなふ時。つかさ人よりはじめてもろくの

拾遺別部  
源に河に侍るものむすめには、つかにあはれ、りよと、れは歌に、えは此に、行思ひあ、なまらん



古今雜下  
よみ人し  
いさこ  
にわか  
はへん  
すかは  
やふし  
の里の  
おれま  
しくも

民にいたるまで。そのもとをうしなはず。あま  
ねく又人の患をことほり。おもき罪をもなだ  
めけり。國民舉りて其德政を忍ぶ。故に召公去  
にし跡までも。彼木を敬て敢てきらず。うたを  
なんつくりけり。後三條天皇東宮にておはし  
ましけるに。學士實政任國に赴く時。州の民は  
たとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝことなか  
れ。おほくの年の風月の遊びといふ御製をた  
まはせたりけるも此こゝろにや有けん。いみ  
じくかたじけなし。かの前の司も此召公の跡  
を追て人をはぐくみ物を憐むあまり。道のほ  
とりの往還の陰<sup>冥イ</sup>までも思ひよりて植をかれた  
る柳なれば。これを見む輩皆かの召公を忍び  
けん。國の民のごとくにおしみそだてて。行す  
ゑのかげとたのまむこと。その本意はさだめ  
てたがはじところをおぼゆれ。

植置しぬしなき跡の柳はら猶その陰を人やたのまん

豊河と云宿の前をうち過るに。ある者のいふ  
をきけば。此みちをば昔よりよぐるかたなか  
りし程に。近比より俄にわたふ津の今道と云  
かたに旅人おほくかゝる間。いまはその宿は  
人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふな  
る。ふるきをすててあたらしきにつくならひ。  
さだまれることといひながら。いかなるゆへ  
ならんとおぼつかなし。昔より住つきたる里  
人の今更るうかれんこそ。かの伏見の里なら  
ねども。あれましくおしく覺ゆれ。

覺束ないき豊河のかはる瀬をいかなる人のわたりそめけん  
參河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり。  
山中にこえかゝるほどに。谷河のながれ落て  
岩瀬の波ことくしくきこゆ。境川とぞ云。

夫木

岩つたひ駒うち渡す谷川の音もたかしの山にきにけり

橋本と云所に行つきぬれば。きゝわたりしか  
ひありてけしきいと心すごし。南には潮海あ

り。漁舟波にうかぶ。北には湖水有。人家岸につらなれり。其間に洲崎遠くさし出て。松きびしく生つゞき。嵐しきりにむせぶ。松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし。行人心をいたましめ。とまるたぐひ夢をさまさすといふ事なし。みづうみにわたせる橋を濱名となづく。ふるき名所也。朝たつ雲の名残いづくよりも心ぼそし。

行とまる旅れはいつもかはられとわきて濱名の橋を過うき  
さても此宿に一夜とまりたりしやどあり。軒  
ふりたるわら<sup>か</sup>やのところ<sup>イ</sup>くまばらなるひま  
より。月のかげ曇なくさし入たる折しも。君ど  
もあまたみえし中に。すこしおとなびたるけ  
はひにて。夜もすがら床の下に晴天をみると  
忍びやかにうち詠じたりしこそ。心にくくお  
ぼえしか。

言のはの深き情は軒端もる月のかつらの色にみえにき

なごりおほくおぼえながら。此宿をもうち出  
て行過るほどに。まひざはの原と云所に來に  
けり。北南は眇々とはるかにして。西は海の渚  
近し。錦花繡草のたぐひはいともみえず。白き  
眞砂のみありて雪の積れるに似たり。其間に  
松たえ<sup>く</sup>生渡りて。鹽かせ梢に音信。又あや  
しの草の庵所々みゆる。漁人釣客などの栖に  
やあるらん。すゑ遠き野原なればつく<sup>く</sup>と  
ながめゆくほどに。うちつれたる旅人のかた  
るをきけば。いつのころよりとはしらず此原  
に木像の觀音おはします。御堂など朽あれに  
けるにや。かりそめなる艸の庵のうちに雨露  
もたまらず年月を送るほどに。一とせ望むこ  
とありて鎌倉へくだる筑紫人有けり。此觀音  
の御前にまいりたりけるが。もしこの本意を  
とげて古郷へむかはゞ御堂をつくるべきよし  
心のうちに申置て侍りけり。鎌倉にて望むこ

とかなひけるによりて。御堂を造けるより。人多くまいるなんとぞいふなる。聞あへずその御堂へ参りたれば。不斷香の煙風にさそはれうちかほり。あかの花も露鮮なり。願書とおぼしき物計帳の紐に結びつけたれば。弘誓のふかき事うみのごとしといへるもたのもしくおぼえて。

たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有と聞にも

天龍と名付たるわたりあり。川ふかく流れはげしくみゆ。秋の水みなぎり來て。舟のさるこゝと速なれば。往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし。此河みづまされる時。ふねなどもをのづからくつがへりて底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ。彼巫峡の水の流おもひよせられていと危き心ちすれ。しかはあれども。人の心にくらぶれば。しづかなる流ぞかしとおもふにも。たとふべきかたなきは世に

ふる道のけはしき習ひ也。

此河のはやき流も世中の人の心のたくひとは見す

遠江の國府いまの浦につきぬ。爰に宿かりて一日二日とどまりたるほど。あまの小舟に桿さしつゝ浦の有さま見めぐれば。しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて。南には極浦の波袖を濕し。北には長松の嵐心をいたましむ。名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる。昨日のめうつりなからずば。是も心とまらずしもあらざらましなどはおぼえて。

木 浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残をそきく

ことのまゝと聞ゆる社おはします。その御前をすぐとて。いさゝかおもひつゞけられし。

ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまゝなる神のしるしな

小夜の中山は。古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば。名高き名所なりとは聞えきたれども。みるにいよ／＼心ぼそし。北は深山

かひかれ  
なみやに  
もみしか  
けられな  
くよせら  
りふせる  
山さやの  
中

にて松杉嵐はげしく。南は野山にて秋の花露しげし。谷より嶺にうつるみち。雲に分入心地して。鹿の音なみだをもよほし。虫のうらみあはれふかし。

踏かよふ峯の梯とたえして雲にあとゝふ佐夜の中山

此山をもこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所

あり。去にし承久三年の秋の比後堀河。中御門中納言

宗行と聞えし人の罪ありて東へくだられけるに此宿にとまりけるが。昔は南陽縣の菊水下

流を汲で齡をのぶ。今は東海道の菊川西岸に

宿して命をうしなふと。ある家の柱にかゝれ

たりけりと聞きたれば。いとあはれにて其

家を尋るに。火のためにやけて。かの言のはも

のこらずと申ものあり。今は限とてのこし置

けむかたみさへあとなくなりけるこそはか

なき世のならひ。いとゞあはれにかなしけれ。

かきつくるかたみも今はなかりけり跡は千年と誰かいひ剣

菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり。ニイこはまとぞいふなる。此里のひがしのはてにすこしうちのぼるやうなる奥より大井川を見渡したれば。遙々とひろき河原の中に一すぢならず流わかれたる川瀬ども。とかく入ちがひたる様にて。すながしといふ物をしたるににたり。中々わたりてみむよりもよそめおもしろくおぼゆれば。かの紅葉みだれてながれけむ龍田川ならねども。しばしやすらはる。

日數ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深き色かな

まへ嶋の宿をたちて。岡部のいますくをうち

過るほど。かた山の松のかげに立よりて。かれ

いゐなど取出たるに嵐冷しく梢にひゞきわた

りて。夏のまゝなる旅ごろもうすき袂もさむ

くおぼゆ。

夫木是そこのたのむ木のもと岡へなる松の嵐に心してふけ

宇津の山をこゆれば。つたかえではしげりて



むかしのあとたえず。かの業平がす行者にとつてしけん程はいづくなるらんと見行ほどに。道のほとりに札をたてたるをみれば。无缘の世すて人あるよしをかけり。みちより近きあたりなれば少打入てみるに。わづかなる草の庵のうちに獨の僧あり。畫像の阿彌陀佛を

かけ奉て。淨土の法もんなどをかけり。其外にさらにみゆる物なし。發心のはじめを尋きければ。わが身はもと此國のものなり。さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ。其身堪たるかたなければ。理を觀するに心くらく。佛を念するに性ものうし。難行苦行の二の道ともに

かけたりといへども。山の中に眠れるは。里にありて勤たるにまされるよし。ある人のをしへにつきて。此山に庵を結つゝあまたの年月ををくるよしをこたふ。むかし叔齋が首陽の雲に入て猶三春の歳をとり。許由が潁水の月

にすみし。をのづから一瓢の器をかけたりといへり。此庵のあたりには殊更煙たてたるよし。柴折くぶるなぐさめまでも思ひたえたるさまなり。身を孤山の嵐の底にやどして。心を淨域の雲の外にすませる。いはねどしるくみえて。中々あはれに心にくし。

世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山邊の住居ならては此庵のあたり幾程遠からず。峠と云所にいたりて。おほきなる率都婆の年經にけると見ゆるに。歌どもあまた書付たる中に。東路はこゝをせにせん宇津の山哀もふかし。蔦のした道とよめる。心とまりておぼゆれば。そのかたはらにかきつけし。

我も又こゝをせにせんうつ山の分て色ある蔦のした露猶うちすぐるほどに。ある木陰に石をたかくつみあげて。めにたつさまなる塚あり。人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ。道のかたは

らの土と成にけりと見ゆるにも。顯基中納言の口ずさみ給へりけん。年々に春の草のみ生たりといへる詩思ひいでられて。是も又ふるきつかとなりなば名だにも残らじとあはれ

也。羊太傳が跡にはあらねども。心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ。かの梶原は將軍二代の恩に憐り。武勇三畧の名を得たり。かたはらに人なくぞみえける。いかなること

にかありけん。かたへの憤ふかくして。たちまちに身をほろぼすきになりければ。ひとまとのびんとやおもひけむ。都のかたへはせのぼりけるほどに。駿河國きかはといふ所にてうたれにけるときは。さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる。讃岐の法皇崇徳配所へおもむかせ給ひて。かの志戸と云處にてかくれさせ御座しける御跡を西行修行のついでにみまいらせて。よしや君昔の玉の床と

てもかゝらむのちはなにゝかはせんとよめりけるなどうけ給はるに。ましてしもぎまのものの事は中にをよばねども。さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ。

あはれにも空にうかれし玉梓の道のへにしも名をとめけり清見が關も過うくてしばしやすらへば。沖の石村々鹽干にあらはれて波に咽び。磯の鹽屋ところ／＼風にさそはれて煙たなびけり。東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也。むかし朱雀天皇六十一代の御時。將門と云もの東にて謀反おこしたりけり。是をたひらげんために民部卿忠文をつかはしける。此關にいたりてとどまりけるが。清原滋藤といふ者。民部卿にともなひて軍監と云つかさにて行けるが。漁舟の火のかげは寒くして浪を焼。驛路の鈴の聲はよる山をすぐと云唐の歌を詠じければ。民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり。

清見かた關とはしらて行人も心計はとゝめなくらむ

この關遠からぬほどに興津といふ浦あり。海に向ひたる家にやどりて侍れば。いそべによする波の音も身のうへにかゝるやうにおぼえて。夜もすがらいねられず。

おきんイ

清見かた磯へに近きたひ枕かけの浪にも袖はぬれけり

こよひはさらにまどろむ間だになかりつる。草の枕のまろぶしなれば。寢覺ともなき曉の空に出ぬ。くきが崎と云なるあら磯の岩のはざまを行過るほどに。沖津風はげしきにうちよする波もひまなければ。いそぐ鹽干のつたひみち。かひなき心ちして。ほすまもなき袖のしづくまでは。かけてもおもはざりし旅の空ぞかしなど打ながめられつゝいと心ぼそし。

沖津風けさあら磯の岩つたひ浪わけ衣ぬれくそ行

神原といふ宿のまへをうちとをるほどに。をくれたる者まちつげんとてある家に立入たる

に。障子に物をかきたるをみれば。旅衣すその庵のさむしろにつもるもしるきふしのしら雪といふ歌なり。心ありけるたび人のしわざにやあるらん。昔香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり。冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり。今富士の山のあたりに宿をかる行客あり。さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる。かれもこれとともに心すみておぼゆ。

呀る夜に誰こにしもふしわひて高れの雪を思ひやりけん  
田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば。時わかぬゆきなれども。なべていまだ白妙にはあらず。青して天によれるすがた。繪の山よりもこよなうみゆ。貞觀十七年の冬の比白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞と。都良香が富士の山の記に書たり。いかなるゆへにかとおぼつかなし。

ふしのれの風にな、よふ白雲を天津乙女の袖かとそみる

金葉雜下  
天河なほ  
しろ水に  
せきくた  
せあまく  
たります  
はかみ  
はかみ  
わくらに  
の御法に  
云洗滌の  
にひ間  
薫のあり  
かおもと  
ろく庭上  
にみちみ  
ちて云々  
あ四十二  
わらそ物

浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ。北はふじの麓にて。西東へはるぐとながき沼あり。布をひけるがごとし。山のみどり影を浸して空も水もひとつ也。蘆かり小舟所々に掉さして。むれたる鳥おほくさはざたり。南は海のおもて遠くみわたされて。雲の波煙の浪いとかきながめなり。すべて孤嶋の眼に遮るなし。わづかに遠帆の空につらなれるをのぞむ。こなたかなたの眺望いづれもとるぐに心ばそし。原には鹽屋の煙たえぐ立わたりて。浦かせ松の梢にむせぶ。此原昔は海の上になうかびて蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて浮嶋となん名付たりと聞にも。をのづから神仙のすみかにもやあらん。いとぞおくゆかしくみゆ。

影ひたす沼のえにふしのれの煙も雲も浮嶋かはらやがて此原につきて千本の松原といふ所あ

り。海の渚遠からず。松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし。沖には舟ども行ちがひて。木のはのうけるやうにみゆ。かの千株の松下雙峯寺。一葉の舟中萬里身とつくれるに。彼も是もはづれず。眺望いづくにもまさりたり。

見渡せば千本の松の末遠みとりにつく波のうへ哉

車返しと云里あり。或家にやどりたれば。網つりなどいとなむ賤しきものすみかにや。夜のやどりありかことにして。床のさむしろもかけるばかりなり。かの縛戎人の夜半の旅ねも。かくやありけむとおぼゆ。

是そこのつりする海士の筈底いとふあきや袖にのこらん

伊豆の國府にいたりぬれば。三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに。松の嵐木ぐらくをとづれて。庭の氣色も神さびわたれり。此社は伊豫の國三嶋大明神をうつし奉ると聞にも。能因入道伊豫守實綱が命によりて歌よみて奉りけ



に云みめ  
のわろき  
とありか  
とかつら  
よの神は  
きるとも  
ちきりけ  
りしらす  
ありかな  
つむな  
らひは

若紫  
吹まよふ  
深山おろ  
しに夢さ  
めてなみ  
たもよほ  
すたきの  
なとかな

るに。炎旱の天よりあめにはかにふりて。枯た  
る稲葉もたちまちに縁にかへりける。あら人  
神の御なごりなれば。ゆふだすきかけまくも  
かしこくおぼゆ。

せきかけし苗代水の流きて又あまくたる神その神

かぎりある道なればこの砌をも立出て猶ゆき  
すぎるほどに。宮根の山にもつきにけり。岩が  
ねたかくかさなりて。駒もなづむばかり也。山  
のなかにいたりて水うみ廣くたへり。箱根  
の湖となづく。又蘆の海といふもあり。權現垂  
跡のもとわけだかくたふとし。朱樓紫殿の雲  
にかさなれる粧ひ。唐家驪山宮かとおどろか  
れ。巖室石龕の波にのぞめるかげ。錢塘の水心  
寺ともいひつべし。うれしき便なれば。うき身  
の行衛しるべせさせ給へなどのりて法施奉  
るついでに。

今よりは思ひ亂し蘆の海の深きめくみを神にまかせて

此山もこえおりて湯本と云所にとまりたれ  
ば。太山おろしはげしくうちしぐれて。谷川み  
なぎりまさり。岩瀬の波高くむせぶ。暢臥房の  
よるのきゝにもすぎたり。かの源氏物がたり  
の歌に涙もよほす瀧のをとかなといへる。思  
ひよられてあはれなり。

夫ならぬたのみはなきを古郷の夢路ゆるさぬ瀧の音哉

此宿をもたちて鎌倉につく。日の夕つかた雨  
俄にふりて。みかさもととりあへぬほど也。いそ  
ぐ心にのみすゝめられて。大磯江嶋もろこし  
が原など聞ゆる所々をも見とどむるひまもな  
くてうち過ぬるこそいと心ならずおぼゆれ。  
暮かゝるほどに下りつきぬれば。なにがしの  
いりとかやいふ所に。あやしの賤が庵をかり  
てとどまりぬ。前は道にむかひて門なし。行人  
征馬すだれのもとにゆきちがひ。うしろは山  
ちかくして窓にのぞむ。鹿の音虫の聲かきの

うへにいそがはし。旅店の都にことなるさまかはりて心すごし。かくしつゝあかしくらすほどに。つれづれもなぐさむやとて。和賀江のつき嶋。三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば。海上の眺望哀を催して。こしかたに名高く面白き所々にもをとらずおぼゆ。

さひしは過こしかたの浦々もひとつなかめの沖のつり舟玉よする三浦かさきの波まより出たる月の影のさやけさ

抑かまくらのはじめを申せば。故右大將家と聞え給ふ。水の尾の御門清和の九の世のはつえをたけき人にうけたり。さりにし治承高倉安徳のするゑにあたりて。義兵をあげて朝敵をなびかすより。恩賞しきりに隴山の跡をつぎて。將軍のめしをえたり。營館をこの所にしめ。佛神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた。今繁昌の地となれり。中にも鶴岡の若宮は。松栢のみどりいよくしげく。蘋蘩のそなへかくることな

し。陪從をさだめて四季の御かぐらをこたらず。職掌に仰て八月の放生會ををこなはる。崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ。二階堂はことにすぐれたる寺也。鳳の薨日にかゝやき。梟の鐘霜にひゞき。樓臺の莊嚴よりはじめて林池のありとにいたるまで殊に心とまりてみゆ。大御堂ときこゆるは。石巖のきびしきをきりて。道場のあらたなるをひらきしより。禪僧庵をならぶ。月をのづから祇宗の觀をとぶらひ。行法座をかさね。風とこしなへに金磐のひゞきをさそふ。しかのみならず。代々の將軍以下つくりそへられたる松の社蓬の寺まちまちにこれおほし。そのほか由比の浦と云所に阿彌陀佛の大佛をつくり奉るよしかたる人あり。やがていざなひてまいりたれば。たふとくありがたし。事のおこりをたづぬるに。本は遠江の國の人定光上人といふものあり。過に

し延應の比より關東のたかきいやしきをす  
 すめて。佛像をつくり堂舎を建たり。その功す  
 でに三か二にをよぶ。烏瑟たかくあらはれて  
 半天の雲にいり。白毫あらたにみがきて満月  
 の光りをかゞやかす。佛はすなはち兩三年の  
 功すみやかになり。堂は又十二樓のかまへ望  
 むにたかし。彼東大寺の本尊は聖武天皇の製  
 作金銅十丈餘の盧舍那佛なり。天竺震旦にも  
 たぐひなき佛像とこそきこゆれ。此阿彌陀は  
 八丈の御長なれば。かの大佛のなかばよりも  
 すぐめり。金銅木像のかはりめこそあれども。  
 末代にとりてはこれも不思議といひつべし。  
 佛法東漸の砌にあたりて。權化力をくはふる  
 かとありがたくおほゆ。かやうのことどもを  
 見聞にも。心とまらずしもはなけれども。文に  
 もくらく武にもかけて。つるにすみはつべき  
 よすがもなきかずならぬ身なれば。日をふる

まゝにはたゞ都のみぞこひしき。歸べきほど  
 とおもひしもむなく過行て。秋より冬にも  
 なりぬ。蘇武が漢を別し十九年の旅の愁。李陵  
 が胡にいりし三千里のみちの思ひ身にしらる  
 る心ちす。聞なれし虫の音もやゝよりははて  
 て。松ふく峯のあらしのみぞいとゞはげしく  
 なりまされる。懷古のこゝろに催されて。つく  
 づくと都のかたをながめやる折しも。一行の  
 鴈がね空に消ゆくも哀なり。

かへるへき春をたのむの鴈かれもなきてや旅の空に出にし  
 かゝるほどに神無月の廿日あまりの比。はか  
 らざるにとみの事ありて都へかへるべきにな  
 りぬ。其こゝろのうち水ぐきのあとにもかき  
 ながしがたし。錦をきるさかひはもとよりの  
 ぞむ處にあらねども。故郷にかへるよろこび  
 は朱買臣にあひにたるこゝちす。

故郷へ歸る山ちのこからしにおもはぬほかの錦をやきむ

十月廿三日の曉。すでに鎌倉をたちて都へお

もむくに。宿の障子に書付。

なれぬれば都を急ぐ今朝なれとさすかなりのおしき宿哉

右東關紀行上木行于世之本稱鴨長明所著今據夫木抄所  
載從古本定爲源親行作比掇已了

うたゝねの記

阿佛

もの思ふことのなぐさむにはあらぬども。ね  
ぬよの友とならひにける月の光待出ぬれば。  
例のつまどをしあけてたゞひとりみ出した  
る。あれたる庭の秋露。かこちがほなる虫のね  
も。物ごとに心をいたましむるつまと也けれ  
ば。心に亂れおつる涙ををさへて。とばかりこ  
し方ゆくさを思ひつづくるに。さもあさま  
しくはかなかりける契りの程をなどかくしも  
思ひいれけんと。我心のみぞかへすぐうら  
めしかりける。夢現ともわきがたかりし宵の  
まより。關守の打ぬる程をだにいたくもたど  
らずなりにしや。打しきる夢のかよひ路は。一  
夜ばかりのとだえもあるまじきやうにならひ  
にけるを。さるは月草のあだなる色をかねて。  
しらぬにしもあらざりしかど。いかにうつり  
いかに染ける心にか。さも打つけにあやにく



なりし心まよひには。ふし柴のとたに思ひし  
らざりける。やう／＼色づきぬ。秋の風のうき  
みにしらるゝ心ぞうたてくかなしき物なりけ  
るを。をのづからたのむる宵はありしにもあ  
らず。打過る鐘のひびきをつく／＼と聞ふし  
たるも。いけるこゝちだにせねば。げに今さら  
に鳥はものかはとぞ思ひしられる。さすが  
にたえぬ夢のこゝちは。ありしにかはるけち  
めも見えぬものから。とにかくにさはりがち  
なるあしわけ船にて神無月にもなりぬ。降み  
ふらずみ定なき頃の空のけしきは。いとゞ袖  
のいとまなき心ちして。おきふしながめわふ  
れど。絶てほどふるおぼつかなさの。ならはぬ  
日數の隔るも。今はかくにこそと思ひなりぬ  
るよの心ぼそさぞ。なにゝたとへてもあかず  
かなしかりける。いとせめてあくがるゝ心催  
すにや。にはかにうづまさに詣でんと思ひ立

ぬるも。かつうはいとあやしく。佛のみ心の中  
はづかしけれど。二葉より参り馴にしかば。す  
ぐれてたのもしき心ちして。心づからのなや  
ましさも愁ひきこえむとにやあらむ。しばし  
ば御前にもなる人々。時雨しぬべしはやか  
へり給へなどいへば。心にもあらずいそぎ出  
るに。ほうこんごう院の紅葉このごろぞさか  
りと見えて。いとおもしろければ。すぎがてに  
おりぬ。かうらんのつまの岩のうへにおりゐ  
て。山の方をみやれば。木々の紅葉色々に見え  
て。松にかゝれるつたの心の色もほかにもこ  
となる心地していとみ所おほかるに。うきふ  
るさとはいとゞわすられぬるにや。とみにも  
たゝれず。おりしも風さへ吹て。物さはがしく  
なりければ。みさすやうにてたつ程。

人しれす契りし中のことの葉を嵐ふけとはおもはさりしを  
とおもひつゞくるにも。すべて思ひざまさる

ことなき心のうちならんかし。歸りてもいとくるしければ。うちやすみたる程御ふみとてとりいれたるも。むねうちさはぎてひきひろげたれば。たゞ今の空の哀にひごろのをこたりをとりそへて。こまやかに書なされたる墨つき筆のながれもいとみそ有と。例の中々かきみだす心まよひに。ことの葉のつゞきもみえずなりぬれば。御かへりもいかゞ聞えけん。名残もいと心ぼそくて。この御文をつくづくと見るにも。日比のつらさはみな忘れぬるも。人わろき心の程やどまたうちをかれて。これやさはとふもつらさのかす／＼に涙をそふる水筆の跡例の人しれずなかみちちかきそらにだに。たとどしきゆふやみに契たがへぬしるべばかりにて盡せず。夢のこゝちするにも。いてきこえんかたなければ。たゞいひしらぬ泪のみむせかへりたる。あか月にもなりぬ。枕に近き鐘

の音も唯今の命をかぎる心ちして。我にもあらずおきわかれにし袖の露いとゞかこちがましくて。君やこしとも思ひわかれぬなかみちに。例のたのもし人にてすべりいでゐるも。返す返す夢のこゝちなむしける。彼處にはむめきたの方わづらひ給けるが。つゐにきえはて給にければ。そのほどのまぎれにや。またほどふるもことはりながら。いひしにたがふつらさはしも。ありしにまさる心地するは。いかにおぼしまどふらんと。とりわきたりける御思ひの名残もいと苦しくをしはかり聞ゆれど。あはれしる心の程中々聞えん方なくて。日數ふるいふせさをかれ／＼ぞ驚かし給つる。難面よの哀さもみづから聞えあはせたくなどあれば。例のうちゐる程の鐘の響に人しれずたのみをかくるも。おもへば淺ましく。よの常ならずあだなる身のゆくゑ。つゐにいかにな

りはてむとすらんと。心ばそく思ひつゞくるにも。ありしながらの心ならましかば。うきたる身のとがもかうまでは思ひしらずぞ過なましなど思ひつゞくるに。今さら身のうさもやる方なく悲しければ。今宵は難面てやみなましなど思ひ亂るゝに。例のまつほど過ぬるはいかなるにかと。さすがめもあはず。みじろぎふしたるに。かのちいさき童にや。しのびやかにうちたゞくを聞つけたるには。かしこく思ひしづむる心もいかなりぬるにか。やをらすべり出るるも。我ながらうとましきに。月もいみじくあかければ。いとはしたなき心地して。すいがいの折残りたるひまにたちかくるゝも。彼ひたちのみやの御すまゐ思ひ出らるゝに。いるかたしたふ人の御さまぞことたがひておはしけれど。立よる人の御面かげはしも。里わかぬ光にもならびぬべきこゝちするは。

あながちに思ひ出られて。さすがに覺し出おりもやと。心をやりて思ひつゞくるに。はづかしきことも多かり。しはすにもなりぬ。雪かきくらしして風もいとすさまじき日。いとくおろしまはして。人二三人ばかりして物語などするに。夜もいたく更ぬとてひとはみな寝ぬれど。露まどろまれぬに。やをら起出てみるに。宵には雲がくれたりつる月の浮雲まがはず也ながら。山のは近きひかりほのかにみゆるは七日の月なりけり。みし夜のかぎりも今宵ぞかしと思ひいづるにたゞそのおりのこゝちして。さだかにもおぼえずなりぬる御面かげさへさしむかひたる心ちするに。まづかきくらす涙に月の影もみえずとて。佛などの見え給つるにやと思ふに。はづかしくもたのもしくも成ぬ。さるは月日にそへてたへ忍ぶべき心ちもせず。こゝろづくしなることのみ増

れば。よしや思へばやすきと。ことはりに思ひ立ぬる心のつきぬるぞ。有し夢のしるしにやとうれしかりける。今はと物を思ひなりにしもといへば。えに悲しきことおほかりける。春ののどやかなるに何となくつもりにける手ならひのほんごなどやりかへすつゐでに。かの御文どもをとりいでてみれば。梅がえの色づきそめし初より冬草かれはつる迄おり／＼の哀忍びがたきふし／＼を打とけて聞えかはしけることの積ける程も。今はとみるはあはれ浅からぬなかに。いつぞやつねよりもめとゞまりぬらんかしとおぼゆる程に。こなたのあるじ今宵はいとさびしく。物おそろしき心ちするに。爰にふしたまへとて。我かたへもかへらず成ぬ。あなむづかしとおぼゆれど。せめて心の鬼もおそろしければ。かへりなるともいはでふしぬ。人はみな何心なくねいりぬる程

に。やをらすべり出れば。ともし火の残て心ぼそきひかりなるに。人や驚かんとゆゝしくおそろしけれど。たゞしやうじひとへを隔たる居どころなれば。ひるよりよいしつるはさみばこのふたなどのほどなく手にさはるもいとうれしくて。かみを引分るほどぞさすがおそろしかりける。そぎおとしぬれば。このふたにうち入て。かき置つる文などもとりぐしてをかむとする程。いでつるしやうじ口より火の光のなをほのかにみゆるに。文かきつくる硯のふたもせで有けるがかたはらにみゆるを引よせて。そぎおとしたるかみをおしつゝみたるみちの國紙のかたはらに。たゞうち思ふことを書つれど。外なるともしびの光なれば。筆のたちどもみえず。

なけきつゝ身を早きせの底とたにしらす迷はん跡を悲しき身をもなげてんと思ひけるにや。たゞ今も出



ぬべきこゝちして。やをらはしをあげたれば。つごもり比の月なき空に。天雲さへたちかきなりて。いとものおそろしくらきに夜もまだふかきに。とのゐ人さへ折しも打こはづろふもむづかしと聞ゐたるに。かくても人にやみつけれんとそらおそろしければ。もとのやうにいりてふしぬれど。かたはらなる人うちみじろぎだにせず。さきぐも。とのゐびとの夜ふかくかどをあげて出るならひ也ければ。その程を人しれずまつに。こよひしもとくあけていでぬるをとすれば。さるは心ざす道もはかぐしくも覺えず。爰も都にはあらず。北山の麓といふ處なれば。ひとめしげからず。木の葉のかげにつきて。夢のやうにみをきし。山ちをたゞ獨行こゝち。いといたくあやうくおそろしかりける。山びとのめにもとがめぬまゝに。あやしくものぐるおしきすがたした

るも。すべて現のことともおぼえず。さてもかのところにし山の麓なれば。いとはるかなるに。夜なかより降いでつる雨の明るまゝにしほしほとぬるゝ程になりぬ。故里よりさがのわたり迄はすこしもへだたらずみわたさるゝほどの道なれば。さはりなくゆきつきぬ。夜もやう／＼ほの／＼とする程に成ぬれば。みちゆきびともこゝもとはいとあやしとがむる人もあれば。物むづかしくおそろしき事このよにはいつかはおぼえむ。たゞ一すぢになきになしはてつる身なれば。あしのゆくにまかせて。はや山ふかく入なむと打もやすまぬまに。苦しくたへがたきことしぬばかり也。いるあらしの山の麓にちかづくほど雨ゆゝしく降まさりて。むかへの山をみれば。雲のいくへともなくおりかさなりて。ゆくさきもみえず。からうじてほうりんのまへ過ぬれば。はては

山路にまよひぬるぞすべきかたなきや。おしからぬ命もたゞ今ぞ心ぼそく悲しき。いとどかきくらす泪の雨さへふりそへて。こしかたゆくさきも見えず。思ふにもいふにもたらず。今とちめはてつる命なれば。身のぬれとをりたること伊勢の白水郎にもこえたり。いたくまはりはてにければ松風のあら／＼しきをたのもし人にて。これも都のかたよりとおぼえて。みのかさなどきてさえづりくる女あり。こわらはのおなじこゑなるともの語する也けり。これやかつらの里のひとならんと思ゆるに。たゞあゆみにあゆみよりて。是は何人ぞあな心う。御前は人のてをにげいで給か。またくちろむなどをし給たりけるにか何故かゝるおほ雨に降れてこの山中へ出給ぬるぞ。いづくよりいづくをさしておはするぞ。あやしあやしとさえづる。なにといふこゝろにか。したを

たび／＼ならして。あないとおし／＼とくり返しいふぞうれしかりける。しきりに身のありさまを尋れば。これは人を恨るにもあらず。またくちろむとかやをもせず。たゞ思ふこと有てこの山のおくにたづぬべきこと有て夜ふかく出つれど。雨もおびたゞしく。山路さへまどひてこしかたもおぼえず。ゆくさきもえしらず。しぬべき心地さへすれば。爰によりゐたるなり。おなじくはそのあたり迄みちびき給ひてんやといへば。いよ／＼いとおしがりて。手をひかへてみちびく情のふかさぞ佛の御しるべにやとまで。うれしくありがたかりける。ほどなく送りつけてかへりぬ。まちとる處にもあやしきものぐるをしきものゝさまかなとみおどろく人おほかるらめなれども。かつらの里のひとの情におとらめやは。さま／＼にたすけあつかはるゝほど山路はなを人のこゝ

ちなりけるが。今はとうちやすむほどすべて

こゝちもうせて。露ばかり起もあがられず。いたづらものにてふしたりしを。都人さへ思ひのほかにたづねしる便ありて。三日ばかりはとにかくにさはりしかども。ひとひに本意とげにしかば。一すちにうちもうれしく思ひなりぬ。さてこの所をみるに。うき世ながらかつるところも有けりとすぐく思ふさまなるに。をこなひなれたるあま君たちのよひ曉のあかをこたらず。爰かしこにせぬれのをとなどを聞につけても。そぞろにつもりけん年月のつみも。かゝらぬ所にてやみなましかば。いかにせましと思ひ出るにぞ。みもゆるこゝちしける。故里の庭もせにうきをしらせし秋風は。ほけ三まいの峯の松風に吹かよひ。ながむるかどに面かげと見し月影は。りやうじゆせんの雲るはるかに心を送るしるべとぞなりにける。

ける。

捨て出しわしのみ山の月ならて誰をよなく戀わたりけんゆたのたゆたに物をのみ思ひくちにしはては。うつゝ心もあらずあくがれそめにければ。さまゞ世のためしにもなりぬべく。おもひのほかにさすらふる身のゆくゑををのづから思ひしづむる時なきにしもあらねば。かりのよの夢の中なるなげきばかりにもあらず。くらきよりくらきにたどらむながきよのまどひをおもふにも。いとせめて悲しけれど。心は心として猶おもひ馴にしゆふぐれのながめに打そひて。ひと方ならぬ恨もなげきも。せきやるかたなきむねのうちをはかなき水聲のをのづから心のゆく便もやとて。ひとしれず書なげせど。いとゞしき泪のもよほしになむ。いでやをのづから大かたのよの情をすてぬなげの哀ばかりを折々にちりくることの葉も有しにこ

そ。露のいのちをもかけて。今日までもながらへてけるを。うきよの人のつらき僞にさへならひはてにけることも有にや。おなじ世とおぼえぬ迄に隔りはてにければ。ちかの鹽がまもいとかひなきこゝちして。

みちのくのつほのいしふみかき絶て遙けき中と成にける哉  
日ごろ降つる雨のなごりにたちまふ雲まのゆふづく夜のかげほのかなるにをしあけがたならねど。うき人しもとあやにくなるこゝちすれば。つまどはひきたてつれど。かどちかくほそき川の流れたる水のまさるにや。常よりもをとする心地するにも。いつのとしにかあらん。此川の水の出たりしに。人しれず波をわけしことなど。たゞ今のやうにおぼえて。

思ひ出る程にも波はさはきけりうきよをわけて申川の水あれたる庭に呉竹のたゞすこし打なびきたるさへ。そゞろにうらめしきつまとなるにや。

よとともに思ひ出れば呉竹の恨めしからぬそのふしもなしをのづからことのつゐでになどばかりおどろかし聞えたるにも。よのわづらはしさに。思ひながらのみなん。さるべきつゐでもなくて。みづから聞えさせずなど。なをざりに書すてられたるもいと心うくて。

消はてん煙ののちの雲をたによもなめしな人めもるととおぼゆれど。こゝろのうちばかりにてくだしはてぬるはいとかひなしや。そのころこゝちれいならぬことありて。命もあやうきほどなるを。こゝながらともかくもなりなばわづらはしかるべければ。思ひかけぬたよりにて。おたぎの近き所にてはかなき宿りもとめでてうつろひなんとす。かくとだに聞えさせまほしけれど。とはず語もあやしくて。なく／＼かどをひきいづるおりしも。先にたちたる車あり。さはなやかにおひてこせんなどこと



ごとしくみゆるを。たればかりにかとめとどめたりければ。彼ひとしれず恨きこゆる人なりけり。かほしるき隨身などまがふべうもあらねば。かくとはおぼしよらざらめど。そぞろに車の中はづかしく。はしたなきこゝちしながら。今一たびそれとばかりもみ送り聞ゆるは。いとうれしくもあはれにもさまゞむねしづかならず。つゐにこなたかなたへ行別れ給ふ程。いといたうかへりみがちに彼處にゆきつきたれば。兼て聞つるよりもあやしくはかなげなる所のさまなれば。いかにしてたへ忍ぶべくもあらず。暮はつる空のけしきもひごろにこえて心ぼそくかなし。宵るすべき友もなければ。あやしくしきも定めぬとふのすがこもにたゞひとり打ふしたれど。とけてしもねられず。

はかなしなみしかき夜はの草枕結ふともなきうたゝれの夢

ひごろふれど聞くる人もなし。心ぼそきまゝにきやうづとてに持たる計ぞたのもしきともなりける。せかいふらうこと有ところをしめて思ひつゞけてぞ。うき世のゆめもおのづからおもひさますたよりなりける。けふかあすかと心ぼそき命ながら。卯月にもなりぬ。いざよひの光まち出て程なき窓のしとみたつものもおろさず。つくゞとながめいでたるに。はかなげなる垣ねの草にまどかなる月影に。ところがらあはれすくなからず。

かく露の命まつまのかりの庵にこゝろほそくもやとる月影いづくにかあらんかすかに笛の音のきこえくる。かの御あたりなりしねにまよひたるこゝちするにも。きとむねふたがるこゝちするを。待なれし故里をたにはさりし人はこゝまで思ひやはよるさても猶うきにたへたる命のかぎり有ければ。やう／＼心ちもをこたりざまになりたる

を。かくてしもやとてまた故郷にたちかへるにも。まつならぬ梢だにそぞろにはづかしくみまはされて。

消かへりまたはくへしと思ひきや露の命の庭の淺ちふなげきながらはかなく過て秋にもなりぬ。ながき思ひのよもすがらやむともなききぬたの音。寢屋ちかききりぐすのこゑの亂れも。ひと方ならぬねざめの催しなれば。壁にそむけるともし火のかげばかり友として。あくるをまつもしづこゝろなく。盡せぬ泪の雫は窓うつ雨よりもなり。いとせてわびはつるなぐさみに。さそふ水だにあらばと朝夕のこと草に成ぬるを。そのころ後の親とかたのむべきことはりも淺からぬひとしも。遠つあふみとかや聞もはるけき道を分て。都のものもうでせんとてのぼりきたるに。何となくこまやかなる物語などするつゐでに。かくてつくぐ

とおはせんよりは。ゐなかの住るもみつゝなぐさみたまへかし。かしこも物さはがしくもあらず。心すまさんひとはすみぬべきさまなるなど。なをざりなくいざなへど。さすがひたみちにふりはなれなん都のなごりも。いづくをしのぶこゝろにか。心ぼそくおもひわづらはるれど。あらぬすまゐに身をかへたると思ひなしてとだに。うきをわするゝたよりもやとあやなく思ひたちぬ。くだるべき日にもなりぬ。よふかくみやこを出なんとするに。ころは神無月の廿日あまりなれば。有明の光もいと心ぼそく。風の音もすさまじく身にしみとをる心ちするに。人はみな起さはげど。人しれずこゝろばかりには。さてもいかにさすらふるみのゆくゑにかと。たゞ今になりては心ぼそきことのみおほかれど。さりとしてとどまるべきにもあらねば出ぬるみちすがら。先

かきくらす泪のみさきにたちてこゝろほそく  
悲しきことぞなにゝたとふべしとも覺えぬ。  
ほどなく逢坂山になりぬ。をとに聞し關の清  
水もたえぬ涙とのみ思ひなされて。

越わふる逢さか山の山水はわかれにたへぬ涙とを見る

あふみの國野路といふ處より雨かきくらしふ  
り出て。みやこの山をかへりみれば。霞にそれ  
とだにみえず。隔りゆくもそごろに心ぼそく。  
何とて思ひ立けんとかやしきこと數しらず。  
とてもかくてもねのみなきがちなり。

すみわひて立わかれぬる故里もきてはくやしき旅衣かな

道のほどもとどまる所々おほかれど。こゝは  
いづく／＼ともけちかくとふべき人もなけれ  
ば。いづくの野も山もはる／＼とゆくを。とま  
りもしらず。人のゆくにまかせてゆめちをた  
どるやうにて日數ふるまゝに。さすがならは  
ぬひなのながちに。おとろへはつる身もわれ

かのこゝちのみして。みのおはりのさかひに  
もなりぬ。すのまたとかやひろ／＼とおびた  
だしき河あり。ゆき／＼のひとあつまりて舟を  
やすめずさしかべるほど。いとところせうか  
しがましくおそろしきまでのゝしりあひた  
り。からくしてさるべき人みな渡りはてぬれ  
ど。ひと／＼もこしや馬とまちいづるほど。河  
のはたにおりゐて。つく／＼とこしかたをみ  
れば。あさましげなる賤の男ども。むづかしげ  
なるものどもをふねにとりいれなどする程。  
なにごとにかゆ／＼しくあらそひて。あるひは  
水にたふれいりなどするにも。見なれずもの  
おそろしきに。かゝるわたりをさへ隔はてぬ  
れば。いとど都の方方はるかにこそなりゆくら  
めと思ふには。いとどなみだおち増りてしの  
びがたく。かへらむほどをだにしらぬこゝろ  
もとなさよ。過ぎつる日數のほどなきに。とま

る人々のゆくすゑをおぼつかなく戀しきこともさま／＼なれど。隅田がはらならねばこととふべきみやこ鳥もみえず。

思ひいて、名をのみ慕ふ都鳥あとなき浜にれをやなままし此國になりてはおほきなるかはいとおほし。なるみのうらのしほひがた。音にきゝけるよりもおもしろく。濱ち鳥むら／＼にとびわたりにて。海士のしわざにとしふりにける鹽がまどものおもひ／＼にゆがみたてるすがたども。みなれずめづらしきこゝちするにも。思ふことなくて都のともにもうちぐしたる身ならましかばと。人しれぬこゝろのうちのみさまざまくるしくて。

これやさはいかになるみの浦なれは思ふ方には遠さかる覽みかはの國八はしといふところをみれば。これも昔にはあらずなりぬるにや。はしもたゞひとつぞみゆる。かきつばたおほかる所と聞

しかども。あたりの草もみなかれたるころなればにや。それかとみゆる草木もなし。なりひらのあそんのはる／＼きぬるとなげきけんも思ひ出らるれど。つましあればにや。さればさらんとすこしおかしくなりぬ。みやこいでてはるかになりぬれば。かの國の中にもなりぬ。はまなのうらぞおもしろきところなりける。波あらきしほの海路。のどかなる水うみのおちいたるけちめに。はる／＼と生つゞきたる松のこたちなど。繪にかゝまほしくぞみゆる。おちつきどころのさまをみれば。こゝかしこにすこしおろかなる家などもなかに。おなじかや屋などもなどさすがにせばからねど。はかなげなるあしばかりにて結びをけるへだてども。かげとまるべくもあらず。かりそめなれどげにみやもわらやもと思ふには。かくてしもなかくにしもあらぬさま也。うしろ



は松ばらにて前はおほきなる河のどかに流れたり。海いと近ければ。湊のなみこゝもとにきこえて。鹽のさすときはこの河の水さかさまに流るゝやうに見ゆるなど。さまかはりていとおかしきさまなれど。いかなるにかこゝろとまらず。日數ふるまゝに都のかたのみ戀しく。ひるはひめもすにながめ。よるは夜すがら物をのみ思ひつゞくる。あらゐその波のをとも枕のもとにおちくるひゞきには。心ならずも夢のかよひちたえ果ぬべし。

心からかゝる旅れになけくとも夢たにゆるせおきつしら波不二の山はたゞこゝもとにぞみゆる。雪いとしろくてこゝろぼそし。風になびくけぶりのすゑもゆめのまへに哀なれど。うへなきものはと思ひつけこゝろのたけぞものおそろしかりける。かひのしらねもいとしろくみわたされたり。かくてしも月の末つかたにもなりぬ。

都のかたより文どものあまたあるをみれば。いとおさなくよりはぐくみし人。はかなくも見すてられて。心ぼそかりし思ひに。やまひになりてかぎりになりたるよしを。とりのあとのやうに書つゞけておこせたるをみるに哀にかなしくて。よろづをわすれていそぎのぼりなんとするは。人のおもふらんことどものさはがしくかたはらいたければ。とにかくにさはるべき心ちもせねば。にはかにいそぎたつを。道もいと氷とちて。さはりがちにあやうかるべきを。たゞ今はかゞしきうちそふひともなくてなど。さまぐとぞむる人も多かりければ。思ひわびてねのみなかるゝを。みるひとも心ぐるしくとて。ともすべきものどもなど。誰かれと定めてのぼるべきになりぬ。いとうれしけれど。とにかくに思ひわけにしことなく。なにと又みやこへかへらんとあぢきな

くものうし。こゝとてもまた立歸らむ事もかたければ。ものごとになごりおほかるこゝちするにも。うちつけにものむつかしき心のくせになむ。つねより居つるはしらのあら／＼しきが。なつかしからざりつるも。立はなれなんはさすがに心ぼそくて。人みわくべくもあらず。ちいさく書つくれど。めはやき山賤もやとつゝましながら。

忘るなよあさきのはしらかはらすはまたきて馴る折も社あれこのたびはいと人ずくなに心ぼそけれど。都をうしろにてこしおりのこゝちには。こよなく日數のすぐるも戀しきこゝちするぞ。あやにくに我こゝろより思ひたちていでぬれど。われながら定めなく旅の程も思ひしられざれど。いとはずに日數もうら／＼かにとゞこほる所もなかりけるを。ふはの關になりて雪ただふりに降くるに。風さへまじりて吹雪もか

きくれぬれば。關屋ちかくたちやすらひたるに。關守のなつかしからぬおもゝちとりにく。なにをがなとゞめんと。みいだしたるけしきもいとおそろしくて。

かきくらす雪まをしまつ程にやかてとむるふはの關守京に入日しも雨降いでて。鏡の山も曇りてみゆるを。くだりしおりもこの程にて雨降出たりしぞかしと思ひいでて。

このたびは曇らは墨れ鏡山ひとをみやこのはるかならればかくおもひつゞくれど。誠にかの人を都はちかき心のみばかりにて。いつを限りにと思ひかへすぞまたかきくらす心ちしける。日たくるまゝに。雨ゆゝしく晴て。しろき雲おほかる山おほかれれば。いづくにかと尋ぬれば。ひらの高ねやひえの山などに侍るといふを聞に。はかなき雲さへなつかしくなりぬ。

きみもさはよそのなかもやかよふらん都の山にかゝる白雲

暮はつるほどにゆきつきたれば。思ひなしに  
や。こゝもかしこもなをあれまさりたる心ち  
して。所々もりぬれたるさまなど。なにゝ心の  
とゞまるべくもあらぬをみやるも。いとはな  
れまうきあばらやの軒ならんと。そゞろにみ  
るもあはれなり。おい人はうちみえてこよな  
くおこたりざまにみゆるも。うきみをたれば  
かりかうまでしたはんと哀も浅からず。その

後は身をうき草にあくがれし。こゝろもこり  
はてぬるにや。つくぐとかる蓬がそまに  
朽はつべき契こそはと。身をも世をも思ひし  
づむれど。したはぬこゝちなれば又なりゆか  
むはていかゞ。

我よりは久しかるへき跡なれと忍はぬ人はあはれともみし

右轉寢記以扶桑拾葉集校合了

# 群書類従卷第三百三十二

## 紀行部六

### いさよひの日記

阿 佛

むかしかべのなかよりもとめでたりけんふ  
みの名は。今の世の人の子は夢ばかりも身の  
うへのこととはしらざりけりな。みづぐきの  
をかのくずはかへすくもかきをくあとたし  
かなれども。かひなきものはおやのいさめな  
りけり。又けんわうの人をすて給はぬまつり  
ごとにももれ。ちうしんの世を思ふなさに  
もすてらるゝものは。かすならぬ身ひとつな  
りけりとおもひしりながら。又さてしもあら  
で。なをこのうれへこそやるかたなくかなし  
けれ。さらにおもひつゞくれば。やまとうたの

みちは。たゞまことすくなくあだなるすさみ  
ばかりとおもふ人もやあらん。日のもとのく  
ににあまのいはとひらけしとき。よものかみ  
たちのかぐらのことばをはじめて。世をおさ  
めものをやはらぐるなかだちとなりにけると  
ぞ。このみちのひじりたちはしるしをかれた  
り。さても又集をえらぶ人はためしおほかれ  
ど。二たび勅をうけて世々に聞えあげたる家  
は。たぐひなをありがたくやありけん。そのあ  
とにしもたづさはりて。みたりのをのこざど  
も。もゝちのうたのふるほぐどもを。いかなる  
えにかありけむ。あづかりもたることあれど。

孔安國孝  
經序云魯  
共王使夫  
人壞壁中  
於壁中  
石函得  
古文孝經  
章二十二  
萬葉十二  
水藻之園  
乃田葛葉  
緒吹變而  
知兒等之  
不見頃鵬



按將軍執  
權惟親將  
軍執權相  
摸守時宗

古今雜下  
文屋のか  
すひてな  
みかには  
りてあか  
たみに  
えいてた  
いひやと  
りける返  
事によめ  
る小野町  
小ねは  
わをうき  
早のねを  
てえさ  
そふ水あ  
らはいな  
んとそお  
もふ  
後撰冬  
よみ人し  
神無月ふ  
りみふら

道をたすけよ。こをはぐくめ。のちの世をと

へとて。ふかき契りをむすびをかれしほそ川

のながれも。ゆへなくせきとどめられしかば。

跡とふのりのもし火も。道をまもり家をた

すけむおやこの命も。もろともにきえをあら

そふとし月をへて。あやうく心ぼそきながら。

なにとしてつれなくけふまではながらふらん

おしからぬ身ひとつはやすく思ひすつれ

ども。子と思ふ心のやみはなをしのびがたく。

道をかへりみる恨はやらんかたなく。さても

猶あづまのかめの鏡にうつさむは。イモくもらぬ

かげもやあらはるゝと。せめて思ひあまりて。

よろづのはどかりをわすれ。身をようなき物

になしはてゝ。ゆくりもなくいざよふ月にさ

そはれいでなんとぞ思ひなりぬる。さりとて

文屋のやすひでがさそふ水にもあらず。すむ

べき國もとむるにもあらず。比は三冬たつは

建治三

じめのさだめなきそらなれば。ふりみふらす

み時雨もたえず。あらしにきおふ木のはさへ。

なみだとゝもにみだれちりつゝ。ことにふれ

て心ぼそくかなしけれど。人やりならぬ道な

れば。いきうしとてもとどまるべきにもあら

で。なにとなくいそぎたちぬ。めかれせざりつ

る程だに。あれまさりつる庭もまがきも。まし

てと見まはされて。したはしげなる人々の袖

のしづくも。なぐさめかねたる中にも。格相 格守侍従大

夫などのあながちにうちくつしたるさま。い

と心ぐるしければ。さまぐいひこしらへ。ね

やのうちをみれば。むかしの枕さへさながら

かはらぬをみるにも。今さらかなしくて。かた

はらにかきつく。

と、めなくふるき枕の塵をたに我たちさらは誰か拂はん

代々にかきをかれけるうたのさうしどものお

くがきなどして。あだならぬかぎりをえりし

たゝめて。侍従のかたへをくるとて。かきそへたる歌。

和歌の浦にかきとゝめたる藻鹽草は昔のかたみともみよあなかしこよこなみかくな濱千鳥一かたならぬ跡を思はゝ是を見て。じゞうのかへりごと。いととくあり。

終によもあたにはならし藻鹽草かたみをみよの跡に残せはまよはまし教さりせは濱千鳥一かたならぬ跡をそれとも

このかへりごといとおとなしければ。心やすくあはれなるにも。昔の人にきかせたてまつりたくて。又うちしほれぬ。大夫のかたはらさらずなれきつるを。ふりすてられなむなごり。あながちにおもひしりて。手ならひしたるをみれば。

はるゝと行先遠く墓はれていかにそなたの空をなかめんとかきつけたる。ものよりことにあはれにて。おなじかみにかきそへつ。

つくゝと空ななめを戀しくは道遠くともはや歸りこむ

とぞなぐさむる。山よりじゞうのあにのりし  
もいでたちみむとておはしたり。それもいと  
心ぼそしとおもひたるを。この手ならひども  
をみて。又かきそへたり。

あたにのみ涙はかけし旅衣心の行てたちがへるほと

とは。こといみしながら涙のこぼるゝを。あら  
らかにものいひまぎらはすも。さまぐ（ケイ）哀な  
るを。あざりのきみは山ぶしにて此人よりは

（慶應）（系圖）

兄なり。此たびのみちのしるべに送り奉らむ  
とて出たゝるめるを。この手ならひに又まじ  
らはざらんやはとてかきつく。

たちそふを嬉しかりける旅衣かたみにたのむ親のまもりは  
むすめのこはあまたもなし。たゞひとりにて。

新陽明

此ごろちかきほどの女院にさぶらひ給ふ。院  
のひめ宮一ところむまれ給計にて。心づかひ

（シイ）

（熊山）

もまことしきさまにて。おとなしくおはすれ  
ば。宮の御かたのこひしさもかねて申をくつ

めすみさ  
なきた時  
雨そ冬の  
はけるな  
古今離別  
源され  
人やりの  
道ならな  
たに大い  
うはいい  
かへりこ  
んかひて  
爲相卿公  
卿補任云  
十三從四  
下三從同  
五八廿四  
從五上同  
八四十二  
從同侍  
正同兼  
美作權守  
建治元八  
十六復任  
弘安二八  
十二正五  
下二務補  
五相國改  
五廿九復  
正五廿六

古今離別  
をのち  
ふるか  
ちのく  
すけに  
まかり  
けるに  
は、の  
よめ  
たのち  
のおや  
のまも  
りとお  
あひそ  
ふる心  
はさき  
りはせ  
きとめ  
そ  
一代要記  
云新陽明  
門院信子  
建治元年  
四月日  
號關白  
左大臣基  
平公龜  
山院女御

いでに。侍従大夫などのことはぐくみおはす  
べきよしもこまかにかきつけて。おくに。

きみをこそ朝日とたのめ古郷に残るなてしこ霜にからすな  
と聞えたれば。御かへりもこまやかにいとあ  
はれにかきて。歌の返しには。

思をく心とゝめは古さとの霜にもかれしやまとなてしこ  
とぞある。いつゝのこどもの歌のこりなくか  
きつゞけぬるも。かつはいとをこがましけれ  
ど。おやの心にはあはれにおぼゆるまゝにか  
きあつめたり。さのみ心よはくてもいかに  
て。つれなくふりすてつ。あはだぐちといふ所  
より車はかへしつ。ほどなくあふさかのせき  
こゆるほどに。

さためなき命はしらぬ旅なれと又あふ坂とたのめてを行  
のちといふ所はこしかた行きき人もみえず。  
日は暮かゝりていと物がなしとおもふに。時  
雨さへうちそゞぐ。

うちしくれ古郷思ふ袖ぬれて行先遠き野路の篠原  
こよひはかゞみといふ所につくべしとさだめ  
つれど。くれはてゝゆきつかず。もり山といふ  
所にとゞまりぬ。こゝにも時雨なをしたひき  
にけり。

いとゝ猶袖ぬらせとや宿りけんまなく時雨のもる山にしも  
けふは十六日の夜なりけり。いとくるしくて  
ふしぬ。いまだ月のひかりかすかにのこりた  
るあけぼのに。もり山をいでてゆく。やす川わ  
たるほど。さきだちて行たび人のこまのあし  
をとばかりさやかにて。きりいとふかし。

旅人はみなもろともにあきたちて駒打わたすやすの川霧  
十七日の夜はをのゝしゆくといふ所にとゞま  
る。月いでて。山のみねに立つゝきたる松の木  
のま。けちめみえていとおもしろし。こゝは夜  
ふかき霧のまよひにたどりいでつ。さめが井  
といふ水。夏ならばうち過ましやとおもふに。

かち人は猶たちよりてくむめり。

むすふ手ににこる心をすゝきなほ浮世の夢やさめかぬの水とぞおぼゆる。

十八日。みのゝ國せきのふぢ川わたるほどに。

まづおもひつゞけける。

我ことも君につかへんためならて渡らましやはせきの藤川ふはの關やのいたびさしは。いまもかはらざりけり。

古今二十  
のく  
にせきの  
ふぢ川た  
えすして  
君につか  
へん萬代  
まてに

ひまおほきふはの關屋はこの程の時雨も月もいかにもる覽關よりかきくらしつるあめ。時雨に過てふり

くらせば。みちもいとあしくて。心より外に。かさぬひのむまやといふ所に暮はてねどとゞまる。

旅人はみのうちほらふ夕暮の雨にやとかるかさぬひの里

十九日。又こゝを出でゆく。よもすがらふりつる雨に。ひらのとかやいふ程。みちいとわろくて。人かよふべくもあらねば。水田のおもをぞ

さながらわたりゆく。あくるまゝに。あめはふらずなりぬ。ひるつかた過ゆく道にめにたつ社あり。人にとへば。むすぶの神とぞきこゆるといへば。

まもれた契結ふの神ならはとけぬ恨にわれまよはさてすのまたとかやいふ川には。舟をならべて。まさきのつなにやあらん。かけとゞめたるうきはしあり。いとあやうけれどわたる。この川。つゝみのかたはいとふかくて。かた／＼はあさければ。

かた淵の深き心はありながら人めつゝみにさそせかるらん假の世のゆきゝとみるもはかなしや身を浮舟を浮橋にしてとぞおもひつゞけける。又一宮といふやしろをすぐとて。

一宮名さへなつかしふたつなく三なき法をまゐる成へし廿日。おはりの國おりとといふむまやをゆく。よきぬみちなれば。あつたのみやへまいりて。



硯とりいでてかきつけてたてまつる歌。

祈るそよわか思ふこと鳴海かたかたひく汐も神のまに／＼  
なるみかたわかの浦かせ隔てすはおなし心に神もうくらん  
みつ汐のさしてそきつる鳴海かた神やあはれとみるめ尋て  
雨風も神の心にまかすらんわか行さきのさはりあらすな  
なるみのかたをすぐるに。しほひのほどなれ  
ば。さはりなくひがたを行。折しも濱千鳥い  
とおほくさきだちて行も。しるべがほなる心地  
して。

濱千鳥啼てそさそふ世中に跡とめむとは思はさりしな  
すみだ川のわたりにこそありと聞しかど。み  
やこどりといふ鳥のはしとあしとあかきは。  
此うらにもありけり。

こととはむ贅と足とはあかさりし我住かたの都鳥かも  
二むら山をこえて行に。山も野もいととをく  
て。日もくれはてぬ。

はる／＼と二村山を行過て猶すゑたとる野への夕やみ  
八橋にとゞまらんといふ。くらさにはしもみ

えずなりぬ。

玉さゝかにのくもてあやうき八橋を夕くれかけて渡りぬる哉  
廿一日。八はしをいでて行に。いとよくはれた  
り。山もととをきはら野を分行。ひるつかたに  
なりて。もみぢいとおほき山にむかひてゆく。  
風につれなき所々。くちばにそめかへてけり。  
ときは木どもゝ立まじりて。あをぢのにしき  
を見る心ちす。人にとへば宮ぢ山といふ。

時雨けり染る千入のはては又紅葉の錦色かはるまで  
此山までは昔みしこゝちするに。ころさへか  
はらねば。

待けりな昔もこえし宮地山おなし時雨のめくりあふよな  
山のすそ野にたけのある所に。かややの一み  
ゆる。いかにしてなにのたよりに。かくてすむ  
らんとみゆ。

ぬしや誰山の裾野に宿しめてあたりさひしき竹の一村  
日は入はてゝなを物のあやめも分ぬほどにわ

たうとかやいふ所にとゞまりぬ。

廿二日のあかつき。夜ぶかき有明のかげにいでてゆく。いつよりもものがなし。

すみわひて月の都を出しかとうき身はなれぬ有明の影

とぞおもひつゞくる。ともなる人。有明の月さへかさきたりといふをきゝて。

旅人のおなし道にや出つらん笠うちきたる有明の月

たかし山もこえつ。うみ見ゆる程いとおもしろし。浦かせあれて。松のひびきすぐく。浪いとたかし。

我ためや涙もたかしの濱ならん袖の湊の波はやすまで

いとしろきすぎきに。くろきとりのむれゐた  
るは。うといふとりなりけり。

白濁に墨の色なるしまつとり筆もなよばゝふにかきてまし

はまなのはしよりみわたせば。かもめといふ  
鳥いとおほくとびちがひて。水の底へもいる。

岩の上にもゐたり。

鷗ある洲崎の岩もよそならず浪のかけこす袖にみなれて  
こよひはひくまのしゆくといふところにとゞ  
まる。このところのおほかたの名は、はま松と  
〔名をはず〕  
ぞいひし。したしといひしばかりの人々など  
もすむ所なり。すみこし人のおもかげもさま  
ざま思ひ出られて。又めぐりあひてみつる命  
のほども。かへすぐあはれなり。

溜松のかはらぬかけを尋きてみし人なみに昔をそとふ  
その世にみし人のこむまごなどよびいでてあ  
ひしらふ。

廿三日。天りうのわたりといふ。舟にのるに  
西行がむかしもおもひでられていと心ぼそ  
し。くみあはせたる舟たゞ一にて。おほくの人  
のゆきゝにさしかへるひまもなし。

水の淡の浮世にわたる程をみよ早瀬の小舟棹もやすめす  
こよひはとをつあふみみつけのこふといふ所  
にとどまる。里あれて物おそろし。かたはらに

水の井あり。

たれかきてみつけの里と聞からにいと、旅れそ空恐ろしき

の夫

廿四日。ひるになりてさやの中山こゆる。（イ无）こと

のまゝとかやいふやしろのほどもみちいとさ

かりにおもしろし。山かげにて。あらしもをよ

ばぬなめり。ふかくいるまゝに。をちこちのみ

ねつゞきこと山ににす心ぼそくあはれなり。

ふもとのさとにきく川といふ所にとゞまる。

越くらす麓の里の夕闇にまつ風をくるさやの中山

あかつきに（イ无）おきてみれば。月もいでにけり。

雲かゝるさやの中山こえぬとは都につけよ有明の月

河をといとすごし。

わたらむと思ひやかけし東路に有と計はきく川の水

廿五日。きく川をいでて。けふは大井川といふ

河をわたる。水いとあせて。きゝしにはたがひ

てわづらひなし。かはらいくりとかや。いとは

るか也。水のいでたらんおもかげをしはから

る。

思ひいつる都のことは大井河幾瀬の石のかすもなよはし

うつ山こゆるほどにしも。あざりのみしり

たる山ぶしゆきあひたり。夢にも人をなど。む

かしをわざとまねびたらん心地して。いとめ

づらかにおかしくもあはれにもやさしくもお

ぼゆ。いそぐ道なりといへば。文もあまたはえ

かゝず。たゞやむごとなきところひとつにぞ

をとづれきこゆ。（イ无）

我心うつゝともなしうつの山夢にも遠き昔こふとて

つたかえてしくれぬひまもうつの山涙に袖の色そこかるゝ

こよひはてごしといふところにとゞまる。な

にがしの僧正とかやののぼるとていと人しげ

し。やどかりかねたりつれど。さすがに人のな

きやどもありけり。

廿六日。わらしな川とかやわたりて。おきつの

濱にうちいづ。なく／＼いでしあとの月かげ

新古今  
旅家  
ことと  
定家  
よおも  
おきつ  
おきつ  
瀬千鳥  
くなく  
しあとの  
月かけ

續古竊族  
安嘉門院  
右衛門佐  
さてもわ  
れいか  
なるみの  
浦なれは  
思かたに  
はとをさ  
かるらん

白氏文集  
縛或人云  
朝食飢渴  
費三杯盤  
夜宿腥臊  
汚牀席

など。まづおもひいでらる。ひる立いらる所にあやしきつげのをまくらあり。いとくるしければうちふしたるに。すづりもみゆれば。まぐらのしやうじに。ふしながらかきつけつ。

なをさりにみるめ計をかり枕結びをきつと人にかたるな暮かゝるほど。きよみが關をすぐ。岩こす波のしろききぬをうちきするやうにみゆるいとおかし。

清見かた年ふる岩にこととはむ波のぬれ衣幾かされきつほどなくくれて。そのわたりの海ちかきさにとどまりぬ。浦人のしわざにや。となりよりくゆりかゝるけふりいとむづかしきにほひなれば。夜のやどなまぐさしいひける人のことばも思ひいでらる。よもすがらかせいとあれて。浪たゞ枕の上にたちさはぐ。

ならはすよ余所に聞こし清見瀉あら磯浪のかゝるれさめはふじの山をみればけふりもたゝず。むかしち

ちの朝臣にさそはれて。いかななるみの浦なればなどよみし比。とをつあふみの國までは見しかば。ふじのけふりのするもあさ夕たしかにみえし物を。いつのとしよりかたえしととへば。さだかにこたふる人だになし。

誰かたになひきはてゝかふしのれの煙の末のみえすなる覽古今の序のこと葉までおもひ出られて。

いつの世の麓の塵かふしのれを雪さへ高き山となしけん朽はてし長柄の橋をつくらばやふしの煙もたゝすなりなはこよひは浪のうへといふ所にやどりて。あれたるをとさらにめもあはず。

廿七日。あけはなれてのちふじ河わたる。あさ川いとさむし。かぞふれば十五せをぞわたりぬる。

冴わひぬ雪よりおろすふし河の川風こほる冬の衣手けふは日いとうらゝかにて。たごの浦にうちいづ。あまどものいさりするをみても。



心からおりたつたこのあま衣はさぬ恨と人にかたるな  
とぞいはまほしき。いづのこふといふ所にと  
どまる。いまだ夕日のこるほど。みしまの明神  
へまいるとて。よみてたてまつる。

あはれとやみしまの神の宮柱唯こゝにしもめくりきにけり  
をのつからつたへし跡も有ものを神はしるらんしき嶋の道  
尋きてわかこえかゝる箱根路を山のかひある知へとそ思ふ  
廿八日。いづのこふをいでてはこねぢにかゝ  
る。いまだ夜深かりければ。

玉くしけ箱根の山をいそけとも猶明かたき横雲の空

あしがら山はみちとをしとて。はこねぢにか  
かるなりけり。

ゆかしさよ其方の雲をそはたてゝよそになしぬる足柄の山  
いとさかしき山を。くだる人のあしもととゞま  
りがたし。ゆさかとぞいふなる。からうじてこ  
えはてたれば。又ふもとにはや川といふ川あ  
り。まことにはやし。木のおほくながるゝをい  
かにととへば。あまのもしほ木をうらへいだ

さむとてながすなりといふ。

東路のゆさかを越てみわたせはしほ木なかるゝはや川の水  
ゆさかより浦にいでて。日ぐれかゝるになを  
とまるべき所遠し。いづの大しままでみわた  
さるゝ海づらをいづことかいふととへば。し  
りたる人もなし。あまの家のみぞある。

あまのすむその里の名も白浪のよする渚に宿からまし  
まりこ川といふ川をいとくらくてたどりわた  
る。こよひはさかはいふ所にとどまる。あす  
はかまくらへいるべしといふなり。

廿九日。さかはをいでて濱路をはるぐと行。  
あけはなるゝうみづら。いとほそき月いでた  
り。

浦路ゆく心ほそさを波間より出てしらす有明の月  
なぎさによせかへる浪のうへにきりたちて。  
あまたありつるつりぶねみえずなりぬ。

あま小舟漕行かたをみせしとや浪に立そふ浦の朝霧

みやことをくへだたりはてぬるも。なを夢のこゝちして。

立はなれようきなみはかけもせし昔の人の同じ世ならはあづまにてすむ所は月かげのやつとぞいふなる。浦近き山もとにて風いとあらし。山寺極楽寺のかたはらなれば。のどかにすぐくて。浪の音松のかせたえず。都のをとづれはいつしかおぼつ

かなきほどにしも。うつ山にてゆきあひたりし山ぶしのたよりにことづけ申たりし人の御許より。たしかなるたよりにつけて。ありし御返しと覺しくて。

旅衣涙をそへてうつの山しくれぬひまもさそしくらんゆくりなくあつかれ出し十六夜の月やをくれぬ形見成へき都をいでしことは神無月十六日なりしかば。いざよふ月をおぼしめしわすれざりけるにやと。いとやさしくあはれにて。たゞ此御イ返事ばかりをぞ又きこゆ。

めくりあふ末をを頼むゆくりなく空にうかれし十六夜の月さきのうひやうゑのかみ爲教の御女。歌よむ人にて。ちよく撰にもたびぐ入給へり。大宮のゐんの權中納言ときこゆ。（るんイ）歌のことゆへ朝夕申なれしかばにや。道のほどのおぼつかなさなどをとづれ給へる文に。

はるくと思ひこそやれ旅衣涙しくんほとやいかにと返しに。

思ひやれ露も時雨も一つにて山路分爲こし袖の雪爲を此せうとのためかぬの君も。おなじさまにおぼつかなさくイなどかきて。

古郷は時雨にたちし旅衣雪にやいとさえまざるらんかへし。

旅衣浦かせえて神なつきしくんと空に雪をふりそふ式乾門院しきかにもむるんのみくしげどのときこゆるは。こがの太政大臣通光の御女。これも續後撰よりうちつゞき二たび三たびの家いへのうちきゝ

常盤井公  
國女後嵯  
峨院中宮  
山深草龜  
后兩院母

後高倉院  
姬宮四條  
院准母

安嘉門院御在所

にも。歌あまたいり給へる人なれば。御名もかくれなくこそ。いまは安嘉門院（即ち）に御かたとてさぶらひ給。あづまちおもひ立しあすとて。まかり申のよし北白川どのへまいりしかど。見えさせ給はざりしかば。こよひばかりのいでたちものさはがしくて。かくとだにきこえあえず。いそぎいでしにも。心にかゝりて。を（給イ）とづれきこゆ。草の枕ながら年さへも暮ぬる。心ぼそさ雪のひまなさなどかきあつめて。

消かへりなむる空もかきくれて程は雲ぬそ雪に成行

などきこえたりしを立かへり。その御返したよりあらばと心にかけまいらせつるを。けふはしはすの廿二日。文まちえて。めづらしくうれしさ。まづなに事もこまかに申たく候に。こよひは御かたがへのぎやうかうの御うへとて。まぎるゝほどにて。おもふばかりもいかゞとほいなうこそ。御たびあすとて御まいり有

ける日しも。みねどののもみち見にとて。わかし人々さそひにしほどに。後にこそかゝる事どもきこえ候しか。などやかくとも御尋候はざりし。

一かたに袖やねれまし旅衣たつ日をきかね恨なりせば  
さてもそれより雪になり行と。をしはかりの御返事は。

かきくらし雪ふる空のなめにも程は雲ぬの哀をそしる  
とあれば。このたびは又たつ日をしらぬとある御返しばかりをぞきこゆる。

心からなにうちむらん旅衣たつ日をたにもしらすかはにて  
曉たよりありときつて。よもすがらおきゐて。都の文どもかく中に。ことにへだてなくあはれにたのみかはしたるあね君に。おさなき人の事さまぐにかきやるほど。れいの浪かせはげしくきこゆれば。たゞ今あるまゝのこ  
とをぞかきつけける。

夜もすから涙もふみもかきあへず磯こす風に獨おきぬて  
又おなじさまにて。古郷には戀しのぶをと  
とのあまうへにも。ふみたてまつるとて。いそ  
ものなどのほしくもいさゝかつゝみあつめ  
て。

いたつちにめかり鹽やくすさひにも戀しやなれし里の蜚人  
ほどへて。このをとゝいふたりのかへりごと  
いとあはれにて。みればあねぎみ。

玉つさなみるに涙のかゝる哉磯こす風は聞こゝちして  
このあねぎみは。中のゐんの中將と聞えし人  
のうへなり。今は三位入道とかおなじ世なが  
らとをざかりはてゝをこなひゐたる人なり。  
そのをとうとのきみも。めかりしほやくとあ  
る返事さまぐにかきつけて。人こふる涙の  
海はみやこにもまぐらの下にたゝへてなど。  
やさしくかきて。

もろともにめかり鹽焼浦ならは中々袖に波はかけしな

此人も安嘉門院にさぶらひしなり。つゝまし  
くする事どもをおもひつらねてかきたるもい  
とあはれにもおかし。ほどなく年くれて春に  
もなりにけり。かすみこめたるながめのたど  
たどしさ。谷の戸はとなりなれども。うぐひす  
のはつねだにもをとづれこず。おもひなれに  
し春の空はしのびがたく。むかしの戀しきほ  
どにしも。又みやこのたよりありとつげたる  
人あれば。れいの所々へのふみかく中に。いざ  
よふ月をととづれ給へりし人の御もとへ。  
朧なる月はみやこの空なからまたきかさりし波のよなく  
など。そこはかとなきことどもをかきて聞え  
たりしを。たしかなる所よりつたはりて。御か  
へりごとをいたうほどもへずまぢみたてまつ  
る。

れられしな都の月を身にそへてなれぬ枕の波のよなく  
權中納言のきみは。まぎるゝことなくうたを

古今戀三友則  
しきたへ  
の枕のし  
たに海は  
あれと人  
なみるめ  
はおひす  
そありけ  
る



爲尹卿千  
首何となく  
雨にはなく  
らぬ花く  
もりさく  
へき比や  
きさらき  
の空  
爲鑑集  
是のこの  
月の桂の  
花雲かす  
むなよそ  
けんに恨

よみ給ふ人なれば。此ほどてならひにしたる  
歌どもかきあつめてたてまつる。うみちかき  
所なれば。かひなどひろふおりもなぐさの濱  
ならねば。なをなき心ちしてなどかきて。

いかにしてしはし都を忘貝涙のひまなく我をくたくる

しらさりし浦山風も梅かかは都ににたるはるの明ほの  
花くもりなめて渡る浦風に霞たふよふ春のよの月

東路の磯山かせのたえより波さへ花のおもかけになつ

宮こ人もひもいては東路の花やいかにとなとつれてまし

などたゞ筆にまかせておもふまゝに。いそぎ

たるつかひとて。かきさすやうなりしを。又ほ

どへす返し給へり。日ごろのおぼつかなさ

も。此ふみにかすみ晴ぬる心ちしてなど侍り。

たのむそよ汐干に拾ふうつせ貝かひある波の立かへる世な

くらへみよ霞のうちはるの月はれぬ心はおなしながめな

しら涙の色もひとつに散はな思ひやるさへおもかけになつ

東路の櫻をみても忘すは都の花を人よとはまし

やよひの末つかたわかくしきわらはやみに  
や。日ませにおこること二たびになりぬ。あや  
しうしほればてたる心ちしながら。三たびに  
なるべきあかつきよりおきゐて。佛のおまへ  
にて。心を一にして。ほくろきやうをよみつ。

そのしるしにや。なぐりもなくおちたるおり

しも。都のたよりあれば。かゝる事こそなど古

郷へもつげやるついでに。れいの權中納言の

御もとへ。たびの空にてあやうきほどの心ぼ

そさも。さすが御法のしるしにや。けふまでは

かけとゞめてとかきて。

いたつらにあまの鹽焼煙ともたれかはみまし風に消なは

と聞えたりしを。おどろきてかへりごとく

し給へり。

消もせしわかの浦路に年をへて光をそふるあまのもしほ火

御きやうのしるしいとたふとくて。

たのもしな身にそふ友と成にけりたへなる法の花の契りは

九條  
廢帝  
姫宮

後鳥羽院  
皇女類聚  
建保五年  
熙子内親  
王御講十三  
九月十四  
日立野宮  
同十九日  
着

續後撰戀

にこりみ  
にうきみ  
もかりふ  
ねはては  
ゆきとの  
かけたに  
もみす

卯月のはじめつかた。たよりあれば。又おなじ  
人の御もとへ。こぞのはるなつのこひしさな  
どかきて。

見し世こそかはらさるらめ暮はてし春より夏にうつる梢も  
夏衣はやたちかへて都人今やまつらん山ほとゝきす  
そのかへし又あり。

草も木もこそみしまゝにかはれと有しにもにぬ心ちのみして  
さてほとゝぎすの御たづねこそ。

人よりも心つくして郭公たゝ一聲をけふそ聞つる

さねかたの中將の五月まで時鳥きかで。みち  
のくにより。都にはきゝふるすらん郭公せき

のこなたの身こそつられれとかや申されたる  
事の候なる。そのためしとおもひいでられて。

此文こそことにやさしくなどかきてをこせ給  
へり。さるほどにう月のすゑになりければ。ほ  
とゝぎすのはつねほのかにもおもひたえた  
り。人づてに聞ば。ひきのやつといふ所にあま

た聲なきけるを。人きゝたりなどいふをきゝ  
て。

忍ひればひきのやつなる郭公雲ぬにたかくいつかならん  
などひとり思へどもそのかひもなし。もとよ  
り東路は。みちのおくまで。昔より時鳥まれな  
るならひにやありけん。ひとすぢに又なかず  
はよし。稀にもきく人ありけるこそ人わきし  
けるよと心づくしにうらめしけれ。又くはと  
くもんるむの新中納言ときこゆるは。京極中  
納言の御むすめ。ふか草のさきの齋宮ときこ  
えしに。ちゝの中納言のまいらせをき給へる  
まゝにて年へ給にける。此女院は齋宮の御子  
にしたてまつり給へりしかば。つたはりてさ  
ぶらひ給なり。うきみこがるゝもかり舟など  
よみ給へりし民部卿のすけのせうとにてぞお  
はしける。さる人のこにて。あやしきうたよ  
みて。人にはきかれじとあながちにつゝみ給

帝王編年  
弘安元年五月十二日  
神興三基  
入洛。是  
依園城  
寺金堂供  
養也。十  
六日吉  
座神興各  
版

しかど。はるかなるたびの空おぼつかなさ  
に。哀なる事どもをかきつゞけて。

いか計子を思ふつるのとひ別れならはぬ旅の空になくらん  
と。文のことばにつゞけて。歌のやうにもあら  
ずかきなし給へるも。人よりはなをざりなら  
ずおぼゆ。御かへり事は。

それゆへにとひ別ても蘆たつの子を思ふかたは猶そ戀しき  
ときこゆ。そのついでに。故入道大納言<sup>家</sup>。草の  
まくらにもたちそひて。夢にみえさせ給ふよ  
しなど。この人ばかりやあはれとおぼさむ  
とて。かきつけてたてまつる。

宮こまてかたるも遠し思ひれに忍ふ昔の夢のなこりを  
はかなしや旅の夢にまよひきてさむれはみえぬ人の倅  
などかきてたてまつりしを。又あながちにた  
よりたづねてかへりごとし給へり。さしも忍  
び給へりしも折から成けり。

東路の草の枕は遠けれとかたれはちかきにしへの夢  
いつくよりたひれの夢にかよふらん思ひをきつる露を尋て

などの給へり。夏のほどは。あやしきまで音づ  
れもたえておぼつかなさも一かたならず。都  
のかたはしがのうら浪たち。山三井寺のさは  
ぎなどきこゆるもいとゞおぼつかなし。から  
うじて八月二日ぞつかひまちえて。日ごろよ  
りをきたりける人々のふみどもとりあつめて  
みつる。じゞうの君のもとより五十首の和歌  
をよみたりけるとて。きよがきもしあへずく  
だされたり。うたもいとおかしくなりまさり  
けり。五十首に十八首てんあひぬるもあやし  
く。心のやみのひがめこそあるらめ。その中  
に。

こそイ  
心のみへたですとも旅衣山路かさなるをちの白雲

とあるうたをみるに。旅の空を思ひをこせて  
よまれたるにこそはと。心をやりてあはれな  
れば。その歌のかたはらに。もじちいさく返事  
をぞかきそへてやる。

戀しのふ心やたくふ朝夕に行てはかへるをちのしら雲

又おなじたびのだいにて。

かりそめの草の枕のよなくを思ひやるにも袖を露けき

とある所にも。又かへりごとをぞかきそへた

る。

秋ふかき草の枕に我をなくふりすてゝこしすゝ蟲のれを

又此五十首のうたのおくに。こと葉をかきそ

ふ。大かた歌のさまなどしるしつけておくに

昔の人の歌。

是をみはいか計かとおもひつる人にかはりてね社なかるれ

とかきつく。じぶうのをとうとためもりの君

のもとよりも。廿首三十イのうたををくりて。これに

てんあひて。わるからん事をこまかにしるし

たべといはれたり。ことしは十六ぞかし。歌の

くちなればやさしくおぼゆるも。返すぐゝ心

のやみとかたはらいたくなむ。これも旅のう

たには。こなたを思ひてよみたりけりとみゆ。

くだりしほどの日記をこの人々の許へつかは  
したりしをよまれたりけるなめり。

立別れふしの煙をみても猶心ほそさのいかにそひけん

又是も返しをかきつく。

かりそめに立別ても子をおもふ思ひをふしの煙とそみし

また權中納言の君。こまやかに文かきて。くだ

り給ひし後は。うたよむ友もなくて。秋に成て

はいとゞおもひいできこゆるまゝに。ひとり

月をのみながめあかしてなどかきて。

東路の空なつかしきかたみに忍ふ涙にくもる月かけ

此御返事これも古郷の戀しさなどかきて。

かふらし宮この外の月みても空なつかしきおなしなかめは

都の歌ども。こののちおほくつもりたり。又か

きつくべし。

しき嶋や やまとの國は あめつちの ひらけ初し

むかしより 岩戸を明て おもしろき かくらんことは

うたひてし されはかしこき ためしとて ひしりの御世イの

みちしるく 人のこゝろを たれとして 萬のわさを

常樂記云 嘉曆三年 十月八日 去終焉 歌ムトセ アマリヨ トセノ冬 ノナカキ ヨノユメ ヲミハナ ヌルカナ テニヨッ 是ニヨッ 按スル 弘安元年 十四也 諸 本十六ニ 作ハモナ ンカナ



ことのはに

なに神までも

あはれとて

八嶋の外なのくめりイ

よつのうみ

波もしつかに

おさまりて

空ふく風も

やはらかに

枝もならさず

ふるあめも

時さたまれば

きみくの

みことのまゝに

したかひて

わかか浦路の

もしほくさ

かきあつめたる

あとおほく

それが中にも

名をとめて

三代までつきし

人のこの

親のとりのわき

ゆつりてし

そのまことをは

もちなから

思へはいやし

しなのなる

そのはゝきゝの

そのはらに

たねをまきたる

とかとてや

世にもつかへよ

いけるよの

身をたすけよと

契りなく

すまとあかしの

つゝきなる

ほそ川山の

山川谷イニイ

わつかにいのち

かけひとて

つたひし水の

みなかみも

せきとめられて

いまはたゝ

くかにあかれる

いなのこと

かちをたえたる

ふねのこと

よるかたもなく

わひはつる

こを思ふとて

よるのつる

なくゝ宮こ

いてしかと

身はかすならす

かまくらの

世のまつりこと

しけれは

きこえあけてし

ことの葉も

枝にこもりて

むめの花

よとせの春弘安三

なりにけり

行衛もしらぬ

なかそらの

風にまかする

ふるさとは

軒端もあれて

さゝかにの

いかさまにかは

なりぬらん

世々の跡ある

玉つさも

さて朽はては

あしはらの

道もすたれて

いかならん

是をおもへは

わたくしの

なけきのみかは

世のためも

つらきためしと

なりぬへし

行さきかけて

さまゝに

かきのこされし

ふての跡

かへすゝも

いつはり

とおもはましは

ことほりな

たゝすの森の

ゆふしてに

やよいさゝか

かけてとへ

みたりかはしき

すゑの世に

あさはあとなく

なりぬとか

いさめなきしな

わすれすは

ゆかめることも

またたれが

引なをすへき

とはかりに

身をかへりみす

たのむそよ

その世なきけは

さてもさは

のこるよもきと

かこちてし

人のなさけも

かゝりけり

おなしはりまの

さかひとて

一つなかれな

くみしかは

野中の清水

よとむとも

もとの心に

まかせつゝ

とゝこほりなき

水くきの

跡さへあらは

いとゝまた

つるか岡への

朝日かけ

八千代の光

さしそへて

あきらけき世の

ななもさかへん

ななかれと

朝夕いのる君か代を

やまこと葉に

けふそのへつる

のこるよもぎと

かこちけるといふ

所のうらが

が

きに。くはうたい

こぐうの

大夫しゆんせい

の

卿の御むすめ。ちゝ

のゆづりとて。はり

まのく

の

にこしべのしやう

といふ所をつたへ

しられけ

け

新勅維二  
平泰時あ  
世中にさ  
成にけな  
り心のま  
まのよし  
てのみし

るを。さまたげおほくて。武藏のせんじへ。こ  
となるそせうにはあらでまいらせられける  
歌。しんちよくせんにも入侍とやらん。心のま  
まのよもぎのみしてといふうたをかこちて申  
されける歌。

君ひとり跡なきあさのみをしらは残る蓬かかすをレイことはれ  
とよまれければひやうぢやうにもをよばす。  
廿一かでうの地とうのひはうをみなとゞめら  
れけり。そののち野中のしみづをすぐとて。

龜古わすられぬもとの心のあかりに野中のしみつけをたにみし  
とよまれたるも。そのこしべのしやうへくだ  
られけるときのうたにて候。〔新勅撰に入侍  
し。永仁六年三月一日書之。〕

このあぶつばうと中人は。定家の息爲家の室  
也。きんだち五人ましゝ候。はりまの國はそ  
川のしやうを爲家よりゆづりをかれ候を。爲

氏たふくたるによりて。をうりやう候。そしや  
うのためにかまくらへくだられ候時の道の日  
記にて候。爲氏もちんちやうのためにかまく  
らへ下向。兩人ともにかまくらにて死去せら  
れし。そしやうは爲氏のかたへはつけられず  
候しとかや。あぶつは安嘉門院の四條と中人  
なり。爲相のはゝなり。

右十六日夜日記以岡山少將光政朝臣筆本書寫以夫木抄  
扶桑拾葉集及他本接合畢

都のつと

宗久

拾遺哀傳  
世中なほ  
にいたと  
へん朝ほ  
ちけこき  
行舟のあ  
ととしら  
浪

觀應<sup>崇光</sup>の比。一人の世すて人あり。みづから銀山  
鐵壁をとをる志なしといへども。古へ樹下石  
上をしめし跡をしたひて。いづくもつゐのす  
みかならねばとおもひなしつゝ。しらぬひの  
つくしをたちいでしより。こゝかしこまよひ  
ありき侍し程に。いさゝかしたより有しか  
ば。大江山の雲にふし。いく野の原の露に宿り  
て。さすらひ侍しほどに。丹波國<sup>イ</sup>はや山といふ  
所に行ぬ。身をかくすべき宿とまではたのま  
ねど。其年をばそこにて過し侍りて。又の春や  
よひばかりに京へのぼりて二三日侍しほど  
に。清水北野の宮などへまうでつゝ。それより  
あづまのかたへ修行におもひ立侍りき。まだ  
夜をこめて都をいづ。有明の月のかげ東川の  
浪にうつりて。なきのこれる鳥の聲とを里の

跡にきこえて。そこはかとなく霞わたれる空  
のけしきいとおもしろし。やがてあふさか山  
をこゆ。杉の下道いまだこごらく。關の岩かど  
ふみならずもたどぐしきほど。都のかたい  
つしかへだたり行も。三千里の外のこゝちし  
て。ふるさとをわかれしよりもなを心とまり  
侍しにや。其日は石山につやし侍りても。一す  
ぢに無上菩提心の願ひを祈申き。あくれば下  
向の人にとまなひて。日出るほどに志賀の浦  
をすぎ。こぎ行舟の跡はるかにみわたされて。  
かの滿誓沙彌がなににたとへんと詠じけるふ  
せいも心にうかび侍り。えいざん<sup>楞嚴</sup>れうごんの  
先德。和歌はけるんのもてあそびなりとてと  
どめられけるが。ある時惠心院にてあけぼの  
に湖水を見いだしておはしけるに。おきに舟  
の行をみて。人のこのうたを詠吟しけるをき  
給て。觀念の助縁と成ぬべかりけりとて。そ

古今雜上  
かゝる山  
りてみ  
ゆかん年  
へゆる身  
は老やし  
ぬると

新古今  
旅今  
年たけ  
又とお  
しとお  
ひきや  
のちな  
けりさ  
の中山  
夜

古今戀一  
よみ人  
するか  
る田子  
うらな  
はあれ  
もきみ  
はこひ  
はなし

のち廿八品十樂の歌などおほくよまれける  
と申つたへ侍るも。さもやとおぼえ侍り。鏡山  
をすぐるとても。すみ染にあらたむるわがお  
もかげもはゞかりある心地して。いざたちよ  
りてともおぼえ侍らず。

立よりてみつとかたるな鏡山名を世にとめむ影もうければ  
さてあづまぢのたびの日かずもやうくつも  
りゆけば。名だかきところぐ。ふはの關。な  
るみ潟。たかし山。二むら山など過て。さやの  
中山にもなりぬ。かの西行がまたこゆべしと  
おもひきやとよめるも。あはれにおもひあは  
せられぬ。さやの中山さよのなかやまといふ  
説々あるにや。中納言師仲當國の任にてくだ  
られけるに。土民さよの中山と申侍りけると  
て。中古の先達などもさやうによまれて侍る  
にや。撰集の中にもみをよぶ心地し侍りし。源  
三位頼政は長山とぞ申ける。此たび一人の老

翁のありしにたづね侍しかば。ことやうもな  
くさやの中山とこたへ侍りき。

こは又いつくとへはめまひこの答ふる聲もさやの中山  
やがてするがの國うつ山をこゆ。薦の下道  
もいまだ若葉のほだにて。紅葉の秋おもひや  
られ侍り。

もみせは夢とやらんうつの山現にみつる薦の青葉も  
清見が關にとまりて。まだ夜ふかく出侍ると  
て。おもひつゞけ侍りし。

清見かた波のとさしもあけて行月をいかによはの關守  
たゝぬ日もありときゝし田子の浦なみにも。  
たびの衣手はいつとなくしほたれがちなり。  
ふじの山をみわたせば。いとふかくかすみこ  
めて。時しらぬ山とも更にみえず。朝日のかけ  
にたかねの雪なをあざやかにみえて。鏡をか  
けたるやう也。筆にもをよびがたし。

時しらの名をさへこめてかすむ也ふしのたかれの春の曙



ふしのれの煙の末は絶にしをふりける雪やえせさるらん  
それよりうき嶋が原を過。はこねにまうづ。げ  
に權現のあらたなる御ちかひならずは。此山  
のいたゞきにかゝる水あるべしとおぼえ  
ず。いとふしぎ也。此所をばこの世ながらのめ  
いどなりと申つたへたるにや。ところのさま  
もなべてにはかはりたることどもおほかり  
し。いつとなく波かせあれていとすさまじく  
みゆ。

箱根路や水海ある、山風に明やらぬよのうさそしらるゝ  
さてさがみのくにかまくら山のうちといふ所  
に行つきて。いにしへゆかりありし人をたづ  
ねしに。昔がたりになりぬときゝしかば。はや  
うすみける所のさまなど見侍りて。いとゞ世  
のはかなさもおもひしられ侍りき。

ふし人の昔の下なる跡とへは空行月も猶かすむなり  
そのあたりにかりのやどりをたづねとゞまり

侍しに。あんぎやの僧などあまたありし中に。  
ひたちの國たかをがといふ所にやんごとなき  
ちしきおはすとかたる人侍りしかば。やがて  
たづねまかりぬ。法雲寺といふ寺あり。宗已庵  
主とて。空岩和尚の高弟にておはしけるが。在  
唐久しくし給ひて。天もくの中峯和尚などに  
もまみえ給ひけるとかや。世をすつるとなら  
ば。かくこそあらまほしくおぼえしかば。其山  
に三間の茅屋をむすびて一夏を過し侍ぬ。又  
甲斐國とくさ山に山ごもりひさしき僧ありと  
きゝしかば。かのむろにもたづねまかりて。し  
ばしありて。又ひたちの國へ歸り侍りしに。む  
さしののはてなき道に行くれて。その夜は道  
づれの僧などあまたありしも。みなかりそめ  
の草の枕をむすびてとゞまり侍りしほどに。  
此野はむかしもぬす人ありてこそ。けふはな  
やきそともよまれけるときゝをきしかど。さ

までやはとおもひしに。昔の衣をさへひきてかへりし白波の。あらかりしなぐりに。いとど旅の床もものうくこそ侍りしか。

いとすはかゝらましやは露の身の憂にも消ぬ武藏の原そののちなをかなたこなたへちしき知偏参し侍りしに。ちゝぶ山といふ所に年久しくすみて。かりにもさとなどへもいでぬひじりありけるを。村の人ひげ僧などなづけたるとかや。いづれの所のいかなる人ともさらにしられず。その所にふゆのほどは侍りて春になりしかばかんづけの國へこえ侍りしに。おもはざるに一夜のやどをかす人あり。やよひのはじめの程なりしに。軒ばの梅のやう／＼ちりすぎたる木のまに。かすめる月のかげもみやびかなる心地して。所のさまも松の柱竹あめる垣しわたしてゐ中びたる。さるかたにすみなしたるもよしありてみえしに。家あるじいであひて。

心あるさまにたびのうれへをとぶらひつゝ。世をいとひそめける心ざしのほどなどこまかにとひきゝて。われもつねなき世のありさまをおもひしらぬにはあらねども。そむかれぬ身のほだしのみおほくて。かゝづらひ侍る程に。あらましのみにてけふまで過しはべりつるに。こよひの物がたりになむ。すてかねける心のをこたりも。今さらおどろかれてなどいひて。しばしはこゝにとどまりて。道のつかれをもやすめよとかたらひしかど。すゑにいそぐ事ありしほどに。秋のころかならずたちかへるべきよしちぎりをきていでぬ。その秋八月ばかりに。かの行衛もおぼつかなくて。わざとたちよりてとひ侍りしかば。その人はなくなりて。けふ七日の法事をこなふよしこたへしに。あへなさもいふかぎりなき心地して。などかいますこしいそぎてたづねざりけ

ん。さしもねんごろにたのめしに。いつはりの  
ある世ながらも。いかに空だのめとおもはれ  
んと。心うくぞ侍りし。さて終のありさまなど  
たづねきゝしかば。いまはの時までも申出し  
ものをとて。跡の人々なきあへり。有待の身  
はじめておどろくべきにはあらねども。無常  
じんそくなるほども今さら思ひしられ侍し。  
さてもこの人は萬にすける心のありし中に  
も。和歌の浦波に心をよせ侍しと人々かたり  
しかば。むかしのそいをたづねて。こゝろざし  
のゆくところをいさゝかやどのかべにかきつ  
けて出侍ぬ。

過にしやよひの十日あまりの比。ひなのな  
がぢのたよりに梅のにはひをたづね。あづ  
まやの軒ばのほとりに月のなさけをもてあ  
そぶことありき。宿のあるじ夜もすがらむ  
かし今のことをかたり合せ。やまともろこ

しの歌をいひ出て。旅のおもひをなぐさめ  
侍しかば。心をかりのやどりととどめなが  
ら。先途を萬里の雲にいそぎ。後會を三秋の  
月にやくして立わかれにし後は。かさねて  
有しちぎりゝをたがへじとて。今この所にた  
づねきたれるに。かの人すでに世をはやう  
せり。一夜のおもかげ二たび見ることをえ  
ず。れんぼのおもひむねをこがし。愛執の涙  
袖をうるほす。是によりてかなしみのうち  
にうごく心ざしを種として。なげき外にあ  
らはるゝことをしらず。たとひ綺語のあや  
まれるたはぶれ也といふとも。なを讃佛の  
はるかなるえむとならざらめかも。

袖ぬらすなけきのもとをきてとへは過にし春の梅の下かせ  
夕風よ月に吹なせみし人の分まよふ覽草のかけなも  
いとどちりの世もあちきなくおぼえて。あり  
かさだめずまよひありきし程に。むろのやし

まなどもすぎてみにしみ侍りき。春より都を  
いで侍しに。又此秋の末にこの關をこえ侍し  
かば。こそべの沙彌能因が。都をば霞ととも後拾に  
立しかど秋かせぞふく白川の關と詠じける  
は。まこと也けりとおもひあはせられ侍り。か  
の能因が此歌のために猶そのさかひにいたら  
でよめらんは無念也とて。あづまへくだりた  
るよしにて。しばしこもりゐて。此國にてよ  
みけるとひろうしけるとかや。一度はうるは  
しくくだりけるにや。八十嶋の記などいふも  
のかきをきて侍り。たけたの大夫國行が水ひ  
んのきけんまでこそなくとも。此所をばいさ  
さか心けさうしてもすぐべかりけるを。さも  
侍らざりしこそ。こゝろをくれに侍しか。

都にも今や吹らん秋風の身にしみわたる白川の關

それより出羽國へこえて。あこやの松などみ  
めぐりつゝ。みちの國淺香の沼をすぐ。中將實

方朝臣くだられけるに。此國には菖蒲のなか  
りければ。本文に水草をふくとあれば。いづれ  
もおなじこと也とて。かつみにふきかへける  
と申つたへ侍るに。寛治七年源河郁芳門院の根合  
に藤原孝善がうたに。あやめくさひくてもた  
ゆくなかきねのいかで淺香の沼におひけんと  
よめるは。此國にもあやめのあるにやと。年月  
ふしんにおぼえしかば。此度人にたづねしに。  
當國にあやめのなきにはあらず。されどもか  
の中將の君くだり給ひし時。なにのあやめも  
しらぬしづが軒ばには。いかで都のおなじあ  
やめをふくべきとて。かつみをふかせられけ  
るより。これをふきつたへたる也とかたり侍  
しかば。げにもさる一義も侍るにや。風土記な  
どいふ文にもその國の古老の傳などかきて侍  
れば。さる事もやとてしるしつけ侍る也。やが  
てこの人に道のあるなどとひきゝて。山



田の里といふかたへゆきぬ。さる海づらになにのいたりもなくつくりたる草の庵なれど。ゆへあるさまにしなしたる庵室ありしかば。そこにとゞまり侍しに。長月十日あまりのことなり。うしろの山よりおろすあらしにたぐひて。鹿のねちかくきこゆ。まへははるく見わたさるゝ波のうへに。ふけゆく月のかげうかびて。友よぶちどりのしばなく聲もいと心すみてぞきこえ侍し。あくればとをき野邊をすぐるとて。その野の名をとへば。これなんはしり井といふ。逢人もなくはるかなるみちに。山だちなどいひて。人をあやまつたぐひおほければ。たび人もはやくゆかんことをのみいそぎはしるゆへに。いひつけたるとかやきゝ侍りしやらむ。ある時はみねのあらしをかたしき。野原のつゆにふし。ある時は磯うつ浪に夢をさまし。うきねの床に袖をしぼる。を

のづから草のまくらによはり行むしのゝゑをきゝて。秋のすゑばに成ぬることをおもひ。あまのときまやにふしなれて。月のでじほの程を空にしる。かやうにいづくともなくあくがれまかりしほどに。しら川のせきをすぎて廿日あまりにもなりしに。ひろき川のはとりにいでぬ。これなんあぶくま川也けり。都にてとをくきゝわたりし所の名なれば。かぎりなくとをくきにけるほどもおもひしらる。わたしもり舟さしよせて。みち行人どもいそぎのりて出侍しに。水上とをくみわたせば。かさなる山の中に煙のたちのぼるところありしを。ふなこどもにとひしかば。元弘後醍醐のみだれにかまぐらのほろびしより此けぶりたちそめて。いまたえぬなりとかたりしこそいとふしぎなりしか。舟よりおりてゆく道のほとりに一のかあり。ゆきゝの人のしわざとおぼえて。あた



拾遺哀傷  
一條攝政  
はにしへ  
はちるお  
や人のか  
しみけん  
花こそ今  
はむかし  
こふらし  
曾丹集  
わかやと  
らの櫻さ  
かれとも  
心をかけ  
てみれば  
たのもし

けむと。はじめてもおもひあはせられ侍り。さて  
みちの國<sup>多賀</sup>たがのこふにもなりぬ。それよりお  
くのほそ道といふかたを南ざまにすゑのまつ  
山へたづねゆきて。松原ごしにはるく<sup>と</sup>み  
わたせば。げになみこすやう也。あまのつり舟  
どももさながら木ずゑをわたるかとみゆ。

夕日さす末の松山霧晴てあき風かよふ波のうへかな

その口くるゝほどに。しほがまの浦に行つき  
ぬ。則神躰はやがてしほがまにてわたらせ給  
ふ。御前につやし侍りぬ。このうらの東にむか  
へる入海にかけはしたかくかけて。うらより  
遠にかよふみちあり。又磯のきはをめぐりて  
山の陰を行道もあり。あまの家どもおほくつ  
くりならべたるにけぶりのたちのぼるも。こ  
れや鹽やくなるらんとみゆ。浦こく船のつな  
でも。所がらにや心ひくすち也。更行月にか  
らの音たえく<sup>き</sup>こえていと心すごし。わが

御門六十餘國の中にしほがまといふところに  
にたるなしと。いにしへの人のいひけんもこ  
とはりなりとおぼえし。

有明の月とともにや鹽がまの浦こく舟も遠さかるらん

それより浦づたひに松嶋にたづね行。げにこ  
ころあるあまのすみかとみえたり。又此所に  
圓福寺とて寺あり。覺滿禪師開山の地也。僧衆  
百人寺住すとかや。寺のまへ。みなみはしほが  
まの浦へつゞきて。千嶋などいへどもなをそ  
のかざりみえず。あるはおきの遠嶋とて。海を  
へだてゝはるか也。そのあひだ<sup>はひに</sup>にこじまおほ  
くみえたり。松しまのひんがしにあたりて。は  
なれたるしまに橋をわたしてひとつの堂あ  
り。五大堂といふ。やがて五大尊をあんちせ  
り。みなみへむかへる山陰の磯ぎはに石をた  
かくたゝみてほそき道あり。海のきはをつた  
ひ行てみれば。すさきに松おひかたぶきて。木

末を浪にひたせり。ゆきかふふねはさながらしづえのみどりをこえ行。それよりすこしへだたりて小嶋あり。これなんをじまなるべし。小舟につなをつけてくりかへしつゝかよふ所なり。此しまに寺あり。來迎の三尊ならびに地藏菩薩をすへたてまつれり。をじまより南一ちやうばかりさしいでて松竹生ならびて。苦ふかく心すごきところあり。此國の人のはなく成にける遺骨をおさむる地也。その外發心の人のきりたるもとゆひなどもおほくみゆ。いとあはれに心すみておぼえしかば。二三日とごまり侍りき。

誰となき別のかすな松嶋やをしまの磯の涙にそみる

いまはとてもとの道へと心ざし侍りしほどに。またむさし野にもなりぬ。こゝにておもひのほかに都の人のしきしまの道のことなどたづね申侍りしにゆきあひぬ。そのほかむかし

しれりし人ひとりふたりありしかば。折からうれしくおぼえて。やがてともなひつゝ。ほりがねの井こゝかしこみめぐり侍りしかば。このたびのおもひでなる心地ぞし侍りし。素性法師がうつ山の山にて在五中將にゆきあひけるも。かくやとおもひやられ侍りき。さても末の松山はことに名だかき所なるを。たゞひとりみちゆきぶりにみすごさむもねんなきやうに侍りしかば。むかしもながらのはしのかなくづ。ゐでのかはづのひばしをだにこそもち侍れ。わすれがたみにもし侍らんとおもひしかば。松の落葉などかきあつめて侍しなかに。まつかさといふ物のありしと。又しほがまの浦にてうつせ貝などやうのものをひろひあつめて侍しを。この人にとりいだしてみせ侍しかば。かく申されし。

末の松山まつかさはきたれとも波たにこさは又やぬれなん



返し。

浪の袖さへぬれぬ末の松山まつかさのかけの旅れに  
さらにくちせぬちぎりの程もおもひしられ  
て。いとゞ旅の衣手もしはたれまさり侍りし  
に。またかの人。

ともなはて獨行けん鹽かまの浦のしほかいみるもかひなし  
かへし。

鹽かまのうらみもはては君がため拾ふ鹽貝かひやならん  
かくのみあくがれゆくほどに。日かずもつも  
りて。さすがふる郷のかたもおぼつかなくて。  
いづくを家路ともさだむるとしはなけれど  
も。たちかへるべき道はいそがれ侍りしほど  
に。一夜のたびのやどにて老の眠をさまして。  
壁にむかへるのこりのともしびをかつげそへ  
て。道すがらの名だかきところぐのこゝろ  
にのこりしを。わすれぬさきにとて。おもひ出  
るまゝに。前後のしだいをいはず。これをしる

しつけて。みやこのつとにとて持のばりぬ。

僧に宗久といふ人あり。心を一枝の花にそめ。  
おもひを八重の風にかけて。よもぎふの跡さ  
だむる所なく。うき草の露さそふ水にまかせ  
てなん。まどひありき侍りけり。三芳野の花の  
春は。山のあなたをかくれがとたのみ。むさし  
野の月の秋は。草のゆかりをやどりにて。あか  
しくらし侍れば。六十餘州のとさう残る所な  
く。三十一字の風情尋ねぬかたもなし。いにし  
へ賢かりし人も。あるは竹を愛する事をこの  
み。あるは詩をつくりし事を身にそふやまふ  
となむしける。此人もかくのごとくなるべし。  
墨染の袖のうちにはとこしなへにちいさき硯  
をはなたず。むかしのつえのはとりには。又み  
じかき筆をなむとりそへ侍りける。剡溪の曉  
の雪をのぞまざれども。すきの友をたづねて  
はそこはかなくなかくがれ。廬山の夜の雨を

伊勢物語  
のねはら  
の松の人  
ならは都  
のつとに  
いさとい  
はましを

きかざれども。沈味のはらわたをくだきて心  
ざしをのべずといふことなし。觀應の比にや。  
大江山生野の道を分過侍けるイてより。陸奥しほがま  
の浪にうかぶまで。名ある野山のするにはお  
もひの露をのこしをき。なさけおほき草木の  
かげには。言のはをかきあつめて。あねはの松  
にはあらねども。都のつととなづけ侍りぬイ元。誠  
にをろかなるもてあそびに似たりとはいへど

も。などか心をつたふるをしへともなり侍ら  
ざらん。たちまちに嗟嘆のこゝろざしにたへ  
ず。いさゝか荒蕪の言葉こそへ侍るばかり也。

于時貞治六年春。再披見之次而記之而已。

後普光園攝政

開路老槐在判

右都のつと以扶桑拾葉集并古寫本按合聊注愚案畢

群書類從卷第三百三十三

紀行部七

小島のくちすさみ後普光園院攝政良基公

をぐら山の麓中院の草の庵を身のかくれがと  
たのみ侍りし比。わらはやみにさへわづらひ  
て。いと露のいのちもけぬべきこゝちして。  
ものこゝろぼそかりしかば。よろづにまじな  
ひ。とし老たる大とこなどかたらひて。さるべ  
きふんつくり。かちなどせしかどなををこた  
らず。けにしこらかしぬるよとおもひやる  
かたぞなかりし。關の東よりは。たよりの風  
につけて。かくばかりなさけなき世に。何のた  
のみにかしはしもやすらふとたびくありし

かば。げに岩はの中とてもものがるまじげなる  
世の有さまに。おりく聞えくる松の嵐のは  
げしさも。いづこを見えぬ山路とたのむべき  
ならねば。七月廿日あまり有明の月まだ夜ふ  
かきに草の庵をたち出て。あづまちとをく思  
ひたつ。心のうちすゞろに物がなし。さるはか  
かる身に。關の外までいでたる事も例なき事  
なれど。報國の心ざしなれば。などか神佛もた  
すけたまはざらんとぞおもひなぐさめし。こ  
よひは先坂本につきぬ。山法師はかひくし  
きものにて。ことの外にまちよろこぶ。草のむ  
しろ露うちらはらひて。こよひのおましはこの

歴代皇紀  
云文和二年六月二日  
臨幸山寅  
門同赴十  
美濃國  
着御垂  
井宿小島  
行宮同  
九月三日  
還御土  
居門皇  
續神皇正  
統記云文  
和二年に  
南方の軍  
勢猛將如  
雲謀臣  
如雨と  
や云へき

八幡山よ  
入間六月  
二日延暦  
寺に臨幸  
濃州に御  
下向あり  
古今雜下  
ものよ  
へな  
世のうき  
めみえぬ  
山ちへい  
らんには  
おもふ人  
こそほた  
し成けれ  
眞基子時  
關白前左  
大臣從一  
位三十四  
古今秋下  
しら露も  
時雨もい  
たくもる  
山はしら  
葉のこた  
す紅葉し  
にけり

坊にとけいめいせしかば。その夜はかくてあ  
かしぬ。又の日もをこり日にて。いたづらにな  
がめくらす。あくる朝舟さし出してむかひの  
岸につく。このわたりはほどなかりしかど。小  
舟のくりくとするやうなるに。のりたる心  
地いとむくつけし。けふぞからうじて。もる山  
につきぬ。名はことぐしけれど。さして見所  
なし。かのつらゆきが。時雨もいたくといひけ  
るはこのわたりにやと。ふる事ぞ先思ひ出ら  
れし。

もる山の下葉はいまた色つかてうきにしくる、袖を露けき  
こゝちわびしくて。おもひつゞくるまでもな  
し。かくて行ほどに。野ぢしのはらなどいふ所  
あり。是歌枕にてみゝなれしかど。まことには  
けふぞわけそめ侍りし。

露けさを思ひなくらん人もかな野路のしの原忍ふみやこに  
又かゞみといふ山をすぐ。立よりてみまほし

かりしかど。ゆくさきとをくいそぎしかば。た  
だ道行ぶりにて過ぬ。

はるく<sup>1</sup>と行末遠くかゝみ山かけて曇らぬ御代そしるゝ  
人しれぬ心のうちのあらましも。ことふきめ  
きていと物侘しきにや。おいその森といふ所  
は。たゞ杉のこすゑばかりにて。あらぬ木はさ  
らにまじらず。山もとかけてながめのすゑい  
と見所おほし。道とをく行くれぬれば。こしか  
きすへてこよひ一夜の草のまくらもいづくに  
かと里とふに。としたけたるあまひとり出て。  
このあたりのさいかくありげなりしかば。こ  
のもりのけしきこそいとなさけふかくみえ侍  
れ。名をばなにと申にかとたづねしかば。この  
あまのいふやう。これなんふるき名所に侍り  
ける。尼が年の名にて侍るよしをぞこたへし。  
かゝるもののなかにも。心あるものいひ。さら  
にゐなかびたり共おぼえず。いとあはれにて。



今はこの老その杜そよそならぬみそちあまりもすきの下影  
みだりごこちなをむづかしければ。一夜はと  
どまりつゝ。ま日はかりにてありし道のゆく  
さき。するくともあらで。ひかすのみぞつも  
りける。又やす川とかやをわたるとて。

いつ迄と袖うちぬらしやす川の安けなき世を渡りかぬらん  
いぬかみ。とこの山。いさや川などいふ所は。  
いたくめにたつともなければ。いづくともお  
もひわかず。されど名ある所はたづねまほし  
かりしを。かゝる旅の空にすきくしからん  
もうるさくてすぎ侍りし。ひなのおとろへは。  
げにのちまでもうき名もらすなと。この山人  
にくちかためまほしくぞ侍りける。伊吹のた  
けとかやは。雲ぬのよそながら。ちかくにイと  
ふもとをゆくやうにぞみわたさるゝ。小野と  
かやいふ所にて。三寶院賢俊僧正に行あふ。近江  
のかたへ急ぐこと有りて侍るよし申しか

ば。もりの陰なる堂のかたはらにこしききす  
へてたいめす。かゝるわづらひに。ひなのなが  
路のおとろへ。ことの外におどろきたるけし  
きなり。やがて都のかたへ過ぬ。このところの  
おなじ名は。ふるき歌などにもおほく侍れど。  
これたかのみこのすみかならねば。思ひやる  
ももの浅き心地ぞせし。かくて行ほどに。松の  
陰そびえたるいはねよりわきいづる水のなが  
れいとさきようすみて。まことに世にしらぬと  
ころとみゆ。こゝはこさめがゐるなるべし。やが  
て又かけはしありて。ちいさきたうきよげな  
るに。これも岩ねよりいづる水たぐひなし。ひ  
さごといふものめし出て。手あらひなどして  
すぐ。いとめでたき水なり。

今よりやうかりし夢もさめかゝるの水の流れて末をたのまむ  
ふはの關屋はむかしだにあれにければ。かた  
のやうなる板びさし竹のあみどばかりぞのこ

りける。げにあき風もたまるまじうみえたり。  
 昔たにあれにしふはの關なれば今はさながら名のみ成けり  
 關の藤川はそのなもなつかしければ。わきて  
 こととひ侍し。名はことぐしけれど。さしも  
 なき小川にて。よろづ代までのながれともわ  
 かれず。されどたえせぬためしはいとたのも  
 しくて。

さても猶沈まぬ名をやとめましかる淵瀬の關の藤川

みののおやまとかやは。はやかの小嶋のあた  
 りちかく聞しかば。行ききもいまはほどあら  
 じと。けふぞちと心地もおちる侍りし。名にし  
 おふ一松もなをそのまゝにて。むかし人のイの跡か  
 はらぬよし。このあたりのしもべかたりしを。  
 よくもたづねきかざりしぞ後までくやしかり  
 し。

うかりけるみのお山のまつこともけに類なき世の例かな  
 かくて二三日のみちを五六日のほどにやうや

うとからうじてをしまにまいりつきぬ。みも  
 ならはぬ所のけしき。左も右もそびえたる山  
 に雲いとふかくかゝりてさらに晴まなし。げに又  
 なうあはれなるものはかゝる所なりけり。時  
 しも秋のみ山の有さま。たゞをしこめて。いひ  
 しらぬもののあはれいはんかたなし。鹿の音  
 蟲の聲もかの松陰にて聞し秋はものの數なら  
 ずおぼえしは。たゞ所からの思ひなしにや。を  
 ばすて山ならぬといとなぐさめかねぬべき旅  
 の空も。あまりによりづたどぐしかりしか  
 ば。二條中納言良冬のたちいりたる所へまづおち  
 つきぬ。この宿の有さま。かやが軒端竹のあみ  
 戸。まばらなるすのこより。風もたまらず吹あ  
 げて。一夜だになをやどりがたし。いま一口も  
 といそぎて。けふぞやがて小島の後光嚴頼宮へまい  
 りし。雨さへかきくれて。なをしの袖もいとど  
 しほれはてぬ。冠影かげのめづらしきにや。山人

めくものおほく見侍りし。内裏のありさまは  
このあたりにまねなるいたぶきなれど。山  
はさながら軒ばにて。雲霧のはれまなし。やが  
て御前のめしありて。このほどの世のしきな  
ど奏す。山よりの御みちのわりなかりし事な  
ど。さまざま哀なる事をぞ仰ごとありし。こよ  
ひは瑞岩寺とかやいふ寺尋出てとどまる。此  
堂いと見所多し。山陰ふかう作りなして。岩木  
水のながれ。都にてもかゝる所はおかしかり  
ぬべき山水のさまなり。又の日もなを日一日  
やみくらす。にがしくしてその夜はあけぬ。

たびねの心ぼそさいとやるかたぞなきや。

いと、又うきに憂そふ旅れかなうかれ心ちの夢の紛れに

時光朝臣のさぶらふ所をあけて。やすみ所に  
給しかば。二三日ありてぞうちずみの心にて  
ありし。賢俊僧正もて世のありさま身のしき。  
さまざまに奏しかば。是までまいりぬるうへ

は。床をならべし契りさらにかはり侍らじと  
仰ごとありしに。

しらさりき習はぬ山のかけまでもゆかならへん契有とは  
神代をかけたるふることどもとりいでたるも  
いとおこがましくや。そののちは朝夕なれつ  
かへ侍事むかしにたがふ事なし。鎌倉大納言<sup>兼氏</sup>  
のぼり侍るべき・勅書<sup>よし</sup>の請文申侍るとて。たゞ  
これをのみまつことにて。おほやけわたくし  
なくさみ侍し。八月五日雨のうちに題を給は  
りて。

戀天象

倭を野山の末にのこせとや月をかたみに契置けん

旅曙

横雲の波こそ峯もほのくと頼てをしまのかけそ明ゆく  
此所をばはじめてつかうまつりたるよし。人  
人侍りしやらん。かずくおほかりしかど  
みな忘ぬ。又たうぎのいたづらごとは中々見

ぐるうてみなもらしつ。御製などのみゝに  
たつもおほかりしかどみなかきとゞむる事も  
なくて。世の人は中々とりをきても侍らん。尋  
いだしてさらにくはふべきなり。八月十日比  
いつの日にてありしやらむ。時雨にさきだち  
て。いろふかき紅葉の枝にくれなるのうすや  
うむすびつけられて。仲房朝臣<sup>ヒイ</sup>もてくだされ  
たりし。

またしらぬ深山隠に尋きて時雨もまたぬ紅葉をそみる

御返し。

故郷に歸るみゆきの折からや紅葉の錦かついそくらん

八月十日あまりは。日數のみふる雨の中。いと  
どはれぬ雲ゐは山たかき心地してものむづか  
し。軒はさながら雲霧にとぢられて。みねの松  
かせあらましく吹おろして。よろづにすさま  
じかりし事のみぞおほき。かゝるところを百  
敷とたのみたるもありがたき世のためしなれ

ど。むかし木の丸殿などいひけるもかくこそ  
はありけめ。此國のみゆきのためしも。<sup>四十四代</sup>元正天  
皇などたび／＼あとある事なれば。おどろく  
べき事ならねど。ならはぬ山の御すまる猶世  
づかぬ心ちして。都の戀しさぞあけくれの思  
ひにてありし。名だかきなかばの月をさへへ  
だてがほなるあま雲はなをはれやらす。二千  
里の外の古人のこゝろもかくこそはととりあ  
つめてものあはれなり。夜一よ吹つる風明方  
よりしづまりて。今夜の月はなをわするまじ  
きにやとて人々に短冊たまはす。殿上の御遊  
などにはあらで。めなれぬえびす衣のうへ人  
どものけしき。ものゝふめきたれど。をの／＼  
おもひの露をよすがにて。なをことの葉の花  
をあらそふなるべし。夕風又ふきたちてほど  
なくすみのぼり。月山陰までものこりなうさ  
し入ていとくまなし。くもりなき御代のため



しとかねてしらるゝ心ちせしかば。行すゑか  
けていとたのもし。

名にたかき光をみよのためしとや最中の秋の月はすむらん

鎌倉大納言尊氏ののぼりけふくとのみ聞えしか

ど。たゞおなじさまにて日かず經しかば。心も  
となしとて。度々御つかひをつかはす。今はほ  
どあるまじきよし。おほやけわたくしへうけ  
文の有しにぞ。たれもくあんどしたるやう  
に侍し。都よりあまたまいれる殿上人などは。  
をのがさまぐうちむれて。こゝかしこの名  
所などへ行てあそび侍りしかど。なを心に茂  
る八重むぐらの露けさに。さやうの友にだに  
さそはれず。あかしくらすも。たゞ我身ひとつ  
の秋とのみおぼえて。いとなぐさめがたし。し  
んによやうらうの瀧などいふ所へ行て。かの  
ながれにふれぬれば。やまひもやがていえ侍  
るよし人々申あひしかど。さやうの所へもさ

し出す。夜ふかききぬたの音など聞えるに  
ぞ。人のすみか有とも覺え侍りし。ねざめの里  
とかやいふも此わたりぞかし。げにあかし  
ねたる草の枕は。ことはりすぎたる秋の夜な  
り。内裏の庭もさながら田面につゞきて。いな  
ばの山も遠からねば。又かへりこむ都のたの  
みならでは侍事もなし。

思ひきや思もよらぬかりねしていなはの月を庭にみんとは  
かゝるいたづら事をのみおもひつゞけてぞ心  
ひとつをばなぐさめ侍し。八月のすゑかまく  
らの大納言すでに尾張に着ぬと奏せしかば。  
同廿五日をしまの頼宮よりたるゐに行幸あ  
り。そのありさま。非常の儀にて腰輿にめさ  
る。朝衣の人はなくて。えびすごろもとかやの  
すがためづらしき事也。おもひくなりし出  
たち中々見所もありしにや。ほうれんのかた  
びらを腰輿にわたしてかけたりし。ぞはじめた

る事なれど。かくもありぬべき事なり。ゐなか  
の民どもさながらみまいらせんもかたじけな  
き事なれば。かやうに申さたし侍りし也。たる  
ゐの頓宮は當國の守護頼康うけたまはりてつ  
くりまうく。黒木の御所こしばがきなどゆひ  
わたしてかうくしく。廻立殿大嘗宮などの  
心地ぞせし。入御のほどもみるものどもい  
づくよりかあつまりけむいとおほし。實澄朝  
臣御劔にさぶらふ。其儀常のぎにたがふ事な  
し。やすみ所は風もたまらねば。別の宿たづね  
出て。よに思ひなしへだたりたるやうにおぼ  
ゆ。さても此わたりは名所などにもいたくも  
てあつかはぬ所なれど。かのたかつねの朝臣  
の美濃の國司になされてくだりけるときに。  
うつれるかげはとよみけるこのたる井の水の  
事にや。かくいふほどに。廿六日の夜。あふみ  
の凶徒ばらはちやとかや。この國へうちいる

べしとてひしめく。都のみちはこのほどはや  
ふたがりたると聞しだにこゝろぼそかりし  
に。こよひはにがくしくひしめきて。すでに  
はや近づきたるよし申のゝしり侍しほどに。  
人々内裏へつどひまいる。いかなるべきにか  
といと物さはがしくて。かくて世をやつくさ  
んと心ぼそさぞいはんかたなき。されど曉が  
たに別の事侍らぬよし人々申侍りしかば。夢  
のさめたる心ちしてをのくまかでぬ。馬ど  
もようゐし。臨幸もいづかたへかとまでさた  
ありし。そのおりのさはぎ。申ばかりなかりし  
などぞ。中々いまの思ひいでとも申侍りぬべ  
き。さて九月三日に將軍<sup>尊氏</sup>たるゐにつく。そのあ  
りさまめでたういみじかりし事なり。まへ二  
三日は武士どもひますきまなくしゆくゝに  
つく。もちつれたる旅のおもにども道もさり  
あへずぬのびきにつゝきて。よろづいまで心

地ひろくとおぼえ侍し。大納言は錦のよろひひたゝれに小具足にて。栗毛なる馬に乗。さきうちは。ゆふき小田佐竹などいふものどもなり。いろ／＼の具足ども。水のたるやうなるかぶとのくはがたさにきらめきて夕日にかがやく。一日のまいりなどの心地して。をのをのきら／＼しくぞみえし。後陣には仁木兵部大輔。小山などいふ東國の武士かすをつくし。てのこるものなし。將軍の馬の先には。命鶴丸心詞もをよばず出たち。坂東第一と聞えしくろき馬にぞのりたる。其ありさま見所おほし。年たけたるあげまきのすがたもすべてあしくもみえず。まことにものにあひぬべきけしき人にすぐれたり。引馬十疋いづれも／＼ころも及ばぬものどもなり。東國の名馬はのこりなくのぼりたるよしぞ聞えし。佐竹ぶちなどいひし大馬どもその數おほし。將軍やがて

すぐに内裏へまいる。頼宮の外にめし具したる軍兵をばとどめ置て。たゞ一人まいる。庭上に入。中門の前に立て。頭弁俊冬朝臣もて事のよしを奏す。西園寺左衛門督實俊いであひて引導す。弓矢を取て堂上の御前のめしあり。ほどなくまかりいづ。宿所はたる井の長者が家也。此所ははじめ内裏になり侍しほどにおそれ申けるを。たゞさぶらふべきよし仰ごとうけ給はりてとゞまりけるとぞ聞えし。おほかた垂井へ臨幸の後は。しんでんをさりて遊興電興イものの音をもとどめて。ふかくおそれ申けるとぞ聞えし。いと有がたき事也。げに仁義をもわきまへてこそこれほどの運をばたち侍るらめと返々たのもしくぞうけ給はりし。鎌倉右大將俊朝建久にはじめて上洛せられけるもたゞかくこそは有けめ。都にてありしかば。主上晝の御座に出御。頼朝卿まごびさしの圓座に祇候のよ

し日記に見え侍る。さやうのしきも。御旅の御所なればにや。さたにもをよばざりしやらん。おなじき五日貢馬十ひき内裏へたてまつる。其外別して名馬などとてをくりたびたりしかば。かひある心ちぞせし。十五夜に。みちにてよみたりしうたとて點申されしかば。此みちにゆるされたる事もなくてはぐかりありしかど。いなみがたうて。おづ／＼ぞ墨をつけ侍し。おほかたこのたびの御旅のなぐさめは。たゞよるひる詩歌にてぞありし。お中人は連歌などいふことをこのむものにて。點などかた／＼よりおほく申侍りしかど。みなむづかしうて返しぬ。いまは都のいでたちならでは何事かあらむ。九月九日は重陽の御會有べきとて。短冊をくり給はる。文人は右大臣以下近衛四韵の詩をたてまつる。まづ詩の懷紙を講せられて。次に歌の短冊をかうせられけるとぞ。

此日はまいらざりしほどに。あくる日一座を申いだすとして奏し侍し。

けふみては  
もなにかせん  
宮人の詞の玉のいかならんきのふをよそにきくの白露

やがて御返しをかきくはへ給はりたりし。あふむがへしなどいふは常のことなれど。これはことに心にしみておもしろくぞ覺え侍りし。けふにてありしやらん。にはかに風いみじう吹出て。くれ行まゝに物もみえず。おびたゞしくふきまどはして。山の木どももおほく吹たふし。よもの草むらはさらにもいはず。ひちかさ雨とか降出て。神なりひらめきおちかゝる心地していといみじ。雨のあしあたるところはみなとをりぬべうはらめき。かさもとりあへず。あはたゞしければ。こはいかなる事にかと。又こゝろまどひいはむかたなし。すべて野も山もはや水になりはてゝ。内裏のみちもとちめはてぬ。夜に入てなをおびたゞしく吹



まさる風たゞことならず。頼宮はたゞくろ木のはしらなればつよからず。かくてわたらせ給べきならねば。民安寺といふ所へ臨幸あり。三寶院僧正もとよりやどり侍けるを。あけて御所になさる。いとあはたゞしき事也。この風のまぎれに。いとゞみだりごちもわびしけれどをさへて内へまいる。たゞひなき雨風也。還幸をそくなる事あしき事なるよし奏せしかば。武家よりもやがてあす行幸あるべきよしをすでに申て侍ると仰事ありて。人々いそぎたつ。このほどははれの行幸とて都の人々めされしかど。是はまたにはかごとなれば。もとの非常の儀にてとさだまりぬ。おもひ／＼にひしめきて。つぎのあしたもとの頼宮修理して還御あり。鎌倉宰相義中將公たる井につくと聞えしかば。都の道もあきてめでたしともなのめならず。やがてこよひ宰相中將參内す。そ

のしき將軍まいりしにかはらず。こよひはこゝに月さへくもりなくて。馬くら物の具のかざりもいとゞみがゝれて。見所おほかりしとぞ見る人々もかたり侍りし。つぎの日御馬二疋まいらす。將軍いさゝか違例の事ありて。行幸延引す。同十九日還幸あり。公卿どもは朝衣にて供奉す。松殿中納言忠つぎ。四條中納言隆もち。左衛門督實とし。仲房朝臣などなり。御劔隆右朝臣。おなじく衣冠にてさぶらふ。其ほかはもとのすがた共色々にまじりたる。めづらしく見所あり。御みちのほど物みる山賤しはふる人さへたちこみて。所せきまでぞありし。權大納言今出川宰相中將などは。なをえびす姿にて行幸には供奉せず。御とまり／＼にぞまいりあひける。これも二條中納言などともなひて。こよひはあふみの大覺寺といふ所にぞまいりあひ侍りし。夜にいらて雨いたう

神皇正統記云大  
統記云大  
羽林還幸  
のここと  
沙汰あり  
て九月廿  
一日には  
御京着前  
陣羽家  
相公に大  
後陣に大  
樹供奉し  
給ひて殿  
重の御儀  
式にてぞ  
わたり給  
ひける

二十日

ふりて。次の日の朝もなをやまず。出御もい  
かとおぼえしかど。鎌倉の宰相中將すでに先  
行のよし申侍りしかば出御あり。今日人々み  
な戎衣にて供奉す。こよひは敏満寺といふ寺  
にいらせおはします。又の日は空もはれて。人  
人みな朝衣にて供奉す。むさてらに御つきあ  
り。それより石山へつかせたまふ。本堂の前に  
御所をまうけたり。しほならぬ海こゝもとに  
見えていとおもしろし。観音の利生方便もこ  
のみゆきにはいとゞ光そふらむとめでたし。  
けふは洞院大納言都よりまいりあひて供奉の  
人にくはゝる。近衛司どもゝ。雅朝實時隆さと  
隆家朝臣。朝衣にてまいりあひて御こしの左  
右に供奉す。えびす衣の次將どもは御後にう  
ちかこみたり。義詮朝臣小具足にて先陣つか  
うまつる。尊氏卿同御後に供奉す。その軍兵二  
三万騎もありつらん。二日ばかりはつゞきた

るとぞ聞えし。やがてもとの内裏へいらせお  
はします。宰相中將陣中にしきがは敷て行幸  
待奉る。還幸のしきは例にたがふことなし。さ  
れどなを戎衣の人々門外まではまいりたり。  
南殿に御輿よる。公卿朝衣の人々ばかり庭上  
に候す。雅朝朝臣御劔に候す。百敷もみしにか  
はらず。典侍内侍さぶらふ人々。ありしながら  
のおも影めづらしといふもなをよのつねな  
り。此はどうかりつる旅ねの夢のこりなくて。  
いまはいはんかたなうめでたし。京にある人  
人もふしぎの事にのゝしる。ありがたかりけ  
る聖運なれば。行すゑもいとたのもしかるべ  
きことにこそ。さても九月の還幸いかゞとさ  
たありしに。元正天皇靈龜三年。當國四十四代の國のに行  
幸ありて。いまのやう老の瀧など御覽ありて。  
この瀧のめでたきゆへに。年號をさへあらた  
めて。靈龜三年を養老になされて。還幸ありけ

るも。九月の佳例とかや。たゞとをの宿禰かん  
がへ申侍し。この度の儀にかなひたる勘例こ  
とにめでたしとぞきたありし。かやうにため  
しすくなかりつる世のしき。後のものがたり  
にもと思ひて。ありのまゝの事を旅ねのつれ  
づれにわすれじと。たゞうがみのはしなどひ  
きやりて。書つけ侍ることもいとみぐるし。す  
ぎ行かたはわすれがたきならひなれば。かゝ  
る一筆のことはものをづからしのお草のた  
ねとはなとか成侍らざらん。

此さうしは。をしまにて書たりしまゝなる。あ  
まりにいふばかりなきことどもおほし。歌な  
どひきなをすべし。めいは内の御かたの御手  
なり。

良基公御判

依<sub>レ</sub>持是院法印蘆大僧都  
妙椿見索不<sub>レ</sub>省<sub>ニ</sub>春蚓秋蛇之  
嘲<sub>ニ</sub>終<sub>ニ</sub>書功<sub>ニ</sub>矣。

右本者後善光園攝政殿述作也。以<sub>ニ</sub>彼眞筆之  
本<sub>一</sub>將軍家  
御本臨<sub>ニ</sub>寫<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>校<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>。尤可<sub>レ</sub>謂<sub>ニ</sub>證本<sub>ニ</sub>者  
也。

文明第二之曆蜡月上浣

左近衛權中將藤原朝臣判

かきをきし昔をきくも君がすむ國におさまる道はありけり  
此一冊者於<sub>ニ</sub>西周之旅店<sub>一</sub>一覽之次所<sub>レ</sub>染<sub>ニ</sub>禿  
翰<sub>一</sub>也。依<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>急本<sub>一</sub>卒摸<sub>ニ</sub>寫<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>。追可<sub>レ</sub>清書<sub>ニ</sub>而  
已。比興々々。

天文廿一年閏夏正十又九

戸部尙書郎藤判

右小島の日すさみ以横田茂語職及元祿七年印板扶桑拾  
葉集本校合畢

## 住吉詣

寶篋院贈左大臣義詮公

貞治三年卯月上旬のころ。津の國難波の浦み  
むとて。かの所にまうでけるに。淀より舟にの  
りて。この河面かしこの山々をながめ行に。  
ころしも卯月のはじめなれば。ちり残りたる  
岸の山吹を見れば。春のなごりぞ忍ばる。垣  
ねの雪か卯花に山郭公ぞをとづる。夏山の  
しげみがするを見わたせば。これなん八幡山  
鳩の峯などふしおがみて。

いはし水たえぬ流をくみてしる深きめくみそ代々に變らぬ  
山崎。たから寺。田邊の里などうち詠め行に。  
江口の里といひてしばし舟をとどめてかなた  
こなたをながめありきけるに日もくれぬ。い  
にしへ西行法師この所にやどりせしことおも  
ひ出られて。

惜みしもおしまぬ人もとまらぬ假のやとりと一夜れましな  
夜明もてゆくほどに長柄といふ所につきぬ。

いにしへは此所に橋ありて人のゆきかよひし  
が。今ははしの跡とてはわづかにふるくむば  
かり也。まことや古きためしに人のひくめる  
はことほりにぞ。

くち果し長柄の橋の長らへてけふに逢ぬる身をふりにける  
やうく難波の浦につきぬ。聞しよりは見る  
はまされり。蘆屋のさとみつの浦などいふ。よ  
せくる波にをしやかもめの水をもてあそびて  
たはぶるゝさまいとおもしろし。

難波かたあしまの小舟いとまなみ棹の雪に袖を朽ぬる  
みつの浦より舟に乗てこゝかしこを見るに。  
聞しより見るはまされりけふ社は初てみつの浦の夕なみ  
たみのの嶋にあらてみれば。あまの釣する  
船共あまた岸のほとりにこぎよせてやすらひ  
むたり。つりのうけなはぬれたるあみを木の  
枝にかけをきたるを見て。

雨ふれとふられとかはくひまそなき田蓑の嶋の蜚のぬれ衣



それより南にあたりて野田の玉河と云所あり。このほとりに藤の花さきみだれたり。

紫の雲とやいはむ藤のはな野にも山にもはひをかゝれる

是よりすみよしにまうでんとて天王寺にたちより見れば。聖徳太子四天王ををさめをき給ふ。又みづからの御像をすへをき給ふ。石の鳥居龜井の水など心しづかにながめて。

万代をかめ井の水に結びなきて行末長く我もたのまむ

それより住よしにまかりて。四社明神をおがみ奉りて。

四方の海深きちかひやひのものと民もゆたかに住吉の神

この御神は和歌の道に心ざしふかき人をよくまもらせ給ふとむかしよりいひつたへ侍り。ことに秀歌を好む人この神にまいりて祈誓申せば。かならずその道にかなひけるとぞ。

神代より傳へつたふるしき嶋の道にこゝろもうとくも有哉濱べにくだりて松の木陰にたちより見れば。まことに鴈なきて菊の花さくと在原中將が詠

せしことおもひ出て。

住よしの岸によるてふしら浪のしらす昔を松にとふらん  
はるかに海面をみれば。西は淡路嶋須磨明石の浦などいふ。舟にてわたり見ばやなどおもへど。又世中の鉾楯により人のをそれもいかなれば。一夜をあかし都にかへりぬ。

あはちかた霞をわけて行舟のたよりもしらぬ波のうへ哉  
須磨の浦をみれば。しほやくけぶりのたちのぼるを見て。

立のほろもしほの煙徒らにたかおもひよりくゆるなるらむ  
あかしのうらを見て。

よみをきしことの葉はかり有明の月もあかしの浦の眞砂地  
また御前にまいりて。いとま申て下向し侍りぬ。

みつかきのいく千代までもゆくすゑを守らせ給へ住吉の神  
此一巻所々のさまを筆にまかせて書しるし侍り。又時の興にもなるべきかとなり。

卯月上旬

義詮判

鶴ちよどのへり

右住吉詣以宮部義正藏本書寫以扶桑拾葉集校合畢

## 道ゆきふり

前伊豫守貞世朝臣

きさらぎ廿日の夜ふかく。かすみつゝ山のはちかき月かげに。中なる川うちわたすほど。袖のしづくいとところせきたびの衣のあさたちそむるだに。かくしほれぬるに。まいて行す

ゑの八重のしほぢのかいのしづく思ひしられたり。其日は山崎につきぬ。こゝはつねにめなれしところなれど。このたびの名残にや。ことならぬ草木の色もいと物かなし。津の國のあぐ川にいたりぬるにも。ちりの身のゆくすゑいかゞとおぼつかなし。せ川小屋野などいふところの下すどものものみ侍るとて。思ふ事なくいそがはしかつぬけしきも。今はうらやましくおぼゆ。

かく計り苦しからずは蘆火たくこやの中にも世をや盡さん川づらにそひて木ふかく物ふりたる山あり。鳥居たゝり。そのあたりの人に尋侍れば。これ

は昔足姫のもろこしの三の國したかへたまひかへりたまひける時。この山によろひかぶとなどうづみ給けるよりやがて武庫の山と申となん。

このたびもあらし波ちのさはりなく猶吹をくれむこの山風古集にも入江のす鳥などよみ侍るとぞ。

むこの浦の入江のす鳥いかにしてたつ跡にしもとまる心そうちでのはまうちすぐれば。ざいご中將のわがすむかたといひけんあしやのさとになりぬ。それよりこなたに磯ぎはちかき松かげに玉垣神さびて鳥居などたてるところあり。北野の宮の此ところにやうがうしたまひてよりのち。御影のまつ原と申なるべし。

君かためくらかるましき心には神も御影をうつさゝらめやほどなくいくた川につきぬ。此川に鳥いしますらおのつかとて。道のべちかく村だちたる。松風かすかにをとづれしも。なにとなくきゝ

すぐしがたかりき。さてみなと川といふところ  
ろに一夜とどまりて。あけしかば。みやこより  
したひ來つるともだちひとりふたり。今はと  
あかれ行ほどに。いとどこゝろぼそくて。いき  
うしといひつべきほどなり。

旅衣あきたつ袖のみなと川かはらぬせにとなやたのまむ  
須磨になりぬ。ところのさまはあながちにこ  
れぞと目とどまるばかりのふしはなけれど  
も。山かたかけたる家どもの物はかなげなる  
に。しばがきうちしつゝ。竹のすがきのふしに  
くげにみえたるも。彼むかしの御まし所のさ  
まおもひよそへられたり。こゝぞ關屋の跡と  
ばかりいへど。このごろはあれたるいたやだ  
になく。まいてもる人もなかりき。いそぎはち  
かく行めぐるあまのを舟みゆ。かのしはちが  
明石のすみ所にさしわたしけん浦づたひもこ  
こなりけむかし。山もとの海づらをはるく

と行ほどに。おほくらたにといふところあり。  
松の木だちしらすの色までも心とどまりぬべ  
きを名のことくしげなるぞ心うきや。あま  
さへ。たび人の舟どもうかゞふなる。しらなみ  
のよりくる舟しげしなどいひおそりて。あは  
たゞしくいそぎすぐるなるべし。うたて。など  
しもかゝるおもしろき所にかやうのさはりの  
侍らん。明石の浦は。ことにしらはまの色もけ  
ぢめみえたるこゝちして。雪をしけらんやう  
なるうへに。みどりの松のとしふかくて。はま  
風になびきなれたる枝に手向草うちしげりつ  
つ村々なみたてり。岡邊の家居も所々に見え  
たり。住吉にては霞にまがひしあはち嶋もほ  
どちかくてことにみどころおほし。はりまち  
はすべていづくも心とまる所々ぞ侍る。いな  
み野といふははるかにをしはれて四方にくま  
なくあさぢかれわたりて。やう／＼下もえい

づるもいとけうあり。

勅なれば國治めといひなみ野のあさちの道も迷はさらなし水かながさきなどうちすぐるに。それより南にあたりたる所をとひしかば。しかまのさといふ。かちゞはすこしへだてたれども。河なみのうみに出たるけしき。はるかにみわたされ。なにとなくおもしろし。又いさゝか行すごて。川のほとりちかく石の塚ひとつ侍り。是は神のいます所なりけり。出雲路の社の御前にみゆる物のかたども一二侍りしをなにぞと尋しかば。此道をはじめてとをるたび人は。たかきもいやしきもかならずこれをと持て。石のつかをめぐりてのち。おとこ女のふるまひのまねをして通る事と申しゝか。いとかたはらいたきわざにてなん侍しかな。まことや此神の本社はほどこかき所のうみの中に立たまひたるが。かやうにまなび侍るたびごとに。

御社のゆるぎ侍となん申めり。あらたなる事なるべし。

傳へ聞神代のみとのまきはひをうつす誓のほともかしこし爰をばいそぎとも。いそのわたりともいふにこそ。

旅なればとけてもれぬを春のよの磯のわたりの遠くも有哉それよりこなたに戀の丸といふさと一村侍る。いかなる人の物おもふとて名のりにし侍りつらむと覺えていとおかしく侍りき。

夢とてもいもやは見ゆる旅衣ひもたにかね戀のまろねにかゝるところの名を聞侍るに。まづ思ひいづるかたの侍るかな。さてかゞつといふさとは。家ごとに玉だれのこがめといふ物を作ところなりけり。山の尾ごしの松のひまより海すこしきらくとみえておもしろく。其日はふく岡につきぬ。家ども軒をならべて民のかまどにぎはひつゝ。まことに名にしおひたり。それ



よりこなたに川あり。みののわたりといふ。

故郷も戀しからめや東路のみののわたりと思はましかは  
から川とかやいふところにとゞまりて。つと  
めてはきびつ宮の御まへよりすぐる。みちの  
ほとりちかき鳥居のもとにくちなし色の衣き  
たる神づかさども立なみつゝ。たびのぬきた  
てまつるなるべし。きびの中山とは備中と此  
備前との二の社の中なればなるべし。谷川は  
をとにきゝしより猶心ぼそげなり。うちつゞ  
きたるいがきのさまは。げにぞかうぐゝしき  
や。この御社どもに上矢一づゝたてまつりぬ。  
さてかるへ川せいやまなどうちこえて。屋蔭  
といふさとにとゞまり侍ぬ。

もののふの猛き名なれば梓弓やけに誰かなひかさるへき  
備後になりては中々名高きかたよりも面白き  
ところこそおほかりけれ。入海うちつゞきて  
磯ぎははるかに行めぐるに。あまのすみかど

もの山もとちかきも。げにかたゞよりありと  
見ゆ。足引のやまわけくだりて。おのみちのう  
らにいたりつきぬ。この所のかたちは北にな  
らびて。あさちふかく岩ほこりしける山あり。  
ふもとにそひて家々所せくならびつゝ。あみ  
ほすほどの庭だにすくなし。西よりひんがし  
に入うみとをく見えて。朝夕しほのみちひも  
いとほやりかなり。風のきをひにしたがひて。  
行くる舟のほかげもいとおもしろく。はるか  
なるみちのくつくし路のふねもおほくたゆた  
ひゐたるに。一夜のうきねする君どものゆき  
てはきぬるかこのうかびありくも。げにちい  
さき鳥にぞまがふめる。たゞ此むかひたるか  
たによこほれる嶋山あり。むかし此所をらう  
じける人。和歌の道にすける心ふかきあまり  
に。おりたつ田子いりぬる海人までも。歌をな  
んよませつゝもてけうじけるより。やがてこ

のところを歌のしまといふとぞ。しほやども  
かすかにて。やきたつるけぶりのすゑ物あは  
れなり。此嶋にしほやくたびに一日二日のほ

どにかならず雨のふり侍るといひならはした  
り。げにもとおぼえき。猶この南にはれたるし  
まじまあまた見ゆめり。みちのくのしほがま  
の浦おぼえて心あるあまもすむべかめり。よ  
ろづに付つゝこゝろのひまもなくて過行うち  
にも。をのづから心にうかび侍るいたづらの  
もくづどもかきあつめ侍るなり。

うちかはす友れなりせは草まぐら旅の海邊もなにかうからん  
今更にしらぬ命をなけく哉かはらぬ世々といひしちきりに  
中々に分れの際はともかくもいはれさりしを今はかなしき  
さても備後は鏡にすべき文もすくなく。たま  
たましみのすみかより尋いでたる國文も。そ  
れをしるべとするほどのことはりをさへしら  
ぬ人の見侍れば。をろかなるこゝろにもあざ

むかれ侍るかな。かべの中石の函の中におさ  
めける世もかばかりやは侍るべき。かなしく  
おぼえ侍るまゝにうかび侍る歌。

いかにして蓬の中の蓬たにあさににたるはすくなかるらむ  
つく／＼と緑の空にあふかすは世のうき旅にいかてすくさん  
生まかる眞木のまる木の弓とりは直なるよりも力こそあれ  
みだれたる世にはとめるをはちといふ事げに  
此頃ぞまこととも思ひしりぬべきや。五月十  
九日備後の尾道より安藝國ぬたといふ所にう  
つり侍。道は南東へ出たる山あり。ひかたをへ  
だてたり。いぬゐにそひていそ路はるかにゆ  
くに吉和といふ所あり。ほどなく夕になりぬ。  
日も暮ぬ夕しほ遠く流れあしのよしわか磯に宿やからまし  
其海中に木ぶかき小嶋二ならびたり。是なん  
くぢら嶋といふなり。年ごとのしはすにくぢ  
らといふを多くよりきつゝ。又のとしのむ  
月に又かへり侍るとなん。是はこゝにいます  
神の誓にてかく侍ると海人どもの申也。其よ

り猶南に大海に出るさかひをば。めかりの浦とぞいふなる。

たひ衣袖もわれけりあま乙女めかりの浦の波のたよりに北より南にさし出たる山さきに。松や檜原しがりていとおもしろきおのへあり。いとさきとぞいふ。

かつきするあまの手引の糸崎はしはたれ衣なるにそ有けるむかひにひがたをへだてたる山をゐんの嶋といふ也。それ行過て。備後と安藝國のさかひをいづる。よこはれる山中にかやふけるだうあり。此ふもとまで入海つゞきて。沼田川のながれ落あひたり。此河づらにうき出侍るほどに。日暮はてゝ。夕やみのは山のかげもいとゞたづたづしきに。ほたるかすかに飛ちがひつゝ。なにとなく物心ばそきに。この里へ松の火などともしてきむかふは影。川なみにきら／＼とうつろひて。鵜川だつ心地ぞし侍る。この

所は壽永のむかしまでは海の底にて侍けるとて。石のかたはらなどにかきといふもののからうち付ためり。はなれたる山どもこゝかしこにしがりていとおもしろし。此川にそひて西に。としふるげなる松山の中に神の社一たてり。こしきの天神と申となり。これはかの御神つくしへうつされ給ひける時。こゝにてたびのかれいるまいらせたりける物の具に。こしきといふものの残とゞまりて今の世まで侍けるなるべし。やがてそのこしきをも社に祝たてまつりてかたはらにをき侍なり。又そこにてめでたきし水あり。これはかの天神の御手づから掘いだし給けると申。

我祈るたのみもことにまし水の淺かるましき恵みをそまつ此山にならびて田面のすゑのみちのべにかた岡のやうなる所に松や竹などしげくて草のだう一たてり。平家の世に沼田のなにがしとか

やがこもりけるを。のりつねの朝臣のせめおとしける所と申めり。いまでもしづが田返おりおりは。ふるきかばねなどほり出事も侍るに。矢のあな。かたなのあとさへみえ侍となん。そのあたりに草とるといひて田中に入あまたおりたてり。

袖ぬらす習ひも悲しあやめかる沼田の田草けふはとりつゝ此南によるづの神々いはひたてまつる中に。おとこ山もいますと申。

たのむそよこゝも南の男山おなし宮居にかけしいのりはひとのひとよりとかやのみことのりは。をろかなるわが身までもなほし給ふらんを。如何しかけりてもみそなはし給ふらんを。如何してか心をもみがきて照し給らん。御こゝろにも叶侍らまし。七月七日手向にかちの葉にかく歌七首。

紅葉葉のにじきの橋や渡すらむ七夕つめのまれのあふせに

西の海や我こそたのめ織女のけふ渡るせのさはりなければわかいのる心のすゑもとをらなけふの手向の文字の關守けふよりやなわたのまゝしつくし舟楫の七葉の神にまかせて時きぬとはやまちわたせ彥星のいをはたをれる糸のしま人あひみまくほしにやいとゝ祈らまし秋は花咲菊のたかはま契ありて秋はかならずたなはたの松浦の河を渡るへきかなつくしの名所を少々よみ入侍るなり。

はつきの廿九日。あきの國ぬたのさとをたちて。入野といふ山ざとをとをり侍るに。此所はむかし小野のたかむらの故郷とて。やがてたかむらとも。をのとも申侍るとかや。大なる山寺あり。今夜は高谷といふさとにとゞまりぬ。又の日はおほ山といふ山路こえ侍るに。紅葉かつく色づきわたりて。はゝそ柏などうつろひたり。日影だにもらぬ山中に。谷川こなたかなたに流れめぐりて。岩たゞく音心すゞし。ふし木などのよこたはりつゝ谷ふかき上をさながらみちにする所も侍。



もみちはのあけのまかきにしるき哉おは山姫の秋の宮るは  
此山こえずぎて瀬野といふさとあり。こゝも  
みなやまあひのはそ路なり。駿河の宇津の山  
のおもかげぞうかべる。

晦日はかひだとかやいふうらにつきぬ。みな  
みには深山かさなりたり。ふもとに入海のひ  
がたはるくくとみえ。北の山ぎはに所々家あ  
り。こゝに廿日ばかりとどまりて長月の十九  
日の有明の月にいでて。しほひの濱を行程な  
にとなくおもしろし。さて佐西の浦につきぬ。  
廿日は嚴嶋にまうで侍。此嶋は峯三四ばかり  
そびえあがりて。み山木の年ふりたるうちに  
まじりて。老たる松の岩上に生かたぶきつゝ。  
磯ぎはまでしげりたり。東にさし出たる山の  
崎と此嶋のあはひは二十餘町ばかりへだてた  
る中に。小じまのさとくしげにて見ゆるひ  
とつ侍。これなんこぐろ嶋といふなるべし。此

嶋のあたりをばあたととぞいふなる。

嶋守にいきこととはん誰爲に何のあたとと名にしおひけむ  
その南にあたりてかすめる嶋々あり。まさか  
りのせととぞ申なる。此國と伊豫の國とのさ  
かひにて侍るとかや。海のうへに國のさかひ  
のみゆるこそめづらかなれ。彼御社のやうは。  
すこしいぬゐにむかひためり。らうのしたま  
でしほみち入たり。烏井は海の中にたゞり。嶋  
の四方に入江どもあまた有て。見所かぎりな  
く侍るなり。百浦侍るとぞ申。あはれ心しづか  
にて。このあたりこぎめぐりつゝ。思ふ人どち  
み侍らましかばと。先都の友も故郷のおやも  
戀しく侍るかな。御仙瀧もなどいふ所々の  
侍なれども。日暮ぬべしとていそがはしげに  
すゝめられ侍りしほどに見ずなりにき。さて  
まかり申し侍て。御前のはまこぎいでて。佛舎  
利二粒東寺葉室。うみに入たてまつりぬ。このたび

の祈なるべし。夕日にむかひてわたるほどに。ひくしほに向てふねをそく侍ば。磯ぎはのぬるみにかけて侍しなど。ふなこどものいふを。などでかくはいふぞと尋侍しかば。かやうにしほのみちひのはやき時は。いそぎははしほのさかさまにながれ侍るほどに船のこぎよく侍るなり。ぬるみとはよどのことを申といふ。

いそきはのぬるみにかけて出し舟の早潮みちに向ふ程なきこの浦は四方に山々うちかさなりて。いづらをしほのみちひもかよひせんとおぼゆる海中に。この嶋も侍るなりけり。さとにうみの宮このあるじの御座所とおぼえて。此世の中ともみえ侍らず。かへりてすさまじきまでぞおぼえし。

廿一日は此佐西を出て。地の御前といふ社の西ひがたより山路に入ほどに。おほの山中といふところに來りぬ。長月の有明の月影しら

じらと残りて。木の下露はまことに笠もとりぬべく。所せきもみちの色こくみわたされたる中に。しるのはの嵐にしろくなびきて。松のこゑ山川の音にひゞきあひたる朝ぼらけ身にしみておぼえたり。

とにかくにしらぬ命を思ふかなわが身いそちにおふの中山昔たれかけにもせんとまくしぬのおふの中山かくしける覽古集に侍るやらむ。むかひの岡にしるまたでといふ事の。ふとおもひ出侍てよめるなるべし。此やま分くだりて又浦に出たり。こゝをもおふのうらといふなり。むかひの山はいつく嶋山の南のはづれなりけり。行めぐりてなを同所になりたるかな。今朝さゝいの浦をいでつる友の大船ども。今ぞ追風にほかげのみゆめる。ふねなる人も此方をゆかしとみをこすめり。

おほの浦をこれかととへは山なしの片えの紅葉色に出つ、

此ふねどもの中に朝げのいとなみするとして。  
けぶりのたちのぼりつゝ。浪にうつろふけし  
き。心あらむ人にみせまほしかりき。

浪の上に藻鹽やくかとみえつるは蟹のを船にたく火也けり  
それよりこなたはみな山路なり。津葉黒河こ  
え松やを松などいふも。うみかたかけたるみ  
山ぢなり。大谷とて岸たかき山河ながれ出て  
見ゆ。これより周防のさかひと申。今夜は多田  
といふ山ざとにとどまりて。朝にまた山路に  
なりぬ。これなむ岩國山なりけり。一ふたつあ  
る柴のいほりだになく。人はなれたる山中に  
み山木のかげを行。誠に岩たかく物心ぼそき  
路なり。夕になりぬれど。きこりだにかへら  
ず。鐘の聲もきこえぬ所なり。

とまるへき宿たになきを駒なつむ岩國山にけふやくらさん  
たち返りみる世もあらは人ならぬ岩國山もわかともにせむ  
たらちねの親につけはやあらしてふ岩國山もけふは越ぬと

ふるき歌にいは國山をこえん日は手向よくせ  
よあらきその路とよみて侍るやらむ。それを  
かたよせてよめるなるべし。はるくくと越過  
て。又海老坂といふさとに寺の侍しにとどま  
りぬ。廿二日なるべし。又の日は遠石のうらと  
て。山本南に向て八幡の御社います。その御前  
のはまのしほひのかたはるかなるおきに大な  
る石のさきあがりてみえ侍。是をとを石とは  
申とかや。人こそしらねとぞいはまほしきや。  
此御神にも上矢一たてまつりぬ。その日は暮  
ぬほどに富田といふうらにつきたり。是も北  
西をかけて入海はるかにてこじまどもの名も  
しらぬがいくらもちつゞきたり。其中に又  
いつく嶋といふも侍し也。つりするあまの舟  
ども嵐にむかひていそがはしげにくるもみ  
ゆ。雨げになりにたりとて。村雲のあしはやく  
きをひ來たり。

夕しほにつれてやきつるいと、しくあし早船のとたの入海  
廿四日。周防の國府につき侍。道のほども南は  
うすみいでたるするに嶺どもの墨繪にかきた  
るやうにみえたる。そのふもとに大なる嶋は。  
姫嶋とて豊後の國なるべし。高崎の城などい  
ふも雲るはるかにうちかすみつゝみえたり。  
かのすみ所など思ひやらぬにしも侍らず。此  
海づらはなみいとたかし。是より外の海にな  
りぬとぞ申める。やがて浦の名をも外の海と  
いふ也。磯ぎはよりつゞらおりにのぼる坂有。  
橘坂とぞいふ。

あら磯の道よりもなな足曳の山たち花のさかそくるしき  
此坂越過て西のふもとに入海有。東西に山さ  
しめぐりて其前に嶋あり。西ひんがしのあは  
ひに二のわたり有て舟ども是を出入なめり。  
猶おきのかたにあたりて。木しげりたる小嶋  
ども七八ばかりならびてみゆ。北のいそぎは

に人の家ありて。爰を國府と申也。猶北のみ  
山にそひて南向に天神の御社たてり。御前の  
作道は廿餘町計はまばたまでみえたり。其う  
ちに鳥居二立り。みたらし川は路にそひて流  
てけり。橋などかけたり。そのにし南にさしむ  
かひて一重なる松山の侍るをくはの山とぞ  
いふ。ふもとに松原とをくなみ立て。あたりは  
かたはまとてしほやく所なり。

花すゝきまそをの糸をみたす哉しつかかふこのくはの山風

長月は此國府にて暮て。神無月の七日の夜ぶ  
かくたちて。なをひがたの路を行に。しまぐ  
入江々々どもいふばかりなく目もあやなる所  
所うちつゞきたり。大さきの濱田嶋といふか  
たは。うちけぶりたるやうにて。あけぼののそ  
らのどかにて。浪の音もきこえぬほどなり。あ  
しべのたづの明ぬとなくこゑのどかなり。

大さきのうち吹風の朝なきに田しまわたるつるのもる聲



そのこなたは村のけぶり立ならびて。梅やさ  
くらのときならぬ花さへさきそひつゝ。朝げ  
の風に匂ひ来るも。春秋をならべたらん心地  
して面白し。ひがたを行かゝるほどに。しほみ  
ちぬべしとて。北にそひていさゝかなる山路  
になりて岩淵といふところに出たり。此方も  
猶なた嶋がたとて遠きひがたなり。今夜は香  
河とかや申所にとゞまりぬ。竹の一村侍る。み  
こしに嶋のちかゞと見えたるをこのさと人  
にとへば梅が崎といふ。

立かへり春や來ぬらん梅が崎ちりにし花とみゆるなみかな  
まことやこの月はすくなき春といふなるもこ  
とほりとおぼえて。山梨李などまでも咲たり。  
八日は雨ふりながらいまだ明たゝぬほどにい  
でて。みねへのぼり行などいふばかりなし。い  
さごだにもなくて。さながら岩をのべしける  
うへに山川のながれきつゝ。底もあらはにみ

ゆる岩淵にたゞよふ木のはの色も。げにぞ秋  
はかざりとみえぬる。大方のやまのたゞずま  
ひは。あづまのさやの中山おぼえて。其より  
は今すこしかげふかく。物ごゝろぼそき山路  
なり。日中ばかりこの山をこえて。あさの郡と  
いふさとにつきぬ。むかし板がきの城と申け  
る山ぎはに。寺の侍に今夜はとゞまりたり。此  
寺の本尊は信濃國善光寺の如來をたしかにう  
つし奉りけると申。

雨にきる我身の代にかへななんころもなるとふあさの里人  
あけぬれど猶雨風やます。よもすがらあられ  
うちまじりてふりあかしつるを今朝み侍れ  
ば。昨日わけこし山の梢どもに雪のふりかゝ  
りて。里近きふもとの梢はなをのこりの紅葉  
どもの色こくて立まじりたり。まことにめづ  
らかなり。それよりは山に分入て海のへたに  
うち出侍ぬ。こゝを羽ふとかや申なり。南はう

ら浪たかく立て。雲ふかき絶間に山ちかくみえたり。豊前國なるべし。北のやまは松しげりて其前に社あり。八幡とぞ申なる。御垣の前に西東へつながれてしほもかよひ侍りけり。橋わたして大なる鳥居立たり。松ばらむらだちたり。住吉の御前のはまおぼえたり。此御前うちすぐるより俄に霞かきみだれて西ふく風あらましく吹おちつゝ。笠をだにとりあへぬほどなり。とかくしてうすは潟といふひがたにうちいで侍き。霞はすこしやみて又雪ふりきつゝ。ひがたの砂のいろもことに見ゆ。磯ぎはの岩のうへに鵜のむらがれるたるも。おりからみどころ侍しほどに。

似ぬ色もことにそ有ける嶋つ鳥うすはのかたに雪は降つゝ、鹽みちきつゝひがたはえなんとをるまじく侍とて。又山路になりて。小嶋といふうらざとに出たり。松原をはるかに行過て長門國府にな

りぬ。北はまとして東南にむきて家居あり。このさと一むらすぎて神功皇后宮の御社の前に出たり。御やしろは南に向たり。それより山のうしとらに出たる尾上をば御かり山といふなり。このはまのわたにすさきの様に出たる山侍き。くしさきといひて若宮のたゝせたまひたる所なり。其東の海の中に十餘町ばかりへだてゝ嶋二むかへり。古の満珠干珠なるべし。今はおいつへいつとかや申めり。此うらを壇のうらといふ事は。皇后のひとの國うちたまひし御時。祈のために壇をたてさせ給ひたりけるより。かく名付けるとかや申なり。其時の壇の石にて侍るとて。御社の前のみちの邊にしめ引まはしたる石あり。此御社はあなと豊浦の都のおほ内の跡にて侍るとかや。此時御船つくらせ給ける木とて。ふな木の松などいふも侍るなるべし。

長門國あなと豊浦の舊都に御社たゝせ給たり。これなん神功皇后と申。御神は昔西のえびすのためにかたじけなき御ちかひ侍るをあふぎたてまつるに付ても。つくし路や松浦におもむき侍るべきいくさの舟の追風待わび侍るほどに。古の御船出の四十八艘の事をなすらへて。三四の和歌を奉るなるべし。

西の海や安くわたらん千早振神のあつめしふなかすもかな  
豊國のおきつ嶋山えてしかなこゝろのことき珠と見るへく  
稚さくら花にさかへし都より猶このうらを神やしめけん  
此國の一宮住吉明神にたてまつる歌四首。御社の數になすらへてよめるなり。

うき雲のをひ風まちて天の原神代にてらせ日のひかりみむ  
末の代のまほりもしるし千早振神の中にもひさにへぬれば  
やはらける光もらすなしらなみのあはきの原をいてし月影  
神垣の松の老木はわかくにのやまとはの種やなりけん  
ねがはくは此歌の心をみそなはし給ひて。あまがけりてもまぼりたまへ。このたびかくを

ろかなる身に二心なく君につかへたてまつる事。あきらかなる神の道を一すぢにたのみ侍てなるべし。

霜月十三日は住吉の御日にて侍れば。彼一宮に詣侍るに。本社よりも猶かうくしく神さびていみじく見えさせたまふなり。此御前より西にあたりて西の海のはるかにみわたされたり。松浦への船どもゝみなこのちかき海のへたにふくら嶋といふところにかゝり侍るを。今一しほ此御神の御前にて祈たてまつりて。又一首よみてたてまつる歌。

夢のうちにみえけん神の御そきぬの袖のは風は猶そ吹へき  
此歌のこゝろは。今年九月に豊後の高崎の城より宗久といふ僧。此方にわたり侍らんとて。舟にのりはべりながら。順風なかりける夜の夢に。よはひ八十ばかりの翁のかみひげしろきが。ゑばしに淨衣きたる一人出来て。左の袖

をひろげて。これに乗て舟出せよといひて。袖をうちふり給ひければ。をひ風吹てこなたにわたりぬとおぼえけるを。夢心地に住吉の大男神よと思ひてさめ侍るに。やがて其曉風よくなりぬとて舟いでて。日のうちに周防のくた松といふところにつきぬとかたられし事をふと思ひ出て侍りしほどに。この歌もその心をかたかけてよめるなり。此舟どもけふも出侍らずとて。ふくらの嶋よりつかひきたり。小舟にて天川といふわたりをして参たりと申ししかば。こゝにもかゝるわたりのあるけるよと思にも。あはれ星逢のはまのつゞきに此渡のあらましかばとぞおぼえ侍る。このついでに又歌二首。

秋にしもかきさらなん天の川あまのを舟は今もかよふな  
松浦ふればやこきつけよ天の川まれなる中の渡りなりとも  
諏訪男神とたなばたは同躰とかや申めれば。

殊にこの諏訪住吉の二の御神は。いくさの船のまばりにてわたらせ給ふぞかしとおぼえてよみ侍也。霜月十八日この歌たてまつりて。七日になり侍るほどに。けふ皇后宮の御まつりとて。神供などたてまつる日しも。朝より東風吹出て。松浦ぶねはや出ぬと申。ひとへに神々に祈申するしとかたじけなくおぼえて。重て詠歌二首。

神祭るけふそ吹けるあさこちのたよりまちつる旅の舟出は  
勝事は千さとのほかにあらはれぬ浦ふく風のしるへ待えて  
此うたども神の御こゝろにかなひけるやらん。かく舟出もおもふまゝに侍るに。十二月五日まつらよりの使に僧たち來り給ひて語たまふを聞侍れば。是よりの舟どもあまりに待久なりけるほどに。松浦のをのこどもうちよりて。とかく又心ごころの議定どもし侍ける折節。此浦のおきに大船四十よそう通けるを。は



やこの方のふねのつきぬとおもひて。人々何の定もなくたちあかれてまちけるほどに。又舟はよしもなきしらぬ舟どもにて行ふなくきこえける。又の日此ふねども付侍るとかや。ひとへに松浦のいくさのさだめを又あらためさせじと神々のはからはせ給けるなるべし。こなたの舟出の日しも。かゝるふねの松浦をとをりける事うたがひ侍るべくもなき神道の御計なるべし。歌は必神に通ずる事と申せば。かくをろかなる詞の花も。神々の手向にうけひき給ふにこそ。此しらぬ舟のとをりける日は霜月十八日なるべし。こなたのふねは十九日松浦には着ける也。

霜月の廿九日長門の國府を出て。赤馬の關にうつりつきぬ。ひの山とかやいふふもとのあらいそをつたひて。はやともの浦に行ほどに。向の山は豊前の國門司の關のうへのみねなり

けり。海の面は八町とかやいふめり。しほのみちひのほどは宇治の早瀬よりも猶おちたぎりためり。さても穴戸豊浦の都と申侍る事は。今の赤間の關と門司の關とのあはひは山のひとつにて。其中にわづかにしほのみちひの道ばかり穴のやうにて侍るに。その岸の東西に人家しげかりけり。あなとはさていふなりけり。其を皇后のいくさの御舟とをりがたかりけるに。御舟よそひてのち一夜のほどに。此穴戸の山引わかれて。今のはやとものわたりになりぬ。このやまさながら西の海中によりて嶋となれり。此嶋のむかひは柳の浦とて。むかしさと内裏のたちたりける所なるべし。今はそこをやがてだいらのはまともいふなり。赤まの關のにしのはしによりてなへの崎とやらんいふめる村は。柳のうらの北にむかひたり。此關は北の山ぎはにちかく。家とならびて岡

のやうなる山あり。かめやまとて。おとこ山の御神のたゝせたまひたり。其東に寺あり。阿彌陀だうといふ。安徳天皇このうらにてかくれさせ給て後に。知盛の卿女の少將のあまとかやいひける人こゝにのこりとゞまりて。平家の跡問けるを。のちにかの御菩提所になされて。安徳天皇の御尊影おはします。本尊は清盛公のふく原の持佛堂の阿彌陀佛と申なり。又小松のおとゞの本尊とて。さか佛もたゝせたまひたり。このたび安徳天皇の御事いつかゆめにみえさせ給ふことの侍しほに。たびたび御菩提をとぶらひたてまつり侍りき。いかなる世々の契にてか侍つらんとぞおぼえ侍る。門司の關はこの寺にむかひたり。そのつゞきに山どりのおとて山寺ありと人のかたり侍し。いといえんなる所の名なり。

海をさへたてゝけりな山とりの尾上の寺の入あひのこゑ

まことやこのひくしまと穴戸の江のはやとものわたりのあはひ。まことにひきわかれて侍ならば。しまの長さはやとものわたりのひろさは同ほどぞ侍らん。おぼつかなしとて。いづれの代にて侍りけるやらん。國司出て引嶋の長さを繩してとりて。はやとものわたりにをしあてがひて侍りければ。ちりばかりも寸法たがはず侍りけるとなん。いと興ある事なるべし。此事は此皇后宮の宮司として老て侍るが語侍る也。十二月の一日より十五日まで一宮の御神此皇后宮におはしまして。神事侍るほどはこのさとの人門に侍らず。足手をもあらはず。女おとこのわざもせぬ事とぞ申。神の乙女などもかねをだにつけず。かみをもときわけぬ事なり。いとあらたなることなり。しはすの晦日はこのはやともの浦のしほさながらひつゝ。わだつみの底もあらはになり侍る

時。おきの石にわかめの侍るを一ふさ神主かりとりて歸れば。やがてしほみちき侍とぞ。此わかめをとりて神供にそなへ侍る事。むかしよりいまだ絶侍らずとなん。もし其比まで此ところに侍らば。行するの物語にもし侍てまし。

鹿苑院殿嚴嶋詣記

同

左のおほいまうち義君安藝の國嚴嶋まうでのこ  
とあり。此たよりにさすらひ給て。いそのかみ  
ふるき都のあとなれば。つくしの國をも御覽  
すべきなるべし。かつは浦づたひのめづらか  
なる所々をも御覽じ。かつは四の國にいたり  
て。やまと言の葉歌つといふ處をも御らむじ。  
又は武藏入道賴之朝臣。ふるき好をもとぶらはせ給  
べきにや。御舟よそひの事は。やがてかの入道  
うけたまはりて。百餘そうたてまつるなるべ  
し。舟のうちにてのさうやく。みなこの人のま  
うけなり。むかしもいつくしまには八十代高倉院御  
幸なり。平のおほきおほいまうち清盛君も。たびた  
びまうでられたためしも侍けめども。此たび  
はひきかへてめづらしき御すがたどもにて。  
はなだ色にめゆひとかやいふもむをそめて。  
袖口ほをくすそひろきうちかけといふものを

おなじすがたにき給。赤き帯に青色のはぎ  
赤色のみじかき袴也。御ともの人々みなみさ  
きばかりなる金がたなどもさゝせらる。かた  
はらの人はそしり侍りけめども。かやうのこ  
とはあながちに法も式もさだまらず。たゞ時  
代にしたがふことぞかし。いまやうなどとて  
さだまりたる器などをだにも。はじめてしい  
だして用らるゝためし。古もなきにしも侍ら  
ねば。そしりはかへりて道せばきなるべし。旅  
の衣のたつ日さだまりて。康應元年三月四日  
夜ふかく都を出させ給ふ。東寺の南の門うち  
過程に。かの寺のかねの聲もきこゆめり。桂川  
のほとりとおぼえて。火の影所々にみゆ。こあ  
ゆとるなりけり。げに瀬にひかるらむかし。そ  
の日のむまの時ばかりに攝津國兵庫の津につ  
かせ給ぬ。御ましの舟にまいるべき人々かね  
て定らる。

修理大夫。

右京大夫。

日野弁。

山口 畠山左近大夫將監。

同七郎。

今川修理亮。

真下。

古山十郎。

このほかはをのゝ舟にて參侍り。

畠山右衛門佐。

山名播磨守。

細川淡路守。

土岐伊豫守。

探題。伊豫入道。

今川越後入道。

同右衛門佐。

同中務大輔。

伊勢右衛門入道。

曾我美濃入道。

朝倉因幡守。

若王寺別當。

古山珠阿。

松壽丸。

士佛。

かやうの人々也。侍二三人しもべ三四人ばかりめしぐすべしと定下さるれば。舟數よりも人かすはすくなかりき。兵庫にては赤松の千菊丸。此ところのあるじ申侍けり。まことにこ



ゆるぎのいそぎありくさま。ことほりとみゆ。  
其夜の曉に御舟にうつらせ給。百よそうの舟  
どもみなともづなをとくめり。人々は兼て舟  
に乗て夜をあかし侍けり。

涙枕かゝるれ覺のありけるを老のならひと何かこちけむ

波の上やうくしらみ行ほどに。和田のみさ  
き。明石のせと。淡路のせと。とがり崎などい  
ふ浦々過させ給。げにも山水のたゝすまる。繪  
にかゝまほしくみゆ。けふ五日。雨風はげしく  
なりて。あまのをしてもいとゞたゆきにや。夜  
中ばかりになりて。たて崎とかやいふ海中に  
いかりをおろして御舟をとゞめらる。四方の  
空くらかりしかば。御舟を洲にこぎかけしか  
どもわづらひなかりき。御座のふねばかりに  
かゞりを二たてらる。是をことふねどものし  
るべとせり。

六日。御舟いでて。うしまど。ま井のすなどに

いたりぬ。まことや此うしまどといふ所は。む  
かしおきながたらしひめの御舟出のとき。け  
しかるうしの御舟をくつがへさむとしける  
を。住吉の御神のとりてなげさせ給しかば。か  
の牛まろび死けるが嶋と成て。それよりうし  
まどといふ也けり。牛まろぶと書て。うしまど  
とよむとなむ聞侍しなり。ま井のす。つちのと  
などといひてかたき所々いまぞとをらせ給。  
此所はしほのかなたこなたに行ちがふめり。  
宇治の早瀬などのやうなり。しほの落合て。み  
なほしろく流れあひて。しほさい早くのぼれ  
ばくだるなり。稻舟ならましかばさほとりあ  
へじかしとみゆ。つちのとといふは。大づちこ  
づちとて嶋山ふたつ北南にならびたるあはひ  
をとをるせとなるべし。早しほにをし落され  
じと。舟子ども聲をほにあげてこぎなめたり。  
ゐの時ばかりにおきの方にあたりてあし火の

かけ所々に見ゆ。これなむ讃岐國うた津なり  
けり。御舟程なくいたりつかせた給ぬ。(伊勢)

七日は是にとゞまらせ給。此處のかたちは。北  
にむかひてなぎさにそひて海人の家々ならべ

り。ひむがしは野山のおのへ北ざまに長くみ

えたり。磯ぎはにつゞきて古たる松がえなど

むろの木にならびたり。寺々の軒ばほのかに

みゆ。すこしひき入て御まし所をまうけたり。

かの入道こゝろをつくしつゝ。手のまひ足の

ふみ所をしらず。まどひありくさま。げにもこ

とはりとみゆ。いかめしき御まうけとは見ゆ

めれども。心ざしの程にはなををよび侍らぬ

とやおもひけむありがたかりき。奉るくさぐ

さいかめしき事也。人々に給ふ物も御はかし。

よろひ。みなよのつねならずみがけるならし。

八日の朝御舟出也。此かしこまりとて。武藏入

道おや子。これより御とも舟にまいれり。海の

上三里あまりこぎて。さなきといふ所にて。雨  
風けはしく波いとたかゝりしかば。此嶋浦イわに  
御泊有。いかりおろしたる舟ども夜もすがら  
たゆたふさま心ばそかりき。

名にしおはさてしもあらて浦風のさなきはなとかはけしかる覽

九日。またこぎいださせ給ふ。備後國おの道と

いふ處の西に。くぢら嶋。いとさき。いくらの

嶋などいふ浦々北にあたりてみゆ。この所々

はいにし比つくしへ下り侍し時通侍しなりけ

り。此南にいよの三嶋はるかにかすみたり。今

夜は安藝國高崎といふ海べたに御舟をかけら

る。

十日。またこぎ出させ給。たかはら。シイみつかさ。

はや山。院イ地内の海。かうしろ。ひろくれ。はた

み。かまかりのせと。かやうの浦々過させ給へ

り。此國のたか谷といふもの舟にて参りたり。

大内左京權大夫をそくまいるよしおほせらる

と聞ゆ。おむどのせとといふは瀧のごとくにしほはやくせばき處なり。舟どもをしおとされじと手もたゆくこぐめり。

船玉のぬさも取あへずおち瀧つ早きしほを過にけるかなとよ嶋などをしする程に。又夜に入て子の時ばかりに嚴嶋につかせ給。御社のうしろに黒木の御旅所をつくれり。今夜は舟のまゝにとまりたる人もおほかるべし。

十一日。御社ふしおがませ給て。御前の濱の鳥井のはとりよりかごにて御舟にうつらせ給へり。御社のらうく拜殿などにみこ内侍やうのかむづかさ女どもたちこみたり。かもめのむらがれ居たるにいとよくにたり。それよりおかだとかや云は。おほたき川とて。安藝と周防のさかひの川の末の海づら過て。周防の國岩國ゆむろ岡などいふ所々きたにみゆ。しるの嶋。伊豫の國道別の山など南にあたりて

霞つゝ浪の上もうちけぶりたり。夜舟は心もとなかるべしとて。かうしろといふ海上に御とまりなり。

十二日。大島になるととて。しまぐゝあまたある中をかなたこなたに舟どもこぎわかれて。末にて又めぐりあふめり。

高しほになるとこくめる友舟の蜚の手棹はまなくとちなんあひの浦すぎて。むろづみと云所に至ぬ。むかし生身の文殊のみかほおがまむとちかひける人につげ有て。これこそ生身の文殊よとて。此所の遊女をしへける所ぞかし。所のさままことに面白し。岩は高くきりしぎてそびえたる峯三四ならびつゝ。松柏むろなどいふ深山木苦おひさがりて。うき雲うすくかゝれり。此山のひんがしにしの脇に舟の泊あり。その西北になぎさにそひて松原ひとすぢ霞につゞきて。白濱も浪もひとつにみゆ。にるの湊こぎ過

て。くだ松といふとまりにつかせ給ふ。大内左京大夫はこゝにぞまいりためる。御旅のかれ飯みきなどさま／＼まいる。

あま乙女しつはたをらぬくた松も涙の白糸よりやかく覽

十三日。この國の國府の南。たかはまといふ浦ばたのみたじりといふ松原に御旅所をたてたり。此松原はいそのかみ嚴嶋の明神こゝにあまくだりまして。今のいつくしまにはうつらせ給ければ。げにぞ神さびたるや。銀をしけるやうなるいさご。西東のすさきの中を入江のやうに二すぢばかりしほさし入て。浦松のいたくこたかゝらで枝ざし老かゞまりて木だちつくろへるやうなるむら／＼おひて。其中にちいさき社のふりたるぞおはします。

松原や高すの梢こゆるまで月のてしほの更にける哉

猶人々は舟にぞとゞまりたる。

十四日。さるの時ばかりに御舟出なり。四里ば

かりこぎいでて。大江などいふ過て。おとまりといふ泊ちかくなるほどに。西風吹おちて。浪たかく打かけ侍る程に。又御舟をしなをして。跡のたかすのむかへ嶋といふうらに御舟を懸たり。

十五日にぞこぎ出し給。此たびは五里ばかり行て。赤崎と云浦にて。又大風むかひて更に御舟ゆかず。是よりこぎかへさせ給て。岩やどといふ浦にとゞまらせ給ふ。夜に入てなを大風はげしくて。神なり浪すさまじければ。はし舟にてたゞ御一所ばかり。田嶋といふうらばたの海人の家に。草のおましをよそひておはします。舟どもは海上になをとゞまりぬ。大内も御ともにまいれり。

十六日の朝。武藏入道や探題などに仰舍らるる事あり。浪風かうやうにあるゝによりておぼしめすやう有。此たびは是より歸のぼらせ



給て。しづかにかちぢをこそくだらせたまは  
め。いかゞ侍べきと仰らるゝ。探題は我かたに  
いらせたまふを申とぞめむこと世のそしりも  
やとおもひけめども。此たびの浪風のさはり  
たゞごととおぼえ侍らず。かつは都にもい  
そがせ給べきことのわたらせ給にこそと思  
に。人のそしりを忘つゝ歸り上らせ給べきよ  
しを申けり。武藏入道もおなじ心に申めり。是  
はなを御のぼりにもうたつによらせ給べきこ  
とをことぶき申さむの心もや侍けむ。此こと  
定て。けふは又たかすにかへらせたまひぬ。  
十七日は是にとぞまらせ玉ひぬ。今河越後入  
道は是よりまかり申て。かちぢよりつくしに  
下りしかば。御はかしなど給りて。かたじけな  
きおほせどもうけたまはりしかば。うれしな  
きの涙袖もしほゝに見えしなり。此たよりに  
つくしの人にもみせよとにや。御みづからさ

まざまの事どもかゝせ給て。御文一くだり探  
題にたまはりけり。老の後のめいばくなるべ  
し。やがてつくしにつかはしけるとなむ。今日  
備後より山名宮内少輔まいれり。御のぼりに  
尾の道を御覽せさすべきよし申。父の左京大  
夫<sup>伊豫守</sup>は。やまひによりてまいらず。  
十八日。かまどの關に御かへり有。これにて大  
内一ぞくども伊與の河野など御目にかゝりき  
ときこゆ。今朝をひ風有とて出させ給。  
十九日。かまどの關より周防國やしろの嶋。よ  
こみ。いつる。あき。ふなこしなどいふ浦々嶋  
嶋とをらせ給。此南のかたにあたりて。伊豫國  
まさきがふろ。いはたうのうらのせと。ふたか  
みまさかりのせと。はしかみのせと。ぬわとつ  
なつわなどいふ所には。嶋々いくらも四方に  
ならびたり。

あさなけに蚤のかるてふ藻鹽草たゝやかまとの關といふ覽

夜を寒みかさねやせまし旅衣はるたにあらきあきのうら風  
今夜は廿五里ばかりこぎて。安藝國かまかり  
に御舟とぞめらる。墨嶋スミアイとかいふ所也。

廿日。いかりをとりて。内の海。たかみ。たかさ  
き。ひきしま過て。にふの浦と云所にとぞまら  
せ給。東風むかひて浪あらければ。しばらくか

からせたまふ。日の入ほどに風すこしなざた  
り。又御舟をこがせらる。夜に入てなを雨風お  
どろおどろしく成しかば。舟ども思ひくゝに  
こぎわかれて御ふねははるかにさかりけるを  
もしらず。御舟を淵にをしかけてゆかざりけ  
れば。はし舟をめしてたゞのうみの浦と云所  
のいそぎはにあしふける小屋にやどらせ給ひ  
ける程に。しほみちきて御舟おきぬとてまい  
れり。又めしてこがせ給。

うきれする沖つ泊をいそけとや明ぬ夜しほに船のおくらん  
しほのひてゐたる舟の。しほみちてうかぶを

ば。おくるといふにこそ。

廿一日。御舟出。風なを吹はりて。御ふねのや。  
ほの柱吹おりにけり。いまだ朝のほどに備後  
國尾道につかせ給ぬ。御座は大寧寺とて天龍  
寺の末寺なり。海中までうき橋かけて御道と  
せり。なにとなくめづらしかりき。

古へにこりかたまりし跡なれやもしほくむてふあまの浮橋  
かのほこのしたゝりの事思ひよせられてよめ  
るなるべし。

廿二日。卯時に御舟出。あふとといふせとあ  
り。をひ風はげしく浪高かりしかば。船どもの  
ほをおろしてこぎかさねしかば。手ざどもも  
きびしくとりてこぎ過たり。此處は嶋一南方  
へさし出て。北の山々のあはひのほそき所を  
をしまはす所なり。海賊とて自浪のたち所な  
りとぞ。ともの浦の南にあたりて。宇治は□り  
なといふ嶋々有。箱のみさきといふも侍り。

へたて行八重のしほちの浦嶋や箱のみさきのな社しるけれ  
讃岐國にもなりぬ。やつまといふ嶋わあり。此  
しまは人の家のつまむきに似たるゆへにいふ  
となり。二面といふこじまも侍り。松がえなど  
おひたり。などやこのてがしはのなかるらむ  
とおぼゆ。をひ風ことのほかにはげしくて。た  
だつといひて。うた津より南なる浦に御舟を  
よせてあがらせ給。御むかへとて。馬はあれど  
もかちよりなぎさのひがたにそひてあゆませ  
給て。いさゝかなる山路を越させたまひて。う  
た津に又いらせ給。二里ばかりあゆませ給け  
り。とりの時ばかりにぞいたらせたまひし。こ  
の西北のかたにみえたる山は。かのさぬきの  
院のおはしましけむ松山しろみねなど云め  
り。

流れけんむなしき舟の名残とてたゝ松山の陰そふりぬる  
廿三日はこゝにとゞまり給て。武藏入道めさ

れて遙に御物がたり有けるとかや。何ごとにか有けむ。涙ををさへてまかでけるときこゆ。  
廿四日。出給て。かのやしまたといふかたなど見  
わたして。備前國よもぎ嶋といふ所になりぬ。  
いく薬とらましものをよもき嶋をよふはかりに漕わたる哉  
今夜はうしまどに御とゞまりなり。赤松右馬  
助まいりてあるじつかうまつるなるべし。夜  
になりてまたかみなりあられふり大雨風にな  
る程に。舟のいかりをとりて此泊のすこしひ  
むがしのわきに舟をなをしき。其ほどのさは  
ぎのゝしる船こどもの聲々。神なりさはぐに  
もとらず。まうちぎみばかりは寺の侍しに  
うつらせ給ひけり。

廿五日。出給て播磨國室の泊につかせたまふ。  
赤松まいれり。こゝにもうき橋かけて。磯ぎは  
なる寺にいらせ給ふ。こぎ入程。風あらく浪高  
くて舟どもあらそふ程に。人々もみな家々に

うつれり。かれ飯さけなどもさまぐにあり。  
赤松まかなひ侍りけり。いかめしかりき。一時  
ばかりありて。やがて是よりかちぢをのぼら  
せ給ふ。御ともにはたゞ御ふねに侍し人々ば  
かりなり。

僧たち。絶海和尚。

修理大夫。

右京大夫。

日野辨。

畠山七郎。

關口修理亮。

赤松。

眞下。

古山珠阿。

などばかり也。しもづかへのものでみな  
馬にのせらる。さても武藏入道は。つちのとな  
いふあたりよりいとま申てとゞまりけるに

や。御所はけふこの國に常住寺といふ寺にと  
どまらせたまひて。とらの時ばかりに出給て。  
攝津國兵庫津にて朝の御物まいりて。其日都  
にいらせ給ふとなむ。廿六日なるべし。舟なる  
人々は。けふ廿六日兵庫につきけり。細川淡路  
守。大内左京權大夫などなるべし。かちよりを  
ひをひにまいりし人。

畠山右衛門佐。 同左近大夫將監。

山名播磨守。 土岐伊豫守。

探題。 同右衛門佐。

同中務大輔。

などきこゆ。みな廿七日八日などにぞ京に入  
ける。



群書類從卷第三百三十四

紀行部八

なくさめ草

正徹

いにしやよひのすゑかとよ。ねにかへり古巢をいそぐ花鳥の身さへ。跡とゞむべきかたなく成ぬれば。さそふ水のあはれむすがに任せつゝみやこをさすらひ出て。關のこなたまでまよひこしかな。もとよりかゝるよすて人は。いづくかは爰とさだむべきやどもあらましを。すみの衣あさはかにて。えびすのすがたにあらざるばかりにて。かうほりの鳥にも。ねずみにもあらぬがごとくにして。あるひは玉のみぎりの貴にのぞみ。あるひは民屋のいや

しきに至つゝ。世のことわざにしたがひきぬれば。四十年のなみ身にかゝるまで。都のうちをさらぬことに成ぬるなるべし。しかあれば。四方の國の境とをき里には。しれるたづきもなくして。ゆくすゑこゝろばそしともいひぬべし。關の岩かどけふぞふみならし侍る。

こゝろこそ跡にひかるれ旅人のこまたになつむ關の岩かとしがのうらはにうち出てみれば。ひえの大嶽。ながらの山。たゞ此ふもとの霞につゞきて。煙わたれる四方のこのめのあらしよりゆきとちりくるはなも。はるをさそひがほになみのうへにちりしきたる。まことにこぎ行ふねの跡

みゆる計也。

山風も櫻はよきよにはの海に春行波の花はありとも

もるやまといふ所はいたく心もとどまらず。

森の陰の一村里にて。市め商人の物さはがしきのみなり。時雨もいたくなどおぼゆるも。今は時ならずや。

君が代に身こそめれぬもる山の下葉のこらぬ春の悪を

こよひは鏡の山ちかくやどり取ぬ。ならはぬ旅とにや。おもふ方の夢だにもなし。

鏡山春の旅れの有明に月もおいぬる影を霞める

むさの宿とかやを過て。ゑち川にかゝり侍るに。道のかたはら氣色木だかき杉村にかうがうしき鳥居などたてる有を。田がへす賤のおにとへば。おいそのもりといふに。げに四十年の坂もくるしきみちなれば。しばしうちやすみつゝ。

なを聞も袖こそぬるれ今は身にかはるおいその森の下つゆ

いぬかみ。とこの山。いさや川など。道行ぶりに尋てぞ見侍りし。

日かすふる花は塵ともつもらしをありとや拂ふとこの山風いさや川いさや我名をもらすとも誰かはしらん知人もなし暮ね間に人なとかめそいぬかみの里はあり共宿はからしななどざれごとになりぬ。をのといふ所を過るに。故新大納言爲尹卿は和歌の道の長者にていませしかども時うつり世くだりぬるにや。この道もすたれはてぬるを。内大臣家より千首のうた奉らしめ給べきよし仰られたるに。述懷の歌の中に。

いかにせんをのの山柴ことたえてなをたてかぬる宿の煙をおほけなき身の願にはあらしがしいつかむすはん細川の水近江の小野庄。播磨の細川は和歌所の永領にて。五條の三品よりかはらざりしかども。道のおとろへにしたがひて。武家のわむせ井などいふことに成つゝ。家の風もよはり行さまな

るを。此次でに聞えあげ給ひけるなるべし。其年の冬。彼細川庄を返しつかはされて。やがて小野をもわたさるべしなどの御有増ありと聞えし。誠に萬を惠給ふ御志忝承し也。時の管領右京兆入道殿より知行にそへて贈答などの有しを此方彼方取つぎ奉しかども。歌のかたちも覺すなりぬ。やがて正三位大納言にあがりなどし給て。和歌の道をふたゝびおこし給かと思しほに。明る年の春の花の夢に先立て。雲ときえ霞とへだたり給ひしこそあはれにかなしかりしか。今此手ずさみに書くはへ侍るに付ても。懷舊の涙水ぐきにそひ侍るなり。すり針を越しにぞ。都の山もかくれはてぬる。今ははやめにもかゝらず古郷の都の山はくもかくれつゝ、番馬さめが井などいふ所より山ぶところなる里つゞきにて。水のながれ心細く。常盤木にみどりそへたる若葉のかげこぐらく。松の藤波。

岸の山吹。えもいはぬ春を残しがほなり。

岩れもろしみつに春の面影をとめてやかへる松の藤浪  
今夜は山中にとゞまりぬ。彌生の末なれども。  
所がらにや。山風も猶あらましく。そぞろさむ  
き心地してまどろまれず。

春なからいふきおるしはよ寒にてまは折たくみのの山中  
關の藤川朝わたりしつゝ。ふはにつく。

むかしたにあれぬと聞し宿なからいかてすむ覽ふはの關守  
野上などいふ所はさともかすかにうかれぬも  
なし。あをのがはらに出たれば。國の境はるかに。南の方はるくゝと山も見えず。

命あらは花にかへらむ青くさの青野が原をけふは行とも  
墨股河は美濃尾張の境とかや。岸に打望たれば。船はむかひにあるほどにて。時うつるまで  
誘ひぬぬ。と計ありて里の子せりかなにかか  
たみにつみもちたる三四人。おきなのお老かゞ  
まりたるなどぞ乗ぐして來る。重部の船より

おりかね侍るを。こにや。むまごにや。たすけ  
おろしなどして。我もいみじうくるしげなる  
も。何となく哀にぞ見侍りし。水鳥どもの河洲  
にむらがりゐたるいとおもしろし。

船人も猶子を思ふ水鳥のすのまた川は波こゝろせよ

あしかをよひなどもおなじやうにこえ過ぬ。  
くろだといふ所にいにしへみどり子のほどよ  
りはぐくみにし人の。今はまことの親のよす  
がにてありと聞し。みちよりもたづぬべき所。  
人に問などしてあないしたるに。限なく聞よ  
ろこびつゝ。さるはおやめく人も都にあるほ  
どなりしを。若心にとかくいたはりなぐさめ  
などし。ありふるにたづき出きぬる心地して。  
みやこの物がたりなどしつゝ明しくらし侍り  
しも哀なり。かくてやう／＼卯月になりぬ。  
此所のさま。まへもうしろも田面にて。林は軒  
ちかく。いさゝ村竹めぐれり。民の家所々。か

やがのき蘆のかきほさへさながら夏そのかけ  
にかくされ。蓬律に門をとちたり。都よりあづ  
まへ行かふ旅人の過る堤の道もたゞ此かきほ  
の外なれば。むらがりとをる駒の足をとも。も  
のさはがしき折も有べし。わさ田におりたつ  
たごのこゑ／＼にうたひ。夜は蛙の耳かしが  
ましきなどめづらしき心地ぞせし。庭の木下  
に卯花のほのかに咲たるを。

夜もすから光はみせよむはたまの黒田の里にさける卯の花  
すみ染のくろたのさなへとる賤や夕をかけて袖ぬらす覽

此所はふるき歌枕などにもよめる歌みえず。  
くろだ川はあれども美濃國とかや。尋べし。都  
の風の便に此方彼方より文など言傳て侍し。  
哀知る計の歌などもありしかども態かきいれ  
ず。つれ／＼なるまゝに。近寺におはします地  
藏にまいり。老僧のむかし物がたりするなど  
かたらひよりて日をくらす。此たのもし人と



思つるやどもりさへ。とみの事とて京へのばりにしかば。すべてしる人もなし。さらばこゝより伊勢のかたへと心ざして。大神宮に參詣し侍しぞかし。道すがらひなの長路におとろへしありさまは。海士のたくなはながくしければ。心しづかに又かき候べし。十日あまりにて本の所へ歸りきぬ。かくてもたづきなきてあかしくらす。卯月のしもの四日。例の御堂に參りたるに。夕つかたなればにや。人もいたくまいらず。灯明かゝぐる人もなく。不斷の香の煙かすかにこゝろぼそし。此佛の御事は都にても聞侍奉しに。いにしへはあゆみをはこぶ人もおほく。御堂のかざりもきら／＼しかりしとかや。明德の比。軍のばになりてより。形もなくなりぬるとぞ人も語し。世の中の盛衰は佛の御上にも。いましけりと哀になん。正面の東のまに心靜に念ずし居たるに。年の

よはひ六十にちかかるとみゆるおきなすがたのかみひげしろく。いたくからめきたるが。こゝまのしろき衣にきなるぼうし引入て。末二股なるかせ杖にかゝりつゝ。庭の灯爐の本に立てふしおがむあり。此あたりにてはみならず。あやしう。もろこし人などにやとおもひながら念ずしはてゝ。御堂よりおりて。何となくあゆみちかづきてみれば。都にてたびたびあひ奉りし優婆塞也。宗旨の志ふかく。處々參禪の年久して。一心の本源明なりとかや。今互に手を打て大咲す。さるにてもいかにして爰には住かと問給に。みやこをうかれ出し様あら／＼こたふ。ひなの住居のならばずしてはいかにしてかなどなのめならず訪ひ給に。かつ嬉しき心地す。爰にて事つくべうもあらざれば。此旅のやどりにいざなひつゝ歸きてかたらひくらす。されどもつたなき身のあり

さま。もとより學せざれば一文二道を論せず。道心なければ一句の法文の心をうかゞひしる事もなし。たゞ一向に世上の物語のみして。今夜はまくらをならべて。いたづらにふしぬ。いかばかり彼心にも慚愧ありけんとはづかしかりき。さるはそれよりのちひたぶるにそひ奉りぬれば。いまは中々明暮に付て不善の心をも。かつうは病におかされて。おきふしの煩あるをも。かへりて哀み給ふらんと心易くぞ侍る。そのつぎの日より此人にさそはれ奉て。田面の中なるやうの所にいたれり。爰は家居もさる方に類ひろく。國郡の政を行ひ。百姓のかへりみ朝暮にすたれざりしかば。門前市をなせるやうにて。みやこの外の心地もせず。十日計や侍りけん。かゝる賤き非人の身にあまるまでのめぐみにあづかり。情のかずを見奉事。かたはし申さば。中々かたはらいたくなむ。

それより此所にうつろひぬ。こゝは玉鉾の道遠からぬほどながら。さすがに人音しげからず。東には江川はるかにながれ出て。綠竹浪おほひて。朝日かげをうかべき。南には眞砂山所々みえわたり。松風夢をやぶり。よるの月霜をかさぬるかとおぼゆ。西は野澤だん／＼に一むらざとにつゞき。蘆しげりぬ。なほひろごれる池北にめぐり。鴛鴨鴛どりなどこゝを栖とせり。堤の柳岸の杉むら／＼しげりて。寢ぐらとするかさゞぎむらがれり。はちすの花みだれさきて。此ころおもしろし。家居のさまはさながら山中の心地して。万木四方につらなり。流水左右にたゞへたり。岸たかくして又くだれり。すゞの下道すゞろに遠し。やぐらあり鹿垣あり。暫つはもののいくさをふせぎ。しら浪のをそれあらせじとなり。すべて弓の庭鞠のかゝりなど。うち入てはなを寛意なり。寢

殿の西にらうつぎきたる方に一字あり。號三竹陰補陀大士おはします。兩方に床あり。會下久參の衲僧をこゝにあつめて坐禪參學をはげまんとなり。此比夏中なればにや。さやうの人も爰にはおはしまさざりしかば。彼翁など兩三人こゝをしめたり。予が躰たらく。禪錄をあがめをくべき机には和歌の抄物を重ね。ふとんに座すべき床のうへには枕（初巻）双子をたづさへてよこたはりふせり。炎天にたへずして袈裟衣を忘。日々しぎをほしきまゝにして酒にくの中にたはぶる。是のみに限らず。無慚放逸の科二六時中にたゆる事なし。しかあれども。よきをえらばずあしきを捨ざる慈悲のあまり。これを事とし給はず。ひたぶる心にあはれみをはぐくみ給ふほどに。かゝるなさけのかげをたのむ木のもとにて。露の命を待がほなり。かくて五月の半に成ぬるに。日いよく

ながくつれづれにて。何となくらうの方に立出て。寢殿の南面をかいまみすれば。此ほどはみえもならはぬ俗四五人わらは姿のきよげに。あげまきのほどもたゞならぬ二人計みえ侍るに。都思出て床敷に。このらうの戸に出来る人に問侍しかば。あづまのかたよりこしの國へまかる旅人のこのあたりにしばしとどまべき事ありてなんとこたふるに。旅人と聞も身にしられ。ひなの長路はいかゞと問まほしけれど。うちつけなる心地して。この戸口よりかへりぬ。かくてある時。このあるじ聞る様。さても光源氏の物がたりといふこと。よく人に尋しりたるとなむきゝをよびたまひぬる。年久愁連歌の道にすぎ侍にしを。あるときは世の中にさはり。ある時はすぎごとならずして。詞の花色すくなく。心のいづみみなもととほしきのみにて。ちかくは是をとゞまりに

き。さはあれどもこの物がたりのゆへ聞侍り  
たき。ひまあらば片端にてもいかゞなどあり。  
予がいはく。まことに連歌の道の事。近年天下  
一同に此ことわざとなりぬとなり。しかれど  
も先達みなうせて後。みち邪に成行つゝ。今は  
風雅の直なるまじろひにあらず。詮論のかま  
びすしきをととし侍とかや。しかあればま  
じろひにくゝさし出がたき事おほかるべし。  
此事灯上人朝夕うらみかたられ侍し也。予も  
若年の時。もしまなびうることもやとおもし  
ひしかども。生得の不堪のうへ。此をそれある  
によりて斟酌をくはへき。されども老後の友  
たるべき物かな。抑光源氏の物がたりは。五條  
の三品入道釋阿。河内守光行等專是をもてあ  
そばれけるとかや。此人々よりふたつのなが  
れに成りて。あるひは定家卿の青べうし。河内  
守が本などいふことになりぬ。たゞ聊註を存

る事のかはれるばかりか。むらさき式部がこ  
との葉として。藤氏の長者御堂關白殿筆をく  
はへたまひける也。きはめて義ふかく理あさ  
し。物語の詞は其時世にいひしれる事を有の  
まゝに書たりしかども。世末になりゆけば。人  
の詞もしたがひてかはり侍るにや。今は人の  
なべてはしらぬ事のやうになりぬ。されども  
和歌道は詞人のみゝにたゝず。心田夫の賤も  
きゝうる様にとこそ先達も侍れ。殊更此物が  
たりは心の用ふかければ。是を心底にうかべ  
ばをのづから風骨と成て。詞の外に志みえぬ  
べきかなと愚意に存る計也。故伊豫守入道了  
俊在世の時。此ものがたりのよみとかず。しら  
ざる事のみおほかりしかば。十餘年がほど近  
付尋奉しかども。本より心はものごとにとゞ  
まらずして。風の樹頭に過るがごとし。況人な  
みに釋門にいりし後は。流石に人めをかざる



方ばかりにてもさのみ事とする事なければ。かたの様に覺す。かたはらいたき事おほかるべしとて。いなみ侍しかども。片端よりすゝめ給人などもありて。のがれがたくして。たゞつれづれなるまゝに。互の暇をかたりつゝしり讀侍るほどに。此秋までになりて。やう／＼事はてぬべし。さるは彼註としてしるせる物の一帖もなく。つゞきをだにおぼえずして。聞人よりもたどれるなり。されども立まじる人もなく。ひろく世のきゝみゝ有まじきを方人にて。いかに空事おほく侍らん。我はづかしきかな。まことや彼旅人の童形也。連歌の道をたしなみ。手跡も行末たのもしなど聞しに合て。こなたに立出て。たえず聞聞などせられ侍るに心はづかしくなむ。大和うたの心得なきをも常にいかにぞとあるに。をろか成心のをよぶ計は物がたりなどするほどに。様々眞をもあ

だ事をも隔なくなり行に。をのづからぬれぎぬ立出る人も有べし。さるは狩場のなら柴のなれのみまされば。和歌のうらはの捨舟も。終にいかなるところにかひかれけん。關守のうちぬるよひの月かげ。又身をしる雨の夕暮を訪ふに。をのづから夏衣かさねぬ夜半を恨。菅筵ながからぬ時をかこち侍ぬべし。さばかり身を雲水に任せ。山林になをかくす。べきほどならずとも。なにぞは露のあだし心の色にそむべきぞや。くつるたづなは龍田の川のごりにすまぬ名をやながさむと思かへすも。心と心のもよほしなりや。

涙川はやくうき名やなかれまし人めつゝみも朽果ぬ間にとかこちぬべし。

なみた川淺きもしらず頼來てうきたる名をやとに流さむかくて猶鹽焼衣なれぬれば。あるひはけはしき道に駒なべてゆき。あるひは遠きながれに

船のうちをおなじくす。又ゆくゑなき野原の露にみじか夜の月をおしみ。涼風の曉ともなひて木の下やみのほたるをあはれむ。あしたになれ行夕にむつれて。五月六月を送る。ある夜の月に川ちかくさそひ出て。

更にけりなかるゝ月も川波もきよすにすめる短夜の空此所をきよすと申なるべし。彼歌。

夏の夜の月の清洲にすむ鶴の霜のふりは色のさむけさみな月はじめになりて。あはれしらるゝ夕月夜に。まきの戸口にやすらひつゝ。かりそめの物まうでとかやとて。

立かへりあひ見む中と思へとも世のならひ社定めかたけれとあるを。いなばの山のとだにとひあへず。あはたゞしきほどなり。

限りある命なりとも旅衣かへらん迄の身をやいのらんみな月御祓の日ゆふにかきて。

君か爲神しうけよと水無月の御祓にはあらぬ御祓をやせむ返し。

神に今うけよといのる御祓こそうきをしらるゝ契也けり又衣手かれし夜を重ねて。かれより。

よそながら音はかはらぬ松風をうはの空とや人のきくらんおもひなぐさむもはかなし。今一かたは少遠けれど。あはれしれる夕ぐれえんなるあけぼの。月の夜ひるまに言傳へていひかはすに。ひともしらずうき名もながれずと。ほのきゝはべるもうらやましく。さりとてひとにはわれしりがほにかたるべき事かは。天にくちなしといへども。ひとのいはざるはとくなるべし。返し。

身の上に露をはかけきたか方に今宵は松のねをかはしけんしかのみならず。あるときはまつ夜ながらのありあけに鳴の羽がきをかぞふ。みしよのまぐらのうへにおもひねの夢をたどり。明るをつぐるかねのこゑに。夕をしらぬ契りをうたがひ。空蟬のむなしきねをなき。夏むしの身を

いたづらになすことをかなしみ。夏も過秋にもなりぬ。いとどしく一葉ちる風のこゑになみだの玉をくだき。二のほしの行あひにねがひのいと心の心をひく。夕の空におもひつゞけて手ずさみに。

墨染に年経る袖の色なればかすともうけしあまつひこほし筆をとりておなじ昏に。

ほすひまは秋の一夜のあまつひれ古き涙とまたやならましなど。なをざりごともありしなり。かくてやうやう歎ながらの月日をかさねき。此まゝもひたふるに。しらぬ山路を尋ても。跡たえなまほしけれども。もろこしのよし野の山にこもるとも。をくるべき心にもあらず。後の世を歎なみだといひなすとも。しばらく袖の色みえぬべし。いかゞせんにて又しれるよすがへ思たち侍るに。かれはたこしのたびにいそぐ日かすのまぢかきをいへり。ある時かれいはく。ま

ことやこの光源氏の物がたりは。うたにも連歌にも詞を取て心をとらずと申人あり。此事いかゞと。予がいはい。此物がたり。心詞幽玄をきはむ。ことには和歌の難題。連歌の付にくきは。ふるき物がたりの心をまはす事一躰なるべし。いはゆる生田の川に鳥のゐるといひ。しちのはしがきかきつめてといふがごとし。源氏の心をよめる歌古來おほし。證歌所々におぼえず。後京極攝政。

白露の情をきけることはやほのくみえしゆふかはの花ちかき世には。等思兩人戀といふ題にて。大膳大夫高秀。

あやにくに雲井の鷹の來る秋やおちはの露も袖ぬらす覽如此なるべし。

故法音寺入道殿。勸解由小路殿。法名道將。

つかふひとにそはしたものであるといふ句に。

はつ瀬路やおなしやとりの中へたて

といふ句やらんに。

夕霧のうへに雲井のかりなきて

これ皆心をまはせりと申ぬべし。唯今おもひ  
いだす計也。證歌いくらもありぬべし。又彼物  
がたりの歌をとれる歌もあり。おく山の松の  
とぼそを稀にあけてといふ歌を。定家卿。

足引の山櫻戸を稀にあけて花こそあるし誰を待ちむ

如此一首を申さば。なすらへてこゝろえ給ふ  
べしなど語り侍るに。さては不審はれぬ。さる  
にてもけふ翌は。よの中すゞしからぬほどに  
て。なやましかるべけれども。此物がたりの歌  
をなむうつしとゞめて見侍りたく。かうく  
も筆とりなんやとあるに。いなびがたく。しの  
ばるべきふしにはあらずとも。かくばかりわ  
かき心にすける人も世に有がたく成ぬれば。  
いとゞ敷すゝみても申侍り度事ぞかしとかゝ

まほしけれども。鳥の跡面にきえ。水莖のなが  
れうたかたにあらしをとおもひたゆたひ侍り  
しかども。よしや筆の海はあさくとも。ふかき  
志はみえぬべしと。これをかごとにてしるし  
侍るなり。拔書の歌は所々におほかべきを。さ  
やうの本もなければ。歌計をとおもひ侍なが  
ら。あまりにゆへ知がたきなるべければ。ある  
ひは彼物がたりの言葉をひろひ。あるひは十  
が一の心をあらはしてしるし付ぬ。本より病  
をもき身にいとゞしきあつさも一かたなら  
ず。みだれごころにて。吾みるうちにだにひが  
める事おほく侍るかな。よくくなをし付て。  
うるはしきてあらば。かならずきよめかゝせ  
られさぶらふべし。

わすれしよ忘るなとに言のはのいはねを残す水莖の跡  
いきてよにめくりあはすは幾秋か空しき空の月に憂へん  
はかなしと見るに涙も浮ふ泡のうたかた消るもしの浦浪



さてもかやうのあだごとども書付侍事。かた

はらいたく憚なきにしもあらず。然はあれども。此源氏物語の歌双昏の奥にことはりを一筆のせてとのぞみあるに任て筆をとり侍るつゝるでに。都よりうつりかはりし身のありさま。寢覺のなぐさめぐさとも成ぬるをおぼえずしるし侍なるべし。いまは彼志にはあらず。丙丁童子に傳へ侍るべし。應永廿とせあまり五年秋七月十八日これを書事しかなり。

かく計なくさめ草の種よりはいかてさくらんもの思ひの花  
花洛清巖山科正徹卅八歳

敷嶋の道をつたへてひさしかれ千代のしら菊松のよるつ代

右なくさめ草以扶桑拾葉集書寫依無類本不能校合

## 伊勢紀行

權大僧都堯孝

永享五年彌生中の七日。大神宮御參詣の事侍り。明らけき日のおほむ神。御たびのよそほひに光をそへ。のどかなる風のみや。御道すがらのちりひぢをはらはせおはしますにや。御進發の日より清くうらゝか也。

長閑なる御代にも高き神風は君が光りに立やそふらん  
河原過侍りて。

みそきして朝立袖にかけてけりかつ白河の涙のゆふして  
逢坂こえ侍るに。去年の秋富士御覽の御とも  
に侍りし事も思ひ出られて。

此春も又こそむすへあふ坂や去年みし秋の關の清水を  
惠ある代にあふ坂はみにこえて嬉き關のゆき、也けり  
うち出のはまを。

朝ほらけ日も打出の濱風に霞をこゆる春のさゝ波  
松もとのあたりにて。

名に立る千世の松もと待かひもありふる影に靡くとそみる  
勢田のはし渡り侍るとて。

あふみ路や勢田長橋日もながしいそかてわたれ春の旅人  
そこはかとなく霞わたれる朝氣の程。畔を過  
侍るに。うねのなどはいづくなるらんと覺え  
て。

春の田のうれのやいつこほの／＼と霞にこめて明ぬ此よは  
野路と申所にて。

いつれにも春行旅の袖ふれん霞もふかき野路の朝露  
草津を過侍るとて。

分きつる春の草津の草若みかるまでもなく駒もすさめし  
みな口の御とまりにて。

水無口やけふの御影をやとすより行末遠き名に流つゝ

十八日。夜をこめての立侍りしに。殘月朧々た  
るに川音さやかに聞ゆ。

行水の音はさやけき川せにも霞てよとむ有明の月

いはむろと申所あり。

君もみよ千代をこめたる岩室の岩に生そふ松の齡を

土山といへる所あり。

うこきなき名に顯るゝあらかれの土山こゆる御代の畏こさ

かどや坂とかやにて。

心せよ關路の岩のかとや坂こえはかぬへき旅ならすとも  
坂の下にて。

神も又幾万度むかふらん君か八千世のさかの下みち

鈴か山こえ侍るに。春深く明ていたれる中に。

殘花一樹盛にて雪のやうにみえ侍りしを。

鈴か山春もやすらふ關路とやふりはへ花の雪を殘れる  
とよく野はる／＼とわけ侍るとて。

君か代を先こそあふけ廣きのへ末遙なる道に出ても

あの／＼つ近く成て。そこともわかぬ遠山。霞の  
隙々よりみゆ。

いせの海の浦にはしほや満めらん霞引たるあの、遠山

十九日。此御とまり夜ふかく立て。海の邊過侍  
るにうら風はげしくて。

春なからいせをのあまのぬれ衣猶ひやかに浦風を吹

雲津の里と申侍りし所にて。

明やらぬ雲津の里の夕霞よそさへ深き春の色かな

星合の里とかやにて。

里の名に絶ぬ星合あゝかたなはたつめの契ともかな  
かさ松と云あたり過侍りしに。

おのつからゆきゝの宿やかさ松のかけに立よる旅の諸人  
見わたりの程。朝和のうら氣色いとみ所多か  
り。餘て撥掉歸繕去浪疊朝霞繡翻といへるふ  
る事も。めのまへにぞうかび侍るや。

こゝ船も霞わたりて朝和の浦半のみるめあかすも有哉  
たてり繩手と申所に賤の女などのひなびたる  
おほくぞ立ならびて行客をみる。

都人みるそとみえて賤の女もたてる繩手に立ならひつゝ  
あやひがさと云所をかくして。

飛鳥のおりし色よりくれは鳥あやひかさまに春をしたはん  
くし田川わたり侍るとて。

しめはへるくしたの川の水清みわたる心のあかものこらす  
齋宮と申あたり過侍るに。昔覺ゆることも侍  
りし中にも。天曆の御時かとよ。齋宮下り給ふ  
けるに。朝忠中納言長奉送使に侍りて。万代の  
はじめと今日を祈り置て今行末は神ぞしるら

んと詠せし事おもひ出られ侍りて。

万代といのる心はけふそへんいつきの宮の跡をたつて  
あけ野とかやにて。

分ゆかん花にあけのゝ、篋も霞に残るしのゝめの空  
さむ風といへるは富士の根みゆる所なめりと  
聞侍りて。

ふしのれの雪をほのみてたかせより寒風としも爰をいふ覽  
土大佛と申は。俊乗上人とかやきこえしひじ  
りの。東大寺再興の事を祈請のため大神宮に  
まうで侍りしに。夢の告ありて。あやしき牧童  
の現じてつくりなせる毗盧遮那の御かたちな  
るべし。是又應化利生の御ちかひは靈山淨土  
の生身。よもへだてあらじかし。

此山はわしの高れか更に又遮那の姿を仰きみるかな  
みや川御祓など嚴重におぼえて。

我君の高きみそきを宮川や波の白ゆふ千世もかけこせ  
山田に御着のほど。

契りある千木高知て神もさそ君待えたるけふの嬉さ

廿日。御參宮の日也。夜もすがら雨ふり風さは  
がしかりしが。辰の刻計空こちよく晴て。御  
出の儀ことにありがたくぞみえさせおはしま

ける。公卿殿上人馬くらをかざり。衛府御隨  
身あざやかなる袖をつらねて供奉し侍るよそ  
ほひ。きら／＼しくぞ侍りし。抑御神五十鈴の  
川上に宮所をしめ。高天の原に千木高知。下つ  
磐根に大宮柱廣敷たてしづまりまします事  
は。世を守り。國をたもち。人をはごくむ御ち  
かひ成るべし。今我君豐蘆原千五百秋瑞穗國  
をつかさどりおはしまして。神をあがめ。政を  
たすけ。民をなで給ふ御めぐみも。神慮に隔な  
くおはしますは。太田命の八万歳をたもちま  
しまして。御子孫萬世ならん事のいともかし  
こく覺侍るまゝに。詠進三首。

今朝は又天の八重雲晴にけりよのまの雨や道清むらん  
およふへし君か齡も万とし八度重し神のむかしに

君も猶幾世々かけて仰かまし高天の原の神のしめ繩  
同じ夜法樂になぞらへて。心ひとつによみ侍  
りし六首。

春

言の葉の花に残れと祈る哉高き神代の春の匂ひを

夏

あふきみる心も涼し神風やなひく千枝の松の村たち

秋

名に高き神路の山の秋の月嘸よ、越て君照すらん

冬

年つもるかけをもみよと朝熊やかゝみの宮にふれる白ゆき

戀

さのみやはつれなかるへき絶て猶思ふ御祓の數を重ね

雜

たのむそよ内外の森のゆふたすきかけてを恵め此世後の世

廿一日。つとめて山田を御立の時。

五十鈴川名に流れり我君のいのるてふことなるにまかせて

宮川渡り侍るに。明方の月さやかにいと神さ  
びけり。



わすれめや残る廿日の月かけをほのみや川の春の曙  
うへ川の橋と申所にて。

旅人のかけさへみゆるわたり哉春行水の上川のはし  
よひのもりをぞ。

此比の月見る宵の森ならは猶旅人の立やよらまし

うら／＼と過侍るに。あまどものしはざ<sup>あま</sup>  
ざま也。汐干にまてと云ものさしとるを見て。

いせの海のおまのまてかきまてはし都のつとに我も拾ん  
あこぎがうらにて。

あひきするあこきか浦の沖つ浪かへりみるめや旅も重つ  
あふのうらはいづくなるらん。

春深みあふのうらなしときぬとかたえの外も花や咲らん  
みぎはにつのぐみたる蘆なども見え侍り。

かりねにも春やは人のおりしかんまたうら若きいせの濱荻  
けふの御とまりはあのをつ也。日高く着て。三

條の宰相中將家歌よませられ侍りしに。

春月

有明の比にも成ぬさらてたに春は霞をいてかての月

待戀

たか爲に催すかれそたのめしも我は忘れ夕暮の空  
旅行

敷嶋の道廣き世の旅なれば言の葉草や枕にもせん  
廿二日。しらつかの松を見やりて。

霞立縁の末とひとつにて明行空のしらつかのまつ  
とよく野にて。

なひくてふ民の草葉の末なれや年もとよくのへの道芝  
野澤邊のあたりに。野飼の牛あまたみえ侍る。

澤邊なる野飼の牛もおのつからつのくむ  
くるまやといふ所あり。

日そ永き道は遙々めくれともまた車やのめくるとはなし  
關川とかやを。

君か代は流れ久しき關川の千年にこゆる浪のまに／＼  
野せの町やと申わたり。すみれ咲たるをみて。

春深き野せの町屋つは葦色に染てふ人やつむらん  
坂の下過てすぐか山こえ侍るに。つゝじ咲。藤

匂ひて。暮春の興をつどへたるに。鶯さへしき  
りになく。

咲にけり坂の下てる姫つゝし遠き神代の春を残して

是も又袂にかけつ鈴か川八十瀬の外の春の藤なみ  
鶯も音をこそ盡せ鈴か山ふり捨て行春を恨て  
山中の宿と申所にて。

蘆引の山の山中行道も猶あふ人のしけき旅かな  
野を分侍るに。すみれわらびなど生まじりて  
いと興あり。

紫のちりにまじはる葦草つむ手もふるゝ程とこそみれ  
雲雀ある聲聞ゆ。

分くるゝ春の野もせのかり枕こよひ雲雀に床やならへん  
水口に御着の時。

春は猶かへすあら田にせき入て水のみな口かすも有かな  
廿三日。かしは木の里と申所過侍るとて。

今よりは葉守の神も宿しめん春の緑の柏木の里  
うへ田川原にて。

今幾日あらは早苗もうへ田川せきいるゝ水の春深き比  
かなやまとかやぞ。

神代より岩ねこりしくかな山を

君か爲かと

大津の濱にも歸り至り侍ぬ。天智の昔皇都を

ひらかれ。中興の祖にて万の道を越させ玉ひ  
しことなど思ひ出奉りて。

ふりにける大津の宮とをきてみればあめの帝の昔おもほゆ  
なきた水海のかぎりなくかすめり。みぎはに  
氣色ばかり立くる浪のかへるも。千代をかぞ  
ふるにやと聞なされて。

長閑なるしまのうらはの小波もかへるゝ千世の音を聞ゆる  
御道中一日も雨のさはりと申事さへ侍らで。  
なりぬ。まことに天道にも神靈にもか  
はせおはしましける事。有がたく目出度覺侍  
りて。

堯 孝

我君の心の儘に照すより天津日の神光のとけし  
十月十三日。今度御道中詠進の和歌。勅二一卷二  
可二進覽二之由被二仰下。仍馳筆。翌日令二持參  
者也。

右普廣院殿御參宮之時記云々。

右伊勢紀行平山等山藏本書寫校合了

群書類從卷第三百三十五

紀行部九

富士紀行

贈大納言雅世卿

永享第四の年長月十日。公方様富士御覽のため  
に東國へ御下向あり。可<sub>レ</sub>供奉<sub>二</sub>之旨兼日<sub>一</sub>  
り被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>。今曉まかり立侍りしに。相坂の關  
をこえ侍とて。

思ひたつ心もうれしたひ衣きみか惠にあふさかのせき  
今曉より雨はれて。空も心よくみえ侍しかば。  
秋の雨の遙々思ふふしのれはけさよりやかて空もへたてし  
草津と申所にて。

枕にはむすはてすきつ旅ころも草つの里の草の袂を  
やす川にて。

我君の御代にあふみちけふもはや渡る心ややす河の水  
守山のはとり田のもはるかにみわたされて。

しつのめか田面のいねをもちる山の梢も今そ色付にける  
かぐみやまをみて。

老の坂はやこえかゝるかゝみ山今さらなにか立よりてみむ  
十一日。いまだ夜ふかきに。老曾杜はこゝのあ  
たりと申侍りしかば。

明やらのおいその杜の薄紅葉いまは夜ふかき色かとそ思ふ  
山のまへとかや申所にて。

しつのめか通ふいへるも稀なるや麓は山のまへのたなはし  
犬上と申里にて。

をのつからとかめぬ里の犬上やとこの山風おさまれる世に  
二本杉と申所にて。

ふたもとの杉とて又もあふみちにふる河のへを思ひ出らし  
不破のせきは苦むして。板びさしもしるしば

かりみえ侍りければ。

板ひさし久しき名をは猶みせて關の戸さゝぬふはの中山  
たる井と申所につき侍て。

里人もくみてしらすやけふ爰にたるぬの水の深き恵を  
十二日。夜をこめて。あをのが原と申所を過る  
とて。

草のはの青野が原もみえわかて夜ふかく分る露を寒けき  
赤坂と申所にて。いまだ夜も明侍らず。友なひ  
侍る人々も跡におくれ侍を。しばしまち侍し  
ほどこ。

行つれぬ友さへ跡に残るよをしはしやこゝにあかさかの里  
なか橋と申所を過侍るに。あたりの田のもゝ  
遠く見わたされて。

秋ふかき田面に續くなか橋はほなみをかけて渡すとそみる  
中川と申所にて。

都より流れ出ける末なれや今はた渡る中川のみつ  
むすぶのまちやとかや申所にて。

朝露の結ふのさとのたひ衣わくる草葉も色かはるらし

十三日。尾張國おりつと申所を夜ふかくたち  
侍るとて。

夢路をも急ききにける旅なれや月に假れの夜をおりつまで  
あつたの宮を過侍るほどにかの社頭の鳥井の  
前にて。

神垣も光そふらしうこきなきよもきか嶋に君を待えて  
なるみがたのほとり海づらにつぎきて野あ  
り。これぞうへ野なるらむとおぼえ侍て。

あさ日さすなるみの上野鹽こえて露さへ共に干潟とそなる  
又おもひつゞけ侍ける。

道の爲我思ふことのなるみ潟願ひみちくるしほせともかな  
星崎と申所にて。今日は名月なり。空も心よく  
晴て。月もなをえ侍ぬとみえしかば。

ほし崎や熱田の方の空はれて月もけさよりなこそしらるれ  
夜さむの里と申も此國と聞侍しかば。

よしさらは宿りとらしと旅衣よさむの里をよきてこそゆけ  
さかひ川をみて。

それときくしるしはかりか堺川ほそき流れは名に流れても



參河國八橋にて。

八橋のくもてに渡るひまもなし君かためにといそくたひ人  
矢矧の里近く成て。道のかたはらにまゆみの  
もみぢしたるを見侍て。

道のへのまゆみのかた枝紅葉して爰や矢矧の里とみゆらむ  
我君の治れる代はあつさ弓ひかぬやはきのさとにきにけり  
今夜の良辰月もことにくもりなく晴て。名を  
あらはし侍ぬること。千載之一遇。万秋之芳  
躑。めでたくおぼえ侍ければ。

君か代はなをなかつきの月の名も所からにそ光りさしそふ  
おなじく此處にて三條相公羽林續歌十三首を  
講じ侍しに題をさぐり侍て。

名所山月

雲もきき霧もはれ行秋のよになのみ二むらの山のはの月

名所里月

秋ふかき夜半のころもの里人は月にめてゝも月や寒けき

名所浦月

さそなけに今宵の空の清みかたみぬ俤も波の上の月

名所瀧月

過ぎつる跡になるみの鹽ひかた心をさそふ夜半の月かな

寄月忍戀

やとさした涙の露もよるこそとおきゐて思ふ袖の月かけ  
十四日。ここの御とまりを立侍しに。河あり。  
これや豊川と申わたりならむとおぼえて。  
かり枕まいく夜有て十よ川やあさたつ涙の末をいそかむ  
衣の里ときゝ侍しも。此あたりやらむと覺え  
て。

賤のめかうつや衣の里のなを吹秋かせのつてにしらせよ  
山中と申所あり。折ふし鹿のころほのかにき  
こえければ。

おほつかなこの山中になく鹿のたつきもしらぬ聲の聞ゆる  
花ぞの山はいづくにてか侍らむとおぼえて。

旅衣いさ袖ふれん秋の草の花その山の道をたつて

引馬野も此國ぞかし。いづくならむと分明な  
らねど。

たひ人ののるより外もひく馬のゝ野への秋萩花やみたれむ

いづくの程にて侍しやらん。社壇あり。人にと  
ひ侍れば。八幡宮と申。鳥井の前にて。今度の  
御旅のめでたさ。御神慮も殊に掲焉におぼえ  
侍て。

いはし水君が旅行す点も猶まもらむとてや跡をたれけん  
國々所々の御路次。兼日用意のほどもみえて。  
いづくもさはる所なく。御路つくらせ侍りけ  
るとみえしかば。

民やすく道ひろき世のことほりも猶末遠くあらはれにけり  
高師山と申も此あたりにてやとみえて。

富士のねに及はぬ名のみたかし山高しとみるも麓なるらし  
十五日。遠江國鹽見坂にて御詠を下され侍し  
に。

しほ見坂さか行君にひかれてそさらに名高きふしを眺むる  
又今日二子づかと申所にての御詠とて。同下  
され侍し次に。

富士をみる此ことの樂に顯れて名に立のほる二子つかかな  
十六日。橋もとの御とまりを夜をこめて立侍

しかば。濱名橋をうちわたして。

忘めやはまなのはしもほのく明わたる夜のすゑの川浪  
濱名河夜みつしほの跡なれやなきさにみゆる海士の小舟は  
時雨けしきばかり過侍しかば。

旅衣しはれたにせぬしくれ哉もみちないそくけしき計りに  
さき坂山と申所にて。

遠くみるふしの高れもしら鳥のさき坂山をけふそこえぬる  
十七日。此國の府中を立侍るほどに。かけ川と  
申所にてあめふり侍しかば。

たび衣袖になみたをかけ川やぬれていとはぬけふの雨かな  
菊川と申所にて。

汲てしる君か八千代も末となき名にきく河の花の下水  
さやの中山を越侍とて。

ななざりにこゆへきものか我君のめくみも高きさやの中山  
こままがはらとかや申所にて御詠を拜見し奉  
りて。

たくひなくあすみよとて秋の雨にけふ先ふしの搔曇るらん  
かくて駿河國藤枝と申所に御つきあり。十八

日のあした。所をまかり立侍に。岡部の里を過て。やがて宇津山にわけ入侍る程。所の名も其興有ておぼえ侍り。曩祖雅經卿ふみわけし昔は夢か宇津の山跡ともみえぬつたの下道と詠侍し事までおもひ出られ侍て。

昔たにむかしといひしうつの山越てそしのふつたの下みちさと過て又こそかゝれうつの山なかへのまくすつたの下道斯て此國の國府につき侍り。富士もことにさだかに見え侍しかば。

富士のれの山とし高き齡をも君まちえてや今ちきるらむ

此國の守護上總介範政に御詠を被<sub>レ</sub>下侍し次に。

此宿にかゝること葉の玉しあればふしのみ雪も光そふらし十九日のあした。猶此所。又御詠を數首拜見し奉りて。

ふしのれの月と雪とに明す夜や君かことはの花をそへけむ忘れめやくもらぬ秋の朝日影雪にはへるふしのなかめを朝明のふしのれおろし身にしめて思ふ心もたくひやはある

富士の高根に雪のかゝり侍るが。綿ばうしに似侍るよし。御詠にあそばされ侍しかば。

雲やそれ雪をいたゝく富士のれもともに老せぬ綿ばうし哉又御詠を被<sub>レ</sub>下侍しほどに。

都よりはるく來てもふし川や行としなみは猶そかされむ廿日。清見寺へ渡御に供奉して於<sub>二</sub>彼寺<sub>一</sub>御詠を拜見し奉りて。

けふかゝること葉の玉を清みかた松によせくるみほの浦波吹風も猶おさまりてたゝぬ日はけふとそみゆる田子の浦波やがて府中に還御あり。廿一日早旦に又持參。富士のれは名高き山と言のはに君のこしてそ幾千代もへん又御詠を下され侍しかば。

數々のことはの花をみやこ人ふしより高く猶やあふかむかくて此所をまかり立侍しほどに。私の宿に一首よみをき侍る。

雪に暮し月にあかして富士のれの面影さらぬ宿やしのほむ今日又宇津の山をこえ侍るとて。立かへりうつの山のつたひきて夕露分るたひ衣かな

てごしとかや申所に。遊女とおぼしくて門に  
立侍をみて。

おほけなくよその袖迄引はよと見ゆるてこしの里の浮れめ  
又藤枝の御とまりにつき侍て。

秋の露もわかむらさきの色に出よ松にかゝりし藤枝の里  
範政詠進につきて。御詠をくだされ侍しついでに。

誰もみなひかりにあたる日本の神と君とをさそてらす覽  
廿二日。夜をこめて立侍るに。せとやまとかや  
申所にて。

都にと又こそいそけをひ風も船路にはあらぬせとの山こえ  
嶋田川と申所にて。

しま田川はしうちわたす駒の足もはやせの涙の音を聞ゆる  
大井川と申所にて。

思はすよみやこの西のおほ井河東路かけてなかれこんとは  
又さよの中山にて御詠を拜見して。

君よりも君をやしたふ今日さらに又あらはるゝ富士の高根は  
廿三日。此國の府中をたち侍るに。あけぼのゝ

空霧わたりて。鴈の鳴侍るを聞て。うへ松と申  
所にて。

行末のちとせをかけて君が爲けにうへ松の里とこそみれ  
ひくま野と申所も此あたりときゝ侍て。

惠ある君にひかれてひくまのや旅としもなき旅のみち哉  
又みちのかたはらにふるき松あり。木だちの  
拈比類なく。其興ある松也。人に問侍れば。八  
百年ばかりの星霜をも送侍るらむ。名をばせ  
うらが松と申侍しかば。

翁さひうへけるのへの松が枝はさていく秋の霜をへぬらん  
はまなの橋もやう／＼ちかく成しかば。

けふは又めにかけてのみいそくな濱名の橋の遠き渡りを  
廿四日。橋下の御とまりを立侍しに。雨ふり出  
侍しかば。

旅人のみのゝうは毛もしらすけの湊やいつく雨はふりきぬ  
いまばしと申所にて。

君かためわたす今橋今よりはいく萬代をかけてみゆらん  
矢はぎのとまりちかくなりて。



梓弓かへるさ近くなりけりおなしやはきの宿をとふまで  
廿五日。此御とまりを立侍て。なるみのほとり  
を過侍とて。

〔一行團〕

廿六日。濃州すのまたと申所にて。

をのつから名になかれすの又類あらしとみゆる浪の上哉  
なが橋と申所にて。

立かへる此長はしも長月やすふになるまで日數へにけり

廿七日。たる井の御とまりをつとめて立侍し  
に。山田の面にいねほしたるをみて。

朝日さす山田のをしねかりつみて夜なく露を先やほす覽  
かしは原と申所にて。

秋さむみ下葉いろつくかしは原露のみもろく風渡る也

さめが井と申所にて。

君か代は流れも遠しさめが井のみつわくむ共盡しと思ふ  
をのと申所にて紅葉を見侍て。

たび衣もみちのぬさもととりあへず都のにしき又やかされん  
あつさの關にて。

もる人も此せきの名の梓弓手にふれぬ代はのとか成らし  
武者の宿につき侍て。

わか君の御代をおさむる武者の名を聞里もしつか也けり  
この御とまりにて御詠を被下侍しに。

若枝のみそふへき千世の秋かけて何か老その杜の紅葉は

## 覽富士記

堯孝法印

思ひ立ふしのれ遠きおもかけは近く三上の山の端の空  
草津の宿にて。

七の道風おさまり。八の嶋なみ靜にして。よもの  
關守戸ざしをわすれ侍れば。旅のゆきゝさは  
はることもなく。万の民くろをゆづるこゝろ  
ざしをなむもとしければ。いづくにやどりと  
るも心とけ。たのしびおほかる御代にぞ侍  
ける。爰に富士御覽の御有増するとをされ侍  
て。永享四のとし長月十よ日の程におぼしめ  
し立れ侍り。折しも秋の雨日來ふりつゞきて。

はれまもみえ侍らざりしが。御立の曉よりい  
つしか空のけしきすみわたり。のどやかなり  
しぞかつ／＼有がたくおぼえ侍る。

あふきみる御代の光もけふは猶空にしられて晴る雨哉  
逢坂越侍とて關の明神のあたりにて。

君か代にあふやうれしき相坂のせきに關守神のこゝろも  
あけぼのゝ雲まより三上山ほのみえ侍り。ふ  
じのね思ひやられて。

近江路や秋の草つはなのみして花咲のへそいくともなき  
やす河のあたりに御よそほひを見奉らむと  
て。そこらつどひゐたり。

をのつから民の心もやす河になみゐて君の光をそまつ  
今日の御とまりはむさの宿とかやなり。都より  
十三里  
つぎの日夜ふかく。山のまへと申所すぎ侍る  
とて。

月もかな秋霧ふかきあし曳の山のまへのゝしのゝめの道  
四十九院の宿を。

四十餘りこのあたりの里の名は大和ことはにいかゞ殘さん  
犬上と申あたりにて。いさや河はいづくにて  
かとたづね侍れども。さだかにこたふる人も  
なし。里のゆくてに。山川のすゑかすかに見え  
たる所あり。是ならむかしとをしはかりて。

いさといふなになれたる川音やとへといはれの水の白波  
小野の宿にて。

吹にけりわけ行袖の露霜もみにしむ秋のをのゝ山かせ  
すりはり峠をかすもしらずこえ侍る人のたゞ  
一かたにいそぐも。山みちつづらおりにて。行  
ちがふやうにぞ見え侍し。

心せよ行かふ旅のもる人もそてすりはりの山のかけちそ  
不破の關すぎ侍りしに。もるとしもなきせき  
のとぼる。苔のみふかくて中々みどころ有。

月さしをは幾世忘れて斯く計苔のみとつるふはの關やそ  
たる井の宿ちかくなりて。

むかしみし影をしるへに又やわれ思ふたるおの水を結びむ  
おなじ御とまりにて。むさより  
十四里。

みの山や松は一木のかけにしも旅れかさなる千代の秋かな  
十二日。夜をこめて。あひ川と申所過侍しに。

末とをき世にあひ河の岩浪のちとせを越る音のさやけさ  
青野が原とかやにしかのねかすかにきこゆ。

鹿ぞ鳴青野が原のあなつゝらくるもしられぬ妻をうらみて  
夜しられよイ

赤坂の宿にて。

おりに逢あきの梢のあか坂に袖ふりはへていそく旅人

道すがらともなひ侍る人のもみちしたるつた  
をいかゞみるとてをくり侍りしに。

かつみても袖にそあまたこえぬうつの山路の露が行ふは  
いづくにて侍しやらむ。霧わたれるひまゝ  
よりいなばほのかにみえて。秋の空さへえむ  
なるに鴈つれてとぶ。

秋寒く田のものいなは鴈を啼霧の朝けの空もほのかに  
くむせ川わたるとて。

夕されは霧たとくし河の名のくるせもとめて舟や繫かん  
かさぬひつゝみといふ所にて。

手にもてる笠縫つゝみ行つれてこととひかはすけふの旅人  
ながはしときこゆるは。げにぞはるゝとみ  
わたされたるにや。

數ならぬみのゝ長橋なからへて渡るも嬉しかゝるたよりに  
むすぶの町屋と申所にて。

露霜のむすふの町や夜をこめて立あき人も袖や寒けき  
すのまた川は興おほかる處のさまなりけり。  
河のおもていとひろくて。海づらなどのこゝ

ちし侍り。舟ばしはるかにつゞきて。行人征馬  
ひまもなし。あるは木々のもとたちゆへびて。  
庭のをもむきおぼゆるかたもあり。御舟から  
めいてかざりうかべたり。又かたはらに鵜飼  
舟などもみえ侍り。一とせ北山殿に行幸のと  
き。御池に鵜ぶねをおろされ。かつら人をめし  
て。氣色ばかりつかふまつらせられ侍し事さ  
へに。夢のやうに思ひ出され侍る。それよりほ  
かにかけても見及侍らぬわざになむ。

嶋つとりつかふうきすのまたみればしらぬ手繩に心ひく也  
おもひ出る昔も遠きわたり哉その面かけのうかふ小舟に

尾張國をよび河にて。

わか君のめくみや遠くをよひ川ゆたかにすめる水の音かな  
おり津の御とまり。たるおよ。り十里。かいつなど過て。熱  
田のみやの神前にまうでて。御道すがらの御  
祈など申侍き。むかし日本武尊東夷征伐のため。  
このさかひにをもむきたまひし時。よぎり

道し。伊勢太神宮にして大和姫命にまかり申  
したまひしに。命のさづけたまひし靈劔も此  
神殿にとゞまらせおはしますとかや。いとや  
むごとなき神明。鎮護國家のちかひもたのも  
しくおぼえ侍りて。

なをまもれめくみあつたの宮柱立ことやすき旅のゆきゝな  
あつまの、草葉をなきし秋の霜ふりていく代の君か守りそ  
蓬萊の嶋をみて。

君かため老せぬ藥ありといへはけふや蓬か嶋めぐりせん  
なるみがたにて。

忘れしな浦かせさむくなるみかた遠き鹽ひの秋のけしきは  
夜寒の里はこの國ぞかしとおもひ出侍て。

うき身にはいつもよ寒の里なれて今更秋の旅れともなし  
參河國八はしにいたり侍て。はるくきぬる  
とながめ侍し往躅もおもひ出されて。そぞろ  
に過がてにぞおぼえ侍し。

聞わたるくもてゆかしき八橋をけふはみかはす旅にきに鬼  
今夜は十三夜なり。名におふ月のひかりさや



かなるにも富士のねさこそといそがれて。

ふしのれに待みむかけそ急かる、今宵な高き月をめてしも  
けふすぎきつるほし崎など思ひ出らる。

月影のわか住かたもはるゝよにはしき遠くおもひ出つゝ  
やはぎの宿御とまり。おりつより  
十二里。三條相公羽林

のやどにまうでて。飛鳥井黃門など題をさぐ  
りて歌よみ侍しに。名所野月を。

あはつの、露わけ初てあつまちやいく草枕月になれ鯉

### 名所關月

忘れしよ苦ふかかりし軒端にも月やみるらんふはの關守

### 名所橋月

戀わたる昔をかけて八橋にはるゝきてもみつる月かな

### 寄月祝言

いく秋が我君か代も長月やなにふる月の霜をかされん  
つとめて此御とまりを立侍とて。

のとかなるやはきの里は目の光出入までの名にそ有ける  
宇治川のさとし申所にて。

誰か住みやこのたつみしかはあらてこは東路のうち川の里

山中の宿にて御ひるまのほどにぎはゝしさも  
かぎりなし。

旅ころもたつきなしとも思はれす民もにきはふ山中のさと  
此つゞきに關口と申所あり。

道ひろく治まれる世の關口はさすとしもなく守としもなし  
今八幡と申鳥井の程にて。

君まもる契しあれば今やはたいまつてこゝに跡やたれけむ  
いまはしの御とまりにて。やはぎよ  
り八里。あかず明行

月をみて。

夜とゝもに月すみ渡る今橋や明過るまで立そやすらふ

十五日。大いは山とかやのふもとを過侍るに。

ふりたる寺みえ侍り。本尊は普門示現の居士  
にておはしますよし申侍しかば。しばし法施

などたてまつりし次。

君か代は數もしられぬさゝれ石のみる大岩の山となるまで  
二むら山越侍るとて。

けふこゆる二むら山の村もみちまた色うすし歸るさにみむ  
衣のさと此あたりにぞ侍らむ。

名にたてゐるたひの衣の里ならは露わけきつる袖やかされん  
今日なむ遠江國鹽見坂に至りおはします。彼  
景趣。なをざりにつゞけやらむことのほもな  
し。まことに直下とみおろせばといひふるし  
たるおもかげうかびて。雲のなみ煙の浪そこ  
はかとなき海のほとり。松ばらはるぐとつ  
づきたるすさき。かずもしられずこぎつらね  
たる小舟。いとみどころおほかり。雲水茫茫た  
るをちかたに。富士のねまがひなくあらはれ  
侍り。これにて御筆をそめられ侍し御詠二首。  
今そはやれかひみちぬる鹽見坂心ひかれしふしをなかくて  
立かへり幾年なみか忍はまししほみ坂にてふしをみし世を  
かたじけなく御和を奉るべきよし仰ごと侍し  
かば。

ことのはもけにそ及はぬ鹽見坂きしに越るふしの高根は  
君そなほ萬代となくおほゆへき富士のよそめのけふの面影  
二子づかと申侍し所にて富士を御覽じそめら  
れたるよし仰られて。

たくひなきふしをみ初る道の名を二子塚とはいかていはまし  
これについで又申入侍し。

契りあれやけふの行手の二子坂爰よりふしを相みそめぬる  
橋もとの御とまり今橋より五里。ちかくなり侍り。濱  
名のはしも此あたりにこそと申をきゝて。

暮わたる濱なのはしは霧こめて猶すゑとなし秋の河なみ  
十六日。はしもとを立て。引馬の宿里イにもなり  
ぬ。ひくま野は三河國とこそおもひならはし  
侍るに。遠江に侍るはいかなることにか。あし  
たの程野を分侍しに。虫のねいとしげし。

あかなくにわけこそきつれ虫の音の袖を引馬の野への朝露  
驚坂山にて。

打はふき飛や立けむ白鳥のさき坂山をやすくこえぬる  
十七日。遠江府橋もとよ。をたちて。雨いたくふり  
侍しに。懸川と申所にて。

うちわたす涙さへ袖にかけ川やいと、ぬれそふ秋のむら雨  
さやの中山にて出され侍し御詠。

名にしおへは晝越てたに富士もみす秋雨くらきさよの中山

おなじく奉りし御和。

秋の雨もはるゝ計のことはなふしのれよりも高く社みれ  
おなじ所にて。

天雲のよそに隔てゝふしのれはさやにもみえずさやの中山  
十八日。藤枝の御とまりみつけの府より十一里を立て。宇  
津の山こえ侍れば。雨の名残いとつゆけかり  
しに。

うつ山しくれも露もほしやうて袂にかゝるつたのした道  
ゆきくゝて。けふぞ駿河府藤枝より五里にも至り侍

りぬる。千里始足下二高山起三微塵一ためし思  
ひしられ侍り。この國の守護今川上總介。範政。

御旅のおまし。かざり。ゐたち。けいめいし侍  
るうちにも。雪のつもれらむすがたを上覽に  
そなへ侍らばやとねんじわたりけるに。昨日  
の雨彼山の雪なりけり。今日しも白妙につも  
れるけしき。富士權現もきみの御光をまちお  
はしましけるとみえて。あやしくたうとくぞ

おぼえ侍る。山また山をかさめて。たなびきわ  
たれる雲より上にかざやきみえたる遠望たぐ  
ひなくこそ。

白雲のかさなる山と麓にてまかはぬふしの空にさやけき  
わか君の高き墓みにたとへてそ猶あふきみるふしのしは山  
これにてあまたあそばされ侍し御詠のうち。  
見すは争て思ひ知へき言のはもおよはぬふしと豫て聞しな  
この御和。

言の葉を仰かされて富士のれの雪もや君か千代をつむらし  
夜もすがら。月にかの山を御らむじあかして。  
月雪の一かたならぬなめゆへふしにみしかき秋のよは哉  
おぼるげに御和など奉るべき御詠にし侍らね  
ど。また仰ごとのいともかしこくて。

富士のれや月と雪とのめうつりしもあかす珍し君かことのは  
翌朝の御詠。

朝明のふしの根おろし身にしむも忘れはてつゝなめける哉  
あさ日影さすより富士のたかねなる雪も一しほ色増るかな  
又御和。

雲はらふふしのねおろし吹やたゞ秋の朝けのみにはしむとも  
なをさりのけしきならずよ朝日影雪に移るふふしの高れば  
あさざむなるほどにて御わたぼうしをせられ  
侍しに。おりしも富士の根にくも一むらかゝ  
りて。さながらぼうしのやうに見えけるを。御  
わたぼうしにおほしめしなずらへて。

我ならずけさはするかのふしのねに綿帽子ともなれる雲哉  
御和。

富士のねにかゝれる雲も我君の千世を戴く綿ほうしかも  
又御詠。

いつゆくと忘れやはするふし河の涙にもあらぬけさの眺は  
嬉しさも身にそあまれる富士のねを雲の衣の外になかめて  
同御和。

富士川の涙もいく世かけまくもかしこき影を仰き渡らむ  
ふしのねや心にこめむつゝみえぬ雲のま袖はかきり有とも  
此山の由來たづねきこしめしけるに。そのか  
み壬子年とかやに出現の由。守護注申侍しに。  
ことしの支干相應。奇特におほしめされて。

かゝる身も神はひくかと白雲のふしのたかれを猶や仰かむ  
敷嶋の道はしられと富士のねの眺にをよふことのはそなき  
御和。

君かへむやをよつ代の坂までもふしのね高き神そしる覽  
富士のねの雪さへ道の光にていやまし／＼に積るとそみる  
ひねもすになかめくらさせおはしまして。

こと山は月になるまで夕日影なをこそ残れふしのたかれは  
たゞいまのおもかげをつかふまつるべきよし  
仰ごと侍しに。

白妙の高根はかりはさたかにて日影のこれる山のはもなし  
廿日。清見寺府中より四里にてあそばしをかれし御  
詠。

關のとはさゝぬ御代にも清みかた心をとまるみほの松原  
御舟にめされ。海人のかづきするなど御覽せ  
られて還御なり侍き。仁行如春威行如秋なる  
御よそほしさみたてまつる貴賤。御道すがら  
さりもあへ侍らず。入江の宿たかはしなはて  
など過て。廣き野やま。こゝやかの草薙の神劔



靈瑞をあらはし侍りしあたりならむといとか

しこくぞおぼえ侍る。此所に草薙の御社九万八千の御社などと申て。むかし神々

進發の御陣の跡に社あまたおはしますと云々。海道よりは見えす。清見寺にておもひ

つゞけ侍し三首の中。

清見かた關もる波もいとまあれやみほの松原風たゝぬ世に

袖しの浦は出雲國とこそきゝ侍しに此うらは

に同名侍りけり。于レ時白雲重疊。彼山不レ及三

瞻望。

雲深くおほふ袖しの浦人よいつくにふしをみるめからまし

御舟よそひ侍し程。

漕出てみほのおきつの松の千世都のつとに君をつゝまん

廿一日。あした駿河府にて御詠。

旅衣たちをかれぬる雲たにもかゝらぬ富士の名残おしさに

此外御詠かずく侍りき。いまだ拜見〔代詠〕ゆるさ

れざるをばかさねて申出し。万代の佳代に仰

ぎたてまつるべし。同府還御のとき申入侍し。

末となく君かへりみよふしの年の年月かけて高き契りを

手こし河原にて。

たひ人のてこし河原をのる駒も足なみはやしいそく朝立

宇津の山にて感夢のこと思ひ出侍りて。

うつの山うつゝに越てみしふしに見しよの夢を思ひ合する

範 政

すなはなる君にまかせて日本をこゝろやすくや神もみる覽

と申侍しとき。おなじく詠進申べきよし仰ご

とにて。

神もしれ天津日本あきらかに照す恵みもすなはなる世そ

藤枝の御とまりにて。

春ならは花を匂はむ秋とてやうらに色つくふち枝の里

廿二日。せと山と申所にて。

うらかるゝお花の浪にかへる也しほちは遠きせとの山風

かまづかと巾あたりにて。

駒とめよ草かるをのこ手もたゆくとする鎌塚も此わたりとて

さ夜の中山にて富士のねほのかに見え侍し

に。歌よませられしとき。御詠。

富士のねも面かけはかりほのく雪より白むさよの中山

詠進のうた。

それをみる面影うすし富士のれの雪かあらぬかさよの中山  
遠江府ちかく成て今のうらと申入海あり。湖  
水也。

残る日もいり海ちかくみえてけりこの夕暮のいまのうら浜  
廿三日。池田宿すぎ侍とて。

いかななる池田の里の民までもすみよき御代に逢や嬉しき  
うへ松のはらとかやにて。

千代ふへきたねをは君に譲らなむけふ分過るうへ松のはら  
せうらが松とて。いとふりたる木のねざしな  
ど見どころあり。かげに立やすらひて。

たか世にか植ておきな松かれにけふ顯るゝ君のちとせは  
うら／＼過侍るに。いなさはそ江いづくなら  
むとおぼえて。

いつかたかいなさほそ江のあま衣浦を隔てゝ定かにもなし  
廿四日。雨ふり侍りしに。鹽見坂こえければ。  
いづかたもくもりて。松原一むらぞ興をのこ

し侍る。

松原の一村しくれすきやらてふしのねたくもくもる今日哉  
やはぎに御着のほど夜に入侍しかば。

あきらけき御代の光にひくるれば暗きやはきの里も辿らす  
廿五日。參河と尾張とのさかひ河をわたると  
て。

今日はまた千代万代のさかひ川二つの國のわたりのみかは  
なるみにて。

祈ることなるみの浦に御被せむちかきあつたの神を仰きて  
爰彼に侍し海士の家居をみて。

鳴海潟しほひにあさる蟹の子のさためぬ宿か爰もかしこも  
ふるわたりと申所にて。

都人袖をつられてふる渡り古き世はちぬかけやとめし  
おりつの御とまりにて。

暮にけりのるてふ駒を引とめて今やおりつの宿をたつれん  
御道すがらの御まうけ。治世安樂民イの恩澤。かぎ  
りなくぞ見え侍る。

山につみ野にもみちぬる蕙み哉遠きあつまの道もすからに  
廿六日。うし野を過て。黒田ちかくなり侍し  
に。あしはらおほくみゆ。

たのか毛の黒田もちかく成にけり分る牛野につゝくあし原  
すのまたにて。

河舟のさすや日影ものとかにて立としもなき秋のさゝ波  
廿七日。くろち川と申所にて瀧のおちたるを  
みて。

立よりてみれば名のみを黒地川くろきすちなき瀧の糸哉  
うぐひすがはなと申所にて。羈旅のうちに抄  
秋已闌小春漸近づきぬる風光に嘯侍て。

里の名に聞驚つはなかつら秋はすくなし春かけてなけ  
さめが井の水をむすびて。一切智清淨無二無  
別とぞ觀じ侍し。

くみてこそうき世の夢もさめか井のみつから清き心知るれ  
かどのと申所にて。

百草の花のゝとのゝあきの露あかね袂にうつしてそこし

野山のこする色づきわたれるをみて。

色ならぬたひの心も染てけり分る野山の秋の梢に  
むさの御とまりにてみせられ侍し御詠二首。

若枝たにまた染出ぬみの秋のおいその杜の陰をさひしき  
ふり出て時雨も露も猶そめよくれなぬ薄きよものもみちな  
二のうち。老その杜の御詠を和し申入侍し。

名にたかき老その杜の松のかけやかてさしそへ千代の若枝  
かぞみ山をみやりて。

たれも今君をかくみと仰みる世にあふみちの山もかしこし  
御所に還御のとき。

分きつる東路よりもはるけきはかへる都の千世の行する

富士御覽日記

永享四年壬子九月。富士御覽の御下向に初の十日京都出御。同十七日駿河國藤枝鬼巖寺に御下着。雨すこし時雨て。曉方より晴て。月はあり明にて。いそぎ御立。同十八日府中。先小野繩手にして御輿たてられ御覽じて。前後左右とよみあひ。御跡はいまだ藤枝。五里のほど何とはなく。つたへく山も河もひゞきわたりけるとなん。御着府。すなはち富士御覽の亭へすぐに御あがりありて。

みすはいかに思しるへき言のはも及はぬふしと豫て聞しも御返し

從四位源範政

君かみむけふのためにや昔よりつもりはそめし不二の白雪十九日のあした御詠。

朝日かけさすよりふしの高ねなる雪もひとしほ色まさる哉

御かへし

範政

紅の雪をたかれにあらはして富士よりいつる朝日かけ哉又御詠。

月雪の一かたならぬ眺ゆへふしにみしかき秋の夜半かな  
御返し  
範政  
月雪も光をそへてふしのれのうきなき世の程をみせつゝ、  
同廿日御詠。

朝あけのふしのね風身にしむも忘れはてつゝ眺めける哉  
御かへし  
範政

吹さゆる秋の嵐にいそかれて空よりふらす富士のしら雪

實雅三條殿

我君のくもらぬ御代に出る日の光に匂ふふしのしらゆき  
おなじあした。御わたぼうしまいらせらるべきよしありて。やがて御ひたひにうちをかせ給て。

我ならず今朝は駿河のふしのれの綿帽子ともなれる雪かな

姍眞居士山名金吾

雲やこれ雪を戴くふしのれはともに老せぬわたぼうし哉

雅世朝臣飛鳥井殿

富士のれも雪を戴く万代によるつよつまん綿はうしかな  
白砂の高ねはかりはきたかにて日かけ残れる山のはもなし

堯孝常光院



跡たれて君まゐるてふ神も今名高き富士とともに仰かむ

持信 一色左京大夫

君かなをあふけは高き影とてやいと見はやすふしの白雪

持春 細川下野守

富士のれも雲こそをよへ我君の高き御影を猶たくひなき

持賢 同右馬頭

あきらけき君か時代をしら雪も光そふらし富士の高れに

熙貴 山名中務大輔

露のまもめかれし物をふしのれの雲の行きにみゆるしら雪

同日に御詠。

こと山は月になるまで夕日影なをこそ残れふしのたかれに

御返し

範政

ゆふへたに猶やをよはぬ入やうてそむる日影のふしの白雪

又御詠。

いつ行と忘れやはする富士河の波にもあらぬ今朝の眺めは

御かへし

範政

富士河の深き恵みの君か代に生れあひぬることのうれしき

清見が關御覽。

せきとはさゝぬ御代にも清みかた心そとまる三保の松原

御返し

範政

吹風もおさまる御代はきよみかた戸さしをしらぬ浪の關守

雅世

こきいて、三保のおきつの松の千代都のつとに君を包まん

綱真居士

けふかゝることはの玉を清見瀉松にそよするみほの浦なみ

又御詠。

富士のれににる山もかな都にてたくへてたにも人に語らむ

御かへし

範政

仰きみる君にひかれてふしの根もいと、名高き山と成らむ

雅世

わすれめやくもらぬ秋の朝日かけ雪ににはへるふしの詠は

御前にして一折御連歌御發句。

いく秋のやとのひかりそふしの雪

御脇

範政

霧もたよはぬ松のことの葉

御第三

有明の月をあふくや朝ほらけ

又御詠。

なめやる時こそ時をわかれともふしのみ雪は初め也けり

御かへし

熙貴

御心になふ時代のなめ哉袖にもふれるふしの白雪

又御詠。

敷嶋の道はしられと富士のれの詠にをよふことのはそなき

御返し

範政

敷嶋の道ある御代のかしこさに言葉の玉の数をかさなる

熙貴のかたへ御詠。

我爲はあたらなめふしの雪都のつとになすかうれしき  
時ありてみはやす君か御代なれやふしの高根も猶重れつゝ

御返し

熙貴

今ははや君そみはやす時しらぬ山とはふしの昔なりけり  
みてたにも心およはぬ不二のねを都のつとにいかゝ語らむ

還御。遠江鹽見坂にて御詠。

いまそはや願みちぬるしほみさか心ひかれしふしを眺めて  
嬉しさも身にあまるかなふしのねを雲の衣の外になかめて

御かへし

範政

折をえてみつの山風ふくからに雲のころもは立もおよはす

鹽見坂にして御發句。

あきさむみふしのねもみつ鹽見さか

御詠。

秋寒きふしのねおろしみにしみて思ふ心もたくひやはある

御かへし

雅世

富士の根の雪と月とに明す夜や君かことはの花をそへけむ

堯孝

雲拂ふふしのね風ふけやたゝ秋の朝けの身にはしむとも  
ふしのれの月と雪とのめうつりにあかす珍し君かことは

姁眞居士

ふしのねは名高き山のおかすみるこのことのはや類なか覽  
此記いづこも／＼次第ならずみえ候て。然本

尋出候て御なをし候て可然存候。

諸大名御供衆。其外の外様衆。奉公奉行衆。旅

着。雨がさ卅本づつ。人夫三十人。下男已下白

米雜事雜具各同じ。如レ此味細の事しるし候事

いかゞにては候へども。昔の御太儀をもしろ

しめさせむためにて候。御分國は當國までに

ての御事にて候ける。其内寺社本所領御成敗

にあらず。いかゞ如レ此の御まかなひ御申候け

るや、諸大名宿所には御風呂湯殿の御用意。御樽廿荷。卅荷。美物已下毎日の事共を臨川坊海什具に物語候し。かたるやうにおぼえ書にて候。只昔のことをくはしく御しり候へば。自他の忠の程をもしめすべく候。委細に御知候て。扱御しり候はぬやうに何事も又大やうにや候べからん。大名にも高下しなく御わたり候へば。げにも御供衆外様奉公衆どもの次第わけ〳〵御知候て肝要候。此一冊にも細川下野守同右馬頭山名中務大輔などは御供衆とみえ候。こゝもとむまれかはり候て無案内のみにて有げに候。都鄙みだれはてんことは何事も〳〵差異候はぬやうには候得ども。昔よりの次第は御存知候ではよく候はむずらむと注候ではよく御座あるべきと存任申上候。返々物しり顔。一笑々々。

### 八旬有餘宗長

### 富士歴覽記

入道中納言雅康卿

明應八年五月三日。富士歴覽のために都をおもひ立侍りて。江州柏木郷にとどまりて。四日の朝にたち侍るに。社頭をふしをがみ奉りて。柏木に跡たるゝよりも里のうちにさこそ葉守の神も守らめ内白川。外白川。きのふの雨に水まさりて人々わたりかね侍れば。心のうちに祈念侍りし。我たのむうちとの神にまかすればこの白川もやすく渡らん山中と申所にてほとゝぎすをきゝて。

よふこ鳥それかと聞は山中におほつかなくも鳴ほとゝぎす關民部大輔盛貞在所につきて。先在所の寺にとどまりけるに。今夜はあやめのまくらしく夜なりとて。しき侍りて。

都にも思ひはいつやりれしてあやめの枕ひとりしくよな七日。雨によりて逗留し侍りしに。民部大輔のもとよりよみてをこ侍りし。(は脱力)

みやこ人さこそ心のうかるらむいふせき里に雨とりして

## 返し

五月雨は心ありけり雨宿りたよりしなくはことのはもなし  
八日。宿所にまかりて。歌まり張行し侍りし  
に。十五首の題をさぐりて。初春。

道をおこし世はまつりことすなほにて國樂める春はきに覺

## 柳風

これもやはふくとはいはむ春風に朝つゆゆらく玉のを柳

## 秋田

をのつから神や心を作る田のしめをはこえぬさを鹿のこみ

## 逢戀

猶のころ恨とや思ふきぬくをかれてなけきのよはの涙そ

## 松

名にしおへはかめのうへなる山風も松にこたふる萬代の聲  
此在所かめ山といふ也。十三日國府。佐渡入道  
誠泰在所にまかりて。兩道あり。一續の中に。

## 郭公

みやこをはきかて出しにほととぎすいせまで誰か待と思はむ

## 納涼

## 恨戀

結ひあくる岩井の水のすめる世を思へはひさこくみも盡さす  
いつのまにとはれぬ身とて恨むらむ交す契りも一夜二夜を  
十六日。太神宮に代官の人をまいらせけるに  
よみてたてまつりける。

五十鈴川深くいのは四の海かへりくまでに浪たつなゆめ  
十七日。尾州大野に着侍りしに。伊豆の早雲菴  
もとより鴈書有。今度ふじ一見の次に駿州今  
川宿所にたちよるべきさた有。國もての外に  
そうげきの事侍り。來年に延引すべきよし申  
をこせ侍しに。はやおもひたち侍れども。かの  
宿所にはまかで侍るまじきよし返札の序によ  
みてつかはしける。

今そしるするかの海のはまつらくる人厭ふうきなと<sup>な</sup>い  
十八日。うたの郡緒川水野右衛門大夫爲則が  
在所に着侍り。まづ此處にしばらく休足すべ  
きよし懇切に申ければ。心しづかに閑談し侍  
る。數日の間種々の興遊あり。廿首つらぬる歌



に。山霞。

春にあげていくその人のことはのはたその山は霞そむ覽

旅

けふいか宮こをうつす旅の宿は道の外なることわさもなし

祝

たてそむる軒はの松は鶴の子のすくふ後まで影さかへとそ  
けふ。かゝりの切立をし侍り。又各二首の歌よ  
み侍しに。

夏月

朝かほの花と月とをくらふれば盛みしかき夏のよの月

祝言

松のうへにくるてふ糸のいく結び玉のを川の末かけてみむ  
十九日。八はしを見に。人々さそひまかりてみ  
侍れば。きゝをよびしよりかたちもなくあれ  
はてゝ。かきつばたなども心うつくしくみえ  
侍らず。あはれなるこゝちしてよめる。

かつらきの神は渡さぬ八橋もたえてかすなきくもて也けり  
かきりあれは思ひわたりしやつ橋を七十ちかき齡にそみる  
杜若みなからたえてむらさきの一もとのこる花たにもなし

廿四日。を河より舟にて三河へ行侍しに。風か  
はりてしまぐにとどまり侍るに。ある所に  
て手づからみるをとり。いせなる人のもとに  
つかはしける。

君をいつかみるめかるとて袖はれぬいせおの蟹に有ぬ我身も  
かへし。後日によみてをこせ侍し。

君はいかにみるめからぬ我袖は誰ゆへぬるゝ心とかしる  
大濱といふ所へ舟よせてある堂舎にしばらく  
やすみて。本尊の御前にてよみし。

おほ濱の波ちわけぬと思ひしにはやかの岸に舟よせてけり  
こよひは船中にてあかし侍りて。夜一よ船子  
ども枕のうへをわうへむし侍れば。おもひつ  
づけ侍る。

難波江にあらぬ舟路もあま人のあしの下にそ一よあかせる  
廿五日。又佐久嶋といふ所へ舟よせて。八徳菴  
といふ小庵にやどりてみるに。山水のたえだ  
えなるをうけて。まことに山の井の鉢もさび  
しく見え侍れば。

斯しても世はすまれけり山住の雪をさへにまたてやはくむ  
廿八日。船をいだし侍るに。右のかたにあたり  
てたかし山なりといふをみれば。山としもな  
き岡のはるかに見たされて。

昔よりそのなはかりやたかし山いつくを麓峯としもなし  
漸順風になりていよくやはなどいふをかけ  
そへて。ふねのはしりければ。一

今こそといるかこづくに梓弓やほかけそへて舟も出けり  
六月一日。今橋のさとをたちぬるに。二村山の  
ふもとをとをりけるに。くれはとりあやに戀  
しくとよめりしなどおもひいでられて。

なをそくとくうへなく苗も二村に山のなうつすをたの面かも  
こよひは遠江國わしづといふ所につきて。本  
興寺といふ法華堂に一宿し侍り。堂の柱によ  
みてをしつけ侍りし。

たひ衣わしつの里をきてとへは靈山説法の庭にそ有ける  
二日。寺をいでてうぶみのわたりをし侍らむ  
とて。舟まつほど。ひだりかたにいなさはそえ

をみやりて。

いつくにかいな〔は腕力〕さそえの渡守我身をつくし待としらすや  
引馬の宿につきて。あしたに野のあたりをみ  
にまかりて。

眞萩はら花さく秋にならさせはなをや心を引まのゝ露  
八日。さ夜の中山につきて侍る。日坂といふ所  
を。よに入てたどくしくも越侍るとて。

日の坂はたゝくれぬまのななりけり道ふみ迷ふさ夜の中山  
おなじ夜のね覺に。曩祖雅經卿歌に。ふる里を  
みはてぬ夢のかなしきはふすほともなきさよ  
の中山とつらね。續古今集に入侍しことを思  
ひいでて。

かくやありしみ果ぬ夢とよめりしを思ひ覺のさ夜の中山  
九日。さ夜の中山にてふじを一見のほどに。雲  
のみかゝりてさだかに見え侍らねば。はるゝ  
まをまちて一日とまりける間に。十首詠侍る。  
大方にきゝしは物がみてそしる名よりも高きふしの高根は  
遠きたにふりさけあふく富士のねを麓の里にいかゝみる覽

四方の山を麓の塵に重れてもをひ登るふしに較へやはせむ  
こゝにきていよ／＼高し都人みることかたき不二の高れは  
上をみむせめてことはの花もかな月と雪とのふしの詠に  
ふしをみむと高き頼をかけ川や遠きわたりに今そきにける  
たかくみしふしを都にかたるともさは思はむさやの中山  
郭公さよの中山なか空におよはぬふしのれをや鳴らん  
定めなくもちのみ雪は遮莫けふまつきえぬふしの白雪  
ふしのれは雪のいつくそ我にけふ忍ふの山の名をやる覽  
十三日。ひくまをたちてのぼりけるに。吉美妙  
立寺にて。あけぼのゝ富士。有明の月にさだか  
にみえ侍るに。

よこ雲の引まの里をへたてきて又たくひなきふしの曙  
十五日に。しほみ坂をみてよめる。

鹽見坂こゝるひかれし富士もみつ今は都とさしにこそさせ  
こひの松原といふ所にしばしやすみて。

むかし誰戀の松はち待人のつれなき色に名つけそめけん  
やはぎのさとを遙にみやりて。

ものゝふやおさむる國の軍みてやはきの里とこゝをいふ覽  
十七日。又みづの右衛門大夫宿所に止宿侍り。

やがて上洛のかくごにて侍れども。數日のき  
うくつを可歌之由イらうすべきよしふかくとゞめられけ  
れば。もだしがたくて。十八日蹴鞠あり。逗留  
のあいだ猿樂已下種々の興遊侍り。廿二日。二  
首の懷紙をとりかさねて披講之。

### 朝蟬

旅にしてはずひもあらし薄く共蟬のは衣けさはかさなん

### 忍戀

さきにたつ涙のしらぬ戀ならはさすか心の色はみえしな  
道のこと相傳し葛はかまなど着し侍しに。よ  
みてつかはしける。

契るそよ君思ふより我もさは道も心も残しをかしと

七月七日。關民部大夫宿所にて。人々題をさぐ  
りて。

### 七夕枕

いはまくら今宵かはしてれ一つのうしひき歸るあまの河波

### 惜月

なれぬれは人にもかゝる名残そと更てかたふく月にしる哉

寄露戀

我命きえずはありとも何かせむ心なかるゝ露の契に

述懷

はつかしな哀むかしへありきてふ身の世かたりの一節もなし  
いまだ都に中納言入道宋世ありしとき。する  
がの國へ下り侍るよしきこえしかば。侍從大  
納言實隆卿申つかはされける。

返し

こえはまたいかに忍はむうつ山のとき昔も近きむかしも  
今はまた夢はかりなるあらましのうつになれは宇津の山越  
これはむかし曩祖雅經卿ふじみ侍らむとてく  
だり侍りしに。宇津の山にて路分し昔は夢か  
うつ山の山あともみえぬつたの下道とよめ  
り。また父雅世卿かの山をとをり侍りしに。雅  
經卿の歌をおもひいで侍りて。むかしたにむ

かしといひしうつ山のこえてそ忍ふ薦の下道  
とつらね侍りしことを。遠きむかしもちかき  
昔もとよめるなるべし。

宗祇法師。たちばなといふたきものをむまの  
はなむけに送り侍るとて。よみてつかはしけ  
る。

返し

末となく立よりやかて思ひやるきみになひかむふしの煙を  
おもひたつふしの煙もたち花のなひく煙にまつやしろらん  
三井寺のほくりむばうといへる人の本よりつ  
かはしける。

かへし

うへもなき二の道にふしの山ならへて三のたかねならまし  
ふしの山をよはぬ道は遮莫れかひはみつのたかねならまし



群書類從卷第三百三十六

紀行部十

善光寺記

堯惠法印

寛正六年七月上旬のはじめつかた。とし比誓願し侍し善光寺へおもひたちぬ。金劔宮より羈旅におもむきいで。里中の草庵に休らひ。旅の事などものして。又四日の曉に立て。明れば利波山をこえ侍とて。

明にけりほのめくあまのとなみ山わかるゝ雲や秋の初風おなじ日。二上川を過ぬ。

ひとつせに流れての名はいかなれや二上河の水のしら浜やがてふせの海のあたりになり侍り。はるばると湖水をみわたせば。鳴鶉飛盡て夕陽西山にかくれり。たりに

しつみこし夕日の影は跡もなくにほてりよはるふせの海哉  
彼家持卿興遊をのべ侍し田子のうらはいづく  
ならんと尋侍れどもさだかにこたふる人も侍なし  
らず。

花とやはかさしてもみむ田子浦やそこもしらぬ秋の波を  
はその夜なこといふ所に着ぬ。楓橋のよるのと  
まりもやと思ひつらね侍て。

曙や夢はとたえし波の上になこの繼橋のころとそみる  
明ればほどなく水橋といふわたりにうつりき  
ぬ。

徒に人たのめなる水はしや舟より外に行かたもなし  
かくて立山の千巖に雪いと白くみえたり。  
あきのきる衣や寒き雲のぬき雪の立山やま風そふく

有磯海は。此國の海畔の惣名と聞えける<sup>侍イ</sup>うへは。わきて尋ぬるに及ばず。折節天氣心よく晴て。四十八ヶ瀬も名のみして侍り。一人の爲に其光をくらふせずとは云ながら。身も<sup>モツイ</sup>すゞろにうれしくこそ侍れ。

おさまれる聲さへ波に有磯海の濱の眞砂に道の數をふ

ゆきくゝて越後國の海づら。山陰の道嶮難を

しのぎ。淨土といふ所に至りぬ。四種の佛心も衆生の一念に發する所なれば。是ぞすみやかに西方同居土のさかひにて侍るならむかし。

今ぞ知いたればやすきことはりも唯違からぬさかななりとは爰を去てゆけば。すなはち親しらずになりぬ。磐石千尋にそばだちて。のぞむに心性をわす

れ。波濤万里にかさなりて。瀧漲下る事かぎりなし。片々たる孤影より外はたのむ友侍らず。只不退の願力にまかせ侍るなるべし。然ば彼如來の報土を出て。輪廻迷暗のおもひ。子をも

とめたまふといへ共。是しらざる有様もやと覺え侍りて。

波分て過行はとはたちねの親のいさめもわすらるゝ身よやがて歌のはまにうつり侍。此日七夕にあひあたりぬ。星の手向も便有て。是ぞ奇異の値遇にて侍るなどおもふに。あまたの舟よそひしてつどひゐたり。

舟人も心有とや手向する歌のはま梶とりあへずしてまた程へて。いとい川といふ河あり。

世中はいかゝ有けむいとい河いとひし身さへ行ふしられず明れば八日になり侍りき。御縁日にまかせて。朱山へこゝろざしぬ。はるくゝとよぢのぼりて。絶頂より瞻望するに。煙水茫々として。山また天涯につらなる。

雲のはのきゆれば山もかさなれる波の千里に秋かせそ吹漸よろぼひ下り侍るに。雲の底に蕭寺の鐘の聲うづもれ消て。夕の雨もいと身にしみかへり。打はらひ行袖もしはたるれば。漸麓の旅館

に蘇息し侍れども。明る夜の空さへ殘雨なを暗うして。又立出侍る道に。花笠の里と云幽村あり。愚暗のなぐさめがたきあまりに。

鶯のこゑも聞えぬ秋の雨にしほれそきぬる花かさの里

限なき行ゑの隔に聞えし關の山も是ならんとわけ入て。むかし西塔に侍し快藝法師にあひぬ。拙者<sup>イナシ</sup>尊師隆連法師<sup>達イ</sup>道のしるべにとて文書てたびしを。往事の夢にあらずやなどみるがごとくに打かたらひて。明る日信濃國へうつりき。道すがらに淺間山はいづくぞと尋侍れども。おなじ國ながら山靄はるかにして。野行の人も轉こと葉にまどへり。

淺間山里とひかれし煙たにそこもいはぬ岑のしら雲

酉の刻の斜なるに御堂にまうで侍り。思はざるに引導する人有て内陣に通夜せり。剩本尊の瑠璃壇をめぐりき。まことに多劫の宿縁淺からずおぼえて。歡喜の涙せきあへず。如來本

朝御瑞現の往昔までおもひつゞけて。

てらせ猶濁りにしまぬ難波江のあしまにみえし有明の月曉に及ぶまでに。月いと清らかに侍り。姨捨山をおもひやりて。

行やらて心そかよふ更級や姨捨山のあきの夜の月十五日につとめて宿坊を立かへり。土圭の影うつるばかりに戸隱山へいたりぬ。二重の瑞籬を拜して奥院へのぼるに。疊々たる山の上にすぐれて。中臺に南北ふたつの嶺あり。をの重々に岩をかさねあげて八色をまじへたり。千峯万山のかたちのうちに異木異草<sup>かさ</sup>ふさがりて。或は佛菩薩の來化の姿もあり。或は天人聖衆の妓樂をととのへたる所も有。併觀音薩埵の勝地にてぞ侍らむ。社頭は北の嶺の半にさしあがりて東に向ひ。大なる岩屋の内へ作り入たり。彼御神は多力雄にてまします。そのこゝろを。

瑞籬やしたつ岩はに松かれのたてるも神の力とそみる  
おなじ所にて。

吹おろす嶺のあらしもまきれ行ひきや谷の戸かくしの山  
十六日に。又快藝の山室にとまりぬ。あるじの  
志も打をきさまならず。いよく懇にみえ侍  
ければ。

木のもとの露の情もほさぬまにおなし宿かる旅衣かな

十七日の夜のともり。府中の海岸になれり。あ  
まの筈屋のあばらなる月。隈なくさしのぼり  
ぬ。五更の西の空うつろふ末は。古郷の空にや  
かゝりきと思ひ送りて。

契りをけおなし越路の末の露月もやとれる草の枕に

おほくの雲霧を過て。越中東北の海陸までさ  
すらひうつりき。廿一日にはことに蒼穹高く  
はれて。曉より起ゆく。路の有にぞ任はべりぬ  
る。早槻川はいづくぞと云に。いひ明らむる人  
もなくてやみぬ。今此所をとふに。大河と見え  
し河原有て。水ほそく海中にながれ落て。残る

月あはれにしづむ。

やとる影きゆればなのみ有明のはやつき河の波の上哉

遠き所も限あれば。いつしかと本國の境地に  
なりぬ。他郷のいづくはありとも。我常にあふ  
ぎ奉る白山の御影よりいや高き所はあらじか  
しとおぼえ侍るに付て。雲のうへにうかびて  
碧落のはだへあざやかに見えしかば。

立かへりあふきてそみる忍ひこし程は雲のうへの白山

右一卷以續扶桑拾葉集接合畢



## ふち河の記

後成恩寺關白兼良公

胡蝶の夢の中に百年の樂を食り。蝸牛の角のうへに二國の諍を論ず。よしといひあしといひ。たゞかりそめの事ぞかし。とにつけかくにつけて。ひとつ心をなやますこそをろかなれ。應仁のはじめ世の亂しより此かた。花の都の故郷をばあらぬ空の月日のゆきめぐる思ひをなし。ならのはの名におふやどりにしても。六かへりの春秋ををくりむかへつゝ。うきふししげきくれ竹のはしになりぬる身をうれへ。こひちにおふるあやめ草のねをのみそふる比にもなりぬれば。山の東みのの國に。むさしののくさのゆかりをかこつべきゆへあるのみならず。高砂の松のしる人なきにしもあらざれば。さみだれかみのかきくもらぬさきにと。みのしろ衣思ひたつ事ありけり。この月はよろづにいむなる物といふ人ありけれど人の事

はしらす我身にとりては。この七日にむまれたれば。かへりてよき月と思ひ侍る物をと有しかば。きく人ことはりとやおもひけむ。さるほどに二日のあけがたに。ならの京を立て。般若寺さかをこえ。梅谷などいひて。人はなれこころすごき所々をへて。かものわたりをすぎ。三日の原といふ所に輿をとどめて思ひつゞけ侍り。

かそふれはあすは五月のみかの原けふまつならの都出つゝ、泉川を舟にてわたりて。

渡し舟棹さす道に泉川けふより旅の衣かせ山

これよりして。新關共を世のみだれにことよせておもふさまにたてをきつゝ。旅行のさはりと成にけり。仁木などいへる領主のかたがたをこしらへて。事ゆへなくはとをり侍れど。心ぐるしき事のみありけり。

さもこそはうき世の旅にさすらはめ道妨のせきなとめそ

伊賀の國あさ宮といふ所にいたりぬれば日もやう／＼くれがたになり。雨そぼふりて前路もとけがたく行かゝりてやどりもなくば中々あしかりぬべしと人々申侍れば。そのあたりに小家のあるをかりて一夜をあかし侍りぬ。

行暮て雨は降きぬ朝宮をあさたつまでの宿やからまし

三日。あさみやをたちて。野じり。とひかは。くらほねなど。きゝもならはぬ木こり草かりならではかよはぬ所々を過て。道のゆくてに石山寺にまうでて。大悲者を禮し奉る。

さはきたつ世にも動かぬ石山はけにあひかたき誓ひ也けり濱の關とかやは青蓮院の座主に申てとをり侍りぬ。松本をすぎ大津にいたりて。過こしかたをかへりみて。俳諧の躰をおもひつゞけ侍り。くらほねは早く過てき荷かけ駄を大津の里にしはし休まむかくてその夜は坂本の宿にとまりぬ。七のやしろはそなたとばかりおがみ奉りて。

老か身もこえか千とせの坂もとに杖とを頼む七の神かき  
四日。坂本を出て。舟にのるとて。

さゝ浪やけふを日よしの船出せむをひ風をくれから崎の松  
されども順風なければ。ひねもす艫ををして  
ゆく。堅田の浦に船をよせて。

こし方は堅留の浦にはす網のめにかゝりつる山のはもなし  
山あひを過る時。あらしはげしければ。かた帆  
にかせをうけてはしらしむ。時の程に三四里  
ばかり過ぬといふをきゝて。

舟人の心つかひはみえてけりまほもかたほもかせに任て  
よるの四時にはつさかといふ里に舟をよせ  
て。しばらく休息す。これより夜舟をいだし  
て。五日のほの／＼にあさ妻につきぬ。

ほの／＼とあさ妻に社つきにけれども夜を罩て舟出せし路  
さめが井といふ所。清水いはねよりながる。一  
すぢは上より。一すぢは下よりながれて。末に  
てひとつにながれあふ。まことやらむ。ものの  
養老の瀧につゞきたりといへり。しばらくこ

ここにすゞみて。

夏の日もむすへはうすき氷にて暑さややかてさめか井の水  
岩かれを別れて出るさめかゐの流れや終にあふみちの末  
かしは原にて。

吹風やまたこぬ秋を相原はひろかしたの名にはかくれす  
たけくらべといふは。あふみとみのとの山を  
左右に見て行所なり。

右ひたりみて過行はあふみちの二の山そたけくらへする  
伊増たうげといふはみののさかひにて堅城と  
みえたり。一夫關にあたれば万夫すぎがたき  
所といふべし。

此山に神やいますと手向せむ紅葉のぬさはとりあへすとも  
鶯の瀧といふ所を。

夏きてはなくれなきかぬ鶯の瀧のみなばや流れあふ覽  
藤川のはしのけたのおちたるをみて。

たつねはやいくとしなみを渡れはかなかは絶ぬる藤河の橋  
思へ君おなしなかれのたえずして万代ちきるせきの藤かは  
くろちのはしといふ所を。

白浪はきしの岩れにかゝれともくろちの橋の名こそ變られ  
野上の茶やにこしをたてて又ざれうたを。

旅人にめさまし草をすゝめすは野上の里にひろれなやせん  
むかしきよみはらの天皇東宮の位を辭し。出  
家して吉野山にいられしかども。なをゆるし  
なくて大友の皇子にをそはれ給ひしとき。ひ  
そかに山をのがれ出て。伊賀伊勢の國をへて。  
みのの野上に行宮をたてられし事は。日本紀  
などにしるし侍れど。事遠き事なれば。宮の舊  
跡などたしかにしる人は有がたかるべし。い  
まは草かりわらはのあさゆふふみかよふみち  
となりたるをみ侍りて。

あけまきは野上の草をかり宮の跡ともいはず分つゝそ行  
山中といふ所を過て。

ほとゝきすをのかさ月の山中におほつかなくも音を忍ぶ哉  
不破の關屋をみ侍るに。なにとなくむかしお  
ぼえて物あはれなり。中御門攝政のあれにし  
後はたゝ秋の風とよみ給し事など思ひあはせ

られて。

あれはつるふはの關やのいた庇久しくも名をとめける哉  
關屋の中にちいさきほこらのあるを里人に尋  
ね侍れば。これなむきよみはらをいはひ奉る  
といふ。まことやか御代にいくさをふせが  
んとてたてられし事なれど。今は關のやうに  
もあらぬをみ侍りて。

清み原遠きまほりの名をとめは關の固めはさもあらはあれ  
五日のさるの時計にたる井のしゆくにつく。  
けふは南宮の祭とて。見物のともがら物さは  
がしくたちさまよひけり。風流の山かさなど  
ありとかや。むかしのごとくならば。此所に遊  
女などあるべきにや。杜牧が珠簾十里楊州路  
といへる事をおもひなすらへ侍りて。

あさはかに心なかけそ玉簾たる井の水に袖もぬれなん  
又軒にあやめをふきわたすこと都にもかはら  
ざりければ。

我宿の妻にはあらぬあやめ草今夜かりねにかたしきの床  
六日の早朝たる井をたちぬ。みちすがらの名  
所どもおほくはわすれ侍り。あをのが原を過  
侍れば。むかしものゝふのありしが。うちじに  
したる所とかやいへり。

分行は四方の草木の色も猶あをのか原の夏の一ころ  
あかさかをこゆとて。

たゝかひの昔の庭もには鳥のあかさか越て思ひ出つ、  
くゐせ川といふ所を舟にてわたりて。

渡し守ゆきゝにまゐるくゐせ川月の兔もよるや待らん  
江口といふは攝津國にある同名也。されど遊  
女などはなくて。夜になれば鶺鴒のくだると  
云をきゝて。

うかひ舟よるを契これは是も又おなし江口へはのあそひ也けり  
七つ打ほどに鏡嶋の小庵につく。院主かたら  
く。此ほどの庵はさばる事ありてこの二日こ  
こにうつり侍り。こゝをば長寧院といふ僧の  
所をかれるとなむ。むらさきのゆかりともす



だく所なれば。よろづにまづ心やすし。

七日。かはでの持是院にかくたりたるよしをつぐ。三位の大僧都妙椿すなはちきたりて。思ひよらざるよしをいふ。さらばあすよりは正法寺に休所をかまふべきよしをしめす。旅のつかれなどねむ比に下知をくはふ。くだくだしければもらしつ。八日正法寺にうつる。此寺は禪刹の諸山也。由良門徒にて。山號をば靈藥山といへり。國中最初の禪林なり。かたはらに新造の一寮あるを休所にかまへてうつりすましむ。朝夕のまうけなどくだくしければしるすにをよばず。さりながら鳳のあぶり物麟のほししのなきばかりにや有けむ。

九日。歌の披講あり。

十日。連歌百韻あり。

十一日。正法寺のむかひに城をつき池をふかくして軍壘のかまへをなせり。すなはち舟を

うかべてほりのうちにいたる。僧都つねに居庵あり。山居のすまゐをまなび後園などあり。持佛堂は淨土の三昧をもとせるとみえたり。名作の本尊どもおほし。此たび庵號をもとめしかば。法域と云二字をかきつかはし侍り。齋藤新四郎を國は僧都の姪ながら猶子にせり。その人の館に行てみ侍れば。いづくもかきはらひて。武具どもとりならべ。なに事もあらばすなはち打立べき用意也。さりながら又風月歌舞の道をもすてざると見えたり。此所にして酒宴の興をもよほす。美伊法しといふ土岐美濃守源成頼の息男生年九歳なり。回雪の袖をひるがへす。むまれながらにして天骨を得たり。むかし長保の比。東三條女院の御賀の試樂に。御堂關白の長男宇治關白也十歳のわらにて陵王をまひ。次男堀川右大臣也九歳にて納蘇利を舞し事思ひ出され侍り。古の舞と今の舞と

は手づかひあしふみなどかはるべけれども。少年の人その骨をえて人を感歎せしむる事は。異曲同工といふべきにや。

十二日。猿樂あり。彦春といふ猿樂也。一場はてて後。美伊法師又舞臺にして袖をかへす。猿樂にははるかにまされるよし人皆感じけり。僧都も興に入。ことはりと覺えたり。

十三日。正法寺にて短冊の評あり。詩の題は龍瓦硯也。この硯は東坡が詩集にみえたるにや。さる硯のありしゆへなり。抑作文の事久しく筆をさしをきてあとかたもなく韻聲などもわすれはてぬれど。僧都しきりにすゝめ侍れば。廿八字をやう／＼かきつらねたるばかりなり。又方丈の前に二株の松をうへて。みたび鋤をくだす事有き。追述二一偈云。

鷲峯正法遍塵々

靈藥毒人還活人

五祖山中誰作主

栽松道者是前身

十四日。かゞみしまへかへる。たま／＼下向の次。國中の名所舊跡をも歴覽したくは侍れど。此十一日に細川右京大夫勝元朝臣卒去の聞え有。東軍の棟梁かくのごとくなれば。此きざみに國ざかひまた蜂起することやあらむ。しからば通路思ふやうなるまじきうたがひあるによりて。後會期遙といへども前路ほどとをかるべければ。いそぎ僧都にこのをもむきをしめして。歸馬にむちうつものならし。

十五日。ことなることなし。

十六日。竹の内の僧正のあくたみの庄を一見すべきよししめす。よて江口より舟にのりて。二里ばかり川づたひにさかのぼる。因幡山のふもとをすぐる路なり。此山は奥州より金の化來せるよし。因幡社の縁起に有とかや。

峯に生る松とはしるやいなは山こかれ花さく御代の榮を  
さなへとる麓の小田に急くなりそよくいなはの峯の秋かせ

けふは小雨そゞぎて風いさゝかふく。日入てかしこにいたる。ふねの中の窮屈たへず。すなはち偃臥す。<sup>作イ</sup>前後をしらず天明に及す。あくる日僧正申けるは。昨日は涯分奔走いたし。谷の底までほりもとめしかひもなく。つゐにおどろかでとありしかば。睡眠のきざしゝに。やがて枕をかたむけし心よさは。邯鄲遊仙のたのしみもかくこそと覺し也。それにまさるほどのもてなしは。こゝろにくゝもおぼえぬとてわらひ侍りき。

十七日。又かゞみしまへかへる。月出ぬほど江口にいでて鵜飼をみる。六艘のふねにかざりをさしてのぼる。又一艘をまうけてそれにのりて見物す。おほよそ此川ののぼりくだり。やみになれば獵舟數をしらぬといふをきつて。ゆふ暗に八十とものおの篝さしのはる鵜舟は數もしられず鵜の魚をとるすがた。鵜飼の手繩をあつかふ

躰などけふはじめてみ侍れば。ことのはにものべがたく。あはれともおぼえ。又興を催すものなり。

鵜飼人くるや手繩の短夜もむすほゝれなはとくはあけしなすなはち鵜のはきたる鮎をかざり火にやきて賞翫す。これをかざりやきといひならはしたるとなん。

とりあへぬ夜川のあゆの篝焼めつらともみつ哀ともみつ十八九日。ことなることなし。僧都しばゝ來る。

廿日。歸南せんとす。けふすなはち鏡嶋をたちて。もとの路をへてたる井にいたる。民安寺といふ律院にとまる。献餉などは僧都の被官人たかやのなにがしにおほせつけてねむごゐる事どもあり。くだゝしければもらしつ。まことや文和の比。後光嚴天子。南軍<sup>のイ</sup>におそれましまして小嶋に行幸のありし次に。此寺にも

わたらせ給けるとなむ。行宮のいしするなど  
今にあり。そのとき身づからうへさせ給へる  
松の老木となりてあるをみて。

世におほふ君か御かけにたくふらし民やすかれと植し若松  
あふはかといふはたる井よりこなたなり。名  
寄に青墓里といへるこの事にや。

契あれば此里人にあふはかのはかなからすは又もきてみむ  
美江寺といふはかゞみしまより五十町ばかり  
をへだてたるといへり。本尊は十一面觀音計。  
帳などの中にもまします。うちあらはれて  
人におがまれさせ給ふ。利生をかうぶるもの  
おほしとなむ。往來のたよりに二度まうでて  
禮拜をいたす。えんぎなどくはしくたづぬる  
にいとまあらず。

たのもしな佛は人にみえ寺のとはりをたれぬ誓おもへは  
廿一日。たる井をたちての道すがらの名所お  
ろおろさきにしるしをはりぬ。いぶきの明神

の鳥井は北にあり。南宮の鳥ゐは南にあり。を  
のをのそのまへをすぐ。

又こむといふきの山の神ならはさしも契りし事な忘れそ  
名も高き南の宮のちかひとて山のひかしの道をたゝしき  
みのの國の歌枕の名所。その所はいづくとも  
しらねども。こゝろにうかぶ事どもを筆のつ  
ゐでにかきあつめ侍るべし。

まれにきてみのお山の松のうれの嬉しきみにも天のは衣  
あま衣みのの中山こえ行はふもとにみゆる笠ぬひの里  
いのるそよおさまる世をまつことはみののお山の一つ心に  
時鳥れ覺の里にやとらすはいかてか聞む夜半の一こゑ  
はゝきゝの梢有ともみえなくにたれなも山となつて初けん  
明くれはしけきうきみのわさみのに猶分まよふ夏草の露  
五月雨のもみちを染る例あらは舟木の山のいかにこかれん  
七夕の逢せは遠きかさゝきのおふさのはしなまつや渡らむ  
東路のうるまのし水名をかへはしらしな旅にたつの市人  
鳴鳥のすのまた川に月すめはあらはれわたる涙の下道  
わかえつゝ見るよしも哉瀧の水老を養ふ名になかれば  
席田を織物ならはしき浪やいつぬき川のたてとならまし



いく千歳かきらぬ御代は席田のつるの齡もしかしと思ふ  
蘆かきのまぢかき跡を尋ても小嶋の里にみゆきやはせぬ  
世の人のあたふ結ふの神なりといのちは心とけさらめやは  
近江の國に番馬といふ所より路をかへて南へ  
行。番馬を物の名にとりなして。

わくるののまた末遠きくさには日影の駒も暫しとまれ  
すりはり峠を南へくたるとて右にかへりみ  
れば。筑夫嶋などかすかにみえて。遠望まなこ  
をこらす。ふもとには神田といふ所の一つな  
き田などみゆ。又左のかたにはそびえたる岩  
に松一木ある。その下に石塔あり。西行法師が  
つかといひつたへたるとなん。

南行數里下陽坡

西望平湖遠不波

孤嶋屹然何所似

琉璃万頃一青螺

旅衣ほこひぬれやすり針の峠にきてもぬふ人のなき

西行が歌に。ねかはくは花のもとにて春しな  
むそのささらきのもち月の比とよめることを  
おもひ出て。

いかにして松の蔭には宿るらん花のもと、かいひし言のは  
かねてはかのむらにとまるべしとさだめしか  
ども。とかくして日もくれがたになりぬれば。  
小野といふ所まで行て。その夜はさる小庵に  
一宿しぬ。今春大夫來逢て。一聲を出して羈愁  
をなぐさめ侍り。

枕ゆふたの、なさの短かよも旅にしあれば明りかれつ、  
廿二日。小野をたちて。たがといふ所をすぐ。  
やしろあり。

ふりはて、神さひにけりたかの宮誰世にかくは祝ひ初けん  
四十九院を物の名にあらはす。

かり人は山にし、ふくいむ事もしらぬ爲には我を音をなく  
亂れ行世にあふみちのおのかし、うくいむへきは此身也覺  
たがみやかはらは水のあとばかりなり。

過行はたかみやかはら水もなしことはなそき五月雨の比  
えち河をすぐとて。

えち川のさてさす瀬々に行水の哀もしらぬ袖もぬれけり  
觀音寺といふ山寺をみやりて。この名は諸國

にあるにや。いさゝか聖廟の御詩を思ひ出て。  
あふみちも心つくしの旅なれやた、鐘を聞古寺の前  
おいそのもりにて。

我袖よ駒もすさめぬたくひにておいその杜の雫をそしる  
われこそは老その杜の郭公をのかさかりの聲なおしみそ  
其日は武佐といふ所にやどる。

ものゝふのゆかけはたてそ靡くなるむへ社むさの名は残けれ

廿三日。猶むさにとうりうす。うちをくりの

事。法印僧即イかたより伊庭に申つけ侍るが。三里ば

かりをへだてたる所へつかひにいでて留守な  
りければ。伊庭かたへつかひの行かへるあい  
だ。時刻うつるによりて也。その日は雨ふり風  
はげしくて。はにふの小屋のかりふし。ならば  
ぬ旅のものうさ。いはずともしるべし。

南來北望漢宮天

一夜江邊聽雨眠

白髮更添新白髮

青氈不是舊青氈

廿四日。伊庭かたより兵士きたる。その日も雨  
風やまず。水戸をぐとて。

雨ふれは小田の水口せきもあへすすなく蛙の聲そあらそふ  
からうじて五十町ばかり行て。新宮の馬場に  
いたる。禪侶の庵をかりて宿す。新宮は山王に  
てましますとかや。所のこほり司などきたり  
て警固をいたす。終夜雨風はなはだし。

廿五日。馬場をたつとて庵室にかきをく。

憶得三生石上緣

一庵風雨夜無眠

今朝更下山前路

老樹雲深哭杜鵑

契りあらは又あふみちのかり枕結やすてん一夜ばかりに  
かねては水口より伊賀のはとりにつくべき支  
度なれど。洪水に路とをる事やすからず。おな  
じ國のうち玉瀧寺といふ律院にとまる。本尊  
は薬師如来にてましますといへり。

なかもはや玉瀧寺の空はれて瑠璃の光にうつる朝日を

廿六日。けふは日のけしきなをれり。玉瀧をた  
ちてかは井といふ所をとをる。ひとつはしあ  
り。高松宮は右のかたにありてみやる。牛頭天  
王にてましますとかや。

渡りえぬうき世の波におほゝれてかはぬの橋をふむそ危き  
ゆふかけて猶こそきかめほとゝきす手向の聲の高松のみや  
北川といふ川はた水落す。法印伊賀の住人におほせつ  
けたるによりて。藤長などいふ者どもきたりて。こしを  
かたにかけてわたす。

いかゝせむ此五月雨に北川のあさ瀬ふみ渡る人なかり  
せは又服部川をわたりて菩提寺にいたる。是も招提門徒  
の律院なり。まうけの事は法印申つけて。伊賀のともが  
らさたせしむとなん。

廿七日。なを菩提寺に逗留す。伊賀のものどもさりが  
たく抑留する故也。

菩提樹下古精藍

殿閣微涼來<sub>レ</sub>自南

暫借<sub>ニ</sub>藤床兼<sub>ニ</sub>瓦枕<sub>一</sub>

駒々一睡味方甘

活計のうちに故郷の心は又わすれがたきにや有けむ。

旅衣きのふも今日もくれはとりあやに戀しきならの古郷  
廿八日。菩提寺をたちて上野小田寺など云所をとをる。  
たやまごえは川の水いまだわたり

がたかるべしとて。かさぎどをりにおもむく。嶋の原川といふ河をわたりて。

嶋の原川せの涙のかち渡りたやまこえをはよそになしつゝ、大河原といふ所は伊賀と山城とのさかひなり。河原の木石さながら前栽などをみるごとくなれば。

菩むせる岩れに松は大河原かはらさりけり庭のすさきに笠置川をば舟にてわたる。ならよりむかへものきたるによりて。いがのをくりをばこれより返しぬ。歸洛をいそぐによりて。山をば見やりたるばかり也。ことさらにこそまうでめとおもひ侍り。きのふけふは雨ふらず。

えそしらぬみの山過て降り雨の笠置にきては又はれにけり雲の上にその曉を待はとや笠置のみに有明の月秉燭の時分南都の宿坊につく。この後雨はなはだくだる。よくせずば笠置にとまるべかり。

## 正廣日記

世中みだれて後は。宮古に跡をとどむべきさまにもあらで。大和國泊瀬寺にしろ所ありて年月をくり侍るに。文明五年八月七日に

つとめておきはれば。觀音へまいる人の尋

はべるとあるをみれば。攝津修理大夫之親に

て。對面し手をうちて代のかはり侍るに久見

參にも入侍らぬなどかたりて。不思議のごと

く思はべる。さていづくへと問侍れば。駿河國

にしろ所有てくだり侍るとあれば。さては富

士をこそ見給はめとうらやみ侍れば。さらば

いざかしとあるに。とてもすてはつる身にて。

いづくに跡をとどむべき事にもあらねば。さ

いはひのこととおぼえて。そのまゝ出て。行す

ゑのことなど思ひたどり侍らでくだりぬ。伊

勢の山田といふ所に四五日やすらふ事あり

て。十五日大江といふ所より舟にのり。いらこ

のわたりとてすさまじき所をこし侍るに。こ  
よひは十五夜なりけり。むかしは所々にて歌  
などよみ侍に。思ひの外なる心ちして。かちの  
枕に逢もる月をわづかにみて。

いにしへを思ひいらこの月みればかいの雪を袖に落そふ

十六日。舟よりあがりて。鴻濱とて浪のあらあ  
らしき所を越はべるに。名所などおほくあり  
と聞しかどもとふべき人もなし。しらすかと  
いふ所のあさましきあまのとまやに一夜浪の  
をとを枕にてあかし侍に。歌などよむべきさ  
まにもあらず。人々立さはぎ出行に。見つけの  
こううちすぎ。さ夜の中山をこえ侍るに。彼西  
行上人。年たけてなど詠じ侍もあはれに思ひ  
出られて。

月ひとり都の友そわれにかせ雲の衣をさ夜の中山

それよりくだり侍に。心のうちに歌などよみ  
はべれども。かたるべき友もあらでよみすて



侍る。さて十九日に駿河國藤枝といふ所は彼  
領知にて。長樂寺といふ寺にをの／＼かりそ  
めにすみ侍る。さても今日まで空くもらはし  
くて。富士をみはべらぬと人にかたり侍れば。  
小川といふ所は残なくみゆるとて。廿六日人  
人友なひてをもむき侍るに。おりふしはまか  
せあら／＼しく。雲など立さはぎて富士もみ  
えず。むなしくかへり侍るに。其夕より桂厚と  
てつればべる僧。おこりとかことの外煩てふ  
し侍。なに事も心にいらであつかひに。長月  
一日の比。なをざりにて心をのべ侍るに。その  
あたりにおに岩といふ山よりこそ富士はみゆ  
る所なれとて。人のいざなはれしほどに。うれ  
しくて。老のさかくるしけれども。あがりてみ  
れば。東にたか草山といふ山の上より雲など  
ことにはれてさだかにみえはべれば。年月の  
のぞみもはる／＼心ちして。

富士はななうへにそみゆる藤枝やたか草山の峯のしら雲  
さて立かへりて。筆にまかせて十首よみはべ  
る。

尋れてもなとかみさ覽富士ならてそれも名高きさよの中山  
富士やこれ雲まの嶺に顯れて先めつらしき秋のはつ雪  
同じくはふしのみ雪を分みはや身はひるの子の老そ苦しき  
清見かたふしはうしろの山風みぬ雪ちらす涙のあらかき  
ふしのれは雲ぬに高し大ひえやはたちあけても争て及はん  
時しらぬ山こそあらめふし川やそれさへ雪のたかき波かな  
夜や寒きつるか岡への鶴のこゑつはさの霜にふしのしら雪  
嶺くつすうきしまなくは足高や雲まにふしを並へてそみん  
わきも子が黒かみ山はふしのれのいた／＼雪を哀とやみむ  
ふしはみつ又もそ思ふ秋の風きかはやゆきてしら川の關  
かやうによみて富士淺間に奉りし。此寺の本  
尊藥師如來にてまします。さいはひのことと  
覺えて。桂厚祈禱のため。筆にまかせて詠じ侍  
る歌。

### 春

なそへなき君が恵みを日の光四方にてらして春やきぬ覽

むかふよりうき世のさかと厭ふ身をよしと許す花の蔭哉  
彌生山くれ行空に契るらん春もとまらぬ入あひの聲

## 夏

汲たえし野中の清水いつしかに又尋ぬへき夏はきにけり  
しきたへの袖の涙をむつましとなれも昔に匂ふたちはな  
るりとみる人と魚との心にもまさる御萩やそてのうは涙

## 秋

りうのすむ都も秋やしら涙の立そふおきつはつかせのこゑ  
くり返しむかしな今にすむ月のめくる光やしつのをた巻  
わくらはにそめし梢を初にて時雨につくす秋の色かな

## 冬

うき世とて誰も朝夕なけく身をしらていつくと冬のきぬ覽  
庭の松をしのふすまはしられ共先あたゝかに積る雪かな  
世中の人の心をさく梅のいそくと年やくれてゆくらん

## 雑

らむとなる關の東もこのへも皆おさまりて道そたゝしき  
いまははや雲霧はれてふしの雪都にみつと人にかたらん  
かくよみ侍るしるしにや。少取なをし侍る。神  
な月にもなりぬ。むかしは今川上總介範政老

僧歌の友にて朝夕ともなはれしかども。今は  
世中うつりて知人もなし。中頃臨川坊とて都  
にてみし人府中に住侍るが。くだりたる由き  
きて。せうそこありて。ふしぎなる草庵を結び  
侍る。又うつつの山をもみよかしなどありて。迎  
をたびたるに思立侍る。まことにうつつの山は  
逢人もなし。夢にも人にとか業平の詠せしこ  
となどおもひいでて。薦のはを分侍るにも。き  
しにまさる心ちして。

老ぬればさながら夢そうつの山薦の葉くらき霜のふる道  
さてかの草庵につきて。昔の物がたりなどし  
侍るに。彼範政の孫上總介義忠よりくだりた  
るよしきゝ給て。

萩かえのものはこそはちりぬとも梢也とて忘れさらめや  
これはかの範政老僧愚身など參會せし昔の事  
おぼし出てかくよみ給にや。返。

萩かえのむかしなとへは月までも先玉ちらす露のことは  
又かれより。

はきかえの昔なれにしゆへしあれば月まで照す光そふ覽  
かくしてあくる十三日清見が關みむとて人々  
ともなひて行侍るに。ことに空はれてうら浪  
もなぎ。ふじも手にとるばかりにて。關のあた  
りをみるに。心もこと葉もをよばずおもしろ  
く。聞しよりはみるはまさり侍る。せきのあら  
がきの柱を少けづりて。

月なからいく世の浪を清見かたよせてはあらす關のあら垣  
舟をこぎいださせて。三保の松ばらのほとり  
までこがせ。みれば。すこし隔つる山をいで  
て。浪のうへより又富士を見侍るに。老の後の  
思出これに過はべらじとおもひ侍る。さてか  
へるに。つれたる人にざれごとに。

歸るさはふしなうしろに老の身のくるしやなくれ跡の濱風  
彼草庵にかへりぬれば。上總介殿對面ありて。  
さかづきのつゐでに。

知しらす立とまれとも清見かたみる人からの關の名なれや  
返し。

かへりみることはの花と清見かたけふはかひ有老のなみ哉  
十六日。彼草庵をいでてかへるに。弘濟とてわ  
かき法師の歌など稽古ありたきよし有て。古  
歌などの心少々尋られはべるが。歸るさをし  
たひて。うつの山を送られはべるも心ざしあ  
りがたく覺えて。

忘れめやうつの山路をいさよひの月に越つる葛の下陰  
彼弘濟立歸とて。上總介殿へ一首よみつかは  
しはべらば可<sup>レ</sup>然之由あるに。又筆にまかせ  
て。

天津人君にみよとてそめ色の山をわけてや富士となしけん  
返々かたはらいたき事也。遠江國埴谷備前入  
道常純と云人。昔老僧に逢て歌など稽古せし  
人の遠江より武藏國へ越侍るが。我藤枝にあ  
りと聞て。旅なる所へたちより。むかしのこと  
など語てかへられしが。うつの山より人をか  
へして。彼葛の葉を送られしに。

うつの山うつゝの夢にあふ世かとこのたひたとる葛の下道

やさしく覺えて。其つかひにかへし。

あひみるを夢とたればうつ山のうつゝ定むる蔦のはの露  
さて十九日。又上總介殿よりかの清見關のあ  
らがきを少しとらせて。都の家づとにとて。歌  
をそへて送賜し。

尋つと都にかたれ清見かたこれそまことの關のあらかき  
此あらがき短冊箱になどおぼえて。所望にあ  
りしかども。とらせ侍らば。關守のしら波とや  
とがめ侍らむとはどかりてかへりしに。うれ  
しくもおぼえ侍る。返し。

人ならて都のつとそ清見瀉せきのあらかき松のことは  
廿一日。かへりのぼり侍るとて。埴谷遠江の相  
良といふ所に子に左近將監重治といふ人の所  
へ行侍るに。老僧その昔此あたりへ下給て。か  
さはらよりかつま田と云所へ文などつかはさ  
るゝ事有とて。其文など取いだしつゝ物がた  
りなどせし人のあるにも。いとなつかしく覺

え侍る。こゝにしばしとどまるべきなどある  
にやすらひて。其あたりちかき所に西山寺と  
ておもしろき山寺のあるに行はべるに。御堂  
のかたはらに櫻の木あり。其木のもとに此二  
三年の程空はくまなくて雨ふり侍るとあれ  
ば。ふしぎのおもひをなしてたちいでてみる  
に。まことにくまなき日の光に雨ふり侍り。き  
どくのこととおぼえて。

はるゝ日にいかなる雨を花の雪空にしられぬ櫻木のかけ  
玉泉坊と云所に二三日とどまり侍るに。その  
坊主興衡。又彼重治などのすゝめにて。續歌た  
びたびありしかども。書とどむるにをよばず。  
此みちをのゝすきに。日比よみをかれ侍  
る歌ども書あつめ。そのうちなをざりなるに  
墨など付べきよし侍り。今は都にだに此道す  
たれたるさまなるに。ありがたくおぼえて。  
しるへする人はなくとも此道に心をかけよ和歌のうら舟



と申侍る。さて遠江の府中より人ののぼりぬ

る便あるにいそぎ立出侍る。さてもあとさき  
もなき事を井中文のやうに書付はべる也。と  
くやぶるべしと申き。

文明五年霜月 日

釋 正 廣

此一帖。以<sub>レ</sub>他本<sub>ニ</sub>書寫之處。晴雲有<sub>ニ</sub>後見<sub>一</sub>。尤可  
爲<sub>ニ</sub>證本<sub>一</sub>歟。

正 因 在 判

## 平安紀行

源 持 資

文明十あまり二とせのころ。水無月のはじめ  
つかた。土さへさけてとか旅人のぬしのもの  
せせし避暑<sup>(笈)</sup>の床をはなれて。都にまうのぼり  
ぬ。すべて氷にかたしきほのほに身をとらか  
す事は。ものゝふの本意として常の産なれば。  
おほやけ事のかしこまりに國のかたへにと  
てなんおもひ立ぬるは。かはらぬわざなるべ  
し。結城三郎兵衛藤原重純。小笠原九大夫源忠  
貞を城に残し置て。日漸たけば。従兵もあへか  
ならむとて。夜をこめて馬のはなむいたり。  
海の名ごり山のたゝずまひも。ふし柴のしば  
し計の旅の行る。立かへるべきもこの秋すご  
さぬことながら。心ときめきてよろこびは人  
毎にものすれば。悲しきにも心ひかれぬべし。  
いときなきむまごの門にまてると。むかし有  
けむ人のものせしもをもむきはかはりたるべ

し。芝といふ所をすぐるとて。

露しけき道の芝生をふみちらしこまにまかする明暮の空  
大森といふもりのかげにやすらひて。

大森の木の下かけの涼しきにしろもしらぬも立とまりけり  
河崎といふ海ちかき宿にて。使など跡にやり  
て。こゝにてしばしやすらへば。長光寺日耀上人くだものなど僧にもたせてをくりたまひぬ。馬むけんと立物するに。洲崎にかさゝぎのたてりければ。

朝則かすみうなかす川さきに波とみるまでたてゐるしら鷺  
いさごといふ所にて。

鷗あるいさこの里をきて見ればはるかにかよふ沖津うら風  
かの川にて。

蟹小ふね軒はによする心ちしてなめえならぬかの川の里  
かたびらと名づくる所にて。

日さかりはかたはたぬきて旅人の汗水になるかたひらの里  
平塚にて。

あはれてふたか世のしるし朽はてゝ形見もみえぬ平塚の里

このかた<sup>ひらつかい</sup>びらのかたへにて。そのかみ三浦遠  
江入道定可世を遁れて身まかりしといひつた  
ふばかりにて。しれるものなかりけり。大磯に  
いたりて。

草枕をき行露も大磯の浪かけ衣はしそわひぬる  
こゆるぎの磯にて。

浦風にまたしき秋はこゆるきの磯立ならしけふや暮な  
庚申といふ所とをしふるに。夜もすがら月を  
みて。

名にしおへはれぬよの里のかり枕傾くまでの月をみむとや  
梅澤といふ里にて。

春ならは旅行袖もつからし名のみは匂ふ梅澤の里  
車坂といふ里にて。夕立頻にふりきそへば。

鳴神の聲もしきりに車坂とゝろかしふるゆふ立の空  
小田原といふ所にて。

なる子引賤かをた原みわたせば稲葉の末にさはくむら鳥  
板橋といふ處にて。

朽にける櫓のいた橋苔むしてあやうなからも渡るかち人

箱根の山によぢのぼるに。従兵にひやし酒の  
ませ。水粉みづからも喰してなん。心をやる事  
しばし計なり。

箱根山あくる雲の郭公みちさまたけの一聲もうし  
山中と名づくる所にて。

越わひぬ岩かれつたふ足引の山なかくらきならの下道  
ふしみといふ所にて。

夜をこめておきにけらしな呉竹のなひくふしみのけさの白露  
黄瀬川の里にて。

山姫のいかにさらして白妙の涙の衣やきせ川のさと  
富士の山雲かゝりてさらに見えす。

心あてにそれかとそみるしら雲の八重かさなれる不土の芝山  
慕景樓の午夢のたやすきにはと。故郷ゆかし  
うもまたことやうにおぼえぬ。程なく雲のは  
なれぬれば。

みるたひにおもしろければふしのれの雪は浮世の姿也けり  
岩淵にて。

なちかへりみなはさかまく岩ふちのみとりを分て渡す舟人

關澤といふ所にて。

とりすて、おくての早苗せき澤の井杭も今は波の埋木  
沖津の宿にいたりぬ。庵原民部入道禪道駕を  
まげてからうたふたつづくりこされしに。み  
づからにかはりて。僧昌首座これも詩にて心  
ばへあはれに旅のこゝろばへうつしやりぬ。  
見わたす景色そのかみみしにもはるかにまさ  
りたり。

藻鹽やく煙もたえてたひ人の袖ふきかへす沖つうら風  
清見潟にて。

きよみかた涙の關守ゆふ暮にとまるは月の光成けり  
長沼にて。

なか沼に生る眞薦をかる賤の袂もかくやぬれはまさらし  
手越にて鶯の聲をとづれぬ。折ならぬ音。これ  
もおかしかりけり。

鶯の鳴し垣れを過やちてこしの旅人しはしやすらふ  
宇津山をこえ侍るとて。

夏深くしけれつたのうつもれて道たとくしうつの山越

岡部にて。

ゆふまくれ岡へにかゝる葛のはのうら吹かへす風を涼しきかなやの驛にて。

思ふかな八重山こえて梓弓はるけき旅の行末の空

菊川を過るとて。昔の人世途おもはずもなし。

二代までしつみし人のいにしへを思ひやるたに潺湲そたつ日坂といふ山中にて。

はなにつさかしき山の夏木立青葉をわけてかゝるしら雲

濱松といふ驛にて。

涙かゝるはま松かれを枕にて幾度さめぬ夏のよの夢

あらゐの濱にて。

吹風に波もあらぬの磯の松木陰涼しき旅の空哉

鳴海のうらにて。

かへりみる里ははるかになるみかた沖行舟も跡のしら涙

なく露に思ひ亂れてよもすからあはれなるみの鈴虫のこゑ

鶯の原といふ所にて。

聞まゝにかすみし春そしのはるゝ名さへなつかし鶯の原

番場の宿にて。

やすらはゝ馬立すへて番場つかひせこか心も妹にみせんかも  
赤人のばゞつかひしてと物せし事おもひ出す  
もあらざりけり。青野が原にて。

色わけて千種の花も咲ぬればあなのか原も名のみ成けり  
寢物語といふ所にて。

ひとり行旅ならなくに秋のよのねもの語も忍ふはかりに  
守山にて。

有明の月の光ももる山は木の下露もかくれさりけり

老曾のもりにて。

きえれたゝ老曾の杜の秋かせも心にかよふ袖の上の露

かゞみ山をみやりて。

かはり行かけもはつかし鏡山くもれ中々みえぬばかりに

年月のうつりきぬればかゝみ山昔にもあらぬ陰やみゆらん

都にのぞむ日は。山あひ霧立ふさがりて侍り

ぬ。逢坂山をこゆるとき。

旅人にあふさかやまは霧こめて行もかへるもわかぬこゑ哉  
それより三條銅陀坊のかりやにいたりつき

ぬ。



筑紫道記

宗祇法師

右之紀行者。太田道灌入道平安之筆記也。以二  
舟橋二位之本一寫レ之畢。

元和二年二月中旬

沙門尊證

二毛のむかしより六十のいまにいたるまで。  
をろかなる心一すちにひかれて。いり江のあ  
しのよしあしにまよひ。身をうき草のうきし  
づむなげき絶ずして。移りゆく夢うつゝの中  
にも。時にしたがふ春秋のあはれ思ひ捨てた  
く侍るまゝに。國々の名ある所みまほしく侍  
る程に。筑波山もおもひ入さはりなく。白川の  
關の越がたきさかひをも見侍しかば。今は松  
浦箱崎のあらましのみふかう侍りながら。近  
き世となりて。あし原の風のさはぎしきりに  
て。都のうちも波の音たえず侍れば。草の庵い  
とゞ住がたく侍を。思はざるに左京兆のかぐ  
はしき契ふかうして。西の國の磯の上までを  
たのめをき給へることありき。程もなく博多  
の海も浪おさまりて。岩國山いとゞうごきな  
きかくれがとなりぬれば。文明十二の年水無

月のはじめ。周防國山口といふにくだりぬ。木  
高き一本たのむしるし有て。陰の草本の露の  
なさけもしげくなりて。おり／＼時々のおそ  
びなどゆくこと數そふまゝに。月日うつりて  
長月にもなりぬ。香椎の杉生の松につけて。言  
のはしげき催しかたじけなきをしるべにて思  
ひ立ぬ。こゝに相良遠江守正任國々所々のた  
よりなるべきことこまやかにとりなせり。今  
明に應ずることほりをもとにて。この道の心  
ざし侍るゆへなるべし。あすとのくるゝほ  
どに三條殿より御使あり。思ひかけざる御心  
ざし。これやあまの羽衣ならむとかほりみち  
て。墨染にかさねんは身におはすなむ。彼優婆  
塞の宮になにとかやいひて。よぶかき月に琴  
の音しるべせしものに宰相の中將かづけ給ひ  
けむを。人々とがめいひし匂ひ思ひ出侍るに  
も。なを御なさけの色はたぐひなかるべし。夜

すでに明行程に。くもらはしき空のけしきも  
哀かけけるにや。日いとよくはれてのどかな  
り。宿坊の院主あるじこまやかにして。ことぶ  
きさへとりそへてなさけさま／＼なり。すで  
に打出るおり。陶尾張守弘護。内藤孫七護道。  
もろともにさぶらひを添ふる。いとゞ行末た  
のもしくなむ。かくて過行程に民屋一むら有。  
津の市といふ。左に河ながれ。海づらはやゝい  
りて物さびし。かつまたの池もかくこそはと  
堤くづれてあやうきわたりなれば。うちおろ  
しみなと川を越行程に。門司下總守能秀跡よ  
り立はやめ。言の葉をかはず。折しも空かきく  
もり。時雨めきて打そゝぎ侍るあひだ。賤屋の  
うちに駒引かくし。かみしもの人家々に宿り  
侍る。程もなく降過れば。打つれつゝこの道の  
物語たがひにして。はるかに過行ば。けはしか  
らぬ程の道のほとりに小松むら立て。手向の

神にやと大なる石に木綿かけたる有。こゝな  
ん周防長門の境といへり。夫より山中といへ  
る所にやすらひて。かれ飯のまうけさせせて  
過行まゝに。聊なるやしろ有て。木深きかたは  
らに夕日がくれのほど松虫の鳴からしたるも  
あはれあさからず。今日は長月の六日なれば。  
彼野の宮の曉に音な鳴そへそなど侍りしもお  
もひ残す事なし。あるは山ふかく水流れ。ある  
はひだ引ならず賤の山田に鴈のうち啼などす  
る所々を過て。船木といふ所に昔都相國寺に  
して折々たのみ侍る人此山里をしめて吉祥院  
とて有。今兩夜のちぎり万年のむかしのかた  
らひにもをとらず。さまざまの心ざしせばき  
袖にはつゝみがたくなん。此船木といへるは。  
神功皇后御船を作り給ひけむ所となん。又秋  
は過れどこがれざる覽といへる船木の山の紅  
葉は此ごろにや。發句さたすべきよし侍れば。

ふきしくいなのは雲の山おろし  
舊友のよしみは中々にて。唯所のさまを思ひ  
よれり。曉天に皆人わかれ惜み立出。はるかに  
行てその里をとへば。今宿とかいひて。左に塔  
婆のなかばみゆる寺有。うち過入もて行ば。深  
山にいと木深く。鳥のねも絶たるわたりに  
て舟にのれといふ者あり。あやし。天の岩船に  
やと思ふに。此山の末の浦人。旅人をむかへて  
世のいとなみにする。海路のわたし守成べし。  
やうつり來てはふといふ浦にいたりぬ。嶋  
嶋おほくつらなりて浪の上風靜なり。船もよ  
ひするほど此地をしる人の家にやすらふさま  
驛館の心ちす。水むまやにはあらぬ雜事を  
かならず。かくて船出し侍るに風あらくなり  
て。いかにと侘あへるに。蜚の釣舟の波なれた  
るを見るもあはれなり。篁朝臣の人には告よ  
といひしなど思ひ出て。

心行道たにうきを漕いて、八十嶋かけし人なしと思ふ

跡のしら浪をかへりみれば。汀の松遠ざかりつゝ。潮風にけぶれるも心ぼそし。舟子共のうら悲しげにからろをしわたりつゝ、沖中過るほどに。満干る玉とかやいへる二の嶋をみるにも。からくにの人さへしたがひけん昔ありがたし。いとど祈念をこらし侍るに。すでに着岸す。仲哀天皇の皇居は豊浦といふうら成べし。當社は稚櫻宮天皇におはします。神主則對面して神宮の物語す。齡はや六十に及ぶやと見えて。何となく神徳のふかさもあらはるゝ心地して。殊勝にぞ覺え侍る。社參は幸あす九日の節なれば。此日は打休みぬ。夕月夜のかげおかしき程に。海の上もなざわたりて心すめり。取あへず。

月にみつたしほさむし秋の海

明れば折ふし神わざ有て。神司のものおほく

うちみだれ。御供などまいらするほど也。社頭は樓門回廊ひろうつゞきて。い垣に高き松の色は青海の翠をふかめ。渚になびく眞砂は雪をしけるかとあやまたる。垂跡の御神は第一神功皇后。仲哀天皇。應神天皇。仁德天皇。以上四座まします。神事過て廊にして一座あり。發句は昨日の秋の海なり。今日の菊花當社にいはれなきよし侍れば也。つとめて住吉に明猷律師諸共にまいり。これも社中神さびて。木深き松のひゞき身にしみいふよしなし。神主回廊にむかひて對面す。發句すべきよし侍れば。

松かせやけふも神世の秋のこと

このけふといふ詞。二つにかよふべきや。鎮座の御神は西の第一住吉明神。次八幡大菩薩。高良大明神。神功皇后。諏訪明神。以上五柱なり。和光のちかひ何れもをろかには侍らねど。わきて住吉明神は文武を守り給へり。此道は兩



輪のごとし。國家を治めむ人は。此御神の心を  
觀すべき事とぞ覺え侍る。かくて赤間關はや  
ともものわたりにいたる。鹽のゆきかひ矢のご  
とくして。音に聞しにかはらず。二の迫門を隔  
てむかひは豊前の國なり。そのあいだ十餘町  
と見ゆ。此地のやどりは阿彌陀寺といへり。う  
しろに山高く巖ぞばだちて。落くる水いさざ  
よし。せきいるゝ砌のさまをのづからの境致  
にて。岩に生たる松のねざしも物ふりて。水に

おほひ軒にめぐり。御堂は星霜積りて檜皮所  
所破れたるも中々あはれふかし。鎮守の社の  
作りざまこまやかに。しかも風景を思へるに  
や。門司の松山ぞ向にみえて前に海水をなが  
む。次に安德天皇の御影堂を見侍れば。御かた  
ちみづらふたつにゆひわけて。御よそひさる  
事とみえて。紅の袴に笏を持給へり。御顔のに  
ほひあひぎやうづき。うちるみ給へるさまし

て。唯その代の御かたちとおぼえて。なき世の  
かげはわすれ侍る事也。あやしの身にも見奉  
るほど。涙をさへがたし。次に平家の人々の影  
有。新中納言知盛。修理大夫經盛。内藏頭信基。  
宰相教盛。中將資盛。能登守教經等なり。女房  
には大納言のすけの局をはじめて四五人あ  
り。中にも教經武勇の道すぐれたりけんもふ  
しぎに覺えて。

梓弓八重の沙合に消ぬ名もあはれはかなき跡のしら波

君の御事はその哀ことのはに及び侍らでさし  
をきぬ。彼二位の尼君の波の下に極樂侍りと  
おしへ奉りけむも悲しさ淺からず僞のことに  
はに侍れど。唯心己身のこゝろをおもへば。い  
づれか淨土にあらざる。誰か佛牀にあらざら  
む。此詞ぞ誠の道には侍べき。暮行ほどに門司  
助左衛門尉家親あるじすべきよし侍れば。皆  
ともなひ行たゞしきものなし。夜に入ぬれば

月さやかになりゆくに。あまの漁火たき添て  
うかべる船の數多き中に音高く聞ゆる聲有。  
これや叩<sup>レ</sup>舷來<sup>ニ</sup>往月明前<sup>一</sup>といへるならんと  
聞すてがたきに。磯がくれの家々に打添る磯  
の音。取集たる折ふしも。空飛鴈の鳴わたるに  
も。誰玉章のもじの關守とよめる。唯今のあは  
れなり。明るあした道場にて會有。發句。

舟みえて霧も追門こすあらしかな

翌日又門司下總守能秀の舍りにて會有。

戸さしせぬ關にせきもるもみちかな

歸るさ暮かゝる程に龜山の八幡へまうづ。苔  
の道石の橋をのぼりてみれば。數多の人家海  
づらにつらなり。大小の客船山陰にうかべり。  
御社みやびやかにして。常盤木たかう茂りあ  
ひ。夕露しろくうちなびくさま。むかしかがや  
姫の願けん蓬萊の玉のえだにかよひぬべし。  
又爰にても神主發句を乞。いなびがたくて。

あきとをし龜の上なる峯の松  
つとめて下總守能秀の許にあるじごとねむご  
ろにして。やがて一葉に乗じて漕出。安徳天皇  
行宮の跡をあはれみ。柳が浦を過。菊の高濱を  
ながむ。同行のすゝめ侍れば。舟の中にて一折  
有。

花ならぬ眞砂もきくの濱路かな

移り行て筑前國若松の浦といふに着ぬ。この  
所を知人麻生のなにがし兄弟ある寺にむかへ  
とりぬ。かた山かけて植木高き陰よりうちと  
の海をみるに。鹽屋の煙暮わたり。入日かげに  
移ふほどまたいふかたなし。この二人は將軍  
家奉公の人に侍れば。都の物語こまやかにし  
て。色々の肴求め出たるほど。こよろぎのいそ  
がはしきも思ひやられ。盃かさなりさし。更る  
月の光もたゞならず。今夜は十三夜なればと  
て發句を。

名やおもふこよひ時雨ぬ秋の月

明れば海陸の間侍添てをくりこまやかなり。  
こやの關といふ所にして草の枕を結ぶ。曉ち  
かき夢に誰となきおとこ天神と名乗て扇を予  
に給はるとみ侍りて夢さめぬ。則同行に語れ  
ば。皆ことぶきあへり。誠に神の冥助あるにこ  
そとたのもしくなむ。是より守護所陶中務少  
輔弘詮の館に至り。傍の禪院にやどりして。又  
の日彼館にてさまぐの心ざし有。折ふし千  
手治部少輔。杉次郎左衛門尉弘相など有て。一  
折あり。

ひろくみよ民の草葉の秋のはな

此國の守代なれば。万姓の榮花をあひすべき  
のこゝろなり。ひねもすいろくあそび暮し  
侍るに。此あるじ年廿の程にて。其様艶に侍れ  
ば。おもふことなきにしも侍らで。おぼえず勸  
盃時移りぬ。十六日。杉の弘相の知所長尾とい

ふに行。都より志淺からねば。爰にても又をろ  
かならんやは。やがて百韻をはじむ。山ふかき  
わたりなれば。

もみちしてなをみとりそふ深山かな

是より宰府聖廟へまいる。陶弘詮より侍二人  
添らるゝ心ざしいはむかたなし。かくてあし  
き山といふ驛路にかゝりぬ。水の緑。紅葉の色  
色。おもしろきわたりなれど。谷嶺けはしく。  
ふむ所みな岩の棧路なり。心ばそさまさりて。  
進退の事さへ思ひ歎て。

世中はあしき山路に乗駒のふみもさためぬ身にこそ有けれ  
とかく過行程に。御社ちかく塔婆などみゆる  
より。おりて神前を拜して宿坊満盛院に至り  
ぬる程暮はてぬ。今夜は當社の縁起などよま  
せ奉るほどに。深野筑前守といふ人來る。この  
郡の郡司也。扇をたづさへて。心ざす當社にて  
此扇をうる事。夢の告思ひ合ていとゞ神慮有

がたくなむ。つとめて社僧一人を友なひ神前にまいる。おもての鳥居さし入より。地廣く松杉數そひて。さらぬときは木やゝしげし。反橋たかうして二有。又うちはしたつその中にあり。池のめぐりには千万株の梅のはやしをなせり。覺えず西湖のさかひに來るやとおぼゆ。樓門に入ほどうかうくしくて。左右の回廊いさぎよし。名におふ飛梅苔むして。老松のよはひにもあらそへり。抑當社は延喜五年乙丑に草創有となん。則拜し奉るも。いにしへの御憂まで思ひやられて。看經おぼえず聲やみて。只袖のうるほふより外の事なし。西行がしでに涙のといひけむもかゝる折にや。等閑のことはいかゞ思ひ侍れど。たゞ敬神の心一すぢにまかせて。

壁りなき跡をしたひて我みるやたゞこれにしの秋のよの月うら風の吹上の秋のおもかけも波にたちそふ池のしら菊

神やしる又生れてもうることのあらはとおもふ敷しまの道經藏寶塔諸堂末社みな星霜ふりたる中に。安樂寺いたう廢して。かはら落軒破れて。忍ぶ草もたよりなきにやとみえて。みだれそふあらしにも。俊賴朝臣のちるもみち葉と讀るものと哀なり。次に人丸の木像おはしますを拜す。この所則當社の會所なりと聞て。

菊はたゞむめにしたしき匂ひかな

此日宿坊にて會有。

とりもあへぬ幣はあらしの紅葉哉

翌日又きのふの菊にて一座有。杉弘相會席に來合ていとゞ其興有。會過ぬれば觀音寺に入ぬ。此寺は天武天皇の御願なり。白鳳年中の草創なり。沙彌滿誓が歌に。とふさたてあしから山に舟木きりとよめるも。此所を讀るよし万葉集に侍るにや。諸堂塔婆回廊みな跡もなく。名のみぞむかしのかたみとはみえ侍る。觀音



の御堂は今に廢せる事なし。さては阿彌陀佛のおはします堂又戒壇院かたのごとく有。結縁してのち。ある坊に立寄。當寺は南都東大寺の末寺也。彼衆徒此坊のあるじなり。古き都の人なればにや。花立空燒してえむなるさまに。盃の心ばへ何となく心ざしの等閑に見えずなむ。暮る程に名におふ鐘の音も聞捨がたく。歸りゆくあたりなれば。思川染川などをみつ宿坊に至る。又の日弘相の宿り花基坊といふにて又一座あり。

染川はしくれし山の雪かな

會過ればまだひつじくだぬ程なり。やがて立わかれ侍るに。兵部の君とて侍る法師。あたりの名所のしるべをもせむとて相伴ふ。かまど山は跡遠くなりき。思川の俤は袖の上に留りぬ。染川にそふて下るに。天智天皇の皇居木の丸どのの跡に馬をとどむ。境内皆秋の野ら

にて。大き成礎の數をしらず。都府樓の月いにしへを思ふに。きのふの觀音寺の鐘又聞がごとし。天拜が嵩をはるかにみて。なを御神の名残も淺からず。かるかやの關にかゝる程に。關守立出て。我行するをあやしげに見るもおそろし。

數ならぬ身たいかに共事とはいかなる名をかるかやの關越過るまゝに大成堤有。いはゞよこたはれる山のごとし。尋れば是も天智天皇のつかせ給ひけるとなん。民の愁いかばかりにかと思ふも悲し。すべて國家を守る人は唯民のついえを思ふべき事とぞ覺ゆ。倩世のことほりをおもふに。一天の君万國の民。いづれか終の限りなからまし。此わたりの舊跡を見るにも。只常なるものは山川土石のみなり。我既よはひたけて行末を期するたのみなし。二度こゝをみる事あるまじき事と思ふにも。僞なきなごり

の程は神ぞしらむなどおもひつゞけつゝ。三笠の杜のかげを過て又染川のするゑをわたる。老波の立かへり色に成心もやとあさまし。おくりの法師名残をおしみてたがひに引わかるるも。今はの別めきて心ぼそくぞ侍る。夫より誰にいそぐ心ともなく駒打はやめ。夕陽のほのかなるに博多といふに着ぬ。宿りは龍宮寺といへる淨土門の寺なり。此所つかさどる山鹿壹岐守。とかくのことわざ。常のごとし。奥深きかたに方丈餘りの所有。うちのかざりあるべきやうにして。庭の草木みどころ有。萩の下葉かれぐ成うち散。吳竹の葉風あらあら敷吹て。ひとりぬべき心ちもせぬ旅枕なり。此院主道にすける人にて心ざしをつくさむと見えたるもかたじけなく。明ぬれば此所のさまを見侍るに。前に入海はるかにして。志賀の嶋をみわたして。沖には大船おほくかゝれり。

もろこし人もや乗けんと見ゆ。左には夫となき山どもかさなり。右は箱崎の松原遠くつらなり。佛閣僧坊數もしらす。人民の上下門をならべ軒をあらそひて。その境四方に廣し。爰より船出して志賀の嶋にをしわたる。思ふかたの風さへ添て片時の間と覺ゆ。嶋近くさしよする程に。明神の宮司の坊よりとて。禪衣の人むかへに來れり。心得がたき名乗どもなり。伴ひ行に山かげなる海づらにむねくしからぬ家々さしつどひて。かすかに煙などもみゆ。これやめかり鹽汲海士のやどりならむと哀なり。社は高き所にて其道遠からず。御殿の大にはあらで。物ふかき方はみえず。にぎはしく御垣の内塵のくもりもなし。拜み奉る程。老たる社人寶殿に入縁起取出したるぞ神さび有がたう見え侍る。社中社外の盃酒たびかさなりて心空成に。立出て詠わたせば。万葉によめるお

のころ嶋もまちかくみえて。宮崎の松まつら  
潟香椎の浦まで遙にみやらるゝに。海の面な  
ぎわたり平地のごとくして。木のはよりしげ  
くつかべる釣ふねいはむかたなし。海の道遠  
くつゞきて。波の上霧はれわたる。いとどかへ  
さも忘れぬれば。

浪風をおさめて海のなかにはまで道ある國やまたもきてみむ  
など打ながめ漕かへる。船のうちには老もわ  
すれ齡ものぶる心地して。生薬も只此邊に有  
けりとぞ覺ゆ。寺に歸りて此所にたち給ふ住  
吉の御社に參てみれば。あらがきのめぐりは  
るかにして。つらなれる松の木立神さびたり。  
樓門なかばはやぶれて<sup>年イ</sup>社壇もまたからず。い  
かにととへば。此十とせ餘りの世中の亂ゆへ  
といへるも悲し。神前のいのり此道の外の事  
なし。社中をめぐりみれば。大木の松いがきし  
てゆへあるとみゆる有。問ば。この松もとは御

社にかたぶきて造營のさはりなりける。行末  
も御社あやうければきりぬべしとて勸進の僧  
の定めけり。二三日の間にすこしづつおきな  
をりてすぐになりぬ。夫よりこのいがきなど  
はしけるよしこたふ。そのとし永享十一年の  
歳といへり。ことし四十二ケ年なり。その時松  
をきらむといひし勸進の僧凡公幸と申きと  
て。はしぐかたるも有がたく。道の正道のね  
がひいよくたのもしくて。

神垣の松にそたのむことはもすくなる道に立やなると  
かくて廿三日のあした。中書弘詮のもとへ文  
つかはす。その次のひとりごとにて。

はかなしや袖より外にみし月を面影ならていつかやとさん  
しるしなき事はまことにはかなくなん。廿四  
日より杉の弘相宿願の千句有。第十番暮秋の  
こゝろを。

夕浪にかへるもあきやにしの海

千句は三日に過て。明れば廿七日雨いたくふりて。道の空もいかゞと思給ふれば。生の松のあらましかふも又過ぬ。やどりの院主一折とあやにく侍れば。又の日。

秋ふけぬ松のはかたの興津風

明れば廿九日。生の松原へと皆同行さそひて立出侍るに。大なる川をうちわたりみれば右に一村の林有。則聖廟の御社なり。法施まいらせ。それより姪の濱まで鹽屋おほく。所のさまもさびしげなるを過て。汀におもしろき山有。浦山といへり。汐みつときは山をめぐりて嶋のごとし。折ふし引しほあらくてかへる浪もいそがしくみゆ。うらやましくもといひけむふるごとにはかはりて。行かたに心すゝみてやがてかの松原にいたる。大さ一丈ばかりにて皆浦かせにかじけたるもあはれなり。引入て社有。御神は熊野にておはしますとなむ。社

のめぐりには古木あまたむら立。木の下は茅原なり。夜の時雨の名残にや。むら／＼をける露のする葉うちしめりて。色こき中にしら洲は初霜のまがひたらむやうにて。見過しがたきおりになむ侍る。御神のいきよとてさし給ひけん松ははやう朽て。その根を人守りにかけしなどかたるもむかしこひしきもよほしなり。社壇の右のかたに大き成松のしかもすがた常ならずかみさびたる有。是は末遠くいきの松ともいふべかりけるとみるに。我齡の程たのむかげなきも心ぼそくて。又はかなしごとを。

あすしらぬ老のすさみのかたみや世をへて生の松にと、めづかるほどにやどりせし龍宮寺の院主その外老たるわかき跡よりきたる。これ皆道にすけるもの成べし。愚詠に皆涙おとしぬ。まして老の衣手つれなからんや。かくて此所海ぎはな



れば。打出みるに。若侍のおのこどもよしある  
さかなもたせて。汀なる木の下に草をむしろ  
にて。たび／＼すゝめあへるも情とり／＼な  
り。いそぐとなき道ながら。暮かゝる程に又博  
多にかへりぬ。あすは宮崎などいへるに。同行  
の内宗作といへる。すこしあやまちしてとゞ  
まりぬ。かなしびいはんかたなし。けふはしか  
も晦日にて。秋のかぎりとり添て。いとゞしき  
袖の雫よそふかたぞなきや。

思ひやれ馴こし道に君をきて行そらもなき秋の別を  
かへし。

君にのみ心はそひて行跡に誰かためのこる涙なるらん  
又の日神無月の朔日。いつしか時知がほにう  
ち時雨。道の空いかゞとおもふに。とりもあへ  
ず又はれぬれば。立わかるゝ程。こゝの名残も  
さすがなり。いたはり有同行を輿にのせて此  
松原を見す。みなかちにて。松原に入よりこと

のはおよびがたくなむ。左右に五六町の程を  
移りつゝ又過がてに伴ひゆく。大木などは稀  
にして唯百年ばかり夫よりこのかたの木な  
り。むかしの木は朽ゆきけれど。あひつぐ木末  
かくのごとし。木のもとをみれば五尺六尺一  
尺二尺。又は二葉の如く生るなど。春の野の若  
草のとし幾萬代も絶ざらんとみゆるは。たゞ  
神明のかけなればなり。

一本にはいかに定めし宮崎や松はいつれも神のしるしな  
爰かしこの陰に一村薄かるかやなどの有は哀  
なれど。けふは松より外に心うつるべくもあ  
らず。御社に参ればい垣したる松有。是なんし  
るしの松なるべし。先松に立より一ふさを取。  
しばし祈念いたし。

いにしへの法のためしに秋の霜を陰におさめよ宮崎の松  
是はたゞ國家安全の願ひ事成べし。かくて神  
の前にまいる。御殿の大なる事世にこえ。しか

も造營遠からで玉をみがけり。末社などはなかばなるも侍り。御殿のめぐりより渚に出るまで。大木左右にたかうして地はいさごあきらかなり。御社の正方は戌亥にて志賀の嶋にむかへり。海の中道はるかにめぐりたるさま茅の輪のごとし。遠近の嶋々所々の山々など手にとるばかりにて。いづれも名所ならずといふ事なし。住吉の松。海邊などはさる事ながら。目に近き風景はいかにも増るべくぞ侍る。

社頭のあたりなどの神さびおもしろき事は又すみよしにならぶは侍りがたくなむ。此浦のやどりは極樂寺といふ。則當社の神宮寺也。やがて神主の所へいたりたいめす。先御神の事尋るに。中は神功皇后。左は寶滿。皇后御妹也。右大菩薩におはしますよしへり。しるしの松の回祿の時やけ侍しは。其跡に生出たる不思議などを物しづかにいへるもかたじけな

し。暮る程に海づらのけしき又ゆかしうて。立出みれば夕日の遙々とかゝる方に富士に似たる山有。みことといふ山なり。その外の所々。ゆふ暮の色にもてはやされて。いとゞたぐひなくなん。俄に時雨めきてあはたゞしき雨風に立さはぎ。木のもとを頼む墨の袖などもただならずみえ侍るも。折にひかるゝ哀なるべし。翌日の會に。

松の葉におなし世をふる時雨かな

杉弘相もおなじく此會にあへり。いたはり有同行の事など弘相をたのみ侍り。もとより心ざしふかく侍ばたのもしくなむ。夜にいればわかき男おほく酒もたせなどして。いかゞと思へるさまもわすれがたき事多くなむ。夜更行ば雨いとゞ降て寢覺もいとゞ敷を。明行ばはれ行て立出るさはりなし。桂がたなどを過つゝ香椎宮にまいりぬ。爰はいづくにも引か

へ物さびしく。社のめぐり木ぶかく草たかう。山水に懸置る橋のさまも跡ふりて。むなしき苦のみ道をのこすとみゆ。御殿は造營なかばにもならでかりどののさまもをろそかなり。かんづかさのものどもすさまじげにて物いひかはすも哀なれば。いとどむかし覺えて神の御祓にといへる杉のみさかへて。い垣の外にひろがりたるぞ御祓に何かはせんとめでたき。此枝を少し折て。

行末の身を二たひと思はれと香椎の杉に猶や契らむ

御神は聖母又八幡にておはします。同じ御神ながら宮崎にては神功皇后と申。爰には聖母と號し奉る。神木も宮崎はまつ。こゝは杉なり。これみなひとの心さまぐなるゆへ。隨機の和光又かくのごとし。海づらに出れば則香椎潟なり。磯菜摘あまの子どもも。時ならねばや人かげも見えず。物さびしきわたり也。是よ

り野山の中をわけ過又海際に出。はる／＼とみわたしたる程。千里の濱ともいひつべし。風はげしく浪たかうして物心ぼそきに。ちいさき魚のこゝろよげに飛をみるに。是も又波の下には我より大なる魚のおそるゝおほからむと。みるにうらやましからず。又貝のからの浪にしたがふをみれば。うちよせられて海にはなるゝも愁なし。ひかれて海に歸るもよろこびなし。すべて生をうくるたぐひほどかなしき物はなし。世はたゞ苦樂ともに愁也。此ことはりよく身にしられ侍れば。うらやましとはたゞ此貝のからをやいふべからん。此浦をとへば簗芋の浦といふ。ふるくもうつせ貝をよめれば。

けふそしる此うら波のうつせ貝身のうしとてやかくも成なりんはかなしごとに時うつりて宗像にいたりぬ。神主にたいめして。今夜はある禪院にやどり。

明れば社參す。所は深山のかたはらに。地は平にして。木立しげき中に御社有。廻廊はいたう破れて雨露もたまりがたけれど。御殿は廢せる所なし。右に川ながれて汐遠く滿。前は反はしたかう懸りて。さる故迹とみえたり。御神は田心姫と申。湍津姫市杵嶋姫も一所に垂跡し給ふ。皆兄弟の御神也。是則すさのおのみことの御娘にておはしませば。又道のことを祈奉りて。

人の代の末まで守れ千早ふる神のみおやのことは道のその八重垣の心を思ひて。人の代とはいへる成べし。誠に此尊を歌道の元祖とは申べきものなり。そうじて我國の建立は只すさのおの尊にきはまれり。天照御神の御心といふも此みことの御心也。神道の極意と仰べき事にや。神主家居などさる所と見ゆ。あるじのことなど物きよくして。心ざし又こまやかなり。かつ

ら濁といふにかゝれば。鐘のみさき大嶋などいふもみゆ。我は忘れずとよめるむかしをおもふにも。猶志賀の嶋のおもしろかりしなど思ひ出侍るに。彼小貳の娘どものあはれいづらにといひ。誰をこふとか大嶋のなどいへるも。いかばかりかなしかりけむ。今日も浪風さはがしく袖の雫もいとゞしげきに。千鳥のひとつふたつ四五など啼行も。いかなる事をおもふかと哀なれば。

濱千鳥こゑうちわひて大嶋の波のまもなく誰をこふ覺

旅の空はいつとなく世のことはりの物うきながら。世々のふるごとなどにも思ひなぐさめ侍るを。あひぐしたるものどものひとへに浪風の愁をのみうちなげくを聞ても。我ゆへにこそと思ふもあぢきなし。松原遠くつらなりて。箱崎にもいかでをとり侍らむなどみゆるはたぐひなけれど。名所ならねばしるて心と



まらず。やまとことのはの道も。その家の人又は大家などにあらずばかりなかるべし。然るをこのたび所々にして瓦礫をつらぬる事廿首

にをよべり。あるは敬信の心。あるは此道のねがひ。あるは我身の思ひをのべ。或はいにしへのなき世の跡をあはれび。又は所につけて俤忘れがたきにもよほさるゝ成べし。俊成卿の筆跡にも。此國にきたりときたれるものは此

歌をながめ亦此國に生まれと生るゝものは此歌をよめりといへり。又いきとしいけるもの

いづれか歌をといへる事侍れば。しゐて身のいやしきをはづべきにあらずや侍らむ。かくて程もなくあしやになりぬ。眞砂たかうして山のごとくなるに。松たゞむら立て。寺々あまた見えわたる。民の家居蟹の筍や數ならず。川のむかひは山つらなりて。さまぐみすてがたき折から。時雨いさゝかうちそゞぎ。夕月夜

さやかにさしのぼりたるなど。つくり合せたるやうなり。なだの鹽やきといへるわたりよりは。立かはりてあはれまされり。

鹽やかぬあしやの秋を哀なる月やけふりをいとひそめけん神無月を秋といへる事源氏物語にも侍るにや。爰にて麻生兵部大輔まうけして。いろゝの心ざしこしかたにかはらず。發句をと侍れば。

追かせもまたぬ木の葉の舟出かな  
又ある人所望に。

いつきかむあしやの月の夕しくれ  
又の日弘詮の侍かへして舟にて山中の堀江を遙々とさしのぼるに。汐がれの比にてとかくたゆたひ。日も暮行ば。月の光計をしるべにて。菊の長濱などはさやかにみえず。嶋がくれの海士のいさり。山陰の磯の焼火などえもいはれぬ哀なり。夜いたく更ぬほどに船さしよ

せて彼阿彌陀寺にいたりぬ。月は入かたの空きよく澄て。うしろの山の松風などとりぐに心とまりぬれば。一日を過し。七日のあした舟に乗。隼人の追門をのぼるに。平氏の人々のしづみけむ所ぞと舟人のおしへ侍るも。いとどかひの雫たえがたくなむ。豊浦の渚に舟よせて二宮の神主のもとにしやしやどり。やがて龍泉院明猷律師の坊にいたりぬ。日頃の旅のさま又都の事などもろともに物語して。朝に會有。

なくりきてとふ宿過るしくれかな

會過れば彼神主。又良性といへる都にてなれしなどとどまりて。色々あそびども有て明ぬ。けふは諸ともに。杉美作入道の山家大嶺といふ所につきぬ。山里のあるじ風流にして。もとよりおもしろきわたりをやさしく住なし。庭には梅櫻をつくし。色草を集て心をやれるさ

ま。都にもかゝる所侍らむやは。霜置まよふ菊の籬。まして此頃盛なれば見所おほきに。散まがひたる木の葉の色もえむなり。つとめて一座有。おもしろく繪かけ花たて空焼して。下繪よきほどに書たる懷紙など。いづれも心ある所に。發句のつたなきぞ本意なく侍るにや。

木からしを菊にわするゝ山路かな

一巡過る程に。竹林亭とて道にすける人。兼て契りしをたがへず來らる。去人なればいとど會の興一入なり。又の日は暮うち物がたりなどして。夜にいり香などがひに聞合て。かはらけよき程に取かはし。いとど心とどまり侍れば。つとめて心空に立出るに。道あしき山なればとて。輿の用意又あさからぬ心ざしになむ。立出し日より今日まで三十六日にや成侍らん。此間にはるか成さかひを経るに。山川の道かたき所なきにあらず。しかれども國治り

## 北國紀行

堯惠法印

人の心のどかなればにや。巫峡の水わたるに障なく。大行の路過るに恐れなくして。萬に心をのぶる旅になん侍る。けふは神無月十二日。山口のやどりに歸りて。此たびの日記はしるしとぞめ侍る事しかり。

右此記行者。兼載法師所持之本令ニ書寫一者也。

永祿四年長月念日

昌叱

右筑紫道記以昌叱筆書寫以續扶桑拾葉集及伴光淳本按合畢

文あきらけき年の十七の秋。みのの國平頼數しる所の山亭に下り蘇息せしに。秋風の催す比都を思ひ出侍て。

雲路こす都は西のなとは山せきのこなたも秋かせそ吹かくて明るとしの十八のさ月の末に。飛驒の山路をしのぎ。あづまの方へをもむき侍りぬ。位山をみるに。千峯万山重りて。いづこをかぎりともしらず。

こす風吹あらしも高き位やまひはらが下にかゝる白雲名にきくほそえの方を遙にみやり侍りて。

峯こゆる月もうつりぬ夏山やひたのはそ江の夕闇の空立山のふもとを過て越中の國にうつりぬ。

むかし誰なつより道をたて山の雪に消せぬあとは残れる田子の浦はいづちなるらんと思ひやり侍り。行方なたちへたつなよみぬ人の爲とそきし田子のうら波とをきわたりにふせの海ありときししかば。夏草の茂れるすゑもふせのうみを吹こす風の色かとそみる

早槻川をすぎて霖雨いまだはれず。

たひの空晴ぬなかにうつる日もはやつき河をこゆる白浪

長雨なをはれやらす。四十八ヶ瀬とやらむをは  
るばるとみわたせるに。をつと云所に侍りて。

四十あまり八のせながら長雨にひとつうみともなれる比哉

六月十三日越後府中海岸につきぬ。京路にし

て相なれし正才法師を尋てあまのとまやによ  
をかさぬ。此なぎさちかき所に神さびたるや

しろあり。參詣しておがみ侍りしにかの社務

はながきさといふ老翁出てこの御神はむかし

三韓御進發のときより北海擁護の神たり。居

多明神と申奉る。手向すべきよし申侍しかば。

天の原雲のよそまで八嶋もる神や涼しきおきつしほ風

此國の太守相摸守藤原朝臣上杉房定のきこえ  
に達せしより後は。旅泊の波の聲をきかず。剩

旅館を宸勝院といへるにうつされ。樹陰の涼

風袖にあまるほどなり。七夕にいたり。星の手

向せしに。當國の歌の濱の名も。梶のはをかさ  
ぬべきかすの秋。かぎりしられず覺えて。七夕  
祝。

手向せむ幾万代かこしのうみにとるかちのはの歌のはま風  
十四五夜には善光寺に詣て御堂に通夜し侍  
る。則彼寺務の宿老。内陳へ導き侍しかば。此  
身をかへずして淨刹にいたれるかと覺ゆる  
に。彌陀本願のこゝろを。

ふり分の草木の雨のすゝしさもむかふるかたの秋の初かせ  
をば捨山はいづれの嶺を隔て侍るぞとたづね  
侍るに。いたりてとをくは侍らねども。山川雲  
霧かさなりて。此ごろいとあやしき事の侍る  
道にてなど聞えしかば。只堂前の峯の上より  
はるかにながめ侍りて。

よしさらはみすとも遠くすむ月をおもかけにせん嫉捨の山  
ちくまがはは御堂の東に流れたり。

やとり行浪のいつくかちくま河岩まも清き秋のよの月  
明れば越後の府中にをもむきて旅情をなぐさ



むる事數日になりぬ。八月の末には又旅立。柏崎といへる所まで夕こえ侍るに。村雨打そゝぎぬ。

消もる露は聞ともかしは崎下はに遠き秋のむらさめかくて重れる山つらなれる道を過行程。曠絶無人ともいふべし。越後信濃上野のさかひ三國峠といへるを越て侍るに。諏訪のふしおがみあり。

諏訪の海にぬさとちらさは三國山よその紅葉も神や惜まむ重陽の日。上州白井と云所にうつりぬ。則藤戸部定昌旅思の哀憐をほどこさる。十三夜には一續侍しに。寄月神祇。

越ぬへき千とせの坂のひかしなる道まもる神も月やめつ覽是より棧路をつたひて。草津の温泉に二七日計入て。詞もつづかぬ愚作などし。鎮守の明神に奉りし。又山中をへていかほの出湯にうつりぬ。雲をふむかとおぼゆる所より淺間嶽の雪いたゞき白くつもり初て。それよりしもは

霞のうすくにはへるがごとし。

なかはよりにほふかうへの初雪をあさまの嶽の麓にそみる一七日いかほに侍りしに。出湯の上なる千巖の道をはるぐとよぢ上りて大なる原あり。其一かたにそびえたる高峯あり。ぬのたけといふ。麓に流水あり。是をいかほのぬまといへり。いかにしてと侍る往躅をたづねてわけのばるに。からころもかくるいかほの沼水にけふは玉ぬくあやめをそひくと侍りし京極黃門の風姿まことに妙なり。枯たるあやめのね霜を帶たるに。まじれる杜若のくきなどまで。むかしむつまじくおぼえて。

種しあらはいかほの沼の杜若かけし衣のゆかりともなれ神無月廿日あまりに彼國府長野の陣所に至る事晡時になれり。此野は秋の霜をあらそひし戦場いまだはらずして。軍兵野にみたり。かれたる萩われもかうなどをひきむすびて夜を

かさぬ。定昌の指南によりて。藤原顯定<sup>關東管領</sup>の旅。哀のこゝろありて。旅宿を東陣にうつされし後は。嚴霜もをだやかなり。平顯忠<sup>長尾修理亮</sup>陣所にて會。霽中雲。

むさし野や何の草はにかゝれとてみはうき雲の行末の空

十一月五日には佐野舟橋にいたりぬ。藤原忠信をしるべとせり。彼所を見るに。西の方に一筋たいらなる岡あり。うへに白雲山ならびにあら舟御社のやま有。其北にあさまのだけ崔嵬たり。舟ばしはむかしの東西の岸とおぼしき間。田面はるかに平々たり。兩岸に二所の長者ありしとなり。此あたりの老人出てむかしの跡をおしふるに。水もなくほそき江のかたち有て。二三尺ばかりなる石をうちわたせり。かれたる原にみわたされて。そことおもへる所なし。

跡もなくむかしをたなく舟橋はたゝことのはのさの冬原

十二月のなかばにむさしの國へうつりぬ。曙をこめてちやうのはなといふ所をおき出。ゆくゑもしらぬかれ野を駒にまかせて過侍るに。幾千里ともなく霜にくもりて。空は朝日の雲もなく。さしあがりたる風景肝にめいじ侍しかば。

朝日かけ空はくもらて冬くさの霜にかすめるむさしの原  
其夜は箕田といふ所にあかして。武藏野を分侍るに。野徑のほとり名に聞えし狭山有。朝の霜をふみ分て行に。わづかなる山のすそにかたち計なる池あり。

水ぬし汀の枯野ふみ分て行はさ山の池のあさかせ

其日の半より漸々富士はみえ侍りぬべきを。

よるのしもなぐり猶かきくもりて。かぎりもしらず侍り。からうじて鳩が井のさと滋野憲永がやどりにつきぬ。廿日のよの残月ほがらかにかれたる草のすそに落かゝりて。朝の日

又東の空より光計ほのめきたり。富士蒼天にひとしくして雪みどりをかくせり。唯それならむとおもふに。忙然として大空にむかへり。

けさみれははや慰みつふしのねにならぬ思ひもなき旅の空廿三日には角田川のほとり鳥越といへる海村に善鏡といへる翁あり。彼宅に笠やどりして。閑林にあがめ置る金光寺に在宿し侍。同十九年元日に。

おさまれる波をかけてやつくはれの和嶋根に春の立ちん五日立春。

春はけふたつともいはしむさしのや霞む山なき三吉野の里同月の末。武藏野の東のさかひ忍岡に優遊し侍。鎮座社五條天神と申侍り。おりふし枯たる茅原を焼侍り。

契り置いて誰かは春のはつ草に忍ひの岡の露の下もえならびに湯嶋といふ所有。古松はるかにめぐりてしめのうちにむさしのの遠望かけたる

に。寒村の道すがら野梅盛に薫す。これは北野御神と聞えしかば。

忘れずは東風吹むすへ都まで遠くしめの、そでの梅かか二月の初。鳥越のおきなな艤して角田川にうかびぬ。東岸は下總西岸はむさしのにつゞけり。利根入間の二河おちあへる所に彼古き渡りあり。東の渚に幽村あり。西渚に孤村有水面悠々として兩岸にひとしく。晚霞曲江にながれ。歸帆野草をはしるかとおぼゆ。筑波蒼穹の東にあたり。富士碧落の西に有て絶頂はたへにきえ。すそ野に夕日を帶。朧月空にかゝり扁雲行盡て四域にやまなし。

浜の上のむかしをとへはすみた川霞やしるき鳥の涙に廿日過る比鎌倉山をたどり行に。山徑の柴の戸に一宵の春のあらしを枕とせり。

都思ふ春の夢路もうちとけすあなまぐらの山のあらしやあくれば鶴岡へまいりぬ。靈木長松つらなり

て森々たるに。玉をみがける社頭のたゞずまゐ。由比の濱の鳥居。はるかにかすみわたたりて誠に妙なり。

吹のこす春の霞もおきつすにたてるや鶴か岡の松風

かくて疊々たる巖をきり山をうがち。舊跡の雲につらなれる所を過て。三浦が崎のとをきなぎさを扁々として行に。蒼海のほとりもなき上に。ふじたゞ太虚空にひとりうかべり。東路のいづくはあれどけふこそ眞實ふもとよりなり出けんすがたもみえ侍るかとおぼえて。春の色の緑にうかふしのれはたかまの原も雪かとそみる此浦のあしなといふ所の磯の上に平常和東下野守常縁侍り。こゝにかさなれる岩を枕としておほくの浪のこゑをきゝあかす。

難波なるあしなはきけとかけもみす三浦かさきの浪、下草やよひ半になりぬ。常和にいざなはれて。扁舟に浦づたひし。又かまくらにいたり。建長圓覺

兩寺巡見して。雪の下といふ所を分侍るに。門碑遺跡かずしらす。あはれなる老木の花。苔の庭におちて。道をうしなふかとみゆ。

春ふかき跡あはれなり苔の上の花に残れる雪の下道

日暮てみな瀬川近き所にやどり侍しに。巖頭波しきりにしてよるの雨をきゝあかす。

水あさき濱のまさこを越浪のみなのせ川に春雨そふる

是より三浦が崎にかへりて又姑洗の過るほどなるに。常和と同じく孤舟に棹さして江嶋へ詣で侍り。西のかたの渚ちかく下りて。はるかなる岩屋有。内に兩界の垂跡功德天まします。則こゝをも蓬萊洞といへる。深祕ありときこゆ。いはほの苔をしきて手向し侍りしに。嶋花。

ちらさしと江の嶋守やかさすらんかめの上なる山さくら花其暮澳中より風はげしく海あれて。舷をこす浪大山をかつくがごとし。大悲の弘誓をたの



むこゑしきりにして。又光明寺のなぎさへよ  
せ侍り。そのよも猶風雨やます。

たのますよ三浦が崎の浪まくらさらてもあたの春のよの夢  
翌日淨妙寺に入てみるに。臺あれて春の草に  
かたぶき。ひはだ朽て苦のみどりにひとし。今  
は少室一花開。五葉の遺薰もきぬるかとおぼ  
ゆるに。宿智のまゆ白き出てかたる。此山に杉  
の木だかき社は稻荷明神也。白狐あらはるゝ  
時は寺家に佳瑞あり。門外の叢祠は鎌を手向  
せり。往古の縁起うせて何の御神ともしらず  
といへり。さては此御社は太織冠の御鎮座也。  
やまなる鎮守は彼靈劔の鎌を治められし鎌倉  
山是なりとおぼえて。

つかとりし神もますなり杉のはのときかまうつむ山の麓に  
極樂寺へいたるほど。いとくらき山あひに星  
月夜といふところあり。むかし此みちに星の  
御堂とて侍りきなど古僧の申侍しかば。

今も猶はし月よこそこのころめ寺なき谷のやみのともしひ  
又三浦がさきにこぎかへり。巖の浪の聲を枕  
として。いくよともしらずきゝあかす。

聞わひぬみうらかさきの岩たかき枕の下のうみのなみ風  
雲にまぎれ浪にきゆるかと思へる大嶋をおも  
ひやり侍り。

住人もありとこそきけ大しまの山もうきたる五月雨の空<sup>比イ</sup>  
五月の末伊豆の海よりかさなれる山湧々とし  
て。ふじの空までもひとつみのやうにみえ  
侍。このころより漸夕立のけしきなり。

かさなれる雲わきかへりいつの海の山よりうかふ夕立の空  
同じ比六浦金澤をみるに。亂山かさなりて嶋  
となり。青嶂をばだちて海をかくす。神靈絶妙  
の勝地なり。金澤にいたりて稱名寺といへる  
律の寺あり。むかし爲相卿。いかにして此一も  
とに時雨けむ山に先たつ庭の紅葉葉と侍りし  
より後は。此木青はかは立冬まで侍るよし聞  
ゆる楓樹くち残て佛殿の軒に侍り。

さきたゞは此一もとも残らしとかたみの時雨青葉にそふる  
六月の末角田川のほとりにて。遠村夕立。

雲わくるひかけの末も夏草にいろまの里やゆふ立のそら  
同廿八日。むさしののうち中野といふ所に平  
重俊といへるがもよほしによりて。眇々たる  
朝露をわけ入て瞻望するに。何の草ばのする  
にも唯白雲のみかゝれるをかざりと思ひて。  
又中やどりのさとへかへり侍りて。

露はらふ道は袖よりむらきえて草はにかへるむさしの原  
漸日たかくさしのぼりて。よられたる草の原  
をしのぎくる程。あつさしのびがたく侍りし  
に。草の上にたゞ泡雪のふれるかとおぼゆる  
程に。ふじの雪うかびて侍り。

夏しれる空やふしのれ草のうへの白雪あつき武藏の原  
ほりかねの井ちかき所にて。

そことなく野はあせに鳶紫もほりかねのゐの草はなられと  
七日に鳩が井の里滋野憲永がもとにて。秋増  
戀。

きのふかは思ひし色のあさは野も木からしになる秋の夕暮  
初秋の比。よふかき道をくるに。入間の舟渡り  
までみくる人あまた侍りしに。角田川の朝  
ぎりいづこをほとりともしらず。小舟の行ち  
がふかひの音のみ身にしみて哀に覺え侍しか  
ば。彼翁かたへ申送り侍し。

おもかけを今も身にしむ角田川あはれなりつる袖の朝霧  
九月十三夜。白井戸部亭にて。松間月。

すみまざるほとをのみよと松のはの敷あらはなる峯の月影  
九月盡に長野陣所小野景頼が許にて。暮秋時  
雨。

誰袖の秋のわかれのくしのはの黒かみ山をまなくしくる、  
十一月の末に上野のさかひ近き越後の山中石  
白上杉相摸守房定子  
時法名常泰旅所といふ所へ源房政にたぐへて  
歸路をもよほすべきよし侍りしかば。白井の  
人々餞別せしに。山路雪。

かへるとも君かしほりに東路の山かさなれる雪やわけまし  
廿七日。山雪にむかひて朝立侍。利根川をはる

かにみ侍りて。

ふりつゝし雪の光やさそふらん涙よりあくるあまのとれかは  
あくれば三國山を越侍るとて。木曾路の空も  
此かさなれる嶺よりつゞき侍らむとおぼえ

て。

ふみ分てなか／＼みちや残る覽雪にむもるゝきそのかけ橋

右北國記行以高井大隅守實尹本校正

# 群書類從卷第三百三十七

## 紀行部十一

### 廻國雜記

#### 道興准后

後主御門

文明十八年六月上旬の頃。北征東行のあらま

しにて。公武にいとまのこと申入侍りき。をの

をの御對面あり。義政東山殿ならびに室町殿にお

いて數獻これあり。祝着満足これに過べから

ず。翌日東山殿へ二首の瓦礫をたてまつる。

干さともて思ひへたつなふしのれの煙の末に立別るとも

旅衣たつよりしほるむさしのの露や涙をはしめ成らん

御返し。

思ひたつふしの煙の末までもへたてぬ心なくへてそやる

立かへる程をそたのむ武藏またのの露分衣はるかなりとも

室町殿此御贈答を聞しめしをよび侍りて下されける。

思ひやればしめてかはす言のはのふしの煙にたくふ物とは御使をまたせてとりあへず。

ふしののれの雪も及はす仰きみる君かことはの花にたくへて

禪閣房ことしは八十五にてまし／＼けり。此度

の行すゑさま／＼とぞめさせ給ひけれども。

我身すでに耳したがふ齡にをよび侍れば。行

歩もいよ／＼かなひがたし。かくていたづら

にあかしくらさむこともそらおそろしく侍れ

ば。嚴命に應じ侍らぬことのみ心ぐるしく侍

れども。すでにあひ定侍るうへはちからをよ

ばず。さるほどに馬のはなむけとて。骨肉みな

みな來りあつまり給ふ。禪閣より使をたまは

諸門跡諸  
云聖護院  
道興准后  
後主御門  
自房御公息



りて。老屈のしきにて合期しがたく侍れども。あまりになごりもせちに侍れば。これまでみなみの跡をしたひ侍るよしうけ給はりて。盃酌の席に出給ふ。やゝありて盃のひまにのみて給ひける歌。

身は老ぬ父あひみんもかたければけふや限の別成らん  
あはれさ肝にめいじて。満座の老少感涙にたへず。返歌すべきよし侍しかば。かの在中將が老母長岡にてのふるごとふと心にうかび侍れば。

君かため千世もといのるしるしあらはさらぬ別を神も憐め  
同十六日早朝になか谷の蓬華をたち出て。大原越におもむきけり。とし月馴し柴の庵。しばしばかりの名残さへ立わかるゝは心ぼそきを。あだしよのならひといい。身すでに老後のことなれば。立かへり住居すべしとまたのまれず。池の邊にたゝずみて。

住なれしこの山水のあはれわかさそはれ出る行ふしらすも

大原までみな／＼うちをくり來侍る。中に乗院法印經親、神明の拜殿にてわりごなど携侍りて。數刻興をもよほし侍りき。此社頭は伊勢にてわたらせ給ひけるとなん。西山の大原をおもひ出て。神殿に法樂し奉りける。

大原の神は天てるかけなからたのむはる日もおなし光りな  
葛川を一見してよめる。

白露の玉まくすのかつら川くる秋にしも我はかへらん  
こよひは朽木にとまりて。いつしかふるさとも遠ざかりて。われ人心ぼそく侍れば。

浮世をはわたりすてゝも山川や朽木の橋に行かゝりつ、  
これより若狭國小濱にいたる。曹源院といへる禪院に宿す。かねてより武田大膳大夫入道申つけられしとなり。かの寺は先年順禮の時も立よりけるよし申人あり。よくもおぼえ侍らず。爰に老僧侍り。いさゝか文才などあるよし見えければ筆にまかせて。

遠去三城門一成客來

崑房何處擁羅苔

曾遊此地都如夢

老衲相迎學小臺

翌日未明に出侍るあいだ。和韻を見るにをよばず。無念の至也。行印法印といへる法師侍り。專順法眼が同朋なり。いにしへ連歌の席にて度々逢侍りき。朽木より供し侍るが。善光寺參詣ののぞみ有となん。小濱にしばらく休て。波をながめてかの法印に申かけける。

かけ涼し立よる波の濱ひさき

まさこ露けき夏のむらさめ

行印法印

同じ國三方といへる所にて渺々たる海路をながめやりて。

ふま小舟渡なかの浜に漕いて、みかたの海を四方にみる哉かくてこひの松原うち過て。うら見坂といへる所にて思つづけける。

とは、やなたか世に誰をうらみ坂つれなく残る戀の松はら此所々をうち過て。はたをりの池といへる所にやすみて。

蟬のはの衣に夏は残れとも秋の名にたつはたをりの池

越前國敦賀につきけるに。浦のけしきおもしろく侍れば。しばしながめ侍りて。

はるは又たちをかへらん梓弓つるかの浦のおきつしらみしらきどの橋といへる所にて里人に尋侍れどもこたふるものも侍らずして。

里の名もいさしらきとの橋はしら立よりとへは波を答ふる又おなじならびにたかぎの里といへる所に柳の侍りけるかげにわれ人すぐみて物がたりし侍りける間に。

里のなを名のるたかきの柳陰秋かせしのふたすゝみかな加賀國にいたりたちばなといへる所に宿をかり侍りて。

旅立もさつきの後の身也けり我に宿かせ橋のさと

すはま川といひてそのすがたさながら庭などにつくりたるすはまに。すこしもたがひ侍らず。そのまはり四五町にもあまりぬらんか。奇妙なるすがた也。里人の中侍りしは相馬の將門作りたりしなど語り侍りき。信用にたらず。

すはま川誰すみすてし遺水の跡とかみまし庭の俤

これよりしきちいみなみうち過て。いぶり橋

とてあやうくいぶせき橋に行かゝりぬ。

行暮てふめはあやうきいふり橋命かけたる波の上哉

同じ國もとおりを通り侍りけるに。人のきぬ  
ををりけるを見侍りて。

たれかもとをりそめつらん喜を加ふる國のきぬのたてぬき

汐こしの松を尋侍りて。

年波の外にもたかき汐こしの松の昔を汲てしらるゝ

ほとけの原といへる所を過侍るとて。

わかたのむ佛の原に分きてそをこなふ道のかひもしらるゝ

吉野川といへる所にいたりてよめる。

妹背山有とはきかす爰にしもよしのの河の名に流つゝ

白山禪定し侍りて三の室にいたり侍るに雪い

とふかく侍りければ。おもひつゞけ侍りける。

しら山の名に顯はれてみこしちや峯なる雪の消る日もなし

下山の折ふし夕たちし侍りければ。

ゆふたちの雲はしらねの雪けかな

これより吉岡といへる所にしばらくやすみて。

旅ならぬ身も假初の世なりけりうきもつらきもよしや吉岡

下しら山といひて本のしら山のふもとにつる

ぎといへる所侍り。そのかみ劔飛來しより此  
名をのこしけるとなん。

しら山の雪のうちなる氷こそ麓の里のつるき成けれ

こよひは矢矯のさといへる所にやどりける

に。曉の月をながめて。

こよひしも矢はきの里にゐてそみる夏も末なる弓張の月

あくれば野の市といへる所を過行けるに村雨

にあひ侍て。

風をくる一村雨に虹きえての市人はたちもをやます

つばたといふ里にやどりけるに。すむ人もま

れにてことのほかに閑素に侍りければ。

旅人の枕の上にをくたちのつはたの里はさひわたりけり

おなじ國高松といへる所に行かれて煙のたつ

をながめやりて。

すむ人のたのむ木陰やそれならん烟にくるゝ高松の里  
これより能登國にいたり侍りて菅原といへる  
所にて。

ふしみにはあらぬ野山を分過て今宵かりねをすかはらの里  
又杉の屋といへる所を通るとて。

待人の思ふしるしはみえれともとはてはいかゝ杉のやの里  
よつ柳といへる所に柳のあまた侍りければ立  
よりて。

里人の鞠の庭にはしめれともいとなつかしきよつ柳かな  
小金森といへる所にしばらく休て。

みちのくの山に花さくこかれもり此里までも種やまきけん  
藤井といへる所は浦ちかき里也ければ波をみ  
てよめる。

浦ちかきやとりをしめて春ならぬ藤井の里も波になれつゝ  
くゑのやちといふ所にてよめり。

心からうきすまひにも馴ぬらん八千たひ何なくゑの里人  
石動山に參詣して法樂し奉れる。

うきなきみよに變りて石動の山とは神や名つけそめけん

かくて越中國にいたる。ながれの森といふ所  
にて。

年なかはなかれの杜に立よれば老の涙もその名なりけり  
ねりあひといへるさとに野人ども物語しける  
を見て。ある同行にざれごとうたを。

足よはき老の力にとまひておきなもこゝにれりあひの里  
岩藏川といへる大河侍り。ふる里なる谷近き  
その名を思出て。

故郷の山にちかしくこひわたる岩くら川のかけもなつかし  
大森といへる所をすぎけるに殘暑いまだ散じ  
やり侍らねば。われ人木陰にすゞみとりて。

風はもりてる日はうとき大森の陰にたちよる初秋の空

かくて立山禪定し侍りけるに先三途川にいた  
りて思ひつゞけらる。

此身にて渡るも嬉しみつせ川さりと後世にはしつまし  
翌日下山のついでにもろくの地獄をめぐり  
けるに。熱湯の鉢火炎などとりくにあさま  
しかりければ。



しての山そのしな／＼や湧かへる湯玉に罪の數をみすらん  
禪定する／＼ととげて下向し侍る道にて。

都をはとなくこしちにかへる山ありとなくさむ旅の空かな  
宮崎を立て。さかい川。たもの木。かさはみ。砥  
なみ。黒岩などいふ所をうち過。駒がへりとい  
へる所にて。

行末をいそくとすれと跡にのみ心をかくるこまかへりかな  
やまと川にてよめる。

漕舟のさほの山へは遠けれと名に流たる大和川かな

七月十五日。越後の國府に下着。上杉かねてよ  
り長松寺の塔頭貞操軒といへる庵をてんじて  
宿坊に申つけ。相摸守路次まで迎に來たり。七  
日逗留。毎景色をかへたる遊覽ども侍り。爰を  
立侍るとて二首の詠をのこしとゞむ。

千とせへんしるしをみせて此やとの軒端に高き松の村立  
日かすへてなれぬる旅の中やとまなこりは盡し都なられと  
府中をたちて長濱といへる所にやすみて。

行末の道をおもへば長濱の眞砂を旅のうき數にして

柏崎を過けるに秋かせいとはけしく吹けれ  
ば。

をしなへて秋かせふけは柏崎いかゝ葉もりの神はすむらん  
あふみ川。かさ嶋などうち過てくじらなみと  
いへる濱を行けるに。折ふし鯨のしほをふき  
けるを見て。

わきてこの浦の名になつくしら波曇るうしほを風も吹也  
やすだ。山むろ。みをけ。しぶ川。大・井カイ。きおと  
しなどうち過て。うるし山をこゆとて。

初秋の露にぬるてふうるし山今一しほそ風も涼しき  
壺池といへる里にしばし休て。ある人につか  
はしける誹諧うた。

あち酒をすゝむる人もなき宿に水のみわくや壺池の里  
これよりくつぬきといへる里を過侍るとて。  
我も又あしなやすめて立そよる水かふ駒の杵ぬきの里  
ふくろふといへる里にてねざめにおもひつゞ  
ける。

此里のあるしかほにも名のる也深き梢のふくろふの聲

あひまた。湯の原。池の原などいふ所を分行侍けるに。みちのはとりの おばなをながめやりて。

すむ水はありともみえぬ池の原尾花さはきて高き波かな  
此原をうち過て。なぎなた坂といへる所をこえ侍るとて。又ある 同行にいひかけつかはしける 誹諧歌。

杖をたにおもしといとふ山越て薙刀坂を手ふりにそ行。

上野國大藏坊といへる山伏の坊に十日あまりとどまりて。同國杉本といふ山伏の所へうつりける。道にからす川といへる川に鵜からすなどあひまじはりて侍りけるを見て。又誹諧。とりもえぬ魚の心を耻もせてうのまれしたる烏川かな  
大が松といへる所を過侍るとて。

名のみして宮木にもるゝ大が松ひく人なしに年やへぬらん  
この所より信濃のあさまの嶽ちかゞと見え侍ると聞しにもすぎて。その風情すぐれ侍り

き。

今はよに烟をたえてしなのなる淺間のたけは名のみ立けり  
杉もとに十日ばかり逗留し侍りき。八月十五  
夜淡雨茫々として。いとゞ旅店の物うさもひとしほのこゝちして。

身こそかく旅の衣に朽はてめ月さへ名なもやつす雨哉

この坊を立て宮の市。せしもの原。しほ川。しろいし。いたづら野。あひ川。かみ長川などさ  
まざまの名所を行々て。おしまの原といへる所にやすみてよめる。

けふ爰におしまか原をきてとへはわか松しまは程を遙けき  
むさし野にて殘月をながめて。

山遠し有明のこるひる野かな

おなじ野をわけくれてよめる。

草の原分もつくさぬむさしののけふの隈はゆふへなりけり  
この夜はこの野にかりねして。色々の草花を枕にかたしきて。すこしまどろみ。夢のさめければ。

花散し草の枕の露のまに夢路うつるふむさしの原

武藏のの草にかりれの秋の夜は結ふ夢ちもはてやなからん  
此野の末にあやしの賤の屋にとまりて雨をき  
きて。

旅まぐら都にとをきあつまやを幾夜か秋の雨になれけん  
岡部の原といへる所はかの六彌太といひしも  
のゝふの舊跡なり。近代關東の合戦に數萬の  
軍兵うち死の在所にて。人馬の骨をもて塚に  
つきて。今に古墳あまた侍りし。しばらくゑか  
うしてくちにまかせける。

なきをとふをかへの原の古つかに秋のしるしの松風そふく  
むら君といへる所をすぐるとて。

たか世にか浮れそめけん朽はてぬ其名もつらきむら君の里  
淺間川をわたるとてよめる。

名にしおふ山こそあらめ淺間川行せの水もけふりたてつゝ  
古川といふ所にて舟にのりて。

こかくれにうかへる秋の一葉舟さそふ嵐を川おさにして  
河舟をこかのわたりの夕浪にさしてむかひの里やとはまし

(かた)  
なり田といへる所にてはじめてふじをながめ  
て。

言のはのみちも及はぬふしのれをいかで都の人にかたらん  
夕あけぼのにながめのかはれることを。

佛のかはるふしのれ時しらぬ山とは誰かゆふへあけほの  
かの嶽は遠く行にしたがひて空にもをよぶば  
かりに侍ければ。

遠さかりゆけはま近く見えて鳧外山を空にのほるふしのれ  
下總國こほりの山といへる所に伊豆の三嶋を  
勸請し奉りて大社ましゝけり。かの別當の  
坊にしばらく逗留し侍けるうちに歌など度々  
いひすてども。少々しるしをき侍ける。

尋來てこゝにみしまのおなし名を思ひそいつの國つ神かせ  
ある夜皎わたるに士峰の雪嬋娟たりければ。

富士のれの麓に月は影しろし空に冴たる秋のしら雪  
虫のね物すごき夜。ねざめがちにて。

かりれとふ草の枕の虫のれに催されてもなきあかしつゝ  
ある夕つかた。はつかりの聲をきゝて。

をくれぬて聞こそわふれ初かりの都にいそく夕暮の聲  
おなじとき發句。

かりなきて秋かせたかき雲路かな

色こき蔦の夕日に映じけるを見て。

色うすき秋の日は紅のなかもかはるつたかつらかな

野外の萩やう／＼ちりかたにみえければ。遠

山には木々のこする色づきわたりけるをみ

て。

のへの萩ちればとやまの錦かな

旅館の萩をながめ侍りて。

萩みればふるさとちかき軒端哉

かくてこほりの山を立いでてゆく道に葛のい

としげく侍りけるを見て。

わかかたに歸らんことも遠きののまくすうらやむ秋風の暮

又すゝきを分はべりて。

思ひいつる故郷人の心かとまれくおはな袖もなつかし

おなじ野を分過けるにしをにといへる花を見

て。

尋れみんあたちか原のしるへかも此野にあへる鬼のしこ草  
宮城野の萩とて人の見せければよめる。

みやきの木のしたふしのかり枕まはき折しき獨かもれん

ある旅宿にて明がたに鴈のなきけるをきゝ

て。

しのゝめの横雲まよふ峯こえてともにたなひく天つ鷹かれ

ある人すゝめ侍けるに。旅天月。

よなくの月は都のかけなからやつるゝ袖におも變りして

### 夕鹿

我がたをこひつゝきけはさをしかの妻とふ聲もうき夕かな

旅店にて愁懷のあまり夜ふくるまで短檠に對

して。

孤館殘燈欲五更

暗蛩切々夢難成

故人記取不平事

日々寒垣想洛城

山をこえ過て浦ちかくながめやりけるに。遠

景限なくみえ侍ければ。感興に堪ず。和漢兩篇

口にまかせける。

客旅尙添雙鬢花

江山阻跡故人迴



孤帆明滅暮煙外

落日天邊雁陣斜

からるなす船を友とや聲をほにあげておちくる天つ鴈かれ  
上總國千種の濱といへる所にて色貝をひろひ  
て。

野路つゝく千くさの濱のうつせ貝海さへ秋の色に出けり  
櫻井の濱といへる所にて櫻貝をひろふとて。

新古今春

後徳大  
寺左大

春はさそ花おもしろく櫻井の濱にそ拾ふおなし名の貝  
吉野郷といへる所あり。宗尊親王よしのの花  
をこゝにうつしてうへさせ給ふといひつた  
ふ。

なこの海  
の霞のま  
よりなが  
むれは入  
日をあら  
ふおきつ  
しらなみ

花さかり思ひやられてみよしのの櫻のもみちこれも名残と  
ふと。きさらづ。あづまなどいへる所をうち過  
るとて。思ひつゞけしこと口にまかせて誹諧。  
爰にふと木更津の郷過れとも猶もあつまのうちとこそきけ  
神野山といへる道場にまうでて。

なく鹿の野にも山にも聞ゆ也妻こひわふる秋の夕暮

安房國清澄山にもうで。通夜し侍るあかつき。  
曉のたれときはしもきよすみの海原遠くのはる山かな

東のかたへ下山し。天津といへる所にて。

昔もし雲のかよひち吹とちは乙女の姿今もみましな  
まへ原といへる所にて。

まへはらの里のうしろの山おろし舟にもみちの錦つむ也  
磯村といへる所は名にしおひていそづたひの  
村なれば。

海ちかく磯つたひゆくいそむらに村々みゆるあまの釣ふれ  
那古の観音にまうで。ぬかづきをはりて。夕の  
海づらをながめやるに。寺僧のいで來て。あれ  
見給へ。入日をあらふ沖津白浪とよめるは此  
景也といへり。されどそれは津の國住吉郡な  
ごの浦をよめるとかや。そのなごの浦に難波  
津をまもれる人の住しによりて。其浦を津守  
の浦といひ。又其子孫の氏によびて津守氏有  
とかや。今はなごの浦の所にさだかにしれる  
人なしとなむ。此歌いつちにしてよめるもし  
りがたけれど。寺僧のいふにまかせてしるす

もの也。まことに今も入口をあらふ沖つ波。眼前の景色えもいひがたし。

なこの浦の霧のたえまになかむれば夏も入口を洗ふ白波こよひはこゝに通夜し。あくるあした名にしおふ野嶋が崎をみれば。朝ぎりこゝかしこに立消るさまたゞならず。

あまをふれみえつかくれつ朝あけの野しまか崎の霧の村々かち山といへる所にて。

駒はあれとかちよりそゆくかち山の里にこはたそ思ひやらるゝ河名といへる所にて里人の菜をあらふをみて。

つみためて洗ふ河なの里人よたかあつものの供へにやなす此所より右の方ののこぎり山といへる山あり。峯の嵐に雲晴てあからさまに其嶺みゆ。段段有て誠にのこぎりの様になん侍れば。誹諧。宮木ひく峯の嵐に雲はれてのこぎり山はかゝりとそ見ゆ是より舟にのりてみさきといへる所にあがりて。

あはれとも誰かみさきの浦つたひしほなれ衣旅にやつれて浦川のみなるといへる所にいたる。こゝは昔頼朝卿の鎌倉にすませ給ふとき。金澤。板戸。浦河とて三の湊なりけるとかや。

えの木戸はさしはりてみすうら川に門を並へてみゆる家々鎌倉にて第三まで獨吟。

霧ふかしがまくら山のほし月夜

あさなく鶴か岡のまつかせ

葛の葉の色つく野澤水かれて

鳥はみといへる所を過行けるに日暮侍ければ。

さそはれて我もやとりにいそく也かへる夕のとりはみの里九月九日。野を分つくして山にいたりけるに。菊いとおもしろく咲て感緒きはまりなし。重阳宴には菊を擬し侍りて。

けふは又のを分過て仙人となりてやきくの花をかさらん長月のこゝのかされを思ひ出て衣にうつす菊のしら露さのの舟ばしをよめる。

蜻蛉日記  
しもつけ  
や桶のふ  
ちきなき  
かけも  
かはぬか  
みとそ  
みる

かよひけんこひちを今の世語りに聞こそわたれさの舟橋  
日光山にのぼりてよめる。又昔は二荒山とい  
ふとなん。

雲きりもをよはて高き山のはにわきて照そふ日の光かな  
此山にやますげの橋とて深祕の子細ある橋侍  
り。くはしくは縁起にみえ侍る。又顯露に記し  
侍るべき事にあらず。

法の水みなかみふかく尋すはかけてもしらし山すけの橋  
瀧の尾と申侍るは。無雙の靈神にてまし／＼  
ける。飛瀧のすがためをおどろかし侍りき。

世々をへて結ふ契の末なれや此瀧の尾の瀧のしち糸  
この山の上三十里に中禪寺とて權現まし／＼  
けり。登山して通夜し侍る。こよひはことに十  
三夜にて月もいづくに勝れ侍りき。渺漫たる  
湖水侍り。歌の濱といへる所に紅葉色をあら  
そひて月に映じ侍れば。舟にのりて。  
敷嶋の歌の濱邊に舟よせて紅葉をかさし月をみる哉

翌日中禪寺を立出ける道にかつちりしけるも  
みちの朝霜のひまに見えければ。先達しける  
衆徒長門の堅者といへるものにいひきかせ侍  
りける。

山深き谷の朝霜ふみ分てわかめ出す下もみちかな  
かくしつゝ下山し侍りけるに。黒髪山のふも  
とを過侍るとて。われ人いひすてどもし侍け  
るに。

ふりにける身をこそよそにいとふとも黒髪山も雪をまつ覽  
おなじ山の麓にて迎とて馬どもの有けるを見  
て。

日數へてのる駒の毛もかはる也黒かみ山の岩のかけ道  
又本坊坐禪院にかへりつき侍りて。さま／＼  
遊覽あり。或夜時雨をきゝて。

越ゆかんおのへの雲もさきたちて山めくりする初時雨かな  
軒ちかく瀧おち侍り。さながらねぎめのしぐ  
れに聞まがひ侍りければ。

山水の音をれさめの時雨にて老の泪はいつはりもなし

ある夜月いとおもしろかりけるに。別當坐禪  
院法印源イ呂深かたよりよみて給ける。

さても猶思はぬ袖のかりねゆへこよひや都月の山さとりあへずかへし。

ことのはの光をそへてみる月によしや都の秋もしのはし

一山の老弱酒宴を興行して。兒わらは數輩あつまりて。色々曲を盡し侍りき。宴席終て。藤乙丸といへる少人休所へ禮に來りてしばらく物語し侍りてかへり侍りけるが。次の日いひつかはしける。

をとにそといひしもさそな相みての心盡しを誰かしらまし

藤乙丸かへし。

あひ見しは夢かとはかりたとれるを現にかへす言のはの末ある夜又かの兒をとづれ侍りて。あまりに月のおもしろさにさそはれ侍るよし申て。しばし物語し侍けるに。一首よみ侍るべきよししるて所望しければ。とりあへず。

月見つゝ思ひいてなは諸共にむなしき空やかたみならましながらもけふあすばかりにて侍れば。更行をもしらずあそびけるに。五更の鐘すでに告わたりければ。歸りて長門の堅者して申をこせける。

藤乙丸

いかにせん又たのみある世身イなりとも秋の別は愚ならめやかへし。

別路の露とも消ん時しもあれ秋やは人にとのみなけきてそへてつかはしける歌。

忘めや一夜の夢のかり枕人こそかりに思ひなすとも

おなじ國宇津宮につき侍り。粉川寺といへる所に聖道所あり。かの坊にとゞまり侍りき。此

寺の稱號いかなるゆへにかと思ひ侍りけれ

由來イ

ば。紀伊國粉川寺をうつし侍るとなん。彼本寺門跡管領の在所なれば。ふしぎなる機縁にて侍よし申きかせて。短尺をつかはしける。

契あれや東路となく紀の國にあらぬこかはの寺に宿れる



ある夜きぬたの音を聞て。

れさめうき旅のよとこを思ひわれ衣をうつ宮の里人

この旅宿にて人々月のうたよみける中に。

めかれせす月にかゝるは心にて空に雲なき秋の夜半哉

宇津宮を立てきぬ川といへる所にてよめる。

もみち散山はにしきをきぬ川にたちかされたる波のあや哉

常陸國にいたりぬ。小栗といへる所に熊野御

社おはしましけり。法施の序によみて奉る。

たちそひてまもる心の道なれやいくにきてもみくまの神

さくら川をわたり侍ければもみちうつろひて

波に映じけるを見てよめる。

秋の色にうつろひきても櫻川紅葉に波の花をそへつゝ

おなじ國山田慶城といへる山伏の坊にやどり

てよめる。

めくり來てけふは吾妻のひたち帯結そへてや草枕せん

この坊に逗留の間。歌あまたよみける中に夕

時雨といへる題にて。

もみち葉を染るのみかは夕時雨我さひしさも色まさりけり

又夜時雨といへる心を。

色みえぬ時雨のいとや山姫のよるの錦ををり亂すらん

九月廿三日。欲詣築波山。疾風迅雨太矣。仍

龜居草廬。而口號一絶。

蕭條竟日鎖柴門

風雨似憐吾脚跟

還恨楓林斷秋色

明朝山上祭吟魂

翌日築波山に參詣し侍りけるに。初雪ふりて

もみちはうすくれなるに見えければ。

いつれをか深し淺しとなかめましもみちの山のけさの初雪

神前にして詠じて奉りける。

さはりなくけふこそこにつくはれや神の惠のは山しけ山

まことにこのもかのもと詠せしもことはりに

て。山々のもみぢたとへんかたも侍らず。道す

がらくちずさびける歌。

築波山このもかのももみち葉に時雨も繁き程そしらるゝ

みな川はこの山のかげにながれ侍り。こひ

そつもりてと詠せし歌をおもひいでて。

築波れのもみちうつろふみな川淵より深き秋の色かな

又山に八重かさねといへる靈石侍り。いひす  
ての發句。

きてそ見るもみちのにしき八重かさね

旅宿にて夕鹿といへることを人々によませ侍  
りける次に。

山陰や木のは時雨て暮る日に忍ひかねたるさむしかの聲

雁のわたりけるを聞てよめる。

萩の葉に有としらてや玉つさを翅にかけて渡る雁かれ

曉虫といへることを。

きりくすよはるねさめの有明に枕さひしき床の上かな

旅の宿さびしさのあまり。これかれ題をさぐ  
りて歌よみけるに。鹿。

なるこには驚く鹿も妻戀のきつなになとかはなれさるらん

つくはねのふもとをたちて。他國へうつりけ  
る道にて。きくもみちおもしろき所にいたり  
て。

旅の空うつるひかはり行道に紅葉も菊もおりをしれとや

つくば川をわたりけるに。いさゝのはしを過  
とて。

わたりきてすゑたとくし築波川いさゝの橋にかゝる夕暮  
爰を過てうがひ川といへる所に紅葉盛にみえ  
ければ立よりて。

篝をはもみちそてらす鶴かひ川水すさましきせゝの秋風  
ある野徑を分行けるに浅茅いとふかかりけれ  
ば。

ふるさとの庭の淺ちもかくやとて分わふる野を哀とそみる  
九月廿八日。稻穂の別當が坊にて湖水をなが  
めて。

山色湖光秋又窮  
砧聲近報孤村晩

卿書曾不説飛鴻  
旅懷何堪憂患躬

しもつふさの國兒の原といへる所あり。いか  
なるゆへにかゝる名の所は侍るぞとさと人に  
尋ければ。この在所白波青林横行の地たるに  
よりて。ある少人のとをりけるに。衣装など剝  
とるのみならず。剝へ殺害し侍りき。夫より此

をかやうに號し侍るよし語侍れば。今更のこ  
こちして。塚のほとりに立よりて。おもひつゞ  
けて廻向し侍ける。

佳人落命荒原上

蘇底古碑空刻名

勿恨青林犯花影

浮生有限辱兼榮

白波に浮名をながす兒の原戀ちにすつる身とも聞はや  
草の原さま／＼枯わたりて。むしのね所々に  
残りけるぞ。

虫のれの稀に成行のへみれは獨はかれぬ霜の下草  
或とき題をさぐりて歌よみけるに。菊。

紫にうつるふ菊の花はまたあらぬ種より咲かと思見る  
又砧を。

秋風に人の夜さむなうちそへて砧にあやなれさめをそする  
ある少人のもとより暮秋紅葉といへる題をた  
びて歌よみてと侍りしかば。其使をまたせて。  
歸るさと思ひなつ田の秋とてや山も錦のおりなしらん  
ある夕ぐれに鴈なきて秋かせ物すこく吹なし  
ければ。

雲路行かりかれさむみ秋更てゆふへの山に風わたりつゝ、  
國々あまた過行侍りけれども。ふじの高嶺猶  
おなじさまに見え侍りしかば。

身にそふる涕なれやいつかたにゆけとも近きふしの高嶺に  
晴曇る時雨の空にむかひて旅客の愁の涙に思  
ひよそへてよめる。

憂秋の涙の袖は隙なき時雨は空にはれくもれとも  
九月盡にある旅宿にて。

いかにせむけふを限の秋なからわが歸るさの行ふしらねは  
旅の空我はいつとも白露をかたみに置てかへる秋かな  
十月朔日よみて人につかはしける。

春といふ名にはふれとも神な月時雨てかすむ山端もなし  
けふよりは春と冬の神無月けにさためなき初時雨説  
けふ小春のしるしにや。いさゝかのどかに侍  
ければ。みな／＼いなほの湖水にうかびて舟  
のうちにて酒など興行し侍りき。富士のね湖  
にうつれる心をみな／＼よむべきよし申けれ  
ば。

水うみの波まにかけをやとしきて又類ひあるふしを見る哉  
稻穂をたちて行ける道にいろ／＼の名所ども  
侍。いひ捨の發句歌などあまた侍りしかども。  
途中のことなれば記すにをよばず。あやしの  
橋といへる所にて。

川かせの渡る霧まにはのみえてあやしの橋の末そあやうき  
岩つきといへる所を過るに富士のねには雪い  
とふかく外山には殘紅葉色々にみえければ。  
よみて同行の中へ遣しける。

ふしのねの雪に心をそめてみよ外山の紅葉色深くとも  
淺草といへる所にとまりて庭に残れる草花を  
見て。

冬の色はまた淺草のうら枯に秋の露をものこそ庭かな  
此里のほとりに石枕といへるふしぎなる石あ  
り。そのゆへを尋ければ。中比のことにや有け  
ん。なまさぶらひ侍り。むすめを一人もち侍り  
き。容色大かたよの常也けり。かのちゝ母むす

めを遊女にしたて。みちゆき人に出むかひ。か  
の石のほとりにいざなひて。交會のふせいを  
こととし侍りけり。かねてよりあひ圖のこと  
なれば。おりをはからひて。かの父母枕のほと  
りに立よりて。友ねしたりける男のかうべを  
うちくだきて。衣裝以下の物を取て一生をを  
くり侍りき。さるほどにかのむすめつや／＼  
思ひけるやう。あなあさましや。いくばくもな  
きよの中に。かゝるふしぎのわざをして。父母  
もろともに惡趣に墮して。永劫沈淪せんこと  
の悲しさ。先非におきては悔ても益なし。これ  
より後の事様々工夫して。所詮われ父母を出  
しぬきて見むと思ひ。ある時道ゆく人ありと  
告て。男のごとくに出たちてかの石にふしけ  
り。いつものごとくに心得てかしらをうちく  
だきけり。いそぎものどもとらんとてひきか  
づきたるきぬをあげてみれば人ひとり也。あ



梅花無盡  
藏云河邊  
有柳樹蓋  
吉田之子  
梅若丸墓  
所也其但  
北白河人

やしく思ひてよく／＼見れば我むすめ也。心もくれまどひてあさましともいふばかりなし。それよりかのちゝはゝすみやかに發心して。度々の惡業をも慙愧懺悔して。今のむすめの菩提をもふかくとぶらひ侍りけると語傳へけるよし。古老の人申ければ。

罪とかのくつるつくるイよもなき石枕さこそはおもき思ひなるらめ當所の寺號淺草寺といへる。十一面チイ觀音にて侍り。たぐひなき靈佛にてまし／＼けるとなん。參詣のみちすがら名所ども多かりける中に。まつち山といふ所にて。

いかてわれ頼めもなかね東路の待乳の山にけふはきぬらんしくれてもつゝねにもみちぬまつち山落葉をとくと木枯そ吹あさちが原といへる所にて。

人めさへかれてさひしき夕まくれ淺茅が原の霜を分つゝおもひ川にいたりてよめる。

うき旅の道になかるゝ思ひ川涙の袖や水のみながみかくて隅田川のほとりにいたりて。みな／＼

歌よみて披講などして。いにしへの塚のすがた。哀れさ今のごとくにおぼえて。

古塚のかけ行水のすみた川聞わたりてもぬるゝ袖かな同行の中にさゞえを携へける人ありて。盃酌の興をもよほし侍りき。猶ゆき／＼て川上にいたり侍りて。都鳥たづね見むとて人々さそひけるほどに。まかりてよめる。

こととはむ鳥たに見えやすみた川都戀しと思ふゆふべに思ふ人なき身なれとも隅田川名もむつまじき都鳥哉やう／＼歸るさになり侍れば。夕の月所がらおもしろくて。舟をさしとめて。

秋の水すみた川原にさすらひて舟こそりても月をみる哉次の日淺草を立て。新羽といへる所におもむき侍るとて。道すがら名所どもたづねける中に。忍の岡といへる所にて松原の有ける陰にやすみて。

霜ののち現れにけり時雨をは忍ひの岡の松もかひなしこゝを過て小石川といへる所にまかりて。

我方を思ひふかめて小石河いつをせにとかこひわたるらんとりごえの里といへる所に行くれて。

暮にけり宿りいつくといそく日になれもれに行鳥越の里

芝の浦といへる所にいたりければ。しほやのけぶりうちなびきてものさびしきに。しほきはこぶ舟どもを見て。

やかぬよりもしほの煙名にそたつ舟にこりつむしほの浦人此うらを過てあら井といへる所にて。

蘆ましりおふるあらぬのうちなひき波にむせへる岸の松風まりこの里にてよめる。

東路のまりこの里に行かゝりあしもやすめすいそく暮かな駒林といへる所にいたりて宿をかり侍るに。

あさましげなる賤のふせやに落葉所をせき侍るを。ちとはきなどし侍りける間。たゝずみて思ひつゞける。

つなかね月日しられて冬きぬと又はをかふる駒はやし哉新羽を立てかまくらにいたる道すがら。さまざまの名所どもくはしくしるすにをよび侍ら

ず。かたびらの宿といへる所にて。

いつ來てか旅の衣をかへてまし風うらさむきかたひらの里岩井の原を過るとて。

すさましき岩ぬの原をよそに見て結ふそ草の枕成けるもちる坂といへる所にて。誹諧の歌。

行つきて見れともみえずもちる坂たゝ藁靴に足をくはせてすりこばち坂といへる所にて。又誹諧歌をよみて人に見せ侍りける。

ひたるさに宿いそくとや思らん路より名のるすりこばち坂はなれ山といへる山有。まことにつゞきなる尾上もみえ侍らねば。

朝またき旅立さとのをちかたに其名もしるきはなれ山哉鎌倉中かなたこなた順見し侍りて。先やつやつを人に尋侍り。龜がゐのやつにてよめる。

幾千とせ鶴をかへに伴ひてよはひあらそふ龜かゐのやつ扇が谷にて。

秋たにもいとひし風を折しもあれ扇が谷は名さへすさましうつし繪の扇がやつやこれならん月はうな原雪はふしのね

さゝめがやつ。

霜さやくさゝめが谷のふしのまに一夜の夢も嵐ふく也

梅が谷。

冬枯の木立さひしき梅が谷もみちも花もおもかけそなき  
うりが谷。

ひと夏はとなりかくなり暮過て冬にかゝれる瓜が谷かな  
霧がやつ。

此里のふる井のものと桐かやつおちはの後は汲人もなし  
胡桃が谷。

住なれし鎌倉山のやまからやくるみか谷に秋をへぬらん  
べにが谷をとどりて。化はひ坂を越とて。誹

諧。

顔にぬるへにかやつよりうつりきて早くも越るけはい坂哉  
鶴が岡の八幡宮に參詣し侍れば。傳聞侍りし  
にもすぐれたる宮たち也。まことに信心肝に  
めいじて尊くおぼえ侍る。抑當社別當祖師隆  
弁僧正經歷年久し。その階弟道瑜准后號をば  
大如意寺といひ。兩代彼職に補し侍りき。山緒

無双なることを思ひ出て。神前に奉納の歌。

神もわか昔の風をわすれすは鶴かなかへのまつとしらなん  
由井が濱にまかりて鳥居など見侍りて。しば  
らくみな／＼あそび侍りけるに。

朽のこる鳥居の柱あらはれてゆめの濱へにたてる白浪

このついでに建長圓覺以下の五山を順見し侍  
りて。是より瀬戸金澤といへる勝地の侍るを  
尋ゆくに。瀬戸の沖に漁舟あまた見えけるを。

よるへなき身のたくひ哉波あらき瀬戸の汐あひ渡る舟人  
磯山づたひ。残のもみぢ。見所多かりければ。

冬されはせとの浦はのみなと山幾しほみちて残るもみぢそ  
金澤にて時宗の庵の侍りけるに立よりて茶を  
所望しけるに。庭に残菊の黄なるを見てよめ  
る。

誰爰にはりうつしけん金澤や黄なる花さく菊の一本

この在所に稱名寺といへる律院侍り。ことの  
ほかなる古所にて。伽藍などもさりぬべきこ

まなる所々順禮し侍けり。三重の塔婆にまうでけるに老僧に行あひぬ。この塔の由來などたづねければ。これにこそ楊貴妃の玉のすだ

れ二かけ安置し侍れ。我はからひにて侍ましかば。一見させ侍るべき物をとて。懇切なる芳志ぞ見え侍りき。既に下向せんとしけるに。こ

の僧いろ／＼に思案して申やう。しばらくあひまち侍れ。住寺に申こゝろみんとて僧立入

ぬ。やゝありて立歸りていふ様。此玉すだれ當寺の靈寶として毎年三月十五日に取出すより

ほかにはかく禁制し侍ども。拙老經廻の義。前後其例有がたく侍れば。衆僧談合し侍りて。

一見をゆるし侍るべきよし申す。まことにふしぎなる機縁なり。簾の長さ三尺四寸ひろさ

は四尺ばかりにて。水精のほそさ世のつねの簾よりも猶ほそく。かたちは見え侍らず。王妃

のそのいにしへに九花帳に掛侍りけんことな

ど思ひやり侍れば。千古の感緒今更肝に銘じて。皆人袖を濡し侍き。

遠き世のかたみを残す玉簾思ひもかけぬ袖の露哉

藤澤の道場。聞えたる所なれば一見し侍き。ある寮にて茶を所望し侍り。しばらくやすみけるに。池にもみちのちりけるを見て。

澤水もかけは千いろの木のはかな

道場の前にふりたる松に藤のかゝりければ。

紫の色のゆかりの藤さはにむかへの雲をまつそ木たかき

こゝをたちて小田原といへる所へまかりける

道に。花水川といへる河をわたりて。

咲とみえちるとみゆるや風わたる花水川の波のしら玉

大磯の宿といへる所はいにしへとらといひける

好色のすみける所となん。ある同行にたは

ぶれに申きかせける。

今は又とらふすのへとあれにけり人は昔のおほいその里

鳴たつ澤といふ所にいたりぬ。西行法師こゝ



にて。心なき身にもあはれはしられけりと詠  
せしより。此所をかくは名づけるよし里人語  
り侍りければ。

哀しる人の昔を思ひ出て鳴たつ澤をなくくそとふ  
梅澤の里を過侍るとて。

旅衣春まつ心かはられは聞もなつかし梅さはのさと  
まりこ川にて。誹諧。

鈴かけの括りをあけて鞠子川おひつなかいつけふは暮さん  
小田原につき侍れば早川の浦とて。水上は大  
河にて海邊につどきたるによりて。かやうに  
申侍るとなむ。

末となく流出たるはや川のうらや千尋の波路成らん  
一夜この所にとどまりて。旅泊の愁緒かへり  
てその興も多かりけり。夜もすがらまどろま  
んひまも侍らざりければ。

あしのやは波を枕にしきたへの床には夢のたちもかへらて  
これより箱根三嶋などへ參詣せんとして。風祭

の里といへる所にて渡し舟さしよせけると  
き。

舟出せむみなと江ちかき里の名もけに白波のかさまつり哉  
はこね山に行くれて。今夜は社參にをよばず。  
翌朝まうでて落葉を見て。

こからしの錦をたゝむ箱根山あけて見るにそもみち成ける  
嵐ふくおのへの紅葉散みたれ錦をたゝむ箱根山かな  
かくてみしまにまうでて。

波たゝぬみよにと祈る三嶋江のあしてふことをはらへ神風  
矢たての杉とて大木あり。軍陣へ出る武士ど  
も。この木に矢を射たてて吉凶を見侍るよし  
傳ければ。

ものゝふのためしにひける梓弓やたての杉やしるし成らん  
あしたか山をながめて。

浮雲のあしたか山ははやけれとなつめる駒を進むともなき  
かつら山を越侍れば。いづれの木ずるも落葉  
して。物さびわたり見えければ。

冬枯に名のみ残てかつら山まさきもつたも色を稀なる

すはま口といふよりふじのふもとにいたりて。雪をかきわけて。

よそにみしふしのしら雪けふ分ぬ心のみちを神にまかせて富士のむら山とて大嶽の麓に侍り。所々にもみぢの残れるをながめて。

高れには秋なき雪の色さえて紅葉を深きふしの村山田子のうらをはるくとながめやりてよめる。

千里よりちさとにつくふしのれの雪の麓や田子の浦渚ふじのなる澤をよめる。

久かたの天の川せの聲なれや雲まにむせふふしの鳴澤みほの入うみをながめ侍りて。

浮雲のみほの入うみ見渡は松のうへこす沖つしら浪うき嶋が原をながめ侍れば。松原遠く暮かゝりて。やうく月すみのぼりければ。

たちつく松のはこしの波分て月のみ舟も浮嶋が原あしがら山をこゆとてよめる。

足柄のやへ山越てなかわれば心とめよとせきやもるらん

やまひこ山にて。

こたへする人こそなければあし曳の山ひこ山は嵐ふく也さきのたび渡りける鞠子川を又とをるとて。誹諧。

まりこ川又わたる瀬やかへり足

やはたといへる里に神社侍り。法施のついでに。

あつさ弓やはたをこゝにぬかつきぬ春は南の山に待みんつるぎ澤といへる所にてこほりを見てよめる。

此ころは水さひわたれるつるぎ澤水しよりそ名は光ける簀笠の森とて社頭まし／＼けり。しばらく法施侍りて。

天か下まらん神のちかひとや爰にきやとるみのかさの杜ふたつはしといへる所を過侍るとて。

おほつかな流もわけぬ川水にかけならへたるふたつ橋哉宿三相州大山寺。寒夜無眠。而閑寂之餘。和漢兩篇口號。

蓑笠何堪雪後峰

山隈無舍倚孤松

可憐半夜還鄉夢

一杵安驚古寺鐘

わがたをしきしのへとも夢路さへ通ひかれたる雪のさ鐘  
北山を立出て靈山といふ寺にいたる。本尊は  
薬師如来にてまします。誹諸歌をよみて同行  
の中へつかはしける。

釋尊のすみかと思ふ靈山に薬師佛もあひやとりせり

日向寺といへる山寺に一宿してよめる。

山陰や雪氣の雲に風さえて名のみ日なたときくもたのます

熊野堂といへる所へ行けるに小野といへる里  
侍り。小町が出生の地にて侍るとなん。里人の  
語り侍れば。うたがはしけれど。

色みえて移るふときくにしへの言葉の露か小野の淺ちふ  
半澤といへる所にやどりて。發句。

水なかは澤へをわくやうす氷

名に聞し霞の關を越て。これかれ歌よみ連歌  
など言捨けるに。

吾妻路の霞の關にとしこえは我も都に立そかへらん

都にといそく我をはよとめし霞の關も春を待らむ  
此關をこえ過て。戀が窪といへる所にて。

朽はてぬ名のみ残れる戀かくほ今はたふも契ならずや  
ある人のもとにまかりてあそび侍りけるに。

題を探て三十首歌よみ侍りけるに。深夜寒月。

春秋にあかしなれぬる心さし深き霜夜の月をしるらん

### 松雪夕深

嵐さへうつもればてゝふる雪に松のしるへもなき夕かな

### 思不言戀

さすか又かくとはえこそ岩こそすけ下に亂てわふとしらん  
むねをかといへる所をとをり侍けるに。夕の  
煙を見て。

夕けふりあらそふ暮を見せてけりわか家々のむね岡の宿  
ほりかねの井見にまかりてよめる。今は高井

戸といふ。

涕そかたるに残るむさしのやはりかれの井に水はなけれと  
昔たれ心つくしの名をとめて水なき野へをほりかれのぬそ  
やせの里はやがて此つゞきにて侍り。

里人のやせといふ名や堀かれの井に水なきをわひて住らん  
これよりいるま川にまかりてよめる。

立よりてかけをうつさは入間川わか年波もさかさまにゆけ  
此河につきてさまぐの説有。水逆にながれ  
侍るといふ一義も侍り。又里人の家の門うち  
にて侍るとなん。水のながるゝ方角案内なき  
ことなれば。何方をかみ下とさだめがたし。家  
家の口は誠におもてには侍ず。惣じて申かよ  
はす言葉などもかへさまなることども也。異  
形なる風情にて侍り。佐西の観音寺といへる  
山伏の坊にいたりて四五日遊覧し侍る間に。  
瓦礫ども詠じ侍る中に。

南歸北去一季閑

露宿風食總不<sub>レ</sub>安

贏得行吟乘<sub>二</sub>詩景<sub>一</sub>

千峯萬壑雪團々

くろす川といへる川に人の鵜つかひ侍るを見  
て。

岩かれにうつろふ水のくろす川うのぬる影や名に流れん

故郷のことなど思ひ出侍りて。曉まで月にむ  
かひて。

吾郷萬里隔<sub>二</sub>音容<sub>一</sub>

一別同遊夢不<sub>レ</sub>逢

客裡斷腸何時是

西山月落曉樓鐘

さゝいをたちて武州大塚の十玉が所へまかり  
けるに。江山いくたびかうつりかはり侍りけ  
ん。其夜のとまりにて。

山攀<sub>二</sub>峻險<sub>一</sub>海波瀾

到處多其行路難

踈屋終宵風雪底

凍雞喚<sub>二</sub>夢月西寒<sub>一</sub>

あるとき大石信濃守といへる武士の館にゆか  
り侍りてまかりてあそび侍るに。庭前に高閣  
あり。矢倉などを相かねて侍りけるにや遠景  
すぐれて。數千里の江山眼の前に盡ぬとおも  
ほゆ。あるじ盃を取出して。暮過るまで遊覧し  
けるに。

一閑乗<sub>二</sub>輿屢登<sub>一</sub>樓

遠近江山分幾刻

落鴈叫<sub>二</sub>霜風颯々<sub>一</sub>

白沙翠竹斜陽幽

十玉が坊にて人々に二十首歌よませ侍るに。



# 閑庭雪

跡いとふ庭とて人のつれなくはとはぬ心の道もうらみし

## 霞妨夢

ふしわふる笹のしのやの玉霞たまさかにたにみる夢もなし

## 年内待梅

春かまつ心よりさく初花をいつか冬木の梅にうつさん

## 別後切戀

消にけるたまの行ふとけさはみよ別し君か道芝のつゆ

河越といへる所にいたり。宸勝院寺といふ山伏の所に一兩夜やどりて。

かきりあればけふ分つくす武藏のの境もしるき河越の里この所に常樂寺といへる時宗の道場侍る。日中の勤聽聞のためにまかりける道に。大井川といへる所にて。

打渡す大井河原の水上に山やあらしの名をやとすらん此さとに月よしといへる武士の侍り。いさゝか連歌などたしなみけるとなん。雪の發句を所望し侍りければ。言つかはしける。

庭の雪月よしとみる光かな

これにて百韻興行し侍りけるとなむ。これより武士の館へまかりける道に。うとふ坂といへる所にてよめる。

うとふ坂こえて苦しき行末をやすかたとなく鳥の音もかなすぐろといへる所にいたりて名に聞し薄など尋てよめる。

旅ならぬ袖もやつれて武藏野やすくろの薄霜に朽にき又野寺といへる所爰にも侍り。これも鐘の名所也といふ。このかねいにしへ國の亂れによりて土のそこにうづみけるとなん。そのまゝほり出さざりければ。

音にきく野寺をとへは跡ふりてこたふる鐘もなき夕哉

此あたりに野火とめのつかといふ塚あり。けふはなやきそと詠せしによりて。烽火たちまちにやけとまりけるとなむ。それより此塚をのびとめと名づけ侍るよし。國の人申侍けれ

ば。

わか草の妻もこもらぬ冬されに聴てもかるゝのひとめの塚  
これを過てひざおりといへる里に市侍り。し  
ばらくかりやに休て。例の誹諧を詠じて同行  
にかたり侍る。

商人はいかて立ちん膝折の市に脚氣をうるにそ有ける

ある所に一宿し侍けるにたて侍ける屏風扇盡  
しにて侍り。そのうちにほねばかり書たる扇  
侍りけり。そのうへに書て置侍る。

破扇本來非<sub>レ</sub>破扇

銀錢工有<sub>レ</sub>飾<sub>二</sub>丹青<sub>一</sub>

今何零落只殘<sub>レ</sub>骨

見此人間生滅形

ある僧和韻とて後日に人の見せ侍りける。

取<sub>二</sub>破扇<sub>一</sub>猶見<sub>二</sub>玉扇<sub>一</sub>

從來正色又非<sub>レ</sub>青

雖<sub>二</sub>今茲殘骨零落<sub>一</sub>

豈比<sub>二</sub>人間八苦形<sub>一</sub>

或時旅宿にて二十首の歌みなくよませける  
に。曉更雪。

草も木もわかまたしらぬ種なから花に明行しのゝめの雪

# 雪中鷹狩

## 池水鳥

ふりまかふ雪のの原にたつ鳥はしらふの鷹に身をや捨なん  
池水につかはぬをしや友とみてかたわれ月の影に鳴らん

## 契二世戀

沈むへき後をもしらてみつせ川水もらさしと契るはかなさ  
ある夜故郷の人を夢に見侍りて。さめてのち  
なごりおほかりければ。

客牀夢覺故人歸

空夜悽然獨濕<sub>レ</sub>衣

不<sub>レ</sub>識回期其底日

洛陽千里信音稀

十玉が坊にて三十首の歌詠侍りけるに。冬地  
儀。

をしなへて草木にかはる色もなし誰かは六の花とみるらん

## 月前雪

すむ月のみふれしつかによわたるや千里晴行雪の白浪

## 浪上千鳥

網人のうけのつなてをよそにみて千鳥も友をひく波路哉

## 初尋縁戀

たよりふく風になひかは初尾花ほのめかしつゝいさ心みん

おなじ宿坊にてよもすがら爐邊に嘯吟して、

寒燈挑盡夜沈々

獨臥空牀思不禁

爲我詩神如有感

松風生砌助愁吟

雪のあしたある所の高閣にのぼりて偶作。

危樓朝上百花鮮

交友無憐詩酒筵

此地逍遙似何處

亂山疊嶂雪嬋娟

十玉が同宿十仙といへるもの。連歌に數寄侍りて。切々に興行し侍りけるとなん。ある時發句所望しければ。

待日のみ山につもりて雪をそし

人々十五首のうたよみ侍りけるに。河千鳥。

はまな川や風さえぬらん行かへり氷をつくるさよ千鳥かな

懸樋氷

柴の戸にはや出かての冬されにかけひの水も氷とちけり

爐火似春

うつみ火のはいかきわけて向ふよは春の光を手に任せつゝ

依涙顯戀

せきかぬる我衣手の涙ゆへ人のうきなも流やはせむ

山海眺望

わたつ海の波の千里を隔てきて山にもみるめからぬ日はなし  
旅天歳暮。いつしか引かへたる式にて。雪月の夜。寒梅に對して偶作。

歳云晩急若吾何

白髮蒼顏愁又加

風雪還如慰旅懷

野梅映月影橫斜

ところ澤といへる所へ遊覽にまかりけるに。

福泉といふ山伏。觀音寺にてさゝえをとり出

しけるに。薯蕷といへる物さかなに有けるを

見て。誹諧。

野遊のさかなに山のいもそへてほりもとめたる野老澤かな

この所を過てくめ／＼川といふ所侍り。里の

家々には井なども侍らで。たゞこの河をくみ

て朝夕もちひ侍となん申ければ。

里人のくめ／＼川とゆふくれに成たは水はこほりもそする

ある夜。ちご若しゆなど隣國よりしるよしあ

りてとぶらひ來侍りて。酒宴のひまに二十首

の歌すゝめ侍る中に。

樵路雪

おりたかむ心を賤かたのますは拾ふにたへし雪のした柴

深夜寒月

更行はなかれぬよはもなき月のこはれる影そ人たのめなる

惜三歲暮

老のかすそはて春まつ身なりせはなにかは年の暮を暮はん

祈不逢戀

つれなしと人をはなとかゆふしての我に靡かね神や恨みむ

述懷淚

うき身にはともなふ人もうとき世に忘れす袖をとふ涙かな  
ある江山を過行けるに。遠村に鐘のひびきて。

つとめの聲かすかに聞えければ。

西泊東漂分ニ幾州

天涯流落屢吟遊

踈鐘遙度野村晚

清梵聲殘江寺秋

閑緒を慰んがために夜坐して十五首の歌よみ

侍けるに。

宿鳥驚雪

月にたにおとるく杜の村からすれくらの雪に聲さはくらし

澤畔水鳥

あしかもの青羽は霜につれなくて澤へのみくさ枯も残らず

契不來戀

契しも今はかひなく更過て鐘より後は我それをなく

社頭松

すみよしの神代も遠きことのはの盡せぬ種や松となるらん  
ある人旅天の鄙懷を一絶吟じ侍るべきよし所  
望しければ。扇に書てつかはしける。

一別長天西又東

殘生蹤跡轉飄蓬

傍山臨水勞吟歩

詩肺辛酸難得工

これかれ爐下にあつまりて閑吟のついでに。

野徑乾草。

かけるふのをの冬枯見渡はあるかなきかの雪のした草

從門歸戀

うしつらし眞葛にとつる松の門跡吹おくる袖のをひかせ

鶴翔天

澤へより雲ゐにのほるあしたつの聲もしられて高き空かな  
舊里の音信もなきことを述懷して。つれく



のあまりに。寒梅をたづねにまかりて。ある夕暮月に乗じて。

冷衣歩<sub>レ</sub>月出<sub>二</sub>寒村<sub>一</sub>

幽處探<sub>レ</sub>梅風雪香

郷信不<sub>レ</sub>臻春信到

臘前惆悵憶<sub>二</sub>中原<sub>一</sub>

武州大つかといへる所に住侍りける時。近衛前關白殿下より初て御書<sup>音</sup>到來し侍り。これをひらきて一度はよろこび。一たびは戀慕のうれへにしづみて。

從<sub>二</sub>兼<sub>レ</sub>君別<sub>一</sub>始看<sub>レ</sub>書

異國天涯千里餘

忽憶<sub>二</sub>歸期<sub>一</sub>淚先落

待<sub>レ</sub>春遊子數<sub>二</sub>居諸<sub>一</sub>

連日雪いたくふり侍りければ。野遊の興さへかなひ侍らで。いとど都のことどもおもひやりて。

向來投<sub>レ</sub>錫掩<sub>二</sub>幽扉<sub>一</sub>

平野險屋片雪飛

想見舊庭殘臘底

記<sub>レ</sub>春草木記<sub>レ</sub>吾非

越年の式。右にいへるごとくためしなき有さまども也。さるからいとなむこと侍らぬのみ心やすく侍りけり。早梅をもてあそびて。春の

いたれることをおぼえ侍るばかり也。

歲晏無<sub>レ</sub>營旅客情

在<sub>二</sub>身寒<sub>一</sub>憶<sub>二</sub>華京<sub>一</sub>

柴局半<sub>レ</sub>掩夜來雪<sub>一</sub>

一點梅<sub>開<sub>二</sub>使<sub>一</sub></sub>我驚<sub>一</sub>

たき火のもとにて十五首の歌よみ侍けるに。

疎屋聞<sub>レ</sub>霰。

ぬる玉は又もかよはて終夜れやもるあら枕もるなり

寄<sub>レ</sub>琴戀

ひく琴にわかれなをへてなくへやる風は心の松よりそ吹

寄<sub>レ</sub>夢戀

人しれぬ枕のしたの海河にかけてかひなき夢のうき橋

濱邊旅泊

夢そなきもしほの草の枕より跡より波のあらき濱へは

老後懷舊

見し人のなきは。もりのうらめしく残るかひなき老の波哉ある時故郷にあまた侍る連枝のことなどおもひやりて。

雲路隔<sub>レ</sub>蹤鴻鴈行

他郷何<sub>レ</sub>耐<sub>レ</sub>想<sub>二</sub>家郷<sub>一</sub>

暗香吹<sub>レ</sub>斷故園雪

唯有<sub>二</sub>梅花似<sub>一</sub>洛陽<sub>一</sub>

春色漸く搖ぎ。いづくも風まつをくれる日。その興多く侍れども。更に詩人墨客の是を賞する類ひ侍らぬことのみ念なくて。

邊塞曾無風騷人

窓梅牆柳獨共春

爲誰黃鳥出幽谷

淑氣迎晴一曲新

これも骨肉のことどもゆかしくおもひやりて。

野水海漂鴻鴈影

天風頻動青令枝

春來其會知歸路

舊里山花落後時

正月朔日試筆の歌。

あつまよりけふたつ春は都にて花さく比を我をまちえん今朝雪太降。祝豐年之嘉瑞。裁短篇一章二矣。

青陽朔旦日

瑞雪示豐年

料識萬邦土

歡娛正決然

おなじき六日。雪いさゝか融し侍りければ。むさし野に出て。わかなをもとめて。

むさしのにけふつむわかな行末の限しられぬよの例かも

此野よりかへるとて馬上にてある同行に申か

ける。

のる駒に武藏鎧をかけぬれはさすがに名ある野になつますある所にまかりて一兩日すみ侍けるに。山ふかき所なれば。鶯も花もいまだ春をしらざりければ。

寒鶯幽谷棲吾家

一曲朝來出露霞

簷外厭梅半籬雪

何時乘月見橫斜

武藏野に出て酒など飲て遊びけるに。はじめて雲雀のあがるをみて。

若草の一もとならぬむさしのおつる雲雀も床まよふらんあさましげなる田夫の屋に一兩日とまり侍りけるに。野嬢草席などいひしすがたなりければ。感緒に堪ず口にまかせける。

吾此幽棲似謫居

從渭城別絕音書

淡雲流水隨行處

自鑿黃梁手煮蔬

旅宿に梅の咲たりけるを一枝手をりてよめる。

むめかかなやとすのみかは春風の都をうつす袖とこそなれ

餘寒ことのほかに侍りけるあした。鶯のなけるを聞て。

花ゆへに谷の戸いて、鶯も梅も雪にや冬こもらん

武州に山家の勝地侍り。まかりて十日ばかり逍遙し侍りけるに。ある夜筆にまかせ侍りし。

一句此地上遊軒

雲水森然山有靈

殘夜無眠聽春雨

蕭々深院短檠青

次の夜雨散じて月いとおもしろきに。軒ちかく梅のかほりければ。和漢第三まで獨吟。

まくらとふ梅に旅れの床もなし

月引古郷春

山となくかすむかたより雪消て

翌日雨にふりこめられて。野遊の興もかなひ侍らざりければ。つれづれとながめくらし。花鶯を友として口ずさみける。

旅亭春雨日如年

桐野逍遙絶往還

贏得嘯吟戰間緒

黃鸝交語間詩筵

又の日雨はれて雪になりければ。霞たち消て

餘寒はなはだしく侍りければ。

淡雪のふりさけみれば天の原消て跡なき朝霞かな

十玉が方より紅梅の色こきをはじめて見せければ。

こころさし深くそめつゝ眺むれば猶くれなるの梅そ色そふかの老僧扇の賛を所望し侍りき。かの繪に。山路に雲霧を分侍る行人橋に行かゝりたる所。

同遊相引歩徐々

霧霧阻山前路虛

獨木橋邊人不見

松間鐘動夕陽初

おなじ心を和にて書そへ侍ける。

山もとの村の夕暮こととへはまた程遠し入あひの聲かねい

野遊のついでに大石信濃守が館へ招引し侍りて。鞠など興行しにて。夜に入ければ。二十首の歌をすゝめけるに。

初春霞

かさならぬ春の日敷を見せてけりまた一重なる四方の霞は

歸鴈幽

霞つゝしはし姿はほのみえて聲より消る鴈の一つら

## 浦春月

もしはやく浦はの煙つらき名を霞てかくせ春のよの月

## 夢中戀

さめて社思ひのたれと成にけれかりそめふしの夢のうき橋

## 後朝戀

かきやりし涙の床の朝れかみ思ひのすちは我そまされる

大石信濃守父の三十三回忌とてさまぐの追  
修をいたしけるに。聞をよび侍りければ。小經  
を花の枝につけてをくり侍とて。

散にしはみそちみとせの花の春けふこのもとにとふを待覽  
むさしのの末に濱さきといへる里侍り。かし  
こにまかりて。

武藏野を分つゝゆけは濱さきの里とはきけと立波もなし

此ほどながく住なれ侍りける旅宿をたちて  
甲州へおもむき侍りけるに。坊主のことのは  
かになごりをおしみ侍りければ。しばらく馬  
をひかへてよみつかはしける。

旅立てすゝむる駒のあしなみもなれぬる宿にひく心かな

かくて甲州にいたりぬ。岩殿の明神と申て靈  
社ましぐけり。參詣して歌よみて奉りける。

あひかたき此岩とのゝ神やしる世々に朽せぬ契ありとは

猿橋とて川の底千尋にをよび侍るうへに。三  
十餘丈の橋をわたして侍りけり。此橋に種々  
の説有。昔猿のわたしけるなど。里人の申侍り  
き。さることありけるにや信用しがたし。此橋  
の朽損の時はいづれに國中の猿飼どもあつま  
りて勸進などして渡し侍るとなん。しかあら  
ばその由緒も侍ることあり。所がら奇妙なる  
境地なり。

名のみしてさけふもきかぬ猿橋のしたにこたふる山川をといの聲  
おなじ心をあまた詠じ侍りけるに。

谷深きそはの岩はのさる橋は人も梢をわたるとそみる

水の月猶手にうときさるはしや谷は千ひろのかけの川せに

此所の風景さらに凡景にあらず。すこぶる神  
仙逍遙の地とおぼえ侍る。

雲霞漠々渡長梯

四顧山川眼易迷



おなじ國はつかりの里といへる所を過侍りける。折ふし歸鴈の鳴けるを聞て。

今はとて霞を分てかへるきにおほつかなしやはつかりの里かし尾といへる山寺に一宿し侍りければ。かの住持のいはく。後の世のため一首を残し侍るべきよし。頻に申侍りければ。立ながら口にまかせて申つかはしける。かし尾と俗語に申ならはし侍れども。柏尾山にて侍るとなん。

かけたのむ岩もと柏をのつかから一よかりれに手折てそしく花藏坊といへる山伏の所に十日ばかりとゞまりけるに。武田刑部大輔禮に來り侍りき。さかづきとり出てしばらく遊覽し侍りければ愚詠を所望しければ、翌日使をつかはすついでに。消のこる雪のしらねを花とみてかひある山の春の色哉又此國のしほの山。さしでの磯とてならびたる名所侍りければ。

春の色も今一しほの山みれば日かけさしての磯をかすめる此二首をつかはし侍りき。其後さしでの磯にて鶯を聞てよめる。

はる日影さしていそくかしほの山たるひとけてや鶯のなく宿坊の軒に梅いとおもしろく咲かほりて。月かげおぼろなる夜もすがら。かりねの夢も忘はて。

梅かほり月かすむ夜の旅まくら夢に都をなにか忍ん

武田が館に梅あまた侍り。宿所へのことははばかり有とて。祖母の比丘尼の寺へ招引し侍りて。さまぐの風情をこらし侍りき。此あたりに菊嶋といへる名所侍り。一首所望し侍しかば。

咲匂ふ花の春風うらやみて秋をよそにもきくかしま哉けふのみにち笛吹川といへる川侍り。馬上にてよめる。

春風に岸なる竹も音そへぬふえふき川の波のしらへに

おなじつゞきに花鳥の里といへる所を過待るとて。

色にそみ聲にめてつゝやすらひてなかりくらす花鳥の里はより七覺山といへる靈地に登山す。衆徒山伏兩庭歷々とすめる所也。曉更にいたる迄管絃酒宴興をつくし侍りき。宿坊の花やうく咲そめけるを見て。

つほみ枝の花も折しるこの山に七のさとひらきてし哉翌日此山を出て同じ國吉田といふ所にいたる。ふじのふもとにて侍りけり。今夜は二月十五日。いとかすみてふじのねさだかならざりければ。

きさらきやこよひの月の影ながらふしも霞に雲隠しかた柳といへる所をとをとて。

一しほのみとりになひく糸はけに春のくるてふかた柳かな道すがら古郷の花を思ひやりて。

あつまちの春をしたは、故郷の花は我をや恨はてまし

すくものわたりといへる所を行侍ける。朝がすみいとふかくなびきあへるを見て。

里人の夜はにたく火の煙かとすくものわたりけき霞つ、三月二日。とね川。青柳。さぬきの庄。館林。ちづか。うへのの宿などうち過て。佐野にてよめる。

いにしへの跡をはとなくへたてきて霞かゝれるさのの舟橋宇津宮慈心院といへる聖道所に。花あまた侍り。人々さそひ侍りければ。社參のついでに門外まで見やり侍けり。いと尋常なるすまゐにて侍り。兒などのはづれみえければ。ゆかしくおぼえて。かへりていひつかはしける。

立よりてみる程もなき木のもとの心にかゝる花のしら雪このあたりの人百韻興行して社頭に奉納すべき宿願ありて。發句をこひ侍りければ。

ちらぬまはあらしや花の宮木もり

うつのみやをたちて行みちにしほのやといへ

る所侍り。暮行まゝに里々のけぶりたつを見て。

旅衣うちふれて行しほのやに煙さひしき夕がすみかな  
きつね川といへるさとに行暮てよめる。

里人のとす火かけもくるゝ夜によそめあやしき狐川哉

朽木の柳といへる所にいたる。いにしへの柳  
はくちはてゝ。その跡にうへつぎたるさへ又  
苔にむもれて朽にければ。

みちのくの朽木の柳糸たえて昔の衣にみとりをそかる

是よりいな澤の里。くろ川。よさゝ川などうち  
過て。白河二所の關にいたりければ。いく木と  
もなく山櫻さきみちて。心も詞もをよび侍ら  
ず。しばらく花の陰にやすみて。

春はたゝ花にもらせよ白川のせきとめすとも過んものかは  
おなじ心をあまたよみ侍りける中に。

とめすともかへらん物が音にのみ聞しにこゆる白川の關  
しら川の關のなみ木の山櫻花にゆるすな風のかよひち

白川入道妻にをくれて。なげきの中に侍ると

て。禮にも來侍らず。孫をもてさまぐ禮義を  
いたし侍りき。かの入道歌道數奇のよし傳へ  
きゝ侍りければ。いひつかはしける。

立よるも一樹の陰の契とて散にし花の跡もなつかし

こゝをたちて矢つぎといへる所へおもむき侍  
りける道に。うたゝねの森といひていと木深  
き林侍り。やうく花の散すぎけるをみて。

ちる花をたゝ一ときの夢とみて風に驚くうたゝねの杜

かくて人わすれずの山といへる所にて。矢つ  
ぎの別當坊に一兩夜とまりて。

梓弓矢つきの里の櫻かり花にひかれてをくる春かな

是より田村といへる所にまかりける。道すが  
らさまぐの名所ども多かりけり。いひすて  
し歌など記すにをよばず。あさかの沼にて。

はなかつみかつそうつるふ下水の淺かの沼は春深くして  
あさか山にてよめる。

ちりつもる花にせかれて淺か山淺くはみえぬ山の井の水

拾遺抄春  
題よみ  
人しら  
す  
櫻かり雨  
はふりき  
ぬおなし  
くはぬる  
かけに  
くれんか

あぶくま川を過侍るとて。

かくしつゝ故郷人にいつかさてあぶくま川の逢瀬にはせむ

しほの山といふ所は山中にて侍る。是より海

邊へは十里計侍となん。

浦遠き山は霞の色はかりみちてくもれるしほの山かな

衣の關にてよめる。

みちのくの衣の關をきてみれば霞もいくへたちかさねけん

たけくまの松陰にしばらくたちよりて。ふり

ぬる身のたぐひなりとおもひよそへてよみ侍

りける。

いたつちに我も齡はたけくまのまつ事なしに身はふりにけり

するの松山はるかにながめやりて。さてもは

るばると來にけることなど思ひつゞけて。い

つのまに春も末に成ぬらんと思ひわびて。

春ははや末の松山ほともなくこゆるそ旅の日なみ成ける

又おなじ所にて。

人なみに思ひ立にしかひあれやわかあらしの末の松山

けふのみちに實方朝臣の墳墓としてしるしのか

たち侍る。雨はふりきぬと詠じけるふるごと  
など思ひいでてよめる。

櫻かり雨のふること思ひいてゝけふしもぬらすたひ衣かな

關の清水といへる所を過けるに杉むらの侍り

ければ。かたぐゝ相坂の山ちおもひ出られて。

あふ坂の山にはあらぬ杉村に立より關のしみつをそくむ

かくてみやぎ野にいたりぬ。一むらさめし侍

りければ。しばらく木陰にたちよりて。過るを

まち侍りけるあいだに。

木の下に雨やとりせむ宮城野やみかさと申す人しなけれは

おくのほそ道。松本。もろをか。あかぬま。西行

がへりなどいふ所々をうち過て松嶋にいたり

ぬ。浦々嶋々の風景ことばも及がたし。かねて

聞侍しは。ものの數にても侍らず。みなく歸

かね侍りければ。

此うらのみるめにあかて松嶋やおしまぬ人もなき名殘哉

まがきが嶋を見渡ば。藤つゝじなど咲あひて



見え。風景おほかりければ。

まかきしまたかゆひそめし岩つゝし巖にかゝる礫の藤なみ  
これよりしほがまの浦へわたり侍るとて舟の  
うちにて。

松嶋やまつのうはかせ吹くれてけふの舟路はちかの鹽かま  
つゝじが岡を越行けるに。わらびをみて。

名にしおふつゝしか岡の下わらひとともに折しる春の暮かな

とゞろきの橋を過侍るとて。

かち人も駒もなへめる程なれやふみもさためぬ蟲の嬌  
名とり川にてよめる二首。

人しれぬ埋木ならは名とり川流れての世になと聞ゆらん  
いつの世に顯れそめて名取川みかくれはてぬせゝの埋木

右廻國雜記以印本按合聊注今案畢

群書類從卷第三百三十八

紀行部十二

高野參詣日記

逍遙院內府實隆公

四月の頃。住吉天王寺にまうづべきころざしありて。十九日伏見へまかりて。般舟院にしばらくやすみて。船のことなどもよほしおほせて。この津より船出して。爰かしこ逍遙し侍るに。鵜殿三嶋江などいふ所などいとおかしく見え侍り。えなみとかやいふわたりにて。夕立一とをりして。かいの雫もいとたえがたくな。船のうちかくはるかなるべしとおぼえず。なにのまうけもなくさうぐしかりしに。天昭庵とかやいふ所よりさかづき求出てもてきたれる。興あることになむ。かくてふしまち

の月さしあがりて。みじか夜ものこりなきほどに。おさかといふところにいたりて。かねてたのめをきし人たづね侍りしに。いかひしくしるべして。よしあるやどりにみちびきいれて。とかくいたはり侍りしに。をの／＼舟のうちのくるしさを忘ればてぬ。つとめてこのところの本堂みるべきよし申せしかば。こゝかしこみめぐらすに。心ことばもをよばざる莊嚴美麗のさまになむ侍りし。かくて和泉の堺南庄の光明院よりむかへの興などをくられしかば。やどりを出てまかりたちしに。堺のものとして人々

光明院  
檀那

あまたむかへにきたれ

り。まづ天王寺にまうでたりしに。石のとりゐるものとに光明院阿彌陀寺などむかへにとて出きたれり。すなはちあひともなひて金堂にのぼれり。御舍利を頂戴し。おなじく日本にはじめてわたりし大般若經一卷。夢殿より持來の法華經など拜見し奉る。緣起住僧よみ申す。しづかに聽聞して隨喜の涙をさへがたし。法華經をおがみて。心の中におもひつゞけ侍りし。

むは玉の夢殿よりやみぬ世をもこゝにつたへし法の言葉

諸堂巡禮。寶藏にて靈寶どもことごとく拜見。宿縁あさからずありがたくおぼえ侍り。聖靈院にて御影どもおがみたてまつりて。おくのかたみめぐらし侍れば。淨土曼陀羅くち損じてかたばかりなり。これなむ西山上人不斷念佛勤行ありし所なるべきと。往事を感じてなみだをながし侍りぬ。龜井の水を掬て。

まれにきて結ふ龜ぬのみつからやうききにあへる類なる覽

一和尚みちに出あひて。五首歌奉納し侍りしことをよろこび申され侍り。かくてなにがしととやの坊にてさかづきすゝめて。人々すこしうちやすみて。これより住吉社にまうでて御神樂まいらす。十首歌奉納せしめ。ところどころふしおがみて。神宮寺にまうでて。さらに御前の橋より松原に出て。濱のわたり逍遙して。

このまゝに住よしといひて故郷は忘れ貝をもいさや拾はむ和泉の堺にまかりこゆとて。みちすがらの名ある所どもいひつくすべくもあらぬ見ものなり。霞松原といふ所をすぐとてみれば世のつねの松のはにも似ず。吹からしたるやうにみえ侍れば。

木枯の吹しほる色とみるはかりなにあらはるゝあられ松原南庄光明院にいたりて。さまぐのいたはりもてなされ侍り。夢庵にをとづれしかば。やが

て尋ねきたり。夕つけてまたかの寄宿の寺へもまかり侍り。明る日は光明院より夢庵をも招請して齋をまうけらる。

廿二日。高野に參詣のことおもひ立て。宗珀といふものをしるべとたのみてまかりたち侍り。さのといふ處に興かきすへたるほど。市人さはぎたつをみて。

いづみなるさのいち人たち騒きこの渡りには家も有けり大鳥の社信田杜などいふところどもうち過て。いづくの程にか。やしろのあるまへに興かきすへたる所へ。根來よりのむかへとて。馬二疋ひかせて。人あまはしりきたりて。食籠錫のものなどもたせたり。おもひがけずなむおぼえ侍し。かの寺の十輪院といふは。當寺一山の學頭。碩學の聞えありとなむ。坊にはきのふ灌頂を行ひて後朝のいとなみさはがしければ。弟子の實相院といふがもとにとゞむべき

よしの案内となむ。とかくして根來にいたりたりしに。衆徒十人あまりたちつらなりて。むかへ入べきのよしなり。たびのやつれ思ひがけぬことに侍れば。さまざまに色代しかへして。興ながら大門のうちまでのたりし。後にきけば。をるべかりける所に侍りとなむ。かくてすぐに諸堂巡禮し侍り。山中みるもののごとくにて。かたはらいたさいふばかりなし。本堂傳法院にておもひつゞけ侍し。

高野山わかれてこしもことさらに法を傳へむよの爲かも雖もみ不動を拜見して。

うきなき身を分てける姿そと血の涙をもながしてそみる覺鑠上人の詠歌に。夢のうちはゆめも現も夢なればさめなはゆめもうつゝとをしれといへる。續後拾遺集に入るにや。思ひいでられて。

いづさめむうつゝもしらす七十大永三のけふたにおなし夢の世中實相院といふ所につきて。これかれうちやす



みわたる程に。初夜のかねをきゝて。

明は又いそきて出むかりまくられよとねころの鐘聞ゆ也

廿三日。雨氣ありと人々申せしかども。いそぎたちて。粉川の施音寺にまうでておがみ侍りければ。堂のさまなど莊嚴巍巍々として殊勝きはまりなくなむ。本尊は十一面の千手觀音となむ。額の文字施音の二字は常の文字にて。寺といふ一字なん古文に侍り。誰人の筆にか侍る。すぐれたる見物に侍り。御前に念誦のほどおもひつゞけ侍りき。

法のためこのみはほれなくたきても粉川の水の心にこすなしるへせし紅葉の洞の月もありとたのむ光ややみを照さむこれは玉葉にこのてらの觀音の御歌とていれることあるをおもひいでてよめる。

紀伊川をわたるとて。

水上はよしのと聞はきの川のなみの花まであかね色かな河を過てむかひの河原にこしかきすへて。を

のをのあまづつみなとする程。

こゝより雨つゝみするかり衣きの川上のあさわたりしてほとゝぎすのこゑをこゝにてはじめてきゝ侍りしに。輿は雨皮してつゝみめぐらして。いづかたもみえざりし。ねむなく。

いく聲もたゝこゝになけ郭公いつれの山とさしてみましな此道ことのほかとをくて。十八町の坂は四十八町よりも一里のとをき所どもありて。俗に結解なしとかやいふとて。周桂法師がたはぶれに。

雨けとはみつゝも出てぬれにけり結解なしなるけふの道哉かくて山中にいたりて。雨はなはだしく風はげしくて。えゆきやらす谷より吹のぼるかせ身をくだきて。さらに一あしもすゝみがたきよしを申て。山のうへに輿かきすへてありしかば。

老の坂くるしきをこそしのきしになと雨風の身をくたく覽

からうじて風すこしやみしかば。高野の御山にのぼりつきて。一心院の奥坊といふにいたりて。人々やすみぬるほど。郭公のしきりに聞えしかば。

高野山佛法僧のこゑをこそ待へき空に鳴ほとゝきす

廿四日。草鞋をつけて諸堂順禮し侍れば。大塔は柱ども立。心柱などきりて。造作のあらましもなり。金堂はかたのごとくとりたてたるさまなるに。三鉢の松もむかしのは焼て。その種おひとていがきしめぐらしたるをみて。

今はそのまつ曉やちからむ千とせふるきも生かはりけり奥院へまうづるみちすがら。きゝをきしにもおもひやりしにも過たるあはれさ。ありがたさになむ。

ふりそふや天津空なき雨もたゝ袖の上なるけふの山ちに御廟の前の堂。今度供養の堂なり。燈明そのかずなくひかりかゞやきてえもいはず。住僧いであひて大

師御所持の鈴杵。水精の御念珠など頂戴せさせられ侍りき。

あふきつゝみるにいよく高野山光出へきむろのとほそか内よりたまはりし御爪のきれをおさめたてまつる。褰紙に書付し。

爪の上の土よりまれの身をうけて佛の道は手にとりつへしこの御ため別に卒都婆たてさせ侍り。そのほかはかなき卒都婆あまたたてさせ侍りき。人髪をおさむる褰紙に。

むは玉のその黒髪の一すちにやみちをなく皆はるけてよみづからのとしごろおちたる齒ども。とりをかせる。二は観音の像あたらしく造りたてさせ侍るに。腹身にし奉りて。のこり廿あまり侍るをおさむとて。

いかばかり法を譏りし報とかおち盡しけるはつかしのみやよしあしの萬をかけしくちのはの果は我身を捨てさりつる還向の道空はれて日のひかりあきらかなりしかば。

雲きりのまよひも消て出る日やけふの祈に空にうく覽、  
廿五日。有明の月の出たるをみて。

高野山この曉の月たにも待いつる程をひさしかりける  
宿坊をいづとてかきつけ侍し。

思ひいりし一心のおくをきて歸らん塵の世をいかにせん  
かくて根來の十輪寺につきて侍りしに。夜に  
入て講間をこなふを聽聞して。

くるしくも岩れ松かれし道を忘れはてぬる法の庭がな  
廿六日。いよいよしもとどまりて。これより和  
歌吹上も見侍れかし。そのしるべ侍れば。人を  
はしらせて申侍るべし。又連歌も一座などさ  
まざまとどめ申せしかども。えざらぬことと  
て立出侍るほどに。發句とてしきりにこひ侍  
しかば。筆にまかせて。

ほとゝきすなくねころなるみ山かな

かくてさ野といふところのすこしみちよりは  
入たるかたへ。宗珀しるべして。ひるのやすみ  
にかいつものなごとのへたるもめづらかに

なむ。高師濱の松原の下。天神の社の前に興を  
たてて。

袖のうへに松吹風やあたなみのたかしの澄のなをも立ちん  
くれにせまりて堺にかへりつきぬ。

廿七日はすこしうちやすみぬれば。宗仲が寮  
にて一盞など侍りき。

廿八日は阿彌陀寺へ招請ありしかば。まかり  
向て大師の御作の辨才天など拜見。たうとく  
なん。近き寺の風呂に入て。夕つけで歸るほ  
ど。堺の濱見めぐりて。光明院にかへりしか  
ば。宗碩京よりまうできて。歸京の道のことど  
も申とゝのへぬるよし申侍る。いとうれしく  
なむ。

廿九日。高野參詣の前より廿首題をくばりた  
りしを。けふ夢庵にてとりかさぬべきよしあ  
りしかば。かしこにまかりて侍りしに。歌舞に  
をよびてその興あさからず。

旅宿郭公

いさといひて都のつとに草枕さはまほしき子規かな

江上眺望

漕かへり入江の船の夕波にさかひしらるゝをのかうらゝ

寄三杣木二戀但この歌宗頌に遣會書之了。

みや木引聲に答ふる山ひこも我うちわひてなくはしらすや  
五月朔日。光瑱といふもの連歌興行すべきよし  
しきりに申侍しかば。光明院にて一座あり

しに。

阿路濱松の名にやこたへしほとゝきす

みしか夜おしき浦なみのこゑ

すゝしきを光に月は秋立て

牡丹花

宗頌

二日。堺をたちてすみよしにまうでて。御神樂  
まいらせておもひつゞけし。

神も又まつとしを思ふすみのえや立返るけふの涙の白ゆふ  
天王寺にまうでて。いさゝか心ざしの御あかし  
など又たてまつらせ侍りし龜井の水にて。

後前の契りもしるしむすひあくる龜井の水の深き心は

西門の念佛堂にて。武庫山出現の彌陀三尊。太  
子の御筆いまに儼然たり。もろこしよりわた  
せる善導大師等身の御影もこのところに眼精  
誠生身にむかへるがごとし。此堂になむ西行  
法師が座もありけるとかや。一とせの地震に  
くだけうせぬるよしこたへ侍り。あはれなる  
事也。此本尊しづかに拜見して。

うつしとめてやみを照す玉はやすむこの山より出し光は  
爰にて堺よりの衆みないとまごひし侍りし  
を。なをかう津といふところまでをのゝし  
たひまうでて。かしこにて光明院ひるのかれ  
いひなどまうけて。これよりかへられ侍りき。  
渡邊より能勢源五郎與馬などむかへにをこせ  
てこゝより船にのりうつりて漕出るほど。能  
因法しが雲るにみゆる伊駒山もおもひいでら  
れ侍り。樓の岸などいふもこゝといふ所なり。  
大江殿のあととて今も松のみどりにみえ侍



り。

名にたてるその世のまゝか尋はや大江の松のしる人も哉  
ながらのわたりすぎぬる程。心地わびしくて  
たづねもみず。過てのちなむかし。そこと申せ  
しかば。

橋柱ふりぬる跡もとふへきを過しなからにそれと見さりき  
暮かゝるほど芥川の善住寺といふ所の塔頭に  
つきて。明る日出たちしに。雨ふりていとわび  
し。水無瀬にまかり御影堂に参りて。しばらく  
念誦して。それより都へをもむきて。さるのを  
はりばかりにこの蓬屋にかへりつきぬ。

## 吉野詣記

稱名院右府公條公

いにし年の秋。はからずとしごろふしなれた  
るとこはなれて。いくべき心ちもなくて。あは  
れ修行にも出たちなばやとおもひつゝとかく  
まざれしに。紹巴とてつくばの道に心ざしふ  
かくて。このごろみやこのすまゐし侍りて。よ  
るひるきとぶらひけり。しかも敷嶋のやまと  
の國まで。みちたどくしからず。芳野のはな  
みるべきよいざなひけり。さらばとて人々  
にいひふるゝこともなくて。むげにかほしら  
ぬ人宗見といふ人ひとりをめしつれ。ことし  
天文廿二年二月廿三日のあした。ひそかに都  
を出侍るとておもひつゞけゝる。

名残おもふ妹背にあへる道やあると吉野の奥を尋てそとふ  
鳥羽よりみつのみまきにまかりけるに。近き  
としぐ水のうれへにたへかね。堤塘をきづ  
くとて。はるぐとしわたしたる。けふもいと

なみけり。この所ぞ領しけるところたるに。あはれことしは秋もゆたかにて。おもふまゝに水の害をもさりぬべしと。夏禹の神助を心にあふぎて。

はひこりし水の堤にしゐてかのうかりし年の秋も忘む岩田の小野などいふところをすぎて。天神の森にいたる。薪などいふ所みやり。杜の陰なる里にて。駒に水かひ。をのくうちやすみて。泉川のあたりうち過。柞のもりにいたりて。

春にたに柞のもりはよそよりも分て霞もうすき色哉

なら坂こえて。般若寺の文殊堂にたちよりしに。ほどなく日くれ。たびのやどりに夜をあかしけり。

天文十三

廿四日。春日の社にひそかにまうでけり。さまをかねてのちは。けふなむはじめなりけり。

なれくし袖は霞にそのかみをあらす隔る神かきのうち

紹巴

立かへりそのかみならぬ袖の色もまたさらめやは春の藤浪

### 賽後默禱道中風雨難一

雨後餘寒春色微

白櫻未發野梅飛

天共一笠山三笠

爲我龍神莫濕衣

これより高圓のかたはら。羽買の山の下に客養寺とて心ざしふかき人住けり。さまぐの興をつくせることかぎりなし。けふは地藏菩薩の縁日なれば。弘法大師建立の寺十輪院にいたれり。石にきりつけられたる佛菩薩。歴々として殊勝の靈地なり。やがて興福寺諸堂結縁し。東大寺大佛殿をはじめ。八幡宮に参り。念佛堂の舍利頂戴し。二月堂にまいりたるに。雨すこしふりて。笠などとりよせて。知足院など見て。やどりにかへりにけり。

廿五日。けふはことさらの日にあたれり。聖席御法樂としぐ内裏に参りしも。けふは御いとまたまはりてさぶらはざりければ。

梅にまつ匂ひをこせよ八重さくら

紹巴

霞にふかき庭のはるかせ

かくて一二句づゝ申あひ。道中にて百韻をはりける。これよりさ保姫のやしろに参りしに。空ことの外にさえかへりて。風ふきあれたり。

紹巴

行袖に川かせさむしさは姫のかすみの衣我にかさなむとよめりける返事に。

さは姫はよしかさすとも雲霞絶まの日影衣にはきん眉間寺に参りしに糸櫻さかりなり。

紹巴

ぬきとめぬ露のにはひも春風の花は櫻の糸に亂れてとありしかば。

いとよるなをくりかへし花櫻うちちる露もぬきて留めん遙にのぼりてみるに。

あさみとり遠山眉のひまゝに霞をわくる春風を吹

不退寺にいたりて。業平自筆の影あり。おぼろげにはひらかざるよし申せしを。宗二とて。かのあたりのしる人にて。よくいひより拜見せ

しに。容顔の美麗端正なる。うつゝの人にもむかふがごとし。

春やむかし我身ひとつはとにかりにいひしやけふもむかふ佛これより法華寺。海龍王寺。超勝寺。西大寺にまいりて。かの僧正遍昭のいとよりかけてとよめる柳むらゝみえたり。永き日は暮やらで。菅原の伏見にいたれり。菅丞相降誕の跡とてちいさき梅の木などありて。みしめひきわしたる跡あり。招提寺。薬師寺。大安寺。元興寺など結縁し。また宿所にかへりにけり。やつれたるすがたもはゞかり忍びたりしに。大乘院よりうちゝ聞つけてをとづれたる人ありければ。ひそかに夜にまぎれてあひたてまつりてかへりぬ。このやどりたるいへあるじのよしある人にて。二階をあたらしくつくり。すだれあをやかにかけわたし。むかひてみれば伊駒山手にとるばかりむかへり。かのかべに

書つけける。

春さむみすたれをしはる梓弓いこまは雪の花も有けり

紹巴

玉すたれあくるいこまの山のはを宿にふしみの春のよの月  
廿六日は在原寺。柿本寺。人丸塚と號。木像の人丸お  
はしけり。

けふそみることは筆にかきのもともとより朽す残る姿を  
道すこし行て。ある女わらべにとひければ。む  
かしのつゝ井つゝゐつゝにかけしとよみし井  
のもとなどをしへける。かたのごとくのこれ  
り。磯上ふる野の田づらを行て。布留の社をお  
がみて。

咲花にけふこそわくれ七十に六十ちかきもあはれふるの中道  
とありしかば。

紹巴

分なれしこけなからもまとふ哉跡はふるのの花の中道

内山にてしばらく足をやすめ。長岳寺。釜口と號

明王。にをもむき二夜をあかしけり。この寺の護イサ

<sup>4</sup>柳本とてやさしくなさけふかし。凡浮屠は桑

下の三宿をだにいましめられしに。此柳本こ  
そ千夜をも明すべきやどりとはおぼえ侍れ。  
夜のしらなみをとせず。二六時中愛染明王の  
不退の供養護持のちからもたのもし。

里人のとかなくても修むらん蒲のくちぬるなきへ聞えて  
廿七日。本堂にまいりて。

愛染堂前花繞松

方池龜出水溶々

忽除業障洗煩惱

十二時中不退鐘

又寺にかへりて。夜に入て。柳本範堯といふさ  
かづきさしいであそびけり。

廿八日。柳本太神にまいりて。あなし川を渡  
り。檜原大御輪寺にまいりたりしに。寺のさま  
うるはしく。よのつねのつくりざまにあらず。  
くさびなどいふものもちゐすつくれるさま  
ものがたりせり。かたはらにみわ明神の王子  
の入定のところあり。王子寶殿にとちいらせ



給ひしときの兩足の跡顯然として有。錦にて覆あり。ひらきて見るにそのあといさゝかふみちがへたり。顯當を表し給ひしよし神祕などかたり。殊勝「マニ」のことどもなり。是より三輪にまうでけるに。神前のさまことさら神さびたるに。苦むしろ草むしろ敷て。かの範堯さかづきさし出。このところはしづかとして。名あるものなるよし申て。寒食のあめ。端午の粽とりぐしたるものさしいでて。酒しゐずして。おもひつゞけるよし申けり。

年ふとも又や待みん三輪の山はなの都の袖のにはひなとりあへず。

うちとくる心もあやしみわの山尋る我をしる人にしてふかくたれとなくて過ぬるを。みあらはしけるにやとて。

### 紹巴

花の香はとかむばかりもみわの山しかまくるゝ人の袂を

是より範堯はかへりにけり。さののわたり過る程。風いたく吹て。あまかせてやなど申けれど。空は一點の雲もなし。

俄かにもふりこむ雨の雲もなし駒うちわたすさのの夕かせかくてつば市より泊瀬にまいりぬ。所のさま源氏物語にかけるさながらにして。しばし花のかげにたちよれば。まことになみちにむかふこゝちせしかば。

漕よせよ花のしらなみあまを舟はつせの山の春のゆふ風

本尊の御前にまいり。おりしもうたうたへる女二人。法樂とおぼしくて歌うたへるあり。そのこと葉に。はなのみやこ人うたよませ給へやと云をうちきくより。まことに花のみやこ人はまぎれなけれど。歌よみなむことはむねつぶれて。いよく口をぞとぢける。しばらく念誦して本尊にむかひたてまつれり。寺はいまだ周備のすがたも見えず。造畢せしめば閉

帳あるべきを。まのあたりおがみ奉るも有がたくなむ。かくてやしほの岡二もとの杉より川をわたり。多武峯ある坊につきぬ。

廿九日。ふくろうのこゑ近くきこえけるは。いまだ夜もふかきにやと思ひつゝおき出ければ。はやあけゆく明ぼの色も。外には似ず物あざやかにして。かの東坡先生が草木かぞへつべしといひける山もかくやとみえて。空もなをさえかへりけり。

さえかへり猶春風はふくろうの聲もかすまぬ明ほの山あしたのほど社頭にまいりければ。莊嚴巍巍として感涙をさへがたし。

我身世をすてゝもあふくみれの寺たけきは老のなみた數々

松杉戢々晚霞間

鳥語鯨聲寺更閑

武是元來止戈事

談峯可譯此談山

坊にかへりあしたのいとなみなどして。ねつぎと云社に參り。往來の岡の觀音に參れり。三

十三所の中にてまことに人のゆきゝもしげくみえたり。橋寺にて太子の尊容おがみ奉れり。あまたのうちにすぐれさせおはしましけり。橋の木あり。その實さへのこりてかぐはし。山を佛頂山と號して石碑有。その文佛頂山の三字あざやかなり。今も常にこの山には花ふりぬるよし申けり。おりしも堂前の櫻さかりなり。花の下にてをのゝさけのみけり。

法の花空にふらせし天津かせさくらかうへはいま心せよ

ふる寺の名に立花やそのはさへ實さへ花には櫻さへさく

これよりあすか川をわたり。安部の文殊堂にまいりけり。岩やありておくものふかし。耳なしのの山かげうちすぎ。そが川うちわたりけるに。板橋はるかにみえたり。

うち渡しゆくゝとへはそか川のそかひにみえて霞む板橋

程なくいはれ野にいたりぬ。萩などあるよしきけど。今はみちもなきのべなり。おもひめぐ

らすに。蘇我と書ては。いはれとよめるにやとおぼえ侍りし。

しるへせむ眞菰や何れいはれのの謂れを問む古枝たになしかくてこよひは高田泊瀬の寺にとまりぬ。この寺の僧又山世とて心やさしき人あり。舊識のごとく心をはこび。こゝかしこ道しるべし。有がたき心ざしにて有ける。

卅日。この寺をたち出ぬるに。曲川まで。わかき人。をくりに馬などひかせてきたり。酒すゝめてたちわかれけり。きさらぎもけふのみに桃花こゝかしこ咲て。川のまがり。曲水の興をもよほすべき所のさまなるよし申て。

さかつきに千とせもめくれもゝの花川は曲りの水に浮へてくれてむろべといふところにつきぬ。イ元

三月一日。けふはをの／＼こゝにてあしをやすめけり。十五首の當座あり。此むろべのあるイ元じ。文道に心ざしふかくて。歌の道にも心かけ

たる人也。さやうの物がたりなどしてくれぬ。明ぬれば。これより吉野にをもむくべきよし申けり。廿五日の雨吟道中にてをはりぬ。よしのの花はいまださかりさかりならざるよし申せしかば。先高野山にまいるべきよし申て。道のことなど申つかはせる。あかつきかた逍遙院夢にみえ給へり。二日。とまりを出たちて。戸だて山。まつちたうげをこえ。櫻井の水を過て高野山にのぼりぬ。かぶろ坂。不動坂などきさしよりもさかしく。このあたりは乗物もかなはざれば。かろうじてのぼりつきぬ。ひそかにやどりにつきけり。ともなひし宗見といへるも。たびのよそひをろそかにして。あしもともたへがたきよし申てともなはざりけり。かの宗二又ならにての家あるじなどともなふべきよし申てきけり。

三日。けふは逍遙院忌日にあたれり。うれしく

てかゆこはいゐなどもとりあへず。朝霧をは  
らひて奥院にまいれり。節日のしるしにや。衆  
徒袖をつらね。みちもさりあへずぞ有ける。参  
りておがみたてまつるに。しろきいぬいがき  
のあたりにふしたり。利生のよし人々申けり。  
よろこびながら御前をたちて灯籠堂にまい  
り。大師の念珠五鈷など頂戴し。大塔諸堂結縁  
してやどりにかへれり。この十とせばかりに  
成ぬるにや。参詣せしこともおもひ出て。一度  
参詣高野山。無數罪障道中滅の記文も有がた  
きに。二度までの参詣宿縁あさからず。

横嶺縦峯不<sub>レ</sub>耐<sub>レ</sub>登

友人携<sub>レ</sub>手又支<sub>レ</sub>藤

再來尤喜桃花節

前度劉郎一箇僧

たちちねもまたたちちめのは、こ草罪失はむけふ爰にきて  
をの／＼旅のよそひして下山す。昨日も山中  
野火所々見えし。今日は又大きな木やけて。  
折かへりたる中よりほのはあがれり。右は山

左はふかき谷。あしもとにも火もえける木の  
下をとをれる。まことに避雨の陵をすぐる心  
地もかくとみえたり。くだりつゝみれば。麓な  
るかね川きのふはわたりしに。けふは橋うち  
わたりてきつきけり。水村山郭酒旗風の姿。杏  
艶桃嬌奪<sub>二</sub>晚霞<sub>一</sub>。空のうらゝかさもこゝちよげ  
なり。節日のさかづきよび出してをの／＼い  
はひけり。この行さき清水と云川は。よしの川  
のすゑなれば。いつしかこのころは花のおも  
かげもうかびていそぎわたり。日くれぬれば  
繪堂にとまり。後夜の念佛など聽聞してあか  
しけり。

四日。高天寺にいたりぬ。初陽毎朝來の梅の  
本。近きころの風におれたるよしを申て。一丈  
ばかりの數圍枯朽したるあり。かたはらに小  
枝あり。

くちてたに梅もたかまの花の色に八雲を聲にのこす鶯



櫻花あり。いまさかりなり。

きてみれば山のかひよりみし雲のうへに高天の花は咲けり  
これよりうへは乗物かなはざるよし申せしか  
ば。まことに山ぶしのすがたにて。かつらぎの  
みね金剛山へと心ざしけり。この山の名だか  
き。於三南海中一有<sub>二</sub>淨土<sub>一</sub>。常在說法。法喜菩  
薩。名三金剛山<sub>二</sub>の<sub>一</sub>名文も。この世の外の心ちし  
て。道すがらのけはしき。鳥のこゑもたえたる  
所に雪のこり。み山木<sub>しきみ</sub>など冬のさかりのすが  
たにてたてる。まことに鳥のかよひもなき故  
と人々申けり。晡時からうじてのぼりつき  
ぬ。ほたと云ものたきすすびたる爐火のもと  
によりて。みちすがらのさむさつくるふ程も  
なく。點心などいふものとりまかなへ備へた  
り。ながく道たえたる山のうへに。かゝるたく  
はへのとりあへざりしもふしぎにておもひつ  
ゞける。

衆峯絶頂金剛窟

行者高蹤路轉迷

今日初尊禪悅食

相盟法喜法身宴

かくて法喜菩薩役行者おがみ奉り。かつらぎ  
の神岩橋わたし給ひしところなどおがみて。

すゑとけの思ひはかけし岩橋もかくこそ有けれ葛城の神

紹巴

春の日もはやにしなるや葛城の花にとよらのかれ響くなり  
やがて下山すべきとて。麓までむかへ馬など  
よびてまたせけるに。みちをふみちがへ。木く  
だしの道とて。なをけはしきかたにくだりけ  
る程に。むかへの乗物からうじてくるゝ程に  
行あひて。またむろへぞかへりける。

五日。よしのにをもむきけり。これより宗見も  
ともなひけり。六田の淀橋のありけるか。中絶  
て修理せし折ふしにて。けふは船にてわたり  
ぬ。おほきなる樹をつくりこめたる旅店あり。  
あるじのいふやう。この木はいはれある木な

るよし申せしかば。六田の淀の柳にてはなき  
かと申かけければ。そのごとにてあるよし申。  
みれば又あまた柳ども。いまださむくて。めも  
はらざる木どもなり。こゝにて人々水あみな  
どしけり。

やといて、五のかひをふくからにこゝは六田のかすむ青柳  
行々てよしのに入ぬれば。關屋の花はちりて。  
所々のこりちりおつる花を。谷風の吹あげた  
る。世ばなれたるさまなり。こもりかつての兩  
社に參り。かねの鳥の目おどろかれたり。鳥形  
の額あり。字形わきまへがたし。人にとひけれ  
ば發心門とぞ申ける。入もて行まゝに。一里ば  
かりはいまをさかりなる花の木どもかずもし  
らず。おもひやりしにもきゝしにもこえたる  
壯觀とぞ覺えし。愛染寶塔までのぼりてみれ  
ば。此あたりはいまだ木ずゑどもさきあへざ  
りしかば。又さかりの木のもとにかへりて酒

すゝめ。酔のこゝちにいよ／＼花もいろをま  
したり。いかなる歌もよみぬべきよし兼てお  
もひしも。なか／＼ことざましたるやうにて。  
歌ごころもうせはてぬ。

心たゝ花にちりつゝよくみむとおもふに違ふみよしのの山  
とありしかば。

## 紹巴

咲はちりちればさくらの陰ふかき芳野は花のときは山哉  
あたりをみれば立願にて花の木どもうへてま  
いらせけるよし申せしに。百本の内と札つけ  
たる木。そのたけ二尺あまりなる木ども。いま  
みとせ四とせのうちに盛の花の木たるべきよ  
しおもひやりて。

咲散はけふみつくしつこゝろなを若きに残す花のみよしの  
やどにかへりて。

## 紹巴

もろこしのよしのかはなにおくもなし  
とありしかば。

おなしがさしのさくらいくもと

雨吟百韻をはりぬ。かくて一夜をあかしけり。  
六日。芳野を出ける。六田川けふ橋をわたしければ。むまなどむかへにきたりて。たやすくわたりて。又高田。泊瀬寺。極樂寺につきぬ。

七日。けふはしづかにうちやすみて甘首當座よみけり。

八日。たいま寺にまいり開帳し。瑠璃だむなどめぐりなどしてをがみたてまつる。淨土九品のさまものあざやかなり。

さは姫のをれる衣は八重櫻（花イ）のしなには手やのこしけむ染殿へまいるみちにあだの大野あり。むまにむちうちて行けるに。萩など生ぬべきさまにもなし。兔葵燕麥春風に動揺すべきさまなり。

あたなれやあたのおほのをけふみれば夢はむ鳥（馬イ）の跡計にて染殿に参りてみ侍るに。本尊も大佛なり。雪霜雨露にをかされ。糸をそめ給へる池とても水

もみえず。糸をかけほし給ひさくらとてくちてのこれり。はなみなちりはてたるもとにて。酒などもたせて。しばらくありて片岡清水明王院にいたりて夜をあかしけり。

九日。朝に出たちぬるに。明王院のあるじ。あしたの原まで壺をたづさへてきたれり。むかひのみねなどいふみねうちかすみて。まことに名あるところのさまなり。人々歌あり。

かすみけりあしたの原は明ほの春をむかひの峯に残して

紹巴

おき出るあしたの原の名残あれや春の一夜をふせる旅人  
今朝しも餘寒けしからざるに。あたゝめざけにあらざるさかづきをひかへて。

紹巴

春乍ら身にしみけりなのみこもあしたのはらは冷酒にしてあしたの出たち。常よりもとりつくろひたるに。朝のはらとよめるはいかゞとて。かの人に

かはりて申かけけり。

しなてるや片岡程の飯をくひてあしたの原といかていふ覽をのゝ願をときてたちわかれぬ。これより達摩寺にまいりぬ。達摩太子の像ならびおはしけるかたはらに二の大石あり。一はふしたる石にて達摩の姿をのこし。一はたちたる石太子の御かたちと申ける。是よりむかひに一のいしあり。春日大明神の影向石といへり。さて法隆寺にと心ざしけり。南無佛の御舍利出給ふ時刻さだまれり。をそくもやとてこまうちはやめ参りけるに。舍利講式上段よませたる時分にて聽聞隨喜せしに。ことのをはりに舍利出おはしましけり。この寺の脇坊とて。年老ことおかしき人内陣へ参るべきよし申せしかば。参りて靈寶どもおがみ奉る。さまぐものもの有中にも。梵網經。御身の皮を外題の紙に用之。御血にて銘をあそばしたる御經。たぐ

ひなくおぼえ侍り。かくて龍田に行てとまりぬ。日ぐれがたに立出て社頭にまいり。このあたりの名所どもをしへられけり。ならしの岡。神なび。龍田川。いはせ。小倉山など見たしけり。此處のあるじなる人廿あまりなる出きてものがたりしたり。おやある人なり。父は慈あり子は孝ありて。今の世にはたぐひすくなきよしきこえけり。歌のみにち心ざしあるよしきこえしかば。二首の題をいだして人々よめり。

### 落花隨風

### 名所春曙

枝にまたかへらぬ花を吹かへし風さへさすか惜むとをみる

なこりあれや明ほの霞む立田山夜半にも越て見るへき者をあかつきにいたりて。木綿付どりのころぐ聞え。ところのさま身にしみけり。

十日。信貴山にまいるべきとていでたちぬ。か



のあるじの父なる人。さきだちて龍田山にて松のえだをひきたはめて茶甕をつくり。やがて松の古葉松かさなどいふあたりにおちたる薪にひろひたき。茶具など興あるものども。酒肴さま／＼もたせてまぢゐたり。あまた／＼びさかづきめぐり。茶などすゝめてたちぬ。信貴山にいたりて福生院といふともなひきけり。毘沙門につきてそのなもたよりありとて本堂にあがりぬ。かけつくり三方のこる所なくみえて勝境たぐひなし。是より河内國八尾木の金剛蓮華寺といふ寺をさして行つきにけり。十一日。けふは住吉へとぞおもひたちける。こなる人のいふやう。この八尾といふ所は鶯の名處なり。よのつねのは尾十二枚かさなれり。この所のは尾を八かさね。すぐれたるよし申けり。

契りをきてこゝにそきかむ鶯の八尾のつはき八千とせの聲

とかきをきて。これより神廟むくの木のある寺にまいりて。かの木のもとをおがみ。本堂へまいり太子の御影開帳はなきよしかたりしかど案内しれる人。ひそかに申てひらきけり。へたてをくとはり掲げて椋の木のみくつけき迄むかふ面影

紹巴

古へのあともこふかきながとてもこまひきむくる春の若草かくてすみよしにまうでけり。日よく晴て參詣の人々袖をつらね。松原こゝかしこ。酒もり歌うたひこゝちよげなり。爰のさまをみれば。しほはる／＼とひて。男女貝ひろふとて出たり。あかすながめ入て。

なかぬすなとはかりいひしあま人をうらみて歸る住吉の浪袖の色にふかく染けり住の江のきしかたのみはみな忘草

紹巴

よりくるも誰かは聞む住のえやふかき霞にしつむ夕なみ浦のけしきたちうきを。かへる波にひかれて天王寺にをもむき。しるたよりもなくばいか

がとおぼえしに。たゞいまの別當なる大覺寺の御うちなる野路井といふ人に行あひてければ。藥師寺といふ所にやどしてさまぐのもてなしあり。まことに太子の出むかひ給るかとぞ覺えし。かつは別當の御こゝろざしに行ゑとぞおぼえ侍る。やがてところぐおがみてかへりぬ。龜井の水のもとにて神佛亡者などに水まいらせなどして。

あしき道六をかくせる龜のみつ五のにこりこゝにすまむ曉難波寺の鐘とて心もすますべきを。ひごろのつかれにやきかざりしを。紹巴おどろかしけり。いぎたなき慚愧のおもひをなせり。

かへるへき道しるへしてかり枕夢殿ちかきかれのこゝく十二日。けふは水無瀬までまかるべき程とをしとていそぎけるに。この寺の舍利毎日巳の刻に出させ給へども。かの別當の御使たる人ことはり申て朝の程に出し奉る。頂戴隨喜か

ぎりなし。寺僧ものがたりしていふやう。この舍利は七佛の毘婆尸佛の双眼なり。普廣院義教の御時都へのぼられしかば。その間龜井の水とまりて御かへりのほどよりもとのごとく出けること。また本尊近きみだれにくだけ給ひしを續たてまつるに御あしいさゝかふみちがへてつきしを。一夜のまにゐなをらせ給ふこと。近き世にもかやうのふしぎあるよしかりけり。秋野といふ人道までをくりにとて樓の岸わたなべの大江まで酒もたせきたりける。川のはとりにて數盃をかたぶけ。こゝをたちて夕つかた山ざきみなせにつきにけり。いまだ日もこのれり。和漢一折すべきとありしかば。

雲やいつれ山さきかくる花さくら

迎客燕談春

水無瀬二位

あめの日や夕の空もをそからむ

十三日。早朝に御影堂にまいれり。男山八幡に

まいり。かへるさ釋迦のおはします堂にてイにまかれり。ある人酒すゝめてかへりぬ。このほどのたびのつかれゆへ。こゝちあしくてけふはふしくらしけり。

十四日。みなせより久我までかへりにけり。はづかしのもりのほとりにて。こしをたてたるころにて。そのあたりの名所も大かたこゝをかぎりなりとて。

紹巴

旅衣たちかくればややつれこし身をはつかしの杜の木影にかへし。

假初とおもふ日數もつもりつゝ早はつかしの影にきてけりみやこ出しひかず廿日になりにけり。かくて東寺の南大門まで都よりむかへに人々きたり。これよりのりものをかへし。うちつれ歸りにけり。道すがら障礙なくかへりしことなど申て。野宮の寺より立いでしかば。こゝにかへ

りつきて。いつしかなごりおしげにてみなわかれにけり。やがて立かへりても。ひとりずみの床もあれて。みちすがらのものがたりすべきたよりもなければ。

語るへきことは數々なみたのみ古きのきはのつまなしの花ぞかひなきや。

老の坂のほりくたるもこのたひをかきりと思ふに深き山道  
今生の宿望來世の結縁。満足するものなり。

天文廿二年三月十四日

## 九州道の記

玄旨法印

ことし天正十五三月の初。博陸殿下九州大友  
嶋津わたくしの銚楯をとどめらるべきために  
御進發の事あり。息與一郎同玄番允參陣の上。  
家をのがれ入道せし身なれば。供奉の事にて  
もなかりしを。はるかなる御陣の程を。いたづ  
らに在國も空おそろしき心地して。四月十九  
日に舟をば熊野郡まで廻して。廿一日田邊を  
出て。其日は宮津にとどまり。廿二日松井の城  
松倉に着て。明なば出立べきたびよそひせし  
に雨降出て終日晴まなかりしかば。松井子禪  
門と云出て抑留し。盃たびく出して慰みく  
らし。其夜はとどまりて。廿四日いとよく晴て  
風も追手になるといへば。出立とて。足占山ち  
かければ。

かならずの旅の行ふはよしあしもとはてふみみる足占の山  
軍書に欲レ必則莫レ令<sub>三</sub>ト問<sub>二</sub>軍吉凶<sub>一</sub>とあれば

思ひよれり。かやうにして湊と云所より辰時  
ばかりに出船して。其日の暮ほどに但馬因幡  
のさかひ居ぐみといふ所に舟どまりしける。  
旅宿いと所せくて。上なか下らうがはしきか  
り枕し侍りて。

主従は旅にしあれば里のなの居ぐみにしたるかりの宿哉

廿六日。伯耆國みくりやより船を出して出雲  
國仁保の關に上り。見物し侍りて。それより磯  
づたひを行に。にしきの浦といへば暫船をと  
どめて。

船よするにしきの浦の夕波のたむやかへる名残なるらん  
かやうに口ずさびて。其わたりちかきかゝと  
云所漁人のいへにとどまりぬ。

哀にも未だ乳をのむ蟹の子のかゝのあたりやはなれさる蟹  
廿七日。雨風あらし故に。かゝより船出成難か  
るべきよしを船人申侍れば。さらばいたづら  
にくらさんも物うしとて。船をば浪間をまち



まはし侍べきよし申て。杵築宮見物のため。かちにてたどり行。道のほど三里ばかりへて。木ふかくて。山のたゞすまゐたゞならぬ社有をみめぐりて。神人<sup>サト</sup>と覺えたるに尋侍りしに。これなむ佐陀の大社なり。神跡いざなぎいざなみのみこととをしへけるに。しかゞ物語し侍るに。日もたけ雨もいたくふれば。衣あぶらむほどのやどりもとめてとゞまりぬ。

千早振神のやしるや天地とわかち初つる國の御柱

廿八日。佐陀を出て秋鹿といふ所にて湖水の小船に乗て平田まで行に。生浦なりと船人のいふをきゝて。

磯枕うらみやおふのうら千鳥見はてぬ夢のさむるなこりにかやうにして。暮かゝるほどにきづきのやしろに至て。寶前をはじめ末社等。こなたかなた見めぐりて尋るに。當社兩神官千家北嶋。何れも國造となんいひける。其家々見物して。其後

旅宿をかりいでて。椎葉ばかりにもりたる飯などくひてやすみ居たる處に。若州の葛西といふ者たづね來りて對面しける。太鼓うつ人にてわかき衆おほく同道有て。一番きくべきよしあれば。さらばとて催しけるに。兩國造より所につきたる肴樽など使にて送られける程に。笛鼓の役者共きこみて夜更まで亂舞有けり。思ひがけぬ事なりき。

廿九日。朝なぎの程にまはしつるもの共順りきて。いそぎ舟にのれ。日もたけにけりといへば。こゝろあはたゞしくて。

この神の初てよめることの葉をかそふるうたや手向なる覽逮<sup>三</sup>于素盞鳥尊到<sup>二</sup>出雲國。初有<sup>三</sup>三十一字詠とあれば。やう／＼字のかずをあはするばかりを手向にしたりといふ心ざし計になむ。此短冊を千家方へつかはしけるに。兩司なれば。一方へはいかゞとあるじのいひけるに。俄な

れば同歌を書いてやりける。又當社本願より發句所望なれば。

卯のはなや神のいかきのゆふかつら

かやうに書やりけるに。千家がたより今の發句は北嶋にて連歌たるべし。吾方にては百韻

興行すべしとて。船に乗所に追付て發句所望なり。いそがはしきになりがたきよしたびたび申せしかども。所のならひにやわりなく申されける程に。人の心をやぶらじとて思めぐらすに。おりふしほとゝぎすのなのりければ。

ほとゝぎす聲の行ふやうらのなみ

廿九日。石見の大うらと云所にとまりて。明るあした。仁間といふ津まで行に。石見のうみあらきといふ古事にもたがはず。白波かゝる磯山のいはほそばだちたるあたりをこぎ行とて。

これやこのうき世をめくる舟の道石見の海のあらき浪風

それよりやがて銀山へこえてみるに。やまぶきと云城在所の上に有をみて。

城の名もことはりなれやまふよりもほる白銀を山吹にしてやどりける慈恩寺發句所望。庭前に楓の有をみて。

深山木の中に夏をやわかかへて

温泉の津まで出て。寶塔院にやどりけるに。先年連歌の一巻見せられし事などかたみに百韻をつらね侍りぬ。

浪の露にさゝしましける磯邊かな

五日。出船するに跡にても一おり張行すべきよしにて發句所望なれば。當座に。

うき草のねにひかれ行あやめ哉

七日。濱田を出て行に高角といふ所なりと云を舟より見やりて。石見かたかつの松の木間よりうき世の月をみはてぬるかなと人丸の詠せしことおもひ出て。

移り行世々をへぬれと朽もせぬ名こそ高つの松のことは  
とかくして長門國にいたり。磯の上嶋とをみ  
わたして行に。かり嶋と云所有と聞。誰も世の  
無常なる事を思ひ出て。

皆人の命なかととのめとも世ばかり嶋の浪のうたかた  
おなじき國浦小畑と云湊に唐船の着て有よし  
を船人のうちにかたりければ。さらば見物せ  
むとて遙に舟をよせしはしとぞめて。

我もまた浦つたひして漕とめぬもろこし船のよりし湊に  
あこのうら波のたかくきこえければ。

小つゝみのとうにしちへやはす覽うつ音高しあこの浦浪  
十日。瀬戸崎といふ所を出船せしに。風あらく  
て高波は船をもこし侍るばかりなり。召具し  
たるもの共。あひごこちたゞならで。色をうし  
なへる躰なれば。さらば漕かへすべきよしを  
云て。山かけて舟の入ほど廿町ばかりには過  
ず。されども千里をも行こゝちなんしける。か

らうじてやどりける在所に歸けるに。なをか  
せあらくなりて草木をも吹しぼりて。うみの  
おもてはふすまをはりたるやうなり。何人の  
乗たるはしらねども。先へ出たる舟は波に沈  
みたるなどいへば。命ひとつをひろひたるこ  
ちにして。そのよはねてのあさけも。昨日の名  
残にやなを雨風やます。波の音たかしほにき  
ほひて見ゆれば。船の出べきやうもなしなど  
船人わびあへり。さらばかちにて關の渡まで  
行べきよいひ合て。馬などかり出して。十一  
日せとざきを出て。大寧寺大内義隆のはてら  
れし所と聞し程に。立寄て一見し。それより深  
山をわけこえて。同國妙榮寺といふにとまり  
ぬ。住持の和尚出られて。終夜佛法の物語など  
有てつとめてのあした出て行とて。

かたちなき夢てふものを心とも法の筵にふしてこそしれ  
心法無形通貫十方とやらんいへば。おもひよ

れりき。きこえがたくや。

豊浦宮を行過るとて。

水もらの池の心のかきなもとよらの宮のつゝみにそしる  
たらひと云在所にてかれいひくひ侍らんと  
て。かりのやどりにあがるとて。下々あしをあ  
らふに。まめのいできていたきなどいふをき  
き侍りて。

さし入てあらへる足の豆おほみ馬たらひとや人のみ<sup>いふ</sup>らん  
關の渡に着て阿彌陀寺に參り侍るに。其かた  
はらに寺有。所の人は内裏となん云つたへ侍  
る。寺僧に案内して安徳天皇御影。其外平家一  
門の像ども見侍ける。彼僧昔今の短冊などみ  
せられしに。知たる人の歌どもありしほどに。

もしほ草かく袂をもぬらす哉硯の海の波のなこりに

豊前國門司の關にて。

古郷にこつてやらん一ふてもかきや絶なんもしのせき守  
兵糧船おほくつどひて有を見て。くらなしの

濱當國なれば。

米舟は國々よりもつきにけりあけてもつまむくらなしの濱  
豊前の柳浦の名主とて發句所望せしに。

豊國の山くちしるき早苗かな

同月廿三日。赤間關を出て行けるに。雨の名残  
にや。波風のあらき故に小倉にとまりて。明る  
夜をこめて舟よそひして。筑州箱崎をさして  
行に。船人のこれなむ金が御崎といふ。むかし  
鐘を求めふねにのせてきたり。汀ちかく成て  
取おとして今に有と云。日和のよきときは龍  
頭などみゆるよしをかたる。勅撰名寄には金  
と云字を書たりと覺えけるが。鐘にて有べき  
などと友だちなどに語りける次に。万葉に我  
はわすれすしかのすへ神と哉覽讀たる事など  
思ひいでて。

暮渡るかれの御崎を行舟に我は忘れず古郷の夢  
かやうに云たはぶれこぎ行ほどに。夕浪あら



くなりて。やう／＼志賀の嶋に着て。金剛山の

宮司の坊にやどりて。當社大明神の由來など尋けるに。春日鹿嶋當社おなじ御ちかひの神

なりと物語有。縁起イ本ミカサ山ノ歌コニ入是などとり出してみせらる

る次に。波あらしき鹽干の松のかつらかた嶋よりつ／＼くうみの中道。これ當社の御歌のよし

社僧のかたられける。又香椎の神詠には山よりつ／＼と一句かはりたるなどと有。立出見

侍りけるに。砂の遠さ三里ばかりも海の中をわけて嶋につゞき侍り。とりわきてほそき所

は十町ばかり。ひろさは十四五間ばかりも有と見えたり。文殊などもおはしませば。橋立の

事など思ひくらべられき。當社は安曇磯良丸と云て。神功皇后異國退治の時。龍宮より出

て。兵船の楫とりして海上のしるべせし神なり。しば／＼うちながめて。

みかさ山ミカサさしてやかよふしかのしま神の恵みの隔なければ

名にしおふ龍の宮この跡とめて波をわけ行うみの中道

此兩首をかきて奉納して。廿五日朝なぎの程

に箱崎にわたりて見るに。松原はる／＼つゞ

きて。八幡宮は北面にむかひて立たり。戒定恵

の三學の箱をむかしうづまれたる所に。しる

しの松とて古木あり。たちよりて。

そのかみに納めなまつる箱崎の松こそ千代のしるし也けれ

日たかく侍ければ。博多見にまかりけるに。爰

を袖の湊と里人のをしへければ。

いささらはともにくらさむ旅衣袖の湊の涙のまくらに

日も暮ぬいさ船よせてれもしなんひしきものには袖の湊を

廿六日。宰府は天神の住給ひし所と聞及しま

ま。見物のためまかりける。彼宮寺は七とせば

かりさきに炎上してかたばかりなるかり殿あ

り。舊跡の有様。松杉のおほくきられたるに。

さすがに所々にのこり。うしろは青山をびえ

て。右の方七八町ばかりも有らむとみえて觀

音寺あり。寔に西郡とも云べき所なり。飛梅も古木は焼てきりけるに。若ばえの生出て有を見て。

鶯のはれをやとひて飛梅のかこにはいかてのらて來にけん夫より染川を里人にたづねて見に行侍るに。思ひしにはかはりたる小河のあさきながれなり。うちわたりて。

老の波むかしにかへれ染川や色になるてふ心ばかりも

思ひ川にて。

暮る夜のほたるやしるへおもひ川

こゝかしこみめぐりて歸りける道に。かるかやの關の跡有とてをしへけるに。今度の陣衆名のらせてかへさるゝ事有よしをつたへ聞て。

名のらせてやうく通す陣かへり兵糧米やかるかやのせき此次にかまど山はいづくぞと案内者にたづねしに。かへるさの右にたかき山有。是なんそ

れといふ。昔は竈門山寶重寺とて山伏の住ける所に有けるを。ちかきとし比より高橋と云者城郭にこしらへて有けるが。去年嶋津出て。あたりちかき岩屋の城せめ落せし時分あけにけるが。此比山伏の歸住と申せしに。五月雨の名殘雲のかゝりて見えければ。

立つゝ雲を千里の烟にてにきはふ民のかまと山かな可也山にて。

蔑り行かやの山へに入しかは秋より露にぬれてふすらん姪濱より人の安吉の脇指をこせて。目利し。銘なども能侍ならば。主に成べきとて文あり。その返事に。

わきさしの代をしとへは安吉のなかこたゝしきめの濱哉廿八日。姪濱と云所にいたり。それより生松原見にまかりて。

涼しさな風の便にこととはむ今いくかはらはいきの松はら姪濱にて有人宗養執筆せられし連歌の懷紙を

みせて奥書所望せしに。

是も又なかれて末の水くきの跡のかたみと書そくはふる

六月三日。姪濱興徳寺住持耳峯玄熊和尚和漢興行有べきとて發句所望有しに。公儀此所まで御成の沙汰有ば。張行はなりがたかるべしとて。發句を書つかはして入韻所望せしに。

風かほる南をまつのとほそかな

社同六月梅

同八日。利休居士へ關白殿渡御ありて。しばし御物語ありて後。一折と催されて。發句つかうまつるべきよしあれば。宮崎八幡の心を。

神代にもこえつゝすゝし松のかせ

雲まにとなき夏のよの月

松

ほのかにも明行空の雨はれて

日野新大納言

箱崎の八幡のうち關白殿おまし所になりて各參上せしに。しるしのまつによせて祝言のころを各によませられけるに。

つるきをはこゝにおさめよ箱崎の松の千とせも君か代の友

關白殿箱崎の松原にてすゞまるべきよし有て各召具せられ。しばし御遊興の事有。おほみきまいり謠ども有て。御當座ありしに。

立出る袖の湊の夕すゝみかたしく程の浦風ぞ吹

暮はててかへらせ給ふおりに松原に名殘思ふ歌人々つかうまつるべきよしあれば。

松原にとまりからすの聲をさへ羨まれぬるかへるさの道

六月十日あまりのほどに。香椎の浦見にまかりて。

うなはらや鹽路はるかに吹かせの香椎の渡り浪たつらしも歸るさには。船をば遙なるひがたのささへまはしてたゝら濱にかちにて行て。

古へはこゝにゐし跡とめて今もふみふみたる濱かな對馬の守護宗對州より此歌一首をくられて歌發句所望あり。すではや出船のよし使のいへば。當座に書つけてやりける。

敷嶋の道すなほなる御代に逢て恵み久しき箱崎の松

卒因和歌韻。

始識逢君情所鍾

向來相約對間窓

帝都門外莫言遠

千里同風一樹松

しら波のうつかた山のしほかに涼しさそふる夕たちの雨

發句

となしまに立くはゝるや雲のみれ

六月廿五日。一折張行すべしとて。溝口大炊允所望に。

浪の音も秋かせちかし西の海

天さかる鄙の住ぬと思ふなよとつこもおなし浮世ならすやと千宗易よりいひをこせける返事に。

天さかる鄙には猶そゐたむなきとつこもおなし浮世なれ共

廿七日。關白殿花瓶あまたとり出されて。草花をいけられたる御座鋪にて俄に一折催されて發句つかうまつるべきよしあれば。

夏草にはなのかならすたもとかな

すいしき夜半のさころもの月

しら露の簾のひまを傳ひきて

松

由己

七月四日。關白殿せきの渡より御歸陣なり。船にて參陣せしほどに馬などもなし。船にて南の海をみめぐりて上らむと定め侍るに。秋かせ日々にあらくなり出船ならで。六日まで逗留し侍りておもひつゞけ侍りける。

あきとふく風やせきの渡とまり舟

六日にもいまだ船の出がたき風なれば。周防山口見物のため。在所の荷をおふ馬かり出して。船來と云在所まで行て。七日に山口にいたりぬ。今夜は七夕のあふよなりと思ひ出て。曉がたの寢覺に。

七夕の別の袖にくらへみよ露なからかす旅のころも手

八日。所々寺社見めぐりて。同國こふの天神まで立出べき用意せしに。當所本國寺住持一會興行すべしとてしきりにとめられ侍れば。ちからなく其日は逗留して。九日に。

もる月もいましほの木間かな



十日。山口をいで國府天神へ着て。まりふの浦  
ちかき田<sup>ミイ</sup>じみまで船のまはるを待てやすみ居  
たるに。當社の供僧圓樂坊。發句所望有て。一  
面なりともつらぬべしとて興行あり。入あひ  
の時分より初りて。夜半過ほどに百韻まんじ  
ける。其とき船着たる由注進あり。天神の御は  
からひとて。衆徒<sup>僧イ</sup>よろこばれける。

色わけよまつこそ風のたむけ草

田<sup>イ</sup>じみの湊にてまりふのうらをみるに。網の  
おほくかけほしてあれば。

眞砂地に網はり渡しもてあそぶまりふの浦の風もたえつゝ  
十一日曉。田<sup>ミイ</sup>じみを出て其日は上の關と云所  
に船をかけて。明行空をもまたで。鹽にひかれ  
て船出をもよほし行に。岩くに山といへば。み  
やりて。

あらしその道なりとても歸るさは岩くに山も踏ならしてん  
それより。嚴嶋ちかくなりて。社頭を見るに。

鳥居は海の面二町ばかりとおぼしくて立た  
り。廻廊も柱はみな鹽につかりて有。船よりみ  
て。

遠嶋の下津岩れの宮はしら波の上より立かとてみる

此歌を書いて當社宮司棚守左近將監がたへつか  
はしける。とかく有て月に成侍れば。立出て更  
るまでみるに。鹽干鹽満目の前にかはりて。汀  
二三町ばかりも遠近になりぬ。みつしほはた  
た大海の泉かなと宗祇賢作なり。理なる哉。又  
大聖院良政發句所望有て十三日一會あり。當  
社にかゞみの池と云あれば。

影うつす月やかゝみのいけの水

十四日にも棚守連歌興行すべきよしあれど  
も。玉まつる日にあたれり。心づきなきやうに  
や有べきとて辭退しけるに。さらば發句ばか  
りをと所望なり。思ひがけぬにほとゝぎすの  
鳴ければ。

秋やまたは山しけやまほとゝきす

イ元

かやうに申つかはしけるに。さらば晩にある  
じすべきよしあれば行けるに。色々の肴もと  
めて盃いだされて。子息少輔三郎出座ありて  
亂舞あり。脇指を出して罷歸しなり。やどりけ  
る所は奥坊と云ける。こよひの玉祭の手向な  
どかまへをかれけるに。又時鳥の二こゑ三聲  
なけるを爰にはいつもかやうに有かと尋し  
に。めづらしき事なりと云。一首をよみてつか  
はしける。

しての山をくりやきつる郭公玉まつる夜の空に鳴なり

十五日。宮嶋神前にて延年と云事ありといへ  
ば。見物して夜半ばかりに船を出し。たゞのう  
みにとまり侍りて。それより備後の津公儀御  
座所に參上して。十八日あさ鞆までこし侍る  
に。竹田法印。かりそめの宿なれど亭など有て  
涼しきよしあれば立寄て。簞に終日有て。暮

がたに船を出すべきよしを云ば。發句所望な  
り。

名残ある月やともつなみなとふれ

それより終夜舟をいそぎて行に。明方のほど  
に備中國にありと云彌高山。たしかにはなけ  
れども。嶺つゞきのうちなりといへば。

曙やふもとをめくる雲きりにいや高山のすかたをそみる

十九日。備前のうちひらどと云所にとまり。そ  
れよりくれほどに宇嶋門に着て。船をかけて  
もやがて出すべきよしをいへば。あがりもせ  
で。かぢ枕の月をみるに。物うき旅ねなれば。

船にねて何を頼まむ月にさへなをうしまとの泊りなりせば  
其より月のよふねに乗て行に。虫明のせとと  
いへば。

秋風の身にしむ夜ははなく音をも聞はかりなる虫明のせと  
風あらく成て。たてのうらと云所に上り。人ざ  
ともなき所に旅ねし侍り。

夕波のたてのうちよりゆみはりの月も光をはなつとそみるとかくありて。波間に船を出して。播磨の室まで行道に。坂を越。しやくしと云在所あり。其近きあたりに鍋の嶋といふあれば。

鹽は唯よき程なれや鍋のしましやくしを中へ入てみつれば廿一日。明方をまちて舟を出し。家嶋をこぎめぐるとて。

いかばかり船よそひして漕よせむ我いへ島と思はましかはひめぢと云城をふねに見て過行ほどに。しかま川ちかきわたり。海の面にごりたる船人に尋けるに。水上に大雨ふり侍ればかやうに有と云。

水上にいくむら雨かしかま川濁は海に出てきにけりかやうにうちながめ。ひゞきのなだをこぎ過て。高砂の浦に船をかけて。其夜はとまり侍りぬ。

高砂の尾上のかれも松風もひゞきのなだの波にたゝへて

是より松帆のうら見物せむとて。廿二日の曉。夜舟こがせて行に。あかしの渡り。追かぜをかたほにかけて。はるぐとあはち嶋によりて。行船の追風きおふあしかた片帆に月をそむけてそみるさてまつほの浦ちかくなれば。船をよせてみるに。明がたの月浪にうかびて見えけるに。

侍リイ

あらしく松ほの浦の霧晴て浪よりしらむ有明の月又繪じまといふ磯を見るに。山のかさなりてしまのあれば。

いく重とも波ちはるかにたゝみなす山や誠のふしなる覽須磨の浦にて。

すまのうち里のうしろの山柴やあまのしはやく煙成らむ暮かゝほど波のあらくなるに。わだの御崎を漕めぐり。生田の森を船より見わたして。

こく舟の夕波あらく成に侍りさそな生田の杜の秋風

去四月丹後を出船して。九州をへ。歸陣のときは南の海をまはりて。七月廿三日と云に難波

に着ぬ。思ひやればかぎりなき日の本をもな  
かばばかりをめぐり來にけることとおどろき  
て。

なには江の道にひかれて遙なる豊あし原も廻りきにけり

## 九州のみの記

豊臣勝俊朝臣

大相國もろこしかたむけさせたまはむとて。  
天正のすゑつかた筑紫に御出有べきよし事さ  
だまりにければ。日の本の兵のこらず供奉す。  
みづからも。む月の中の五日頃に京をおもひ  
立なむとしはべりけるに。人のもとよりおも  
ぞ調じて給ふとて此二首をなむくはへられた  
りける。

玉鐙のみのちの山かせ寒からはかたみかてらにきなむと思  
あまたにはぬひかされゝと唐衣思ふ心はちへにそ有ける

彼おもむぞ。えならぬものがたりのこゝろを筆  
のかぎりうつくしくかきて。とる手もくゆる  
ばかりにはひたきしめられたり。かへし。

きみならて道の山風さむしとも誰かいとはむ旅の空まで  
心さし深きいろかのから衣かへすゝもかたみとやみむ  
かゝる情のありがたさよと。あるはなみだの  
ふるきわざまでおもひよせられ侍る。さて須



磨明石の月をながめつゝ。はりまの國にしる  
よもしてまかりて。廿日あまりとゞまりぬ。そ  
ゑにしたしかりける人のもとへ。おもしろか  
りけるさくらにさして。

いて、行あとなくさめよ櫻花われこそ族に思ひ立とも

かくよみをきて。日かずをへつゝゆくまゝに。  
備中のくにきびの中山につきぬ。つれづれさ  
のあまり。こゝかしこ見ありきはべりて。彼ほ  
そ谷川の邊にいたりて。

けふそみるほそ谷川のなとにのみ聞わたりにしきひの中山  
その水上にのぼりてみれば。ちいさき池のな  
かよりたえ／＼出る清水なりけり。かのしみ  
づみな月のころほひもたゆることなしとなむ  
いへり。その谷川のひろさ筆策といふもの  
ながさばかりなむ有ける。其夜は神主のいへ  
にとまりぬ。翌日は雨そぼふりければゆきも  
やらず。其所に宮づくりし給ふはすなはちき

びつ大明神と申奉る。火たき屋に釜ふたつを  
ならべすへをきたりける。其かまひとつ神供  
をとゝのふる毎におびたゞしくなりどよむよ  
しをきゝてのぞみはべりける。まことにいか  
づちなどのやうにしばしとゞろきてきこえけ  
り。これぞ此神祕となむいひつたへし。それよ  
り備後のともといふ浦ちかきわたりに十日あ  
まりとゞまりぬ。そのほかのうら見にまか  
りぬ。そこに一夜侍りて。明方の浦の景氣をみ  
やれば。近きわたりの嶋どうすがすみ。こぎ  
くるふねもよしあるさまなり。

忘れめや霞のひまの磯つたひ漕出る舟のともうら波  
さる歌よみたるよし主にかたりければ。感じ  
てこれをかきとめける。さてみしとものうら  
のむろの木はとこよにあれとよめるはいづ  
こぞとたづねはべりければ。むかしはこの浦  
に有つといひつたへたれど。今はあとかたも

はべらねばさだかにしる人もさぶらはず。されどあの磯にありしなどふるき人は申をきたりける。いざさせたまへをしへたてまつらんといふ程にまかりたれど。ことなるみどころもなく。たゞ波のよせくるのみにてぞ有ける。かく名ある木もあとかたなく。何事もむかしにかはりゆくこそもの毎に悲しくははべれ。

其かへさにしる人ありければ。かしまといふ所にたちよりけり。主さまぐくにもてはやし。いざ此あたりにしかるべきかゝりあり。鞠なむつかうまつれとしゐて申けるほどにさりがたくおぼえて。装束などとりよせ。日暮るまでまりけなどしてあそびける。其あたりなる男女どもみなあつまりきゐて見けり。田舎にはがゝることめづらかにやおぼえけむ。さて月山のはを澄のぼりてさやかなるに。故郷人もかくやながむらんとおもひいでて歸にけ

り。玉ばこのみちもはるかならねば。いくばくもあらぬに來つきぬれど。内に入べくもおぼえで。爰のまへなりける辻堂のこぼれかゝりたるいたじきのうへに夜ふくるまでたちて。月やあらぬはるやむかしとひとりごち居て侍りけり。あくればふるさとへ文つかはす。したしかりけるともたちのもとに。かくなむ。

思ひきや同じ此世にありなからまた返りこぬ分れせむとはおなじ國おのみちといふ所より船にのりて。おもしろき浦々にこゝろをなぐさめて。すこしふるさともわすれぬべきこゝちしてなむくだりけるに。春の物とて雨そゞぎしけるに。日もやう／＼暮なむとすれば。人住所にもあらぬわづかなる沖の小嶋に舟よせて一夜寝にけり。たぐひなくものこゝろぼそう。うきねのあられも身にしられて。まどろむとしもなくなみだのおりしりがほなるに。ときしもあれ。蓬

もる雪のたもとにくはゝりけるをみて。

夜もすから逢もりあかす春雨にうきれの袂なをしほるなり  
見もはてぬうきれの夢の行末をさそひてかへる波の音かな  
なみぢはるかに分過つゝ。いかゞ有けむ。此ほ  
どのつかれにや。眉のうへおもくなり。心むす  
ぼほれ。たゆたふ舟のうちもいぶせくうるさ  
かりければ。すこしこゝろやすめむと。童ひと  
りぐしあたりの嶋にあがりて。こなたかなた  
みありきけれど。稀にも人のゆきかよひける  
跡さへなかりけり。波のをとのみすごう聞え  
て。いとゞ袖のうへもしほれがちなるに。むか  
しいかなるものゝわざにか有けむ。五丈ばか  
りありける石の面に。哀なり雲路つらなる浪  
のうへにしらぬ舟路を風にまかせてといふ歌  
をぞかきつけける。また入もまどひきて。かゝ  
る所のあはれを身にしりけるよといとかなし  
うをしはかられぬ。其はまにおりゐて手ずさ

みながらちいさくうつくしき貝どものおほく  
あるをひろひもちて。やう／＼ちとの船にき  
けり。下の國安藝のいつくしまに詣で。一とせ  
筑紫にくだりしときやどりける坊の主をたづ  
ね侍りければ。をとゝし身まかりぬと弟子な  
りける法しのかたりける。今おもへば其頃七  
そぢばかりになむみえつる。うらむべきよは  
ひならねど。またかへりこぬ道はいと悲しう  
なむ。あひみてものがたりなどせし程は六と  
せにぞなりにける。なに事もはかなき夢との  
み成はてゝ。みなかへらぬむかしと成にけり。  
彼坊の泉水こゝろをつくし。草本などうへを  
きたり。

なき人の手つから植し草木ゆへ庭もまかきもむつまじき哉  
とよみければ。みな人袖をなむぬらしける。其  
庭の内にをのづからいと大きな石あり。こ  
けむし物ふりたるうへにいとおもしろき松ひ

とりたてり。つくりなさば此外のことはさもありなむ。是にはいかならむたくみの人もえをよぶまじかりける。程しあれば岩にもやとながめられし。それよりまた舟にのりてくだりけるに。あさがすみふかくたちこもりて。わが友舟もありやなしやとおぼつかなきまでたどるに。霞のうちより鴈の聲かと聞えて。から櫓のをとしたるもおかしきに。船人のこゑたかくひきながめて。何事とえもきゝわかぬうたうたひつゝ漕くるもめざむるこゝちす。霞やう／＼晴渡りて。詠やれば。遙なる沖にうかぶ船も。かもめ千鳥などのやうにちいさくみえて。よそめ計やといへるさることぞかし。その日暮にければ。ある浦に舟をよせて。今夜は月のいでしほに湊こぎいでむと艤ひしけるほどに。自は濱にあがりて。清き磯まにたぐずみければ。ほどちかく海士のいさりする火みえ

たり。さてはあのわたりや浦人の里ならんと尋まかりけるに。家もはかくしき柱は立て作らず。から櫓かぢなどいふ物をうちわたし。たゞひとへにまばらなる篷をひきかけ。岩のかどを耳にあて。身をも眞砂につけてぞふしにける。かれが身に生れたらましかばいかゞせむ。をのれは住家とおもへば。さまでうからぬにこそ。やう／＼月もすみのぼりて。渺々たる眞砂にひかりあひぬれば。玉をしきたらむやうにみえける。ある人海邊の月といふ事をよめと云。

をく網の中にしつめる月影をのくものとやあまの引らむとよみて。あまたたびの波まくら楫枕。しほれこし袂ほすまも覺えで。あくがれ行に。もじの關にもなりぬ。さのみ船のうち波の上もたへがたくて。あかまが關にあがりにけり。ある寺に先帝のみかたち并一門の公卿殿上人。局内



侍以下まで。はかなき筆のあとにのみうつしをきたり。世へだたりたる事とおもへど。其時のこゝろうさ。しづみ給しありさままで。かすかずに思ひ出られて。かなしくおぼえければ。所せく袖そぬれけるこの海のむかしなかけし波の名残にそれより陸路を駒の足にまかせていそぎける程に。豊前の國さくの高はまにとまり侍りしに海ちかき所なれば。おりふし波風はげしう。よもすがらうちもふされず侍しかば。

夢にたに室古のつてはさもあらて波の音のみさくの高はま并の國筑前はこざきの松原。さゝしより見るはなを景氣ことなり。彼社頭は西おもて海邊に向はせ給ふ。戒定惠の箱うづまれてしるしに植られけむ松神さび。申もをろかにぞ侍る。愚詠一首つゞけまほしく覺えはべりしかど。所のありさまにけをされて。本意なくやみにけり。それより程ちかき博多といふ所に四五

日ありけるうちに。そでの湊とことぐしくいはれたるはいづくぞ尋見ばやと申ければ。あるじこゝろある人にてしるべしけるに。あるじのいはく。今こそしほのさしきて水も少はべれ。常は無下にいふがひなくさぶらふものをとぞ申ける。まことにもろこし舟よせつべき浦ともおぼえず。又菅原のおとゞ住給ひし宰府といふ所やちかくさぶらふと問はべりければ。これより三里あまりやあるらむと申す。さらばよき程なりおがみ奉らむと詣でて。こなたかなた名所どもみありきしに。なりひらの色になるてふとよみし染川も其かたなく。水さへかれはてゝ。むかしのあとといふばかり也。思ひ川これもきゝしばかりにはあらねど見所おほかり。彼いせが。おもひ川とよみたりしも。水なくあせなばくちおしかるべきを。絶ずながるゝこそ人の言葉のまこともあ

らはれてゆうにははべれ。さてかへりくるみちに。朝倉山のほとりにて。

むかしを忘れはてけち郭公きけとなのらぬあさくらの山道の行てにひとりかく思ひつゞける。一日二日ありて名護屋にまかりけるに。みちすがらの名所どもたづねとはせければ。是ぞいきの松ばらと申すといふ。さる事あり。太宰帥隆家筑紫にくだりける時。扇たまはせ給ふとて。枇杷太后宮。涼しさはいきの松ばらとよみしところにぞあなるか。まことに歌人はゆかすして名所をしようとことわざにいへるがごとく。松原の景氣海にちかく。ちとさしあがり。たかきところなれば。すゞしかるべき境地なり。玉嶋川。松浦川。何もやがて海にながれいでてぞ侍る。松浦川は七瀬の淀とよめるにたがはずいと大きな川にてぞありける。彼松浦さよひめがひれふりしより名にいはれけむ

山も。けちかき程にみえていとおかしきまなり。鏡の神にといへるも。都にておもひおこせしほどは。いとはるかにて。いかなりけむ宮居ぞなどこゝろあてにせしことも。おもかげうかびたるやうに覺えて。いとすぐれたりける。其日なごやにいたりて。草まくらむすびさだむるほどもはべらぬに。ほとゝぎす一こゑをとづれて過ければ。

郭公はつ音きくにはなくさまで出し故郷なを忘れぬなれもかへらむにはしかじとなけば成べし。ふるさとのたよりもとめてかくなむいひつかはしける。

あまさかる ひなのなかに おとろへて 心つくしの  
旅のそら 草葉を分る たもとより をくるゝ跡の  
なみたのみ かゝる袖こそ わひしけれ けふてをゝりて  
かそふれは をのかふる里 立いてし 日數の程も  
いまははや とをとてむつに なりにけり たのむことは  
むはたまの 夜の衣も かへしつゝ 夢のたゝちの

あふことを 玉のなにして  
なりゆけは 何によりてか  
かけもせむ なをもみまくの  
ほしかるは また二葉なる

なてしこの 花のうへなる ゆふつゆの 思ひをくにも  
いとしくこゝろの闇の はれやらぬかな  
別れつゝ幾としふとも命たにあらはふたゝひ歸らさらめや

# 群書類従卷第三百三十九

## 紀行部十三

あつまの道の記

仁和寺僧正尊海

天文二の年神無月後の四日にあづまのかたへ  
ことのようにありて下り侍るに。はるかに都を  
かへりみて。

すみなれし都の空をわかれては遠くなるまでかへりみる哉  
逢坂の山をこゆるとて。

いつかへりいつあふ坂の關ツルならんしられすしらぬ旅の行末  
からさきの松をみて。矩をこえざる年ばかり  
なる法の師。あとに獨いまさん事を思ひて。

今日よりや思ひを志賀の浦みても松はひとりの古郷の空  
ひえの山の東坂本にて。雨ふりて。旅人も出ざ  
りければ。空もつれぐと心うくて。

旅衣しはれそをむる神無月しくるとはなきたゝ春の雨  
舟のうへより大ひえの雪をみて。富士の山を  
思ひ出て。

涙のうへのおひえの雪の面影にまたみぬ山を思ひやるかな  
木の葉の船のうちにて。同道の人いひすての  
發句所望しければとりあへず。

さゝなみやたゝむ木のはの沖津舟

浦半の山をしくれゆく雲

盛 親

をちかたの空に蘆たつ聲さえて

五郎四郎

しまの里といへる所にとまりて。

都出て新嶋もりのかりまくら夢はかりこそ行かへるらめ  
つくまといへる里にて道にくたびれぬれば。  
餉いそげども。宿のあるじその事なければ。



とくせなんつくまゝ里のはたこいひ難面人になへもたかすや  
朝妻の浦にとまりて。その朝おき侍りて。

みし夢のあさつま船や立かへる涙はかりを袖に残して  
醒井の里にて濁醪といへるをのみて。

あしけれとのみてなをさん二日ふひけ醒か井の水臭き酒  
日はてりながら伊吹が嶽を見れば。うちくも  
り。さながら雪のふるけしきをみて。

寒さゆる空は日影のさしなから伊吹おろしや雪と降覽  
不破の關屋のあれけるをみて。

板庇まはらになれば山風の不破のせきもる月をさやけき  
垂井の宿にとまりて。その夜の嵐はげしくて。

朝氷はじめてむすぶを見て。

小夜風のつもる木のはの下くゝる水のたる井のうす氷かな  
いなばの山の麓井の口といへる所に一日逗留  
し侍れば。伴ひし人の世にはかなくなりしよ  
しいひ侍れども。まことしからねばまかりて  
とはんとおもふに。しかぐることのよしをか  
たれば。

世中をひとは稻葉の峯にあふるまつやなかくはかなかる覽  
尾張の國やなといへる所に一夜をあかし侍れ  
ば。その里にいとつくしき若衆ありけり。酒  
などたうべて。そのあした起わかれければ。

あつさ弓やなのさとひとすちに思ひわかるゝ横雲の空  
てんがくがくぼといへる野をゆけば。山だち  
出るよし申て。いぶせくおどされて。

あふれたる山たちともかいてあひて串刺やせん田樂かくほ  
もり山といへる所にとまりて。旅寢いと寒け  
れば。

もり山の里の名にあふ宿かれはさよもすからに袖をしくるゝ  
矢作の里岡崎といふ所にとまり侍りて。よし  
あることあれば。さやうの事おもひ出て。

もののふのやはきの里の跡とへは昔に成てしるよしもなし  
今橋といへる所にとまりて。うき世の事ども  
おもひつらねて。

人なみにたゆたふことはいにしへも浮世渡りのかゝるいま橋  
遠江の國濱名の橋のあたりになりて。

行末はさそな心もつくはねのみれとはまなの橋にかけはや  
引間にといへる所にとまりて。

しるへして袖をひくまの野を行は萩や<sup>すしきイ</sup>おはなの雪の降えに

あまがたにしる人あれば。そこに落着てしば  
し足などやすめ侍れば。道芝居士發句所望あ  
れば。彼尊翁に應じて。霜月廿一日に。

いろ見えてにははぬ花か木々の雪

さえて風なきまつ朝あけ

打むかふちのやまの端のとかにて

道芝  
文爪

山内刑部少輔館にて一座興行。

つきてふれゆきやみやこをわすれ草

冬にいろあるやとの梅か枝

春さむき月にうくひすなき初て

道芝  
等悦  
通直

都にて馴し人。この所にくだり身まかり侍れ  
ば。彼廟所<sup>前イ</sup>にいたりて松風さびしく吹ければ。

なれくし人よいかにとこととへは答ふる計松風そふく

彼庵主返し。

都よりしほれこしてもしほらんなきか跡とふ今日の袂は

庵主侍れば。山家さびしからんとて。常々とひ  
給ふ人に。

都よりすみよりけり奥山の心をしれはさひしさもなし  
また庵主かへし。

都いてし心のまゝの心かはまたやまさとをうしとおもはぬ  
是より不盡見むとて立出ける道に。原といへ  
る所に。庵主に手ならふ人の里あれば。そこに  
いたりて。夜もすがらわかき人たちとかたり  
侍りて。

夢うつ、何と定めんかりまくらはす言葉のうちに別れて  
おなじ家のあるじ。あかけなどいひつけ侍れ  
ば。何となく心のおくゆかしくて。

おもひきや濁らぬものを我心今朝しも何のいもあせよとは  
これより懸川といへる所にゆきて。しる人を  
たづねけれどあはぬをうらみて。

泪<sup>う</sup>らみこしくすてふぬのをかけ川のかくるもほさぬ涙也  
又この所にて夕暮淋しくて。はるかに都のか  
たをみ送りて。

こゝにきて日のいるかたを詠やる山よりにしや都なるらし  
小夜の山をこゆるとて。

立歸りいつかこえなんとはかりも頼めなきける佐世の中山  
菊川の宿をとどるとて。

冬かれの山のくさもうつるへる霜のした行菊川の水

岡部の里越ゆくに。かたるべき友もなければ。

置霜のなかへの里に友もなくひとり過行すきの下道<sup>かてのイ いほイ</sup>

うつの山をこゆるとて。

いかなれはうつの山とはむは玉の夢より云し名にや有けん  
大井川をわたるに都のあたりにおなじ名あれば。それさへゆかしくて。

都にしにかよふころの大井川名になつ涙はかへりもやす  
木がらしの森のあたりくすみといふ所に寺あり。そこにとまりて月の影さむきをみて。

川なみのさえゆくまゝにやまのはの月にさはらぬ木枯の森  
しづはた山に淺間大菩薩の宮あれば。それへ  
まうでて。かへるさのみち雪うすくちるをみ  
て。

から衣しつはた山にをりかくる時雨や雪の下染ならん  
遠江にてみしよりも今駿河にて富士をみれば  
なをまさりて。

朝夕にいくたひ詠こしよりもちがまさりする雪のふしのね  
三河國八橋のむかしをとふに。から衣の歌あ  
はれに思ひ出て。

言葉のたれしとそなるかきつはたかけし衣のゆかり戀しも  
鳴海の浦に出て月をみて。

山のはのかすみの出るほとみえて月になるみの浦靜かなり  
星崎のうらをはるかにみわたして。

春のよの海にいてたる星崎のほのかにみゆる浦のともし火  
都へかへる事うれしくて。

都へとひなのなかちをたちかへる霞のころも錦なりせば  
春雪といへる題にて。

ふるとみてつもりもせぬ春の雪の庭の本草にあまる露哉  
十四日立春なれば。

山はまた霞ともなきあしたより人の心の春や立ちむ  
是よりのぼりぬれば。道芝離別の短冊を路次

までをくり給ふ。

人そあるえやは又とも契りをかん老の行ふのけふの分れば  
やがて使にかへし。

老のなみ立わかれても出舟友イのあふせをまたとたのめぬる哉

此返歌にそへて。たちなれし人々の方へ。

おもひ立し旅よりもうきかり枕あまたなれにし宿の別は

浦づたひして歸るとて。富士のけしきの面白  
をみて。

たひならてみまほしきは富士のれのはれ行波の月雪しらイの空

是よりのぼり侍るに。藤枝長閑寺といふ所に

善徳寺いますほどに。立よりぬれば。和漢の一

折興行。發句所望あれば。

ゆきやうてはなや春まつ宿の梅

喜ト

友三話歳寒

扣氷茶煎月

九英  
善徳寺  
承芳

又是より遠江天芳道芝菴へかへりて年をこし  
侍るに。明年の二日子の日なれば。

今日といへは野への小松のうら若みれの日に千世を引例哉

同七日に若菜の題にて會興行。

なへて世のけふのわかなに言のはの慰め草や積りそふらん  
十二月十八日の夜。於中御門一座御興行の

發句申せと仰ければ。

あけほの雪のうへみむ山もなし

月に色そふまつ寒けさ

鷹かれもこほるあらしのさよ更て

同廿三日の夜月待に。又一折。

ふるゆきのつもるやとしの末の松

山風さむみ峯のあさあけ

いる雲をわするゝ月の影すみて

清見が關にいたりてこれより奥へはゆかざり

ければ。

心よりこゝにさそはれ清みかた關とめらるゝなみのあらかき

是より三保の松原をはるかにみをくりて。

朝なきに蟹のをふれもほのくゝとみほの松原波やこゆると

ふる里に歸る心をとかむなよ錦にまさる墨の衣は

しらしかし水の上行かつをむしわかあしふみにならふ心は

右尊海僧正紀行以太田覃本按合了

中 藏 喜ト



# むさし野の記行

北條氏康

天文十五年仲秋の比。むさしのをみるとて。此とし月おもひたちぬる事なれば。人々あまたうちつれて。小鷹がりしてあそばむとて。みななかりの装束して馬にうち乗。まづかまくらにまうでける。あなたこなたの古跡をながめ。八幡山より四方のけしきをながめ。小磯大磯をみわたせば。をしやかもめの波にたちさはぐをみれば。

をし鴨のたつ白波の磯へよりあまのみるめを袖にうけはや大磯の波ちを分て行舟はうき世を渡るたつき成らん

すぎにし庚子のとし。宿願の事ありて。此宮にまうでけるが。やうく八とせあまりにや成ぬらむとおぼえはべる。わか宮の御前にまいりて。

たのみこし身はものゝふの八幡山いのる契りは万代までにさてこゝかしこの谷々山々。由比のはま。大鳥

居。古寺古跡を詠め。あくれば藤澤の北松井の庄に。三田彈正忠氏宗が宿所に。一夜をあかして行に。これなむこよろぎの磯といふ。

きのふたちけふこゆるきの磯の波いそいて行む夕暮の道比は八月上旬。あさ霧ふかくわけ入て行に山あり。いは山といふ。此山のうしろは甲斐の山。北はちふぶなど申はべる。それよりむさしのくに勝沼と云所につきぬ。齋藤加賀守安元此所の領主なり。つねぐみちの事申かよはしければ。山海の珍物數をつくし饗應しける。此所に二日逗留して。それよりむさし野をかりゆくに。まことに行どもはてのあらばこそ。はぎすゝき女郎花の露にやどれるむしこのゑぐ。あはれをもよほすばかりなり。むさし野といつくをさして分いらん行も歸るも果しなければいにしへの草のゆかりもなつかしければなり。これもむらさきの一もとゆへなるべし。

隔つなよ我世のなかの人なればしるもしらぬも草の一もと  
あくれば八月十三日。あさ霧いよ／＼ふかく  
して。道もさだかにみえわかず。馬にまかせて  
行。長井の庄にもつきぬ。まことやわかむらさ  
きの巻に。かゝるあさ霧をわけいらんとある  
もこれなるべし。大澤の庄などを行に。やう  
やうすみ田川にもつきぬ。河づらをみれば。ま  
ことにしろき鳥のはしとあしとあかき鳥のむ  
れあて。魚をくふありさま。むかしをおもひ  
でて。

都鳥隅田かはらに船はあれとたゞその人は名のみありはら  
むかひは安房上總まのあたりに見わたさる。  
こゝに葛西の庄淨興寺の長老。とし八十餘に  
をよべるが迎にいでられ。寺内に立より一宿  
すべきよし申されければ。河をわたり。かの寺  
に行て一宿するに。夜に入。風ひやゝかに吹た  
り。松風入<sub>レ</sub>琴といふ事を思ひいでゝ。

松風の吹聲きけはよますからしらへことなるれこそかはらね  
あくれば。駒をはやめかへらんとて。もとの道  
にさしかゝり。いつこよろぎの磯づたひ。日數  
つもりてけふは八月中旬にも成ぬ。小田原に  
こそつきにけれ。

右武藏野記行以扶桑拾葉集接合了

# 東國陣道記

玄旨法印

二月廿九日。尾州熱田に居陣。社務惣檢校の家にとまりけるに。あるじまた社僧寶藏坊出られて雜談の次。當社の内。八剱宮は日本武尊たるのよし物語ありて後。發句望ありければ。

かそへ見んいく夜かれぬる花の宿

晦日。參州にわたりて。細川の谷の流と聞て。

細川のなかれの末なくみくればまたいにしへに歸るなみ哉

三月朔日。矢はぎ川をわたるとて。

ときてわけにかはのくにの矢はき川まくいと水をつくる計に

四日。遠州みかたが原を行に。是よりも富士のみゆると人のいひけれども。あま雲はれず。五日みつけのごふといふ所にいたりてみるに。おなじくもりにてみえず。

方角もいさ白雲にめそくはるふしをみつけのこふのいられば六日。さよの中山ちかき山口といふ所にとまりて。月まち出る雲の雨に見わづらひて。ふせ

るとて。

袖にしもかたしく月の影きえて春雨くらきさよの中山八日。うつの山にて。

ゆめならて思ひかけきやうつの山うつゝにこゆる蔦の下道此山をこえて行にまりこ川と人のいふをきゝて。

人數には誰をするかのまりこ川けわたる波の音はかりして猶ゆきくゝて駿府につきぬ。富士をはじめてみ侍りて。

なかゝにかすまぬふしの高根かな

府中に逗留の中に。

あまの原明かたしらむ雪間よりかすみてあまる富士の雪哉小田原居陣の時。民法より書狀の次。扇子をくられる返事に。

時をえてゐるゝ扇のはこれ山日のもと迄もなをしつめおり一如院より山中にて一柳討死のことを。

あはれなりひとつ柳のめも春にもえ出にたる野への烟はかへし。

いと毛なる具足をかけて鐵炮の玉にもぬける一つ柳が  
同一如院よりなら山居陣のうちに。

陣衆のこまかなふみはいつの國みしまこよみと開きて見る  
かへし。

やる文の月日をえらへ大小のあるをみしまのこよみにはして  
おなじ所より。

山の名の睨みあひたるせめ衆よ忍辱慈悲にひかせてもたへ  
かへし。

ひかせえずもみ落すへき韭山は手をすりこきの音のみそする  
五月十一日。鎌倉見物のためまかりける道に。  
大磯といふ所にしば／＼とどまりて。こよろ  
ぎの磯を立所の人に尋けるに。この所のよし  
こたへ侍るに。釣舟のおほくうかみて見えけ  
れば。

みるかうちに磯のなみ分こよろきの沖に出たる海士の釣舟  
十二日。かまくらを見侍りしに。かねておもひ  
やりしにもこえてあれたるところなれば。

いにしへのあととひ行は山人のたき木ころてふ鎌倉の里

上總國昨夢齋陣中切々訪來。付興行。六月廿二  
日。

まつによきは千くさのはまやあきの浪

古織より角田川見物の時歌など讀たるよし文  
を送られける返事に。

都より心に人のかけすゝりうたよみてする角田川かな

水無月晦日。御祓する日と人々申せしかば。早  
川陣取の山の麓なり。名寄に名所のよしあり。  
みそきせし袖こそぬるれ老のなみうつる月日も早川のせに  
七月十五日。相わづらふにつきて御いとま也。  
歸陳には甲州どをりと思ひ侍りて。あしから  
山をこえて。竹の下といふ里にとまり侍りぬ。

あしからの關吹こゆるあき風のやとりしらるゝ竹の下道

十六日。甲斐の内河口といふ所にとまりて。曉  
ふかく御坂をこえて甲府につく。その道に黒  
駒と云所あり。

ときのとき出へきさいなまつ一首あへてふるまふかいの黒駒



しほのやま。さしでの磯を見やりて。

秋のよの月もさしてのいそ千鳥しほの山をやかけて鳴覽

甲府にて雪齋宗壽所望ありしに。

雲霧に月の山こそ風もかな

夢の山宗壽さしきより見えければ。

頼む其名とはしらすや旅まくらさそひてかへる夢の山風

廿一日。諏訪の社ちかき上原といふ所にとまりて。あかつき旅たつとて。湖水に月のうつりたる影をみて。

すはの海や秋のよわたる月影に氷のはしもみる心地して

廿二日。木曾の内福嶋といふ所に日たかくつきて所々見物せしに。よしある山寺の門に入てみれば。額に萬松山とあり。寺内に行て尋るに。住持とおぼしき僧の出られて。しかく物がたり有。寺號は興禪寺となんいひける。江州黃門草津湯治の刻。南化和尙一宿。又越後直江城州やどられける時。聯句などありたるよしあ

りて。主の句などかたられける。次にね覺の床といふ所。おもしろき景氣などいはれければ。さらばとて卽座發句をして。入韵所望せしに。

月のみかれ覺のこのあきの月

旅亭砧響冷

短李

この明がたに木曾のかけはしを渡りてのぼりけるに。月の河上にうつりてすさまじきに。霧わたりて。夜のさまいへばさら也。

世中のあやうき道も雲水のなかにはいつる木そのかけはし濃州をのぼりけるに。みのお山。信長公御代。公方御入洛の御使にたびく見なれし所なれば。

幾かへりみのお山の一つ松ひとつしも身の爲ならなくに鎌倉へまかりて。それよりむさしの國むつらかな澤見物に行侍しに。田邊のいそといふ所あるよしきゝて。

名にきゝて歸る心やさそふらむおなし田邊のいその夕波霞山。同國なれば。見やりて。

あけほのや風の上なるうす霧に霞の山の面影ぞ立

公事根元抄。菊亭右府へ尋申事ありてわたり侍りけるに。折ふし雪ふりけるに。歸宅以後被<sub>レ</sub>送侍し短冊。

言葉の道をもとめてとひ行はけさ初雪のあとやつけまし

廿七日の夜。壽命院私宅へたづねられし時。約束せし東大寺の香とり出し。えりてつかはし侍るに。つとめての朝。木色うすし。なを灯下のあやまりにとり侍れば。残たるを所望のよしありて消息ありけるに。返しつかはすとて。えりつゝも人の手にとる東大寺もとくらきよの誤りにして鷹狩ありて尾州より關白殿歸洛のきざみ。烏どもおほくもたせられければ。

聖門主

鶴のあし山鳥の尾にさきのあしながくしくも通るたか人かへし。

短きも歩み出つゝ鴨の足のしたやすからぬけんふつにして

右東國陣道記以詞林意行集接合了

蒲生氏郷紀行

天つ正しき二十の年。前關白おほいまうちぎみ入唐したまひ侍らんとものしたまふに。日のもと<sub>レ</sub>の武士のこりなく御供しはべるに陸奥よりも立侍りけるに。白河の關をこゆるとて。

陸奥も宮古もおなし名ところの白河の關いまそこえゆく

とよみて出てゆくほどに。下野の國にいたりぬ。いとときよくながるゝ川の上に柳の有けるを。いかにと尋侍るに。これなん遊行の上人に道しるべせし柳よといふを聞て。げにや新古今に。道のへに清水なかるゝ柳かけと侍りしをおもひいでて。

今もまた流れはおなし柳陰行まよひなほ道しるへせよ

とうちながめて行けるほどに。こゝは那須野の原といふ所なりければ。あまりに人氣もな<sub>レ</sub>く物さびしかりつるまゝ。ふと思ひつらねて。

世中に我は何をか那須の原なすわさもなく年やへぬへき

などいひくゝて打過けるに。佐野の舟橋につきぬ。里人の出侍りしにてたづねとひければ。此はしにて。昔人を戀ける人のむなしく成し有様かうやうの事とかたるをきゝて。あはれにおもほえぬれば。

これや此さのの舟橋渡るにそいにしへ人のことあはれなるとよみてうちわたりつゝゆくに。上野をもすぎて信濃國に入ぬ。浅間のたけにけぶりのたつをみて。我心におもふ人の事をおもひてよみける。

しななる浅間の嶽も何を思ふ我のみ胸をかすと思へはともものし侍るに。おなじ國の木曾といふ所を行ほどに。さびしげなる家ひとつふたつ有けるを。いかなる所ととひ侍れば。こゝなんみかへりの里といふ。跡に思ふ人なきにしもあらざりければ。おもしろき里の名なりけるものかなとおもひて。

限なくとなくもこゝに木そのちや雲の跡をみかへりの里猶ゆきくゝてみのの國たる井といふ所にかりねして。

かりねする宿の軒端のあればて、露もたる井の明かたの空とよみて。はや夜も明行程にたび立つゝゆきければ。近江の國にいたりぬ。爰は我生國なりければ。故郷いとなつかしう思ひける。

おもひきや人の行ふそ定めなき我ふる郷をよそにみんとはとよみつゝのぼりけるほどに。はや程なく京に付て。

はるくと思ひし我そけふははや心のまゝの都いりして

右氏郷紀行以加賀美遠清本按合畢

# 東路の津登

宗 長

白川の關のあらまし。霞とともにおもひつゝ  
なん。幾春をか過しけん。此秋をだにとて。永  
正六年文月十六日とさだめておもひたちぬ。  
その日は艸庵の隣家齋藤加賀守安元一折と有  
しかば。辭しがたくて。發句。

風にみよいま歸りこん葛葉哉

わかれ路におふるといふ古言をおもひ出たる  
なるべし。此程は丸子と云山里にぞ有し。

十九日にするがの國府より出たち。沖津の館  
にたちより侍り。亭主左衛門の宿所このごろ  
新造して。わざどもなどある折ふしとて。興  
行に。

月の秋の宿とやみかく玉椿

あたらしき宿を賀し侍るばかり也。

沼津といふ處。長徳庵にて。庵新造に。

松に見ん年に眞砂の秋の庭

浮嶋が原をすぎ。箱根路を凌て。相摸の國小田  
原の宿に一日逗留して。藤澤にやすらふこと  
有。發句所望に。

朝きりのいつくこゆるき礪の松

此礪ちかき眺望なるべし。

八月十一日。むさしの國かつぬまといふ處に  
至りぬ。三田彈正忠氏宗此處の領主たり。兼て  
しも白川の道々のこと申かよはし侍しかば。  
こゝのやすらひ十五日に及び。連歌たびく  
有。

けさい  
きりはたゝわけ入八重の外山かな

此山家。うしろは甲斐の國の山。北はちゝぶと  
いふ山につゞきて。まことの深山とはこゝを  
や申べからん。此山ふかきこゝろなるべし。  
おなじ處に山寺あり。前はむさし野なり。杉本  
坊といふにして。

露をふく野風が花に朝くもり



むさし野の景氣ばかり也。

同十五日。氏宗おなしく息政定これかれ駒うちならべ。むさし野の萩薄の中を過行がてに。長尾孫太郎顯方の館はちがたといふ處につきぬ。政定馬上ながらくちずさびに。

むさし野の露のかきりは分もみつ秋の風をはしら川の關

この比。越後の國銚楯により。武藏上野の侍進發のこと有て。いづこもしづかならざりしかば。ひと夜有て。翌日日たけて。長井の誰やらの宿所へと送らる。夜に入ておちつきぬ。明る朝。利根川の舟渡りをして。上野の國新田の庄に禮部尙純隱遁ありて。今は靜喜かの閑居に五六日。連歌たびくにおよべり。

露分て袖にみるへき野山かな

かれよりたびくのたよりにつきて。しら川のあらましもおもひ立ぬるこゝろばかりなるべし。又靜喜の發句に。

朝きりもしらてまたぬる小萩かな

萩の發句にはかばかりの風情耳なれ侍らず。若紫の卷にや。かゝる朝ざりをしらではぬるものかなと。小萩にとりなされぬる。其興あさからずぞ。二日ばかり終日閑談わすれがたき事のみ成べし。岩松の道場にして所望。

花そくまもとあらの萩の月の庭

祖光とて知音の隱者その艸庵に一宿して一折催しありしかど白川よりの歸路にとて。發句ばかり。

風にみよ葉にしたかへる萩の露

小庵のさま成べし。靜喜より若殿原相そへられて。下野の國佐野といふ所へ出たち。足利の學掾にたちより侍れば。孔子子路顔回。この肖像をかけて。諸國の學徒かうべを傾け日ぐらし居たる躰は。かしこくかつはあはれに見侍り。御當家舊跡鏝阿寺一見して。千手院といふ

坊にして茶などの次に。こよひはこゝにとし  
ゐてありしかば。此院主もと見し人なり。かた  
がた辭しがたくて。三日ばかり有て連歌あり。

ふけあらしちりやは盡す柳かな

てにをはいかにとぞ覺え侍る。口を隔て東光  
院威徳院にして興行。

風はわかし松にふく音萩の聲

杉の葉に月も木高き軒は哉

佐野の館に又五日ばかり有て會あり。小兒音  
丸連歌器量なるあり。宿のあるじ山上筑前守  
興行。

けさよりは葉さへ色付萩かな

たゞ下葉移ふとや申べけん。

佐野小太郎泰綱亭にして。

あさ露はさりけなき夜の野分哉

その夜野分しての朝なるべし。同越前守見參  
して。はへぐしかりし事どもなり。此所は萬

葉に。さの田のいねとよめり。舟橋もこのあた  
り成べし。兼載は坂東道五十里計隔て。下總國  
古河といふ所に。所勞のこと有て。江春庵とて  
關東の名醫。そのかたにて療治あり。ふみなど  
してたび／＼申かはし侍り。中風にて手ふる  
ひやすからずと返事は有し。是よりみぶとい  
ふ所に行。横手刑部少輔繁世あひともなはれ  
連歌あり。こちごの執筆する有。

こすゑのみむら立霧の朝かな

此朝の眺望計也。室八嶋ちかきほどなれば。亭  
主中務少輔綱房。かれこれ伴ひ見にまかりた  
り。まことにうちみるよりさびしくあはれ也。  
折しも秋なり。いふばかりなくて。發句と所望  
せしに。

朝きりや室のやしまの夕けふり

ゆふべのけふりけさの朝霧にやとおぼえ侍る  
ばかり也。猶あはれにたへずして。

東路の室のやしまの秋の色は夫ともわかぬ夕烟哉

人々のもあまた有し也。此八嶋より日光山へ各うちつれ。かぬまといふ所に綱房父筑後守綱重の館あり。一宿して。念比のいたはり筆にも盡しがたし。その朝日光へ相伴はんとて。たちのいそぎのまに。

わかえみくる髪山の秋の霜

所望はなかりしかども。あまりにこゝろざし謝しがたきばかり也。黒髪山のふもとなれば也。綱重子むまご類ひろく榮たる人なれば。それを賀し侍る也。鹿沼より寺までは五十里の道。此ごろの雨に人馬の行かよひとをるべくもあらざりしにや。寺の坂もとまで所々よりいでくる過分なりしこと也。坂本の人家は數をわかず續きて福地とみゆ。坂本より京鎌倉の町有て市の如し。こゝよりつづらおりなる岩にもつたひてよちのばれば。寺のさまあは

れに。松杉雲霧まじはり。横檜原の峯幾重ともなし。左右の谷より大なる川流出たり。おち合所の岩のさきより橋あり。長さ四十丈にも餘りたらん。中をそらして。柱もたてず見えたり。山菅の橋と昔よりいひわたりたるとなん。此山に小菅生ると萬葉にあり。ゆへある名と見えたり。その日の入相のほどに宿坊鏡泉坊につきぬ。やがて翌日座禪院にして連歌あり。

世は秋もときはかきはのみ山かな

當山常住不退の地なる事をのべ侍る計也。夜に入て果ぬ。執筆は兒の十六七にやとおぼゆるにぞ。一座終日の興も浅からず侍りし。宮増源三などいふ猿樂のぼりあひて。夜ふくるまで盃あまたたびに成て。うたひ舞などして。ころおもしろき夜のさま。誰か千世もおもはざりけん。あくる日本堂權現拜して。瀧の尾といふ別所あり。瀧のもとに不動堂あり。瀧の

上に樓門有。廻廊あり。右にみなぎり落たる河あり。まつふく風岩うつ波。いづれとわきがたし。寺より廿餘町のほど大石をたゝめる。なべての寺の道。石をしきて滑なり。これより谷谷を見おろせば。院々僧坊およそ五百坊にも餘りぬらん。むかし中善寺とて四十里のうへに湖有とかや。此寺よりうつの宮のほど六十里なれば。横くらといふ所半分の道とて。綱重又同道して連歌あり。

遠くみし立枝か宿の薄紅葉

もすの啼檻の立枝の薄もみちたかやとのものと我やみるらんとおもひ出られてのこと成べし。うつの宮へ行折ふし。雨風吹出て。ぬれぬれ口くれてぞ落つきぬ。あくるあしたの晴まに常宮めぐり侍る。まことにかうくしき神館也。此邊より白川の間纔に二日路の程なれど此ごろ那須と鉾楯する事出きて。合戦度々

におよべりとなん。一向に人の行かひ絶て。那須のしのはらいとゞ高かやのみ。となり常陸ざかひをめぐれば。日數十五<sup>ロイ</sup>日ばかりに行歸りなんといふ。日比の雨も猶かしらさし出べくもあらず降そひて。きぬ川中川などいふ大河ども洪水のよいしいへば。こゝにいつとなくやすらんはんも益なし。草津湯治おそく成ぬべし。さらばたち歸りねとさだまる。あまりに無下にも遺恨にもおぼえて。

かつ越て行かたにもときし名のなこそやこなた白川の關

折しも古河の江春庵所勞の人につきて同日此所への事にて。長阿脉などこゝろみらる。餘命おほからぬことながら。名醫の面談。かつ快然のおもひなきにもあらず。十三日宇都宮より又壬生へ歸りくる道雨風にみのも笠もたまらずして。日暮におちつきぬ。其夜神なりさばぎ。あめは夜ひとよ車軸のごとし。十四日午の



刻ばかりに晴たり。あたりの川ども洪水ちかき年には覺えずとぞいふ。名月とて連歌を催し有。こよひ發句古來趣向ことつきぬらんかし。いかゞとおぼゆれど。しゐての事なれば。

月こよひちりはかりたに雲もなし

たゞ晴天のこゝろ計也。比興々々。十六日に佐野へ歸り行間に太平とて山寺あり。般若寺と云。一宿して連歌あり。

鹿の音やそめは紅葉の峯の松

松杉のふかきさま成べし。十八日に綱重こゝよりかたみに別おしみて。又いつかはなどといひ。袖をひかへて。

六十あまり同じふたつの行末は君か爲にそ身をもおしまん綱重長阿同年のよしといへば。たのまぬ身にしも又行末をおもふ心なるべし。けふも雨風やまずして佐野へ歸りつきぬ。館より來べきよし使あり。朝飯終日風呂など有て。此程雨風

洪水のおそろしかりしをも又忘ぬるなるべし。そのあくる朝。舟橋を見にとて。安星珠易などいふこれかれうちつれてまかりたりし。まことに舟橋かけわたしけん跡見えて。遙々の山もと也。そのあたりの里の名。ふる戀路といふあり。中絶へたてけんことも哀にぞ覺え侍る。伴ふ人々一首づつなどいふに。

おも影はけふもむかしの名もしるく聞渡りこしさの舟橋むかしの舟橋さらにもめのみへの様なれば成べし。舟橋の有けんといふ里に。小兒のいとうつくしき。これも馬にてふと出あふにぞ。目心もおどろかれぬるさまなりし。その里ちかく梶原五郎景政の館有。これも同じくうち出て。歸路にかの宿所にて朝めしのありし。丁寧のこどもにて。日たけてこそ歸り侍りしか。又越前守亭にして連歌あり。

山松や秋のはやしのふかみとり

この館の山もと。ふかき林つゞきの秋興計成  
べし。片見上野入道明見。宗祇多年の知音なり  
し人也。四十里ばかりへだてたる所よりこゝ  
もと逗留のよしとてきたれり。此一座の第三  
などして。めづらしくおもしろかりしこと也。

音丸小兒の里竹澤山城守宿所にて興行。

しくるとも心の色の木すゑ哉

兒の心あさからぬ色をよそへ侍るばかり也。  
又鏝阿寺にして。

ひとしほやかつしくるへき下もみち

横手の繁世。此一座にも出合て。かならず駿河  
にも尋ねきたるべきよし侍りしかば。

我庵はうつ山の松にはふ薦のはとつる谷の細道

とぞをしへし。新田の庄に大澤下總守宿所に  
して。草津湯治のまかなひなどに六七日にな  
りぬ。靜喜にて又連歌あり。

かり衣きりやふきはす伊香保風

かり衣いかほといふ枕詞に旅のこゝろをそへ  
侍るばかり也。越州發向の心あてのよし有し  
かば。彼國靜謐の心も有べし。又さしむかひ。  
ふたりして五十句づつ百韻あり。

植てみぬ秋も有きや花すゑき

風も露けき庭の虫の音

靜喜  
宗長

醫光寺とて。高野にも院家有て。上下には駿河  
の國にてあひ見し人興行。門前めぐり深山の  
やうに植木しわたして此ごろ新造なり。

雲霧も世をへん慎の林かな

草津二日路計隔て。大胡上總介館有。一宿して  
連歌あり。

霜の後つむ日を菊に宿の松

長月四日なれば。つむ日を待こゝろによそへ  
侍る計也。こゝより野山をすぎて青柳といふ  
里有。春ならましかばとぞ覺えし。此あたりに  
ていかほのあらし時雨きて。よきかたもなか

りしに。荒蒔和泉入道宿所よりとて立よるべきよしあり。しばし有て。夕日はれやかにさきたりしに。ふとおかびえ侍りしかば。

やとれとて時雨し秋の夕日かな

同行の衆。あるじ七八人して。夜に入て懷紙を折て。おもて計のこと成べし。宗祇周防の國より太宰府へ相伴ひて。長門の國の山路を越侍し。神無月のはじめ也。けふのごとくにうち時雨しに。ある人の宿所に雨やどりして侍し會に。

宗祇  
なぐりきてとふ宿する時雨かな

此折のことまでおもひ出られておもしろかりし夕ぞかし。はま河と云所に松田加賀守法躰して宗繁。この十年あまりこのかたいひかはし侍り。八九年のさきのとし。宗祇此道に相伴ひしに。信濃路より例ならざりしに。此宿所に甘日あまり逗留。懇切のみ忘がたきことな

今強しイ

るべし。一兩日有て重陽興行。

けさ幾重にあわた白き宿の菊

折ふし家新造也。かつは此たび立よるべきなど。兼て音信けるにやと見え侍る。いさゝかそのころも有べし。大戸といふ所。海野三河守宿所に一宿して。九月十二日に草津へつきぬ。同行あまたありしまで。馬人數おほく懇切の送りども成べし。廿一日。草津より大戸へ歸り出侍りぬ。兼約とて一座興行。

時雨かは紅葉の中の山めぐり

きのふけふわけ出侍る山中。前後左右の紅葉の秋の興計なるべし。可諄九月廿五日。大守佳例の法樂連歌。依田中務少輔光幸宿にして。

菊さきてあらそふ秋の花もなし

則懷紙を越後の陣へとなん。はま川並松別當にして。

色かへぬ松はくれ行秋もなし

その日九月盡なるべし。神無月朔日になりぬ。

又發句。

神無月里やふりにし花の春

此別當。俗長野。姓石上也。並松上野國多胡郡  
弁官府碑文銘曰。太政官二品穗積親王。左大臣  
正二位石上尊。此文系圖有。布留社あり。

布留今道

ひの光やふしわかれば石上ふりにし里に花咲にけり

當月異名小春によそへて。過にし花の春にや  
と申計也。武州成田下總守顯泰亭にして。

あしかものみきは雁の常世かな

水郷也。館のめぐり四方沼水幾重ともなく蘆  
の霜がれ。廿餘町四方へかけて。水鳥おほく見  
えわたりたるさまなるべし。同千句興行。第一  
發句に。

あさくもりけふもや雪のはつ時雨

おなじ千句に人にかはりて。

かさゝきやさえわたる橋の夜半の月

杉本伊豆守所にて。

年のうちの雨はしくれに残りけり

又人の所望せしに。

木からしのこさは雪の下葉哉

鉢形のたちにして。

霜をへん生さきしるし松の千代

馬庭豊前守重直興行せし也。顯方いまだ少年  
の行末はるかなることを賀し侍る計也。又一  
座興行。發句。顯方にかはりて。

さえし夜をかされてけさや薄氷

連歌はてゝ酒など有て夜更侍りし也。當城逗  
留の旅宿隨意軒といふにして。

神無月くれさりし秋か宿の菊

庭の菊秋を残せるさま成べし。鉢形をたちて。  
須賀谷といふ所に小泉掃部助の宿所に一日休  
らふ。人數はなくて。懷紙表八句。

冬かれや萱か下葉の秋の風

むさし野の東野中のほどなるべし。霜枯の景



氣ばかり也。あたりの平澤寺にして。

こほりけり松にうこかぬ岩根水

本尊は不動尊。池にふりたる松有。又かつぬまにつきぬ。建長寺天源庵は。横山嶽の開山大應國師遷化の舊跡也。いぬる五とせばかりのさきのとし回祿す。庵領なども久しく知行して。およそなきが如くなり。紫野大徳寺衆中。たびたび申くださるといへども。とかくことゆかず。此折ふしに堅真と云人多年の知人にて。うちうちに申つたふること有て。江戸の館に六七日におよべり。連歌三百韻あり。

霜寒き松ゆく田鶴の朝日かな

遠山にこゝろはゆきの朝戸かな

雪はけさ水につもれるみそれ哉

上杉  
建芳

こゝろは雪のといへるあたりふるめかしくて。しかも又めづらしげ也。一日づつ隔て。おもしろかりし會席也。すなはち天源庵領二箇

所かへしつけらるべきよし。嚴重の事也。都鄙いまの折ふしには。まことに希有の事なるべし。品川といふ津にしろ人あり。和泉堺よりきて。此六七年すめりとかや。長途窮屈。五六日休息して。ある夕なぎに海の邊にありきて歸りて。

夕なきか冬に入江の春かすみ

江春入三舊年一といふ句をおもひ出て。なぎたる夕のおぼろ／＼と見えわたるさまにや。安房上總下總めのまへの處なるべし。ある人安房のきやすを一見せよかしとさそひしに。いづこかさしてとおもふ世なれば。たち歸り江戸のたてのふもとに一宿して。すみだ川の河舟にて。下總國葛西の庄の河内を半日計よしあしをしのぐおりしも。霜枯は難波の浦にかよひて。かくれて住し里々見えたり。おしかも都鳥堀江こぐこゝちして。今井といふ津より

おりて。淨土門の寺淨興寺にて。むかへ馬人待  
ほど。住持出てものがたりの序に。發句所望有  
しに。とかくすれば程ふるにたちながら。

ふしのれは遠からぬ雪の千里哉

方丈の西にさしむかひ。ふじの雪くもりなく  
見え渡るばかり也。まゝの繼橋のわたり。中山  
の法華堂の本妙寺に一宿して翌日一折など有  
しかど。發句計を所望にまかせて。

杉の葉やあらしの後の夜はの雪

その夜の嵐のはげしかりしことまで也。けふ  
はことに日も長閑にて。かつしかの浦春の如  
し。原宮内少輔胤隆小弓の館のまへに濱の村  
の法華堂本行寺旅宿なり。十四日十五日。千葉  
の崇神妙見の祭禮とて。三百疋の早馬を見物  
也。十六日は延年の猿樂夜に入てことしはて  
ぬ。十七日連歌有。

梓弓いそへに幾代霜の松

梓弓いそへの小まつ誰よにか萬世かけて種を  
まきけん。此本歌に小弓といふ名をくはへて  
祝し侍る計也。この館は。南は安房上總の山た  
ちめぐり。西北は海はるくゝと入て。鎌倉山横  
たはり。不二の白雪半天にさしおほひてみゆ。  
駿河國にてみるよりは猶ほどちかげなり。遠  
くてみるはちかき山なるべし。十九日に又連  
歌あり。發句。胤隆。

さえし夜の嵐やふくむけさの霜

こゝろあたらしく風情至極せり。脇。

庭にかつちれ雪のはつ花

發句に景氣ことつきぬれば。たゞけさのさま  
計也。けふは一座もするゝとして日のうち  
に終りぬ。夜に入て延年の若き衆聲よきが廿  
餘人。ふきはやししらべまひうたひ。優におも  
しろく。さかづきの數そひ。百たびこゝち狂す  
るばかりにて。曉ちなくなりぬ。のこりおほか

ることなるべし。又濱の村本行寺にして。

聲遠し月やしほひの濱千とり

胤隆此第三。終日こゝろゆきし一座也。小弓にて盃のたびくざれごとなどいひしはたち計なる。その行ゑにや。あすたちなんとする夜更てきたりて。月まち出るほどもなく立歸りし名残。ねられぬ老のすさびに。

おもひやれ磯のれ覺のもしは草敷捨てうし老の白波

伴ひきたりし人のかたへ。あしたに申つかはし侍る也。はまの村をたちて。けみ川といふ所に浦風あまり烈しかりしかば。一宿して。いまだ日もたかかりしに。人々物語の序に一折などのことにて。

玉かしは藻にうつもれぬあられ哉

可睡軒こゝまでうち送て。旅宿のなぐさめとりどりにして。翌日市川といふわたりの折ふし雪風ふきてしばし休らふ間に。むかひの里

にいひあはする人有て。馬どものりもてきて。やがて舟渡りして。あしの枯葉の雪うちはらひ。善養寺といふに落つきぬ。おもしろかりし朝なるべし。此處は炭薪などもまれにして。蘆を折たき豆腐をやきて一盃をすゝめしは。都の柳もいかでをよぶべからんとぞ興に入侍し。けふの暮程に會田彈正忠定祐の宿所にして。夕めしの後も色々のことにて夜更ぬ。明日廿五日とて連歌の催しに。

堤行野は冬かれの山路かな

市川隅田川ふたつの中の庄也。大堤四方にめぐりて。おりしも雪ふりて。山路を行こゝち侍りし也。江戸に歸りつきて又の日館にして。

月や江による波たゝむ朝こほり

廿八日。品川へとての間に旅宿の古梅軒一折のよし有しかど。發句ばかりにて。

さきてかつ春をまちとれ梅の花

此軒號によそへて侍る計也。品川に兩日あしをやすめ。きつきといふ里あり。諸西華人佐宿所一宿して。鎌倉ちかきあたり齋藤新左衛門光吉宿所に。一日めを煩ひて逗留。

梅に春た、蘆垣のちかかな

門まで汐干しほみち有て。あしがきめぐり。梅さけるさま計なるべし。今月五日天源庵にたちよりて侍りし。修理のこと申あはせなどするほどこに。淨光明寺の中慈恩院にして。

風やけさ枝にとを、の松の雪

臘八。建長寺永明軒にして。和漢一折あり。

かさゝきのわたせる橋かあまつ霜

當寺天津橋などのことよせ計なるべし。

對雪水仙王

永明

其日。明月院參拜の次。漢和あり。その席。

客若花兄弟

脇數篇辭退すといへども。應ニ貴命ニ許。

行年ふかき松の木高き

蘇谷宮内少輔仲次一會興行に。

霜雪をうは毛か鶴か岡の松

當社星霜の事なるべし。去秋七月中旬比よりおなじ十二月はじめ鎌倉までのことをかたのやうにかきしるし侍るものならし。

右東路の津登以藤野章甫本按合了



# 紹巴富士見道記

今年永祿の春も十かへりの初。久鋪あらましの富士見るべき事を頻に思ひ立日より記付ものならし。此度の心ざしは。都にあり詫て出るにも不有。行末にて頼める所もなし。奈良の京を離れて。一昔のあなたより思ひ渡れる橋立。玉津嶋。いづれか先にと定かねながら。先遠所よりとこゝろ内成比。江村堯次興行。

春草のうへはつれなし野邊の雪

席に連る曾谷康敬。張行すべきよしありしを。秋までなど申けるをあやしみあへるに。關の東などいふ事になりて。賢くも聖護院殿聞しめされて。

大ひえの春さへいかに富士の雪

と被<sub>レ</sub>遊付<sub>二</sub>候て。二百韻可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊。思句をもと仰有ければ。

春來てやしる人なまつ山櫻

御入峯を祝たてまつる計也。廿六日。歡喜光寺にて。

朝な<sub>レ</sub>風の色そふやなきかな

廿九日。從<sub>二</sub>殿下<sub>一</sub>發句可<sub>レ</sub>申の御氣色あれば。辭しがたくて。

春の日の下草もろゝ色もなし

夜に入。かさね土器數添て。殿下新郷王様我さへもなくなど御詞の句ひも不<sub>レ</sub>淺に源氏物語の宇治のまきに。かゝづらひけるととがめられしも思ひ出て。月にかつき出たらば。踏歌ならましとか云あへる。朝日には小野内言上。薤日のため万句執行。

梅か香やそふもろこしの峯嵐

四日には玄哉いさゝか口決の事傳授。喜にとて。

色も香もしるにおしまし花の枝

花やかなる席。味も極なき會ぞとなり。六日に

餞別とて興行に盃可<sup>レ</sup>進の色めかしさ。しるすに不<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>暇。

霞にもさはらぬ月の天路かな

七日には故三條西殿稱名院殿御影前。昌休の印古道分て。夜に入ては忍びくの名殘惜中にも。馬場康清とて若人有。三年のあなたより風雅執心と下。獨臥をも慰らるゝこゝろのはどは。過にし秋の比の會に。

松に蘿契は秋のいろもなし

かの人に偕老のそひねも憂東路のものほし草なり。十日には朝曇も無<sup>ニ</sup>覺束<sup>一</sup>を。皆々誘れて出る袂のことぐ。鋪も空をそろしうて。黄老には立ながら櫻の御馬場にて盃とりかはし。弱冠は關山までなどと有しかば。かたへはをくらかし。先にたてゝ。祇園まで笠もとりあへず行玉ひぬ。今日しも中の日也。富士涌出も此日也。

但舊事記不詳傳聞之

など云て。神前にて。觀世宗節

同太夫もをくりなれば。こゑぐの手向行末を祝して。ある坊にてまた酔のあまり。けふはくらし。月の桂のはしに出てなど云て。心敬舊跡。また桂の枝橋とて。宗祇在京のはじめ住る所こそよき所とて酒呑けるに。大津馬早めて。迎數多來りければ。何となく行けるに。若き人々は粟田口をさへ行過て。我を松坂と云ける。後よりの事は夢計りも覺えず。策馬の走井過て。相坂と云名を聞て。醉少し醒て。日光院の僧正の室に入なり。十一日の夜。曉待和尚名もしるく。鐘の音にね覺せし朝の營。善法坊とて情深きこゝろを盡し。花光坊圓藏坊など誘ひ。關の清水のあたり迄行。道すがら會も數多有べきの約諾もかひなし。責て發句せよと有し故。

關山やたゞさくら戸のかためかな

進藤城州より船よそひて來るよし告ければ。

打出の濱傳ひに行むかふ處に。粟津久昌院。冬こそ立なづむ駒も嘶るを。野路の笹原へといひあへるに。石山世尊院。一首歌に看そへてめて來り向ひ給へるに。會なども兼てはと有しに。思はぬ方の船出ならばとて物語しける次。わが寺にて十三年の昔。金蒼。宗養。予。同吟千句有しに。獨殘れるに別なばと。あぢきなげなるに。思ひ出せば。秋の名高き月御覽の事も昨今のやうに覺えて。

秋の月みし影消るかすみかな

又秋にはといひて三井寺衆にも行別れけるに。光淨院とて園城寺外の逆徒をもはからへるのみならず。近き頃は歌道をも心にかけてるとて酒もたせ出むかへり。勢田山岡孫太郎。よそ目さへたゞならぬ若人なるに。小鷹すへ馬はやめなどして。柳が崎まで又したへり。世尊院道九近きゆかりなりければ。歸り入て張

行あるべしとて。光淨院の發句所望。

枝分てうこくやなかれ川柳

舟をば渚こがせ。日も入方に坂本の北浦より城州の構に差上りぬ。二日計有て。水ぐきの岡の屋形の霜の降はも。いもとねしだになどかこちて。津田の細江。登蓮法師の薄の朽せぬ古事に心移せるに。威徳院さほさし向ひて。城州の舟にも盃ありけるよと。乗うつり。日をくらしぬ。佛涅槃の日より光岳和尚七回に千句すべしとて。第一發句とありしかば。

花を今日つみてしほれぬ袖もなし

孝子平井加州。同威徳院。布施新藏人。平井駿州。己々心を合ての事をろそかならず。嫡孫滿座の已後出席有て。若衆を集め。舞臺など假初ながら構て。肉身の歌舞のぼさち出現。宗和往生の庭かと思へり。十九日には心前一人伴ひ。昌叱は都の留守にといひて。めぐりあはん玉

の緒。山の裾野を別れゆくに。威徳院能せし若衆を持來り給へり。取々の盃に。一里餘りの道に日を暮らし。布施山の城の麓にて。賢友いろいろのいたはり有て。廿一日。阿育王石塔寺勝藏坊にて興行す。

朝露は時雨に庭の木の芽哉

十年のあなた。山まで拖一見せし歸るさに。觀道坊のあたりにて。

ぬれ／＼ぬ松や一木のむら時雨

とせし事を思ひ出て。觀道坊の墓所に詣て日野に付ぬ。蒲生兵衛大夫殿智閑宗祇へ傳受古今の箱などの事を語りて。興行あるべきなれば。

めくりあひぬ種まき置し花盛

嫡男鶴千代殿。深夜まで御長座ありて。酌とり酌とりうたひ給へり。翌朝宗祇仁聖寺といふ所にて。

春半冬の梅さく深山かな

ありし木の本一見に行て。

春半冬の梅さく山里の薨に残れる人の俤

と口ずさびて歸けるに。買秀河原まで送り給へり。布施賢友河井利康に立別。甲賀頼宮を過る比にぞ齋宮の昔を思ひ出ける。三躍の峠より三町計くだりて。鈴鹿の御前神さびたるを拜して。はらへしける假屋の柱に書付ける。

ふりはへて急かさりせは鈴鹿山花に幾夜のやとりからまし一里ばかり過て。辨才天川を隔て有俊成卿の丸木橋。妙音に故有事思合せらる。同程過て。關の地藏とて行基菩薩の作。堂の後に櫻木といふ古木有。是や鈴鹿の關ならむ。定家卿の歌故に名ると云々。廿五日。鷲山正法寺。關民部大輔何齋開山本願の地也。清庵和尚前大德寺大穎和尚御閑居に滯留せしに。廿六日に門前柳色寺前花見せらるべしとて。後の山へ登る



程。十町に餘り。岩屋にこそあれ。羽黒影向の跡と讀給ひて。和尚。

年々に巢かへる鷺の山とてやおとす羽黒の餘波成らんと書付て。拜殿よりくだるに。靈雲見桃花悟道もかゝる所からとや。暮て夜語の席に。寺外の衆一折すべきよし和尚所望。

花の枝をおれば香もなし色もなし

有梅軒とて故有後胤なれば中々不記。予入寺の日。伊賀へ行給へるに。留主より告げれば。夜をかけて歸り給へり。彼山莊にて。廿九日朝の營有。龜山麓を過て行けるに。和尚より峯のさ蔵谷の所せきまでもたせて。同宿東岡と云所にてまたせ給へるをとりちらし。稻生藏人殿武館に入し晦日一折有。

興津船庭にかすみの海邊かな

朔上已成に。白子觀音寺に不斷櫻とて名木あり。賢輔句あり。彼寺にて興行。

後を見ん春は外にもさくらかな

満座の後。清渚の玉藻拾んと門外に出けるに。網引舟より何よけなんと求て歸りぬ。桃花節には。神戸藏人殿御城に入ぬ。御興行。

未いく世はやし始の園の桃

五日に神宮にして。東靈五折西川清右衛門。雨三人して興行。河曲郡。

山川のめぐり田返す裾輪かな

六日。雨に留りて。明日朝渡りの八十瀬の末まで。高田孫左衛門盃さしかはして別れゆく。袖濡して大福田寺に早々着ぬ。桑名は近郷喧嘩有て。むかひをまちて。月に道喜の宿に入つるには。舟あまたして尾州へ渡りぬ。茨江といふ川嶋を詠やるも。なつかしきこゝちせり。本府といふ所にて。清須より小牧へ付侍るに。明院かねてより乗物など國堺にいひをかれたるに。先へも飛脚有しとて。義元など麓まで迎に

院出給へり。舊議智の故都の内より心安して。

讀か

旅の宿ともさらにおもはず。風雅にこゝろ染ぬ人さへ。しのびくは。春の日秋の夜に思ひ出るとも盡ざらまし。張行などは發句にてみえなんかし。於ニ妙寶寺。

咲ちるもしらぬは花のこゝろかな

於ニ善光寺如來別當可休。

庭や海春雨の露のたまり水

於ニ蜂屋兵庫助賴隆。

待おしむうさや半天春の月

於ニ瀧川右京進秀景。

こゑなきも色ある萩の若葉かな

賀島順親興行。

ふけあらし木隠に朽は花もおし

松田直張行。

木々をかりて己か枝なし藤の花

於ニ大野木義元。

春草のはなもて水をつゝみかな

於ニ神松寺ニ天神社僧。二十五日。

春深き若葉もむめは南かな

大野俊秀張行。

山人の手をとり出るわらひかな

三月盡に坂井貴除にて。

明は夏とおもひけんさへ春の暮

卯月二日。

俳は誰たちかへん花ころも

於ニ天王坊。白山社僧。

卯の花の雪は白根の木間哉

於ニ誓願寺。

一こゑやこゝろのうちの郭公

於ニ大寺新作庭ニ御所望。

しけれ猶松にあひおひの花の庭

於ニ木下助兵衛付亭。

くれなひや葉さへ花さへ深美草

富士一見急故。發足とて張行不<sub>レ</sub>成。加藤貞政所望。

なかしとてうちもれん夜か時鳥

森嶋貞仍所望同前。

春秋の花や夏野の草の露

廿二日。今春太夫勸進能芝居より九坪松元院に趣けり。春送り夏を向へたるなどといひて。聊送の衆有中にも。妙國寺宗直にさへ別れ。日を暮したるに。築田出羽守息酒爲<sub>レ</sub>持給へるに。酔を重ねて。明日の一折に。

蜀魂聲うへわたす門田かな

廿四日。くらかけといふ城をも出羽守知れる所なれば。十里に少し不足道。こゝろの儘にて。田樂がくぼとて。おだしからぬ山の峠などに。迎數多待せけるをもかへして。三河の堺川を前なる社福寺に入て。廿五日所化あまた有。

丈室西山衆。御興行。

風の戦く光か岩に飛ほたる

廿六日長樹院にて。

杉むらの木からしは茂る端山かな

廿七日。八橋までは尾州休存玄以などもをくりがてらと行つれたるに。あたりには花もなし。すこし求に洲杜若抽心長とやらむもて來つゝ。杜若といふ發句せよと云ければ。

杜若おり居てくらす木陰かな

荊屋より迎の馬はやめて。午時に無仁齋に至りぬ。今日の發句にて興行有。又尾州に三井寺玉林齋徘徊の故ありて。山崎といふ城にて興行有べしとて。所望に。

時鳥いさむるをきけ旅の宿

筆に任せ畢。廿九日岡崎へとおもひ立に。八橋の杜若斷絶遺恨を歎けるを。代官齋藤吉十郎聞傳へて。八橋面馬場といふ在所へも。使に檜添。郷人の古老の名主に下知して。可<sub>二</sub>植置<sub>一</sub>よしありけるに。諸國の旅人根を引て行故。跡も無山と云々。實もと思へるは。橋柱さへ削りと

れると見えてあり。西に下馬堂と云跡には松一むら。澤の半に時雨の松と云一本有。餉食ひける木陰可成。東に少岡あるに石塔あるは業平の印といへり。在所の人に杜若になはせて植けるに。田になせる地を業平と答たる田を則今よりして杜若寺にあてをこなふよし。無仁齋永代の折紙書て。早苗を引すて。手づから植渡して。石塔のもとへあがり。兩郷の樽に

露ばかり。予小牧より爲持たるを諸ともに酌

かはし。餉を心前とり出て。昔語に成て。長坂彌左衛門へ一甫など矢はぎの宿まで。しこり橋より川上の左方五六十町を隔て。しかすがの渡り也。詠渡りて。仙庵を道しれる人にして。帝都誓願寺一年のこなた御在國。新地の室に入。端午前日石川日向守興行。

くす玉に菖蒲も分ぬ袂かな

六日。又鳥井伊賀入道亭にて。

藤かほるたそかれにまたあふちかな

孝精出席。先達の作意名残有ながら。五月雨に成行ば。小川さへ洪水なるべければとて。歸さの再會を契て朝立に。御三人さへ送りに出給へり。同國吉田と云城守酒井左衛門同臨川風呂に入山海景二階にして詠。釣竿を寄せ來る。湊なれば味一しほなり。八日に門外の清壽一折興行。

水こもりもすゑ若苗の線かな

九日に仙庵にも二村山近野中にて行別。鹽見坂をいさゝかくだりて。白菅濱名橋のあといまぎれの渡りして。富士見初る日より駒にまかせて道も覺えず。口つぎのつなはへなり。引間に着て。曉より雨降出て。天龍の漲音夥鋪。見付の里を過てより。淤泥深き事。夏禹のたすけなかりしむかしの唐に渡れるかと覺て。かけ川の里にくらして。夜も明方の清天しの、



めに行て日坂に至りぬ。南山の古蔵をもちぬ。  
やゝ小夜の長山に上りぬ。雪齋大原和尚開基  
一字。影前立寄て獨酌。盃面に狂句のうかべる  
を壁に書付ける。

けゝらなき山もうらみし越て猶早妻かれみえぬ五月雨の空  
麓に菊川と云名ゝ匂ひ不<sub>レ</sub>淺を過て。かなやと  
いふ宿にて。大井川わたす人をかたらひてか  
へりけるに。小夜の中山長山とかけるも。さも  
こそは。二三里がほど山のいたゞき一文字に  
して。さほ山の俤さら也。貫之土佐記によこほ  
りふせると。男山を川尻より見てかけるも理  
也。嶋田といふ所に。まだ暮やらぬ空ながら。  
宗長出世の地ときゝてとまり。宇津山にいた  
りぬ。我いらんとする道といへるは。右の谷に  
見おろして。今は峯に付て登りぬ。誠に蔦楓は  
茂り。木の下くらき五月雨の餘波に袖もすゞ  
ろにしほれ。心細して里につきぬ。關の戸近き

鳥の子を十づつ重ねあぐる術よりもあやしき  
名物なり。俗言に團  
子と云々。忘がたきまゝ。口内に吟じ  
つゝ行ほどもなく。丸子といふ里に着ぬ。むか  
しはこゝにや有けん。團子を和して此所の名  
とやしけんとぞ獨ごとにおもひける。また宗  
長山庄の記。都に所持せし一冊。筆跡芳く。良  
分入るに。道のほど一町餘り小川を渡り別墅  
を訪に。此寺は誓願寺と云とて。小僧を案内者  
に出されしを友なひ行。道の半に柴屋ゆかり  
妙心寺派嗣法陽叔にあひ奉りて。谷を三町餘  
り左のかたへ入て。庵室を見めぐるに。一休和  
尚墨跡に。柴屋と古文字。宗長像掛れり。影を  
うつす事。命のうちは戒められしか。但無跡に  
もとどめば。もえぎの衣服に墨染をうへにし  
て。水巻のたびに扇子をそばにしと云りとて。  
さながら也。賛には逍遙院殿御詠二首。御自筆  
鮮にして。庭上には廿六年をかさねたる石上

縁苔宗長の印塔は破壊して古木梅生たり。一年國の亂に回祿せりと云々。東に天挂と號せる山あり。此僧周挂宗牧の古をも語り給へり。かくても一夜はあらまほしけれど。歸に長公畑をひらき庵を結べるかた岡ををしへ。今かたのごとくすまゐける二時の營の園などに行伴ひて。くれ／＼に府中に入。十三日先富士淺間の社頭詣已後。長善寺<sup>一花堂山號</sup>御住持。御在京の時より尊友故。閑談しばらくして召つれられて。三條西殿<sup>于時大納言殿。稱名院殿御方。</sup>候都の事。稱名院殿五年のむかし。今はとならせ給へる事までとはせ給て。退出の折節被<sub>レ</sub>遊かけらる。

大ひえも夏やはみてし富士の雪

十四日に一折御興行。夜に入て旅店に歸ぬ。江村榮糺とて。都にての隣單友人。本寺參りとてくだりつる東路より上りがけに相舎りせり。故郷の心地して。十八日三穗の松原へ舟にて

をし移り。明神御酒の残り滴を。京衆數多いざなへるに。池の天人の衣かけの松の陰より。礮傳ひに村松といふ所へ行に。原にあまた馬あり。神の牧といへり。少里中をば放れたる院内にて。當妙心寺東谷和尚仰下されたるとて。歴々非時あり。珍珠にとゞめられたるに。清見寺月航和尚より御使にて。まつち山越急げとあれば。雨聊降ぬるを打拂つ。袖しの浦を過けるに。所がら海士人の墨田河原庵はらより丈室に入。小夜更て。花やかなる盃の臺。和尚手づから持出給ひ。漢和一折有てぬぬる。曉のかねに起。急礮のかたへ行けるに。普光院殿の御座石といふ有。こゝろよく夜雨晴て。富士の南に朝日も伊豆三嶋の北。雲の足高山浮嶋原より此方。田子の浦をしへられて詠やりぬ。礮傳ひにこぬみの濱と海士人のいふらんも。實わがこゝろは岩木の山ならむかしなどいひて寺

に入る。日たけて門外に出けるに。聽呼を先に  
つかはされて。干潟の岩間に少魚残りたるか  
たつかたに盃うかべ。波に寄れたるみるめな  
ど拾はせ。すゝめ給へるに。別かねて。府中に  
暮してぞ歸ける。廿日に大守へ御禮申。廿一日  
於三條西殿御張行。

淺からぬ道は残れる夏野かな

廿三日。三條殿へ大守渡御有て。俄に發句つか  
ふまつれと有ければ。我さへ忘れれば不<sub>レ</sub>記。廿  
五日名號百韻。三條殿にて御興行。大守御  
出席。晦日。

絶やらぬ根や年をふる石の竹

五日に一花堂御興行。

風觸て蓮は花の車かな

七日。富士淺間社司新宮殿にして。

夏の日と陰をやめくる富士の雪

八日。清見寺より佳詩一章度々ありて。今一度

は三穗松など仰あれば趣むける。興津入道牧  
雲といふ人は清見のあたり知人なりしかば。  
宗長の昔てうあひにて。艶書など今は懷にせ  
るとて。墨染の袖の香も身に入る物語ありつ  
つ。此爲御張行有べしとて。發句。和尚御所望。

月涼しなけや清見か磯千とり

夜に入てあくる日四十四句。午時にはて。船  
數多よせて。海士人かづきあげたるは。こよ  
ろぎの磯のそこにもや通ひけん。あはびさた  
おか都にて目馴れぬさま也。盃に富士の雪を  
傾けて詠やるに。裾野かけて隠れなき沖中に  
て。口ずさびを。牧雲齋城の下にて。十日興行  
有。

夏草は雪に生たる裾野かな

山深きかたつかたなれば。蛸聲して後も残る  
日に。宗長牧雲の古。同じ枕ことの歌など。朝  
の文の筆の便りの注釋の巻物をしらす媒とも

なれる。宗仙といふ世捨人などの物語に。長公の席に陪するこゝちせり。十一日。興津河原のくぬき原打過て佐田といふかたへゆく。函谷關も是にはしかじとぞ覺えし。近き國々海山残らず見て。清見寺に入。御齋を行ひ。狂歌あまたよめり。心前口ずさびにせし發句。

夕立やしたゝる雪の富士嵐

和尚御脇。

披軒掃暑埃

識 鷗

一折過て。江川とて近國の名酒。今日までは府中にて聞しばかりなるを味て立けるに。旅の衣に裁かゆべき色々をさへをくり給へり。寺より里ならんかし。別かね奉る胸臆。ことの葉にかづく顯れば。などか筆に残さん。都の孝甫とて。宗長舊跡に住ける遺弟。十二日に興行の事なれば。府内に入る。

跡までも風かうはしき扇かな

上下こゝろを合せ給へる席と見えたり。十三日には西殿へ召されて。相州の太守より嘉肴。江川魚たりとて。御前にして身のほどを忘る計被<sub>レ</sub>下。翌朝また被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。大黒天子足もとの寶さへ也。頃會席ならぬ日に祇候して。いぶせき旅の含りを忘れ侍りぬ。逍遙院殿の御嫡孫として。御作意池の波をくませ給ひ。稱名院殿より和漢有職の家をつがせ給へる物から。などしもかゝるの中わたらひには。年を送らせ給ふ。剩源氏の理不<sub>レ</sub>淺事を。又世に類ひあらむなどおもふもの近く國にあるよし傳聞に。不<sub>レ</sub>窺<sub>二</sub>玉淵<sub>一</sub>とはまことなる哉。かくいふとて。わがたまへる所を知にはあらず。稽古の二字のこゝろを尋ば。記録を見てもなどかまどひ侍らん。抑享祿の末。宗祇の名計の人なきにしもあらず。予に稱名院殿。古今集殊染御筆。文字をゆるさせ給ひて後。やがて薨せ給ひ



しかば。傳受をば惠雲院殿近衛殿大閣御所よりいさゝ

かうけ給りながら。自らになすらへておもふにやしりがたし。富士の嶽はよとともにも不<sub>レ</sub>盡名もしるし。三條殿名高きはかぎりあるはいかゞはせん。ひえの山をはたち計重ねてあけたらんほどにてもなぐさみなまし。今都に誰かはとたとへんも。思ひ侘たる草枕の獨ごとをしるし付るも。淋しさのあまり也。十七日神尾以山とて。旅宿隣草の酒屋にて。

汲よるに中垣もなき泉かな

十八日には御屋形御興行。

涼しさを招く代しるし玉の庭

御満座以後。二十首御當座あり。御席の作法。

冷泉殿

于時中納言爲益卿

御傳受とて執行せらるゝ事ど

もなり。十九日和漢御興行。廿日於<sub>二</sub>淺間<sub>一</sub>やぶさめあり。長善寺へ歸るさに參りぬ。なにくれと舊儀の餘り在府事任奉りし首尾なれば。廿

一日歸京の事申に瀬名尾州の被<sub>レ</sub>仰ければ。旅宿へしのび爲<sub>レ</sub>入給ひ。秋懸て在府申せとの御屋形より帷などの御まかなひをさへ被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>とて。私にも種々被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持。此尾州は大原和尚の床下に臥なれ給ひしも理と見えて。二毛の行末さへ思ひやらる。形より心なん増りける。大原和尚魂もとまりけるにや。今の代に有がたし。則御屋形へ御暇申捨。木枯の森へ以山同子岡を伴ふて。ある川を渡りて下草踏分て。建穂心藏坊へ行ける。情不<sub>レ</sub>淺して。一折の有増。人にいひつたゆる間もはやむなしきと。残りおほければ。残し置ける。

夏の日の森に風の風もかな

夜に入て歸りぬ。さまぐの催し草もはかなきにつけても。御屋形様にて宗祇香爐宗長松木盆。翌日御會席半に御手づからもて出させ給ひ。千鳥といふ香爐銘物拜見。難<sub>レ</sub>忘して。丸

子にいたりぬ。蕎品祥英西殿へ日々に參上ゆへ。思ふかければ一身したひ給へり。其日は藤

枝といふ所へ以山丈人をつかはして。心を運

べる寺中に明しぬ。旅宿ならんにたがひて。掛

川にても寺に明して。まだくれぬ程に。引間近

き頭陀寺に趣けり。爲雲とて十年あなた永く

在洛の舊友あり。嫡子都筑宗左衛門  
舍弟千手院頭陀寺へ在

府よりいひこされしかば。昨天龍迄歷々

馬迎など數多せるとて。けふ打つれてより都

のこちせり。行水などより初て艶なる事む

べなるや。爲雲と老人は宗長聲の弟として。十

四歳より二十二まで宗長のふところにそだて

るよし聞侍りしもしるし。一折とて。

又そ見ん古枝も茂る萩の露

舊友ながら此一組近年本意のむかしに立歸る

を祝したる計也。廿七日。いなさ細江見るべき

とてみなくいざなひ行けるに。本坂越は道

とまれるとて。氣賀西光寺に宿しける。曉おき  
出て。

秋近き窓をひらけは木の間より西に光りの有明の月

廿八日に山村修理亮わりなくとぞめて一會。

夏をとへはいなさ細江や秋の聲

くれかけて爲雲千手院にも立別れ。小伊那佐

の峠に行登りて。あまつみななど詠て。鷄鳴濱名

のかたへ航して。曙に修理にいひかけける。

遠江を朝わたりする舟人に問へは濱名の橋もしら濱

三河堺川近き所までをくられし名残を形見に

願て。また吉田に入て。朝より岡崎に足をやす

め侍るに。誓願寺五日に一折とて。

風は秋西にむかはぬ袖もなし

七夕の手向を荊屋無甚齋にして。

哀しるや星に手向もかり衣

御城内にして野州鹽石をたかせ。御門前に湛

たる潮を汲せ給へり。川がりの里魚など手づ

からといふ計もてなさせ給ひぬ。八日に緒川清水左京亮一會に。

昨日あひし星崎しるし泊舟

翌日に長坂彌左衛門。去夏八橋にて東へ急ぐ時。登りにと約諾せしとて。一折に。

花なをもみ萩に水行野末かな

十日に苅屋野州御嫡子緒川の御城へ參宮して歸るさに。清水權之助へ立寄日をくらし。定宿長坂彌左衛門へ歸て。更行に御城より躍入給ひ。十一日仙庵にて興行。

萩のこゑ山下道や濱つたひ

美肴餘殘とて。十二日一箸鱸魚鮓とこそいひし數々用ゐて。濱邊の月にイ。孟蘭盆の手向をば又かりやにてせり。緒川より苅屋へ。舟十二艘に灯籠をともし。風流をかけ給へり。海上の逸興都にては見馴ぬ事共也。十六日曉の鹽にひかれて。龜崎といふ所へ網おろさせ。みるめ

かづかすべしとあれば行けるに。めづらしげなる盃さし出したる女にいひかける。

宿りせば萬代もへん龜崎やみるめかひあるうらのとまやに

又二里計南のかた。熊野崎とて三熊野にむかへる洲崎へ漕出て。大濱稱名寺納涼せし折節。衆僧の御所望に。

三熊野の浦風涼し秋の海

十七日には於三苅屋水野野州と興行。

流れ來て一葉も末は千船かな

十八日。齋藤助十郎亭にて。

聲やいかに秋にかはらぬ松の色

十九日。從三岡崎竹田法印よき酒を求出て。色色を加齋慶忠にそへ給へり。酔にまぎれて船をし出て。を川御城にて御會にて。

咲そふやいく百草の花さかり

大野へと趣むくにあふ坂といふ山本まで緒川同名など送りにと有て。迎の掠原といふ人侍

ほど。掛樽取出て立別れぬ。翌日石川參州御興行。

浦風をまちとる岡の葛葉かな

廿四日。御城御興行あるべきを。出陣の前日なれば。種々海中珍鋪物を集られて。酔臥計也。此地は人の志あると覺ゆるは。閑窓老人に便有て。宗牧度々とゞまれる後。歌をくられし上句を。鴈くゞひ湯風呂。其外何哉らんくは。夜のまぎれなるべし。むべなるかな。廿六日於ニ御隠居野州。

嶋々もなひく霧間の朝戸かな

遠景唐信などには見をよばぬ。廿七日。小倉導場來相興行。

身に入や夕風の朝涼み

満座普くことに添へ出て。舟歌に聲を添たり。廿八日には閑窓にてくらし。まはしといふ所迄は馬にて行けるに。圓淨坊連衆たかしにお

もむかひ。茶の湯などさへ汀にかまへられたるを取ぐして。船まで廿町餘り有けるに。木田城よりも濱底苔を鋪て待れしに。大野近所慈光寺隣松院も携しとて。遠干潟をもをし出されて。來相ばかりいざなひて熱田に入て。急げるは。加藤全朔駿河へ下りけるを。延引しての會とて。度々むかひのあれば也。

露わけは分しをおもへ宇津の山

二日には宗長已來宿をせしに。瀧坊にて。

宿かるもおはな本の名残かな

先師は伊勢千句聽聞せしに。雇しほどの人なん。四日には加藤圖書助の新地の構まで。海堀上たる松陰ちかく有て。出入沙はやし所なれば。

みつ沙の入江や谷の秋の聲

半日にはてゝより。亭主の嫡孫六歳にして。あや敷大鼓の音を打鳴せり。去間成事。記にいと



まなし。五日には座主御坊にして御興行。海藏門にむかへり。海をかくすといふより。五六町へだてゝ人家となれると也。

朝霧の入海かくす木間かな

七日に法花堂本遠寺にして張行。

わたつ海の玉やうかへる空の月

八日は放生會と號して神事有。於三社頭御神供以後。神宮寺藥師堂に神興行幸なる。先伶人樂を奏し。社家人々御寶物を持て御供たり。堂内には社僧四ヶ法用。後に大師護摩壇。いさゝかにしの方に楊貴妃のしるしとて五輪石塔苦に傾て立たり。九日には竹田小兵衛とて去年昌叱かりの宿をもせし人なり。庭に葛茂らせ。山ざとびたる所にて。

眞葛はふ庭に松虫聲もかな

十日になるみがた近き所。道家與三兵衛興行。祖父も宗長道記に入たる行衛とて。いそがは

しき身ながら執心淺からず。加藤圖書助馳走なれば。したしき人々を將てすゝめられし。酔の後。舟に乗て圖書助庭に舞入。足本亂がはしくて。夜更てぞ宿にかへりける。十一日には休息の有増をね覺里の上山崎にて。玉林齋昔は三井寺住侶。頻に張行の事迄望なれば。俄にて初一念を。

里遠きやまもれ覺のきぬた哉

夜に入て鹽瀬をたどるほど。手をとりに讀鞆橋にあがり。此名は當宮本地焰魔王宮にておはしますとて。三途川祖母丈六像あり。十二日。嘉祐とて。日破明院近き社僧興行。日本武尊東にて向火の時燈を崇たる社也。七社一也。神祕略之。

いなつまは空にうち出す光かな

持寶坊とて行者興行。

馴々て曉月や墨の袖

嘉祐と縁者ゆへ。夜をかけ二百韻也。十三日に

阿波手の森門前の妙勝寺興行。森の東に反魂香燒跡。又森下に社あり。其下藪に香のもの入し瓶あり。

野分にやあはての森の初梅

名月には津しま一見に行けるを。坂井助兵衛田中に榛木を折かけ。色々を被<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>持に。程移りて宗牧を尋入に。息孝行の人にて。社頭へ引して夜更行ば。橋のうへにて月にうそぶきて。醉中に狂句。

月をこそ都さそなの今夜哉

宗牧に因淺からぬ人にて。都の住居年をへぬ。桑名へとおもへるを。長嶋<sub>一向念</sub><sub>佛坊主</sub>城敗に尾州大守出陣なれば。甚目寺以玉かへり行に。時雨さへあはたゞしき中舍りのまめやかさ。馬などかひぐしくて。あつたに入て。行末いかにとおもひわづらひ。草鞋解など。仙庵の川より無三覺束<sub>一</sub>とて智多郡の人のしるべの文有。又

山崎城より玉林齋來り給へり。力をえて安堵せり。淺井四郎左衛門など酒もたせて夜を深しぬ。十八日。大高城より水野坊州迎舟を加藤庭にをし入たり。圖書助の舟二艘ならべたるに。嘉祐道家亭主盃とりみだしいそぎけるに。思ふかたの風吹て。舩をたゞきてうたひかはし。大高に入。銘城にて。唐人傳詩ををくりし所也。城は松風の里。麓は呼續の濱なり。仙庵を川より來迎給へば。

呼つきの濱邊や霧に渡し舟

夜半過。西を見れば。長嶋をひおとされ。放火の光夥しく。白日のごとくなれば。起出て。

旅枕夢ちたのむに秋の夜の月にあかさん松風の里

明れば防川など馬にて來りぬ。寺中に行着ぬ。廿日。夜半より橋に出て。わらなど一把づつ鋪て。水をまちななど。楓橋夜泊もかゝらじとおもふ。閑窓老人聲の石川三州重阿來相は楠まで

送ると也。曙の湊を出。楠に着たるに。尾州の先勢暮かけてといひつたへ。さはがしさは中也。春とをりしに引かへ。ゆき山といふに舍りけるに。廿二日辰刻には河曲郡家々は烟にのぼりぬ。儀俄と云は。甲賀にての大野知行なればとどまり。尾州まで連歌執心にて迎に下りける。祐運馳走にて。送など心安くして永原へ行ける。前越前守道芥墓に詣んが爲也。

廿六日。三井寺にをし寄たり。花光坊相坂まで春をくり給へるにはをしげ也。卯月計りに遠行なれば。彼□前に手向種などに。髪剃をそへけるも。徐君思ひ出して也。

旅の空おほつかなけに送りてし人はむなしき相坂の山不定世界おどろきながら。廿七日如意嵩越に都に入て。人界はかなさよ。さても／＼目出たや目出たやといひ酔くらしぬ。心前兩僕片時のわづらひなく。いさゝかの災難にあはずして。留主昌叱縁者の者とおとがひをとぎ。かりの衣をぬぎてもかたはら淋し。行末いかならん。

永祿第十八月廿八日終記之 紹 巴

右紹巴不盡見記以一本校合

# 群書類從卷第三百四十

## 紀行部十四

### 東國紀行

#### 宗牧

往年宗長老人にいざなはれて。富士見に下り侍りしついで。東國歴覽の望ありしを。難<sup>レ</sup>去事に就て歸京したり。其後毎年の有増にて。結局つくしへはふたゝび下りけむ。不定なる旅の世おもひしられき。ことに四五ヶ年已來中風氣に成て。あづまのしほ湯<sup>文十二</sup>どもしるしあるやうに語る人あれば。すでに去春おもひたち侍りしを。近衛殿御所源氏物語新調の御本出來て。夏の日のつれぐゝにとて。校合の事仰いだされたれば。このあらまし事をもかねたるおりふし。京都例のおさまりがたく。和泉河内

の敵出張の風説しきり。公方京兆<sup>細川隆元</sup>の御あひだもものいひひそめくやうなり。六角殿<sup>佐々木元就</sup>參洛有。御存分ども出入おほせなだめられてや有けむやう。初秋の末つかたしづまるやうなり。此御所の御事は公私ともに御意をえらるゝ事なれば。御取亂最中。源氏校合の御さはなかなか。御月次などさへ懈怠のやうなり。よき折ふしにやと御いとまの事申あげたればおどろきたまへり。禪閣<sup>尚通</sup>さま去年夏より御中風を煩はれて御平臥の式なり。この一兩日御再發にがにがしきやうにて。醫師評誼執々。御養生ながら。遂日おちり給へり。いますこし御やうだ



いども見たてまつれかしなど尊意なり。其上道の義につけて。かたじけなき子細もはべり。平生參上のおり／＼御言葉をそへられし事ども忘れがたく。思ひたつかたもまどふこゝちしてやすらひはべる程に。八月廿六日早朝より大事にならせ給ひて。初夜已前に薨じたまひぬ。此ほどはいかにもたしかにまし／＼て。御成も兩度。右京兆毎日しこう。御門跡御所にあつまりたまひ。いろ／＼の御遺言。こしかたゆくすゑの御物がたりこまやかなりとぞ。天下もかたのごとく泰平の様なれば。佐々木霜臺下國せられ。この御所の御隙もあきたる折ふしなれば。さらぬ別れのなごりは千年もおなじかるべし。御年も七十三。古來まれなる御威光。洛中上下このさたなり。御葬禮は東福寺海藏院。其作法いへばさらなり。前日大雨。當日空はれて。御をくりのさま。御はうぶり見る

貴賤の袖。霧まの紅葉こきうすきいろ／＼にまがへり。夜にいりて時雨うちして。春ならぬ木のめも。ふるはなみだかとおぼめく氣色なり。御中陰も御所にてなれば。公武の御吊山々寺々の衆。法花八軸淨土三部。其外こゝろころの捧物。懷舊の詩歌などはぐかりを忘れたる躰也。心ざしの色も見え參らせがたくて。黃金をうちのべたる短冊。藤澤の上人よりめぐみたまへる。このおりのためにやとおぼえて。風に散あきの葉よりもうすけれと染る心の色しみえれはとかきつけて。智恵光院して申上たれば。御まぎれのうち。やがて。

墨染の袖につゝめとあはれてふことの葉深き秋の色哉とあそばされたる短冊。したるのさまにて。御心じらひみえたり。翌日。法花懺法聽聞にまいるはべれば。昨夜思しめしつゞけられたりとなん。

去來生滅本雖常

愁淚難期幾夕陽

七十三年時八月

梅花薰徹返魂香

かけて身を思ひそしほる大かたの秋の空たに露の夕くれ  
まことにみるめもかはきがたく露けき様成べ  
し。此金玉の和韻。五山の僧達家々いや／＼ま  
で。參扣の人々は。のこらずこゝろざしのゆく  
所にまかせたり。

おもかけはとまるもあやな秋風の夢吹かへす春の梅かか  
と申て尊意を得たり。又聖護院の准后逆后後法成僧通  
寺殿いまはの御詠に。

遠く行人とてさのみ歎くなよ獨も残るためしなき世に

是を句の上にをかれて。三十一首句ごとにこ  
もる玉のこゑ／＼みゝおどろかれたり。御贈  
答申べきよし尊意の趣。兵部少輔内議中され  
たり。發足のこゝろあはたゞしさ。句頭一首の  
やうに申上たり。

ときしもあれなくれし秋の草木まで夕露ふかきくれなるの

ひかたき袖にとゝめえぬとしを十とて手をおれはさきのた  
めしものちもまたみつとばきかし難波かた煙もとなき雲の  
うへななきゝはなる世の人もひとし忍ふのとこのうちりち  
のしらへももりいつや法の光のこすの色瑠璃の空にそたく  
ふなるめさましかほに時雨つゝならの下葉にきゝあへす夜  
ふかき月はしにそありける

かけまくはいかにととは、只今の空もこたへむ袖の露哉  
と申て入たり。この忌中をだにと。日夜しこう  
の様なれば。餞別の興行あらましなどもうち  
をかせ侍り。慶順とくよりの懇望去がたくて。  
草庵にして。

別れ路は松をたよりの葛葉かな

佐々野與三衛門。これも先年尾州まで下りし  
時興行。佳例なればとて。

やとの菊山路もこえしさかり哉

三條西殿へ御いとまごひに參上したれば。こ  
れもおどろかれて。いづくまでなど御たづね  
の事也。宗長遠行已後。彼息誰庵に吊ひなどを

こたり侍れば。するがまでと申なしたり。いまは御法躰受持讀誦の御ひまもなげなり。五部大乘經逍遙院殿いさゝかあそばしかけられたるをかきつがれて。去年此ごろ御七回嵯峨一尊院にして千句已後。毘沙門堂御導師にて供養。當時まれなる御事なるべし。すこしも見えまいらせばやとはおもひながら。在京の不弁にうち過けるに。このほどあづまよりふみのみとてこゝろざしけるかねのかたはらに。

とく法のきくの露たに深き身に染しやいかに水莖のあとと申あげたれば。態がましき御使謝せられがたきよしおほせられて。

けふそしる心に染しかねことの思ひもかけぬ菊の下露ときは重陽後日にや有けむ。御詠身にあまれるよし。則參上して御禮申たり。青蓮院殿色々御筆を染られたる御禮。御いとまごひがてらに申上。三條殿但馬御下國明日のよし仰られ

て。かの知人一兩所がたへ書狀どもしたゝめて持參申たれば。かたみに又いつかはなど過分の事也。西殿より御扇子を下されて。御詠。

富士の根の雪みてもまつ思ひ出よ馴し都の袖の月影

袖の月影は扇の事にや。先年九州下向のとき。逍遙院殿野の宮のかたをかゝせられて。さらぬだに秋の別はかなしきにと。彼物語の歌をあそばしつけられたる。長月十日あまりの事にて。昨日のたゞこゝちし侍り。

あつまちの思ひ出なれや行袖のことの葉をふる月の光はと申入たり。あすとの暮つかた近衛殿へ參上つかうまつりたれば。御忌中も一兩日の様なり。其砌はかへりてあはたゞしく。秋の木葉の散々なるのこりおほさも一入なるべければなど。御さかづき出されて。一乗院殿。聖護院殿。大覺寺殿。初夜の御つとめはじまるまで。御物語ども。富士清見の浦山しさなど仰られ

て。錢別の當座なども有けむ。其おりのまぎれにおぼえもをかず。無念の事にてまかり歸たれば。やがて御使。ぬさとりく下されて。

此秋そ思ひしらるゝ二みちに行方わかぬむかしかなりも

御使のふけゆくほどもおそれある様なれば。なにとさま關のあなたよりなど申のべたり。天文十三年の秋。長月廿日あまり。都を別れた。かれこれ若衆などいざなひて。又相坂の關をくりをだにとて行まゝに。をとほ山もかへりみがちなれば。

歸るさの名にこそあらめ駒あて誰もすゝまぬはしり井の水など吟味するほどに。杉村の木末みえて。いは下葉もめとまる色なり。さらば是よりかへりねといなびければ。先人つかはして。清水のもとの塵はらはせ。苔を庭にこゝろくゝの銀瓶紅葉をたくも其興なきにしもあらねば。やすらふ折ふし。石山より世尊院。寶藏院。迎の

舟よせておりたまへり。これも若衆さそはれなどして。盃のかずもつもれば。ゆくもかへるも暮がたに成ぬ。

ゆくときとあかね心の色々や紅葉にまじる名殘成らん

といひて別れはべり。關やより發句所望。

秋もやはすきまの月の下もみち

此月紅葉には秋もすぎがたきにかへるべしとおもへるなり。日然上下のついでには過役の所望あり。さすがなにおふ關守成べし。さて打出のはまより舟に乗ぬ。又京衆ひきわかれて。石山までとしたひくるあり。うたひのゝしり漕行波夕なぎして。ほどなくをしよせたり。倉坊出あはれて。行水洗足など手づからの様也。のこりのあまは世尊院ひきぐせられたり。翌朝入堂參詣のおり。ことに山かげの眺望めづらし。しりへの山はやしむらゝ色づき。月は南の空にのこりて。寺前のながれひやゝ



かにすみ渡れり。本尊は二臂の如意輪蓮臺をもちたまへり。先年御開帳の時拜したてまつりし尊容。面かげにうかぶ心ちして。發露涕泣せり。常灯の光不斷の名香かほりきて。無垢清淨のよそほひ。補陀洛界もさながら眼前の靈地なり。とかく念誦のほどに十穀きたりて。源氏の修迎のため十萬句勸進興行。兼々申侍りしやうに。此下向の次。まづ百韻はじめ侍らむ。いかゞあるべからんなど。辭しがたき様に申侍り。まことに立よりみれば。かなたこなたあれはて。清岩正譯和尚。こゝよりもなかれ出けるみなもとをわつかに汲る末をしそおもふと書つけられたるも。わかれず古はてたり。そうじて此本尊は和歌の人を守りたまふべき御誓約有とぞ。さてぞ紫式部も。和國の至寶をつくり出けむことも。此利生ほとけの言葉をくはへ給へるものならし。寺僧も代々執心あり

とぞ。とり分尊氏等持院殿の御頃にや。座主呆守僧正能書歌口にておはしけむ。法印守遍願學。しかも詩歌の達者。選にいり給へる作者也。彼詠歌草いまにあまたのこり侍り。しからば此佛前にてけふ俄に興行すべしといへば。當座の様なり。

秋ふかし言葉のはやし筆の海

五十四帖の面かげ。湖水にうかびたるなどいひつたふる事を思ひよれるばかりなり。この會已後。やがて寺僧達をはじめ。發句の題ども京までも言傳侍り。はるく下國の事なれば。所々執心の御かたへは。發句の事申つたへよなど。十穀懇望ながら。大かたに申なし侍り。あすは罷出べきよし申せば。世尊院これかねがねの事にて。ことに送の衆もたまゝのつるでなればとて。

秋や月をし明かたのとまり舟

廿八日の月さやかにのこりて。勝地の暮秋をおしむ舟かと思なし侍り。廿九日。又舟にて。せたの渡りさかまく水につなでうちへ。陸地よりひきのぼるほど。笛尺八の聲。敵地のおそれもわすられたり。月は山風ぞ時雨の御發句も。呆守座主の御坊にての事なれば。沈酔の所殘うたひもとどめがたし。昔の橋柱二三口のこりたるあたりにさしとめてみれば。長良の山つゞき時雨て。はれ行木末汀とをくうつれば。げにはたばりひろき錦なるべし。せたの城よりつかひあり。永原まで送りの馬人申つけ侍れど。けふは天氣おぼつかなければ。逗留すべしなど有て。さらば京の人々はこれよりとて別れたり。

漕別れ秋の湊のみなくに人のあふみの舟をしを思ふ

言傳などしつゝかへしたり。かたみに見をくりつゝかくれゆく。はた物あはれなり。蘆間に

船とめて。山岡方使案内者して城へをとづれ侍れば。盃いだされて。しきりに抑留ながら。あさげもなをか様なれば。むりに立侍り。石山の僧達にもこれより別れたり。永原へ付たれば暮はてたり。松雲軒旅宿例の事なり。あすは九月盡なればとて。

秋はけふいとあつまの雲あかな

秋はにしにかへる物なれば。けふの別れのはど遠き様におもひなし侍り。神無月一日又すぎしやうに永原越<sup>飛</sup>前守申されて。

けふは世に空もくらぬ時雨かな

はれたる空におりしりがほなる時雨過ぬめり。あはづより發句所望忘れて。便宜にとかきをきたり。

下草のかれ葉にもりの夕日かな

又出雲の人所望の發句。是も京へ便宜にとて。

有明や月も浦つたふさよ千鳥

此人住所。湖水など有といへばなり。二日。西座に着たれば。あす慈恩寺の月次。観音寺衆下山參會しかるべきよしにて誘引。この次平井加賀守種村參河守など來臨あるべければとて竹内七郎左衛門興行。

散にきや染つくす山の村紅葉

紅葉のさかりながら。冬季事かけたる五文字成べし。観音寺登城。去夏御參詣。毎日御氣もつくされし名残。去年の御不例。并發蘭軒めし下されて。祈療のころ所なくて。この比いさゝか御快氣とて。澄玄さへくださるべき。おりよくまかりくだりたるよし。進藤山城寺御内議きかせられたり。宿老面々にさへ御對面なきころなれば。御禮もはゞかりおほくて。さたにもをよばざるに過分の事なり。まことに御相伴とても。左京大夫殿。中務大輔殿。永田備中守。基打了本。猿樂一兩輩。次の間にしこうし

たるばかりなり。座敷は二階。尤眺望をいはゞ老曾森。麓の松原につゞきて。板倉の山田。蒲生野の玉のをやま。さながらみがける砌なるべし。遠くは大和河内伊賀伊勢の山ものこるくまなし。ちかき海づらかけたる津田の細江。登蓮法師がすみけむ阿彌陀寺の西日うつり行水蒸岡の湊。空飛鷹に蘆間の小舟もけぢめわかれぬ風景。西湖の十境は繪にもかきけむかし。數寄の御茶湯。名物かすをつくされ。獻々はいふに及ばず。御菓子のかざり。花むすび。

葉のゑようなどめもあやなり。蓋はたびかなれど。御養性堅固の事にて。各のみ酩酊無三正躰ほどなり。澄玄長々在城故にや。三雲新三郎に岡ゑひ海よりもふかうあひまひかずしらす。はてはもしらす。いかゞ御らんじけむ。夜半已後退出。澄玄に和韻の一軸。左京兆より弟子宮内卿に尊圓親王の御筆詩歌一卷拜領さ

せられたり。ことに御手跡比類なきうへ。所々よりあつめられ。ひとくだりをも御祕藏有ける比。面目のいたりこれに過べからず。十五日は永田備州。例年日まちの興行とて使有。餘醉もめいわくの事ながら。夕かけての會なれば。

ふむおともあらしは月のふつき哉

今夜清光當山の岩ふむ苔にみちたる様なり。

進藤山城守新造の一座。

秋をなきてときはの花や宿のきく

會席のかざり大酒のしたて。先夜太守の儀式にとらずや有けむ。平井加賀守亭にして。

神無月はるにほてる海邊かな

可<sup>レ</sup>憐冬景似<sup>ニ</sup>春花<sup>一</sup>をとあるこゝろにや。亭主知行豊良の里の眺望成べし。

染かへて太山や宿の初もみち

神無月廿日。俄に初雪ふれり。兼日の有増なれば。なにやらん心ありて侍れど。此雪をばいか

がなどおほせての事也。建部左馬允といひしは。多年の知音ことなる事にて侍りしを。四五ヶ年此方中風散々。去年も養性のためとて上洛。ことさら草庵にこゝろやすくなど申あひて。療治も油斷なかりしかど。其しるしもなくて身まかりぬ。京より態も吊になど思ひしをさはる事ありて。此下國つゐでの様ながら。妙園寺までをとづれ侍れば。やがて源八對顔。老涙もとどめがたく。言葉もむすばほれたり。せめてのこゝろざしとおぼえて。阿彌陀經つかはすとて。うらに書つけ侍りつる。

蓮葉に結ひかへてや別にし恨もきえむ秋のゆふ露

うちしきりたる病中にも。此金典手づから書寫讀誦せしとて。一巻とり出て見せられたり。こゝろざしつうせるならし。在京の時は妙心寺の長老相看中て。ちと參禪のこゝろも有けむ。おはりの事契約申をきしを。下國して念佛



一三昧になれり。先祖より淨土一宗におもむきたる家なれば。つねのいとつよきによれるにや。追善の一座源八のぞみのよし尤におぼえて。この經の肝文。是人終時の四句を一順の句の頭にきて。

せめてつめ忍ふはかれぬかたみ哉

其名をだに忍ぶべきのよしなり。別は欲によらぬ心なるべし。手跡をはじめ。なにの道にもこゝろとどめて。氣分も侍なりし人也けむ。

ことに左京兆御幼年のほど御手習も後見をも申たりしかば。御雨ともおり／＼おしみめすとなり。源八又あひかはらぬ様なり。この會已後早々まかりたつべきにさだめたれば。下内太郎左衛門して。池田宮内卿。平井右兵衛尉其外若衆達。連歌の抄一卷。なににても講釋懇望有。宗祇詠草のうち下草のうち。耳どをなる句もありなどいふ人有て。又四五日逗留。やうや

う高宮へつきたり。高宮父子無き内外二在京の里ともおもふ人なれば。伊勢までをくりの事などいふにをよばず。まづ興行。參河守。

朝しもの下草あなき日影かな

又右京兆所にて。

ひろふまで色こき庭の落葉哉

落葉の中にとり分いろこきを自愛し侍るばかりなり。一兩日遊覽。京ふみかきて。こむすめなどみやげつかはしてなぐさめたり。多賀豊後守を御社。このつゐで法樂の事。觀音寺在城の時分より申をくられしかば。東路のをのが法樂にもやなど同心したり。

杉の葉の夕はないくへ今朝の霜

此會に北部碧洞齋來りてあひたり。近年越前へ下國の事絶たれば。彼京極殿へも不申上。例井備前遠行已後のをこたりなど。よき便宜にてことづてなどしつゝ。十月晦日比。伊勢し

ろせといふ里までくだりし。田熊村兵部少輔  
一宿の事申つけられしとて。飛那井彈正方よ  
り坂口まで迎來り。高宮より兼日申されたる  
事は。しかしながら嚴重の事なり。朔日はたか  
ねおろしはげしくて出立がたければ。沼田松  
雲軒明日一座議定のよし使有。あまりきふき  
興行にやと覺えたれど。ほども近ければ。はれ  
まに馬にてつきけり。

あとや雪しまきよこさる笠やとり

まことに笠もとりあへぬものなり。田熊村殿  
むかひがてらとて。眼阿同道してわたり給へ  
り。亭主祝着。さらば又明日沼田六郎左衛門尉  
一座のよしあれば。

木からしの中にいくむらみれの松

この城山の木末のさまなり。四日。大泉まで。  
これもほどちかく。あつらの道もおもしろく  
て着たり。やがて興行。

しら糸をむすふやいくせあきこほり  
清瀧川の心ちしはべり。鳳瑞軒にして。

むら雲にはなれてさむし夕月夜

瑞雲院。

くれ竹の園もてはやすあらけかな

院主竹を愛せらるゝよし。内者申たるを。かご  
とばかりのあられなり。木唐齋。

あられふる庵や春みし花の露

本歌の心をとるかへたるばかりなり。寒嵐の  
分行かたもはるかなれば一座をさへ故障し侍  
りしに。四百韻連續。兵部少輔近年一段執心な  
れば。をのく。此ときを待えたるふるまひに  
てなどあればなり。是より參河渡海と定め侍  
りしを其年織田彈正信秀禁裏御修理の儀依被仰  
下。平手中務丞政房まかりのほり。御料物進納。其  
後歡感の趣をおほせくだされたくは覺しめし  
ながら。所々出陳など聞しめしをよばれ。旁と

かくをこたられしを。態勅使をなど下さるべき事は國の造作なれば。我等下國に女房奉書などことづてらるべきよし廣橋殿より仰聞せられたり。便路とは申ながらはゞかりおほくて。しんさくの趣再三申あげたれども。しゐて仰なれば御請を申たり。この次參河へまかり可<sub>ニ</sub>仰下<sub>一</sub>とて。是は典侍殿の御局より三條右府へ仰のむね傳へ上られて。御局さま御盃御服など頂戴の事なり。面目身にあまれる事なり。友軌平手かたまでつかはして内議申たれば。今度於濃州不慮の合戰勝利をうしなひて。彈正忠一人やうく無事に歸宅。無興散々の折ふしながら早々まかり下るべきのよし返事あり。宗丹伊勢までむかひにきたれば。桑名より川舟にて津嶋に着たり。翌日やがて那古野に下着。平手出むかひて。けふの寒ささこそなど。づなにやらむ手をあたゝめよ。口をあ

たゝめよ。湯風呂石風呂など念比に人をもてなす事。生得の數寄の様なれば。さまで禮にも及ばず。まことにおほかたなる所へ落つきたらば。發病もすべきあらしにてぞ有ける。岸宗玖賢桃知春などたづね來られ。夕食のしたて手づからの爲<sub>レ</sub>躰。息三郎次郎菊千代盃とりどり。けふのてい身をもわすれたり。翌日霜臺に見參。朝食已前女房奉書古今集など拜領。今度不慮の存命もこのためにとてぞ有ける。家の面目不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之など。敗軍無興の氣色も見えず。濃州之儀一度達本意事も侍らば。重ねて御修理の儀ども仰下され候やうにないく可<sub>ニ</sub>申上<sub>一</sub>云々。武勇の心きはみえたる申されやう。御言傳めいわくも忘れて。老後満足也。御書の御返事もよほして罷立べきのよし申たり。一座興行の事。この砌など一かう其さたも有まじくおぼえしを。於<sub>ニ</sub>愚亭<sub>一</sub>は難<sub>レ</sub>去故障の

事有。平手に興行すべきよし内議にて。發句の事中されて。はや連衆の事方々へ人遣しつゝ。瀧坊織田丹波守。喜多野右京亮。はるく來り。今度殘命高名虎口をのがれし物語。まことに不慮の再會なり。發句せめられて。

色かへぬ世や雪の竹霜の松

王荆公がむかしを思ひよせたり。わが興行の外聞に脇をば霜臺作名にと内議有けん。つよきせい成べし。この會已後熱田の宮へまうでたり。當宮は日本武尊にておはしけること。日本紀の趣。御幼年の御時西夷をたひらげられ。其後神勅あらたにして。東夷もほどなくしづめおはしまして。御歸洛の御時。甲斐國酒折宮にて。

におはりつくはを過ていく夜かれぬる

火ともすわらは。

かゝなへて夜にはこのよ日には十日を

とつけ侍となん。是を連歌のはじめとは申傳へり。軍陣の祈誓にも第一神威あるはか様の所謂にや。唐の代おこりて我國をかたぶけんとせしにも。貴妃に生れたまひて彼世をみだれしもこの御神の力とぞ。方士がたづね來れる蓬萊も此勝地を申となり。長恨歌の大眞院此宮の春敲門思ひよそへられたり。はるくいりたる海づら。宮中の木末神代おぼえたる氣色。霜がれをもしらぬみどり。常住不滅の表相うたがふべきにあらず。瀧坊興行のこゝろざしはありながら。大宮司於濃州うち死。かたがた今度は遠慮しかるべきのよし申たるに。結句霜臺より興行の事内議もよほさるとなん。亭主祝着のよし申されて。發句の事は下國毎度なれば。辭退たびくなれど。

霜がれやほなみにかへる萩の聲

庭の萩など下國をきゝて萩のこさせたるなど



院主物かたりの首尾なり。されど旅人の奔走には成がたきひとむら成べし。この會已後。大宮司の吊申。座主檢校などへをとづれて。津嶋まで歸りたり。祇園神主兵部少輔清待活計。殊源氏物語一部。東國のみやげとて取出られたり。かやうの事は我々こそなど申けれど。しゐての事に成ぬ。太陽軒下國。ことに最例興行とてさりがたければ。

江のこゑも今朝うくひすの汀かな

これも千五百番の古本など思ひもかけぬ事也。奥津入道京長牧運軒。

遠山のゆきにまたれし朝戸哉  
安樂坊。

神松の木のみ霜ふる御はしかな

本覺坊ある人千句興行。卷頭の發句とて所望。

ときは木にふるや幾代の峯の雪

平野源助ことに旅宿の亭主なれば。一座の事

色々申けれど。こゝろやすく。上洛の次でに  
など申やぶりに又桑名に渡海。  
あ

たり意足軒一運など出むかひたり。寶泉坊あつたまできて。宿坊の事申はればつきたり。まづ意足興行。

浦馴てすむ世やいつれ友千鳥

新造のこゝろばへなり。大泉院。

月雪のあはひにあつる海邊哉

伊勢尾張のあはひの海づらとはおほくは此所成べし。此會の翌日。伊藤新八郎。朝飯すぎて。友軌をば彈正忠御返事もたせてつかはし侍り。那古野より參河へは日のうちに下着の所ながら。當津まで立かへる事は。彼奉書ども相達し侍る禮儀までなり。栗原へはほどちかければ。しづかに用意して。眼阿さきにまかりて。旅宿等の事申侍り。意足是かれをくりにと。馬上物語のうちに着たり。參宮のたより。

ことに興行さだまれるやうにて。かりそめのやどもほど遠ければとて。牧月齋の城へちきにとて。道まで使有。例の一順のためとて。

雪に雁空にもみたれあしま哉

此邊の様ばかりなり。山田より檜牆右馬允。例年所務の事に近邊逗留とてやがてたづね來て一兩年のをこたりなどいひかはしはべり。此會に濱田出羽守光義。明日又興行懇望。難去事なり。けふは十一月晦日。この家は依藤太秀郷の末孫にて。彼龍宮より褒美の太刀所持せられたり。毎月朔日には同名衆出仕。三日潔齋して。供具をそなへ。三獻の儀式嚴重なり。此太刀拜見のため。昨日は逗留の事なれば。未明におきて行水看經などし侍りし。勢田橋再興勸進十穀これもけふをまちえて早天よりたづね來れり。奇特の事なり。當城難儀のおり／＼神變の事どもかくれなきものなり。太刀箱の

しめ七重の袋。こまもろこしの錦色々なり。再拜してさやぬかれたる。二尺七寸ばかりぞあらん。ともづか。白がねのつばいづくよりいりけむともみえず。朱雀院の御宇の事にや。いかにばかり物古侍らむ。毎朝ほこりをはらひぬぐはれ侍れば。ひかりさやかに。見るから身の毛もよだつやうなり。一年強敵にあひてつばをわられ。すでにぬかむとせしかば。敵たち所にめくれてうたれぬ。その疵つばぎはに侍りしが。年々いへあひて。今は針のさきほどみえ侍り。老眼には慥ならず。この太刀のゆへにや今朝大ふぎして。濱田迄は七八町のほどゆきもやられず。

降わたす雪は山鳥の屋上かな

八峯千草岸つゞき。この牀にてありけむ。夜ふけて走て侍りしに。息孫太郎去年わたり元服とぞ。せいは見あぐるばかりなれば。盃をよ

ひなきよし申たれば。猶以しゐられてやうやう歸りぬ。是より浦まで五十町ばかりなれば。ひるすぎに。羽州其外駒なべて。はるかなるひがたのなかに松原あり。神明ますゐがきのあたり。みかはらけ出されて。立かさねたるほどに。下浦兵部少輔よりむかひきたるをかどにて立たり。藏春軒旅宿にてこまぐなり。やがて少輔殿光義御非時有。更にさしむかはれず。今夜は一盃やうく申遁たり。ひとひは休息すべしとて。後十一月四日興行。

わたつ海のかさしの花が雪もなし

海上の雪たまらぬさまをかやうにとりなし侍り。おぼつかなし。いま一座懸望とて。圓福にして。

水鳥のをりはへあやのうき藻かな

見えたるまゝなり。これより智多の大野のわたり七里となむ。舟の事かねぐいひつから

れて。天氣も大切の事にて急ぎ侍り。息彦次郎殿をはじめ。湊ちかき小庵にまちかまへられ。餞別の盃。又ほどふれば一運たちて。ざれ舞などしつゝたゝせたり。祝着とはいひながら。我も桑名へといそげばなど。のこりおほく。舟にのりうつれば。送の衆は駒なべて。たがひのかへりみ行かくれぬ。この海にもふたがりとして賊難有とか。警固の侍あまた。同名左馬允をのせたれば。おぼつかなからず。夕なぎして暮はてぬほどにをしつたり。かりのやどりして。本庄一竹齋へ人つかはしたれば。おどろきながらにて出むかはれたり。今夜は此濱の筈屋にと申たれど。火事などしげきころなり。ほどもちかければとあれば登城したり。やがて松波閑宗服田治部卿音信。いづれも舊友なれば。都の物語しつゝふかし侍り。翌日左馬允息八郎殿を使として朝食のよし有。まづ城のあた

り見めぐらして侍るに。段々坂々の石だたみ。塵をもすへず。なかばのほどにさゞ波よするばかりの出水見えたり。天然の境地なり。食已後自身同道して。奥までのこされず。あすは數寄の衆もよほして。むかひの慈覺寺にして。

月や霜あらしのうへにわか松

此分なり。石川左衛門尉は京都より便書など通じけむ事なれば。このたび不弁の一座をもと切なれば。

しほ風の雪やあきみつ遠ひかた

このひがたのさまばかりなり。此會已後常滑までと急侍るに。やがて水野監物丞より使有。先年在京の比は連歌のさたもなかりしを。一兩年すぎにて。大野の衆同道あるべしなど契約の所に。參河より尾州へ手遣あるべしの使昨日きたれば無念のよしかずくの事なり。本より急侍ればよき事にて。何様にも歸京の

頃になど申あひたり。大野より一里ばかりなれば。はまづたひ逍遙ども種々奔走。目もおどろくばかりなり。けふは十二日精進ながら。懇切も難謝やうなれば。衆議にまかせたり。大野衆いまはこれよりなどいひて。

出てこし都に似たる名殘哉昔の友の今の別れは

と。馬上より見別れたり。な々の渡りまではほどなければ。敵地ちかく送衆歴々なり。舟の事昨日よりいひつけられたれば。てまもいらす。暮はて、參河大濱までをしつれたり。稱名寺の住持濱までわたらせたまひをり侍る。數年亂後。ことに敵城ほどなくて。毎日足輕など不慮に打よせる比なれば。たゝみさへなき不辨さなり。一會の事あまり聊爾にやなどあれど。心ざしのほども見えければ。

かきくつしうつみ火つくすむかし哉

そのかみ當國にやすらふ事ありけむ。當寺時



衆相阿覺阿などいひて。連歌執心せし人々の物詠しつゝ。爐邊懷舊なるべし。十三日。岡崎までといそぎ侍れば。住持も馬にて鷲塚までわたりたまへり。道のほどもおもしろし。君をくるけふの別れば駒なへて打出の濱の心地こそすれと申かけたれば。

君にけふ逢坂山は遠けれと此別路に關守もかな

大津の莊嚴寺に住たまひしを。藤澤よりの仰にて。去年この道場に入院ありけむ。其身花山院殿の御息。嶋の公方義直様の御猶子として。花頭殿にならせたまふべき人にてありしを。おもはざる亂出來に時衆に成たまへり。哀なる世なり。八橋のわたりはいづかたぞなど事とひ過るにはるかなる野あり。東の雲まに雪かあらぬかなどおもふほどに。富士成けりといふ人あり。おどろきあへり。

八橋や思ひわたりし富士のねを雲のはつかにけふみつる哉

といひつゝ。わしづかの寺内一見してわかれたり。むかひは吉良義隆大家御里成べし。この眺望えもいはぬ入江の磯なり。船より馬ひきおろさせ。うちはへ行ほど。むさしの國まで思ひやられたる野徑うち過て岡崎につきたり。安部大藏元など知人。をはりざかひまで出陣の事ありていまだ不歸。大濱よりは申遣たれど不届や有けん。留守にもいひをかす。途中のさまよひもめいわくの様にて孝順このわたりにあるらん。たづねよといふ程にふとあひたり。まづさらばとて大林寺金剛軒と云所へ同道したり。このたびね不辨又其興なり。軒主馳走おもひもかけぬ煩どもなり。翌日大藏も歸陣したれど。猶旅宿はもとのまゝなり。石河右近茶湯用意とてすいぶんのふるまひどもなり。松平三郎かたへ去年三條西殿御下向。當國御料所の事など仰られて。いさゝか進納の事あ

りけむ。其御禮として女房奉書相達し侍り。明日深溝まで送の事申たれば。西郡より孝清きむかはれたり。金剛軒にて一夜閑談しつゝ。みなみな同心して岡崎を立たり。松平伊忠又八舍弟路次までむかひ。うちつれて深溝に着たり。むかひの小寺に旅宿いひつけられ。小野田雅樂入道所。石風呂よしとて。休息して。又八見參數年のをこたりなど申侍り。父大炊助好景時より無三等閑事なれば。心やすく兩日遊覽して。

花かともいふまで雪のまかきかな

柴垣新敷しわたして。なにとかなおもへる氣色を謝したる様なり。此會へは鶴殿光義。そのほか見翁坊藤介元心など。更行ほども忘たり。西郡へはほども近ければとて。又中酒事過ぬ程に立侍り。藤太郎道までむかひ。うちはへて先常顯院へつきたり。長持より使同道して。しづかに城の山々里々見し世にかはらぬ年をへ

て。繁昌所がらにや年がらにや。當國數度の怨劇をものがれし城なり。去々年尾州まで下りし時も。此次音信すべしとて。千句の用意。旅宿ことしことあたらしくかまへられけるとなん。難去子細ありて上洛。今度の下國もおほくは左様の禮をもなど存よる事なり。先應寺興行あるべしとて。

鐘の音も半はゆきのみやまかな

雪山童子半偈と思ひよれるばかりなり。此會已後於城千句有増あり。俄なる事にて一向無調法ながら。先年の無念ばかりをとあれば。不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>辭。駿河まで年内にとおもへば。長々逗留はめいわくの様なればと。越年をもおなじくはこゝほどにてとのこゝろざしなれば。いなびがたき成べし。毎日潮をくませて。孝行湯養生第一なり。東國の湯治も此分にやと思ひつ。過行日數も忘たり。廿五日。千句始行。卷

頭。朝雪。

雲水も雪にはれたるあしたかな

當城の遠景。雪のあしたのさまなり。廿九日。  
藤介旅宿にて。

春風のさかひを雪のやなき哉

春風の柳よりは猶雪の亂をあいしたるころ  
にや。玄長一座。

降もつめ雪こそいその草葉かな

雪を見ることにとりなし侍り。この會夜更たり。ちとほども遠くてとまりたり。又翌日。色造作ともなりけむ。是を巻軸にて發足とさだめたれば。菅沼織部入道より。山家の爲<sub>レ</sub>躰をこの次に見よかしなど書信有。先年安城居住。若衆のころより知人なれば。態もまかりくだるべき程の舊好なり。上洛の次を期して。こなたよりは無音の所に。おもひよられし深切いなとも申がたし。殊更難<sub>レ</sub>去子細あれば。十

日比にと内議あり。遠州路次の事。兼々濱<sub>ヱ</sub>のわたりをと。鷺津の寺まで人つかはし申あはせたれど。取かへし山中になせり。今五六日いたづらの逗留なり。常顯院餞別の御齋をとやくそくなれど。さらば連歌にせらるべしとをのをの異見にて。六日には宗長月忌もつるでよくて。

冬は梅ころなとむるにはひかな

寒梅のかすかなるころにや。〔七八日は都文書て。宗丹これより歸庵なれば。道すがらの書狀無斷。水野監物承發句所望ありけむもわすれて。この便宜にとあれば。〕

たつ跡をなし鳴ゆきの友れかな

已前の残おほさを筆にまかせたり。十二月十日西郡を立侍るに。百人ばかりうちをくり。みやこしこえといふおもしろき海づらより別たり。

さする人なくて別れし旅驛にも名残はさそなおいのこし越ほしこえを。こしこえときゝたがへて。若衆たちへのざれ事なり。又申なをして。

立歸り又も逢まくほしこえやかすゝあかぬ老のさか哉

うしくばよりむかひの人に逢までと藤太郎又三郎以下駒なべてゆくに。大塚といふ里あり。この所にむかしとうりうせし事など思ひ出て。岩瀬式部方へ案内しつゝ行ば。ほどなしうしくばのむかひ來り。さらば是よりとて西郡の衆はかへしつ。又牧野平四郎已下きむかはれて。田三郎豊河の寺にてまたれけるよしなり。長老も出座有て盃たびゝ。歴々のしたて過分なり。酒半無理にまかり立たれば。道まで色々持せられて。平四郎平三郎其外同名中。富長ちかくまでをくらられて。織部入道息達。今泉彌四郎已下。早々よりあひまちたるよしなり。去年以來山家國中とりあひ出來て。この道は

一向不通にて侍るを敵味方をくりむかひ參詣して行別たり。そのかみ鳳來寺參詣して見しわたりなり。織部新城目をおどろかしたり。年經て出頭。息新八郎をはじめ。子どもあまたいづれも器量に見えたり。旅宿とても別のかまへもなく。數寄の座敷へむぎゝなる旅の具どもはこぼせ。やがて風呂。夕食くゞる鴈が音のりやうり。尾州遠の名酒。路次不通の時分奇特の事なり。難<sub>レ</sub>去事とて。十日頃まで延引とありしは此用意にやとみえたり。豊川の餘醉散々ながら。又大酒に成て夜ふけたり。四五日は逗留すべきよし。しきりの事なれば。すでに月追。一座の儀もあすとて。發句のもよほしもなかりしを。書付てきたり。

あはてたにかへるさいかにゆきの友

河邊月雪の時分なれば。事古たることをおもひよれるばかりなり。十二日。無理に立かへ



り。同名親類の連衆までこゝろの錢ども難レ謝事なり。行末は所用もあるよしにやなど。都の留守不弁もいかにと。孝清孝順とりもちて西郡へつかはしたり。鵜殿邊懇志のものどもひとつになど申あはせたり。在々所々の芳志。都の便宜にと申をき侍り。おもひもよらぬ事どもなり。是より遠州までの送自身の様なり。前なる大河うちわたして。むかひのきし野のほとり疊しき。をさへもの。色々梅のつくりえだ。春まちえたるこゝちし侍り。楠千代殿盃過し。夜の峯の雪かげは。盃中におちたるさま。たゞにはとて。

詠めつゝ、別れむかたもなかりけり汀のこほり峯の白雪  
楠千代。

立別れ行らんかたの峯の雪汀のこほり思ひこそやれ  
など有けむ。不春軒西江山中まで物語しつゝ。  
すぎがてにわかれたり。今泉彌四郎又五十町

ばかりをくりて。名もしらぬ山ぎはの里。神さびたるやしろのかたはら。その大まつだけなど。ともの人々かはらけ取出たり。こゝもとまでの故實。定て父慶旁のしわざならんかし。このさかづきも数々のこりおほけれど。主ある神の木のもとなれば別つ。井伊次郎殿へは孝順知人にて。昨日申つかはしたり。このわたりまでむかひくるらんなど申もあへず。深山をこえて。侍の四五人。井伊殿同名彦三郎迎とてさきへ案内あり。いそぎ行ほどに。かた岡かけたる小城あり。これも井伊一家の人。今日谷まで下着あひさだめたれば。抑留にをよばずとて。使僧して樽さかなをくらる。馬上蓋の躰なり。初夜の過に和泉守所へ落着たり。次郎殿やがて光儀。明日一座の懇望。又。

太山にももとやさくら雪の庭

かゝる山中にて。執心大切なるこゝろをいさ

さか風したるばかりなり。十四日。引間までいそぎはべり。次郎殿自身。其外同名中。都田といふ所まで送ゆく。又さかづき。かりそめのやどりにて。歸京の次。又かならずなどあれば。

歸りこむ秋をまたなん都田のあせの細水みづゆき別るとも

といひつゝゆき別れたり。又廿四五町。引間までをくり有。この野は歌枕にも當國にいりたり。萩女郎花などよめるにや。秋の花ざかり思ひやられたり。孝清。富士見つけたりやとおどろかされて。みれば手にとるばかりなり。馬上より。

昔みし富士や雲おになしはてむ君引まののしるへならずはといひかけたれば。

めつらしとさそな心も引まのや馴しゆきゝも山は富士のれなどいひかはして行まゝに。引間の迎きたり。飯尾豊前守へは。參河より下國の事申遣たれば。駿豆再亂によりて。蒲原城當番なり。され

ども留守の旅宿。駿府まで送の事。嚴重にいひをかれし事にて。江間彌四郎殿馳走。今日の寒さいかゞなど。炭薪などとりくはへ。風呂入湯などむづかしきばかりなり。夕食已後若衆などあつめて大酒。更はてたり。孝清は關東までかねて懇望なりしかど。近年わづらふ事あれば。三河人おほかたかきてこれとかくしつ。駿府へは當所より三日路。慶順とて入道あり。この入たる事はあぶらぎりたり。これにいひつけられたり。送の馬人はいふに及ばず。とまりどまりのしたゝめ。ひるのやすみまでのこる所なし。今日は掛川のわたりまでと急ぎ侍りしを。天龍の舟渡河風ふきて。池田の宿遊屋が跡まで事とふほどに。見つけのこの傳馬いひつくるあひだに暮たり。さらば今夜の旅宿はこの家になどさだめたり。鬼やらふ夜とて。まめうちさはぐほど。十五日の月さし出

て。いとゞ都おもひ出られたり。此所は今川貞世の住たまひしとなん。むかしゆかしくて古城のあたり立いでて見めぐらす。袖の山風吹たてばかへりたり。あすはさやの山大井川ゆき過ぬべしとて。未明よりおきたりければ。立春達君をむかふるとて。

年の内の明ほのかすむ山端を見つけのこゝに春はきにけりやふ梅ほのかに咲たるを見て。

咲きにけり旅驛の宿の垣内にも春はきたのの梅のはつ花北野の御やしるにて越年。瓦礫など手向馴しことをおもひ出しなり。急ぎゆくまゝ。佐夜の山もちかし。日坂とかいふ茶屋にやすみて。跡なる荷物などまつほど。この山の名物なりとて。蕨もちゐるといふ物しすましていだしたり。一年もさ有けむなど賞翫も一入。たゞにはいかゞとて。

年たけて又くふへしと思ひきや蕨もちゐも命成けり

この歌にめでて皆かずもしらずまちつれてこえ行ほどかひがねのかたにこゝろつけよなど宮内卿友軌などにいへども蕨のかねにめとゞめしほどはあらず。よこなる雲はれやらで。さやかにも見えず。こよひすぐさず大井川をわたるべしとてあなたつぎの麓にて駒かはせたる。

いくせしらなみとか見わたされしにかはりて水もあさし。數日雨にもあはぬしるし成べし。暮はてゝ嶋田といふ所につきたり。山下風吹て疎屋の板戸たまらぬはげしさながらいざよひの月さよの中山より出て。ふきゆくまゝにうす雪散きつゝ。さらに忘がたきたびねにぞ。年たけてふたゝひ越し思ひ出や雪と月とのさ夜の中山とこゝろのうちに吟じて。すこしはまどろみたり。けふは府中まで。やうもいるまじきなどいひて。明はてゝおきたり。藤枝とかいふ里過て岡邊に着たり。うへつぎの山口入て行に。葛かへ

で霜がれていと心ばそし。ひとゝせ宗長老人同道してこの山を越けるに。府中よりむかひにこし人々も。きけばおほからず。丸子山家まへくるほど。其世の事おもひつけられて。

うつの山ことふ人は夢とのみみしよなからの峯の松風

とこゝろのうちにおもひつゝ。府中も近し。旅宿のくらしもとみし人有ながら。一花堂住藤澤二寮越前より去八月入院のよしつたへきゝて。參河より便事にて申ければ。草の薙をも先の寺にこそはなど。兼々の事なれば案内したり。待わびにけりなど。やがて相看。越路の物語しつゝ。風呂非時など例の事なり。誰庵想印軒竹軒などへ住持より人つかはされたり。誰庵おどろきながらとてきたられたり。これも參河より下國の事申たれば。なにとて此方へはなどあれど。在府中里坊にと申さだめたり。まづ引間の送かへしつかはし。慶順が蒲原

へ着府の趣申べしとて急侍り。今日はやすみてといへど。豊前まぢかねらるべしといふも尤の事にて。今度はるゝのをくりしうちやくのよしかず／＼書て。筆の次に。

忘れめやさよの中山なかくにあひみしよりもふかき心なと申はべり。まことに懇切の事なり。一座の事住持より使有。太守へ御禮の後しかるべきか。廿四日より別時なれば。其前にこそはとて。想印に談合。則披露せられたり。先年御在洛のおりふし。別而御懇意の事ども有つる行ゑなれば。明日此方しだいに參上すべきよしなり。そと申入てやがて退出。廿一日興行。

一花もことしやさかり宿の梅

餘花早梅の發句は。つかうまつりにくき様に先達もいへるが。げにも春を待えて冬ごもる木末などいはぬは。季に成がたき故なり。こと葉にはそれともなくて。季をつなぐ事は。思案



おちつきたるうへの事成べし。この心も先年  
内立春を心にこめて。しかも一花ひらくれば  
などいへる古語をおもへり。一輪咲たれども  
この風雪のうちには盛なりけりとおもひなし  
たる心なり。後に人の語りしは。此發句春にや  
ならむかなどいひしもの有とや。連歌は歳に

もよらぬものなり。唯性ある心にむづかしき  
作意を領解する。此道にかぎらず。無作意のこ  
ころにはめこの算とやらむ。うちひらめなる  
句よりほかは。みゝにおちぬにやあらん。若輩  
のためついでにしるし侍り。一日もまかりす  
ぎしとき。丸子山家とぶらひ侍らばやと思ひ  
つれど。同者誰庵誘引してとおぼえて。けふは  
天氣も長閑なりと申つかはしたれば。馬ども  
用意させてまたれけり。柴屋よしみの人々さ  
そはれたれど。歳暮なればさはる事ありて。一  
兩人ばかり。なぞ其興ありけむ。今年は十三回

なれば。於近衛殿<sup>ニ</sup>和漢百韻詩歌一續興行つ  
かうまつりたり。懷紙影前にをかれて其世の  
物語。老涙とぞめがたし。水石かはらず。手づ  
からうへられし梅楊かつめぐみて。けふをま  
ちがほなる庭のけしきなり。薦のかれ葉ふみ  
わけて。はかにまいりたれば。

柴屋の苔の下道つくる也けふを我世の吉日にして  
と。そとばの様なる板にかきつけられたる跡  
も見えず。この歌は先年下かうのとき。ざれの  
事のやうにかたりたまへりし。其後又はか所  
をかへられしとて。

又つくる苔の下道柴屋やながらのはしのむかしなりけん  
と書つけられたるあとは。いまにほのかにの  
これる。やり水の石ばしふみかへりて。

うつの山谷ゆく水に残りけりむかしなからの夢のうき橋  
などいふほどに。一盃すゝめられて。誰庵もゑ  
いなきのやうなり。發句あらば。府中の庵に

て。年のをはりの手向許にもとあれど。馬の口つきども暮にけりなどいへば立歸りたり。府中にきて。

見れはみし跡とふ雪の山路かな

とおもひつゞけ侍り。彼物語のこの山の段にかゝる道はいかでかいまするといふを見れば。見し人なりとか有ける詞をとりたるばかりなり。是を誰庵につかはしたらば。かならず興行せらるべし。あまり月迫なれば。わづらはしさもいかゞにて。獨吟につかうまつりたり。歳暮皆々とりみだしにて。いふ一座も侍らぬも尤の事なればとて。竹軒興行のあらまし申きたれり。この立春をむかへて満八十なり。上洛のついでまでのちも期がたしとて。しきりなれば。

細石にかそふるとしは暮もなし

と祝し侍り。顯甫此ごろは小河に難く去事有て

着府。一兩日聞ついたりといひて。越年の料などこゝろざし侍り。晦日には太守より想印御使として、馬人さりあへぬほどなり。都にも似ぬ年の暮成べし。冷泉大納言殿御在國の事に。御樽たまはりたる。過分の事なり。これより炭薪など進上次。爲尹卿眞筆千載集正本にやと。備御覽之。

しるへせよ小野の山柴分まよふ跡ふりまさる雪の道芝と申たれば此間十行闕

と仰られて。近衛殿御息事なれば。不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申事なり。彼千首も京にをかれたり。こゝにも手跡あまた侍れども。他所にあつめをかれたれば。上洛の時猶見あはせられてなど御懇書あり。住持より元日の小袖餅かゞみなど。めしつかふまで過分なり。ことさら絹綿禁斷のしたてとも見えす。御喝食のついでにもやとみえたり。元日は客殿三獻のいはひ。なにやらん試筆

心に申つかはしたり。乗阿宗旨にはかはりて。  
唐物數寄にぞおはしける。詩をつくり給へり。  
例年の事にて。

朝日影匂へる空をしるへにて四方にあまれき春は來にけり  
發句。

さそへけふみやこにかはる花の春

三日月を拜して。

春はまつほの三日月の雲る哉

と申すてたれば。乗阿聞をよばれて。

雪はかすみのにのこる山のは

とつけられて。第三をば宮内卿にぞ。

かへる鷹そこともなみに聲きいて

など。四五人してよひく百韻にや成ぬらん。

七日は誰庵にて和漢興行。

けふつむやいくふることの初めかな

例年柴屋在世にも人々の興行ありけん事など  
おもひよれるばかりなり。十三日は太守和歌

の會はじめ。年々歳々斷絶なき恒例。珍重の事  
なり。出題冷泉大納言殿。竹爲レ師。

すくなるを道としなさは竹とりの翁も君になひかさらめや  
此物語當國に山緒ある事と云々。

當座 寄レ川戀。

年も經ぬなかに隔て佛はたつ川きりのうき身なからに

十八日想印軒。

たちなはいさめし雪かあさ霞

又も降しけといさめしゆきにや。

西方寺とて。縫物上手にする時衆。一座のよし

望なれば。不弁もをしはかりて故障。發句をだ

にとて。

梅柳をりぬひものゝみたれかな

江州進藤山城。年頭の會はじめにて去年所望。

鶯のむめか枝うたふあさ戸かな

寶樹院。

梅は世にふしのけふりの匂ひかな

當住三條の御息なれば。薰の心なるべし。太守にも御興行有たくおぼしめしながら。年頭毎日の佳例など寸隙も御座なきうへ。下國の御いとまむりに申侍れば。一夕めして冷泉殿中御門殿出座。大御酒過分の御したて酩酊。やうやう退出にて熱海湯治可<sup>レ</sup>然時分に成侍れば。いそぎまかり立べきとて。駿豆さかひ不通なれば。吉原城主かののすけ松田彌次郎方へ朝比奈三郎兵衛尉飛脚。密々つたひくつかはされたり。定別義あるべからずとて。正月廿六日出行に相さだめたり。乗阿今一度のあらまし侍りしかど。京文參河文など。二三日書侍れば。寸暇もなくて。餞別の一續をとて。題の事冷泉殿へ申されて。二首の懷紙。

行路梅

玉鉾の行手にとまる梅かか袖の別れそ立空もなき

神祇

立歸りしつはた山のおや杉を秋のにしきの手向にそみむ  
當座 朝鶯

朝ほらけ花と散てや深き夜の鶯さそふ春のあは雪

廿六日。送りの事。早々にと申さだめたれば。昨夕朝比奈左京亮召請。獻々深更に及び。無<sup>二</sup>正躰<sup>一</sup>ておきもあがられず。やうくひるほど發足。知人たちいとまごひとてきたられしもうはの空なり。想印馬ども申つけたりとて。ぬさの物とりそへて。

別路におれる柳の糸よりもほそき心の色はみゆらん  
なにさまに上洛にはとたのもしければ。

東路のゆく手におれる柳にも都のつとそ思ひやらるゝ  
又珠易。

旅衣うらやましきはおいつるのとひたちぬへき心とをしれ  
返し。

旅衣うらやましくはとひもたてあしも心もわかぬ浦鶴

など申つかはして出たつに。一花堂の喝食各  
其外一里ばかり歩行にて物語りしつゝ。田中



の杜の陰に土器取出つゝ。又いつかはなどの

こりおほくて別れたり。誰庵は蒲原までと兼  
兼の事にて。駒うちには清見が崎も見わたる  
ほど。江尻といふ里の小庵に立よりてやすむ  
べしとておろされたり。餘醉もやう／＼さめ  
て。今朝は露ばかりも口ふれず。いかゞなどお  
もふほどに湯づけ出たり。同宿殿原などとき  
はしらせての事にぞ。さすが作者のこゝろづ  
かひにてこそと。はめ／＼しやうぐわん心地  
よし。清見が磯くるほど。むかし宗長のしるべ  
にて。一夜とまりしよこ雲のまぎれ。夢の心ち  
し侍り。今日又誰庵同道。契かはらぬ濱づた  
ひ。岩の氣色もいかゞ事あさかるべし。關きんの梅  
さきて。みほの松原みどり紅なり。

さらてたに心とめてゆく袖に梅匂ひくる關の春風  
などこゝろに吟じ行程に。馬より誰庵。

鷗睡 濱瀬三穂間

雪晴洛客對山顔

秋來期約催歸思

此景莫忘清見關

宮内卿にいひかけられたり。和韻おもひめぐ  
らせなど申侍れば。蒲原より豊前守同名衆あ  
また迎にきたれり。誰庵はさらば是よりとあ  
れば。

歸りこむ月の秋まで忘れめや清見か關の春の浦波

といひつゝ別れたり。蒲原につきたれば。まづ  
休息すべしとて。おりゆなど用意させられた  
り。吉原の返事もたゞいま到來とてみせられ  
たり。ことなる事なければ安堵したり。夜にい  
りて本城へまかりて。まづ舊冬のをくり懇切  
申侍り。原六郎二俣近江など相伴に出られて。  
又こうたまじりに成て。近江守一さしまはれ  
たれば。さながらうちおろしの大明神の出現  
のやうなり。これを興にして立たり。吉原へふ  
ねの事は二三日以前より用意させられたり。  
ことにあさなざしつくし。したゝめの事膳部

かたへ早々と申つかはしたれば。ほどなくつかひあり。食過て豊前守そのほか濱まで送。田子浦とは此邊にやなどたづねたれば。清見が關のこなた六里ばかりのほど。みな田子のうらとなむ。舟にのるとて。

打出て思ひもをくれかへりみる山は富士のね田子の浦なみ昨日より風はなぎたれど。まことにたゞぬ日もなき浦波に。こぎいづるほどもめづらし。敵地への送なれば。警固船兵具いれて。人數あまた乗たり。一里ばかり過たれば。吉原の城もまぢかくみえたり。この舟を見つけて。足輕うち出。事あやまちもしつべきけしきなれば。十四五町此方の磯にをしよせ。荷物おろさせ。松田彌四郎申陣所へ人つかはしたれば。案内者をこせ。みなと川のわたりし船さしよせて待たり。やがて出むかはれ誘引あり。かりそめの陣所ながら。こゝろ有さまなるしつらひなり。

窓ひらかせ。富士みせられたり。けふはあやにくにくもりなどのこりおほげなり。三嶋まで送の事申侍れば。しきりに抑留なり。今春八郎三谷など。昨日小田原よりとて時宜ども申つたへたり。むりにまかり立べきよし申はべれば。こゝろなくとゞむべき事もけうなる様なればとて。さかづき出されて。湯づけのしたていつのまにとみえたり。相伴とてひたいはいしあせのこる處なげなる若衆出たまへり。誰ならんと目とまるほどおもひわびて。彌八に事とへば舍弟源五郎殿となむ。三嶋のとまり後悔せり。盃たびく。小田原邊にてはみつみつあるべしなどざれ事まじりのうたひになして行方も忘れたり。送の衆あまた。乗しづかなる馬ども出されたり。はるかに門送り。色々申てかへられたり。堺目不通難儀なれば。まかりとをる事さへおぼつかなく覺えたるに。思ひ

もよらぬ念比さ。ことに三嶋まで。吉原といふ侍。馬にて送の事いひつけられたり。一かう若年とみえたるに。きどくのこゝろづかひどもなり。かののすけもおなじく三嶋までなにしをそへられて懇切なり。ことに一昨日不慮の事有て。愁腸前後忘却とやらむきゝしに。たびたび使かへりてめいわくのやうなり。浮嶋が原うち出てゆくほど。たかねのゆきはれみくもりみ。雨に成ぬべしといへば。駒かけらせ急げば。千本の松原といふ木末みえたり。北野のわたりおもひ出られたり。三嶋に着たれば。雨降出て暮ぬめり。伊藤とやらんいふもの有。送の人案内したれど。客ありとて不思議なる旅宿したり。翌日はれやらねば。参社も申がてらとて。けふは逗留。ひる以後神前にまうでたり。ゐがきの梅ちり亂れ。御橋の柳なびきわたり。えもいはぬ水のながれ。神の御心もくみ

しられたるいさぎよさなり。八ヶ國の鎮守とおはしますよし申せば。行する事なくなど祈念し。小神樂まいらせて歸たれば。三齋とやらむきて下かうのよし只今うけ給はり及びたるとて。物語などして。あまりに不辨なるやどにて侍る。笠原玄蕃助といふ人有。楚忽ながら同道すべしとなり。はづかりながらけふのまもくらしがたき所なれば。しるべにまかせたり。亭主やがて出られて色々念比なり。養父の時も。宗長上下の旅宿にて。有けんむかし語どもして暮はてたり。あす俄に興行のこゝろあるよし。三齋して懇望なり。宗祇。宗長。獨吟千句も。當社にての事にて。其時分は執心の人連衆などもかたのごとくありしをなど。法樂の發句つとめすは。神慮もいかゞにやといはれて。

ちる梅やみしまゆふはな春の水

社頭の春の興成べし。此會已後熱海湯治。折ふし幻庵老母養生とていらせ給へり。幸の事にて。近藤殿御ふみつたへ參らせたれば。おどろかれて。旅宿等の事懇切なり。ことに幼年のころ三井寺在寺のおりふしぞと。向顔の事など物語られて。小田原歸府迄はほど遠き様なればとて。發句の事いなびがたくて。

梅がかもわくや出湯の春の風

自然風流なる袖のにはひもまじるらむとをしはかる心ばかりなり。二月十四日あたみを出て走湯山一見。ことにあすは御神事にて。御社頭のあたりにぎはしく。遠近人もかつまじれり。湯瀧。水瀧。濟度の海におちあひたるさま。煩惱のあかもすゝぐ心地したり。眞乗坊といふに立よりたれば。わりなく發句所望。

まなくよる山や春雨たきの糸

見えたるまゝにや。大庭の石上など。同道して

行まゝに。どひのうらちかくなれば。杉山の城ふりさけ見つゝ。まな鶴がさき。石上る所にて。さきに人つかはし。船あそびのまうけしつ。しとゝの岩屋みせ侍り。此岩屋は杉山の合戦にうちまけたまひて。頼朝かくれおはしけるを。梶原平三見つけてたすけ參らせし。此忠節によりて。無三比類。近習になれるよし。東鑑にみえたりなど人のかたりし。さもあるにや。大庭千世に。

登小舟さほのとりにくみつる哉しとゝの岩やまな鶴かさきなどいひつゝ。さしよせて。小庵におりたり。さかないろく。手づからとりくひつゝ。數盃。興に乗じて駒なべつゝ。小田原もみえわたるほど。幻庵より迎たまはり。永田源左衛門所の風呂たかせられ。夕食のしたて。歴々の様ながら。手だにふれられず。太守へ御禮の後。春庵院いて長老館のはな見にわたらせたまひて。



數樹繁櫻開更佳

一鶴一詠興無涯

坐來知是遠方客

併見長安陌上花

今日參扣のこゝろばへなればとて拜見させられしかば。韻を和しまいらせて。

さかつきの春幾めぐりけふのまも千世なうかふる初櫻はな  
太守。發句つかうまつるべきよし再往の御懇望なれば。

庭やゆき雲なのきはの山櫻

庭前繁櫻のさま成べし。伊勢備中入道清辰長  
長在國。今度下國再會。殘命のしるしたゞには  
いかゞなど。不弁の興行ながら。同心もあれかしなど。こま／＼の事に成て。

忘られは花もみやこのうちみ哉

月花の興にはしせん都をわするゝおりも有べし。されどもひとへにむかしこひしきこゝろには。この風景もうらめしかるべしと察し侍り。會以後大酒。兵庫頭。息八郎殿。舍弟又三郎

殿。大和信濃。いづれも一好の事なれば。さながら都の心地して沈醉。えひなきもとめがたくて深更に歸り侍り。此會。翌日まかりたつべきにあひ定めたれば。太守より館花いまださかりなれば。明夕參上すべきよし御内議あり。君卓のかざられ庭籠の鳥。かす／＼のおもしろさ。やり水のかけひ雨にまがはず。水上は箱根の水海よりなどきゝ侍りて驚ばかりなり。例の發句又當座。

はなの色も鳥の音おしむ夕哉

たゞ今の景氣成べし。この發句にて一折獨吟にすべきよししきりの御事にて。然ば御脇をなど申侍れば。作者にとて。

かすみにもるゝこすのとやま

今日は二月廿五日。北野御神事。右京兆一日千句万代不休の吉日なれば。御稽古のはじめには。尤珍重のよし申なして退出。廿六日。幻庵

より朝風呂に在るべきよし使あり。すぎし夜の雨あかつきがたよりさえ歸てや有けむ。おき出てみれば。箱根つゞきの峯々。雪<sup>い</sup>としろうふれり。おどろかされて。

箱根山がすみこめたる明方の春に驚く峯の白雪

幻庵後園の山家見すべしとて。竹の枯葉を踏分てしるべせられたり。あはかづさの浦々まどうつこゝちして。鎌倉山は茶屋の木末にかかれり。ちかき眺望はいふにたらざるべし。太守へ御いとまの事申侍れば。兩度花見。猶以のこりおほきよし仰せられて。明日廿七日。一續被<sup>レ</sup>遊べしとて。當座。花初開。

匂ひ來る風もまたなん朝露の結へはとくる花の下紐

### 雲端鴈

明ぬやと夜渡る雲のはしかきに先みえそむる雁の玉章

一座已後大酒。新度の小うたども口々ならさせられ。あかつきがた退出。廿八日發足の砌。

色々重寶拜領。宮内卿まで御小袖きやもじなる御したて。みるめもにほひもあやしきばかりなり。又幻庵おなじく小袖。重疊。あづまのみやげなどまでおもひよられて。

花ちれば別れを急ぐ言のはの黄りあふ日をいつとまちみむ

### 返し

花の春あかて別れし心をは葉の秋にこそ色もみえ南

又これより小袖のしうちやくを申て。

めも春に色こき袖の浦波をかけてもいはむことのはそなき

袖の浦小田原の近邊に有とや。宮内卿方へ小そでにそへられて。

身をかへて墓ふともしれ人からに猶なつかしき袖の別れ路

おもひめぐらすほどもなければ。かはりて書

つけはべりし。

さらてたにけふの別れは空蟬の身にしめあかね袖の移り香と申て。彼是駒なべつゝ。歸みがちに打いづるほどに。曾我の古郷みやりて行まゝに。こゆる

ぎの礪もちかく見ゆ。今夜旅泊は此礪まくら  
思ひ出なるべしなど兼々の事にて。笠原玄蕃  
助しる所なれば。さきに人つかはしてまうけ  
したり。たゞにはとて一折の懇望尤のよしに  
て。

若草に波もとなよる礪邊かな

おきにをれ波とよめる心をおもへるばかりな  
り。夜半已後百韻はてたり。旅宿は山陰の小  
庵。はなの木うへてこゝろあるさま。ことさら  
に咲みだれて興をそへたり。

又やみむ花の波さへこゆるきの礪の枕の春の明はの

まことに忘れがたきたぐひなるべし。あさ飯  
のしたてなにをがなと。あるじさかなもとめ  
て。こよろぎのいそぎありくさま。なか川はや  
どおもひ出られたり。又うちいでて。虎が舊跡  
など事とひつゝゆけば川あり。花水川となむ。  
風流なる名もきゝすてがたくて。

駒とめてしはしとりかふかけもなし花水川の波の下草

かくいひつゝ。さがみ川の船わたりしてゆけ  
ば大なる原あり。とかみが原とぞ。これは當國  
の歌にいれりとなむ。此はらのあたりにみえ  
たる神社あり。とへば八幡勸請の一なりとぞ。  
花のこすゑ一木二木神さびたり。

おる人やとかみが原の八幡山神のもるてふ花のさかりは  
といひつゝゆけば江嶋もほどなし。天女すみ  
たまふ勝地。ことさらあすはゐの日なれば。結  
縁すべしとて駒なべていそぐに。鹽どきさへ  
ほどよくまうでたり。胎金兩部の石窟凡見す  
まじく。社壇ちかく荒浪うちよせて。岩の雫糸  
竹をこらす音なひ。長夜の眠もさめぬべし。御  
縁起の趣。天神あまくだり地神あらはれてつ  
くりいだせる嶋とぞ。社僧松火ともししるべ  
してみせられたるに。天上の岩つみ上。細工の  
さしあはせたる様なり。身の毛もよだつこゝ

ちすれば。おほかたふしおがみて立かへり侍り。三切殿發句一法樂せよかしと。しきりの事にて。

たか筆もえやはふしまかうす霞

此嶋のこゆるぎのわたりよりみしおもかげ成べし。とかくやすらふほどにしほみちくれば。渡し舟坊よりいひつけられておりたり。かたせ川こしこえすぎゆけば。ゆるの濱みなせ河も見えわたるほどなり。愛阿彌鎌倉よりむかひにきたれり。しるべしてむかしの跡など問きくほど。暮がたに成てつきたり。旅宿は太守より後藤がたへおほせつけられ。清閑をそへられ。幻庵より多田など案内者とてくはへられたれば。いづかたもおぼつかならず。舊跡のたびね其感有。けふは三月一日。早朝先鶴が岡八幡宮參詣。松の木のまのさくらさかりにて。石清水臨時の祭舞人のかざしにおもひま

がへられたり。近年御遷宮。あけの玉がきよりはじめ。見るめもかどやく春の光。わづかにむかしおぼえたり。まづ金澤一見すべしとていそぎ侍れば。後藤案内いたしてうちいづるほど。めにちかき谷々。右大將家の御跡。山がつもこゝろあるにや。はたにもなさず芝しげらせ。はなち飼駒所えがほなり。するすみいけすきひやされしながれ水。さびいてかげもみえず。こゝかしこ過がてにするほど。暮ぬべしといへばいそぎつきたり。はるかなるひがた。山ふかくいりぬる磯みるめもをよばず。金岡筆なげすてたるとぞ。うへなる山にあり。稱名寺にいたりてみれば。青葉の紅葉事問べき人だになし。しばらく有て。一室とやらんいふ老僧出て。爲相卿詠歌物がたりして。紅葉も老木に成てうへかへられし庭の跡などをしへられ。我坊のはなけふをまちいでたるやうなればと



て。こゝろ有げにさかづき出されて。このはなをばいかゞなどあれば。

けふを思ふみぬ世の秋の色までもこの一本の花の匂ひになど申たれば。又かたはらより發句ひとつせよかし。この老僧興行の心ざしあるべけれどこゝほどの見苦しさ。はゞかりなきにしもあらねばなど。わりなきやうにて。

秋もいさ青葉に匂ふ花の露

花の露かゝりたるあをばは。紅にも染ましたるやうに申侍り。さらば暮はてぬほどにぞ。とて歌うちへかまくらへくれば。妙法寺住持たるなとたづさへられ。迎にとてきたられしかば。又ゑひをかさねて。暮すぎたるほど 旅宿につきたり。蔭山藤太郎來りて一座の望のよし内議申たり。ことに一向若年の執心もさがたきことにて。例の發句。

こととは、花やしら雲代々の春

三代將軍九代の春もはなはかくこそは圓覺寺の木末さかりにみえたる會席なればなり。連歌以前建長寺開山大覺禪師の御影拜見の事申つかはしたり。ことに小田原より祐藏主方へおほせられたれば寺中馬宿（走馬）たちへ昨日より披露ありければ御影堂鑑のあづかりよびて。老僧四五人出仕せられ。灯明かゝげ焼香し。三禮參らせ。みづしの符をとるほど。なにごとかあらんとおぼえたるに。鏡の面くもりたるに。十一面の尊容さだかにおがませられたり。殊勝にも有難もきどくにも涙落ばかり也。御手には團扇をもちたまへりとみたる人も有。老眼さやかならず。又ほつすをもたせたまへるときもあり。夏冬にかはれりと云々。鏡記にくはしくみえたるよしあれど會席より使たび／＼なれば。懇望にをよばず。此開山光かくれたまひなむとするとき。最明寺殿歎おはしけるぞ。

なぐさめまいらせられて。我すがたをば此かがみにとむべし。形見と御覽じて。佛法興隆の守護とならせたまへなど有とや。あまりに有がたくおぼえて。翌日祐藏主方へ申侍りし。照す世の面かけとめて身を分るちかひくらぬます鏡かなまことに正身の觀音にておはしましけん事。まのあたりにおもひしられたり。藏主より。

當臺明鏡淨無<sub>レ</sub>雲

照破三千世界群

得<sub>二</sub>此佳篇<sub>一</sub>猶増<sub>レ</sub>色分身百億爲<sub>二</sub>君分

雲 心 拜 和

今日は桃花宴。庭鳥よもぎの餅をみるにも。みやこおもひ出られたり。かな川まで道のほども遠ければ。早くよりおもひたつに。あま雲有とて蔭山逗留すべきよし。さまぐの事ながら。むりにたつべしとて馬どもの事申たり。庭の櫻雪とちりきて。のこりおほさをそふるさまなれば。亭主のかたへ。

思ひなく心もしらて別れ路の露よりもろく散櫻かな鎌倉よりかれこれをくりにとて駒なべ。さきになり跡にむれつゝ。さらばやなどゆきわかれたり。西脇清九郎はこゆるぎまでといひしを。所々の案内者して。やうくけふわかるとて。發句へいづかたよりもと所望。彼使もだしがたく。鎌倉にてあらましもありしと急ぐにつけて。節日をもわすれたればおもひ出て。

花なから水上いくせけふの春

と。馬上よりいひつゝかへしたり。ほどなくかな川につきたり。此所へもこづくへの城衆へいひつけられて。旅宿慶雲寺にかまへたり。長老出たまひて。今日の宴をたゞにはなどあれば。

はからすに是もみしかな河つらの桃咲けふの春のやとりはと。桃源の古事をおもひ出るばかりなり。四日天氣よくて江戸の城につきたり。遠山甲斐守

に人つかはしたれば。おどろきながらまづ旅宿の事いひつけられたり。ことに亭主宗三とて和泉堺衆なれば。時宜心やすし。城よりつかひ。明後日上總國へ出陣のこと侍ども。むりに一座懇望のよし有。色々故障めいわくのよし。再往なれども不<sub>レ</sub>及三<sub>二</sub>簡<sub>一</sub>しかればせめてひるつかたよりはじめられよかしなど申て。一順のためとて筆もととりあへず。

玉すたれはなにあげゆく千里哉

この城の遠望。したには運<sub>三</sub>籌帷幄中。決<sub>三</sub>勝千里外。このころをいさゝか祝したるばかりなり。又六日。太田越前守興行の事申來れり。これは小田原にての兼約と申ながら。すでに明日息彌太郎出陣なれば。取亂させ侍らむ。されども斟酌同心あるまじき執心なれば。發句のもよほしにをよばず。

はなにみぬ朝露ふくむ色香かな

見えたるまゝなるべし。一座はとくはてたるに盃色々。彌太郎出陣をいはず。連歌の心だてみえたり。立かねて舍弟西堂のえさりがた<sub>く</sub>例の酩酊。このかへさに富士見の亭一見すべしと申たれば。富長もとへ會席よりた<sub>れ</sub>てまたれたるほどなり。これ又小田原より兼兼仰られたる事にて。掃除などの<sub>□</sub>迎の岡松いくむらとなく。入江かけたる<sub>□</sub>もひとつにながれみちたるひろへさ忍び。用心ころやすげなり。暮はてたれば富士もみえず。おもかげさながら中空なりけむ。武藏野の眺望こゝにつくしたるべし。東の矢ぐら又菟玖波山の亭とや。遠浦歸帆むさし野をはしるかとみえたるに。さしのぼる夕月夜盃にうつりたれば。

國々も君かなひかす白雲のはた手にかすむ山はふしのね  
明日出陣。又太守へ詠進しかるべきよし。各異

見の事にて。はゞかりを忘れたり。七日にはわたらきの軍勢あとさきに立侍り。角田川もみえわたるに森のやうなる木末あり。とへば關東順禮觀音淺草といふ所となむ。立よりて縁をすべしなどいへば。

秋ならぬ木すゑの花も淺草の露流れそふ角田川哉

清閑多田。こゝまで數日のをくりも懇切なれば。

本ノマ、角田川送りしほとの日數たに思へたとなき

又太守へ御ことづてのやうありて。

本ノマ、すみた河こととふ鳥はありながら君かしるへされる

長尾孫五郎出陣の道具 ひ

をくれるこゝろざし。又は

たちも袖ぬれがほなる氣色なきにしもあらねば。涙もろなる心よはさをまぎらはさむとて。

角田川舟こりいはの長刀にあひしらひてそふりはなれつるといひつゝ。みやこのかたのみおもひやられて。岸いかきなるもおぼえず。わたし守におどろかされておりたり。普藏主とて常陸國法雲寺より湯本の長老へ使に參られし僧小田原にても參會のことなれば。このわたりをももろともにしつゝかたらひ行ば。馬上より宮内卿にいひかけられし。

溪々武野水雲邊

不意逢君掉小船

無限愁情難話盡

客中送客落花天

と聞もなをもよほされたり。

大和田五月  
藤倉喜代丸  
尾崎明憲  
西島義太郎  
校



昭和三年四月二十日印刷  
昭和三年四月廿日發行  
昭和十二年十月十五日再版發行  
昭和十六年六月二十日三版發行

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八  
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

永島喜代次郎

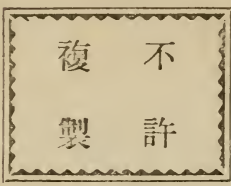
東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七 電話大塚七一八



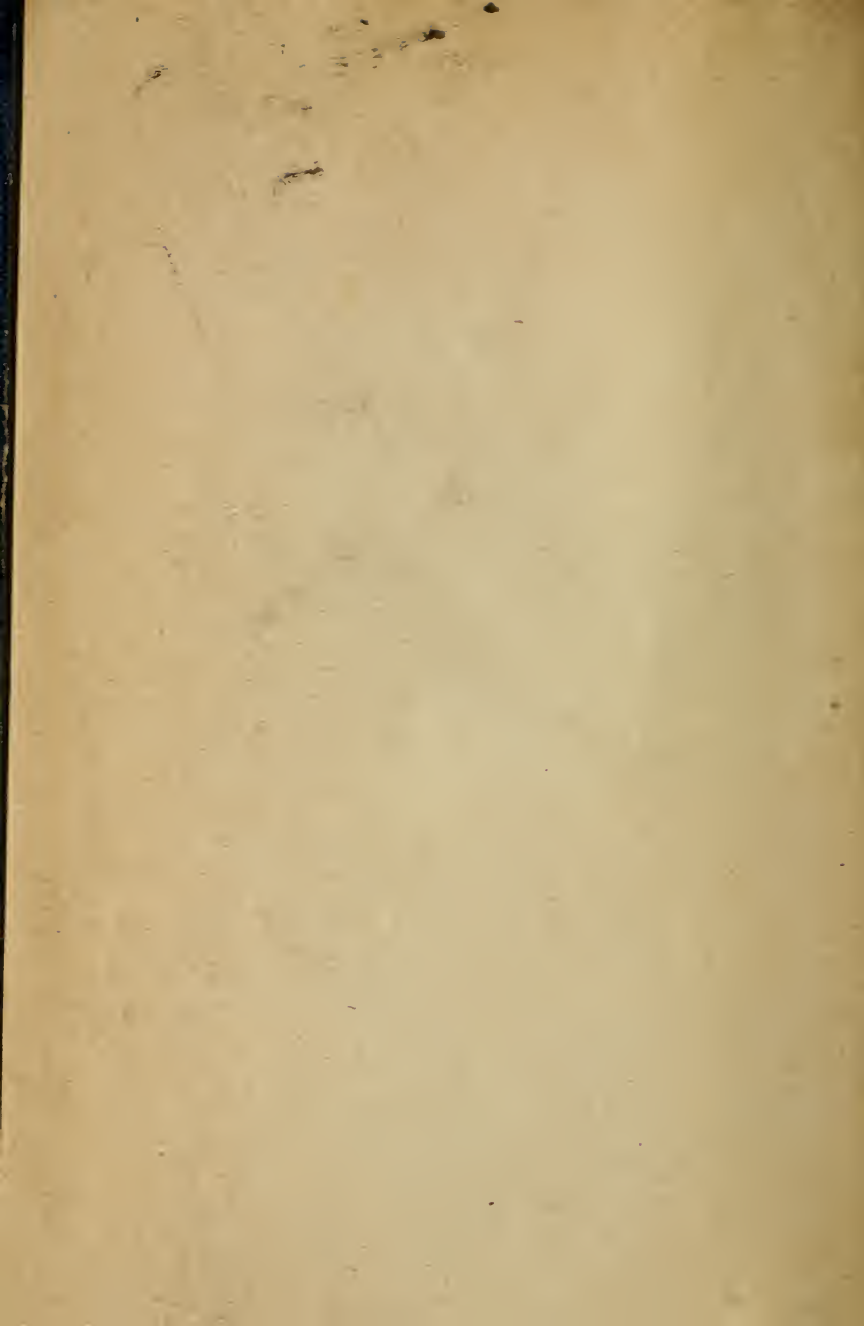
發行者

印刷者

印刷所

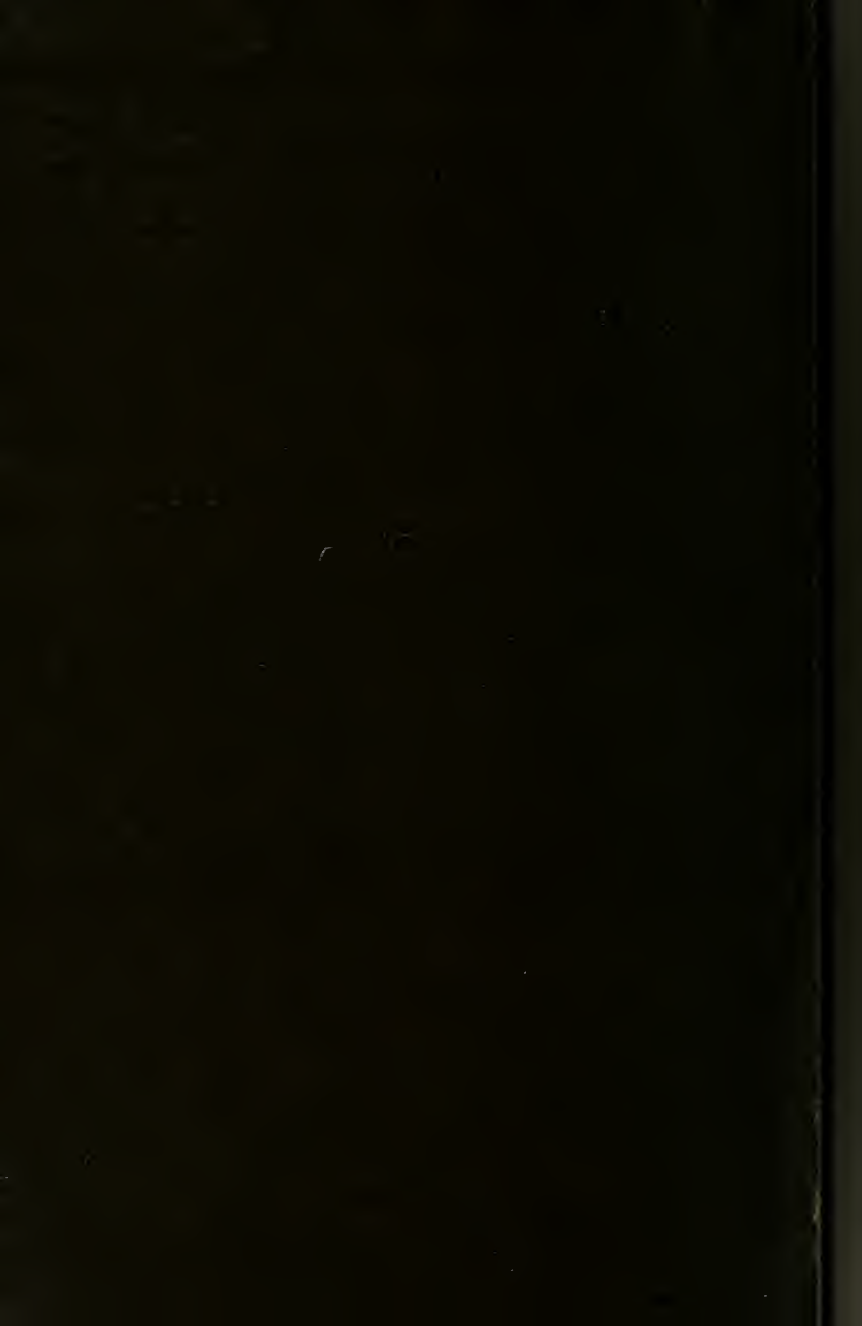
發行所











EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7963